京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一一－九

平安京右京三条一坊六・七町跡
－西三条第（百花亭）跡－

2013年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊六・七町跡

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊六・七町跡
－西三条第（百花亭）跡－

2013年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

南半部全景（３区、北西から）

1　池250（南東から）

2　池250（北東から）

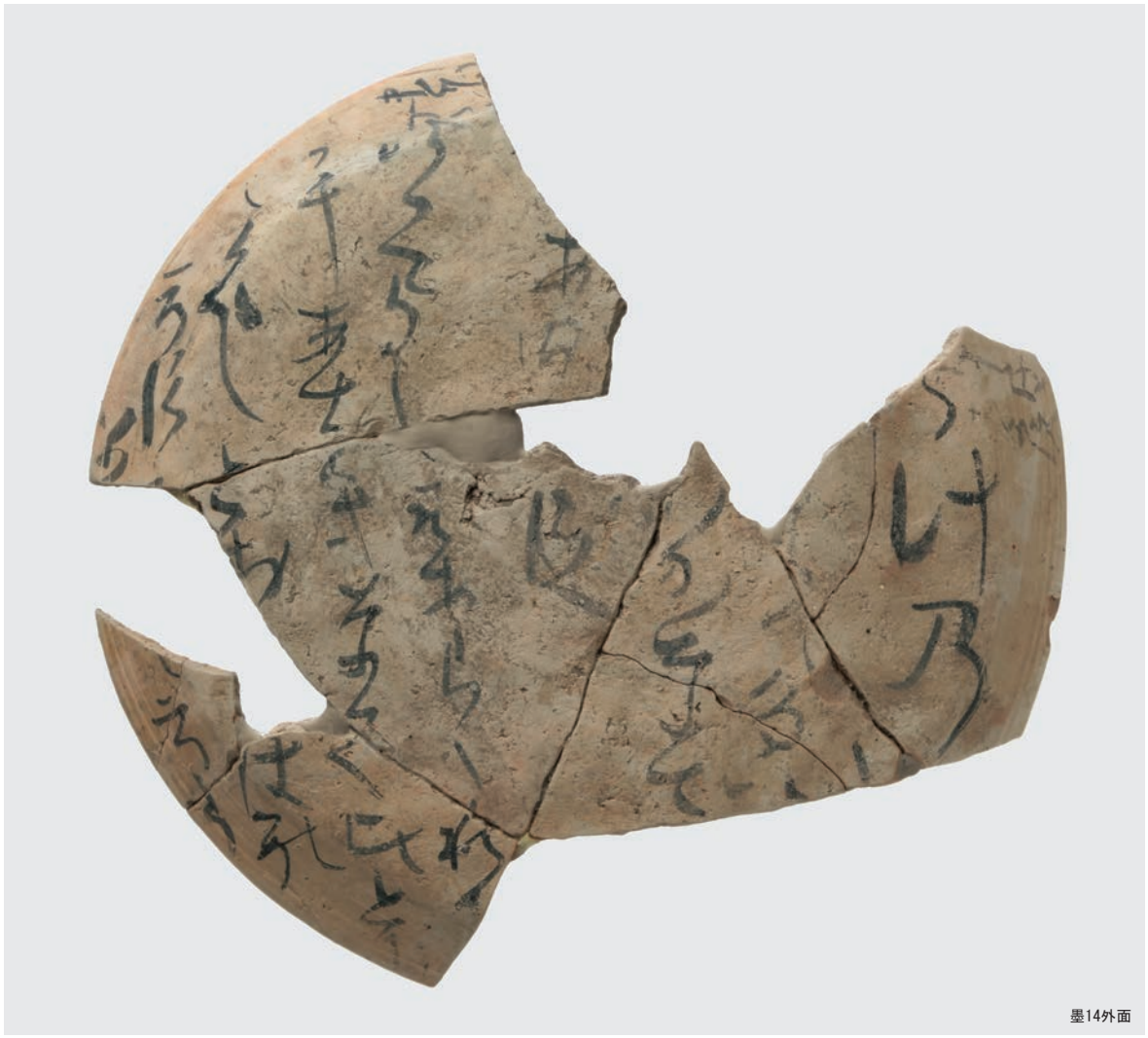
1　池250西肩の遺物出土状況（北から）

2　池250遺物出土状況（白磁皿、北西から）

3　池250遺物出土状況（緑釉陶器椀など、南東か

1　溝400（北から）

2　建物１（西壁拡張後、北から）

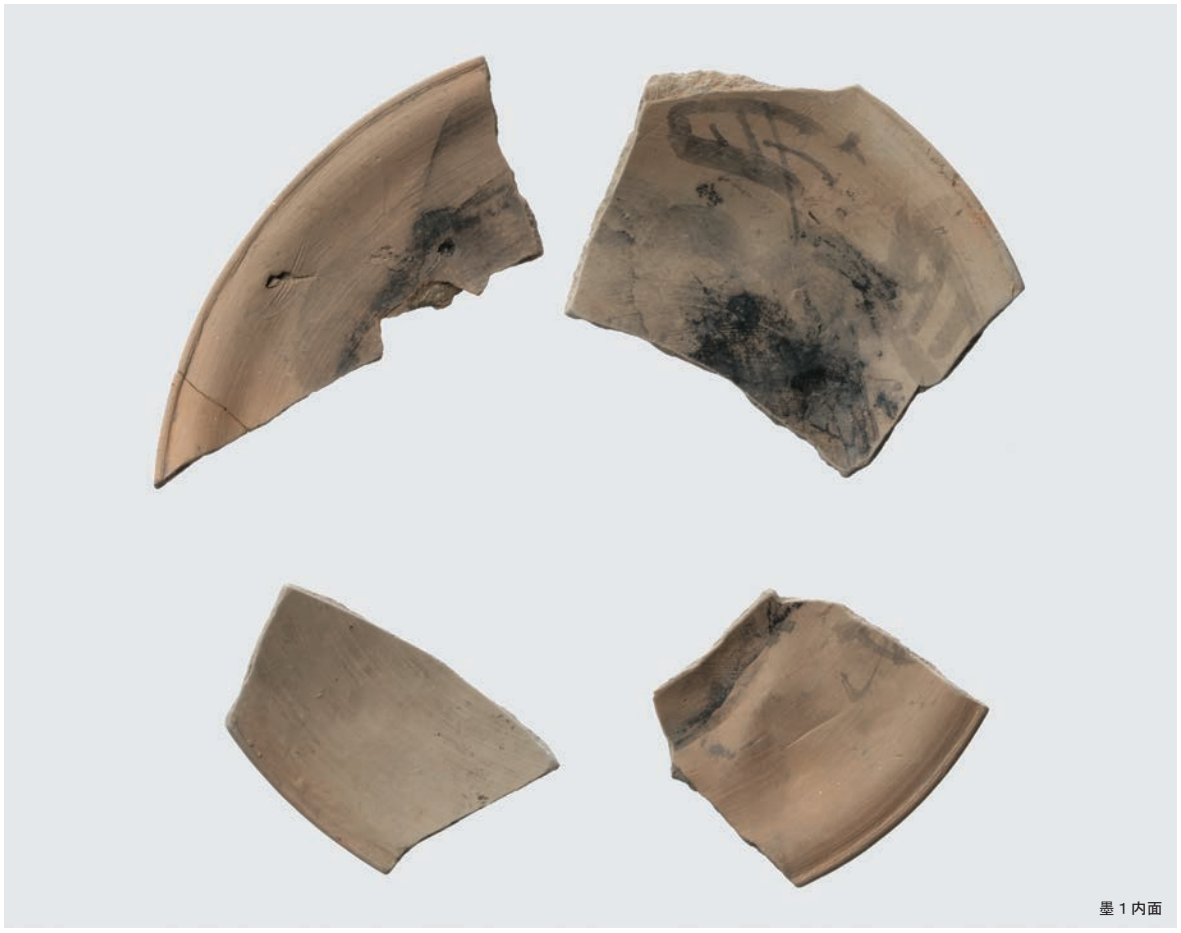


墨14外面

墨８内面

墨16外面

墨書土器１



墨１内面

墨１外面

墨書土器２

墨２内面

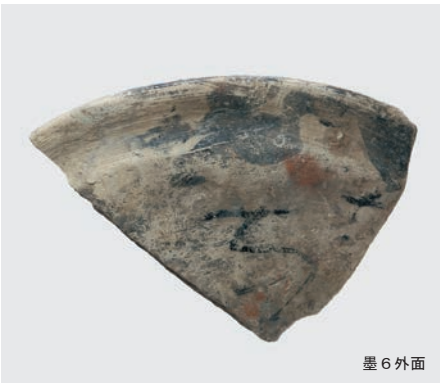
墨２外面

墨書土器３

墨３外面

墨４外面

墨５外面


墨６外面

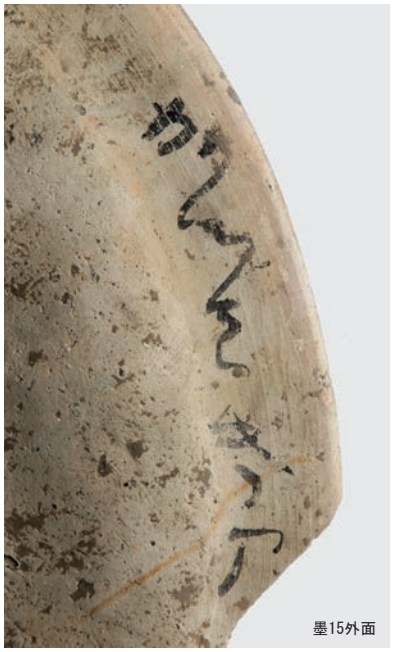
墨12外面

墨７内面

墨書土器４

墨11内面

墨11外面

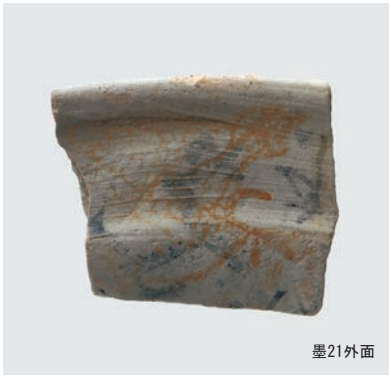

墨15外面

墨13内面

墨17外面

墨20内面

墨18外面


墨21外面

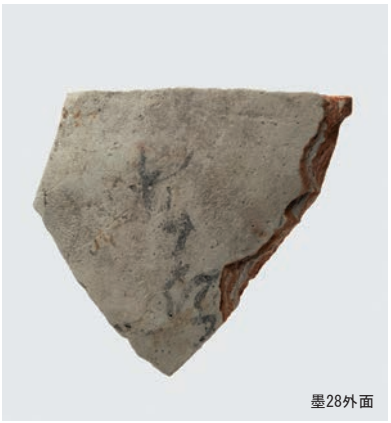
墨23外面

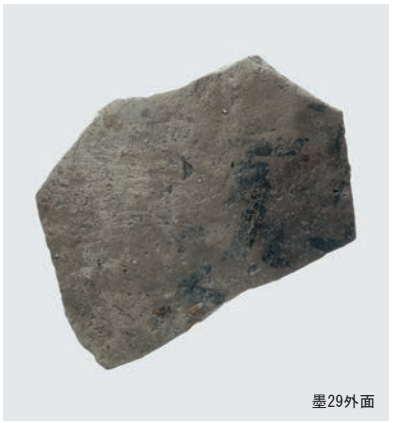
墨24外面

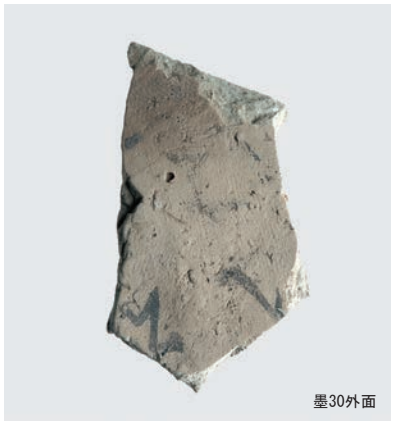
墨26外面

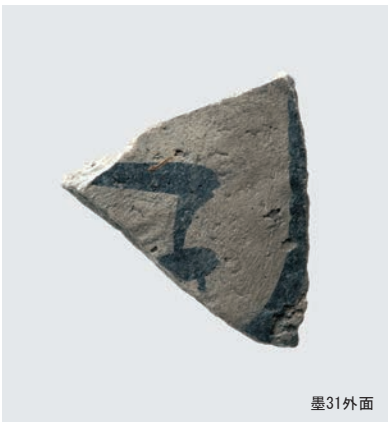
墨27外面

墨書土器５


墨28外面


墨29外面


墨30外面


墨31外面

墨35外面

墨36外面

墨37外面

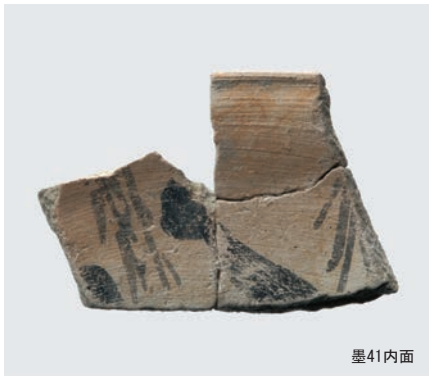
墨40内面

墨40外面

墨42内面

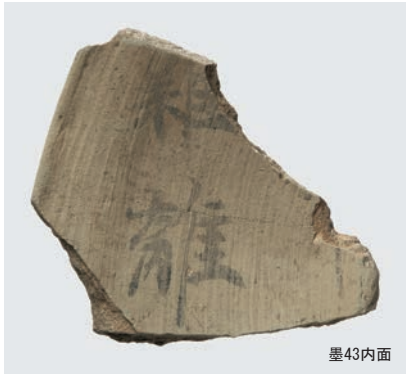
墨42外面

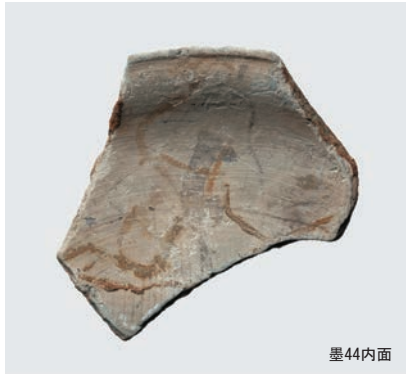
墨書土器６

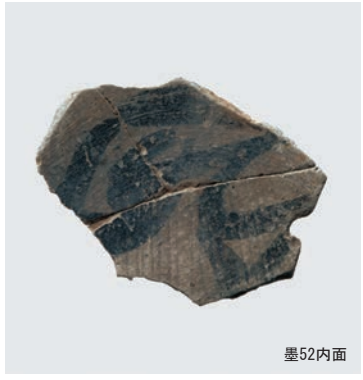

墨41内面

墨41外面

墨47内面


墨43内面


墨44内面

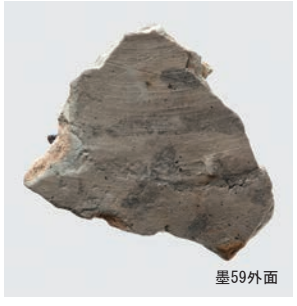

墨52内面

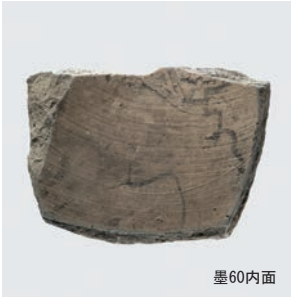
墨53内面

墨61外面

墨55外面

墨58外面


墨59外面


墨60内面

墨62内面

墨書土器７

墨65脚部４面

墨65脚部１面

墨64内面

墨66内面

墨67内面

墨書土器８

墨66の1面

5面

2面

6面

3面

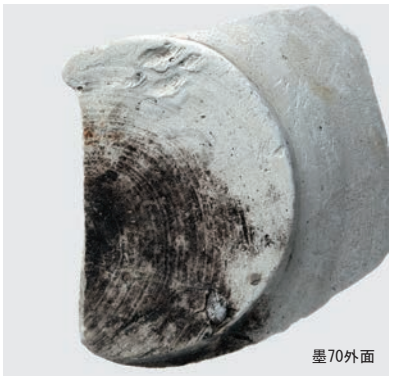
7面

4面

8面

墨書土器９

墨68外面


墨70外面

墨71内面

墨72外面

墨73外面

墨74内面

墨74外面

墨75外面

墨79外面

墨書土器10

墨76外面

墨78外面

墨80外面

墨82外面

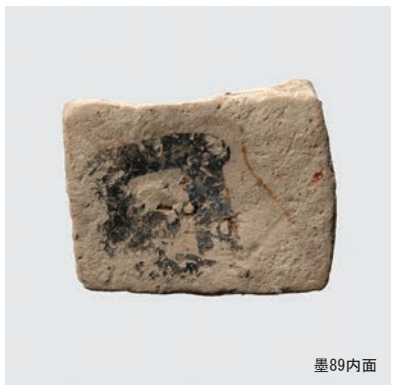
墨83外面

墨84外面

墨85外面

墨86内面

墨87外面


墨89内面

墨書土器11

序　　文

京都市内には，いにしえの都平安京をはじめとして，数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来，今日に至るまで営々と生活が営まれ，各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は，過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は，遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し，活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催，写真展や遺跡めぐり，京都市考古資料館での展示公開，小中学校での出前授業，ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび，佛教大学二条西キャンパス建設工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら，ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが，当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し，御礼を申し上げます。

平成25年３月

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　言

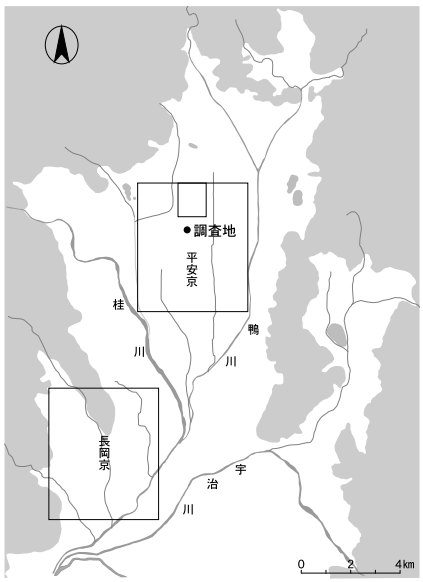
1	遺　跡　名	平安京右京三条一坊六・七町跡　（文化財保護課番号　10H023）
2	調査所在地	京都市中京区西ノ京星池町17− 59他
3	委　託　者	学校法人佛教教育学園　理事長　水谷幸正
4	調 査 期 間	2011年４月１日～2011年12月29日
5	調 査 面 積	3,756㎡
6	調査担当者	丸川義広・近藤奈央・網　伸也・金島恵一・佐藤亜聖（財団法人元興寺文化財研究所）　※肩書きは調査時
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付した。土器類は番号のみとしたが、墨書土器は「墨」、軒瓦は「瓦」、銭貨は「銭」、金属製品は「金」、石製品は「石」、土製品は「土」「硯」、木簡・木製品は「木」、骨角製品は「骨」、をそれぞれ頭に付した。写真番号も同一とした。
13	釈　　文	墨書土器と木簡の釈文は、鈴木景二氏（富山大学）、西山良平氏（京都大学）、吉野秋二氏（京都産業大学）に依頼した。
14	註	各章ごとに設けた。
15	本 書 作 成	丸川義広・網　伸也・近藤奈央
16	執 筆 分 担	丸川義広：第１章、第３章、第４章１・２・４～10、第５章、第６章１、付章５ 近藤奈央：第２章、第４章６ 網　伸也：第４章３ 西山良平（京都大学）：第４章１ 吉野秋二（京都産業大学）：第４章８ 鈴木景二（富山大学）：第６章２、付章４ パリノ・サーヴェイ株式会社：付章１ 北野信彦（東京文化財研究所）：付章２ 丸山真史（奈良文化財研究所）：付章３ 佐藤亜聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）：付章６

17　備　　考　　上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

18　協　力　者　　尼﨑博正（京都造形芸術大学）、家崎孝治（古代文化調査会）、乾　善彦（関西大学）、小野健吉（奈良文化財研究所）、貝　栄幸（佛教大学）、川尻秋生（早稲田大学）、久保智康（京都国立博物館）、小山利彦（専修大学）、斉藤亮秋（安楽寿院）、狭川真一（財団法人元興寺文化財研究所）、佐々木明美、佐野　宏（京都大学）、下坂　守（奈良大学）、鋤柄俊夫（同志社大学）、瀧浪貞子（京都女子大学）、高橋康夫（花園大学）、新見康子（東寺宝物館）、橋本義則（山口大学）、長谷川千秋（山梨大学）、門田誠一（佛教大学）、山路直充（市立市川考古博物館）

※敬称略・順不同・肩書きは調査時

また、佛教大学の教職員各位にはご教示いただいた。



（調査地点図）

目　　次

第１章　調査経過 …… 1
　１．調査経過 …… 1
　２．報告書作成 …… 4
第２章　位置と環境 …… 5
　１．自然環境 …… 5
　２．歴史的環境 …… 5
　３．周辺の調査 …… 7
第３章　遺　　構 …… 14
　１．基本層序 …… 14
　２．遺　　構 …… 19
　　（１）平安時代 …… 19
　　（２）江戸時代 …… 30
第４章　遺　　物 …… 36
　１．墨書土器 …… 37
　２．土器・陶磁器類 …… 49
　　（１）平安時代 …… 49
　　（２）江戸時代 …… 81
　　（３）その他 …… 82
　３．瓦　類 …… 82
　　（１）六町域出土軒瓦 …… 83
　　（２）三条坊門小路・西坊城小路出土軒瓦 …… 84
　　（３）七町域出土軒瓦 …… 85
　　（４）井戸470・池250出土丸瓦および平瓦 …… 85
　４．銭　貨 …… 87
　５．金属製品 …… 88
　６．石製品 …… 89
　７．土製品 …… 92
　８．木　簡 …… 94
　９．木製品 …… 97
　10．骨角製品 …… 108
第５章　ま　と　め …… 112
　１．遺構の特徴 …… 112

（１）遺構群の変遷 …… 112
（２）建物１について …… 114
２．藤原良相と西三条第（百花亭）について …… 116
（１）池250出土遺物の特徴 …… 116
（２）藤原良相の西三条第・百花亭と藤原良房の染殿・望遠亭 …… 119
（３）『今昔物語集』にみる西三条第 …… 121
（４）出土遺物と文献史料からみた西三条第の衰退 …… 121
第６章　藤原良相と西三条第の関係年表・史料 …… 125
１．関係年表 …… 125
２．関係史料 …… 126
（１）『日本三代実録』 …… 126
（２）『本朝文粋』巻第８　詩序１　天象 …… 129
（３）『伊勢物語』七十八段 …… 130
（４）『今昔物語集』巻第十四 …… 130
（５）『拾芥抄』中 …… 131
（６）『天台南山無動寺建立和尚伝（相応和尚伝)』 …… 131
付章１　自然科学分析 …… 133
付章２　平安京右京三条一坊六町出土資料に付着した赤色顔料に関する分析 …… 172
付章３　平安京右京三条一坊六・七町出土の動物遺存体 …… 181
付章４　平安京右京三条一坊六町（藤原良相西三条第）出土の仮名墨書土器 …… 186
付章５　平安宮・京出土の仮名墨書土器 …… 197
付章６　西三条第の占地形態について …… 199

巻頭図版目次

巻頭図版１　遺構　南半部全景（３区、北西から）
巻頭図版２　遺構　１　池250（南東から）
２　池250（北東から）
巻頭図版３　遺構　１　池250西肩の遺物出土状況（北から）
２　池250遺物出土状況（白磁皿、北西から）
３　池250遺物出土状況（緑釉陶器椀など、南東から）
巻頭図版４　遺構　１　溝400（北から）
２　建物１（西壁拡張後、北から）

巻頭図版５　遺物　墨書土器１
巻頭図版６　遺物　墨書土器２
巻頭図版７　遺物　墨書土器３
巻頭図版８　遺物　墨書土器４
巻頭図版９　遺物　墨書土器５
巻頭図版10　遺物　墨書土器６
巻頭図版11　遺物　墨書土器７
巻頭図版12　遺物　墨書土器８
巻頭図版13　遺物　墨書土器９
巻頭図版14　遺物　墨書土器10
巻頭図版15　遺物　墨書土器11

図　版　目　次

図版１　　遺構　遺構配置図（１：500）
図版２　　遺構　１区西壁断面図１（１：80）
図版３　　遺構　１区西壁断面図２（１：80）
図版４　　遺構　遺構平面図１（平安時代、１：200）
図版５　　遺構　遺構平面図２（平安時代、１：200）
図版６　　遺構　遺構平面図３（平安時代、１：200）
図版７　　遺構　遺構平面図４（平安時代、１：200）
図版８　　遺構　遺構平面図５（江戸時代、１：200）
図版９　　遺構　遺構平面図６（江戸時代、１：200）
図版10　　遺構　遺構平面図７（江戸時代、１：200）
図版11　　遺構　遺構平面図８（江戸時代、１：200）
図版12　　遺構　2000年度調査SB01実測図（１：80）
図版13　　遺構　2000年度調査SB02実測図（１：60）
図版14　　遺構　建物１平面図（１：60）
図版15　　遺構　建物１断面図（１：60）
図版16　　遺構　建物２実測図（１：60）
図版17　　遺構　建物４・建物５・柱列６実測図（１：60）
図版18　　遺構　池250平面図１（１：100）
図版19　　遺構　池250平面図２（１：100）

図版20　遺構　池250断面図１（１：80）

図版21　遺構　池250断面図２（１：80）

図版22　遺構　池300・池370断面図（１：80）

図版23　遺構　井戸470実測図（１：40）

図版24　遺物　墨書土器実測図１（１：２）　池250

図版25　遺物　墨書土器実測図２（１：２）　池250

図版26　遺物　墨書土器実測図３（１：２）　池250

図版27　遺物　墨書土器実測図４（１：２）　池250

図版28　遺物　墨書土器実測図５（１：２）　池250

図版29　遺物　墨書土器実測図６（１：１）　池250

図版30　遺物　墨書土器実測図７（１：２）　池250

図版31　遺物　墨書土器実測図８（１：２）　池250・池117・溝110・溝145

図版32　遺物　墨書土器実測図９（１：２）　井戸470・整地層475・池370・池300

図版33　遺物　井戸470出土土器実測図１（１：４）

図版34　遺物　井戸470出土土器実測図２、溝400・土坑440出土土器実測図（１：４）

図版35　遺物　溝119・池117出土土器実測図（１：４）

図版36　遺物　池370・整地層475出土土器実測図（１：４）

図版37　遺物　池300出土土器実測図１（１：４）

図版38　遺物　池300出土土器実測図２、溝173・溝43・溝114・溝110・溝107・溝145出土土器実測図（１：４）

図版39　遺物　池250出土土器実測図１（１：４）

図版40　遺物　池250出土土器実測図２（１：４）

図版41　遺物　池250出土土器実測図３（１：４）

図版42　遺物　池250出土土器実測図４（１：４）

図版43　遺物　池250出土土器実測図５（１：４）

図版44　遺物　池250出土土器実測図６（１：４、355～362のみ１：２）

図版45　遺物　池250出土土器実測図７（１：４）

図版46　遺物　池250出土土器実測図８（１：４）

図版47　遺物　池250出土土器実測図９（１：４）

図版48　遺物　池250出土土器実測図10（１：４）

図版49　遺物　六町域出土軒丸瓦拓影および実測図（１：４）

図版50　遺物　六町域出土軒平瓦・文字瓦拓影および実測図（１：４）

図版51　遺物　三条坊門小路出土軒瓦拓影および実測図（１：４）

図版52　遺物　三条坊門小路出土軒瓦・鬼瓦、西坊城小路・七町域出土軒瓦拓影および実測図（１：４）

図版53　遺物　井戸470出土丸瓦・平瓦拓影および実測図（１：６）

図版54　遺物　池250出土丸瓦・平瓦拓影および実測図（１：６）

図版55　遺物　銭貨拓影（１：１）、金属製品実測図１（１：２）

図版56　遺物　金属製品実測図２（１：２、金13と金14部分のみ１：１）

図版57　遺物　石製品実測図１（１：３、石24・25のみ１：４）

図版58　遺物　石製品実測図２（１：３、石26・27のみ１：４）、土製品実測図１（１：３）

図版59　遺物　土製品実測図２（１：３）

図版60　遺物　木簡実測図１（１：２）

図版61　遺物　木簡実測図２（木13～19、１：２）、井戸470出土木製品実測図１（木20～26、１：３）

図版62　遺物　井戸470出土木製品実測図２（１：３）

図版63　遺物　井戸470出土木製品実測図３（１：３）

図版64　遺物　井戸470出土木製品実測図４（１：３）

図版65　遺物　井戸470出土木製品実測図５（１：３）

図版66　遺物　井戸470出土木製品実測図６（１：６）

図版67　遺物　井戸470出土木製品実測図７（１：６）

図版68　遺物　井戸470出土木製品実測図８（１：６）

図版69　遺物　溝119出土木製品実測図（１：３）

図版70　遺物　池117出土木製品実測図１（１：３）

図版71　遺物　池117出土木製品実測図２、池300出土木製品実測図（１：３）

図版72　遺物　池370出土木製品実測図、池250出土木製品実測図１（１：３）

図版73　遺物　池250出土木製品実測図２（１：３）

図版74　遺物　池250出土木製品実測図３（１：３、木231のみ１：４）

図版75　遺物　池250出土木製品実測図４（１：３）

図版76　遺物　池250出土木製品実測図５（１：３）

図版77　遺物　溝114・溝110・溝107・溝145出土木製品実測図、井戸470出土鹿角製品実測図（１：３）

図版78　遺構　１　西部全景（１区、北から）
２　三条坊門小路（凹凸の部分が路面の範囲、北東から）

図版79　遺構　１　１区の南半全景（北から）
２　柱穴55断面（建物１、南東から）
３　柱穴27断面（建物１、南東から）
４　柱穴133断面（建物１、北西から）

図版80　遺構　１　北部全景（２区、北西から）
２　三条坊門小路（左端が路面155、中央が北側溝114、東から）

図版81　遺構　1　池117（２区、西から）
2　池117洲浜（南東から）
3　池117洲浜（北から）
図版82　遺構　1　池250（北から）
2　池250南半部（セクションはX=-109,732線上、北東から）
図版83　遺構　1　池250西肩の遺物出土状況（北東から）
2　池250遺物出土状況（木205～209：檜扇、東から）
3　池250遺物出土状況（金17：鉄刀子、南東から）
4　池250遺物出土状況（金14：毛抜、南東から）
5　池250遺物出土状況（木183：横櫛、南東から）
6　池250遺物出土状況（石９～12：碁石、南東から）
図版84　遺構　1　池250遺物出土状況（左は墨64：墨書土師器「三条院鈎〔釣〕殿高坏」、中央は491：灰釉陶器、北から）
2　池250遺物出土状況（墨72：墨書緑釉陶器「四条」、西から）
3　池250遺物出土状況（左上は金６：鉄釘、右下は358：黒色土器ミニチュア壷、北東から）
4　池250遺物出土状況（359：黒色土器ミニチュア壷、北から）
5　池250遺物出土状況（銭５：饒益神寶、北から）
6　池250遺物出土状況（石１：石帯、南西から）
7　池250遺物出土状況（石13：碁石、北西から）
8　池250遺物出土状況（中央上は木242：下駄、右下は382：382：須恵器壷、北西から）
図版85　遺構　1　池250（北西から）
2　池250北西部の建物４礎石（北東から）
図版86　遺構　1　池300（北西から）
2　池300遺物出土状況（東から）
3　池370（西から）
4　池370断面（南西から）
図版87　遺構　1　池250に取り付く溝43（西から）
2　溝43と建物２の位置（西から）
図版88　遺構　1　溝400（手前）と2000年度調査SB01・02（右上、北西から）
2　2000年度調査SB01・02（北東から）
図版89　遺構　1　井戸470木枠検出状況（北から）
2　井戸470木枠内遺物出土状況（西から）
3　井戸470木枠内遺物出土状況（木20：斎串、南から）

４　井戸470木枠完掘状況（北から）
図版90　遺構　１　溝173（西坊城小路西側溝、北から）
２　溝173の倒木・獣骨出土状況（北東から）
３　溝107と溝110（三条坊門小路南側溝、西から）
図版91　遺構　１　溝173断面（南から）
２　溝43断面（東から）
３　溝107・110断面（東から）
４　溝174断面（南から）
５　柱穴353（柱列549、東から）
６　柱穴286（柱列551西列、西から）
７　柱穴380（柱列551東列、東から）
８　柱穴463（柱列553南列、南から）
図版92　遺物　墨書土器赤外線写真１
図版93　遺物　墨書土器赤外線写真２
図版94　遺物　墨書土器赤外線写真３
図版95　遺物　墨書土器赤外線写真４
図版96　遺物　墨書土器赤外線写真５
図版97　遺物　墨書土器赤外線写真６
図版98　遺物　墨書土器赤外線写真７
図版99　遺物　墨書土器
図版100　遺物　井戸470出土土器１
図版101　遺物　井戸470出土土器２
図版102　遺物　井戸470出土土器３
図版103　遺物　土坑440・溝119・池117・池300出土土器
図版104　遺物　池250出土土器１
図版105　遺物　池250出土土器２
図版106　遺物　池250出土土器３
図版107　遺物　池250出土土器４
図版108　遺物　池250出土土器５
図版109　遺物　池250出土土器６
図版110　遺物　池250出土土器７
図版111　遺物　池250出土土器８
図版112　遺物　池250出土土器９
図版113　遺物　池250出土土器10
図版114　遺物　池250出土土器11

図版115　遺物　池250出土土器12
図版116　遺物　軒丸瓦
図版117　遺物　軒平瓦１
図版118　遺物　軒平瓦２
図版119　遺物　鬼瓦・文字瓦・丸瓦
図版120　遺物　平瓦１
図版121　遺物　平瓦２
図版122　遺物　銭貨、金属製品１
図版123　遺物　金属製品２
図版124　遺物　金属製品３、石製品１
図版125　遺物　石製品２
図版126　遺物　石製品３、土製品１
図版127　遺物　土製品２
図版128　遺物　木簡１
図版129　遺物　木簡２
図版130　遺物　井戸470出土木製品１
図版131　遺物　井戸470出土木製品２
図版132　遺物　井戸470出土木製品３
図版133　遺物　溝119出土木製品
図版134　遺物　池117出土木製品
図版135　遺物　池300出土木製品
図版136　遺物　池370出土木製品
図版137　遺物　池250出土木製品１
図版138　遺物　池250出土木製品２
図版139　遺物　池250出土木製品３
図版140　遺物　池250出土木製品４
図版141　遺物　池250出土木製品５、井戸470出土鹿角製品
図版142　遺物　１　建物１出土礎板（木槽）
　　２　2001年度調査池出土の題箋木簡（赤外線写真）
図版143　遺物　平安宮・京出土の仮名墨書土器

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）　…… 2
図２　調査区の区分と調査区配置図（１：1,000）　…… 3
図３　周辺調査位置図（１：1,000）　…… 9
図４　調査区断面図１（１：40）　…… 15
図５　調査区断面図２（１：40）　…… 16
図６　建物３の平面模式図（１：150）　…… 22
図７　井戸470の木枠番号（１：20）　…… 23
図８　池250西肩の遺物出土状況（１：80）　…… 25
図９　溝43断面図（１：40）　…… 26
図10　溝107・110・113断面図（１：40）　…… 27
図11　溝173・174断面図（１：40）　…… 27
図12　溝400実測図（１：50）　…… 28
図13　土坑440断面図（１：40）　…… 30
図14　江戸時代遺構配置図（１：500）　…… 31
図15　溝145の柄杓出土状況（１：20）　…… 32
図16　土坑断面図（１：40）　…… 34
図17　池250出土墨書土器の位置（１：200）　…… 38
図18　池250の土器出土量（１：200）　…… 60
図19　池250出土土師器高杯の位置（図示したものに限定、１：200）　…… 67
図20　陰刻花文の復元１（緑釉陶器椀の内面、１：２）　…… 73
図21　緑釉陶器の記号拓影（香炉身の底部内面、１：１）　…… 76
図22　陰刻花文の復元２（緑釉陶器香炉蓋の外面、１：２）　…… 76
図23　弥生土器実測図（１：４）　…… 82
図24　池250出土丸瓦・平瓦の地区別重量集計図（１：200）　…… 86
図25　金属製品実測図（１：２、江戸時代）　…… 89
図26　石匙・剥片実測図（１：２）　…… 91
図27　土馬実測図（１：２）　…… 92
図28　檜扇復元図（１：２）　…… 94
図29　井戸470木枠側面の寸法概念図（１：10）　…… 100
図30　井戸470木枠の刻印拓影（木枠№.２の外側、１：５）　…… 100
図31　建物１出土木槽実測図（１：８）　…… 107
図32　建物１出土木槽の体部破片実測図（１：４）　…… 107

図33　柱列６出土礎板実測図（１：４）　…… 108
図34　右京三条一坊六・七町の遺構配置図１（１：1,000）　…… 112
図35　右京三条一坊六・七町の遺構配置図２（１：1,000）　…… 113
図36　建物１柱穴と木槽の部位（１：100）　…… 115

写　真　目　次

写真 1　調査風景（１区、南西から）　…… 1
写真 2　建物１の柱穴剥ぎ取り（南西から）　…… 1
写真 3　池250検出状況（北から）　…… 1
写真 4　現地説明会風景（南東から）　…… 1
写真 5　大学生の見学風景（南東から）　…… 3
写真 6　大学生の見学風景（南西から）　…… 3
写真 7　柱穴415検出状況（2000年度調査SB01、北から）　…… 20
写真 8　柱穴415断面（2000年度調査SB01、北東から）　…… 20
写真 9　柱穴395断面（2000年度調査SB02、北から）　…… 20
写真10　柱穴405断面（建物２、南から）　…… 21
写真11　柱穴111礎板（柱列６、南から）　…… 23
写真12　柱穴112礎板（柱列６、南から）　…… 23
写真13　池250南岸の土手状の高まり（南から）　…… 24
写真14　柄杓の出土状況（溝145、北西から）　…… 33
写真15　土師器椀の重ね焼き復元（井戸470出土）　…… 50
写真16　土師器皿の重ね焼き復元（池250出土）　…… 64

表　目　次

表１　調査進行表　…… 4
表２　既往調査一覧表　…… 10
表３　調査区断面図１・２土層名　…… 17
表４　遺構概要表　…… 19
表５　柱列・建物一覧表　…… 32

表６　遺物概要表 …… 36
表７　墨書土器の構成 …… 37
表８　井戸470出土土器破片数計測表・グラフ …… 49
表９　池250出土土器破片数計測表（第２・３層） …… 61
表10　池250出土土器破片数計測グラフ（第２・３層） …… 62
表11　池250出土土師器皿・杯・杯Ｂ法量分布 …… 62
表12　井戸470出土太杭の規模 …… 99
表13　井戸470の木枠の規模 …… 99

観　察　表　目　次

観察表１　墨書土器一覧表 …… 208
観察表２　池250出土土器表 …… 211
観察表３　銭貨一覧表 …… 218
観察表４　金属製品一覧表 …… 219
観察表５　石製品一覧表 …… 220
観察表６　土製品一覧表 …… 221
観察表７　木簡一覧表 …… 222
観察表８　木製品一覧表 …… 223

釈　文　目　次

墨書土器釈文１ …… 40
墨書土器釈文２ …… 41
木簡釈文１ …… 95
木簡釈文２ …… 96

第１章　調査経過

１．調査経過（図１・２、写真１～６、表１）

本調査は、佛教大学二条西キャンパス建設に伴って実施したものである。調査地は、平安京右京三条一坊六・七町に当たる。現在はＪＲ二条駅の西側ロータリーに接しており、近年御池通が開通したことから、急速に市街地再開発が進展しつつある地域である。またこの場所は、鎌倉時代に編纂された『拾芥抄』「西京図」によると、六町には「西三条」、七町には「穀倉院」の書き込みがあり、特に六町は、右大臣藤原良相（813～867）の邸宅「西三条第」（「百花亭」とも呼ばれた）推定地でもあった。

発掘調査は、調査地の使用状況から、第１調査区（以下「１区」という）、第２調査区（同「２区」）、第３調査区（同「３区」）の順に実施した（図２）。2011年４月初旬、調査地の西端を１区として調査を開始した（写真１）。１区では、調査区南端で掘立柱建物（建物１）を、北半で三条坊門小路と湿地状堆積（池117）を検出した。５月後半に現地説明会を開催し、約300名の参加があった。その後、建物１の西側柱筋を確認する目的で敷地西端まで拡張し、建物規模を調べた。建物の柱は、掘形の規模が大きく、重要な建物と考えられたため、柱の掘形平面と断割断面を、２箇所ずつ剥ぎ取って保存した（写真２）。

写真１　調査風景（１区、南西から）

写真２　建物１の柱穴剥ぎ取り（南西から）

写真３　池250検出状況（北から）

写真４　現地説明会風景（南東から）

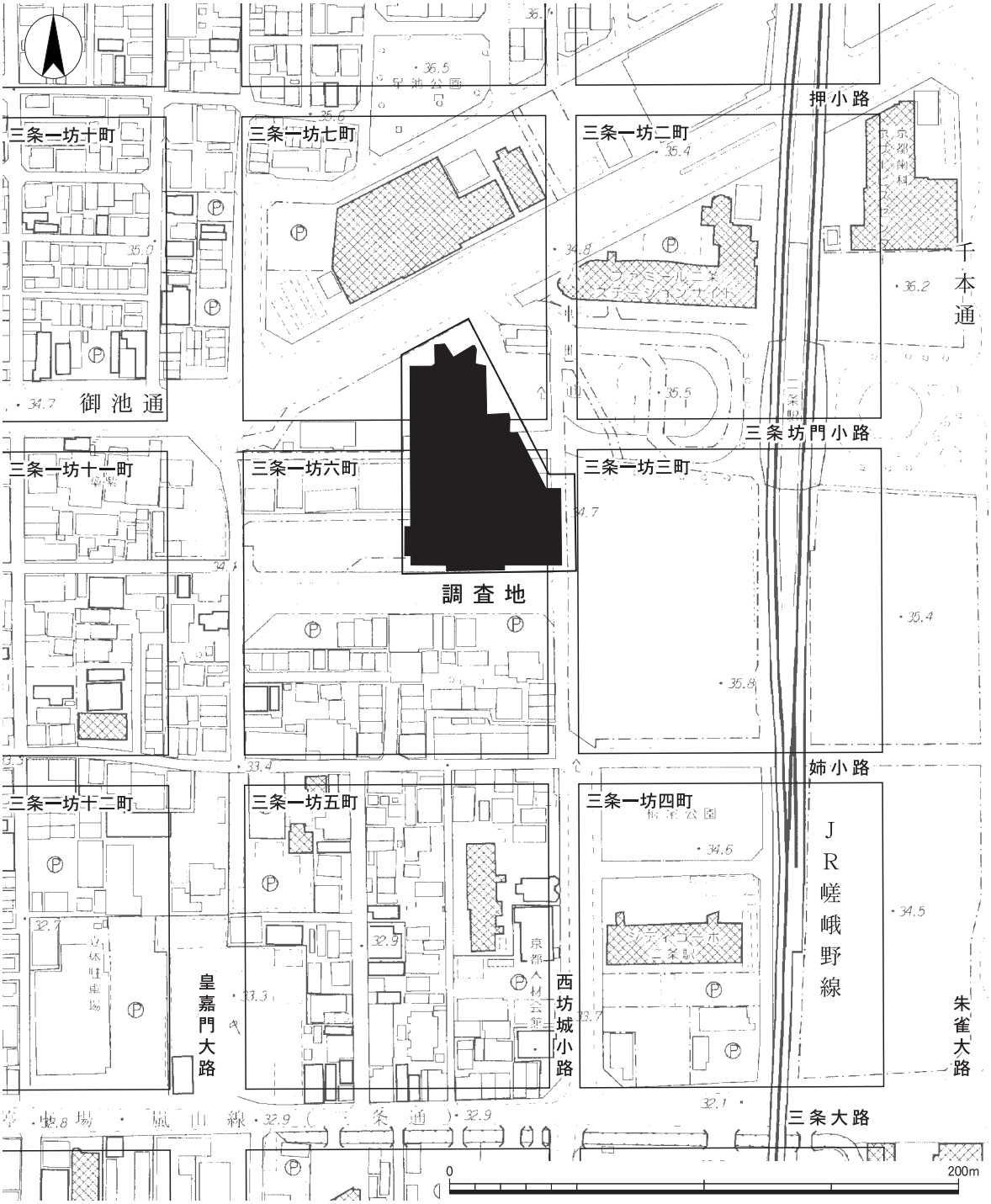


図１　調査位置図（１：2,500）

2011年６月初旬に１区を埋め戻し、並行して敷地の北端に２区を設定・調査した。この２区では、三条坊門小路の北半分とその北側で湿地状堆積（池117）の東延長部を検出した。７月後半には地元の方々を対象とした説明会を開催し、現地を公開したところ、約50名の参加があった。

2011年８月初旬からは、駐車場として利用されていた南東部を３区として調査を開始した。この調査区の南端では、1998・2000年度調査で検出されていた掘立柱建物（2000年度調査SB01・同SB02）の北延長部を検出した。また中央部では池跡（池250）を検出し、池内からは大量の遺物が出土した（写真３）。これらを調査中の９月前半（約230名）と10月後半（約20名）に現場を公開

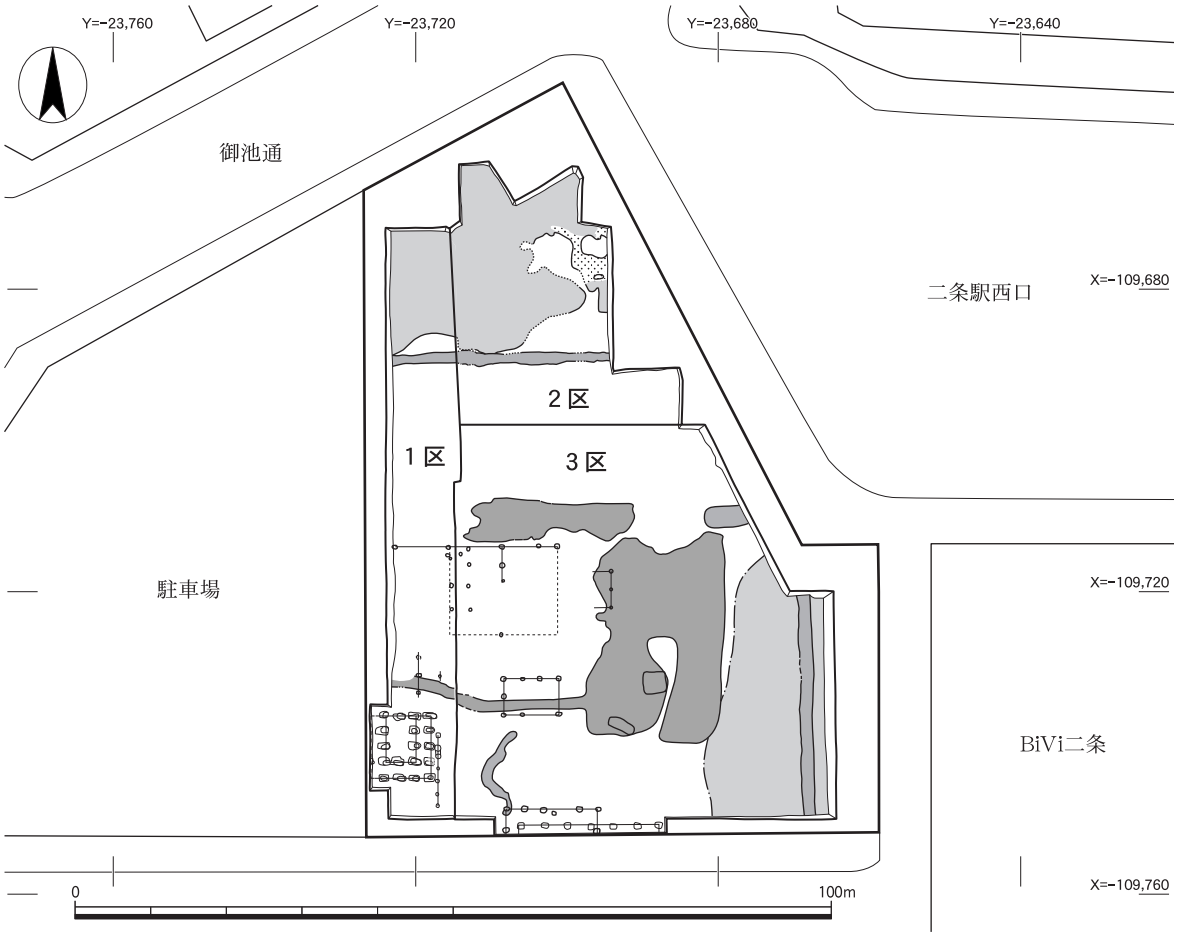


図２　調査区の区分と調査区配置図（１：1,000）

写真５　大学生の見学風景（南東から）

写真６　大学生の見学風景（南西から）

した。

11月初旬、池250から「三条院鈎〔釣〕殿高坏」と墨書した土器が出土し、調査地が事前に予想された「西三条第」であることが確実となった。この大きな成果を受けて、12月初旬に広報発表、12月前半には現地説明会を開催したところ、1,370名もの見学者があった（写真４）。遺構を現地保存するため、池250と南端で検出した建物の柱穴には砂を入れて保護した後、埋め戻しを行った。また池250については、堆積層序がわかる断面を２箇所剥ぎ取って保存した。調査は12月末で終了した。

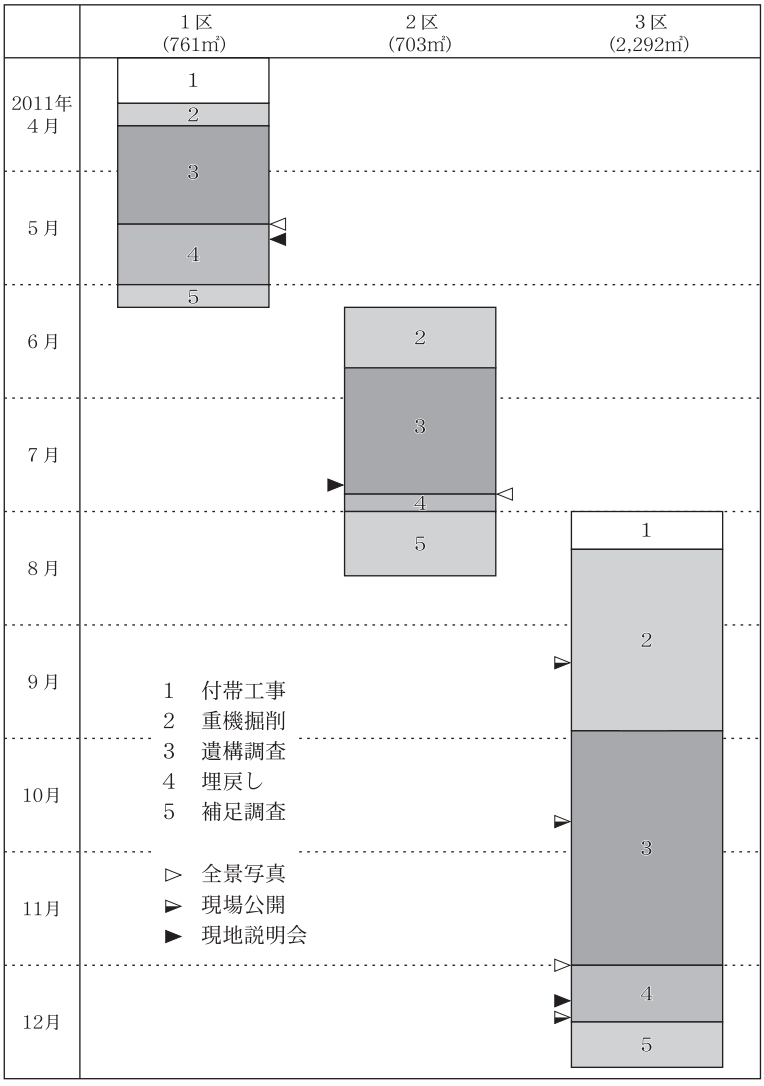
なお、委託者である佛教大学においては「佛教大学校地（文化財等）調査委員会」が設置され、その委員会で進捗状況を説明した。また、授業の一環として大学生を対象とした見学会も実施した（写真５・６）。

２．報告書作成

調査終了後、直ちに整理作業に入った。遺構図面については、全体を版下として調整した後、デジタルトレースを外部に委託した。主要遺構の個別図面については、所内でデジタルトレースした。遺物洗浄は、土器類、瓦類、その他の遺物については外部に委託し、木製品のみ所内で洗浄した。遺物実測は、大半を所内で実施し、版下を作成した後、デジタルトレースを外部に委託した。なお、土器実測の一部と墨書土器の赤外線スキャンについては外部に委託した。

本報告書では、右大臣藤原良相の邸宅「西三条第」が当地であることが判明したことから、平安時代前期の遺構を中心に扱い、後の時代の遺構についても、必要なものを取り上げることとした。また、池250からは整理用コンテナ約150箱の遺物が出土し、量が多いこと、各器種・器形を含むこと、高級な陶磁器や普段見られない器形が含まれること、有機質遺物が多いこと、西岸から出土した遺物は短期間に埋没していることなどから、９世紀後半の好資料となりうることを認識し、作業を進めた。中でも墨書土器が多いことに加え、この中には「仮名文字」が含まれていたことから、解読については外部の有識者にお願いし、原稿を寄せていただいた。また、木製品が多く出土し、保存状態も良好であったため、それらの報告にも努めた。自然科学分析については、外部に委託し、放射性炭素年代測定、堆積微細構造軟Ｘ線分析、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実遺体分析などを実施した。

表１　調査進行表



第２章　位置と環境

１．自然環境

調査地は京都盆地のほぼ中央に位置する。この一帯には、北山から南流する天神川の元の河道や、北東から南西方向に流出する旧河道によって運ばれた堆積物（砂・礫・泥）を主体とする扇状地が広がっている。この扇状地が形成された時期は、東側に隣接する鴨川扇状地に含まれていた木片の年代から、後期更新世の42,000年～30,000年前頃と推定されている[1)]。

調査地の地山相当層を観察したところ、黄色や青灰色を帯びたシルト～粘土層と砂礫層が交互に堆積し、平面的にはシルト～粘土層が広がっているところに、北東から南西方向の砂礫層が帯状に確認できた。シルト～粘土層のような粒子が細かい砕屑物は、その軽さから大型礫より遠くに運ばれるため、氾濫堆積の先端部、つまり扇端に堆積する。扇端部は扇状地の傾斜の強い場所から平坦地へと移行するところで、伏流水が地上に現れる湧水部分となりやすい。また、調査区内の遺構（井戸470）を断ち割った際に確認した姶良Tn火山灰（約29,000年～26,000年前）、およびその南で確認した大山系火山灰（約20,000年前）は、二次的に堆積し、滞水した窪地に溜まったものと考えられる。これらの上面に堆積したシルト～粘土層は、火山灰堆積後さらに河川堆積物が重層する扇状地の末端部であり続けたことを示している。

今回の調査地および周辺では、北東から南西方向の平安京以前の湿地を確認しており、この窪地は平安京造営当初まで残っていたとみられる。この様な地形と堆積状況から、調査地一帯は幾筋も流れていた自然流路の末端部であったため、常に水が湧出し、水が絶えることのない湿潤な環境であったと想定される。

２．歴史的環境

今回の調査地は右京三条一坊六町北東部の大半と七町の南東部を占める。中央部分は三条坊門小路、東端は西坊城小路に相当する。

六町が文献史料に初めて登場するのは、平安時代後期の嘉保二年（1095）正月十日である[2)]。その当時、散位従四位下の地位にあった大江公仲が、隠岐国へ配流されるにあたって、財産処分状を作成した[3)]。その目録には、平安京内に宅地を三箇所持っており、その内の一つが「西三條地壹町　在右京三條一坊六町、／建三間四面屋一宇、」と記されている。つまり、「右京三条一坊六町にある西三條という土地一町分を所有し、その土地には三間四面の建物が一棟建っている」ということになる。平安時代後期初めの時点で、右京三条一坊六町は「西三條」と呼ばれていたことがわかる。

もう一つの史料として、鎌倉時代中期には作られていたとされる『拾芥抄』の付図「西京図[4)]」がある。この図は平安京の条坊を線引きしたもので、枠内に該当する役所名や領名、神泉苑や朱雀院などの名称、大路・小路名、道路幅などが墨書きされ、右京三条一坊六町には「西三條」と

書かれている。さらに、『拾芥抄』本文である諸名所部第二十には、「西三條　三條北朱雀西、良相大／臣家、俗云百夜（衣）公事」、「西三條　三條北朱雀（西）又號百花亭、／良相大臣舊跡、」とあり、主に「西京図」から右京三条一坊六町＝「西三條」＝「百花亭」＝良相大臣の家であったことが記されている。「良相大臣」とは、平安時代前期に活躍した右大臣藤原良相（813～867年）のことである。藤原良相と「西三條」を結びつける史料には、『日本三代実録』[5]貞観元年（859）四月十八日に、「右大臣西京三條第」という記録がある。ただし貞観二年（860）四月二十五日には「右大臣西京第」、同貞観八年（866）三月二十三日には「右大臣藤原朝臣良相西京第」とあって、三条第とは出てこないが、藤原良相が「西三条大臣」と呼ばれたことからも西京三條第に邸宅を構えていたことは確かといえる。

また、この『日本三代実録』には、貞観元年四月十八日から約１年間、同母姉の皇太后藤原順子が穢れを避けて良相邸に滞在したのち、翌貞観二年四月二十五日に東五條宮へ還幸したとある。貞観八年三月二十三日には、清和天皇がこの邸宅へ遷御して桜を鑑賞し、文人を集めて漢詩などを詠んだという。その後、射的を行い、管弦を奏し、舞楽を行うなど宴会を催して夜更けに還座した。この遊興の場である邸宅は「百花亭」という名で呼ばれ、桜花を始めとして、様々な花が咲き乱れていたようである。また、この邸宅には、弓を射ることができる空間があり、『伊勢物語』の記述からは、紀の国産の苔むした庭石が据えられた庭園が存在していたようである。[6]

このように六町は、平安時代前期は藤原良相邸、平安時代中期から後期は大江公仲邸であったと考えられる。そして、良相の長男常行は、邸宅を伝領したとみられるが、良相が没した８年後に亡くなっている。常行の子供に伝領されたのかは不明であるが、良相の室が大江氏であったことは、後に大江公仲の土地として伝わることと何らかの関係があったと考えられる。平安時代初頭や平安時代後期以降の持ち主は不明である。

藤原良相の「西三条第」ついては、この六町以外にも文献史料から２箇所が想定されている。一つは右京三条一坊四町で、鎌倉時代初期に作られたと推定される『二中歴』[7]で、「西三条　良相大臣之家」「西三条　朱雀西三条／北良相公家」という記述がある。『拾芥抄』本文のみに拠った場合も、『二中歴』と同じ場所となる。もう一つは右京三条一坊十三町で、『今昔物語集』[8]の「西三条ノ右大臣ト申ス人御ケリ、…大臣ノ家ノ大宮ヨリハ東、三条ヨリハ北、此レヲ西三条ト云フ」に基づく。平安時代末に作られた説話集で、大路を基準に論じているところから、正確さを欠くものといえる。

これらの史料から、『平安京提要』では、「決めかねる問題」としながらも、大路に接した場所である右京三条一坊四町を藤原良相の西三条第とする説をとっている。[9]また、邸宅名に「三条」と付されていることから、三条大路に接していたとすることで、四町または十三町のどちらかであったという見解も出ていた。[10]

このような問題を持つなかで、六町内の洲浜護岸を持つ池（図３の24地点）から「齋衡四年三條院正倉帳」[11]の墨書を持つ題簽が出土し、考古学の立場から西三条第＝六町説が浮上した。しかし、1998年[12]・2004年[13]に行われた四町内の調査では、平安時代前期の園池とみられる石敷き遺構、

平安時代中期の掘立柱建物や園池状遺構、２時期にわたる朱雀大路西側溝や姉小路南側溝を検出し、四町説は有力候補地とされ続けた。この四町は、『拾芥抄』「西京図」によれば「竈殿」となっている。

今回の調査では、以前の調査に加え、検出した遺構や遺物の内容と何よりも「三条院鈎〔釣〕殿高坏」[14]と墨書された土師器高杯が池の堆積土中から出土したことにより、西三条第は六町にあったことがほぼ確実となった。またこのことは、従来から言われてきたように、通り名で表された場所が特定の「町」を指すのではなく「坊」全体を指すことも明らかとなった[15]。

右京三条一坊七町は、一・二・八町とともに穀倉院に比定されている。「穀物の倉」と呼ばれていたことからもわかるように、国家が管理する穀物備蓄のための施設である。飢饉などの非常時の際に穀物を廉価で払い下げ、また窮民を救済するために支給していた。９世紀後半以降、その機能を拡大し、地子の収納や学問料の支給などを行った。また、宮中行事の供饌を内蔵寮や後院と分担し、宮内に深く関わっていたが、平安時代後期にはその機能は低下したとされる。創立年代は、『西宮記』によれば大同年間（806～810）である[16]。史料上での初見は、『日本後紀』大同三年九月十六日条に、寺封の輸物を穀倉院に納める命令を下したことが載っている[17]。

穀倉院が占める四町内の建物配置については不明な点が多いが、八町に庁屋を構え、その他の町には倉や雑舎、畑などの付属施設が配置されていたと考えられている。『続日本後記』天長十年（833）八月三日条によると、七町内の東西20丈、南北30丈が内蔵寮に割譲され、染作処が設置されたという[18]。これは、宮中の調度品や諸国の貢納物を保管・管理する内蔵寮と供饌を分担していたことに起因すると考えられる。また、『続日本後紀』承和元年（834）七月九日条には、穀倉院の西南区域に長さ20丈、広さ12丈を限って穀倉院預人などを住まわせたと記されている[19]。

建久八年（1197）の時点で、穀倉院領として播磨国揖西郡布施郷に「小太丸保」が存在していたという記録があり[20]、鎌倉時代初期までは穀倉院が存続していたとみられるが、穀倉院本体の土地の存廃については不明である。

役所関係の土地が放置されるなかで、中世には徐々に田畑へと転換していったとみられる。絵図[21]を見ると、近世に至っても一帯は空白地帯となっており、耕作地としての利用が続けられていたことがわかる。

近代に入って暫く後の明治30年（1897）に、京都鉄道二条駅（現ＪＲ二条駅）が開業し、西側に当たる当地は、転車台や貨物列車の引き込み線路など駅の裏方として利用された。この頃の地図を確認する限り、三条通以北から丸太町通以南には樹木や田の印が記されており、耕作地のままであったことがわかる。大正時代末期から昭和時代初期にかけて、道路に面して家屋が建てられたが、戦後になってもこの一帯には田畑が残り、その間に住宅がまばらに立ち並ぶ程度であった。急速に宅地化が進むのは、昭和30年代以降の高度経済成長期に入ってからのことである。

３．周辺の調査（図３、表２）

ＪＲ二条駅周辺の再開発に伴い線路を挟んだ東西地（右京三条一坊二・三・四・六・七町）で、

発掘調査が数多く行われている。ここでは、六・七町とその周辺の発掘調査の成果を、時代順に記述する。

平安時代以前　当地は弥生時代から古墳時代の遺物散布地として知られている壬生遺跡の範囲に入る[22]。東側の18地点の調査では、時期不明の自然流路を検出しており、今回３区で検出した湿地状堆積（整地層475）や21地点東半の湿地（のちに整地）の続きとみられる。縄文時代では、９地点でサヌカイト製の石鏃が出土している。弥生時代では、弥生土器や石器の破片が広い範囲で少量出土している。古墳時代になると、土師器や須恵器の小片に加え、10地点で前期に属するグリーンタフ製の石製模造品、10・13地点で中期・後期の須恵器が出土している。これらの遺物は、池や湿地状の堆積土中で発見されていることから、自然流路によって上流から運ばれて来たとみられる。

奈良時代では土師器・須恵器（25・26地点）のほかに、後期の瓦（10・16～18・20・24・29地点）が多数出土している。瓦については、平安時代に入って平城京跡より搬入された瓦とみられるが、18地点では特に出土例が多く、これらは築地塀の瓦として利用されたと考えられる。

平安時代　条坊関連の遺構は、南北道路では西坊城小路、皇嘉門大路、東西道路では三条坊門小路の遺構が検出されている。西坊城小路については、17・18・28・29地点で築地、両側溝、路面などを検出している。28地点では東側溝とその西肩を掘り込む溝を検出し、溝から平安時代後期の土器が出土した。築地心上で柱穴を検出したが、この柱穴には柱根が残存していた。29地点では東側溝および築地基底部、築地心の柱列、築地西側で犬行とみられる平坦部を検出した。溝は平安時代後期に掘り直して使用していた。皇嘉門大路については、12地点で東側溝の東肩を検出している。推定幅４ｍ、深さ１ｍあり、平安時代中期頃に埋没した後、鎌倉時代中期まで窪地のような状態で存続したと考えられる。また13地点で皇嘉門大路造成の際の整地層と路面を検出した。三条坊門小路については、17・18地点で路面、北側溝、七町内溝、三町内溝、三町北面築地などを検出しているが、いずれも残存状態は良好ではない。

平安時代前期の遺構は、六町で建物や洲浜敷き護岸を持つ池などが検出されている。建物は21・22地点で２棟、20地点で３棟検出されている。21・22地点で検出されたSB01・SB02は、今回北側を調査した結果、それぞれ身舎のみの東西棟であることが判明した。建物の時期は、SB01が20地点の調査で９世紀前半、SB02は今回の調査で９世紀後半と判明した。20地点で検出された建物３棟は、整地層を挟みながら、建物１・２と建物３が重複しており、下層の遺構は９世紀初頭に属する。

六町西半の23・24・25地点では、洲浜敷き護岸を持つ池が検出されている。この池は、今回検出した池250と同時に存在した池であるため、少し詳しく解説する。25地点では池とその東岸が検出されている。東岸は小礫を用いた洲浜敷きで、洲浜は幅約1.5ｍある。池は新旧２時期あり、下層のSG１Bは10世紀代、上層のSG１Aは11～12世紀代とする。上層と下層の間には粗い礫を敷いた面があり、上層に伴う洲浜とされる。ただ西側の26地点では池の西岸は検出されていない。北側の23地点では、池とその北岸が検出されている。北岸は礫を敷いて洲浜を作り、南端は杭と板で

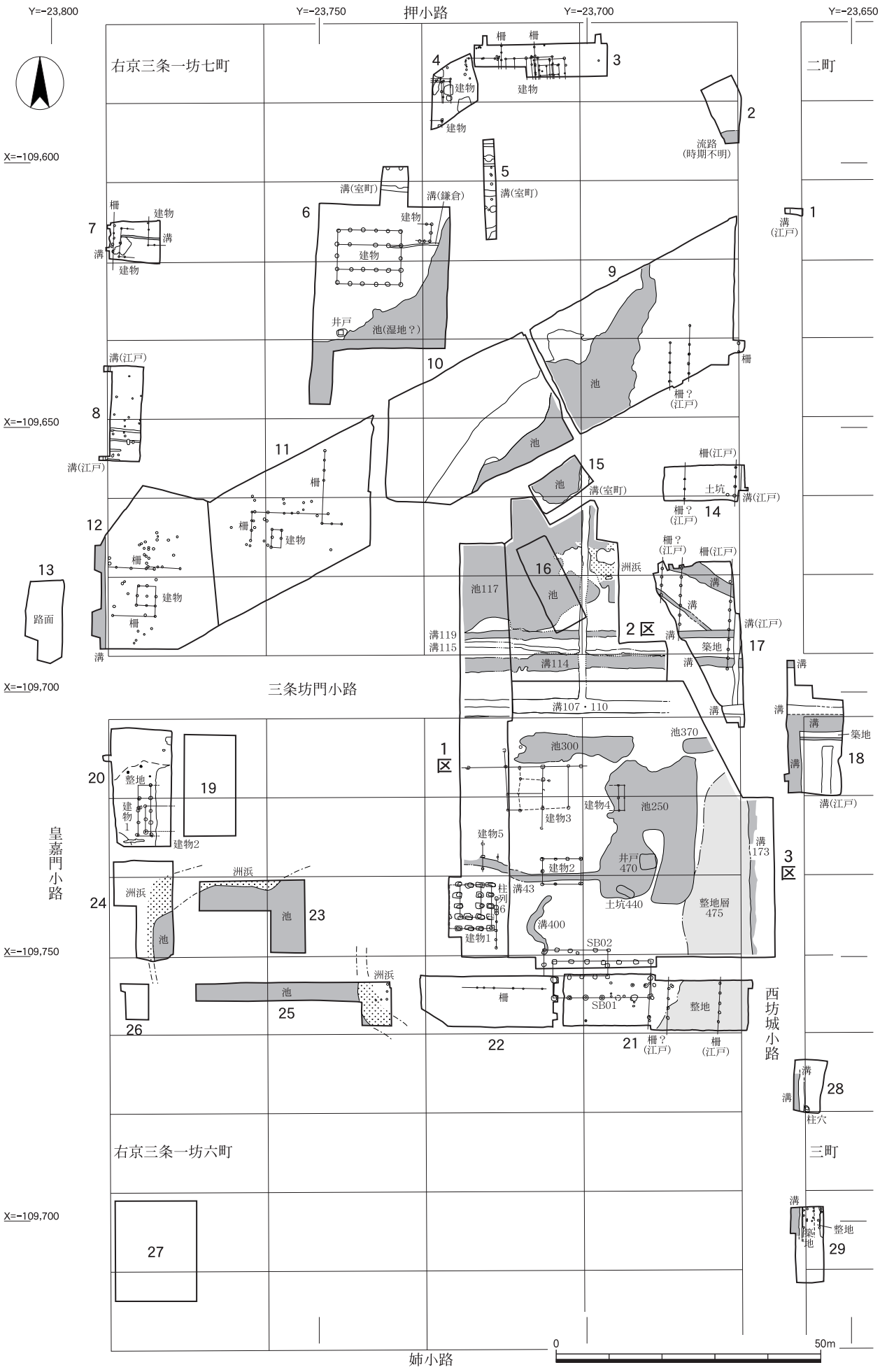


図３　周辺調査位置図（１：1,000）

表２　既往調査一覧表

地点	条坊名	調査機関	面積(㎡)	調査年度 調査区 (次数)	主な遺構		主な遺物		文献	備　考
					平安時代	その他	平安時代	その他		
1	二町、 西坊城小路	市埋文研	16.3	1993年度 ４区	—	江戸中の溝、江戸後の土坑	—	江戸中～後の陶磁器	1	江戸中の溝は西坊城小路路面上で検出。
2	七町、 西坊城小路	市埋文研	65	1993年度 １区 （３次）	—	成立不明の流路（埋没近代）	—	—	2	９地点の池へ流れ込んでいたとみられる流路を検出。
3	七町	市埋文研	135	1993年度 ２～４区 （３次）	平安中～後の建物５・柵２・溝１	江戸の池・土坑	平安前の土師器・緑釉陶器・灰釉陶器など、平安中～後の土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦	江戸の土器・瓦類		推定穀倉院。平安中～後の建物５棟。２～３棟が重複し、３時期ほどあるとみられる。建物間に柵がある。雑舎群の可能性あり。
4	七町	市埋文研	81.9	1993年度 ５区 （３次）	平安前の柱穴、平安中～後の建物３・井戸１・土坑３・溝１	—	平安前の土師器・緑釉陶器・灰釉陶器など、平安中～後の土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦	江戸の土器・瓦類		推定穀倉院。平安前の柱穴２基は別の建物。平安中～後の建物３棟および土坑や溝は重複。雑舎群の可能性あり。
5	七町	市埋文研	36	1997年度 ４区	—	室町の溝	—	室町前の土師器・陶器	3	推定穀倉院。６地点から続く室町の溝を検出。
6	七町	市埋文研	699	1997年度 １～３区	平安前の建物１(身舎南北２間×東西５間、南北に庇)、平安中の建物１(南北２間×東西２間以上)、平安後の井戸１、平安中～後の池	鎌倉の溝、室町の溝	平安前の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器など、平安中～後の土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦質土器・瓦	鎌倉の土師器、室町前の土師器・陶器、江戸の土師器・陶磁器		推定穀倉院。柱穴の状態から、平安前～中にかけて何回かの建て替えあったと想定。その後、10世紀後半の建物と柱穴は小規模な建物群が鎌倉まで存続。
7	七町	市埋文研	72	1994年度 １区 （７次）	平安前の建物２・柵１・溝２	—	平安前の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦・凝灰岩片	—	4	推定穀倉院。柵列と溝は皇嘉門大路東側溝および垣塀。
8	七町、 皇嘉門大路	市埋文研	105	1994年度 ２区 （７次）	—	江戸の溝・柵・柱穴・湿地状堆積	—	桃山の土師器など、江戸の土師器・陶磁器・ガラス・金属		推定穀倉院。平安時代の遺構は未検出。
9	七町、 西坊城小路	市埋文研	866	1997年度 １区	平安前の柵、平安中の池・柱穴、平安後の溝	鎌倉中の池、江戸の耕作溝	平安前の土師器・須恵器・瓦、平安中の瓦、平安後の瓦	縄文の石鏃、奈良の瓦	5	推定穀倉院。西坊城小路内溝は存在しない。池には湧水痕跡が２箇所で認められる。
10	七町	市埋文研	728	1997年度 ２区	平安中～鎌倉の池	江戸の耕作溝	平安前の墨書土器・黒色土器・瓦、平安中の瓦、平安後の瓦	古墳前の石製模造品、奈良後の瓦、鎌倉の瓦質土器、江戸の土師器・陶磁器		推定穀倉院。池護岸の一部を平安中に石敷きとする。
11	七町	市埋文研	750	1997年度 ３区	平安中の建物１・柵２	江戸の耕作溝	平安前の緑釉陶器・瓦、平安後の瓦	江戸の土師器・陶磁器		推定穀倉院。居住空間。
12	七町、 皇嘉門大路	市埋文研	600	1997年度 ４区	平安前～鎌倉中の溝、平安中の建物１・柵	江戸の耕作溝	平安前の須恵器、平安中の瓦	江戸の土師器・陶磁器		推定穀倉院。居住空間。
13	七町、 皇嘉門大路	市埋文研	108	1997年度 ５区	平安前～中の路面	—	平安前の須恵器、平安中の瓦	弥生の石包丁、古墳中の須恵器、江戸の土師器・陶磁器		皇嘉門大路路面は平安前に整備され、平安中に改良された。
14	七町、 西坊城小路	市埋文研	95	2004年度 (19次)	平安前の土坑	平安～室町の柱穴、江戸の溝・柱穴・土坑	平安の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器	中世の土師器、江戸の土師器・陶磁器	6	推定穀倉院。西半検出の南北方向の２条の柵列は平安中で条坊関係ではなく、穀倉院内でのものと考えられる（今回調査で江戸と判明）。調査区東端の江戸の溝と柱列は17地点へと続く。
15	七町	市埋文研	70	2002年度 ２区	平安の池	中世の池、江戸の溝	平安前の瓦、平安中の土師器・須恵器・緑釉陶器	弥生の石器、古墳の小片、鎌倉～室町の土師器・瓦質土器	7	推定穀倉院。湧水のあった池の護岸一部には、洲浜敷きが行われていた。三条坊門小路内溝を検出したことにより、平安前からの土地利用を考察。平安中以降に池が縮小、中世に耕作地（２区）。１・２区の間は湧水のため池が残存していた可能性が高い。近世に農地となる。
16	七町	市埋文研	110	2002年度 １区	平安の池・溝・土坑	室町の溝、江戸の耕作溝	平安の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦	弥生・古墳の小片、奈良の瓦、鎌倉の土師器、室町の土師器・焼締陶器・瓦・木製品、江戸の土師器・陶磁器		
17	六・七町、 三条坊門小路	市埋文研	310	2001年度 ２区 (16次)	平安前の築地・溝・路面・土坑、平安中の建物	近世以降の井戸・柵・溝・土坑	平安前の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器・瓦・石製品、平安中～末の土師器・瓦	弥生の土器、奈良後の瓦、近世の土師器・陶磁器・銭貨	8	推定穀倉院。三条坊門小路南・北側溝および北側の内溝を検出。南東から北西方向の溝は池に流れ込んでいた可能性がある。
18	三町、 西坊城小路、 三条坊門小路	市埋文研	198	2001年度 １区 (16次)	平安前～後の築地・路面・溝、平安後～鎌倉の溝・路面	平安以前の自然流路、近世以降の井戸・溝・土坑				推定右京職。三条坊門小路南側溝、西坊城小路東側溝は平安後まで機能。築地廃絶は９世紀末～10世紀。側溝幅が通常より広いのは右京職＝官庁であることが理由か。右京職後の土地利用は不明。

地点	条坊名	調査機関	面積(㎡)	調査年度 調査区 (次数)	主な遺構		主な遺物		文献	備　考
					平安時代	その他	平安時代	その他		
19	六町	市埋文研	172	1982年度 立会調査	時期不明の池状・湿地状堆積（表土－1.14m）		平安の土師器・須恵器	古墳～奈良の土師器・須恵器	9	推定西三条第。調査地全域が池または湿地状。
20	六町、 皇嘉門大路	市埋文研	244	2006年度 (20次)	平安前～中初の建物・柵・柱穴・土坑・整地	中世～近世の土坑・耕作溝	平安前の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・柱根	古墳の須恵器、奈良の瓦、中世の土師器・瓦質土器・焼締陶器・輸入磁器・銭貨、近世の土師器・陶磁器	10	推定西三条第。平安初期からの宅地利用、中期の早い時期までは継続、その後耕作化。建物１・２は９世紀中葉に成立し、９世紀末～10世紀初頭には廃絶。建物３は８世紀末～９世紀初頭で、９世紀前半に廃絶。整地土１は10世紀初頭、整地土２は９世紀中葉頃。埋納土坑98は建物１の地鎮遺構か？
21	六町、 西坊城小路	市埋文研	400	2000年度 (15次)	平安前の建物２・柱穴・整地（もとは湿地）	近世の溝・土坑	平安前の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器・瓦、平安末の土師器	弥生の土器、近世の土師器・陶磁器・木製品	8	推定西三条第。西坊城小路西側溝はない。SB01とSB02は重複。
22	六町	市埋文研	243	1998年度 ４区 (14次)	平安前の建物１・柵１・柱穴	江戸の井戸・溝・土坑	平安前の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦・柱根	弥生の土器・石器、江戸の土師器・陶器・木製品	11	推定西三条第。西側で検出されていた平安前～後の池に関連する建物SB01の検出。
23	六町	古代文化 調査会	152	2008年度	平安前の池・土坑・柱穴	近世以降の耕作土	平安前～中の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入陶磁器・土製品・石製品・金属製品・木製品・瓦	弥生の小片、中世～近世の土師器・陶磁器	12	推定西三条第。池２は新旧２時期の造り替えあり、上層の池１は舟入状の落込み。
24	六町	市埋文研	162	2001年度 (17次)	平安初～前の池、平安後の埋納遺構	近世の溝・土坑	平安前の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・輸入磁器・木製品・金属製品・植物遺体、平安後の土師器	古墳の土器・須恵器、奈良後の瓦、近世以降の陶磁器	8	推定西三条第。洲浜敷き北西護岸を検出。池は９世紀初頭と後半の２時期あり。
25	六町	市埋文研	154	1995年度 ２区 （８次）	平安前～中の池、平安後の池	中世の土坑、江戸の溝・柵	平安前の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦質土器・瓦・木製品・獣骨	弥生中の土器、古墳の須恵器、奈良の土師器・須恵器、中世の土師器・輸入陶磁器・焼締陶器・銭貨、近世の陶磁器	13	推定西三条第。池は２時期ある。旧池は洲浜部分が狭く、洲浜の傾斜も急であったが、平安後に洲浜を広くし、傾斜も緩やかに改修。
26	六町	市埋文研	77	1995年度 １区 （８次）	平安前～中の池、平安後の池	江戸の溝				
27	六町	市埋文研	118	1988年度 立会調査	時期不明の沼状堆積（表土－1.53m）		—	—	14	推定西三条第。全域が沼であった可能性がある。
28	三町、 西坊城小路	市埋文研	70	1998年度 ５区 (14次)	平安前の土坑・柱穴、平安後の溝	江戸の井戸	平安前の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・柱根、平安後の土師器	江戸の土師器・陶磁器	11	推定右京職。西坊城小路東側溝を検出し、推定築地心で柱穴を検出。
29	三町、 西坊城小路	市埋文研	75	2003年度 (18次)	平安前の整地、平安中～後の溝、平安の土坑・柱穴・築地	中世の耕作溝、近世以降の柱穴・溝・土坑	平安前～後の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入陶磁器・瓦	奈良後の瓦、中世の土師器・瓦質土器・陶器、室町の土師器、江戸の土師器・陶磁器	15	推定右京職。西坊城小路東側溝を検出し、推定築地心で柱穴を検出。18・28地点の続き。

※ 条坊名は、右京三条一坊を省略した。
市埋文研：財団法人京都市埋蔵文化財研究所
（次数）：京都都市計画（京都国際文化観光都市建設計画）都市計画事業二条駅地区土地区画整理事業に伴って行われた一連の調査の次数

文献
1　平田　泰「平安京右京三条一坊６」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年
2　平田　泰「平安京右京三条一坊３」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年
3　平田　泰「平安京右京三条一坊３」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年
4　平田　泰「平安京右京三条一坊２」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年
5　吉村正親「平安京右京三条一坊４」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年
6　布川豊治『平安京右京三条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年
7　尾藤徳行ほか『平安京右京三条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-1　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年
8　本　弥八郎ほか『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年
9　家崎孝治ほか『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』京都市文化観光局　1983年
10　布川豊治『平安京右京三条一坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-13　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年
11　伊藤　潔「平安京右京三条一坊１」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000年
12　水谷明子ほか『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡－西三条第（百花亭）跡－』古代文化調査会　2009年
13　伊藤　潔「平安京右京三条一坊２」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年
14　家崎孝治ほか『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年
15　田中利津子ほか『平安京右京三条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-16　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

護岸する。池１はこの洲浜を掘り込んだ東西に長い遺構で、舟入の可能性が示唆される。池１下には池２があり、池１は９世紀後半から10世紀頃、池２は９世紀後半とされる。池２は25地点の下層池SG１Bに該当する。これに対し西端の24地点では様相が異なる。最初に９世紀初頭に属するSG24旧がある。この池の北岸は礫敷の洲浜をもち、水は北西部から取水していたが、一時期の激しい流れで洲浜の一部が流出したとされる。これを改修するかたちで次のSG24新が作られ、この段階で24地点は池の北西岸となる。岸の南東端には杭列があり、岸を護岸していたとされる。この杭列は23地点で検出された東西の杭列に連続していたと推定される。柱穴の１基には11世紀中頃の土師器杯・皿が４枚重ねられた状態で出土し、池廃絶時には埋納遺構として使用されたとみられる。SG24新からは「齋衡四年三條院正倉帳」の題簽も出土している。整理すると、９世紀後半に属する池は25地点のSG１B、23地点の池２、24地点のSG24新であり、それが今回の池250と同時に存在したとみられる。

19地点では池状または表土下1.14ｍで湿地状堆積を、27地点では表土下1.53ｍで沼状堆積を検出している。19地点は三条坊門小路南築地際に当たるため、今回検出した池300・370と関連する遺構とも考えられるが、両方とも時期がわかる遺物は出土していない。

七町では、北東角と南西角を結ぶ対角線の北西側で建物、南側で池が検出されている。６地点では、東西５間、南北２間で南と北に庇をもつ大型建物が検出されている。この建物の東側では、小規模な建物が２棟検出されているが、北で東に振れており、時期が異なる可能性がある。北側の４地点では建物が２棟、７地点では建物２棟と柵、溝、14地点では土坑などが検出されている。

９・10地点で検出した池は成立時期が判然としないが、９地点で検出した池の南延長部を15・16地点で検出しており、ここでは平安時代前・中期の遺物が出土している。また９・10地点では石敷き護岸や洲浜状に造作した箇所が確認されており、同様の所見が今回池117でも確認できた。２地点で検出した時期不明の流路は、９・10地点の池に流れ込んでいたとみられる。なお、６地点の南東側で検出された池は、自然地形の窪みから生じた平安京以前の湿地の可能性が高い。

平安時代中期の遺構は、６地点で掘立柱建物と東西溝、11・12地点で東西・南北方向の柵と小規模な建物、４地点で建物３棟と隅丸方形の土坑、南北方向の溝、井戸１基、３地点では南北棟とみられる建物５棟と柵などが検出されている。後期に属する遺構としては、６地点で一辺0.9ｍの方形横桟縦板組井戸、９地点の南東部で東西・南北方向の溝を検出している。

鎌倉時代から桃山時代　６地点で鎌倉時代から室町時代に属する東西方向の溝を数条検出している。前者は北東から南西方向、後者は北西から南東方向の振れをもつ。５地点でも東西方向の溝を検出している。９・10地点では東西方向や北東から南西方向の溝を検出している。なお９・10地点で検出した池の上層堆積土は鎌倉時代中期とされる。20・25地点では中世の土坑を検出している。８地点では桃山時代の土師器や陶磁器類が出土している。桃山時代の遺物は周辺での出土例がないため、土地利用との関連で注目される。

江戸時代以降　各所で耕作に関係する溝が検出されている。条坊に重複する位置で確認された溝は、１・８・20・29地点で検出している。１地点では西坊城小路路面上で南北溝を検出し、18

地点では三町内溝位置のやや東側で南北方向の溝を検出したが、この溝は三町北限に達せず途切れている。14・17地点では南北溝が柵と平行して検出されている。井戸は17・18・22・28地点で検出されており、耕作に使用したとみられる。水田の遺構は８地点で確認され、11・12地点では南北0.5mの段差を持つ区画が検出されている。なお、調査地周辺では東西、南北方向の柵や小規模な建物が検出され、平安時代中期に属するとの見解も出されていたが、方位が北で東に振れることや、今回の調査で江戸時代の遺物が出土したことから、江戸時代以降の遺構であることが確認された。この遺構については第３章で解説している。

註

１）　横山卓雄「第二章　京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店　1994年

２）　『平安遺文　古文書編』第４巻　東京堂出版　1963年　第1338号

３）　朧谷　寿「大江公仲」『平安時代史事典』角川書店　1993年
「大江公仲邸跡」『京都市の地名』日本歴史地名大系27　平凡社　1979年
大江公仲の流罪は、嘉保元年（1094）十二月二十九日、散位藤原資俊宅に押し入って、放火および殺害に至ったとして検非違使庁へ出頭を命じられたが拒否したためとされている。３年後の承徳元年（1097）十二月二十九日に呼び戻され、元の位に復職した。没年は不明であるが、大治五年（1130）に長女の仲子が養子と所領を争い、公仲の財産処分状などを院庁へ提出したときの文書に、「亡父公仲」との記述がみられることから、大治五年以前には鬼籍に入ったとみられる。

４）　『改訂増補　故実叢書22巻　禁秘抄考註・拾芥抄』明治図書出版株式会社　1993年

５）　『新訂増補　国史大系　日本三代実録』前篇　吉川弘文館　1977年

６）　『伊勢物語』新潮日本古典集成　新潮社　1976年

７）　山田邦和「右京三条一坊四町」『平安京提要』角川書店　1994年

８）　『今昔物語集』３　新日本古典文学大系35　岩波書店　1993年

９）　註７に同じ。

10）　栗原　弘『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』高科書店　1994年

11）　墨書土器解読の際、裏側の一番上の文字が「院」であることが判明した。

12）　伊藤　潔「平安京右京三条一坊２」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

13）　網　伸也ほか『平安京右京三条一坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-16　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

14）　「院」は天皇関係者が滞在すると使用されることから、皇太后藤原順子の遷御を契機として、「西三条院」と呼ばれるようになったとも考えられる。

15）　本　弥八郎ほか『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年　P49

16）　吉岡眞之「穀倉院」『平安時代史事典』角川書店　1993年

17）　註16に同じ。

18）　『増補新訂　国史大系　續日本後紀』吉川弘文館　1978年

19）　註18に同じ。

20）　吉岡眞之「穀倉院領」『平安時代史事典』角川書店　1993年

21）　『慶長昭和京都地図集成- 1611（慶長16）年～1940（昭和15）年- 』柏書房　1994年

22）　『京都市遺跡地図台帳　第８版』京都市文化市民局　2007年

第３章　遺　　構

１．基本層序（図版１～３、図４・５、表３）

概況　調査地の層序は比較的単純である。厚さ約１ｍある現代盛土の下には江戸時代の旧耕土・床土が厚さ0.4mあり、それらを取り去ると地山となる。地山は、シルト～粘土層と砂礫層の２種類あり、地山上面において、平安時代から江戸時代のすべての遺構を検出した。また、この地山は、シルト～粘土層と砂礫層が互層を呈し、北北東から南南西方向に帯状分布することから、扇状地性の氾濫堆積とみられた。

平安時代の柱穴を検出したのは、調査区の中央から南西にかけての範囲である。ここは地山が若干高くなっており、元来地形が高かったことが想定された。また今回検出した平安時代の柱穴は非常に底が浅いため、当時の生活面はさらに高かったといえる。１区北半と３区南東には黒色シルト～粘土層が堆積しており、湿地状の地形が存在していた。これらの最上層は９世紀初頭の遺物を含む層によって埋められており、平安時代初期に整地されたことも想定できた。この他、南端では検出面から0.3m下（標高33.2m付近）で大山系の火山灰を、井戸470掘形断面では検出面から1.6m下（標高31.3m付近）で姶良Tn火山灰を確認し、遺構面が形成されるまでの堆積年代を推定する手がかりが得られた。以下、12箇所の層序を解説する（図４・５）。また１区西壁の断面図は図版２・３で掲載した。

断面１（３区南壁）　作図箇所の中央から東半にかけては、大規模な攪乱が掘り込まれている。その西肩は南北方向で直線的であり、この攪乱は近代以降の人工的な遺構の可能性が高い。作図箇所の西半は整合的な堆積層が残されている。黒褐色砂泥（２）と褐灰色砂泥（３）は旧耕土であり、ここでは旧耕土が上下２層確認できた。（６～８）の黒褐色シルト質粘土は、西坊城小路西側溝に該当する溝173の埋土であり、平安時代前期に属する。溝173の西肩にある黒褐色シルト質粘土（９・10）は湿地状堆積を示す層で、整地層475としたものである。このうちの（９）は平安時代初期の土器・瓦を、(10) は樹木などの植物遺体を多く包含していた。なお、付章１自然科学分析では、ここで（10）とした層から出土した木材の放射性炭素年代が5880年±30yBPで縄文時代前期頃とする。直上の（９）は９世紀前葉に整地されており、放射性炭素年代が（10）の年代を示すとすれば両層の年代差は非常に大きいことになる。

断面２（３区南壁）　地表から0.5m下には黒褐色砂泥（１、旧耕土）が厚さ0.2m堆積し、その下には地山の黄褐色砂礫が堆積する。にぶい黄褐色粘質土（３～５）は柱穴424の埋土である。この付近は、現地表から遺構面までが0.7mで、調査区内では最も浅い。

断面３（１区南壁）　現代盛土の下は浅い土坑が掘られており、内部にはオリーブ黒色粘質土（１）、暗灰黄色粘質土（２）、黄褐色粘質土（３）が堆積するが、これらは土取穴の埋土である。付近の地山は暗オリーブ色粘質土であるため、この粘質土が採取され、後に黒色系の粘質土が埋め戻されたためといえる。

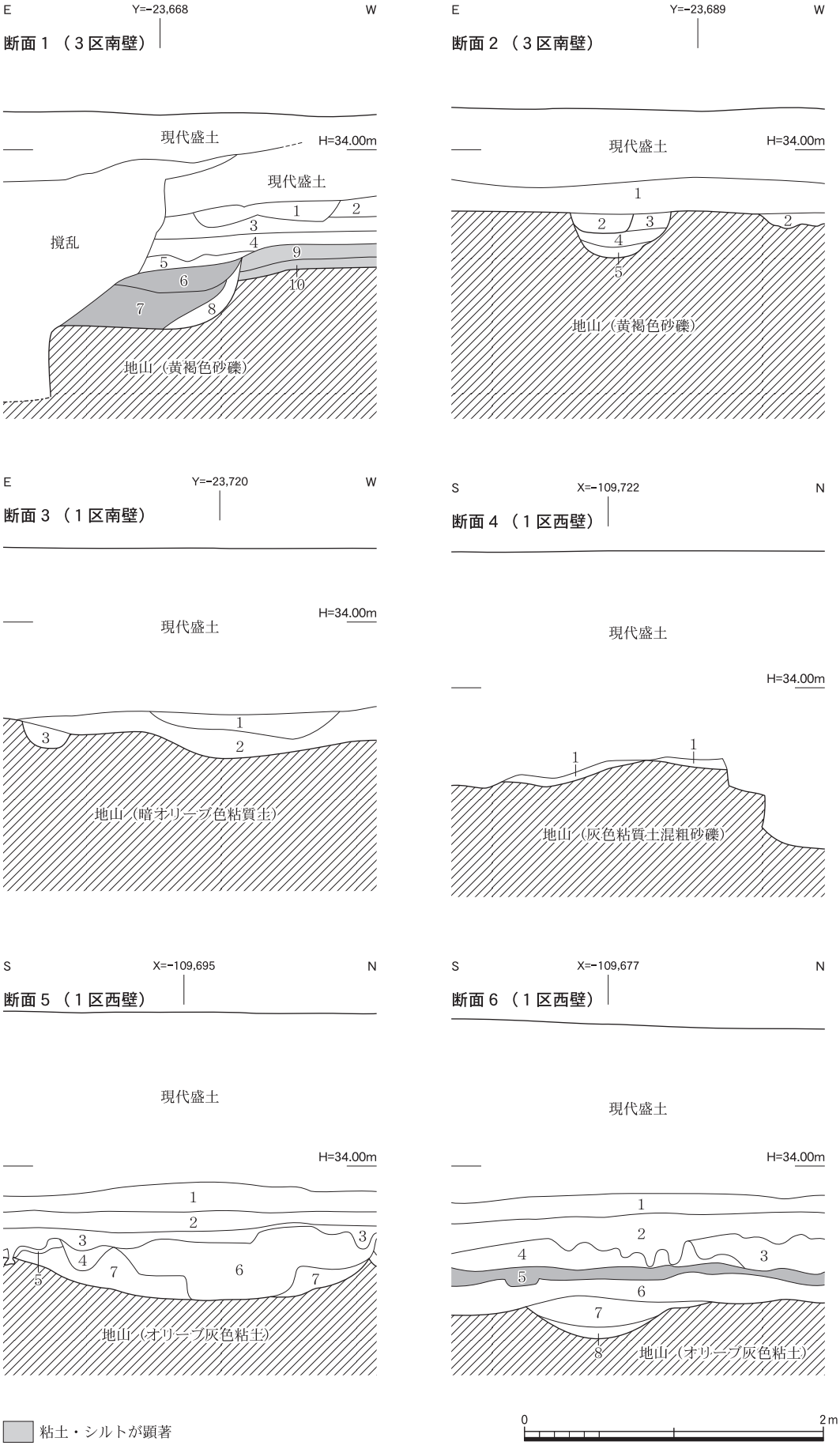


図４　調査区断面図１（１：40）

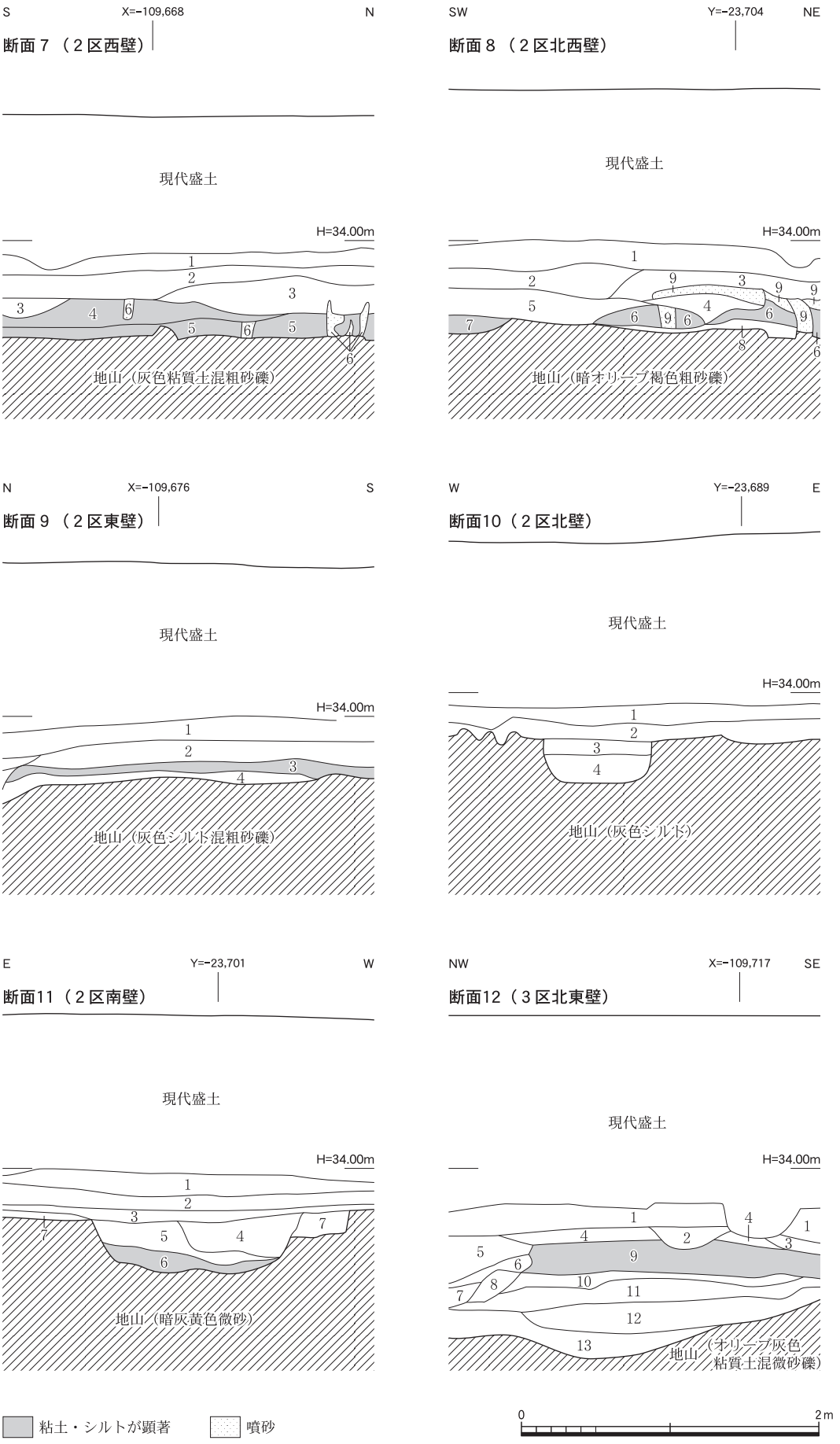


図５　調査区断面図２（１：40）

表３　調査区断面図１・２土層名

断面１（３区南壁）
1　10YR3/2 黒褐色砂泥
2　10YR2/2 黒褐色砂泥（旧耕土）
3　10YR4/1 褐灰色砂泥（旧耕土）
4　10YR5/1 褐灰色砂泥
5　10YR3/1 黒褐色シルト質粘土
6　10YR3/2 黒褐色シルト質粘土（溝173）
7　10YR3/1 黒褐色シルト質粘土（溝173）
8　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土（溝173）
9　10YR3/1 黒褐色シルト質粘土（整地層475）
10　10YR3/2 黒褐色砂泥、植物遺体含む

断面２（３区南壁）
1　10YR2/2 黒褐色砂泥（旧耕土）
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土（耕作溝）
3　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（柱穴424）
4　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（柱穴424）
5　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（柱穴424）

断面３（１区南壁）
1　10Y3/1 オリーブ黒色粘質土
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
3　2.5Y5/3 黄褐色粘質土

断面４（１区西壁）
1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土（旧耕土）

断面５（１区西壁）
1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（旧耕土）
2　10YR4/2 灰黄褐色質粘質土（旧耕土）
3　2.5Y3/2 黒褐色粘質土
4　2.5Y3/2 黒褐色粘質土
5　5Y5/1 灰色粘質土
6　10YR3/1 黒褐色粘質土（溝114）
7　5GY5/1 オリーブ灰色粘質土（溝114）

断面６（１区西壁）
1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（旧耕土）
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（旧耕土）
3　10YR2/1 黒色粘質土
4　10YR2/2 黒褐色粘質土
5　10YR3/1 黒褐色粘質土（池117）
6　10YR2/1 黒色粘質土、植物遺体含む
7　10YR4/2 灰黄褐色粗砂礫
8　10YR4/1 褐灰色粘質土

断面７（２区西壁）
1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（旧耕土）
2　2.5Y4/2 暗灰黄色微砂混礫（整地層）
3　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（旧耕土）
4　10YR2/1 黒色粘質土（池117）
5　10YR1.7/1 黒色粘質土（池117）
6　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂（噴砂）

断面８（２区北西壁）
1　10YR4/2 灰黄褐色砂質土（旧耕土）
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（旧耕土）
3　10YR3/2 黒褐色微砂（旧耕土）
4　10YR3/2 黒褐色細砂（旧耕土）
5　10YR2/1 黒色粘質土（旧耕土）
6　10YR1.7/1 黒色粘質土（池117）
7　2.5Y2/1 黒色粘質土（池117）
8　10YR2/1 黒色粘質土混礫
9　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂（噴砂）

断面９（２区東壁）
1　10YR4/2 灰黄褐色砂質土（旧耕土）
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土（旧耕土）
3　7.5YR2/1 黒色粘質土（池117）
4　2.5Y3/1黒褐色粘質土混微砂礫

断面10（２区北壁）
1　10YR4/2 灰黄褐色砂質土（旧耕土）
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（旧耕土）
3　5Y5/3 灰オリーブ色シルト（土坑144）
4　2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土（土坑144）

断面11（２区南壁）
1　10YR4/2 灰黄褐色砂質土（旧耕土）
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（旧耕土）
3　2.5Y3/2 黒褐色砂質土
4　10YR2/2 黒褐色粘質土（溝145）
5　7.5YR3/1 黒褐色粘質土（溝145）
6　10YR4/1 褐灰色粘質土（溝145）
7　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土（路面形成層）

断面12（３区北東壁）
1　10YR3/1 黒褐色粘質土（旧耕土）
2　2.5Y4/1 黄灰色粘質土（耕作溝）
3　10YR4/2 灰黄褐色砂質土
4　10YR2/2 黒褐色粘質土
5　7.5YR2/1 黒褐色粘質土
6　2.5Y5/1 黄褐色粘質土
7　10YR4/1 褐灰色粘質土
8　2.5Y2/1 黒色粘質土
9　10YR1.7/1 黒色粘質土（整地層475）
10　10YR3/3 暗褐色粘質土
11　10YR3/1 黒褐色シルト
12　10YR3/1 黒褐色微砂混粘質土
13　2.5Y3/1 黒褐色シルト混粘質土

断面４（１区西壁）　この付近は現代盛土直下が地山（灰色粘質土混粗砂礫）となる。その間の堆積層が削平されたためである。ただし作図箇所では、地山上に暗灰黄色粘質土（１、旧耕土）が薄く堆積していた。

断面５（１区西壁）　現代盛土の下に堆積した暗オリーブ褐色砂質土（１）と灰黄褐色質粘質土（２）は、いずれも旧耕土である。その下には黒褐色粘質土（３）が薄く堆積し、さらに下には溝114埋土である黒褐色粘質土（６）とオリーブ灰色粘質土（７）が堆積している。（６）の上部にある（３）と黒褐色粘質土（４）の境界は上下に波打っており、上からの踏み込みか、あるいは地震による影響が考えられる。

断面６（１区西壁）　図示した箇所の周辺は、池117とした湿地状堆積の範囲に該当する。現代盛土下には暗オリーブ褐色砂質土（１、旧耕土)、灰黄褐色粘質土（２、旧耕土）が合わせて0.3ｍある。その下には黒色粘質土（３)、黒褐色粘質土（４）があり、下が池117埋土となる。池117埋土は２層に分層できた。上半分は黒褐色粘質土（５）で、平安時代初頭の遺物を包含し、下半分は黒色粘質土（６）で樹木などの植物遺体を多く含む。なお、付章１自然科学分析（５地点）では、池117埋土である（５）を３層、その下の植物遺体を含む（６）を４層とする。そして４層は、出土した植物遺体の放射性炭素年代測定で2550年±30yBPが得られ、縄文時代晩期末から弥生時代前期前半頃に堆積したことが判明した。

断面７（２区西壁）　この箇所も池117とした湿地状堆積の範囲に当たり、断面６と同様の堆積状況がみられた。池117埋土は黒色粘質土（４・５）であるが、両層には地山の砂礫～細砂（６）が上方に貫入する状況が確認できた。これらは地震に伴う噴砂の痕跡と推定される。

断面８（２区北西壁）　断面６・７と同じく池117の範囲に該当するが、池117埋土の黒色粘質土（６・７）は断続的に堆積する状況がみられた。さらに（６）を切断するかたちで、にぶい黄色細砂（９）が上方に貫入しており、断面７と同じ噴砂の痕跡と判断された。

断面９（２区東壁）　池117の東肩付近に当たり、礫敷き洲浜が形成された範囲である。灰黄褐色砂質土（１、旧耕土)、暗オリーブ褐色砂質土（２、旧耕土）の下には池117埋土である黒色粘質土（３）が薄く堆積し、その下の黒褐色粘土混微砂礫（４）と地山の境界には礫が貼り付く状況がみられた。この礫は洲浜として人工的に入れられた礫と判断できた。

断面10（２区北壁）　作図箇所付近の堆積層は比較的単純で、かつ整合的である。現代盛土の下には旧耕土である灰黄褐色砂質土（１）と暗オリーブ褐色砂質土（２）が堆積し、この下は地山となる。灰オリーブ色シルト（３）とオリーブ褐色粘質土（４）は江戸時代末期の土坑144の埋土である。

断面11（２区南壁）　作図箇所は三条坊門小路の路面部分に該当する。現代盛土下には旧耕土である灰黄褐色砂質土（１)、暗オリーブ褐色砂質土（２）が堆積し、その下には路面形成層であるオリーブ褐色砂質土（７）が堆積する。（７）は小礫を多く含み、地山上を整地している。また、黒褐色粘質土（４・５）と褐灰色粘質土（６）は南北方向の溝145埋土である。江戸時代中期に属し、路面上に掘り込まれている。

断面12（３区北東壁）　作図箇所は湿地状堆積である整地層475の広がる範囲に該当する。現代盛土下にある（１）は旧耕土であり、黄灰色粘質土（２）はその下に掘られた耕作に伴う溝の埋土である。その下にある黒色粘質土（９）は整地層475とした湿地状堆積を形成する層で、平安時代初期の遺物を包含する。作図箇所では（９）以下がさらに0.6mほど深くなっており、この間に暗褐色粘質土（10）から黒褐色シルト混粘質土（13）が堆積する。この部分は谷状の窪みが存在したためこれらが堆積したと推定される。

２．遺　　構

（１）平安時代（図版４～７）

掘立柱建物、柱列、井戸、池、溝、土坑、整地層などがある。

2000年度調査SB01（図版12・88、写真７・８）　調査地南側の調査（1998・2000年度調査）で建物の南半分が検出されており、今回北半分を調査したことで建物規模が確定した。ここでは「2000年度調査SB01」の名称を用いる。建物は、東西６間、南北２間の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は西から、柱穴412−（3.16m）− 柱穴413−（3.08m）− 柱穴414−（3.00m）− 柱穴415−（3.04m）− 柱穴416−（3.08m）− 柱穴417−（3.12m）− 柱穴418となる。東西長18.48mあり、柱間は平均3.08mで、当時の10尺に復元できる。南北方向は２間で7.2mあり、柱間は12尺に復元できる。柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺最大0.95mある。検出面から底までの深さは、両端の柱穴が0.35mでやや深く、東半の２基は0.15mと非常に浅い。断面を観察した結果、柱の底には礎板や礎石は存在せず、柱穴の中央には柱材を抜き取った穴の痕跡が確認できた[1)]。柱穴の埋土は、抜取穴内が灰黄褐色粘土ブロックを多く含んだ、にぶい黄褐色粘土質シルト、掘形内は上半が黄褐色粘土質シルト、下半が暗灰黄色系粘土質シルトであった。中央間に掘られた柱穴415は抜取穴が方形を呈し、広範囲に掘り込まれたことが推定できた。この抜取穴埋土は灰色系の粘土が入っており、周囲との違いは明瞭であった（写真７・８）。９世紀初頭に属すると考えられる。なお、この建物と後述するSB02柱穴は、保存を考慮し、柱穴半截後は砂を入れて埋め戻した。

2000年度調査SB02（図版13・88、写真９）　2000年度調査SB01と同じく南側の調査（2000年度調査）で南側柱列が検出されており、今回の調査で北側柱列と東・西の妻柱を検出し、建物規模

表４　遺構概要表

時　　代	六町の遺構	七町の遺構
平安時代	2000年度調査SB01・02、建物１～５、 柱列６、井戸470、池250・300・370、 溝43・110・113・173・400、土坑440、 湿地状堆積（整地層475）	溝114・119、湿地状堆積（池117）
江戸時代	柱列549～556・560、 建物570、溝107・174、 土坑217・220・277～279・293・399・422	路面155、溝115・145、

写真７　柱穴415検出状況(2000年度調査SB01、北から)

写真８　柱穴415断面（2000年度調査SB01、北東から）

写真９　柱穴395断面（2000年度調査SB02、北から）

が確定できた。同じく「2000年度調査SB02」の名称を用いる。建物は、東西５間、南北２間の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は、西端の１間を除外して、柱穴398-（2.35m）- 柱穴397-（１間飛ばして4.80m）- 柱穴395-（2.46m）- 柱穴393である。柱間は平均2.40mで当時の８尺に復元できる。南北方向は、東妻側が柱穴393-（2.71m）- 柱穴420となる。南北２間で5.38mあり、９尺に復元できる。柱穴の平面形は方形を呈するものが多く、規模は一辺0.7～0.8mある。検出面から底までは、深いもので0.35m程度であった。断面観察では、底部に礎板、礎石は存在せず、中央には柱材を抜き取った穴の痕跡が確認できた。抜取穴の痕跡は、柱穴395で特に明瞭であった（写真９）。この建物は、1998年度調査区で2000年度調査SB01と重複していたと考えられるが、前後関係は確認されていない。しかし規模が小さいことや周囲の建物との類似性などから、2000年度調査SB01の後身建物で９世紀後半に属すると考えられる。

建物１（巻頭図版４-２、図版14・15・79）

１区南端で検出した。南北３間、東西２間の身舎に東・南・西の３面に庇がつく南北棟掘立柱建物である[2)]。柱掘形は東西に細長く、西辺は直線的であるが、東辺では円弧を呈するものが多く見られた。掘形の平均的な規模は東西1.4m、南北0.8mである。検出面では柱痕跡は確認できず、柱を抜き取った穴が掘形の広範囲に及んでいた。断割によって断面を観察したところ、柱材はすべて抜き取られており、東半分が一段深く掘られることや底面には石や礎板が敷かれること(図版79-２)、礎板は柱穴30・41・53・54・55・57に入れられており、盥状の容器（木279）が割られたものであること、柱の抜取穴は焼土塊や炭が多く含まれること（図版79-３・79-４）などが確認できた。柱穴掘形の東半分が深く掘られることについては、西側から柱を差し込んで立てたためと推定できる。また抜取穴に焼土塊や炭が含まれていることから、この建物は火災で焼亡したこと、残った柱材を抜き取る際に焼土塊や炭が混入したことが推定される。

建物１の柱間は、柱材が残存しないため精度を欠くが、最も深い部分を柱位置とみると、南北

４間は北から、1.96m、1.95m、2.01m、2.24mとなり、南１間がやや広い。同様に東西３間は東から、1.98m、2.02m、1.98mとなる。身舎と東庇は当時の6.5尺、南庇はやや広い7.5尺に復元できる。９世紀後半に属すると考えられる。なお、この建物の柱穴も現地保存を考慮し、半截後は砂を入れて埋め戻した。また、検出面では柱穴55・56、断割断面では柱穴50・56の剥ぎ取りを実施した。

写真10　柱穴405断面（建物２、南から）

建物２（図版16・87、写真10）　建物１と池250の中間に位置する。東西３間、南北２間の東西棟掘立柱建物である。柱間はすべて８尺（約2.4m）に復元でき、柱穴の規模や柱間は2000年度調査SB02に類似する。柱穴の深さは0.2m程度であり、南側柱列の柱穴405のみ柱材が元位置に残存していた（写真10）。柱材は、直径0.12mで長さ0.24mある。

この建物は、池250から西に流出する溝43が建物の南半分を通過しているが、直接重複しないことから、建物２と溝43とは同時期に並存した可能性が高い。また、東の妻柱と南の側柱１基が検出できなかったが、このことも溝43の存在と関係するものとみられる[3)]。９世紀後半に属すると考えられる。

建物３（図６）　建物としてのまとまりは明確ではないが、池300の南肩、X=−109,714付近には柱穴が東西に並んでおり、建物に伴う柱列であることが想定できた。柱筋は、西から柱穴105・柱穴458・柱穴513・柱穴441の４基の柱間が、それぞれ7.1m、7.0m、7.2mとなっており、８尺（約2.4m）を基本とした場合のそれぞれ３間分にほぼ相当する。さらに柱穴458の東2.62mには柱穴459が、柱穴441の西2.38mには柱穴439があり、これらも同じ柱列を構成する柱穴とみてよい。他の東西柱列としては、柱穴461の東2.26mに柱穴462、柱穴515の東2.30mに柱穴516、さらに東4.20mに柱穴568、東4.90mに柱穴535があり、間隔は均等ではないものの同一建物の一部とみられる。南北方向については、柱穴513の南2.44mに柱穴524、その南5.42mに柱穴568、さらに南3.50mに柱穴518がある。この柱筋は建物２の西端に一致することから、建物２とは一体的な配置であったといえる。同様に、柱穴439の南7.88mには柱穴535、柱穴459の南には柱穴542・462・516など、柱穴458では北3.30mに柱穴567、南5.08mに柱穴461、南3.10mに柱穴515などがあり、柱筋は若干ずれるものの、同一建物の柱穴とみることができる。建物としてのまとまりは明確でないものの、池300の南岸・池250の西岸には広い空間を有した建物が存在したことは確かで、９世紀後半に属すると考えられる。

建物４（図版17・85−２）　池250の西岸には礎石532・533と抜取穴531が南北に並んでおり、西岸から池側に張り出した建物が想定できた。礎石２基と抜取穴１基のそれぞれの間隔は約2.40mで、当時の８尺である。さらに、礎石・抜取穴の東1.05mには小規模な杭穴があり、池250底面も杭穴の周囲は削り残されて小高くなっていた。このことから、建物４の本体は池250の西側に存在

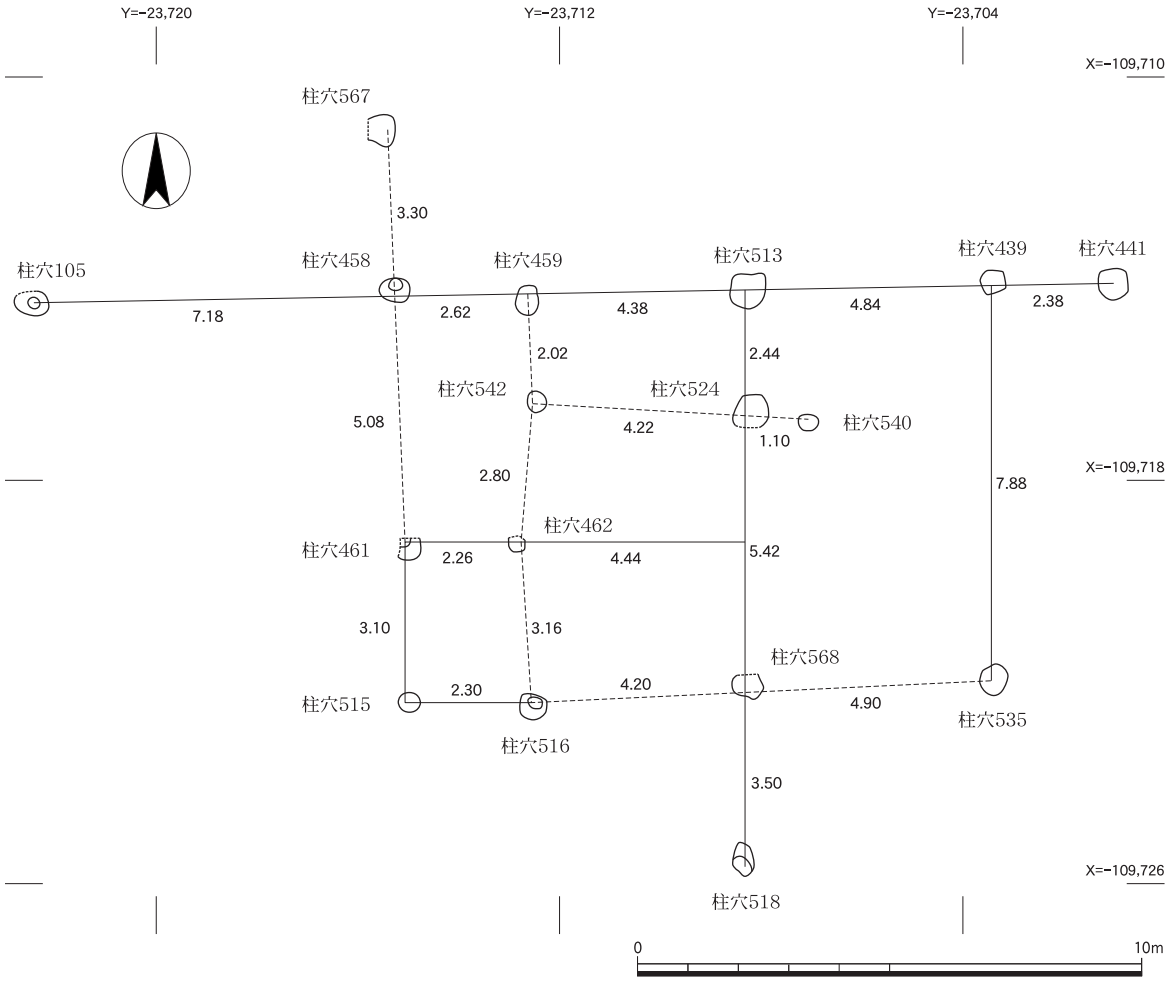


図６　建物３の平面模式図（１：150）

し、そこから池250に南北２間分が張り出し、さらに東側には杭で縁側を付設する建物が想定できる。この遺構は、「三条院鈎〔釣〕殿高坏」墨書土器に記された「釣殿」の遺構であり、建物３の東縁をなすものであろう。当然、池250とは同時併存とみてよい。

建物５（図版17）　建物１の北東部にある柱穴４基から復元したものである。東列は１基のみであるが、西列は３基から南北方向の柱筋を想定した。西側の柱間は、柱穴77－（2.28m）－ 柱穴76－（2.49m）－ 柱穴87となる。合計4.77mであり、８尺であったとみられる。また東西方向の柱穴76・75間も2.8mであることから、９尺に復元される。東西の柱間が長いことから、この部分が建物の梁に該当するとも考えられるが、全体の構造や規模は不明である。また建物２と同じく溝43をまたぐことから、互いに関連性のある配置であったと考えられる。９世紀後半に属するとみられる。

柱列６（図版17、写真11・12）　建物１の東1.3mにある。南北７間からなるが、北端の柱穴140は規模、柱間が不均等であるため、この柱列に属さない可能性がある。柱間は、柱穴111・112間のみが1.26mで、ほぼ４尺に復元できるが、前後の５間は1.6m程度で、5.3尺となって整数値は得られない。柱穴の痕跡は直径0.6m程度でそれほど大きくないが、深さは検出面から0.5m程あり、当初から掘り込みは深かったといえる。底部標高は南側が低い。また、柱穴111と柱穴112は

写真11　柱穴111礎板（柱列６、南から）

写真12　柱穴112礎板（柱列６、南から）

深さが0.8mあり、特に深く掘られていた。しかも検出状態での掘形上半部は２基が連続して掘られており、検出面から0.3m掘り下げた状態で２基に分離することを確認した。また、両穴の底には礎石が敷かれ、その上に小規模な板が礎板として敷かれていた（写真11・12)。断面観察でも柱の朽ちた痕跡がまっすぐ立ち上がる状況が観察できた。

この柱列については、建物１との間が狭いため、同時に並存したとすると屋根下に入り込んで不都合が生じる。このため、溝400や2000年度調査SB01の西を限る目隠し塀と考えるのが妥当である。

井戸470（図版23・89、図７）　池250の底部で検出したものである。井戸埋土は最上部が砂礫で覆われており、池掘削時に完全に埋められている。井戸掘形の平面形は東西、南北とも2.9mの方形を呈する。検出面から0.9m下で、厚板を円形に組んだ木枠を検出した。この木枠は、掘形中心からみると北東側に片寄って設置されており、長さ1.20mで幅0.13m前後、厚さ0.07m前後の厚板30枚を円形に巡らせ（図７)、側面の上下２箇所に太枘を枘穴に差し込んで、互いを固定するものであった。

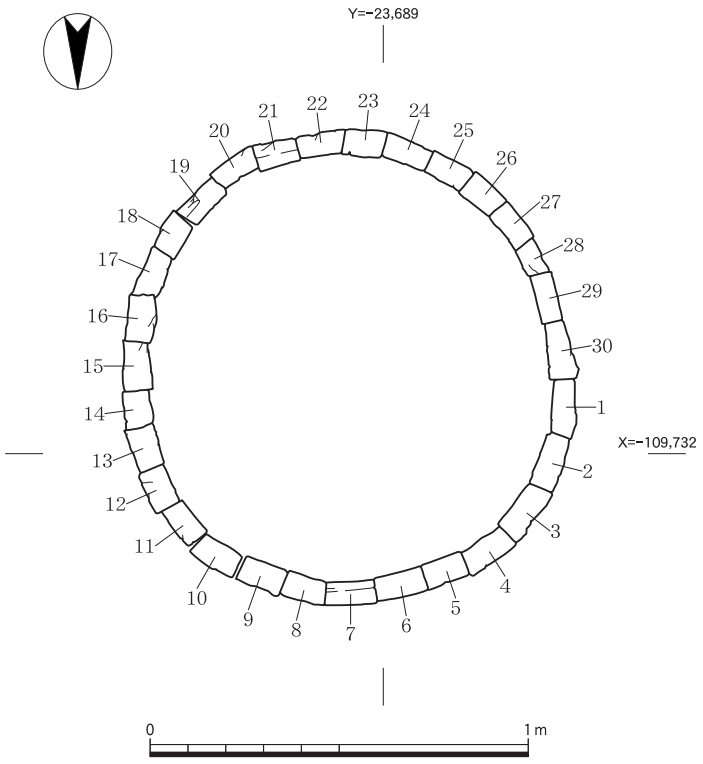


図７　井戸470の木枠番号（１：20）

木枠の内径は南北1.15m、東西1.05mで、南北方向がやや長い。木枠の縦板は垂直に立てられており、本来はさらにもう１段上に積まれていたとみられる。井戸枠内から太枘が多数出土したのは、そのことを示すものであろう。また、縦板の外側にも幅0.3mで厚さ0.02m程度の薄い縦板が数枚当てられ

ていたが、これらは全周していなかった。木枠内から平安時代初期の遺物が多く出土した（図版33・34・60～68など）。また井戸掘形の四周の壁面で姶良Tn火山灰層の堆積（標高m31.2付近で厚さ約0.2m）を確認した。

池250（巻頭図版２・３、図版18～21・82～85、図８、写真13）　３区の中央部東寄りで検出した。外周は東西約18m、南北約24mあり、ほぼ長方形を呈する。特に東岸と南岸は直線的に検出された。南岸には池の中心に向かう土手状の高まりがあり（写真13）、先端には低い中島が形成される。この中島は人為的な盛土によるものではなく、地山の砂礫層が掘り残されたものである。また、中島に至る土手状の高まりは、南岸から中島に向けて徐々に高さを減じており、池の水量を観察するために掘り残された可能性も考えられる。池底の地質は、中央部が砂礫質、東西両端が微砂～シルト質で、それらがほぼ南北方向に帯状に分布していたが、砂礫質は硬いためあまり掘削されていない。このことも中島が形成された原因としてあげられる。

この池250には溝43が排水溝として取り付く。溝43の底部は標高33.1mであるが、この高さは中島や建物４の礎石の上面とほぼ同じである。池の最深部は標高32.5m程度であるため、池下半部の水は常に滞水していたことになる。また池250の東には湿地状堆積（「整地層475」）があるが、池はこの凹部を利用せず、新たに掘削している。

次に池250の堆積層序について解説する（図版20・21）。池の最も深い部分は検出面から0.9mある。上から0.4mまでを第１層とした。人為的に整地された層で、上下二層に分層できた（図版20・21では「Ⅰ」と表記）。その下の第２層（同じく「Ⅱ」と表記）は木質遺物を多く含んだシルト層で、厚さ0.3m程あり、池の全域に分布する。木質遺物は池の周囲から流れ込んだとみられ、池が放置状態であった時期に堆積した層と判断できた。木質遺物の多くは北西岸で出土したが、同じ西岸でも南半部は極めて少なく、南岸ではほとんどみられなかった。また東岸においても木質遺物が集積する箇所がみられた。第３層（同じく「Ⅲ」と表記）は池底部に堆積したシルト層である。厚さ0.25m程あり、池底部のみに水平に堆積する。第１層には瓦や礫、後世の遺物が含まれていたが、第２層と第３層は９世紀後半代の遺物に限定でき、特に図８に示す北西岸での出土状態は一括性が高いと判断される。このことから、池の掘削は９世紀中頃を遡らず、その後短期間に埋没したものと想定できる。

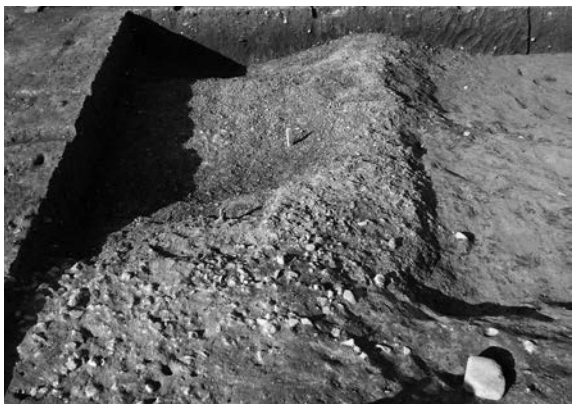


写真13　池250南岸の土手状の高まり（南から）

なお、池内の堆積層については、特に第１層と第２層の層界が波打つ箇所があり、これらは後世の地震による攪拌とみられた。付章１自然科学分析では、ここでいう第１層を１層、第２層を２層と３層上半、第３層を３層下半と４層とするが、いずれの層も下位堆積物が流線に沿って引きずり上げられており、地震による揺れが原因であったとの見解が示されている。実際に池250では新しい時期の遺物が下の層から出土

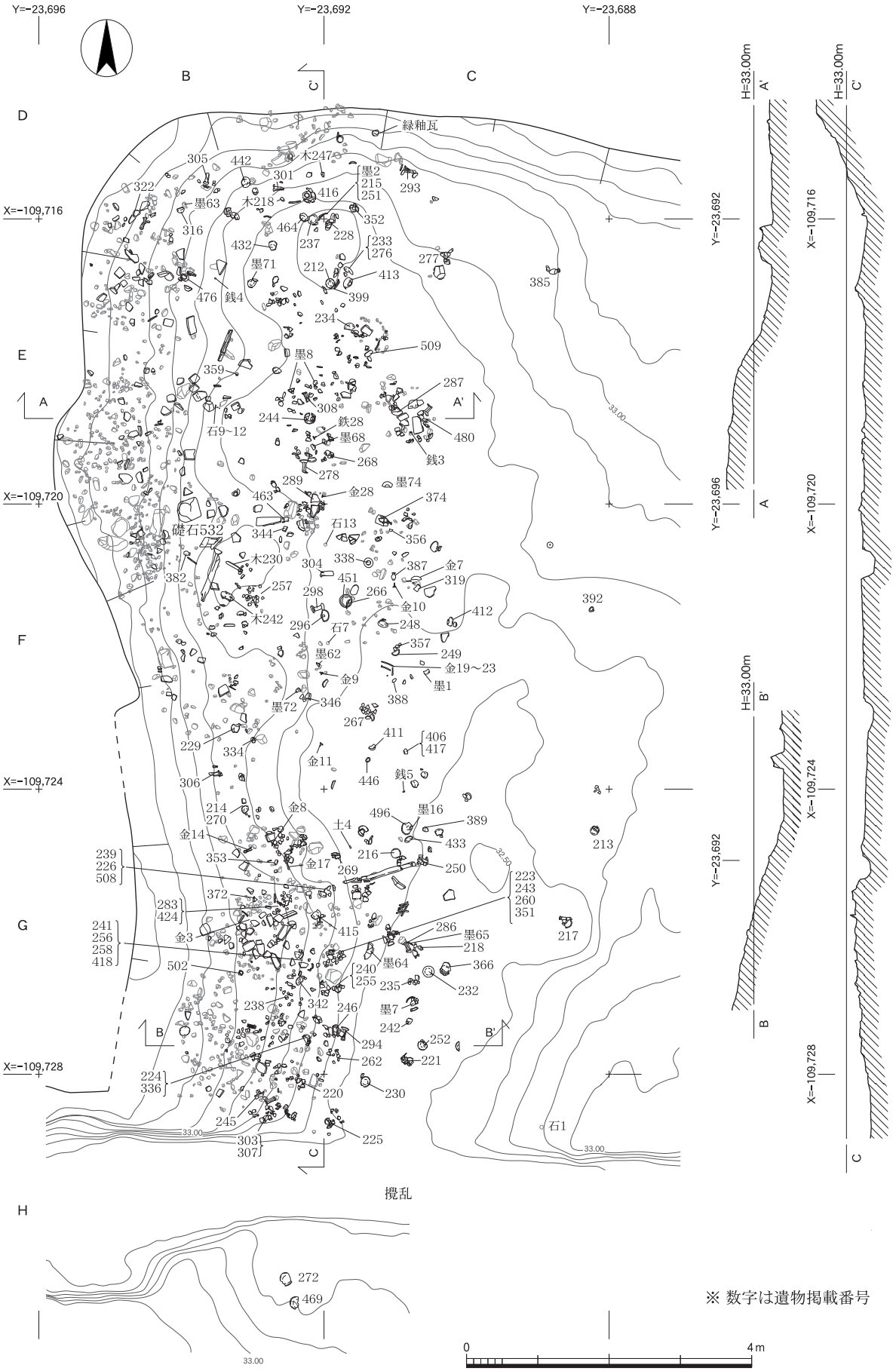


図８　池250西肩の遺物出土状況（１：80）

する現象も確認され、地震による影響は確実にあったと判断される。しかし、北西岸を埋めるように出土した遺物群は一括性が高いと判断できる。池内からは平安時代前期の土器類、瓦類を始めとする多くの遺物が出土した（図版39～48・72～76など）。

池300（図版22・86-１・86-２）　この池300と後述する池370は、それぞれ池250の北西部と北東部にあり、ともに三条坊門小路南築地想定位置の南約４ｍに池の北肩が揃うように掘られている。池300は、図版22に示した断面図作成箇所では東西約20ｍで南北5.3m程あるが、池岸は明確でなく、緩やかに傾斜して池底に達する。検出面からの深さは0.3m程で、底部にはシルトが堆積する。またこの池300は、検出状態では池250と連続しないが、本来の池岸はさらに高かったとみられるため、実際には池300に溜まった水は池250に流出していたと考えられる。ただし池300の出土遺物は９世紀初頭に属するものが多数を占めるため、池250より早く埋まったことは確実である。平安時代初め頃の遺物が出土した（図版37・38・71）。

池370（図版22・86-３・86-４）　池250の北東部にある。池300と同様、検出状態では池250とは連続しないが、本来は池250に水が流出していたとみられる。池の規模は、東西７ｍ以上、南北4.5ｍで、東西に細長く、東端は調査区外に延びる。ただし東側へは約５ｍで西坊城小路の西築地想定線に当たるため、池300ほど細長い池ではなかったことは確かである。堆積層の底部に堆積した灰黄色粘土質シルト（３）は上方に引っ張られたような形状を呈しており、付章１自然科学分析では地震による影響で生じたとしている。平安時代初め頃の遺物が出土した（図版36・72）。

溝43（図版16・87・91-２、図９）　池250の南西部に取り付く。池250の水を排水するために掘られた溝である。長さ26ｍにわたり検出した。西端は調査区外に延長する。本調査区の南西部（図３の23～25地点）で確認されている洲浜をもつ池に接続し、「遣水」の機能をもつ。規模は、幅1.6m、深さ0.4mあり、最上部の暗褐色粘土質シルト（１）やその下の灰黄褐色粘土質シルト（３）は人為的に整地された層とみられる。その間の灰色粘土質シルト（２）は鉄の斑紋を多く含み、灰色粘土質シルト（４）と灰黄褐色粘土質シルト（５）は地山の粘土を多く含む。溝底の標高は33.1ｍでほぼ平坦であった。この値は池250の最深部より約0.6m高く、池250の水を完全に排水するためには掘られていない。また池250との接続部分は溝底が若干高くなっており、このことも池250の水を止めるための工夫であったとみられる。平安時代前期の遺物が出土した（図版38）。

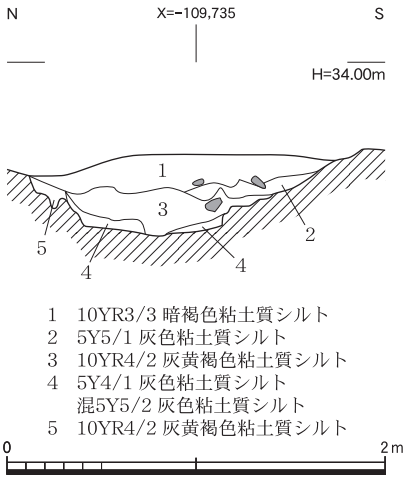
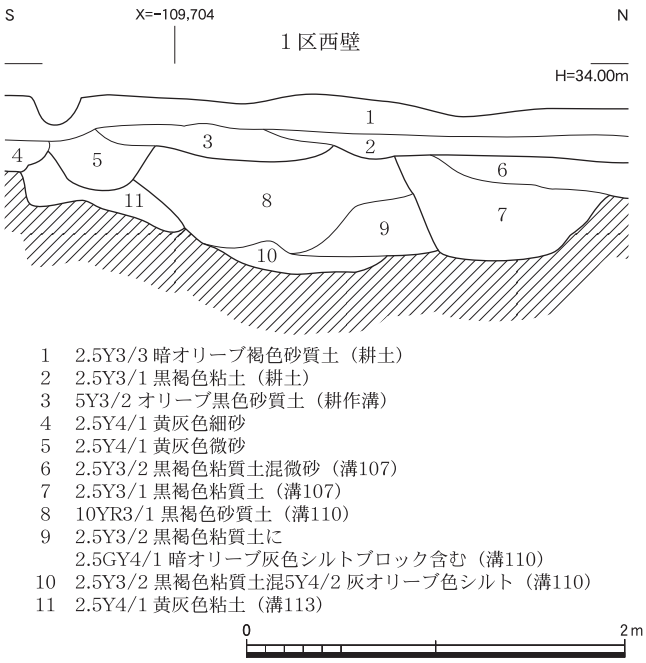


図９　溝43断面図（１：40）

溝110（図版90-３・91-３、図10）　三条坊門小路南側溝と考えられる東西溝である。平安時代後期に属し、北半は江戸時代前期に属する溝107と重複する。図10は１区西壁での溝110該当部断面図である。暗オリーブ褐色砂質土（１）～オリーブ黒色砂質土（３）までは耕作に伴う層であり、これより下の北半には溝107埋土である黒褐色粘質土（７）が堆積する。この層は、地山の粘土や礫を

多く含み、締まりが弱い。これに対して溝110埋土である黒褐色粘質土（９）と黒褐色粘質土（10）は、地山の灰色シルトブロックが多く混在し、よく締まっている。また、黄灰色粘土（11）は後述する溝113埋土で、平安時代前期の三条坊門小路南側溝に該当すると考えられる。図版91-３で写真を示した箇所は、Y=-23,687付近の断面であり、溝幅約２ｍ、深さは0.５ｍある。大半は溝107埋土であり、溝110埋土は南肩から0.4m程残存する程度であった。溝の埋土は、両方ともシルトが主体で礫を含んでおり、溝107埋土と溝110埋土の違いは、西端ほど明瞭には識別できなかった。溝107・110から出土した土器類は図版38に、木製品は図版77に掲載している。



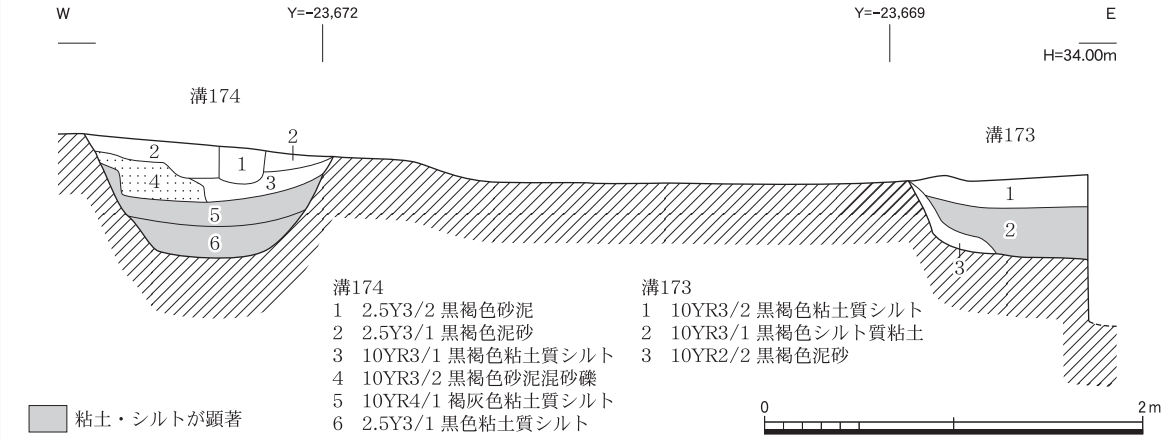
1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（耕土）
2　2.5Y3/1 黒褐色粘土（耕土）
3　5Y3/2 オリーブ黒色砂質土（耕作溝）
4　2.5Y4/1 黄灰色細砂
5　2.5Y4/1 黄灰色微砂
6　2.5Y3/2 黒褐色粘質土混微砂（溝107）
7　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（溝107）
8　10YR3/1 黒褐色砂質土（溝110）
9　2.5Y3/2 黒褐色粘質土に
　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルトブロック含む（溝110）
10　2.5Y3/2 黒褐色粘質土混5Y4/2 灰オリーブ色シルト（溝110）
11　2.5Y4/1 黄灰色粘土（溝113）

図10　溝107・110・113断面図（１：40）

溝113（図10）　三条坊門小路の南側溝に該当するが、同じ位置には平安時代後期の溝110が掘られたため、南肩の一部が残存する程度であった。この溝の埋土は黄灰色粘土（図10の11）であった。平安時代前期の遺物が少量出土した。

溝114（図版80-２、図４）　三条坊門小路の北側溝に該当する。幅は2.5mあるが、深さは0.3ｍと非常に浅い。この溝の断面図は図４の断面５で図示している。平安時代中期の遺物が出土した（図版38・77）。

溝119　三条坊門小路北築地想定線の北側に掘られており、七町の内溝に該当する。溝幅約1.3ｍで、深さは検出面から0.2mある。平安時代初期の土器（図版35）と木材片が多く出土した。木材片の大部分は削り屑であったが、木製品も含まれていた（図版69）。



溝174
1　2.5Y3/2 黒褐色砂泥
2　2.5Y3/1 黒褐色泥砂
3　10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
4　10YR3/2 黒褐色砂泥混砂礫
5　10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
6　2.5Y3/1 黒色粘土質シルト

溝173
1　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
2　10YR3/1 黒褐色シルト質粘土
3　10YR2/2 黒褐色泥砂

図11　溝173・174断面図（１：40）

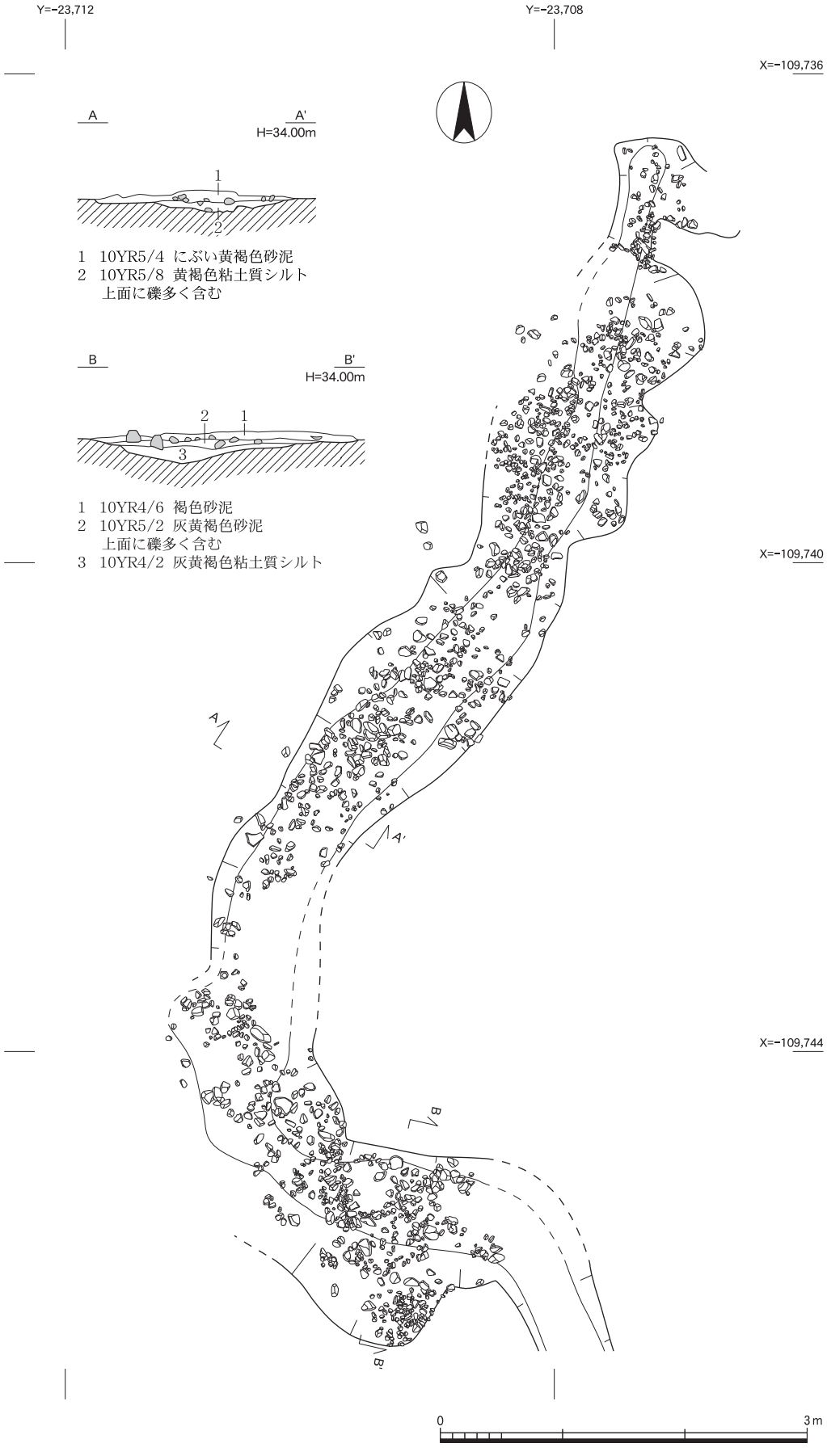


図12　溝400実測図（１：50）

溝173（図版90-１・90-２・91-１、図11）　西坊城小路の西側溝に該当するが、東半は南北方向に掘られた現代攪乱によって完全に破壊されていた。断面図作成箇所での規模は、幅0.95m以上で、深さ0.4mある。埋土は３層に分層できた。黒褐色粘土質シルト（１）は人為的に埋めた層であるが、黒褐色シルト質粘土（２）は葉理（ラミナ）がみられ、溝内には水流があったことがわかる。黒褐色泥砂（３）には礫が混じる。また、この溝の断面は図４の断面１でも図示している。平安時代初め頃の遺物が出土した（図版38）。

溝400（巻頭図版４-１、図版88-１、図12）　建物２の西側には幅約１mの範囲に小礫を敷いた遺構が残存しており、蛇行する溝の底部が残存したものと推定できた。幅1.3〜1.7mで深さ0.2mあり、小礫は底からやや浮いた状態で敷かれていた。用いられた礫種は、砂岩、チャートが主で、泥岩と石英斑岩が少量含まれる。磨滅の度合いは、亜円礫から亜角礫に分類され、河原で採集された自然礫が用いられたといえる。人頭大の大きな礫は少なく、拳大を中心としてそれよりも小型の礫が多い。小型の礫については、大きさが均質であることや割れ口が新鮮であることから、大きさを揃えるために破砕した可能性がある。この溝は、2000年度調査SB02の北西隅柱（柱穴543）と重複するが、柱穴位置には礫は検出されなかった。柱穴が掘り込まれたためとみられ、建物より古い遺構と判断できる。小規模な遺構であるが、蛇行するその形状から庭園施設の一部であったとみられる。平安時代初め頃の遺物が出土した（図版34）。

湿地状堆積（池117）（図版81）　調査区北半の七町で検出した湿地状の遺構である。東壁付近（２区）では人為的に礫を敷いて洲浜を形成した箇所もみられた。北端がもっとも深く、検出面から0.4mある。調査地の北側で1997年度に実施した調査（図３の９・10地点）においても同様の湿地状堆積を検出しているため、古い谷状地形にシルトが堆積したものが遺構の前身であり、それらが平安時代初めに整地されたとみられる。東壁付近で検出した洲浜は南東から北西方向に延びるが、池そのものの形状については不明である。洲浜の範囲に景石などの施設は認められなかった。堆積層の上半部から平安時代初め頃の遺物が出土した（図版35・70・71）。付章１自然科学分析によると、下部の植物遺体を含む層の放射性炭素年代測定は縄文時代晩期末から弥生時代前期前半頃と推定している。

湿地状堆積（整地層475）　南東部で検出した湿地状堆積であり、前述した池117と同じく自然地形の凹部にシルトや木質遺物を含む層が堆積したものである。最上部は平安時代初め頃の遺物を包含する（図版36）。その下層は木質遺物を多く含み、倒壊した自然木が埋没した状況がみられた。付章１自然科学分析によると、下層から出土した木材の放射性炭素年代は縄文時代前期頃と推定している。

土坑440（図13）　池250の南西部底面で検出した土坑である。南東から北西方向に細長い長方形を呈し、長さ3.5m、幅1.5m、深さ0.5mほどある。長軸方向の断面観察によると、埋土は西下がりに埋められており、東側から土が入れられたことがわかる。北西隅では平安時代初期の完形土師器杯が底からやや浮いた位置で出土した（図版34）。この土坑と井戸470は池250底部で検出しており、所属時期も池250より確実に古い。

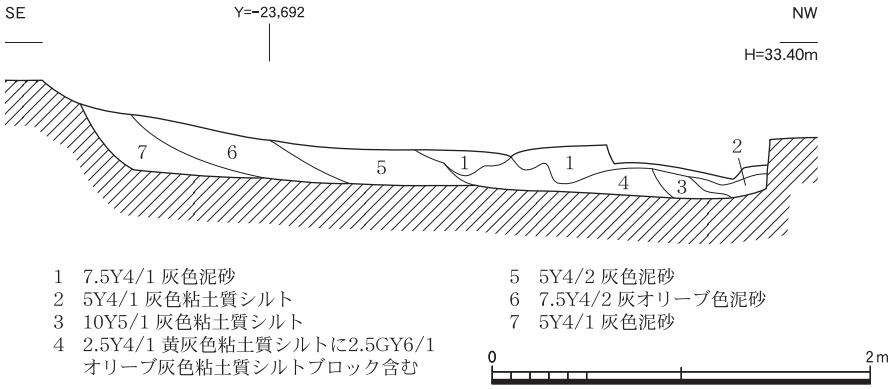


図13　土坑440断面図（１：40）

（２）江戸時代（図版８～11）

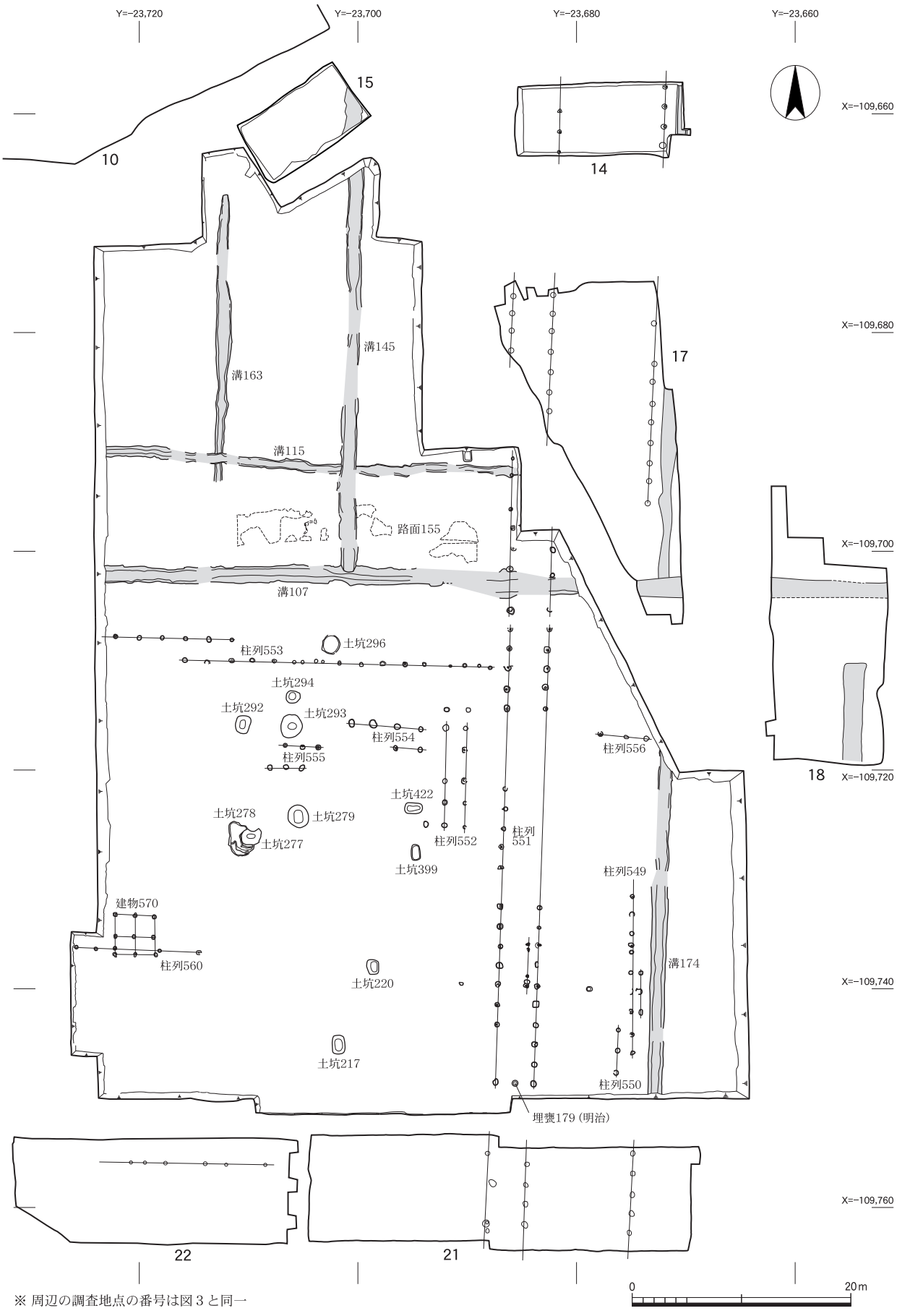
三条坊門小路路面、柱列、建物、溝、土坑などがある。

路面155（図版78-２・80-２）　三条坊門小路の路面である。西端部では路面は存在せず、石や瓦が地山の粘土層に食い込む状況がみられた（図版78-２）。路面直上が旧耕土であるため、耕作時に上からの踏み込みによって生じたとみられる。中央部から東半部にかけては路面本来の高まりが残存し、小礫や瓦片を敷いて路面を舗装した箇所が部分的に存在していたが、ここにも江戸時代以後の陶磁器類が含まれており、江戸時代以後に形成された路面と考えられた。

柱列549～556・560・建物570（図版９～11、91-5～8、図14、表５）　柱穴が東西・南北方向に並ぶ遺構である。１列だけのものと２列のものがあり、２列のものについては、梁が渡されていた可能性を考慮して「建物」とすべきであるが、梁方向の柱穴が検出できない箇所があることや桁方向があまりにも長いため、「柱列」として扱かった。ただし、南西隅で検出した建物570については、東西２間、南北２間でまとまるため、建物とした。各柱穴は、径約0.3～0.5mの円形で、底に石を据えるものや、深さ0.5mに達するものがある。柱穴間は２m前後である。出土遺物は、平安時代前期に属するものが多いため、かつては平安時代の遺構と考えられたが、江戸時代に属する陶磁器類が少量含まれることや条坊遺構を横切ることから、江戸時代以降の遺構と判断できた[4)]。

調査時の所見と図面調整によって、図14と表５に示した柱列９列と建物１棟を復元した。いずれの柱列も、若干ではあるが北で東に振れる。斜め方向の柱穴は存在しない。以下、各遺構の特徴を簡単に述べる。

柱列549は南北方向の溝174と平行するが、南壁から18mより北には延長しない。東0.8mには小規模な柱穴が平行して掘られている。柱列551は南延長が図３の21地点、北延長が図３の９・14・17地点で検出されており、南北130m以上にわたることが判明した。柱列552は南北９mほどの小規模な柱列である。柱列553は、西端では北列、中央部では南列の残りが良い。柱列551と直角に交わり、それより東には延長しない。江戸時代の三条坊門小路を意識して造られた遺構とみられる。柱列554と柱列555は２列からなる小規模な遺構である。柱列556も東壁際で検出した小規模な



※ 周辺の調査地点の番号は図３と同一

図14　江戸時代遺構配置図（１：500）

表５　柱列・建物一覧表

遺構名	方向	柱列（幅）	柱穴数（柱穴間距離）	平均柱間	現存長	方位（南北）	備　考
柱列549	南北	１列	９基（1.5～2.2m）	1.78m	14.3m	N0°13'W	南東隅。東0.9mにも柱穴が３基平行する。
柱列550	南北	１列	３基（1.8～2.0m）	1.95m	3.9m	N2°56'E	南東隅
柱列551	南北	２列（3.6m）	東列18基（1.5～2.3m） 西列25基（1.5～2.0m）	1.78m	57.0m	N2°03'E	東半部、池250上部、北に延長する。
柱列552	南北	２列（1.8m）	東列５基（2.1～2.7m） 西列４基（2.1m）	2.10m・2.79m	9.1m	N0°25'E	東半部、池250上部
柱列553	東西	２列（1.9m）	北列６基（2.1m） 南列18基（1.0～2.2m）	1.90m	34.3m	N1°26'E	中央部、池300上部
柱列554	東西	２列（1.9m）	北列４基（1.9～2.2m） 南列２基（2.2m）	2.10m	6.3m	N5°26'E	中央部、池250上部
柱列555	東西	２列（2.0m）	北列３基（1.4～1.6m） 南列３基（1.4m）	1.44m	4.32m	N3°48'E	中央部
柱列556	東西	１列	３基（1.8～2.3m）	2.09m	4.18m	N6°06'E	東端中央部
柱列560	東西	１列	５基（1.7m）	1.88m	11.25m	N2°33'E	南西部
建物570		東西２間 南北２間	東西３基（1.8～1.9m） 南北３基（1.6～2.0m）	東西1.8m 南北1.8m	東西3.7m 南北3.6m	N0°46'E	南西部

遺構である。柱列560は建物570と重複し、平安時代前期の建物１の掘形を掘り込む。建物570は東西２間、南北２間の総柱建物に復元できる。

溝107（図版90-３・91-３、図10）　溝110とともに三条坊門小路南側溝の位置に掘られた東西溝である。溝110は平安時代後期に属し、これが埋まった後に北側に溝107が掘り直された。埋土は黒褐色粘質土（７）で地山の粘土や礫を多く含み、締まりが弱い。江戸時代前期の遺物が出土した（図版38・77）

溝115　三条坊門小路北築地想定位置の約２m北側にあり、七町内溝の位置にあるが、方位は東で南に振れており、耕作に伴う水路とみられる。埋土には粗い砂が充満しており、水量があったことが想定できる。

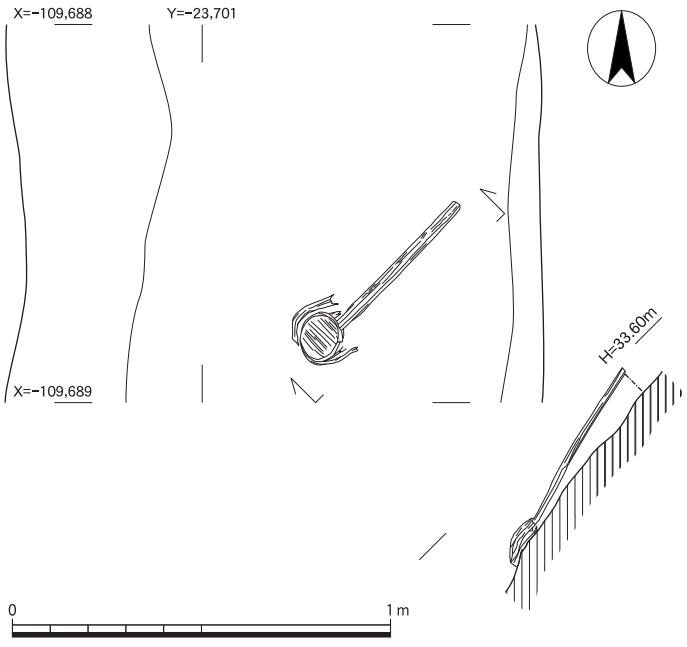


図15　溝145の柄杓出土状況（１：20）

溝145（図15、写真14）　２区中央を南北に貫く溝である。長さ38mにわたり検出しており、南端は路面155を掘り込み、東西方向の溝107と直角に合流する。溝の断面図は、図５の断面11に掲載しており、幅1.4mで深さ0.3mある。底部には褐灰色粘質土（６）が堆積する。溝の内部から柄杓が出土した。出土土器は図版38に、木製品は図版

77に掲載した。

写真14　柄杓の出土状況（溝145、北西から）

溝174（図版91-４、図11）　３区東端で検出した南北溝で、平安時代初め頃の溝173の西約３ｍにある。江戸時代に属するが、位置的には右京三条一坊六町側の東築地内溝に該当する。幅1.4ｍで深さ0.6ｍある。溝内は６層に分層でき、特に西肩付近には黒褐色砂泥混砂礫（４）が大量に入れられていた。黒褐色砂泥（１）からこの黒褐色砂泥混砂礫（４）までは堅く締まることから、人為的に整地された層と判断できる。

土坑217（図16）　３区南端の中央部で検出した。南北に長い楕円形を呈し、長さ1.5m、幅1.1ｍ、深さは0.7ｍある。にぶい黄褐色砂泥（１）は土坑の最上部を整地した際の土層である。その下の灰黄褐色砂泥（２）はシルトを多く含み、底部付近の灰黄褐色砂泥混礫（３）と、にぶい黄褐色砂泥混礫（４）は礫を多く含む層であった。

土坑220（図16）　土坑217の北北東約７ｍで検出した。平面形はほぼ方形を呈する。南北1.1m、東西1.0m、深さ0.5ｍある。埋土は上部が灰黄褐色砂泥（１）、底部付近は黒褐色粘土質シルト（３）で、中間の黄灰色粘土質シルト（２）は、（１）と（３）の両方の特徴を有していた。

土坑279（図16）　３区中央部の南西寄りで検出した。平面形は円形を呈し、南北2.0m、深さ0.7ｍある。埋土は、最上部が灰黄褐色砂泥（１）で厚さ0.3ｍあり、それ下はシルトを中心とした層がレンズ状に堆積していた。

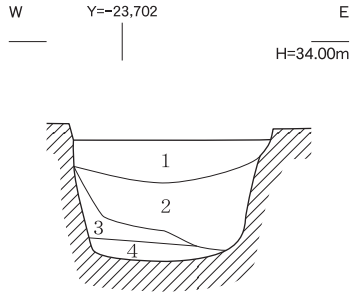
土坑293（図16）　土坑279の北肩から北に約6.3ｍの位置に掘られた円形の土坑である。南北2.1m、深さ0.6ｍある。最上部の黄褐色泥砂混礫（１）は、地山の砂礫層が多く入る。埋め戻しの際に周囲の土が入れられたとみられる。中位に堆積した褐灰色粘土質シルト（３）はシルトとしての性格が強いが、この層も埋め戻し時に入れられた層とみられる。この土坑の周辺には、土坑292、土坑294、土坑296など、同様の規模、形状を有する土坑が点在している。

土坑399（図16）　３区中央部で検出した南北に細長い土坑である。長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.6ｍある。埋土最上部の灰黄褐色砂泥（１）と南肩部に堆積した灰黄褐色粘土質シルト（２）は、旧耕土に類似する。その下の灰黄褐色粘土質シルト混砂礫（３）と黄灰色粘土質シルト（４）は、シルト質に礫が多く含まれていた。

土坑422（図16）　土坑399の北肩から約３ｍ北で検出した東西に細長い土坑である。長さ1.55ｍ、幅約１ｍ、深さ0.4ｍある。底部に堆積した黄灰色粘土質シルト（３）と黒褐色粘土質シルト（４）は、滞水状態で堆積したシルトとみられる。

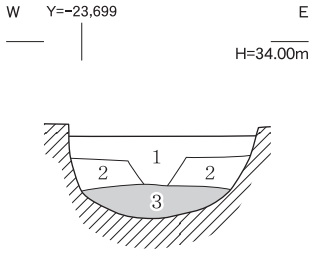
土坑277・278　３区南西部で検出した不定形を呈する土坑である。土坑277は樹木の根の部分であり、その周囲に掘られた土坑278は、底部に同心円状の溝がめぐることから、根回しを実施した際の掘込み穴とみられる。

土坑217



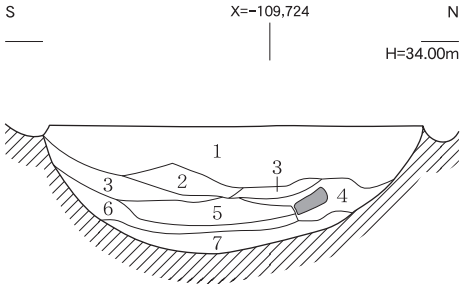
1　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
2　2.5Y4/2 灰黄褐色砂泥
3　10YR4/2 灰黄褐色砂泥混礫
4　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥混礫

土坑220



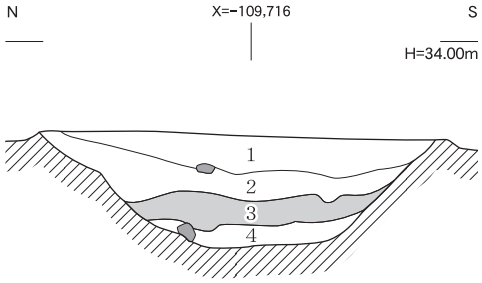
1　2.5Y4/2 灰黄褐色砂泥
2　2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト
3　2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト

土坑279



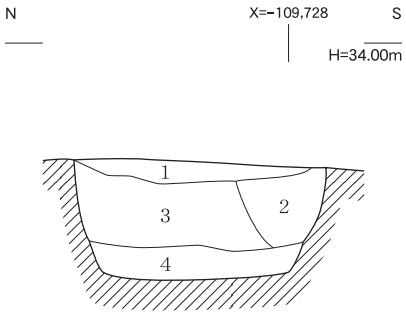
1　10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
3　2.5Y3/2 黒褐色砂泥
4　2.5Y3/2 黒褐色砂泥混2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト
5　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥混礫
6　2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト
7　5Y4/1 灰色粘土質シルト

土坑293



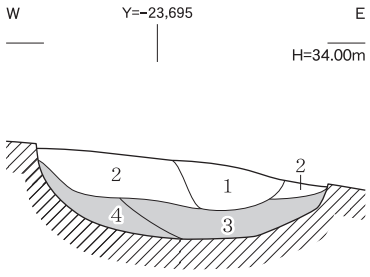
1　2.5Y5/3 黄褐色泥砂混礫
2　10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト
3　10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
4　10Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト混砂礫

土坑399



1　10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
3　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト混砂礫
4　2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト

土坑422



1　2.5Y4/1 黄灰色砂泥
2　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
3　2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト
4　2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト

粘土・シルトが顕著

0　2m

図16　土坑断面図（１：40）

細溝群　耕作に伴うもので、調査区全域で検出している。東西方向の溝は小規模で数が多く、南北方向の溝は大きいものが多いことが指摘できる。規模が大きい溝は、土地区画に関係する遺構であろう。

なお、明治時代以後の遺構として、南端で埋甕群を検出している。これらは便所の遺構であり、等間隔で配置されることから、長屋に伴う遺構と考えられる。その中の埋甕179としたものから「明治十年　二銭銅貨」が出土している。

註

1）「柱痕跡」あるいは「柱当たり」として報告されることが多いが、その場合は柱材が残存・腐朽して周囲の土に影響を及ぼしたことになる。この建物を含めた多くの場合、柱材は抜き取られており、明らかに「抜取穴」とみるのが妥当である。

2）西庇列については、柱穴566を検出しただけで他の柱穴は検出できていない。柱穴566には焼土が多く含まれていた。

3）建物内を南西から北東方向に通過する場合、柱が存在しない方が好都合とみられる。また溝43の幅がこの部分で狭いことも関連するものであろう。

4）これらの柱列については、周辺の調査で検出されており、柵、建物に復元されている（下記報告）。所属時期についても平安時代中期に属すると考えられてきたが、今回の成果からは江戸時代以後の所属と判断できた。このことは周辺で検出されている遺構にも該当できると考えられる。
布川豊治『平安京右京三条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年　P７

第４章　遺　　物

縄文時代、弥生時代、平安時代、江戸時代、明治時代の遺物が出土している。出土量が最も多いのは平安時代前期に属する遺物で、土器・陶磁器類、瓦類、銭貨、金属製品、石製品、土製品、木簡、木製品、骨角製品などがある。

土器・陶磁器類については、平安時代前期に属する井戸470、溝400、土坑440、溝119、池117、池370、池300、溝173、溝43、池250、平安時代中期に属する溝114、平安時代後期に属する溝110、江戸時代に属する溝107、溝145などから出土したものを、遺構ごとにまとめて解説した。瓦類については、六町域から出土した軒瓦、三条坊門小路・西坊城小路に関連する遺構から出土した軒瓦、七町域から出土した軒瓦、井戸470・池250から出土した丸瓦・平瓦の特徴について解説した。銭貨、金属製品、石製品、土製品、骨・貝製品については、種類ごとに解説した。木製品については、井戸470、溝119、池117、池300、池370、池250、溝114、溝110、溝107、溝145、建物柱穴から出土したものを、遺構ごとにまとめて解説した。

また、今回は文字資料が大量に出土したため、墨書土器については、池250とその他遺構から出土したものも一括して、墨書土器の項目を設け、そこで解説した。同様に木簡・墨書をもつ木製品についても、各遺構から出土したものを、木簡の項目の中で解説した。

表６　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
縄文時代	石器、剥片		石器１点、剥片２点		
弥生時代	弥生土器		弥生土器５点		
平安時代前期	墨書土器、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器、二彩陶器、製塩土器、瓦、銭貨、金属製品、石製品、土製品、硯、木簡、木製品、鹿角製品		墨書土器83点、土師器202点、黒色土器38点、須恵器104点、緑釉陶器80点、白色土器13点、灰釉陶器32点、輸入陶磁器17点、二彩陶器１点、製塩土器１点、瓦81点、銭貨９点、金属製品28点、石製品27点、土製品18点、硯12点、木簡19点、木製品244点、鹿角製品１点		
平安時代中期・後期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、木製品		土師器９点、須恵器５点、緑釉陶器１点、灰釉陶器１点、陶器１点、木製品６点		
江戸時代以降	土師器、焼締陶器、施釉陶器、国産磁器、銭貨、金属製品、石製品、木製品		土師器２点、焼締陶器２点、施釉陶器１点、国産磁器３点、銭貨14点、金属製品４点、石製品７点、木製品15点		
合　計		435箱	1089点（67箱）	40箱	328箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より14箱多くなっている。

１．墨書土器（巻頭図版５～15、図版24～32・92～99、図17、表７、観察表１）

池250を中心とした遺構から墨書土器が出土している。全出土点数は84点あり、一件の調査としては極めて多い点数である。内訳は、池250から出土したものが71点で、全体の84.5％を占め、圧倒的に多い。その他の遺構は、池117が２点（2.4％）、溝110が１点（1.2％）、溝145が１点（1.2％）、井戸470が４点（4.7％）、整地層475が１点（1.2％）、池370が２点（2.4％）、池300が２点（2.4％）である。

池250から出土した71点の器種の内訳は、土師器皿・杯・高杯が60点で84.5％を占め、圧倒的に多い。他の器種では黒色土器が２点（2.8％）、須恵器が２点（2.8％）、緑釉陶器が１点（1.4％）、灰釉陶器が６点（8.5％）である（表７）。灰釉陶器がやや多いが、これは灰釉陶器の素地が白っぽく、底部内外面が無釉であるためとみられる。

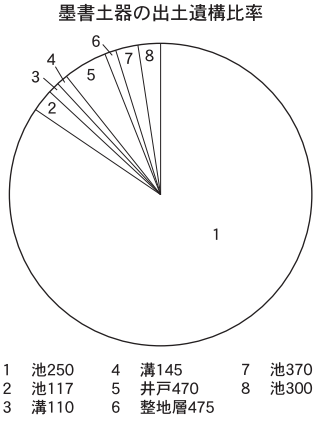
図17では、池250から出土した墨書土器の出土位置を示した。池の北西部分に多いことは明白で、特に建物４（釣殿）の周囲に集中することが注意される。このことは、同建物、あるいは池の西岸で使われた後、池の西岸に廃棄されたことを想定させる。

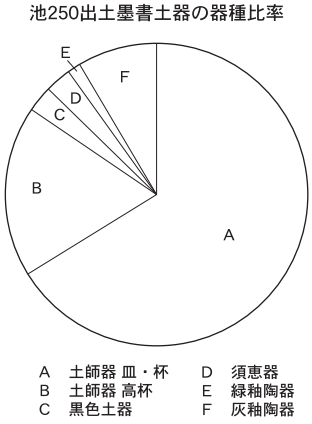
報告するに当たっては、まず土器本来の形状を実測図で示し、そこに赤外線写真を嵌め込んで文字・墨痕をそのまま表現することにした（図版24～32）。掲載は、池250から出土した土師器杯と皿（墨１～53）、土師器高杯（墨55～67）、黒色土器（墨68・69）、須恵器（墨70・71）、緑釉陶器（墨72）、灰釉陶器（墨73～77）の順序とした。次に、池117（墨78・79）、溝110（墨80）、溝145（墨81）、井戸470（墨82～85）、整地層475（墨86）、池370（墨87・88）、池300（墨89・90）から出土したものを掲載した。なお、墨22・25・32・45・48・49・54は他と接合したため、欠番とした。また池250から出土した灰釉陶器493（図版48）の体部外面下半にも「上」の墨書が確認できる。

以下、墨１から順に解説する。なお、文中の左・右、上・下、向きは写真（巻頭図版５～15、図版92～98）での位置を示し、写真のない場合に限り「図の」と示すことにする。

表７　墨書土器の構成

出土遺構	点数	比率	器　種	点数	比率
池250	71	84.5	土師器 皿・杯	47	66.2
			土師器 高杯	13	18.3
			黒色土器	2	2.8
			須恵器	2	2.8
			緑釉陶器	1	1.4
			灰釉陶器	6	8.5
			小　計	71	100.0
池117	2	2.4			
溝110	1	1.2			
溝145	1	1.2			
井戸470	4	4.7			
整地層475	1	1.2			
池370	2	2.4			
池300	2	2.4			
総数	84	100.0			





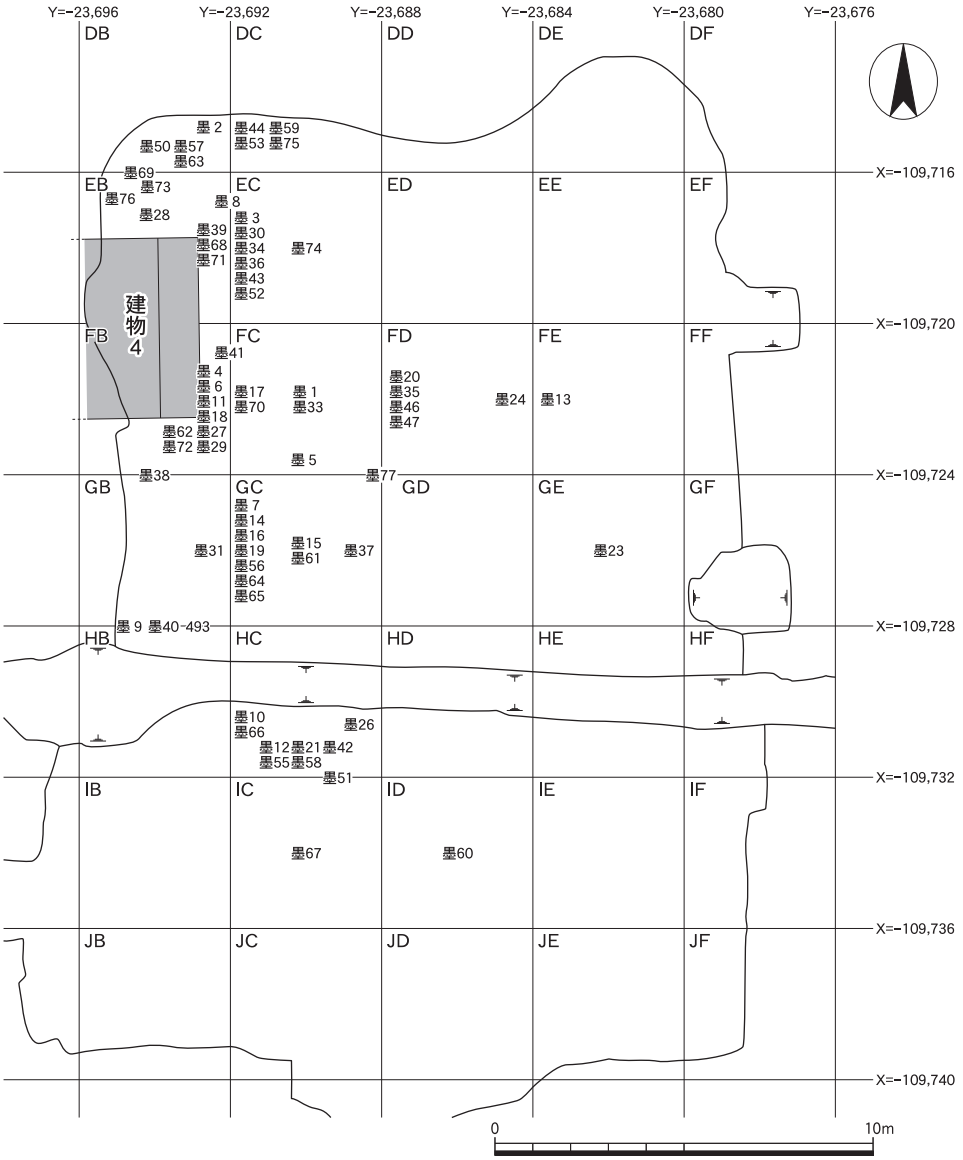


図17　池250出土墨書土器の位置（１：200）

墨１　池250出土、土師器の杯の体部・底部の外面と内面に墨書。外面は左下片に「今」「苑」、右下片に「筧」「處」「坏」、右上片に「月」が見える。各々向きが異なるが、「處」と「坏」は同じ向きである。右下片と右上片には他の文字の一部も見える。

「苑」や「坏」（杯）「月」の組み合わせは「宴」を想像させ、その詩文の一部の可能性がある。参考までに、奈良・平安時代の漢詩文集では、「月」が「暦法の月」であるが、『凌雲集』「御製廿二首」「九月九日於二神泉苑一宴二群臣一、各賦二一物一、得二秋菊一」に「九月九日」「神泉苑」「摘入二金杯一」、「左兵衛督従四位下兼行但馬守良岑朝臣安世二首」「九月九日侍二宴神泉苑一、各賦二一物一、得二秋蓮一、応製」に「九月九日」「神泉苑」「神泉御苑」「露泛二穿杯一」「九月裳」が見える。なお、「筧」字は漢詩文集に認められない。

内面は、右上片（外面の右下片）に２字、右下片（外面の右上片）に１字の墨書が見える。

墨２　池250出土、土師器の杯の底部内面の中央などに墨書があるが、薄く読めない。釈文には

読める文字を挙げた。外面は、Ｚに見える形など墨書が多数あるが、文字は読みとれない。

墨３　池250出土、土師器の杯の底部外面。右片に４行の仮名、左片に１字が見える。

墨４　池250出土、土師器の杯の体部・底部の外面。右片に２行の仮名が見える。その他、右片と左の２片に墨痕・墨書。右片と左の２片の内面にも墨痕がある。

墨５　池250出土、土師器の杯の体部外面。漢字と見られる。

墨６　池250出土、土師器の杯の体部外面。「な」とその左右に墨痕。

墨７　池250出土、土師器の杯の体部内面。上側２/３ほどに墨書があるが、薄くて読めない。写真より実物の方が文字はよく見える。釈文には読める字を挙げた。「その」以下３行は写真の上側中央、「かた」は下部のやや右側、「つ」は上部のやや左側である。

墨８　池250出土、土師器の杯の体部内面。６行の仮名が見える。

墨９　池250出土、土師器の杯の体部内面。図の右半に墨痕がある。

墨10　池250出土、土師器の杯の体部内面。図の左半に墨痕がある。

墨11　池250出土、土師器の皿の体部外面。４行の仮名。内面は３行の仮名。

墨12　池250出土、土師器の皿の体部外面。上端の中央に上端を上に「か」、ほぼ中央に「に」、下端の中央に下端を上に「か」が見える。上端の「か」と下端の「か」は向きが正反対である。また、口縁に「た」、向きはおおむね口縁に沿う。この４字はすべて向きが異なる。この他、墨痕は多数ある。内面には墨汁痕と、口縁に筆による墨痕がある。

墨13　池250出土、土師器の皿の底部内面。模様と推定される。外面にも墨痕。

墨14　池250出土、土師器の皿の底部外面。外面のほぼ全面に仮名が見える。仮名９行と、１行目の１字目「□」の右側に１行目と直角の向きに２行の小字、５行目の１字目「い」の上側に２行の小字が見える。４行目は「て」で終わり、その下側は余白、４行目と５行目との行間がやや広い。４行目で文意が途切れる可能性がある。

４行目「あま」と「て」の間は欠損するが、たとえば「り」、７行目「とお」と「はれ」の間は「も」が推定される。５行目「キ」は片仮名の「キ」を想定した。６行目と７行目の行頭の上側に「い」が見える。７行目「く」は重ね書き。「し」の右側の「ヽ」は、最初「し」のすぐ右側に小さく「ヽ」を書き、さらに小さな「ヽ」の右側まで墨抹するように見える。９行目１字目は「ま」(萬）または「れ」(列）と見られる。

６行目「ひとに」と７行目「くしとおもはれ」で、「人憎しと思はれ」と読める。「ひとにくし(人憎し)」は「人を憎らしく思う」、また「人に憎らしく思われる」(『日本国語大辞典』「ひとにくし」項)。「人にくしと思ふ人（道綱母をにくらしいと思う人）もあらんとおもへどん（も)」と見える（『蜻蛉日記』上)。また、「かたえの人、にくしと聞くらんかし（はたの女房たちはさぞ憎らしいと思って聞くことでしょうよ)」(『枕草子』二五九段)。「思はれ」は「思ふ」の未然形に自発・受身などの助動詞「る」の未然形・連用形「れ」が付く。「うとましく思われて」程度（自発・受身）の意と見られる。「にくし」は『万葉集』では強い憎悪を表さず、好まぬなどの意。否定の形が大部分で、好ましく、近寄りたい気持を表す(『時代別国語大辞典』上代編「にくし」項)。

墨書土器釈文1

（字配りを正確に示すため、疑問が残るものは[X][XY]とした）

墨2
（上部）□た
□□
（下部）[ひ]にた
か

墨3
（右片）ま□
□へに□
あく□
□
（左片）□

墨4
□[えそ]まは
ゐ

墨5
□□

墨7
その
[めせ][と]
はらに
つ
かた

墨8
[み]□□□れ[れな]
[も]かくは[の][わり]あ[れな]
□たにひ[なき]く[ゝ]
はら た ま□
[うに]

墨11
（内）も[れ][て]
□まる
□
（外）□□
□
なかつし
□ほけかて□

墨14
□[あしかゝすは]けの
もたい
かを[ひ]
あま て
[みまゐ]いくよしみあら[キ]れ□
いち すき な[て][く]ひとに
くし と[お] はれ
えす□ □えら
[まれ]

墨15
かつらきへ

墨16
□そこ
□なし[こ][と]
そまほる
□□

墨17
[南]□
□

墨21
[ひ]な

墨23
ちゐ
□

墨24
□[な]□

墨28
なて□

墨29
□□
と□

墨30
[そろ]
□□

墨36
か
□

墨37
□

墨40
□□
□

墨42
（内）□
大[身]
鴈[主]
[夫][夫]夫

墨43
□
雑離

墨52
□□

（外）□□□
夫天□
飯□

墨書土器釈文2

墨66　杯部

□□
はなわを
□
はなま
はこそ
□て□して
□
めしろ□は
へ

墨67

へ
□
けよいけにい□

墨64

三条院鈎（釣）殿高坏

墨66　脚部

（1面）□□のれ□□□
ろそそたちな□
むゐたかはり□

（3面）はちろ□　□へつ
けみくろ□

（4面）こりをろはい□
□めらけなれるは

（5面）まへ□れな□
なかつせあら□
□□り

（6面）□　□た
□ちろ□らひ□
□

（7面）□　□そゝく□
さそとこそ□

（8面）あとからとれは□
ひ□のうろ□
□

墨60　□

墨62　膳所

墨65　（1面）政所

□と□

（4面）政所

墨68　は

墨70　□

墨71　□月兵兵兵兵

墨72　四条

墨73　内

墨74　（内）庄

（外）庄

墨75　太一

墨76　近

墨77　□□

墨78　□□

墨79　専師

墨80　□

墨82　酒坏

墨83　厨

墨84　稲

墨85　万

墨86　犬

墨87　富

墨89　□

西三条第では2008年度の調査で、池１（2001年度調査ではＳＧ24、９世紀後半から10世紀）から、仮名などの墨書土器が出土する。土師器の杯98は「内面全体に仮名文字かとみられる墨書」がある（古代文化調査会『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡− 西三条第（百花亭）跡− 』2009年)。出土地点や土師器の年代など、墨14と2008年度の土師器杯98には強い相関性があると想定される。土師器杯98の解読と墨14との比較・対照は今後の課題としたい。参考のため、土師器98の写真を掲げる（付章４の写真２)。

墨15　池250出土、土師器の皿の体部外面。「かつらきへ」と見える（付章４参照)。

墨16　池250出土、土師器の皿の体部外面。４行の仮名が見える。

墨17　池250出土、土師器の杯の体部外面。

墨18　池250出土、土師器の杯の体部外面。墨痕あり。

墨19　池250出土、土師器の杯の体部外面。図の上端に墨痕。

墨20　池250出土、土師器の杯の体部内面。墨痕あり。

墨21　池250出土、土師器の杯の体部外面。中央左寄りに「な」、その右側に天地逆に１字が見える。他に墨痕あり。

墨23　池250出土、土師器の杯の体部外面。仮名２行が見える。

墨24　池250出土、土師器の皿の体部外面。仮名１行が見える。

墨26　池250出土、土師器の杯の体部外面、左半と右端に墨痕あり。

墨27　池250出土、土師器の杯の体部外面。「町□」が見える。

墨28　池250出土、土師器の杯の体部外面。仮名１行が見える。

墨29　池250出土、土師器の杯の底部外面。仮名２行が見える。

墨30　池250出土、土師器の杯の体部外面。２行の仮名が見え、向きは右下から左上に斜め。

墨31　池250出土、土師器の杯または皿の底部外面。墨痕あり。

墨33　池250出土、土師器の杯または皿の体部外面。図の右端中央に墨痕あり。

墨34　池250出土、土師器の杯または皿の底部外面。墨痕あり。

墨35　池250出土、土師器の杯または皿の底部外面。墨書あり。

墨36　池250出土、土師器の杯または皿の底部外面。２行の仮名が見え、向きは左上から右下にやや斜め。

墨37　池250出土、土師器の杯または皿の底部外面。

墨38　池250出土、土師器の杯または皿の底部外面。図の右端に墨痕。

墨39　池250出土、土師器の杯または皿の底部外面。図の中央に墨痕あり。

墨40　池250出土、土師器の杯または皿の底部外面。文字１行と下方に１字が見える。内面は習書。

墨41　池250出土、土師器の杯の体部外面。墨痕あり。内面は草木の模様または絵画様に見える。外面も同様の可能性がある。

墨42　池250出土、土師器の皿の底部外面。２行目の「夫」は最終画が上に撥ねる。内面の３行

目の「主」は１字の冠の可能性がある。４行目の１字目・２字目は外面に「夫」「天」の両方があり、「天」の可能性もある。４行目３字目の「夫」の最終画が上に撥ね、外面と同じ特徴を示す。

外面に「夫天」、内面に「夫（天）夫（天）夫」とあり、「夫」や「天」などの習書と見られる。「夫天」は類似の字の習書の可能性もあるが、漢籍の文頭に「夫天下」または「夫天」の字句がしばしば認められるのに注目される。「夫天」と「飯」または「鴈（雁）」の組み合わせはまれであるが、「夫天」と「大」の組み合わせはきわめて多い。『荀子』巻二・栄辱篇四には「夫天生二蒸民一、有レ所二以取一レ之」とあり、この文章の直前や直後に「栄辱之大分」「士大夫」が見られる。また、『文選』巻四九・干宝「晋紀総論」に「夫天下大器也、群生重畜也」とある。「夫天下」などを文頭とする文章の習書の可能性を想定しておきたい。また、呪符を想わせる印象もあり、「鴈」など「鳥」字関連の呪符には、『咒詛調法記』（元禄十二年板）の「腫物の上に書符」に、「鳥」字３字１組を４組組み合わせる呪符がある（『重宝記資料集成』十六）。しかし、墨42と類似の事例を見出していない。

墨43　池250出土、土師器の杯の体部内面。「離」の右側に墨痕があり、１字が想定される。

「雑」「離」ともにやや生硬な書風で、格式の高い書写であることを示す。「雑離」と「隹」が続き、部首分類の字書（の習書）を思わせるが、字音・字訓・字義・半切など一切なく、字書の可能性は少ない。ちなみに、『篆隷萬象名義』では、「雑」は６帖72丁裏３行、「離」は６帖71丁表６行（巻廿四「隹部」）。

「雑離」が文章の一部とすると、公文書なども想定されるが、「雑離」では通じず、典籍の可能性が考えられる。「雑」字と「離」字のつながりは『大方等大集経』『不空羂索神変真言経』『肇論疏』（釈元康撰）など、仏教経典に散見する。これらの経典は奈良時代にしばしば書写され（木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』国書刊行会、1989年）、その一部を土器に写した可能性がある。

また、唐の釈堪然（711～782）『金剛錍』に「雑離」が見える。堪然は中国天台の第六祖、天台中興の祖といわれた。『金剛錍』（『金剛錍論』）は「伝教大師将来台州録」（「僧最澄将来目録」、『平安遺文』四三一〇）に見える。

右大臣藤原良相は「もと内典（仏教の典籍）に習い、真言に精熟す」とされる（『日本三代実録』貞観九年十月十日乙亥条）。また、良相の御子常行は尊勝陀羅尼の験力により、鬼の難を遁れる（『今昔物語集』巻十四－ 四二）。西三条第から、藤原良相の仏教信仰の一面が出土したと見られる。

墨44　池250出土、土師器の皿の体部内面。中央に墨痕。

墨46　池250出土、土師器の杯の体部内面。墨痕あり。

墨47　池250出土、土師器の杯の体部内面。墨痕あり。

墨50　池250出土、土師器の杯または皿の底部内面。墨痕または汚れ。

墨51　池250出土、土師器の杯または皿の底部内面。図の左端に墨痕。

墨52　池250出土、土師器の杯または皿の底部内面。

墨53　池250出土、土師器の杯または皿の底部内面。習書。

墨55　池250出土、土師器の高杯の杯部外面。左右の両端に墨痕。

墨56　池250出土、土師器の高杯の杯部外面。図の左端に墨痕。

墨57　池250出土、土師器の高杯の杯部外面。図の下部に墨痕。

墨58　池250出土、土師器の高杯の杯部外面。墨痕あり。

墨59　池250出土、土師器の高杯の脚部外面。墨書あり、字画を読み取りにくい。

墨60　池250出土、土師器の高杯の脚部内面。仮名２行が見える。

墨61　池250出土、土師器の高杯の脚部外面。ほぼ中央に墨痕。

墨62　池250出土、土師器の高杯の脚部内面。「膳所」と見える。

膳所は「膳を調備する所」で、貴族の家政機関。墨65の政所と関連するので、墨65で合わせ論じる。

墨63　池250出土、土師器のミニチュア高杯の脚部内面。図の内側の中央右寄りに墨痕。

墨64　池250出土、土師器の高杯の杯部外面。図の右端と左端に墨痕。

内面は「三条院鈎〔釣〕殿高坏」と見える。出土地点の右京三条一坊六町が三条院であることを明示する。「三条院」は墨64の他、2001年度調査（図３の24地点）で、池SG24新（９世紀後半）から出土の題簽木簡に「齋衡四年（857）三條／院正倉帳」とある（第４章８　木簡での補木１参照）。９世紀後半に、右京三条一坊六町の邸宅は「三条院」と呼ばれた。六町の邸宅は右大臣藤原良相の「西三条」が有力と推定され（西山良平「平安京と貴族の住まいの論点」、西山良平・藤田勝也編著『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会、2012年）、藤原良相の「西京三条第」（『日本三代実録』貞観元年四月十八日癸卯条）に相当すると見られる。貞観元年（859）、皇太后藤原順子は記録上初めて西京三条第に遷御するが（『日本三代実録』貞観元年四月十八日癸卯条）、斉衡四年（天安元年）はそれ以前である。

「三条院」の下は「鈎殿」と見える。金偏の右の旁は三画目が「𠂉」で、「丶」ではない。「釣」と「鈎」は別字であるが（『篆隷萬象名義』巻十八「金部」巻廿九「勾部」、天治本『新撰字鏡』巻六「金部」）、一方、「鈎鉤」の和訓を「ツリカコ」とし、「鉤台」を「ツリトノ」とする（観智院本『類聚名義抄』僧上）。「釣」の和訓を「カキ」、「釣匙」を「カラカキ」とし（尊経閣文庫本（二巻本・三巻本）・黒川家本（三巻本）『色葉字類抄』「加雑物」）、「鈎」の和訓を「ツリ」とし、「鈎台」を「ツリトノ」とする（大東急記念文庫本（十巻本）『伊呂波字類抄』「ツ雑物」「ツ地儀」）。「釣」と「鈎鉤」は混用され、結局、「釣台」「鉤台」「鈎台」の和訓は「ツリトノ」で、「釣殿」「鈎殿」は「ツリトノ」と見られる。

平安時代初頭には中国伝来の「釣台」を踏襲し、村上天皇頃を境に釣殿と呼称されるとされてきた（太田静六『寝殿造の研究』第七章第三節「釣殿の研究」、吉川弘文館、1987年）。しかし、９世紀後半には三条院に「釣殿」が存在した。太政大臣藤原良房の左京染殿第には「釣台」や望遠亭が見られる（『日本三代実録』貞観八年閏三月丙午朔条）。

また、三条院の釣殿には高坏が常備され、高坏を使用する行事が執行された。釣殿は「寝殿造中でも最高に風情ある場所」で、釣魚や観魚、名月鑑賞、花を眺め、詩会を開き、夏の猛暑には

納涼の場であった（太田静六『寝殿造の研究』第七章第三節「釣殿の研究」前掲）。三条院釣殿の規模や構造の解明が期待される。

墨65　池250出土、土師器の高杯の脚部（図版28の実測図での１面）とその反対側（同４面）。ともに「政所」と見える。１面は墨が淡く、４面は墨が濃く鮮やかである。政所は財政や訴訟など日常的政務を処理する政庁をさす。８世紀には造東大寺司や国衙に置かれ、平安期には官司・大寺社や貴族家で整備されたとされる（『平安時代史事典』「政所」項）。膳所は「膳を調備する所」。

長岡京の時代に「工房を配下にもつ官衙」（『長岡京木簡』二）、内蔵寮（『木簡研究』二三）、平安時代初期（９世紀）には、東大寺（『平安遺文』32）、高雄山寺三綱（『平安遺文』4372）、延暦寺（『平安遺文』4452）、観世音寺（『平安遺文』154）、広隆寺（『平安遺文』168）、観心寺（『平安遺文』183）に政所が見られ、「見台政所」（福島県会津若松市矢玉遺跡、『木簡研究』二二）が認められる。貴族の家政機関では、政所が嵯峨院（『類聚三代格』貞観九年十二月二十日官符）、淳和院（『類聚三代格』貞観九年十二月二十日官符、『平安遺文』68・69、後者は菊池武雄「日本の「告書」に就いて」『東京大学史料編纂所報』13・1979年を参照）に見られる。膳所は「穢悪の事に触れ、御膳所に預かる」（『類聚三代格』延暦二十年五月十四日官符）、大嘗祭の御膳所（『弘仁式』『貞観式』中務・逸文、『政事要略』巻26新嘗祭所引）、10世紀末に賀茂別雷社の政所町と御膳所舎（『類聚符宣抄』正暦五年五月二十三日官宣旨）が認められる。史跡大覚寺御所跡から「御膳□（所カ）」が出土し、「御」すなわち嵯峨太上天皇の食膳を調える機関と推定される（『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告』1997年）。御膳所は祭事や「御」に限られる。

平安時代初期（９世紀）では、家政機関の政所は嵯峨院・淳和院だけに所見する。平安時代初期には家政機関の資料に乏しく、墨62の膳所と墨65の政所のセットは貴重な実例と言える。さらに多様な家政機関の存在が想定される。

墨66　池250出土、土師器の高杯。杯部の内面と八角形の脚部各面に細かい墨書がある。

（杯部内面）

釈文のほかに多数の文字らしき墨書がある。上端には右を行頭とするらしき１行があり、いくつかの文字には重ね書きも認められる。３行目２字目の「な」（名）は１字目「は」との間に墨痕があり、字の方向が左に傾く。４行目の「そ」は該当箇所の墨痕の左半による。６行目５字目は「は」（盤）。

（脚部各面）

脚部の各面は総じて１行目を右に詰めて書く傾向がある。各面の各行はさらに下に続く。２行書きと３行書きがあるが、３行書きの３行目は１行目・２行目に比し、行取りの幅が小さい。５面と６面の３行目は２字から３字程度で終わり、２行書きの予定がはみ出したと見られる。

１面は３行。３行目もさらに下に続く。２行目行頭は面の左右中央に位置するが、下になるに従い左に傾く。１行目と２行目の間隔が開き、２行目と３行目の間が狭まる。他の面より多くの文字を書く必要があったと見られる。１面は２面の右の面である。２行目２字目は「そ」（楚）。

２面は２行。墨痕が薄く、読めない。上端は１行目・２行目とも墨痕がなく、空白と見られる。

この面は他の面と異なる意義が想定される。１行目の１字目の墨書だけが鮮明である。脚部全体の冒頭などの可能性がある。杯部内面の文字列は脚部１面・２面を行頭とするのが注目される(図版29参照)。

３面は２行。

４面は２行。１行５字目は「は」(婆)と見られるが、「ひか」の可能性もある。２行６字目は「は」(波)または「る」(流)。

５面。右２行は上から下まで続くが、右２行の左のわずかな余白の上部に３行目があり、３文字程度認められる。文がここで途切れる可能性がある。２行目は「なかつせあら」と読め、「なかつせ」は「瀬戸の中で、潮流が比較的ゆるやかな中ほどの瀬。また、中ほどにある川の瀬」(『日本国語大辞典』「なかつ瀬」項)。記紀などのアマテラス・ツクヨミ・スサノオの誕生神話にしばしば見える。イザナキは黄泉国から脱出し、禊をしてアマテラス・ツクヨミ・スサノオを誕生させる。『古事記』では、「初めて中つ瀬に堕ちかづきて滌きたまふ時(初於二中瀬一堕迦豆伎而滌時)」(上巻)、『日本書紀』では「便ち中瀬(なかつせ)に濯ぎたまふ(便濯二之於中瀬一也)」(神代上[第五段]一書第六)。また、「初め中瀬に潜滌(すす)きたまふ時(而初於二中瀬一潜滌之時)」(『先代旧事本紀』巻一「陰陽本紀」)、「便ち、是の中瀬に濯きたまふ(便、濯二之於是中瀬一也)」(『住吉大社神代記』)、「故、中湍(なかつせ)に堕ち潜く時に(故、中湍堕潜之時)」(『新撰亀相記』)。しかし、中世以前では、神話以外の用例を見出しえていない。

６面。右２行は脚部の上端から下端まで続くが、右２行の左のわずかな余白の上部に３行目があり、２文字程度認められる。文がここで途切れる可能性がある。

７面は２行。

８面は２行。１行目・２行目ともに下になるに従い左に傾く。１行目は「あとからとれは」の可能性があるが、上古・中古の「あとから」の用例を見出しえていない。

墨67　池250出土、土師器の高杯。杯部の内面に細かい墨書があり、墨66と同一個体の可能性がある。釈文のほかに「へ」字の右や上に文字らしき墨書がある。口縁部全体にも非常に細かい墨痕があり、裏面にもわずかな墨痕がある。

墨68　池250出土、黒色土器の椀の底部外面。

墨69　池250出土、黒色土器の椀の底部外面。墨痕あり。

墨70　池250出土、須恵器の鉢の底部外面。上半に文字様の墨書があるが、煤が重なり、読めない。

墨71　池250出土、須恵器の壺の内面。左端に５文字が見える。１字目は偏が欠け、旁の「月」だけが認められる。上から３字目の「兵」は最終画が見えない。また、上から３字目と４字目の「兵」の左上に、小さな「○」が見える。

墨72　池250出土、緑釉陶器の椀の底部外面。墨64内面の「条」は最終画を左下に撥ねるが、この「条」は最終画を右下に止める。「条」には接尾語の意があり、「糸・帯・縄・幕・川・道など、細長いものを数えるのに用いる」(『日本国語大辞典』「条」項)。この「四条」は平安京四条で、

四条に西三条第関連施設が存在する可能性がある。

墨73　池250出土、灰釉陶器の椀の底部外面。参考までにであるが、平城宮出土の墨書土器では「内」を始め、「宮内」「宮内省」「内舎人」「内蔵充」「内裏盛所」など、平城京では「内染□（司）」など、長岡宮・京では「内豎」「内侯」「内薬」が見られる。平安京では「内」、史跡大覚寺御所跡で「内」が認められ、また「供御」が見られる。

墨74　池250出土、灰釉陶器の皿の底部内面と外面に「庄」が見える。ともに「庄」とだけあり、特定の地名が付かない。

「庄」の墨書土器は富山県射水市荒畑遺跡、東京都多摩市多摩ニュータウン遺跡No.769遺跡、兵庫県加東市上滝野・宮ノ前遺跡、石川県金沢市上荒屋遺跡など、全国各地で出土する。しかし、都城での出土は、平城京左京三条四坊九坪（庄）や史跡大覚寺御所跡（東庄・□（庄カ））と僅かである。また、内面の「庄」は二画目が1.2㎝・三画目1.8㎝、外面の「庄」は二画目が1.3㎝・三画目が1.8㎝で、ほぼ同じ大きさである。ところが、内面の「庄」は太短く、外面は細く、とくに外面は二画目と三画目の間、三画目と四画目の間が広い。さらに、内面・外面ともに最終画は右に「丶」を添えるが、「まだれ」の右端との距離は、内面は0.2㎝、外面は0.1㎝である。内面と外面の「庄」は異筆と認められる。

さて、右大臣藤原良相の「庄」は特段の意味がある。良相は延命院や崇親院を建て、封戸を割き「庄田」を入れ、その元手に給わった（『日本三代実録』貞観九年十月十日乙亥条）。その藤原良相の「庄」が出土したのである。特定の庄を指さず、「庄」一般を意味する可能性がある。

墨75　池250出土、灰釉陶器の椀の底部外面。湾曲した独特の字体であるが、「太一」と読める。太一は天地の根元、天神の一つ・時に北極星。また、太一星に同じ、北天を運行する一星、天帝神として、兵乱・禍災・生死などをつかさどる。陰陽道ではとくに重要視され、その八方遊行の方角を求めて吉凶を占うのが、太一占（『日本国語大辞典』「たいいつ」「たいいつせい」項）。『養老律』に「太一雷公式」（太一式と雷公式）が見えるが（職制律20玄象器物条）、規定以外では早期の実例である。

９世紀には、『大同類聚方』撰修の奏上に「太一の秘結」とあり、この太一は「黄帝の臣で、医術を善くした人物」とされる（『日本後紀』大同三年五月甲申条）。朔旦冬至の賀表には、天子が「郊に如（ゆ）きて泰一を拝す」と見え、泰一（太一）は天を主宰する神、天神の常居である太一星（北極星）を指す（『日本後紀』<逸文>延暦二二年十一月朔条）。また、陰陽頭滋岳川人の「太一式盤」が知られる（『左経記』長元元年四月五日条）。陰陽道系思想の盛行を示唆する。三重県多気郡明和町の斎宮跡などから「太一」の墨書土器が出土する。

墨76　池250出土、灰釉陶器の椀の底部外面に「近」、周囲に煤が付着する。参考までにであるが、平城宮跡では「近」「近衛府」の墨書土器が、長岡京東院では「近厨」「近」が出土する（向日市埋蔵文化財センター『長岡京跡左京北一条三坊二町』、2002年）。

墨77　池250出土、灰釉陶器の椀の底部内面。図の左右中央の上半に一字、下半に一字が認められる。

墨78　七町の池117出土、須恵器の杯の底部外面。

墨79　七町の池117出土、須恵器の杯の底部外面。ほぼ完形で、「専師」で完結すると見られるが、「専師」の用例は見出しえていない。「専寺」なら、法会の執行を担当する寺院、寺院の法会に参列する僧のうち、その寺に在籍するもの、僧侶が在籍する寺（『日本国語大辞典』「専寺」項）。元末明初の『神僧伝』巻四には「阿専師者、不レ詳二其氏族一」とある。

墨80　溝110（三条坊門小路南側溝、平安時代後期）出土、灰釉陶器の椀の底部外面。

墨81　南北溝145（三条一坊七町、18世紀）出土、須恵器の杯の底部外面、墨痕あり。

墨82　井戸470（９世紀初）出土、土師器の椀の底部外面。酒坏・酒杯の墨書土器は数多く、平城宮跡・出雲国庁跡（酒坏）、平城宮跡・史跡大覚寺御所跡（酒杯）に見られる。

墨83　井戸470出土、土師器の椀の底部外面。「厨」の墨書土器は、平城京では「厨」「中厨」「中衛厨」「官厨」、長岡京では「近厨」などが見られる（向日市埋蔵文化財センター『長岡京跡左京北一条三坊二町』前掲）。

墨84　井戸470出土、土師器の皿の底部外面。

墨85　井戸470出土、須恵器の蓋の天井部外面。内面に墨痕あり。

墨86　整地層475（９世紀初から10世紀）出土、須恵器の杯の底部内面。「犬」の墨書土器は、平城京左京三条二坊八坪北側の二条大路のSD5100に見られる。

墨87　池370（９世紀中葉頃）出土、土師器の皿の底部外面。

墨88　池370出土、土師器の皿の底部内面。図の右半に墨痕あり。

墨89　池300（９世紀初）出土、土師器の杯または皿の底部内面。

墨90　池300出土、土師器の杯または皿の底部外面。墨痕あり。

終わりに

右京三条一坊六町の「三条院」が右大臣藤原良相の西三条第とすると、三条院には長子の西三条右大将常行、第一女の西三条女御多可幾子（文徳天皇女御）、少女の西三条女御多美子（清和天皇女御）が関係する。また、皇太后藤原順子が右大臣の「西京三条第」に遷御する（『日本三代実録』貞観元年四月十八日癸卯条）。墨書土器・木簡と良相・順子や常行・多可幾子・多美子の連関は今後の課題である。

右大臣藤原良相は漢文や仏教に造詣が深く、また傾倒する。「弱冠に及びて、始めて大学に遊び」、「文学の士を愛好」する（『三代実録』貞観九年十月十日乙亥条）。清和天皇が「西京第」に行幸し、桜花を観て文人を喚し、「百花亭の詩」を賦させる（『三代実録』貞観八年三月廿三日己亥条）。仏教については、「本内典に習い、真言に精熟す」「その篤く仏道を信じ、臨命に正念す」。良相の立場はきわめて正統的である。

墨書土器の内容は明解ではないが、墨１・墨42・墨43は漢文や仏教の要素を推測させる。一方、墨75は陰陽道の一面を想定させ、2008年度の調査では夫婦離別の呪符が出土する。また、大量の仮名墨書が発見され、神楽などの催しを示唆する。これらは従来未知であり、三条院の文化の多面的な構造が垣間見れる。仮名墨書の背景に、三条院の正統的で多面的な文化構造が想像される。

なお、墨書土器の釈文のうち仮名については、乾　善彦氏（関西大学）、佐野　宏氏（京都大学）、長谷川千秋氏（山梨大学）、の教示を受けたものがある。

２．土器・陶磁器類

（１）平安時代

井戸470（図版33・34・100～102、写真15、表８）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器がある。白色土器と輸入陶磁器は出土していない。墨書土器が４点出土している（墨82～85）。平安京Ⅰ期中の新相に属する良好な一括資料である。

井戸470の木枠内から出土した土器の総破片数は347片である。このうち、土師器が238片で68.6%、須恵器が96片で27.6%を占め、両者で96.2%を占める。緑釉陶器と灰釉陶器は合わせて3.2%に過ぎない。黒色土器も0.6%とごくわずかである。

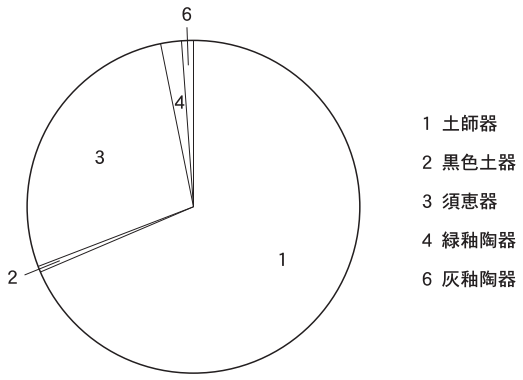
土師器には椀、皿、杯、杯蓋、高杯、壷、甕、羽釜がある。

椀（１～12）　外面の成形と調整は、ヘラケズリの後、ヘラミガキを施すもの（１）、ヘラケズリを施すもの（２～10）、ヨコナデで調整するもの（11・12）がある。また製品の状態は、焼成良好、堅致で、色調が赤味を帯びるもの（１～３・６・７・９）と、灰色を呈し器表に褐色の斑点が生じるもの（５・８・10～12）があるが、これらは埋没後の地質条件によるものとみられる。１・３・６・７・９は赤味を帯びた部分が片寄っており、重ね焼きの痕跡とみられる（写真15）。

１は口径9.0㎝あり、この中の椀では最も小型品である。外面はヘラケズリの後、ヘラミガキを丁寧に施す。焼成は良好である。２～10は外面を４～５回に分けてヘラケズリを施す。２は１に次ぐ小型品で、外面のヘラケズリも丁寧である。８は外面にヘラケズリを施すが、体部に凹凸が

表８　井戸470出土土器破片数計測表・グラフ

器種	器形	破片数	比率(%)	小計	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	201	83.2		
	高杯・盤・鉢	7	5.1		
	甕・釜・鍋	23	7.3		
	その他	7	0.0		
	不明	0	4.4	238	68.6
黒色土器	杯・椀・皿	2	100.0		
	甕	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	2	0.6
須恵器	杯・椀・皿	18	18.8		
	壷・瓶	29	30.2		
	鉢	11	11.5		
	甕・大型壷	36	37.5		
	その他	2	2.1		
	不明	0	0.0	96	27.6
緑釉陶器	杯・椀・皿	4	57.1		
	壷・瓶	0	0.0		
	その他	3	42.9		
	不明	0	0.0	7	2.0
灰釉陶器	杯・椀・皿	1	25.0		
	壷・瓶	3	75.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	4	1.2
総数		347	100.0		100.0



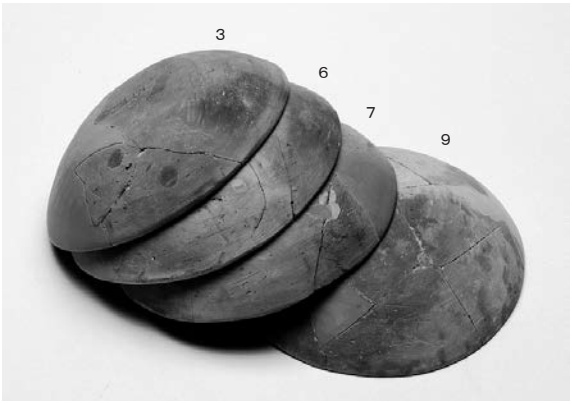


写真15　土師器椀の重ね焼き復元（井戸470出土）

あり、凹部にはヘラケズリは及ばない。11・12は外面のヘラケズリがなく、口縁部をヨコナデで調整する。11は体部に凹凸があり、内面には墨痕が付着する。外面には粘土の接合痕跡が確認できる。

杯（13～17）　外面の成形と調整は、ヘラケズリを施すもの（13）とヨコナデで調整するもの（14～17）がある。椀に比べ、ヘラケズリを施すものの割合が少ない。13は外面にヘラケズリを施すが、底部の成形は不明である。14は外面に粘土の接合痕跡が確認できる。15は口縁部からの復元で、内・外面には煤が付着する。16は底部中央に小孔が穿たれている。この小孔は焼成後に内側から錐状の工具で穿っている。

杯B蓋（18）　外面はヘラケズリを施し、中央に宝珠形のつまみを貼り付けた後、全面にヘラミガキを施す。ヘラミガキは、つまみ付近を４回に分けて施した後、交差する部分を埋めるように施すため、全体を８等分したようにみえる。焼成良好で堅致な製品である。

杯B（19）　深めの杯底部に高台を貼り付けたものである。外面はヘラケズリ後、粗くヘラミガキを施す。

皿（20～26）　外面の成形と調整は、ヘラケズリを施すもの（20～25）と、ヨコナデで調整するもの（26）がある。椀と同様、ヘラケズリを施すものの割合が多い。椀で指摘した製品の状態は、26が焼成良好で前者、20・21・23・24は灰色を呈し、後者に分類できる。22・25は両者の中間に位置する。口縁端部の形状は、21・24～26は肥厚が顕著であるが、20・22は若干肥厚する程度、23は肥厚せずに終わる。25はヘラケズリの際に工具の端が器壁に当たり、底面がギザギザになっている。

壷（27）　外面はヘラミガキを丁寧に施す。ヘラミガキの単位は粗いが、ヘラ先は深くまで達する。

高杯（28～30）　脚部の破片が３点あるが、全容が判るものはない。３点ともヘラケズリによって７面に面取りしている。ヘラケズリの方向は、下から上である。

甕（31）　体部下半の破片で、底から19㎝分残存する。外面には厚く煤が付着するが、底部の直径10㎝ほどは直接火にさらされたためか、煤は付着しない。外面にはタタキメがみられるが、煤が厚いため細部は観察できない。内面はナデで調整し、底部には内容物が付着する。

羽釜（32）　体部上半に鍔がめぐる。鍔は長さ5.5㎝あり、ほぼ水平に延びる。鍔の下側のみ煤が付着する。

黒色土器には椀がある。

椀（33）　体部は浅いが、この傾斜は残存口縁からみて大過ない。高台の有無は確認できない。外面は粗くヘラミガキを施す。内面は丁寧にヘラミガキを施し、その上にラセン状の暗文が１個

確認できる。口縁部付近は銀化している。

須恵器には杯、杯蓋、壷、甕、鉢がある。

杯（34）　高台をもつ器形である。高台は短く張り出す。高台内にはヘラで底部を切り離した際の痕跡が顕著に残る。

杯蓋（35～37）　35は天井部中央につまみが付く。天井部は扁平である。内面には墨痕が付着し、平滑であることから、硯に転用されたとみられる。36は体部が高く、天井部中央にはつまみが剥離した跡がある。37は口径が大きく、体部はきわめて扁平である。

壷（38～49）　球形の体部をもつものと、頸と胴が長く延びるものがある。38は体部の上部を粘土板でふさいだ後に口頸部を差し込んで接合しており、体部は直径８㎝ほどの円板状に剥離している。これは粘土板の部分で剥離したためであり、粘土板の内面はオサエで調整する。39は球形の体部に短い口縁部をもつ小型の製品で、瓶子と通称される。40は粘土板の上に口頸部を差し込んでおり、38と同じ３段構成で作られている。粘土板の内側はオサエで調整し、肩部には把手が剥離した痕跡がある。胴と頸が長く延びる壷は壷Ｇと呼ばれる器形で、41～44の４点を図示し、底部を糸切で成形したものは、拓本を示した。41～43は完形品であり、41が最も均整のとれた形態をもつ。42は底部付近の焼成がやや不良である。43は器形の歪みが大きい。44は体部下半の破片で、均整がとれた形態をもち、成形も丁寧である。45～48は底部付近の破片である。うち、45～47はヘラケズリを施した後に輪高台を貼り付ける。46の内面には白色の内容物が付着する。48は底部が平底で、内面に墨痕が付く。49は肩部に把手をもつ壷の破片であるが、残存部では双耳壷か四耳壷かは判断できない。肩部に自然釉がかかる。

甕（50）　口頸部は外反し、端部は面をもつ。体部は外面にタタキメ、内面には当て具の痕跡が残る。

鉢（51）　比較的大型の鉢底部である。焼成不良のため瓦質に近く、内面には火襷の痕跡がある。底部内面は平滑で、擂鉢などに使用された可能性がある。

なお、墨が付着する個体は、蓋（35）以外にも多数確認できた。このうち、器壁が平滑なものは、硯に転用されたとみられる。

緑釉陶器には椀、皿、平瓶がある。すべて山城産である。これらは井戸埋土の上層部（木枠上部の凹部）から出土している。

椀（52～54）　52・53は口縁部の小破片で、口径は復元できない。54の底部は削り出しによる平高台で、高台面には「十」のヘラ記号がある。

皿（55）　口縁部の小破片で、口径は復元できない。

平瓶（56・57）　56は肩部付近、57は底部付近の破片である。ともに軟質で、両方は同一個体の可能性が高いが、56のみ直径を復元し図示した。56の肩部には沈線が１条めぐり、体部との境を明確にしている。58（灰釉陶器平瓶）のような口頸部が、実測図中心の左寄りに付けられていたとみられる。釉は銀化している。

灰釉陶器には壷、平瓶がある。

平瓶（58）　口頸部は完存する。接合部の裏側はヨコナデで調整する。外面には自然釉がかかるが、施釉した痕跡は確認できない。

壷には須恵器壷Gに類似するものがあるが、図示できない。

製塩土器では砂粒を含んだ胎土をもつ粗雑な作りの体部片がある。

溝400（図版34）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。平安京Ⅰ期新～Ⅱ期中までを含む。

土師器には杯B、皿、高杯がある。

高杯（59～61）　59は杯部と裾部の先端が欠損する。脚部は８面に面取りするが、表面は磨滅が著しく、細部は観察しにくい。60は脚部の破片で、11面に面取りする。61はミニチュア製品の脚部破片で、７面に面取りする。

緑釉陶器には椀、皿がある。

椀（62・63）　62は底部に貼り付けによる輪高台が付く。高台内は丁寧に施釉する。底部内面には沈線がめぐる。63は貼り付けによる蛇の目高台をもち、体部中位にゆるい稜が付く。２点とも猿投産である。

皿（64）　口縁部は一部を押圧し、輪花にしている。硬質で山城産である。

土坑440（図版34・103）

土師器、須恵器がある。平安京Ⅰ期中～新に属する。

土師器には杯と皿がある。

杯（65）　外面のヘラケズリはヨコ方向の細かい単位が確認でき、全体を５回に分けて施す。ヘラケズリの方向は、図の右から左である。底部のヘラケズリは一方向に施す。内面はヨコナデで調整する。完形品で保存状態は良好である。

溝119（図版35・103）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。平安京Ⅰ期中～新に属する。

土師器には椀、杯、皿、壷、甕がある。

椀（66）　ヨコナデで全体を調整した後、外面にはヘラケズリを施す。

壷（67）　外面はヘラミガキで調整する。ヘラミガキは４分割とみられる。内面の上半はヨコナデで調整し、下半にはハケメがみられる。井戸470出土品（27）と同じ器形であるが、体部は27よりも大きい。

黒色土器には椀がある。

椀（68）　低い体部をもつ。内・外面とも黒色に仕上げられ、丁寧なヘラミガキを施す。

須恵器には杯、杯蓋、鉢、壷、甕がある。

杯蓋（69）　口縁部には、焼成前に割れを補修した痕跡がある。頂部のつまみも中心からずれた位置に貼り付けられている。断面は厚く、重量感があり、技術的に稚拙な製品である。内面に

は３本線のヘラ記号がある。

鉢（70）　体部は肩が張る。外上方に延びる口縁部をもつが、端部は欠損する。高台は貼り付け高台である。全体をヨコナデで調整するが、外面は体部下半のみヘラケズリを施す。

池117（図版35・103）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などがある。墨書土器が２点出土している（墨78・79）。平安京Ⅰ期中を中心にⅡ期中までの遺物を含む。

土師器には椀、杯、皿、高杯、甕、甑がある。

椀（72）　外面にはヘラケズリを施すが、器表の保存状態は極めて悪い。

杯（71・73）　71は内・外面ともヨコナデで調整する。内面には「田」字状のヘラ記号がある。内・外面に油煙が付着し、灯明用として使用されたとみられる。一般の杯より口径が小さく深い。73は内面と口縁部外面をヨコナデで調整し、外面はその後にヘラケズリを施す。ヘラケズリの方向は図の右から左である。

皿（74・75）　74は口縁部付近をヨコナデで調整した後、ヘラケズリを施すが、磨滅が著しく、ヘラケズリの単位は観察しにくい。75の外面はすべてヘラケズリを施す。

甕（76・77）　76は張りのない体部に外上方に延びる口縁部が付く。口縁端部は内側に肥厚する。内・外面はハケメで調整される。外面には黒斑がある。77は小片であるため、口径は復元できない。外面にはタタキメがあり、煤が付着する。

甑（78）　把手は、粘土を芯とし、その上に粘土を巻き付けてナデで仕上げる。芯の部分には指紋が付着する。器の内面はハケメで調整する。

黒色土器には椀、甕がある。すべて内面のみ黒色のＡ類である。

椀（79）　外面は磨滅が著しい。内面はヘラミガキを施した上にラセン状の暗文を施す。

甕（80）　口縁部は短く外反し、端部は上方につまんで終わる。外面はヘラケズリの後、ヘラミガキを施し、内面にもヘラミガキを施す。小型品であるが丁寧に仕上げられている。

須恵器には杯、杯蓋、鉢、壷、甕がある。

杯（81～86）　81は器壁が厚く、重量感がある。82は外面に油煙が付着し、灯明皿として使用されたとみられる。83～86は底部に高台が付くもので、86が最も大型品である。

鉢（87～89）　87は肩が張った体部に短く外上方に延びる口縁部が付く。底部は平底で糸切り痕跡が残る。外面には油煙が付着する。図中のＡよりも上半は黒色、下半は灰色を呈する。これは重ね焼きの痕跡とみられる。口縁部片の88は端部が肥厚し、体部も膨らみが残る。89は体部の膨らみがなく、口縁端部も短く上方におさめる。両方とも焼成は不良である。

甕（90・91）　90は口縁部が短く、ほぼ垂直に立ち上がる。外面にはタタキメ、内面には当て具の痕跡が残る。内面の当て具は斜め方向に当てられており、段差が顕著である。タタキメの方向は口縁部側から見た場合、時計回りである。91は体部上半の破片で、外面に刺突が施される。刺突は上下方向で３列以上あり、上下の間隔は2.0～2.5㎝である。刺突の方向は、図の中央列のみ下方から、左列と右列は上方から、幅８㎜程度のヘラを差し込んでいる。器表の外面にはタテ

方向の平行タタキメが残る。内面はヨコナデで調整する。

緑釉陶器には椀がある。94は猿投産、それ以外は山城産である。

椀（92～95）　92は削り出しによる平高台をもつ。93は92に類似する体部片で、92とともに軟質である。95は椀の底部で、削り出しによる平高台をもつ。高台には「一」のヘラ記号があり、縁部を除いて無釉である。94は貼り付けによる輪高台をもち、高台内まで丁寧に施釉する。底部内面には陰刻花文を施す。内面に３箇所、高台内にも３箇所、メアトが残る。

池370（図版36）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。墨書土器が２点出土している（墨87・88）。平安京Ⅱ期古に属する。

土師器には椀、皿、高杯、壷、甕がある。

椀（96）　外面はヘラケズリを施したとみられるが、器表は磨滅が著しい。

皿（97）　口縁端部は外反気味に終わる。口縁部はヨコナデで調整したとみられるが、磨滅が著しい。

高杯（98～100）　98は杯部の破片で、外面は粗いヘラケズリを施す。ヘラケズリの方向は縁から中心に向かう。99はやや細身の脚部で、９面に面取りする。裾部外面はヘラミガキを６回に分けて施す。100は脚部が７面に面取りする。器壁は厚く重量感がある。99よりも古い形態をとどめる。

甕（101・102）　両方とも小型の甕である。101は口縁端部が内側に肥厚する。色調は灰色を呈する。102は口縁端部が肥厚せず、色調も赤褐色を呈する。内面はハケメで調整する。

黒色土器には椀、甕がある。

椀（103）　内側が黒色のＡ類に属する。外面はヘラケズリを施したとみられる。内面はヘラミガキを施す。小片のため口径は復元できない。

甕（104）　外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキを施す。外面には煤が付着する。

須恵器には杯蓋、杯、鉢、壷、甕がある。

杯蓋（105）　天井部は扁平で、厚く自然釉がかかり、釉の一部は内面に達する。

杯（106）　深い体部をもつ。底部には貼り付け高台が付く。

壷（107）　壷Ｇとされるものの口縁部の破片である。

甕（108）　口縁部の破片で、先端はやや斜めには垂下する。口径は復元できない。

緑釉陶器には椀がある。すべて山城産である。

椀（109・110）　109は小さめの体部をもつ。底部は削り出しによる平高台である。110は口径に比して浅い体部をもち、底部は削り出しによる平高台をもつ。高台を含めた全面に釉がかかる。

灰釉陶器には椀、壷、三足盤がある。すべて猿投産である。

椀（111）　体部上半は欠損する。底部は貼り付けによる輪高台をもつ。

三足盤（112）　体部中位に段があり、屈曲して口縁部に至る。底部は三足であったとみられるが、すべて剥離している。内面に釉がかかる。

壷（113）　高台径20.4㎝を有する大型の短頸壷（薬壷）の下半部である。外面はヘラケズリを施し、底部は貼り付け高台をもつ。外面と内面底部には自然釉がかかる。

整地層475（図版36）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。墨書土器が１点出土している（墨86）。平安京Ⅰ期新～Ⅱ期新までの遺物を含む。

土師器には椀、杯、皿、高杯、甕、羽釜がある。

椀（114～116）　114は内・外面とも磨滅が著しく、成形・調整の手法は観察できない。外面には凹凸がみられる。115・116は外面にヘラケズリを施す。

皿（117・118）　両方とも口縁部外面はヨコナデで調整する。

高杯（119～121）　119は脚部を８面に面取りする。120は９面に面取りし、119よりも細身である。121は裾部の破片で、外面はヘラミガキを施す。

甕（122・123）　両方とも短く外反する口縁部をもち、端部は上方に肥厚する。122は外面をナデで調整する。123は磨滅が著しく、胎土中の砂粒が浮き出ている。熱を受けて赤く変色している。

黒色土器には椀、皿、鉢がある。

椀（124）　内面はヘラミガキを施す。小片のため口径は復元できない。

皿（125）　体部は浅く、口縁部は水平近くまで傾斜する。内面は丁寧なヘラミガキを施す。溝119出土品（68）よりも体部は浅い。

鉢（126）　直立する体部をもつ。内・外面は丁寧なヘラミガキを施す。

須恵器には杯蓋、杯、蓋、鉢、壷、甕がある。

杯蓋（127）　天井部は扁平である。内面には墨痕が付着する。

杯（128）　底部には貼り付け高台が付く。高台の内側には墨痕が付着し、平滑であることから、硯に転用されたとみられる。

蓋（129）　口径7.8㎝の小型の製品で、頂部をヘラケズリすることから、この面を天井と判断した。中心部は欠損するが、つまみが剥離したような痕跡がある。

鉢（130）　肩が張った体部に短い口縁部が付く。肩部から下はヘラケズリを施す。

甕（131・132）　両方とも短く外反する口縁部が付く。131は口縁端部が２段に折れる。外面にはタテ方向のタタキメ、内面には当て具の痕跡が残る。当て具の痕跡は、図の右から左に進む。132も外面には平行のタタキメ、内面には当て具の痕跡が残る。当て具には同心円文が刻まれるが、彫り込みは浅い。当て具の痕跡は、図の左から右に進む。

緑釉陶器には椀、皿があるが、小片のため図示できない。

灰釉陶器には椀、皿、壷がある。

椀（133・134）　133は外反気味の浅い体部をもつ。体部下半はヘラケズリを施す。猿投産である。134は内弯する深い体部をもち、底部の輪高台は高さ1.3㎝程ある。美濃産で平安京Ⅱ期新まで下る遺物とみられる。

池300（図版37・38・103）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、製塩土器がある。墨書土器が２点出土している（墨89・90）。平安京Ⅰ期新～Ⅱ期古に属する。

土師器には椀、杯、杯B、皿、高杯、壷、甕がある。

椀（135・136）　135は外面にヘラケズリを施す。136は口縁部をヨコナデで調整するが、外面は磨滅が著しい。器表には凹凸がみられる。

杯（137）　外面はヨコナデで調整する。ヘラケズリはみられない。口縁部の内側には沈線がめぐる。

杯Ｂ（140）　外面はヘラケズリを施すが、ケズリの単位は不明瞭である。口縁部の下はヨコナデによって凹部が形成される。

皿（138・139）　138は口縁部外面をヨコナデで調整し、下半はヘラケズリを施す。139は口縁部外面をヨコナデで調整する。底部にかけて凹凸があり、ヘラケズリは施されていない。口縁部には黒斑がみられる。

高杯（141）　脚部は裾まで完存する。ヘラケズリで８面に面取する。裾部外面はヨコナデで調整するが、下にはハケメが残る。内面はヨコナデが雑で、凹凸が顕著に残る。この高杯は、芯棒に粘土を巻き付ける手法は用いられていない。

甕（142～145）　142は外反する口縁部をもち、端部は上方に肥厚する。外面のハケメは、最初はタテ方向、その後ヨコ方向に施す。内面はヨコ方向にハケメを施す。内・外面には煤が付く。143は外反する口縁部をもつ。外面はオサエのみで、ハケメはみられない。火を受けたため外面は赤味を帯びる。144は外面の磨滅が著しいが、粗いハケメがみられる。内面は板あるいは布などでヨコ方向にナデる。145は外面を単位の粗いハケメで調整する。内面はナデで調整する。破片が小さく復元口径は正確さを欠く。

黒色土器には椀、甕、鉢がある。

椀（146）　高台の有無は残存内では確認できない。外面はヘラミガキを４分割で施した後、口縁部付近のみヨコ方向にヘラミガキを施す。内面もヨコ方向にヘラミガキを施した後、ラセン状の暗文を配置する。

甕（147・148）　147は外反する口縁部をもつ。外面は粗くヘラミガキを施す。内面はヨコ方向にハケメを施す。148は短い口縁部をもつ。外面はヨコナデで調整した後、幅の広いヘラミガキを施す。内面は口縁部まで丁寧にヘラミガキを施す。

須恵器には杯蓋、杯、鉢、壷、高杯、甕がある。

杯蓋（149・150）　149は扁平な天井部をもつ。つまみは最初から付けられていない。内面は中央部に墨痕が付着し、平滑であるため、硯に転用されたとみられる。150は天井部の中心に宝珠形のつまみが付く。内面には墨痕が付着し、中央部は平滑であることから、この個体も硯に転用されたとみられる。

杯（151～153）　151は高台をもつ杯である。高台内には墨痕が残るが、硯に転用されたかは判

断できない。152も高台をもつ杯で、断面は厚く、重量感がある。底部周辺はヘラケズリを施す。高台内には墨痕が残り、硯に転用された可能性がある。153は糸切り痕跡が残ることから、この面を底と判断した[1)]。糸切り底の周囲はヘラケズリで平坦に面取りしている。本品に類似するものとして整地層475出土品（129）があるが、こちらは糸切り痕跡がないため、蓋と考えた。

鉢（154・155）　154は口径17㎝あり、鉢としては小型に属する。口縁端部は上方と外側につまみ出す。155は内弯気味の体部をもち、端部はそのままで終わる。156は肩が張る体部から上方に立ち上がる口縁部をもつ。肩部外面はヘラで面取りする。池117出土品（87）、整地層475出土品（130）と同じ形態である。157は口縁端部を外側に折り返す。

壷（158～162）　158～160は細長い胴部と頸部をもつ。158は口頸部の破片で、口縁端部は外反する。159は完形品であるが、歪みが大きい。口縁端部は外反せずにそのまま終わる。底部には糸切り痕跡が残り、体部と底部の境には沈線が２本めぐる。160も体部の歪みが大きく、内面の凹凸も顕著である。161～162は瓶子と通称される壷である。161は肩部より下を右上に強くナデたため、形が歪んでいる。また、この部分の内面は粘土塊が付着している。162は底部付近の破片で、糸切り痕跡が残る。内・外面はヨコナデで調整する。内面の底部は凹凸が特に顕著である。

高杯（163）　浅い杯部をもつ高杯の脚部とみられる。接合部には糸切り痕跡が残るため、杯部と脚部は別々に成形した後、接合したことがわかる。

甕（164～166）　164・165は短く外反する口縁部をもつ。164は体部が球形を呈し、外面にはタテ方向のタタキを施す。タタキメの上には沈線が４本引かれる。内面にはタタキ当て具の痕跡である同心円文が明瞭に残る。当て具の痕跡は図の右方向に進んでいる。165は肩が張る体部をもち、外面には格子状のタタキを施す。内面には当て具の痕跡が残るが、同心円文は刻まれていない。当て具は図の右方向に進む。166は口縁部の破片で、幅は約３㎝あり、端部は垂下する。頸部外面には粗いタタキを施し、上をヨコナデで調整する。推定口径は58～60㎝に達する。

緑釉陶器には皿、椀がある。すべて山城産である。

皿（167～169）　167は浅い体部をもち、口縁部は上方に屈曲する。内・外面はヘラミガキで調整し、釉が全面にかかる。168は浅い体部をもち、口縁部は外反気味に終わる。高台は削り出しによる平高台で、淡い緑色の釉が全面にかかる。軟質のため磨滅が進行している。169は浅い体部をもつ。口縁部は外反し下方に折れる。高台は削り出しによる平高台で、体部下半はヘラケズリを施す。釉は高台端にわずかに残存する。

椀（170）　内弯して立ち上がる深い体部をもつ。高台は削り出しによる平高台で、内・外面はヘラミガキで調整する。緑色の釉が全面にかかる。

灰釉陶器には皿、椀、壷がある。すべて猿投産である。

皿（171・172）　171は浅い体部をもち、口縁部は外反気味に終わる。体部下半はヘラケズリを施す。高台は貼り付けによる輪高台である。器表は剥離が著しく、釉は内面の一部のみに残存する。172は、171と形態が類似するが、口縁部は少し波打っている。

椀（173・174）　173は内弯気味の体部をもつ。体部下半はヘラケズリを施す。高台は貼り付け

による輪高台である。釉は内面上半にかかり、内面底部と外面は無釉である。174も内弯気味の体部をもつ。高台は貼り付けによる輪高台で、高さ1.3㎝ある。釉は内・外の全面にかかり、内面と外面上部が特に厚い。外面はヘラケズリを施すが、釉がかかり観察しにくい。

壷（175）　口頸部が完存する。自然釉が口頸部の内・外全面にかかる。

輸入陶磁器には白磁椀と青磁椀があるが、図示できない。

製塩土器（176）　垂直に立ち上がる口縁部の破片である。調整はオサエのみで、胎土に砂粒を多く含む。小片のため口径は復元できない。

溝173（図版38）

土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。平安京Ⅰ期新～Ⅲ期までの遺物を含む。

土師器には椀、甕、羽釜がある。

椀（177）　口径は11㎝台で、椀としては小型の製品である。外面はヘラケズリを施す。

甕（178）　口縁部は外反し上方に肥厚する。口縁部内面はハケメを施す。体部は内・外面ともオサエで調整する。器壁は厚い。

須恵器には杯、壷、甕がある。

壷（179）　口頸部の破片である。口縁端部は上方につまみ上げる。器壁は薄い。

緑釉陶器には椀、壷がある。

椀（180）　底部付近の破片で、底部内面には沈線がめぐる。高台は貼り付けによる輪高台で、高台内部の釉は淡い。近江産である。

灰釉陶器には壷があるが、図示できない。

輸入陶磁器には白磁があるが、図示できない。

溝43（図版38）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。平安京Ⅱ期中～新に属する。

土師器には皿、高杯、甕、羽釜がある。

高杯（181）　脚部の破片で、８面に面取りする。中心穴の直径は他の個体に比べ小さい。

黒色土器には椀、甕があるが、図示できない。

須恵器には杯、鉢、壷、甕がある。

甕（182）　口縁端部は幅3.5㎝あり、先端は垂下する。小片のため口径は復元できない。

緑釉陶器には皿、椀がある。

椀（183・184）　183は体部下半に稜が付く稜椀である。底部内面には沈線がめぐる。高台は貼り付けによる輪高台で、高台内を含む全面に施釉する。184は内面底部に陰刻花文を施す。高台は貼り付けによる輪高台で、高台内までヘラミガキを施し、施釉する。２点とも猿投産である。

灰釉陶器には皿、椀、壷がある。

壷（185）　口縁部の破片で、内・外面には釉が薄くかかる。

輸入陶磁器には青磁、白磁がある。

白磁椀（186）　体部は内弯し、口縁部は肥厚せずそのまま終わる。釉は外面下半には及ばない。内面は、体部と底部の境界に段差が付く。

池250（図版39～48・104～115、図18～22、写真16、表９～11、観察表２）

最初に、池250から出土した土器の量について解説する。池250の堆積層は、上から第１層、第２層、第３層に分層したが、第１層は池を埋めた際の整地層であり、遺物の種類が多いこと、瓦など比較的大型の遺物が多く含まれること、平安時代中期の遺物も含まれることなどから、土器内容を検討する対象としては相応しくないと判断できた。これに対して、第２・３層から出土した土器は、池が使用された期間から放置され始めた期間に該当するため、第２・３層出土土器を対象とする。池250から出土した土器は、当研究所が使用する遺物採集袋（縦30.0㎝、深さ37.5㎝、容積約７Ｌ）と遺物採集コンテナ（長さ54.5㎝、幅34.2㎝、深さ15.0㎝、容積約28Ｌ）に採集している。まず、遺物採集コンテナには遺物採集袋平均４袋分の遺物が入ると仮定する。結果、遺物の量は遺物採集袋で522袋分となる。これらを、当研究所が実施する４ｍの地区割り毎に数量を示したものが図18である。

次に、池250各地点における出土土器群の器種構成と器形の多少を知るため、北肩の２地区（DD・ED、南北６ｍ分、20㎡）、西肩の２地区（FB・FC、東西８ｍ分、28.4㎡）、南肩の２地区（ID・JD、南北８ｍ分、32.0㎡）、東肩の３地区（GD・GE・GF、東西9.5m分、36.0㎡）から出土した土器を検討対象とし、破片数を計測した（図18の網部分）。

表９に示したように、破片数は5,738片である。内訳は、北肩の２地区（以下「○肩」と略す）が15片、西肩が5,330片、南肩が199片、東肩が194片である。面積比で比較すると、北肩は１㎡当り0.8片、同様に西肩は187.6片、南肩は6.2片、北肩は5.3片となる。西肩の出土量が圧倒的に多いこと、南肩と東肩は５～６片でほぼ等しいことがわかる。

器種・器形の構成比を検討する（表９・10）。土師器の割合は、西肩が95.0％で最も高く、東肩82.0％、南肩68.8％となる。東肩と南肩は破片数がともに190片台であるため、両者の違いは須恵器が多いか（南肩）、少ないか（東肩）によるものといえる。しかし土師器の破片数は、西肩5,061片（１㎡当り178.2片）に対し南肩137片（同4.2片）、東肩159片（同4.4片）で、西肩を１とした場合、南肩は2.3％、東肩は2.4％に過ぎない。西肩で土師器が多いのは、土師器皿・杯が4,949片（１㎡当り174.2片）と飛び抜けて多いためである。皿・杯以外の器形では、高杯・盤・鉢が57片（１㎡当り2.0片）、甕・釜・鍋が50片（同1.7片）で、土師器全体からみれば、ともに１％台である。同じ器形は南肩で７片（１㎡当り0.2片、西肩の10.0％）と10片（１㎡当り0.3片、西肩の17.6％）、東肩では４片（１㎡当り0.1片、西肩の5.0％）と９片（１㎡当り0.2片、西肩の11.7％）出土している。

黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器も、西肩出土量を１とした場合の１％から10数％台までで、上記よりやや少ない傾向が指摘できる。ただし須恵器のみは、西肩80片（１㎡当り2.8片）に対し南肩46片（１㎡当り1.4片、西肩の50.0％）、東肩16片（１㎡当り0.4片、西肩の14.2％）あり、南肩の

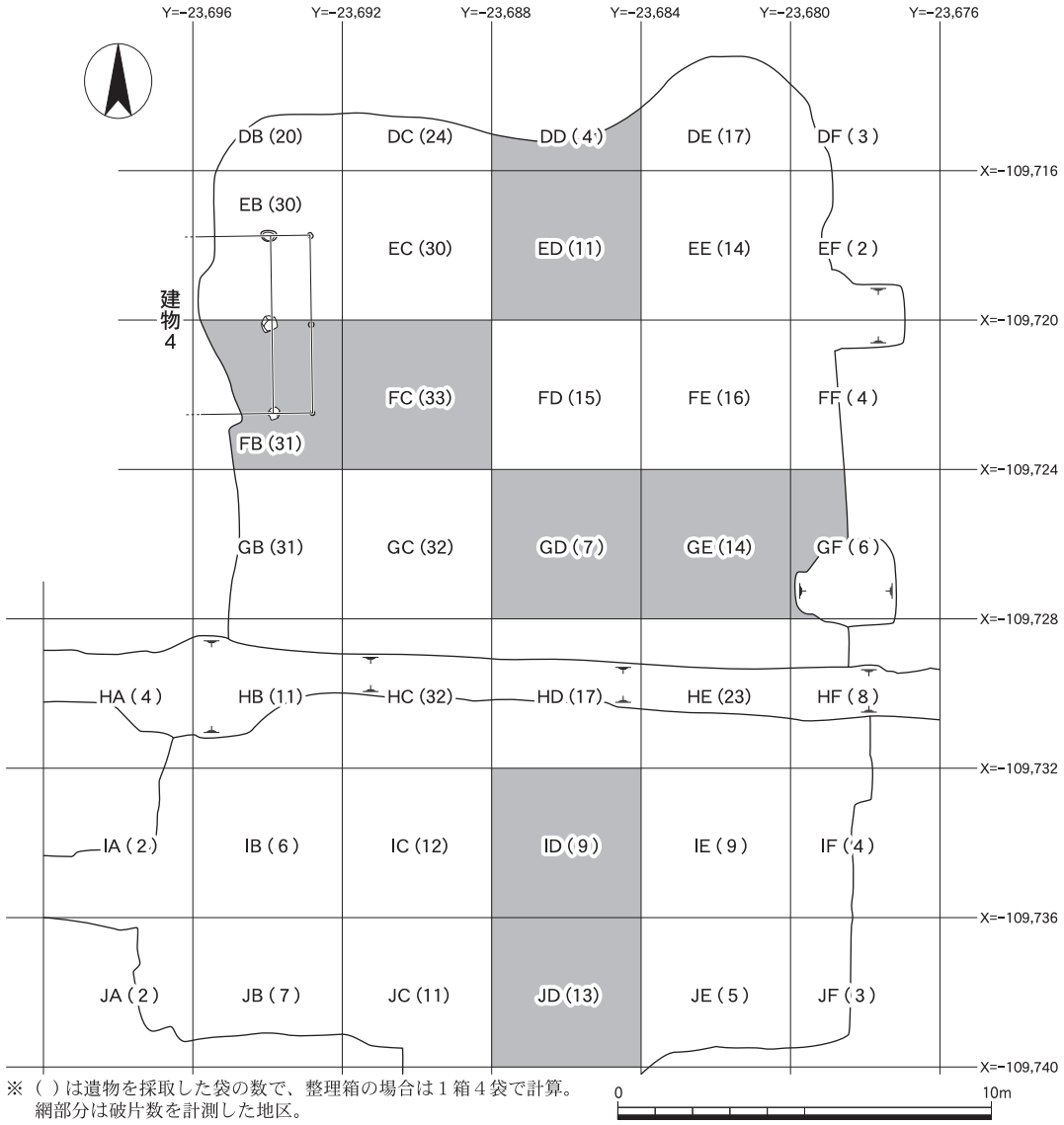


図18　池250の土器出土量（１：200）

割合が高い。南肩は甕・大型壷の破片が多いためである。また白色土器は、西肩４片（１㎡当り0.1片）に対し東肩９片（同0.2片）で東肩の方が多いが、個体数の少なさからすると、誤差の範囲内ともいえる。

以上、池250から出土土器の内容を吟味した。結果、西肩からの出土が圧倒的に多いこと、その内容は土師器の皿・杯であることが明確となった。土師器の皿・杯は、幾度かの宴会で大量に使われたものが池に廃棄されたとみられる。

次に、池250から出土した土器を解説する。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器、二彩陶器、製塩土器がある。出土量が多く、器種・器形も豊富で、平安時代前期後半の良好な土器群である。墨書土器が多い点も特徴といえる（墨１～77）。平安京Ⅱ期中を主体として、Ⅲ期中までの遺物を含む。

土師器には皿、杯、杯Ｂ、高杯、盤、甕、羽釜、鉢がある。墨書土器も全体の中で圧倒的多数

表９　池250出土土器破片数計測表（第２・３層）

池250 北肩（DD・ED）第２・３層

器種	器形	破片数	比率(%)	小計	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	12	92.3		
	高杯・盤・鉢	0	0.0		
	甕・釜・鍋	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	1	7.7	13	86.7
黒色土器	杯・椀・皿	0	−		
	甕	0	−		
	その他	0	−		
	不明	0	−	0	0.0
須恵器	杯・椀・皿	0	0.0		
	壷・瓶	0	0.0		
	鉢	1	100.0		
	甕・大型壷	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	1	6.7
緑釉陶器	杯・椀・皿	0	−		
	壷・瓶	0	−		
	その他	0	−		
	不明	0	−	0	0.0
白色土器	杯・椀・皿	0	−		
	高杯	0	−		
	盤	0	−		
	その他	0	−		
	不明	0	−	0	0.0
灰釉陶器	杯・椀・皿	1	100.0		
	壷・瓶	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	1	6.7
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	−		
	壷・瓶	0	−		
	その他	0	−		
	不明	0	−	0	0.0
他	その他	0	−	0	0.0
総数		15		15	100.0

池250 西肩（FB・FC）第２・３層

器種	器形	破片数	比率(%)	小計	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	4949	97.8		
	高杯・盤・鉢	57	1.1		
	甕・釜・鍋	50	1.0		
	その他	0	0.0		
	不明	5	0.1	5061	95.0
黒色土器	杯・椀・皿	63	55.8		
	甕	39	34.5		
	その他	5	4.4		
	不明	6	5.3	113	2.1
須恵器	杯・椀・皿	16	20.0		
	壷・瓶	4	5.0		
	鉢	17	21.3		
	甕・大型壷	39	48.8		
	その他	0	0.0		
	不明	4	5.0	80	1.5
緑釉陶器	杯・椀・皿	47	100.0		
	壷・瓶	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	47	0.9
白色土器	杯・椀・皿	4	100.0		
	高杯	0	0.0		
	盤	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	4	0.1
灰釉陶器	杯・椀・皿	15	83.3		
	壷・瓶	2	11.1		
	その他	0	0.0		
	不明	1	5.6	18	0.3
輸入陶磁器	杯・椀・皿	3	50.0		
	壷・瓶	1	16.7		
	その他	0	0.0		
	不明	2	33.3	6	0.1
他	その他	1	100.0	1	0.0
総数		5330		5330	100.0

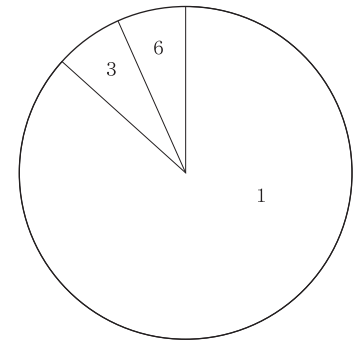
池250 南肩（ID・JD）第２・３層

器種	器形	破片数	比率(%)	小計	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	114	83.2		
	高杯・盤・鉢	7	5.1		
	甕・釜・鍋	10	7.3		
	その他	0	0.0		
	不明	6	4.4	137	68.8
黒色土器	杯・椀・皿	6	100.0		
	甕	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	6	3.0
須恵器	杯・椀・皿	3	6.5		
	壷・瓶	6	13.0		
	鉢	6	13.0		
	甕・大型壷	28	60.9		
	その他	0	0.0		
	不明	3	6.5	46	23.1
緑釉陶器	杯・椀・皿	3	75.0		
	壷・瓶	0	0.0		
	その他	1	25.0		
	不明	0	0.0	4	2.0
白色土器	杯・椀・皿	0	−		
	高杯	0	−		
	盤	0	−		
	その他	0	−		
	不明	0	−	0	0.0
灰釉陶器	杯・椀・皿	3	75.0		
	壷・瓶	1	25.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	4	2.0
輸入陶磁器	杯・椀・皿	2	100.0		
	壷・瓶	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	2	1.0
他	その他	0	−	0	0.0
総数		199		199	100.0

池250 東肩（GD・GE・GF）第２・３層

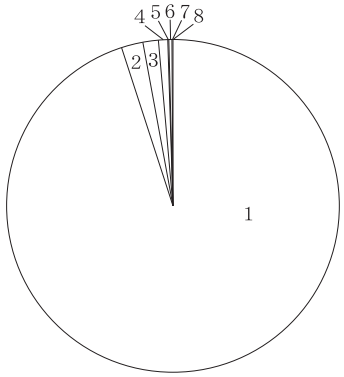
器種	器形	破片数	比率(%)	小計	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	144	90.6		
	高杯・盤・鉢	4	2.5		
	甕・釜・鍋	9	5.7		
	その他	0	0.0		
	不明	2	1.3	159	82.0
黒色土器	杯・椀・皿	8	100.0		
	甕	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	8	4.1
須恵器	杯・椀・皿	3	18.8		
	壷・瓶	2	12.5		
	鉢	2	12.5		
	甕・大型壷	9	56.3		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	16	8.2
緑釉陶器	杯・椀・皿	1	100.0		
	壷・瓶	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	1	0.5
白色土器	杯・椀・皿	7	77.8		
	高杯	0	0.0		
	盤	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	2	22.2	9	4.6
灰釉陶器	杯・椀・皿	1	100.0		
	壷・瓶	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0	1	0.5
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	−		
	壷・瓶	0	−		
	その他	0	−		
	不明	0	−	0	0.0
他	その他	0	−	0	0.0
総数		194		194	100.0

表10　池250出土土器破片数計測グラフ（第２・３層）



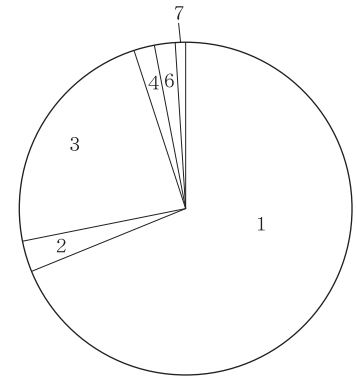
1 土師器
3 須恵器
6 灰釉陶器

北肩第２・３層



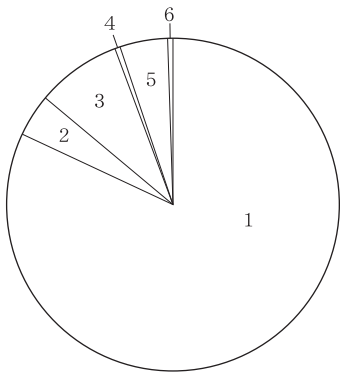
1 土師器
2 黒色土器
3 須恵器
4 緑釉陶器
5 白色土器
6 灰釉陶器
7 輸入陶磁器
8 その他

西肩第２・３層



1 土師器
2 黒色土器
3 須恵器
4 緑釉陶器
5 白色土器
6 灰釉陶器
7 輸入陶磁器

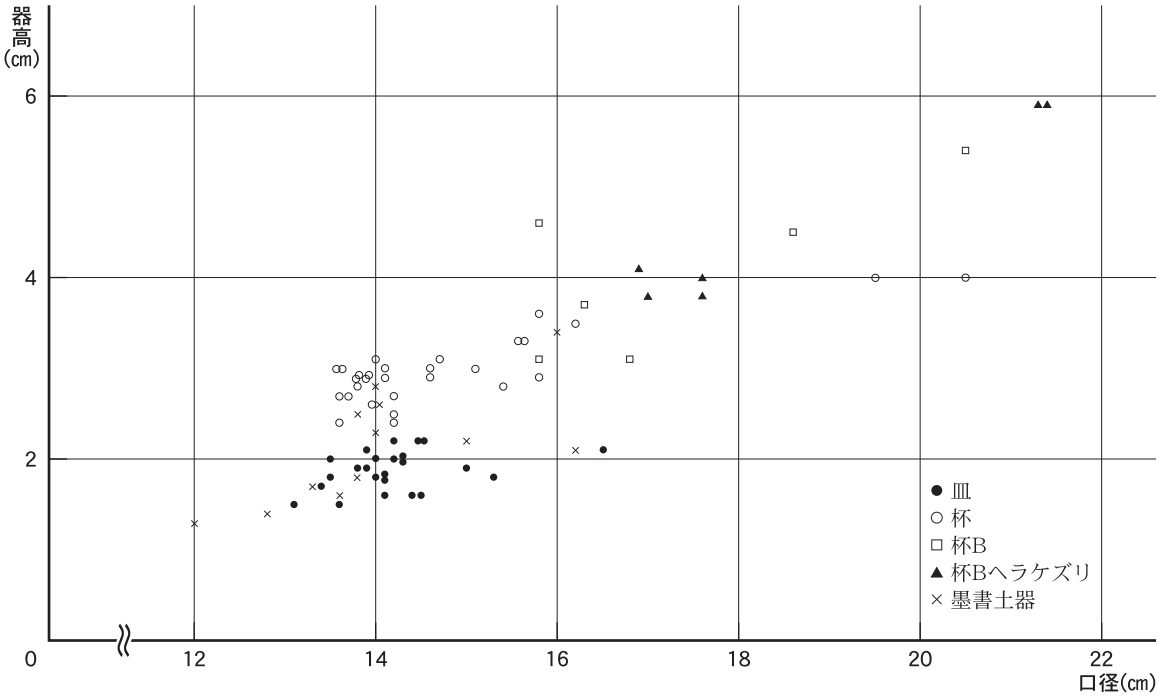
南肩第２・３層



1 土師器
2 黒色土器
3 須恵器
4 緑釉陶器
5 白色土器
6 灰釉陶器

東肩第２・３層

表11　池250出土土師器皿・杯・杯B法量分布



を占める（墨１～67）。

表11は図版39・40に掲載した土師器皿・杯と、図版24～26に掲載した墨書土器のうち、法量が判明する墨１～４、７・８・11～16を示したものである。皿は口径14cm付近を中心として、12cmから16.2cmまでに分布する。器高は1.8cmに分布の中心がある。口径がばらつくのは主に墨書土器であるが、これらは小破片から全体を復元したためとみられる。杯は、皿以上に口径・器高のばらつきが大きい。口径は、皿と同じく14cm付近に小さめの中心があり、それより大きいものが口径16cm付近に分布する。器高は３cmが中心で、皿よりは約１cm深くなっている。

高台が付く杯Ｂはさらにばらつきが大きい。口径17cm付近に分布するものと口径21cm台のものに二分できる。杯Ｂの最小口径である16cm前後は、皿と杯の最大口径と一致する。また杯Ｂの器高は3.5cm付近に中心があるため、高台の分を差し引いたとしても、当初から深い器形で作られていたことがわかる。表11では、杯Ｂ外面にヘラケズリを施したものを▲で表示したが、これらは口径17cm台と口径21cm台に二分される。

皿（212～235）　口径は14cm台を中心として13.1cmから16.5cmまである。器高は1.8cm付近に中心がある。口縁部外面と内面は時計回りにヨコナデで調整する。ヨコナデの終点は、多くの場合内面で立ち上がりが確認できる。口縁部以外の外面はオサエで調整するため、指頭圧痕が残る。以下では、形態、成形、調整、焼成、使用痕跡の順に観察所見を記述する。

1. 口縁部が真円形ではなく、楕円形を呈するものがある。213が特に顕著で、口縁部に歪みが生じている。

2. 体部外面には指頭圧痕がみられる。顕著なものは213・217・221・224・226・228・234などである。ヨコナデの下部を指で強く押さえるため、底部は丸くなる。216には指紋や藁状の圧痕がみられる。

3. 外面に粘土継目が観察できるものがある。220・230・233などである。調整が不十分であったため、継目が残されたのであろう。

4. 内面におけるヨコナデの下端は、底部付近まで達するものが215・230～232・233などで、浅い位置で終わるものが213・214・216・220・225・234などでみられた。それ以外のものは、両者の中間位置にとどまる。

5. 多くの個体は内面においてヨコナデの終点が観察できた。ナデは図の左下から右上方に終息する。右手で土器の先端をつまみ、時計回りに回転させながら引き上げたものと推定できる。214はその際のナデ幅が３cmと判明する。

6. 口縁部の先端に沈線状の窪みがめぐるものがある。219・225である。先端を調整した際に爪先が先端に食い込んだためか、あるいは内面をナデた際に粘土が外側に押し出され、先端が沈線状に窪んだとみられる。

7. 口縁部外面でヨコナデの止まりが観察できるものがある。216～218・221などである。ナデの回転がスムーズでないことを示す具体例である。

8. 口縁部外面のヨコナデが上下２段に分かれるものがある。216・229・234・235（断面側のみ）

写真16　土師器皿の重ね焼き復元（池250出土）

などである。ヨコナデを丁寧に施したためとみられる。

9. 底部内面に粗いハケメが認められるものがある。213・214・217・219・221～224・228・229・235などである。ハケメが認められないものも、多くはナデで消したとみられる。

10. 焼成良好な製品が多い。赤く変色した部分があり、火の回りが良かったことがうかがわれる。213・216・220・224・225・228・230は、口縁部付近が赤色を呈し硬質であるため、重ね焼きで焼成されたと想定できる。特に213・216・230は赤色を呈する部分が全体の３分の１を占め、重ね方が浅かったこと、220・224・225・228は赤色を呈する部分が口縁部に限られるため、重ね方が深かったことが想定される（写真16）。また、赤色を呈する部分の口縁部は上方に反るものがみられたが、これは焼成が不均等になったためと推定される。

11. 黒斑を有するものがある。223・235である。235は外面のみであるが、223は内面・外面の両方にあり、特に内面側が顕著である。

12. 油煙が付着したものがある。212・222などである。212は底部の内面に、222は口縁部の内・外面に付着する。これらは灯明皿として使用されたものとみられる。

杯（236～264）　口径は皿と同じ14㎝台から16㎝台までが大半である。最大は264で20.5㎝ある。器高は３㎝前後で、皿よりは約１㎝深い。成形と調整は皿と同じである。皿と同じ視点で観察所見を記述する。

1. 形態は大きく二分できる。１つは、底部が丸く、体部は直線的に延びて、口縁部は外反しないもので、238・240・246などである。これらは内面のヨコナデが深くまで達し、丁寧に製作されている。２つめは、底部が平底気味で、体部側面の指オサエが強いため、口縁部下が窪み、結果として口縁部が外反するもので、244・249・253・256・257などがある。内面のヨコナデは浅い位置で止まり、前者よりも新しい型式の特徴をもつ。

2. 体部には指頭圧痕が顕著に残る。242～245・247・249・251～253・257・258・263などである。242・244・249は押圧が強いため体部が弯曲し、口縁部は外反気味になる。252は押圧が強いため内側が膨らんでいる。245・257は爪状の痕跡が残る。263は圧痕が上下２段にわたる。

3. 外面に粘土継目が観察できるものがある。240・255・258などである。255と258は粘土をラセン状に巻き上げた際の痕跡とみられる。

4. 底部外面に板状の圧痕が付着するものがある。250・258である。２点とも平行する筋が浮き出ており、乾燥時に板などの上に置かれたとみられる。

5. 内面のヨコナデは、大半が底部付近まで達する。浅い位置で終わるものは239・244・249など少数である。

6. ヨコナデの終点が確認できる。237・238・240・241・243・245・246・248・249・251・258・260などで、内面の左下から右上方向に時計回りに終息する。237・251はほぼ垂直に引き上げられている。

7. 口縁部の先端に沈線がめぐるものがある。240・242・244・246・256である。242・256は部分的で、沈線は全周しない。内面のナデによって粘土が外側に押し出した結果、沈線が形成されたようにみえる。

8. 口縁部外面でヨコナデの止まりが観察できる。237・243・248・249・254・255・258などである。特に237は3.9㎝間隔に爪状の痕跡が残されており、12回程度止まりながらヨコナデを施したことが推定できる。この他、243・248・249・255は内面のヨコナデ痕跡から、止まりながら施す様子が観察できる。

9. 底部内面には粗いハケメが認められる。238・239・241・242・245～248・250・254・256・257などである。242・257はハケメが細かい。248は不定方向にハケメを施す。250は粗いハケメと細かいハケメが使用される。

10. 260は底部外面の中心を回るように竹管文が押印される。竹管文は直径4.5㎝の円形を描く。261は底部内面に線刻で草木状の文様が描かれる。242は底部外面にラセン状の文様が描かれている。

11. 重ね焼きの痕跡が確認できる。241・243・252・253などである。特に253は薄手で堅く焼成され、熱の回りが良かったようである。

12. 黒斑を有するものがある。237であり、黒斑は口縁部付近にみられる。

13. 油煙が付着したものがある。239・243・245・247・256などである。特に256は口縁部の内・外面で顕著に付着する。239は底部内面、247は底部外面に付着するため、この両者は器を重ねて置いた際に油煙が付いたとみられる。

なお、皿にみられた要素である、1. 口縁部が楕円形を呈するもの、8. 口縁部外面のヨコナデが上下２段になるものは、杯にはみられなかった。

杯Ｂ（265～276）　杯の底部に高台を貼り付けたものである。12点を図示した。通常の杯に比べ口径・器高の大きいものが多いが、通常の杯に高台を付けたものもあり、口縁部の形状だけでは区分できない。262～264は、高台は付かないものの杯の形状は杯Ｂとほぼ同じである。外面はナデで調整するもの（265～270）とヘラケズリを施すもの（271～276）がある。ヘラケズリを施すものは、口径・器高が大きく、体部は直線的に広がる。口縁部の弯曲が少ないなど、古い形態をとどめている。皿・杯と同様に観察所見を記述する。

1. 高台が中心からずれた位置に付けられたものがある（272）。

2. 高台が名残り程度に退化したものは、完全に一周しない（265・268）。

3. 体部外面の指頭圧痕はほとんどの個体で顕著にみられる。

4. ヘラケズリは、図の左上に進行するものが多いが、右方向に進行するものも認められる（271・272）。

5. 口縁部下はナデによって窪むため、ヘラケズリは窪んだ部分には及ばない。

6. 体部の凹凸が顕著なものは、ヘラケズリも雑である（272・273）。272は凹凸が顕著であったため、ヘラケズリによって凹部がヨコ方向に連続することになった。

7. 底部外面もヘラケズリを施す（271・273・274）。

次に、ヘラケズリがないものも含めた杯Ｂ全体の所見を解説する。

8. 口縁部のヨコナデの終点は、皿や杯に比べると確認しにくい。

9. 底部内面にみられるハケメは、ヨコナデで調整した上に様々な方向に施す（267～269・272）。皿・杯では一方向に施しており、対照的である。

10. 黒斑を有するものがある。262は内・外面に顕著に認められる。

11. 油煙が付着したものがある。265は内面底部に薄く付着し、268は内面全体に厚く付着する。268は外面も黒色を呈する。これらは灯明皿として使用されたとみられる。

なお、杯にみられた要素のうち、3. 外面に粘土継目が観察できる、4. 底部外面に板状の圧痕がある、6. ヨコナデの終点が確認できる、7. 口縁部の先端に沈線がめぐる、8. ヨコナデの止まりが確認できる、はこの杯Ｂでは認められなかった。

高杯（277～309）　保存状態の良い33点を図示する。杯部、脚部、裾部の全容が判明するものが２点（277・278）、裾部の先端が一部欠損するものが１点（279）、杯部の形状が判明するものが11点（280～290）、裾部が先端まで判明するものが６点（291～296）、脚部の保存状態が良いものが12点（297～308）あり、順に配置した。また、ミニチュア高杯１点（309）は、他より２倍に拡大して図示した。以下、杯部、脚部、裾部の特徴を、上記した視点で記述する。

1. 杯部外面の成形は、すべて口縁部をヨコナデで調整した後にヘラケズリを施す。ヘラケズリの方向は、すべて口縁部から中心に向かう。ヘラケズリの幅は、284で幅約２㎝と確認できる。280・285はヘラケズリが雑である。289・290は脚部付近のみヘラケズリを施す。

2. 大部分の杯部外面は、粘土継目が観察できる。継目の本数は１本から４本までである。284は特に明瞭で、継目上で破損している。４本確認できた285は、ヘラケズリが雑である。

3. 脚部内面が膨らむものがある。299は穴の上方が狭くなり、奥が見通せない。

4. 脚部外面の成形はすべてヘラケズリであり、方向はすべて下から上である。

5. 脚部外面のヘラケズリによる面取りは、７面、８面、９面が主である。７面は７点ある（279・293～295・300・303・304）。「政所」を墨書した高杯（墨65）もここに属する。７面を呈するものは面取りが最も丁寧である。８面は10点ある（277・278・291・296～298・301・305・307・308）。ヘラケズリ間に隙間が広くなり（277・291）、下端はヘラケズリの及ばない範囲が広くなる（301・302・307）。298・305は脚部下端の断面が円形になりつつある。296は面の境界が明瞭でない。９面は４点ある（292・299・302・306）。９面のものは円形化が進展している。個々の面が狭く、定まった形に面取りするという意識は乏しくなりつつある。

6. 杯部内面はヨコナデの上に、さらにナデを施す。ヨコナデの終点は図の左下から右上であり、279で確認できた。280の杯部内面にはハケメが施されている。

7. 脚部内面のヨコナデは、裾部の上端から約２㎝上まで指を差し込んでナデ回したようにみえる。302・303・305・307・308などである。

8. 裾部外面の調整はオサエが主である。ヨコナデは範囲が狭く、上端は確認しにくい。またナデが浅いため器表の凹凸はそのまま残る。

9. 裾部外面に工具跡が付くものがある。277・300・308では、裾部に巻き付くような筋が確認できた。

10. 裾部のヨコナデは内面において終点が観察できる。277・278・295・296・300やミニチュア高杯（309）では、図の右上から左下へ終息している。

11. 裾部内面のヨコナデは、工具が当たったような痕跡がみられる。278・291・294・296・297・300などである。278は板の木口が当たったようにみえる。

12. 黒斑を有するものがある。283・290は杯部の先端にみられる。

13. 油煙が付着したものがある。283は内面に、297と299は杯部中央に付着する。

14. 杯部内面の中央は磨滅するものが多い。278・279・284・285・288・291～293などである。

図19は、図版40～42に掲載した高杯（277～309）と図版28・29に掲載した墨64～66の出土地点を池250平面図上に示したものである。池の西岸付近に集中しており、中でもY=−23,692線の両側に集中することがわかる。この中には「三条院鈎〔釣〕殿高坏」（墨64）と「政所」（墨65）の墨書をもつ高杯が含まれるが、本図に建物４の範囲を入れると、２点は建物４の南東部で出土していることがわかる。「三条院鈎〔釣〕殿高坏」にある「釣殿」はここでの建物４が想定されるため、この高杯が釣殿（建物４）専用として使用されたことは、容易に想像がつく。「三条院鈎〔釣〕殿高坏」墨書土器は、西三条第の遺構と遺物を結びつけた希有の資料といえる。

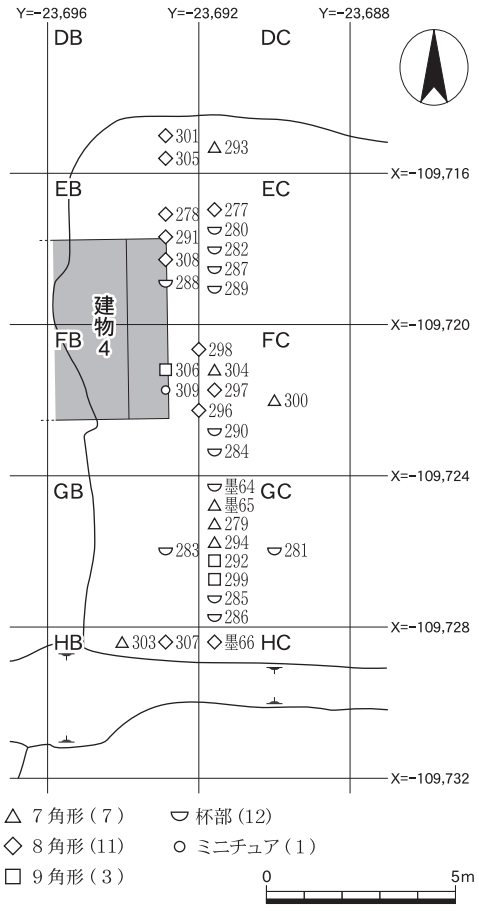


図19　池250出土土師器高杯の位置
（図示したものに限定、１：200）

盤（310～313）　出土量はきわめて少なく、体部３点と底部１点を提示するにとどまった。体部は、器壁の厚さや口縁端部を内側に折り曲げること、調整がナデ・オサエであることなど、高杯杯部との共通点が多い。

310は体部から口縁部の破片である。口縁部はさらに一段折れ、端部は上方に折り曲げて終わる。外面はヨコナデで調整し、下半はオサエで調整する。内面はヨコナデで調整するが、下半にはハケメがみえる。311は口縁部が一段折れて、端部は斜め上方に面をも

って終わる。内・外面ともヨコナデで調整する。312は口縁部が緩く一段折れ、端部は内側に折り曲げて終わる。外面は口縁部がヨコナデ、下半はオサエで調整する。内面はヨコナデ下にハケメがみえる。口縁部の内・外面には油煙が付着する。313は底部の破片で、貼り付け高台をもつ。内面にはハケメを施す。

甕（314～329）　口縁端部が内側に折り返し肥厚するもの（314～323)、同じく外反気味に立ち上がるもの（324～328)、内弯するもの（329）がある。

口縁端部を内側に折り返すものは、口径が16㎝台から23㎝台まであるが、大小のまとまりはみられない。体部外面の調整は、オサエ、板ナデ、ハケメなどで、内面も同様の調整を行う。端部の折り返しは、高杯の杯部、裾部の処理と同じである。314は器壁が厚く重量感がある。口縁部は外反し端部は内側に折り返す。口縁部には黒斑がみられる。体部外面はオサエで、平滑にされる。体部内面はオサエで凹凸ができる。315は口縁部が外反し上方に延びて終わる。体部外面はオサエで窪みができる。体部内面はヨコ方向のハケメで調整する。316は口縁部が外反し、上に延びて終わる。体部外面はオサエで、強く押された部分は窪む。煤が薄く付着する。体部内面は板状工具でヨコ方向にナデる。317は口縁部が外反し、端部は肥厚する。体部外面はオサエで窪みができる。318は口縁部が外反し、端部は内側に折り返して終わる。体部外面はオサエで窪みができる。体部内面はオサエで平滑に仕上げる。319は頸部のヨコナデが強いため、口縁部と体部の間に段ができる。口縁端部は内側に折り返す。体部外面は平滑な原体で押圧するが、単位は把握しにくい。内面はナデで平滑に仕上げる。320は口縁部の断面が厚く、端部は内側に折り返す。体部外面はハケメで、上半はハケメが消される。頸部下に粘土の継目が観察できる。体部内面は斜め方向のハケメで調整する。ハケメの下に同心円文がみられる。321は口縁部が外反し、端部は内側に折り返す。体部外面は斜め方向のハケメを施す。体部内面はヨコ方向のハケメで、下半はハケメが消される。322は口縁部が外反し上方で終わる。体部外面はオサエとみられるが、磨滅が著しい。体部内面はヨコナデとハケメがみられる。323は口縁部が外反し内側に折り返す。体部外面はオサエで斜め方向の窪みができる。

口縁部が外反気味に立ち上がるものは、口径11㎝台（324）から19㎝台（327）まであるが、大小のまとまりはみられない。外面はナデで調整するものが多い。324は口縁部が外反し、体部外面には厚く煤が付着する。体部内面には工具の痕跡が残る。325は体部外面に厚く煤が付着する。体部内面はオサエで調整する。326は口縁端部が外に突出する。体部の内・外面はオサエとナデで調整する。327は体部上半を指で押圧する。全面に厚く煤が付着し、細部は観察できない。328は薄手で軽い。体部の内・外面はオサエとナデで調整するが、煤で観察しにくい。煤は下半ほど厚い。底部に煮沸時の内容物が残る。

329は内弯気味の口縁部をもつ。外面はオサエとみられが、煤が厚く付着する。内面はヨコ方向にナデて平滑にする。

羽釜（330～333）　出土量は少なく、４点を図示するにとどまった。器壁は厚い。体部は直立し、上端には水平方向に延びる鍔が付く。鍔の下半には煤が厚く付着し、煮沸用具として使用さ

れたことがわかる。

330は鍔から下に煤が付着し、外面はハケメがそのまま残る。内面は磨滅が顕著である。331も同様に鍔から下に煤が付着する。外面はハケメを施した後、オサエで整えるため、ハケメは部分的に消されている。内面は板状工具でヨコ方向にナデる。332も同様であるが、口縁部内面に粘土継目が残り、煤は内面の上端に厚く付着する。333も同様の特徴をもつが、小破片のため口径は復元できない。

鉢（334～336）　３点ある。半円形の体部に短い口縁部が付くもので、ナデ、オサエで調整した粗雑な製品である。祭祀具とみられるが、この時期のものとしては珍しい。

334は口縁部を外上方に小さくつまみ出す。外面はナデのみで、粘土の継目が残る。内面はヨコ方向に丁寧にナデる。335は334に類似するが、やや大きい。内・外面の調整は334に同じであるが、外面は赤く変色し、底部内面には炭化物が残存することから、煮沸具として使用されたようである。336は口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部には沈線がめぐる。体部外面はタタキで成形され、内面にも当て具の痕跡が深い窪みとなってヨコ方向に連続する。器形は墨書人面土器として周知されるものと同じである。

黒色土器には椀、甕、鉢、ミニチュア椀、ミニチュア鉢、ミニチュア壷がある。また墨書土器が２点出土している（墨68・69）。

椀（337～343）　すべて内面と外面の口縁部が黒色化したＡ類である。外面下半は赤褐色を呈する。口径13㎝以下のもの（337～339）と口径15㎝以上のもの（340～343）に二分できる。

337は口径12.0㎝ある最も小型の椀である。体部は内弯し、口径に比して高台径が大きい。外面はヘラミガキで調整する。ヘラミガキは口縁部付近は密に施し、光沢がある。内面は、底部は一方向にヘラミガキを施した後、体部をヨコ方向にヘラミガキを施し、上にラセン状の暗文を施す。口縁部の内側には浅い沈線がめぐる。338は高台径がやや小さい。外面は磨滅が著しい。口縁部はヨコナデで調整する。油煙が付着する。内面のヘラミガキは止まりながら施す。口縁部内側の沈線はみられない。339は、外面はオサエのみで凹凸が残る。口縁部はヨコナデで調整し、油煙が付着する。内面はヘラミガキとみられるが、磨滅が著しい。底部は一方向に粗くヘラミガキを施す。口縁部内側の沈線はみられない。340は口径18㎝の大型品である。外面はヘラケズリのみで、ヘラミガキはみられない。内面はヨコ方向にヘラミガキを施し、上に暗文を重ねる。底部は一方向のヘラミガキで中央に暗文を施す。口縁部の内側には沈線がめぐる。341は口径19㎝あり、最も口径が大きい。外面はオサエによって浅い凹凸が残る。内面はヨコ方向にヘラミガキを施し、ラセン状の暗文を施す。底部は一方向にヘラミガキを施す。342は外面にヘラケズリを施した後、口縁部にヘラミガキを施す。底部内面は一方向にヘラミガキを施し、六角形の花弁と中央に三葉形の暗文を描く。343の外面はオサエの凹凸が残る。内面はヘラミガキを施し、底部にはラセン状の暗文と３本線の線刻文様を描く。

甕（344～348）　344～346は口径が判明するが、347・348は小片のため口径が復元できない。344は張りがない体部に外反気味の口縁部が付く。外面はオサエで、凹凸がみられる。内面はナデ

で調整する。外面には煤が付着する。345も体部は張りが少なく、口縁部は外上方に延びる。器壁は厚く、外面には煤が厚く付着する。口縁部はヨコナデで調整し、内面はハケメを施し、さらにヘラミガキを施す。内・外面とも黒色を呈する。346は外面にヘラケズリを施した後、粗くヘラミガキを施す。その際の工具の痕跡が斜め方向に残る。内面下半はヘラミガキを粗く施す。内面は黒色であるが、外面は赤褐色に変色している。347と348は口縁部をヨコナデし、体部はオサエとハケメで調整する。

鉢（349～354）　351～353は半球状の体部をもつ通有の鉢、354は鉄鉢形の体部をもつ鉢である。351は頸部がややくびれる。口縁部は小さく外反する。外面はヘラケズリの後、粗くヘラミガキを施す。内面は、体部はヨコ方向、底部は一方向に粗くヘラミガキを施す。352は、内・外面のヘラミガキは器表がみえる程度に粗い。色調は白色に近い。353は口縁部が小さく外に突出する。外面はヘラケズリの後、ヨコ方向にヘラミガキを施す。内面は口縁部直下までヨコ方向にヘラミガキを施す。外面下半は赤褐色に変色している。354は鉄鉢形を呈する鉢である。外面はヘラミガキを４回に分けて施す。内面はヨコ方向に丁寧にヘラミガキを施す。銀器のような光沢がある。口縁部のみ黒色化が明瞭である。349は平底の鉢であるが、外面は磨滅が著しく、赤褐色に変色している。内面は放射状にヘラミガキを施し、光沢をとどめる。350は体部の片側に把手が付く。柄は残存長6.4㎝以上ある。断面は径1.5㎝の円形で、面取りはしない。鉢の内面はヘラミガキを施す。

ミニチュア製品（355～362）　355は椀、356は鉄鉢形鉢、357～362は壷のミニチュア製品である。いずれも稀少性が高く、すべてＢ類に属す。355は口径5.6㎝あり、通有の黒色土器椀を正確に模している。外面はヨコ方向のヘラミガキを４分割で施し、高台内側も一方向にヘラミガキを施す。内面もヨコ方向にヘラミガキを施すが、汚れが付着するため調整手法は観察しにくい。口縁部下に沈線をめぐらせる。356は先述した鉢354をミニチュアにしたもので、外面はヘラミガキをヨコ方向に施す。ヘラミガキは全体を４回に分け、反時計回りに施している。底部は一方向にヘラミガキを施すが、ヘラ先の当たりが強く、ジグザクの筋が刻まれている。中心からはずれた位置に「十」の線刻がある。これは焼成後に刃物の先端で刻んだものである。内面は丁寧にヘラミガキを施す。底部は一方向のヘラミガキを施すが、範囲は狭い。

ミニチュア壷は６点ある[2)]。357～359は完形品であるが、360は底部が完全に欠損し、361は体部の約半分、362は体部の約３分の１が残存する。体部最大径は中心より下にあるため、重心が低い印象を受ける。底部は平坦であるが、これは粘土板を体部と貼り合わせて成形したためである。口縁部は体部に比べ小さく、体部上端に粘土紐を回して口縁部を形成している[3)]。358はこの部分の断面が厚い。360～362は接合箇所で口縁部が剥離している。外面の調整は、ヘラミガキが多用される。体部はヨコ方向に４回に分けて施し、底部も一方向に密に施している。ヘラミガキが丁寧なものは、銀器のような光沢をもつ。口縁部はヨコナデで調整し、359は口縁部のヨコナデが頸部に達する。完形品は内面が観察できないが、360～362では指を入れてナデたことがわかる。358の内部には小石と「つまようじ」状の木片が入っていた[4)]。

須恵器には杯蓋、杯、皿、椀、鉢、壷、甕がある。墨書土器が２点出土している（墨70・71）。

杯蓋（363・364）　363はつまみが付かない蓋である。天井部はヘラ切りのままである。内面はヨコナデで調整する。全面に墨痕が付着し、硯に転用された可能性がある。364は363よりも扁平で、つまみの有無は不明である。天井部はヘラ切りのままで、自然釉が厚くかかる。内面はヨコナデで調整した後、一方向に幅広くナデて仕上げる。

杯（365～367）　365は小さめの底部から直線的に外上方に延びる体部をもつ。上端は重ね焼きのために黒色を呈する。外面底部に墨痕がある。内面にも墨痕があり、硯に転用したものとみられる。366は体部がやや内弯する。底部はヘラ切りのままである。内面は一方向に指でナデる。367は小片から全体を復元したため、口径は正確さを欠く。底部はヘラ切りのままである。

皿（368～370）　368は内面に段が付く。外面の下端は底部直前で剥離する。内面全面に墨痕があり、硯に転用されたとみられる。369は浅い体部をもつ。底部との境は不明瞭である。底部はヘラ切りのままで、内・外面はヨコナデで調整される。内面底部には墨痕が付着し、硯に転用されたとみられる。370は口径7.2㎝の小型の製品で、糸切り痕跡をとどめる面を底とみて作図した。

椀（371・372）　371は口縁端部が内側に折り返して終わる。372は内・外面ともヨコナデで調整するが、外面は凹凸が顕著で、特に上半部の10条分は凸線状を呈する。底部は糸切りで、乾燥時に平行する筋が付着している。

鉢（373～381）　373は口縁端部が三角形を呈するが、374以降に比べると扁平である。内・外面はヨコナデで調整し、器表に凹凸がある。374は口縁端部が三角形を呈する。内・外面はヨコナデで調整し、器表には凹凸がある。375は口縁端部が外方に突出し、三角形を呈する。底部は糸切りで、周辺は丁寧にナデている。上から3.5㎝までは重ね焼きの影響で黒色を呈する。376は口縁端部が丸く玉縁状を呈する。肩部の張りが強い。377は口縁端部が玉縁状を呈し、内・外方の両方に突出する。底部は糸切りである。378は口縁端部がやや扁平な玉縁状を呈する。底部は糸切りである。内面底部に墨痕が付着する。379は口縁端部が厚く、縦長を呈する。内面に墨痕が付着する。380は体部上半の破片で、口径は復元できない。内面は平滑で墨痕が付着し、硯に転用されたとみられる。381は379に類似した端部をもつ。凹凸が顕著で器壁は厚い。

壷（382～399・404）　瓶子と呼ばれる壷（382～390）、それらより大型の壷（391～393）、長頸の壷（394）、細い頸の壷（395・404）、底部付近の破片（396～399）などがある。

382は内・外面ともヨコナデで調整する。外面の凹凸は顕著でない。完形品のため内面は観察できない。底部は糸切りのままで、焼成後はみ出した粘土を打ち欠いている。383は体部の凹凸がやや顕著である。底部は糸切りのままで、体部との境界を強くナデて底部を際だたせる。384は口縁部の一部が欠損する。外面はナデで調整し、凹凸が明瞭である。焼成時に灰がかかり白色化した部分がある。底部は糸切りのままで、底部周辺のナデは顕著ではない。385は先の３例よりもやや大型である。口縁部は歪みが大きい。体部中位の凹凸は顕著である。底部は糸切りのままで、端部は外方に張り出す。386は底部を欠損する。内面はナデによる凹凸が顕著で、特に下半は先端が三角状に突出する。387～390は口縁部を欠くが、形態の特徴は382～386と同じである。391は口頸

部が残存する。口縁端部は傾斜する面をもつ。片面のみ自然釉がかかる。392は口頸部の大部分が残存する。口縁端部は内側に折れて終わる。内面には漆状の有機物が付着する。393は短かい頸部をもち、口縁端部は垂直に立ち上がる。体部と頸部の接続部は、段差が生じている。394は壷Gと呼ばれる器形で、灰釉陶器のような質感がある。底部は焼成時に焼け歪み、外側は破損している。395は丸い体部をもち、頸部は細い。396～399は底部付近の破片である。高台はすべて貼り付けによる輪高台で、396は端面が斜め方向を向き、接地面には繊維の筋が付く。底部はヘラ切りのままである。397は高台が高さ３㎜と非常に低い。398は高台が外側に張り出す。高台内には糸切り跡が残る。399は高台の高さが1.1㎝あり、高台は外側に張り出す。高台の内側には爪の圧痕が付着する。底部内面には墨痕が付着する。404は頸部の上端には稜線があり、口縁端部が近いとみられる。ナデによる凹凸が顕著である。体部と口頸部の接合跡が明瞭である。

甕（400～403）　400は口縁部が外反し、端部は肥厚気味に終わる。外面は板状工具でナデるが、カキ目ほどの痕跡は残らない。体部内面には当て具の痕跡が残り、タタキ成形であったとみられる。401は口縁部が外反し、端部はそのまま終わる。外面は平行タタキの上にカキ目を施す。内面はヨコナデで調整し、体部には当て具の痕跡が残る。402は口縁部の小片で、端部は外反した後、垂直に立ち上がる。口径は20㎝前後と推定される。403は大型の甕の口縁部で、口径は50㎝に達すると推定される。端部は幅3.1㎝あり、先端は垂下する。外面はナデの下にタテ方向のタタキメがみえる（拓本参照）。

緑釉陶器には椀、皿、耳皿、壷、香炉の身と蓋、蓋がある。墨書土器が１点出土している（墨72）。数量が多いことに加え、優品が多いことが特徴として指摘できる。「猿投産」「山城産」「近江産」「美濃産」「防長産」の産地が判明するため、まず椀、皿、耳皿、香炉、香炉蓋、蓋、壷の順に分類した後、産地ごとに解説し、最後に陰刻花文をもつ破片を紹介する。

椀（405～432、図20）　405～419は猿投産、420～429は山城産、430は近江産、431は美濃産、432は防長産の製品である。

猿投産の製品では、405～407、414・415・418は体部中位に稜が付く稜椀、408～410は輪花椀、412・413・419は陰刻花文をもつ椀、408～410は底部内面に凹線をめぐらせた椀である。外面はヘラケズリの後にヘラミガキを施し、内面もヘラミガキを施すものが多い。高台はすべて貼り付けによる輪高台・蛇の目高台である。以下、口径の小さいものから解説する。

405は口径9.0㎝ある最も小型の稜椀である。内・外面の調整はヨコナデとみられる。高台内を含めた全面に施釉する。釉は均質にかかり、仕上がりが美しい良品である。406は同じく稜椀で、口径13.0㎝あり、体部は深い。外面はヘラケズリの後にヘラミガキ、内面もヘラミガキを施したとみられる。高台内を含めた全面に施釉する。この製品も釉が均質にかかった良品である。407も同じ稜椀であるが、406に比べると器形はやや浅く、外面の稜線も目立たない。高台内も含めた全面に施釉する。408は口縁端部を押圧し輪花とする。押圧は１箇所だけ確認でき、配置は不明である。内面の底部中央には凹線がめぐる。メアトが外面に１箇所、内面に２箇所以上確認できる。高台内には「＋」印が焼成後に線刻されている。409は口縁端部に１箇所だけ輪花が確認できる。

内面の底部中央には凹線がめぐる。高台端面には押圧痕が１箇所みられる。質感は、皿の434・435に類似する。410は口縁端部に６分割とみられる輪花を施す。高台端面に押圧痕が３箇所みられる。細部の特徴は409に共通する。411は体部が内弯し、口縁端部は外反して終わる。外面下半はヘラケズリが顕著である。高台内まで釉がかかる。412は内面の底部中央と口縁部下に精緻な陰刻花文を配置する(図20)。この陰刻花文は413より花弁数が多いが、口縁部下のものは上下逆に配置している。底部の花文は、池117出土例(94)より精緻さが劣る。メアトは底部内面に１箇所と高台内縁に３箇所、高台外縁に数箇所みられる。413は内弯気味のやや浅い体部をもつ。内面の底部中央と口縁部下の３箇所に精緻な陰刻花文を配置する。底部内面にメアトが３箇所ある。器面に光沢があり美しい。417に類似する猿投産の優品である。414は体部の中位が折れる稜椀である。内面は底部が窪み、その分、器壁は薄い。高台内を含めた全面に施釉する。415は口縁部の大半を欠く。体部は中位で折れる。内面の底部中央は磨滅する。メアトは底部内面に２個あり、残りの１つで正三角形に配置していたとみられる。また、高台内にも３箇所メアトがある。高台の先端、外面の稜線、内面の底部は釉が剥げ落ちている。断面に黒ずむ箇所があり、破損後に罹災したようである。416は内弯する体部をもつ。緑色の釉が斑点となって付着する。高台内にも淡く釉がかかる。417は内弯する体部をもつ。内・外面とも平均的に釉がかかり、細かい貫入がみられるため、調整は観察できない。高台は輪高台と蛇の目高台の中間的な形状をもつ。器面は鏡のように平滑に仕上がる。釉の発色は一様でなく、白濁部分が混じる。436などとともに猿投産の優品である。418は口径25㎝に達する大型の稜椀である。外側の稜線はにぶい。高台部分は欠損する。釉は均質で美しいが、外面の稜線部は釉が剥げ落ちている。419は口径29㎝、器高9.6㎝に復元できる大型の椀である。破片数は少なかったが、底部から口縁部まで残存し、図のように復元できた。釉は平均的にかかる。底部中央の陰刻花文は413に描かれた花弁の外側にさらに花弁が描かれている。口縁部下にも陰刻花文がある。高台内も丁寧にヘラミガキを施す。

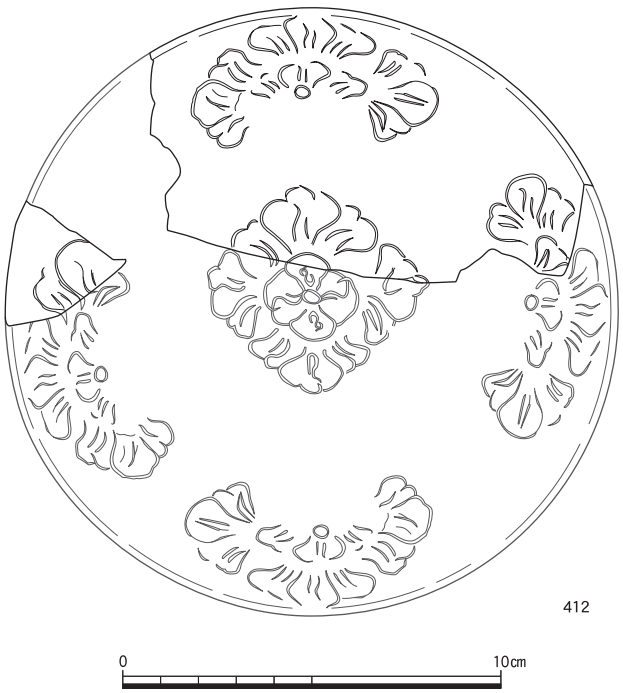


図20　陰刻花文の復元１（緑釉陶器椀の内面、１：２）

420～429は山城産の製品である。421・425・427は稜椀、420・422・424は輪花椀、426は陰刻花文をもつ椀、423・427は底部内面に凹線をめぐらせる椀である。外面下半はヘラケズリを施し、上半はヨコナデで調整する。内面もヨコナデで調整した後、ヘラミガキを施すものが多い。高台はすべて削り出しによるもので、420・421・429は平高台、422・423・427は輪高台、424～426・

428は蛇の目高台である。以下、猿投産と同じく口径順に解説する。

420は小型の椀で、内・外面ともヨコナデで調整する。釉は厚く、銀化しており、細部は観察できない。高台は糸切り跡がそのまま残る。高台を含めた全面に施釉する。なお、墨72とした緑釉陶器椀も底部は糸切り跡をとどめるが、無釉であったため墨書されたとみられる。421はやや小さめの稜椀である。高台は糸切り跡をヘラで消している。高台面のみ無釉である。422は口縁端部を押圧し輪花とする。押圧は押し込みが浅く、４分割と推定される。高台内は無釉である。焼成は須恵器に近い。423は内面中央に太くて鈍い凹線がめぐる。高台内にはケズリ跡が残る。高台内を含めた全面に施釉する。猿投産の408～410に類似するが、稚拙さは否めない。424は口縁端部を押圧し輪花とする。輪花の配置は４分割とみられる。内面は底部と体部の境に段が付く。高台面に凹線がめぐり、蛇の目高台風に仕上げている。425は稜椀であるが、外面の稜線は鈍い。稜線の下半にはヘラミガキを施す。高台は中央部を削り取る。全面に施釉する。426は直線的に外上方に延びる体部をもつ。口縁部下に描かれた陰刻花文は、３個配置される。文様の上下方向は412と同様であるが、花弁数は少なく、文様自体も稚拙である。底部内面には花文は描かれない。427は体部が深く、外上方に直線的に延びる。内面の体部中位に稜線をもつが、外面には対応する稜線はみられない。高台内まで丁寧に釉がかかる。428は口縁部を欠損する。内面は底部と体部との境界に段が付く。高台は424と同様、高台面に沈線をめぐらせただけで仕上げている。高台中央のみ無釉である。内・外面の釉は銀化が顕著である。429は底部付近の破片である。内面は底部と体部の境界に段が付く。高台面も含めた全面に施釉する。

430は近江産の製品で、丸く内弯する体部をもつ。内・外面はヨコナデで調整し、ヘラケズリやヘラミガキはみられない。高台は貼り付けによる輪高台で、内側に段が付く。高台内部まで施釉する。

431は美濃産の製品で、直線的に外上方に延びる体部をもつ。外面はヘラケズリを施す。内面はヨコナデで調整し、底部には凹線がめぐる。高台は貼り付けによる輪高台で、内側には近江産の430と同様の段が付く。全面に施釉する。

432は防長産の製品である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は外反する。外面はヘラケズリ、内面はヨコナデとみられる。内・外面とも厚く施釉し、特に内面は釉が溶け出している。高台は貼り付けによる輪高台で、端部は明確な面をもたない。全体に深い緑色を呈する。防長産とみられる破片は他に３点出土している。

皿（433～442）　椀に比べると図示できる個体は少ない。433～436は猿投産、437～439は山城産、440・441は近江産、442は近江産あるいは美濃産の製品である。433は体部中位に稜が付く稜皿、436は内面に段差が付く段皿で、435・438も口縁部を軽く上方に折り曲げる。434・435・437は輪花皿。436・439は陰刻花文を施す。また、438・440を除く個体の底部内面には凹線がめぐる。

433～436は猿投産の製品である。外面はヘラケズリの後にヘラミガキを施す。内面はヨコナデの後にヘラミガキを施す。ヘラミガキを省略する個体もみられる。高台はすべて貼り付けによる

輪高台である。

433は口縁部を上方に折る稜皿である。口縁部、体部、底部の境界には凹線がめぐる。凹線の直径は外側が約11㎝、内側が6.1㎝ある。内側の凹線は始点と終点が一致しない。高台内を含め全面に施釉する。仕上がりが美しい製品である。434・435は浅い体部をもつ。口縁端部は１対の輪花とし、底部には凹線がめぐる。凹線の直径は３㎝である。434は高台内の一部が無釉であるが、435は高台内を含めた全面に施釉する。436は体部が外反気味に外上方に延びる。内面中位に段が付く段皿であるが、段以下は欠損する。口縁部より下には精緻な陰刻花文を施す。配置は４方向とみられ、花文間にも円形や波状の小さな文様も配置される。丁寧に仕上げられた優品である。

437～439は山城産の製品である。外面はヘラケズリの後にヘラミガキを施す。内面もヘラミガキを施す。ヘラミガキを省略する個体もある。高台はすべて削り出しによる輪高台である。

437は口縁端部を押圧し輪花とするが、配置は不明である。底部内面には凹線がめぐる。凹線の直径は3.6㎝ある。高台は中央がやや厚い。高台内を含めた全面に施釉する。438は口径がやや大きい。口縁部の下には鈍い稜線がめぐる。底部内面は一方向にヘラミガキを施す。高台は中央が厚い。釉はハケ塗りであったとみられる。高台内を含めた全面を施釉する。439は体部が緩やかに内弯する。底部には浅い凹線がめぐるが、他ほど目立たない。高台は器壁が厚い。底部と口縁部下に陰刻花文を施すが、文様は退化が顕著である。口縁部下の花文は蝶のようにみえる。

440・441は近江産の製品である。440は口径11.0㎝ある小型品で、底部から短い口縁部が立ち上がる。内・外面ともヨコナデで調整する。釉は厚い。高台は貼り付けによる輪高台で、高台の内側には段が付く。高台内には糸切り跡が確認できる。また、高台端面の３箇所に圧痕がある。高台端面まで施釉し、それより内側は無釉である。441は平坦な底部から外上方に延びる体部をもつ。内・外面はヨコナデ調整のみで、内面の底部と体部の境界に凹線がめぐる。凹線の直径は7.2㎝である。高台は貼り付けによる輪高台で、内側に浅い段が付く。高台内には糸切り跡が残り、無釉である。硬質で須恵質の状態で施釉する。

442は近江産あるいは美濃産とみられる製品である。体部は外反気味に延びる。内・外面はヨコナデで調整し、内面の底部、体部との境界、その内側にそれぞれ凹線がめぐる。凹線の直径は外から8.7㎝、6.7㎝、4.0㎝で、中央の凹線は浅い。高台は貼り付けによる輪高台で、内側に段が付く。底部断面は中央がやや厚い。高台内を含め全面に施釉する。

耳皿（443・444）　２点ある。443は美濃産、444は山城産である。

443は半分程度が残存する。外面はヘラケズリの後にヘラミガキを施し、内面もヘラミガキを施す。外側を５箇所押圧して耳を形成する。高台は貼り付けによる輪高台で、底部と高台との境には隙間が生じている。444は一方の長端部が欠損する。ヨコナデで皿を製作した後に、両側から指で押圧して耳を形成する。底部は糸切りによる平高台で、釉は内面と高台全面にかかるが、外面の約３分の１は無釉である。無釉部分には墨痕が付着する。

香炉（445～447、図21）　445は口径17.2㎝ある大型品で、脚部先端は大半欠損するが、体部はほぼ完存する。内・外面の調整はヨコナデで、高台内のみヘラミガキを施す。内面の底部もヘラ

ミガキの可能性がある。底部中央に数字「二」が線刻されている（図21）。後述する447にも数字「十」が線刻されるため、「二」も数字とみて大過ない。受部は段をなし、内側に折れる。体部は凹凸がなく、上端に１条の沈線がめぐる。脚部は外反し、端部は垂直の面をもつ。脚部の中位には涙滴形の透かし孔が１対向かい合い、それを３方向に配置する。１対のみ完存するが、残り２対は下半が欠損する。均質の釉が全面に施された美しい製品である。稜線には釉の剥がれがみられる。446は体部の４分の１が残存し、脚部は欠損する。内・外面ともヨコナデで調整し、底部外面のみヘラミガキを施す。体部の上半に２条、下端に１条の沈線がめぐる。体部内面は凹凸が顕著である。また内面には緑色の斑点が点在し、この状態は椀（416）に類似する。体部下端から段を設けず、そのまま脚部に至る。透かしは円孔で、心々2.4㎝離れて穿たれる。脚部の形状は不明である。447は445の小型品で、底部付近が残存する。内・外面ともヨコナデで調整し、高台内部のみヘラミガキを施す。脚部の先端は外反し、端部は垂直の面をもつ。脚部の中位に涙滴形の透かし孔を１対向かい合わせで配置する。445のように３対あったかは、確認できない。

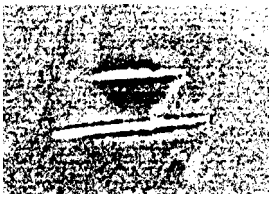


図21　緑釉陶器の記号拓影
（香炉身の底部内面、１：１）

香炉蓋（448～450、図22）　448は口径13.0㎝ある。内・外面ともにヨコナデで調整したとみられるが、釉が厚く手法は観察できない。天井部のつまみは欠損する。中心からみて４重の透かし孔と、その間を埋める陰刻花文からなる。孔の配置を復元すると、中心に近い箇所に４個、その外側に半月形の孔が向かい合わせで４対（８個）、やや外側に涙滴形の孔が４対（８個）、最も外側に菱形の孔が４個あり、孔の合計は24個となる。陰刻花文はそれぞれの透かし孔の間を埋めるように配置される。大別すると、中心から外側に向かう主文様と外側から中心に向かう副文様、その間を埋める枝文様からなる。孔と花文は複雑に配置されたようにみえるが、実際には１つの文様単位が４回繰り返されている（図22）。天井部と体部の境界には沈線が２条めぐり、口縁端部にも同様の沈線が１条めぐる。全面に施釉された美しい仕上がりの製品で、釉は449ほど銀化していない。外面の一部は釉が剥げかかる。449は口径7.7㎝の小型品である。

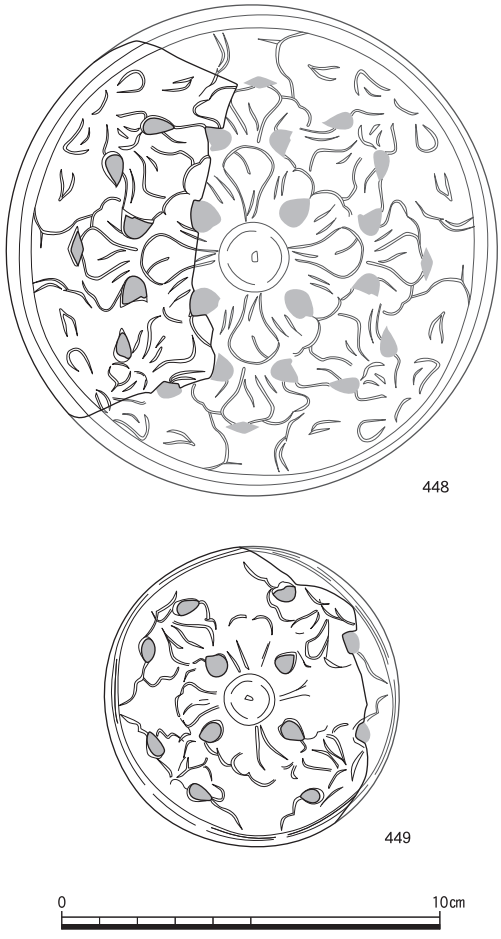


図22　陰刻花文の復元２
（緑釉陶器香炉蓋の外面、１：２）

内・外面とも釉が厚くかかり、手法は観察できない。宝珠つまみの周囲に４個、その外側に８個の透かし孔を配置する。12個はすべて涙滴形を呈する。透かし孔と陰刻花文の配置は、上記448の１重目と３重目の構成を取り入れている。沈線の配置も448と同じである。釉は全面に均質にかかり、銀化して金属器の質感がある。小型で美しい製品は女性好みの印象を受ける。450は宝珠つまみを中心とした部分が残存するが、透かし孔はみられない。外面はヘラミガキとみられる。陰刻花文が２箇所みられ、全面に陰刻花文が展開していたことがわかる。内面はヨコナデの後、ヘラミガキを施したとみられる。

蓋（451）　蓋と考えたが、具体的な形状は提示できない。内・外面はヨコナデで調整し、天井部には蓮弁が放射状に線刻されている。花弁は３枚以上ある。内面は無文である。釉は均質にかかり、美しく仕上がっている。

壷（452）　花瓶の口縁部である。外反した後に立ち上がり、端部は面をもつ。内・外面はヨコナデで調整し、ヘラミガキを加える。外面の稜線部分は釉が剥げ落ちている。

唾壷（453）　唾壷の体部上半である。体部外面はヘラミガキ、内面はヨコナデのみで、体部の内側には口頸部を差し込んだ際の接合痕跡が観察できる。

陰刻花文（454～462）　小片に陰刻花文を施した個体が９点検出できたので、それらを提示する。山城産の壷１点（462）以外はすべて猿投産の椀・皿である。454～457は体部・口縁部である。455は傾斜が浅いため皿の可能性があるが、それ以外の３点は椀の内面に花文を施している。458～461は椀、あるいは皿の底部中央に花文を施したものである。459は厚みがあるため、口径が大きい椀の可能性がある。462は壷肩部に花文を施したもので、焼成は須恵質である。

白色土器には椀、皿がある。13点を図示する。椀が６点、皿が７点としたが、高台付近だけの個体は所属が不確定である。高台はすべて削り出しによる。

椀（463～468）　463は口径10.5㎝の小型の椀である。体部は内弯気味に外上方に延びる。底部は平高台で、糸切り跡をとどめる。高台周囲には粘土の削りかすが残る。内面はヨコナデで調整し、部分的にヘラミガキを施す。底部に墨痕が残り、中央は平滑で、硯に転用されたとみられる。464は口径11.4㎝ある。体部は直線的に外上方に延びる。底部は平高台で、糸切り跡をとどめるが、約半分はヘラでナデ消され、周囲もヘラで整えられている。内面底部を中心にヘラミガキを施す。465は椀の体部・口縁部である。内・外面はヨコナデで調整し、外面下半のみヘラケズリを施す。466は平高台をもつ。外面はヘラミガキの可能性があり、内面もヘラミガキを施す。中心部は平滑である。467は輪高台をもち、高台と体部はヘラケズリを施す。内面はヨコナデで調整する。468は輪高台をもつが、高台中央はヘラケズリが浅い。器表は磨滅している。

皿（469～475）　469は口縁端部をわずかに欠損する。底部は輪高台で、中央はヘラケズリが浅い。ヘラケズリは体部下半のみ施す。ヘラの方向は底部から見ると反時計回りである。口縁部の外面上半と内面はすべてヨコナデで調整する。470は蛇の目高台をもつ。内・外面はヘラミガキで平滑化されるが、内面は器表が磨滅する。内面には墨痕が残り、硯に転用された可能性がある。471は輪高台をもち、高台縁はヘラで調整されている。外面はヘラケズリで、高台内と内面はヘラ

ミガキを施す。472は輪高台をもつ。内・外面は磨滅が著しい。473は蛇の目高台をもつ。高台は470に類似する。高台周囲もヘラで輪郭を整える。内面は磨滅する。474は輪高台をもつが、ヘラケズリは雑で、中央には粘土片が残存する。475は蛇の目高台をもち、高台面には糸切り痕跡が残る。後にヘラで溝をめぐらせ、蛇の目高台風に仕上げている。

灰釉陶器には椀、皿、壷蓋、壷がある。緑釉陶器に比べると、点数は著しく少ない。墨書土器が５点出土している（墨73～墨77)。産地は、大半が猿投産であるが、481・484～486は美濃産（東濃産を含む）である。猿投産は厚手で重量感があるが、美濃産は薄手で軽く、質感も後の山茶椀に類似する。

皿（476～482）　外面はヘラケズリを施し、内面はヨコナデで調整する。内面中央には重ね焼きの痕跡が残る。高台はすべて貼り付けによる輪高台である。

476は浅い体部をもつ。口縁部下には鈍い稜線が付く。内面は極めて平滑である。中央は無釉で、墨痕が付着するため、硯に転用されたとみられる。高台内にも墨痕が付着する。釉は漬け掛けで施釉する。釉と無釉の境界は明瞭である。477は釉が厚く調整は観察できない。口縁部下は476ほどの稜線はないが、端部は上方に折れて終わる。内面には炭化物らしき黒色の付着物が３箇所に付着する。底部は無釉で、平滑に仕上げられるが、墨痕はみられない。高台内は無釉で、ヘラケズリの痕跡が確認できる。なお、この個体と後述する478の内・外面は、まだら状に釉がかかる。478は釉のため調整は観察できない。口縁部下に稜線はなく、その下がやや膨らむ。底部内面は無釉で、平滑に仕上げられているが、硯に利用されかは判定できない。高台内は無釉で、ヘラケズリ跡が観察できる。479は内面の体部中位に段が付く段皿である。外面はヨコナデで調整するが、内面は釉のため調整は観察できない。高台内にはヘラ切り跡が残る。480は口径19.0㎝ある大型品である。底部内面には重ね焼きの痕跡があるが、全面に施釉する。釉下に墨痕が付着する。高台は端部まで釉がかかる。釉は厚く塗られ、白濁し、外面では垂下する。481は、底部は平滑であるが、墨痕はない。高台内は無釉である。482は底部にも薄く釉がかかる。高台内に墨痕が付着する。

椀（483～490）　外面はヘラケズリを施し、内面はヨコナデで調整する。多くの個体は、内面中央に重ね焼きの痕跡が残る。高台は、489が貼り付けによる蛇の目輪高台、それ以外はすべて貼り付けによる輪高台である。

483は口径9.9㎝の小型品である。外面は口縁下に淡い釉がかかり、白濁部分は釉が剥離する。白濁した釉の状態は、480・484に類似する。底部は無釉で、高台内にはヘラケズリの痕跡が残る。484は薄手で軽い。外面は漬け掛けによるため、釉の範囲は明瞭である。底部は無釉である。口縁部付近の釉は白濁化し、剥離する部分もある。内面は底部のみ無釉で、重ね焼きの痕跡はみられない。高台内にはヘラケズリの痕跡が残る。ヘラは半時計回りである。485は体部の３分の１が残存する。口縁部は歪みが大きい。外面はほぼ無釉で光沢感があり、内面の釉は淡い。底部は無釉である。中央にハケメを施した痕跡がある。高台は調整が雑で、隙間が生じている。高台内には糸切り跡が残る。486は口縁端部がわずかに波打つ。外面は無釉で山茶椀に類似し、内面は淡い釉

がかかる。487は底部付近まで釉がかかる。底部内面は平滑で、硯に転用された可能性がある。高台先端は剥がれた跡がある。高台内は無釉でヘラケズリの痕跡が残る。488は底部付近まで淡い釉がかかる。内面は全面に施釉する。底部には小さな窯壁片がほぼ均等に付着する。高台の内・外は無釉である。489は残存範囲に釉はみられない。内面は底部以外に施釉し、重ね焼きの痕跡はみられない。底部には墨痕が付き、平滑であるため、硯に転用されたとみられる。490は底部との境に凹線がめぐるが、凹線は一周しない。高台は高さ1.1㎝あり、487に次いで高い。

壷蓋（491）　内側に返りが付く蓋である。外面は釉が厚くかかり、細部は観察できない。天井は直径４㎝ほどが平らに作られる。中央につまみを貼り付ける。つまみは上方を直角に折り曲げており、形状は鳥の頭部の様にみえる。内面の返りは直径5.4㎝あり、口径６㎝前後の壷に装着されていたとみられる。

壷（492～496）　492は口頸部で、端部は欠損する。内・外面ともヨコナデで調整する。釉は外面の口頸部下半に厚くかかり、内面は垂下する。体部と口頸部の接合痕跡は明瞭に観察できる。493は口縁部を除く大半が完存する。内・外面はヨコナデで調整し、底部周辺のみヘラケズリを施す。外面下半に「上」と読める墨書がある。釉は漬け掛けし、外面では波状を呈する。底部は糸切りで、一方向に引き出した際の痕跡が観察できる。底部中央に「一」のヘラ記号がある。494は壷の口縁部で、端部は垂直の面をもつ。内・外面ともヨコナデで調整する。釉は外面がやや厚く、内面は薄い。495は壷の底部である。外面はヘラケズリを施す。内面はヨコナデで調整する。底部に釉がかかる。貼り付けによる輪高台をもつ。高台端面は内側に傾斜して段が付く。496は壷の体部である。最大径は中位にあり、肩は張らない。外面はヘラケズリを施すが、自然釉が厚くかかり、ヘラケズリの上端は確認できない。外面の釉は垂下する。中位に把手の剥離した痕跡がある。剥離面の直径は２㎝あり、上方５㎝ほどにも同様の剥離痕跡があるため、太めの半輪状把手が上下方向に付いていたとみられる。内面は破片の範囲にのみ墨痕が付く。断面にも墨痕が付くことや破片中央が平滑であることから、この状態で硯として使用されたと推定できる。

輸入陶磁器には青磁、白磁、褐釉、白釉緑彩がある。

青磁には椀、合子蓋、合子身、壷がある。全破片数は30片、個体数は21点とみられる。皿は確認できない。

椀（497～499）　497は体部が直線的に外上方に延びる。高台は削り出しによる蛇の目高台で、メアトが５箇所以上残る。端面は露胎である。外面はヘラケズリを施し、口縁部付近から内面にかけてはヨコナデで調整する。全面に施釉する。この個体に類似した体部片が他に１点あるが、図示できない。498は体部が丸みをもち、端部はそのままで終わる。499は体部が丸みをもつ。器壁はやや厚い。輪高台は先端が欠損する。

合子蓋（500・501）　500は直径5.4㎝の小型品であるが、蓋の上面には精緻な陰刻花文を施釉前に施す。この陰刻花文は、中央には四葉の花弁、外側にも菱形の花弁が配置され、緑釉陶器の陰刻花文と類似する。口縁端部は露胎でメアトが残るが、それ以外は全面に施釉された小型の最上品である。女性が愛用した製品であったと推測できる。501は500より大型の蓋で、口径7.8㎝あ

る。口縁部と体部と境界には沈線がめぐり、天井部には環状のつまみが付く。つまみの断面は、三角形を呈する。天井部は非常に厚みがある。施釉は口縁端部まで及ぶが、内面は露胎で、メアトが残る。こちらも全面に施釉された美しい製品である。

合子（502）　立ち上がりは短く内傾する。高台は削り出しによる輪高台で、ヘラケズリの痕跡が顕著である。体部外面は受部直下までヘラケズリで成形する。受部の先端は非常に鋭利である。ヘラケズリの単位は広い。内面はヨコナデで調整する。高台は露胎でメアトが残る。内面にメアトは見られない。全面に施釉するが、立ち上がりと内面の一部には釉が及ばない範囲がある。

白磁には椀、皿、壷がある。全破片数は54片、個体数は28点とみられる。

椀（503～508）　503は体部が内弯気味で、口縁端部の玉縁はやや幅が広い。内・外全面に釉がかかるが、体部下端にはかからない部分がある。高台は削り出しによる蛇の目高台で、無釉である。504も同様の器形であるが、体部は503より直線的に外上方に延びる。端部の玉縁もやや小さい。底部は蛇の目高台で、すべて無釉である。内・外面は釉が厚くかかり、手法は観察できない。505は体部が内弯気味で、503に類似する。口縁端部の玉縁は小さい。高台は蛇の目高台で、接地面は無釉であるが、内側には釉がかかる。506は体部から口縁部の破片で、上記椀と同様の特徴をもつ。同様の玉縁をもつ口縁端部片が他に４点ある。507・508は口縁部から体部を輪花とした椀である。輪花は５方向に配置され、タテ方向に筋を入れるようして外面側から押圧し、内側が盛り上がる。体部はやや内弯気味で、端部はそのまま終わる。高台は削り出しによる輪高台で、無釉である。内面の底部と体部の境には段がある。外面はヘラケズリを施す。507の方が器壁は厚く押圧も緩やかである。

皿（509）　体部が大きく外反する稜皿で、五輪花皿でもある。口縁端部は小さな切り込みを入れて花弁状とし、内面は周囲の粘土をタテ方向に盛って、稜を形成する。高台は削り出しによる輪高台で、接地面と内側は無釉である。それ以外は白色釉が全面にかかる。本品も仕上がりが美しい優品である。

托（510）　残存する３片はそれぞれ接合しないが、口径13.5㎝あり、五輪花托に復元できる[5)]。口縁端部は浅い切り込みを入れて花弁状をなし、内面は切り込み下方に稜を形成する。稜の盛り方は509と同じである。切り込みの両側は端部を内側に折って耳皿状に成形する。内・外面ともに破片の下端には段があり、そこから窪んで底部に達していたとみられる。

褐釉壷（511）　底部から12.6㎝上まで残存する。底部はほぼ完存する。底面はヘラケズリで成形し、白色のメアトが残る。部分的に赤紫色の露胎がみられる。外面はすべてヘラケズリを施す。ヘラの方向は図の左から右である。底部との境から約１㎝上を削り込んで段を形成する。上から４㎝ほどの範囲には褐釉がかかる。内面はヨコナデで調整するが、下半は凹凸が顕著で、９条以上の溝として認識できる。工具を当てて施文したようにもみえる。底部には釉が１滴落下している。

白釉緑彩（512）　四耳壷、あるいは双耳壷の体部上半部の破片である。肩部に把手が貼り付けられる。把手自体は欠損するが、把手間には文様が浮き出しで表現される。把手上の凹部には緑の釉が残る。内面はヨコナデで調整する。

二彩陶器壷（513）　最長8.5㎝程の底部片である。高台は欠落し、体部側には接合する際の筋が３条刻まれている。釉は、体部外面は緑色と白色、高台内は白色、内面は白色と緑色が残存する。

溝114（図版38）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。平安京Ⅲ期古～中に属する。

土師器には皿、高杯、甕、羽釜がある。

皿（187・188）　２点とも口縁部の小片で口径は復元できない。器壁は薄く、端部は外反し、上方におさめる。

甕（189）　短く外反する口縁部をもつ。口縁部はヨコナデで調整し、体部はオサエのみである。外面には煤が付着する。内面は赤く変色する。

須恵器には杯蓋、杯、椀、鉢　壷、甕がある。

杯蓋（190）　口縁部から体部の破片である。体部は扁平で、つまみの有無は不明である。

杯（191・192）　191は高台が付かないもので、体部は外に広がる。器壁は厚く、調整も丁寧さに欠ける。底部はヘラ切りのままである。192は底部に高台をもつ杯である。

鉢（193・194）　両方とも口縁端部は縦長の玉縁状を呈する。193は口径16㎝台に復元できるが、194は破片が小さく口径は復元できない。

緑釉陶器には椀、壷、耳皿がある。

壷（195）　底部付近の破片である。高台は貼り付けによる輪高台で、端部は内側に面をもつ。緑釉は外面全面と内面の一部にかかる。近江産。

灰釉陶器には椀、壷がある。

椀（196）　内弯する体部をもち、底部には貼り付けによる輪高台が付く。

溝110（図版38）

土師器、須恵器、陶器がある。墨書土器が１点出土している（墨80）。平安京Ⅴ期中～新に属する。

土師器皿（197～202）　197・198は口径９㎝前後で小型品、199・200は口径13㎝前後で中型品、201・202は口径16㎝前後で大型品に属する。199～202の口縁部外面のヨコナデは二段ナデである。197・198・201は後述する溝107との境界が不明瞭な場所から出土している。

須恵器には壷、甕があるが図示できない。

陶器擂鉢（203）　口縁端部は肥厚せず、体部の延長のままで終わる。内面には擂目があり、中世以降の製品が混入したものとみられる。

（２）江戸時代

溝107（図版38）

土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器がある。京都XI期古～中に属する。

土師器皿（204）　体部は外上方に延びる。内面は底部と体部の境に段が付く。口縁部には油煙が付着する。

焼塩壷（205）　直立する体部をもつ厚手の製品である。口縁部はヨコナデで調整し、体部はナデとオサエで調整する。

染付磁器椀（206・207）　206は内弯する体部外面に呉須で文様が描かれる。207は角形を呈する椀で、外面には呉須で唐草状の文様を描く。

溝145（図版38）

土師器、施釉陶器、焼締陶器、国産磁器がある。京都ⅩⅢ期に属するとみられる。墨書土器が１点（墨81）出土しているが、これは平安時代前期の遺物が混入したものである。

焼締陶器擂鉢（208・209）　208は口縁部が上方に折れるが、外面には沈線は施さない。内面の擂目は幅1.6㎝の間に７本刻まれ、相互の間隔は密である。信楽産。209は口縁部が内側に肥厚する。内面の擂目は幅2.1㎝の間に５本あり、非常に粗い。丹波産。

施釉陶器椀（210）　体部が垂直に立ち上がる角形の椀である。黒色を呈する鉄釉は、内面の口縁部直下と外面の高台内にはかからない。

国産磁器香炉（211）　垂直に立ち上がる体部をもち、端部は内側に肥厚する。青磁釉は外面と内面の上半部にかかる。

（３）その他

弥生土器（図23）

５点出土している。514は甕の体部から口縁部にかけての破片である。外面にはヘラ描き沈線が２条確認できる。弥生土器前期に属する。池117出土。515は壷の口縁部である。端部は上下に拡張し、凹線が２条巡るが、磨滅している。弥生時代中期に属する。池117出土。516は甕の口縁部とみられるが、細部は不明である。池117上面出土。517は甕の底部である。内・外面は磨滅が著しく、調整は不明である。胎土に砂を多く含む。池117上面出土。518は壷の底部である。器壁は磨滅が著しく、調整方法は観察できない。胎土には砂粒を多く含む。底部径約６㎝。１区地山直上から出土。

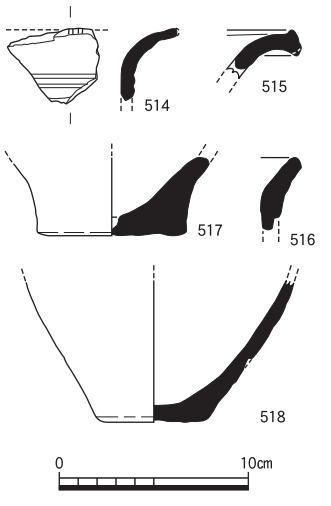


図23　弥生土器実測図（１：４）

３．瓦　類

各調査区から、軒瓦、丸・平瓦、鬼瓦などの瓦類が多く出土しているが、もっともまとまっているのが３区の池250から出土した資料群である。ここでは出土地点における各様相を明らかにするため、六町域と七町域の各遺構や条坊路から出土した軒瓦などについて報告し、丸・平瓦については９世紀初頭の井戸470と、９世紀後半の池250の資料について概説を行う。

（１）六町域出土軒瓦（図版49・50・116・117）

六町域の遺構は、９世紀初頭の池300・池370・井戸470・整地層475と、９世紀後半の池250と溝43に分かれる。前者の遺構から出土した軒瓦は、旧都搬入瓦が多い。

瓦１は難波宮式の重圏文軒丸瓦である。瓦当裏面はタテヘラケズリで調整し、側面はケズリ後にナデ調整を施す。池370から出土した。瓦３は平城宮6151Aa型式軒丸瓦である[6)]。調整は磨滅のため不明である。瓦５は平城宮6307B型式軒丸瓦である。瓦当裏面は、文様表出のため瓦笵に薄く詰め込んだ粘土で剥離する。丸瓦は瓦当面近くまで深く差しこみ、側面上半はタテヘラケズリで調整する。瓦７は長岡宮7171型式軒丸瓦である[7)]。丸瓦接合のため瓦当裏面にユビナデで接合溝を施す。瓦３・５・７は池300から出土した。瓦６は長岡宮7133型式軒丸瓦である。側面上半はタテヘラケズリで、文様部側はヨコナデ調整を施す。井戸470から出土した。このほか、池300の南方で検出した耕作溝から瓦４が出土した。接合丸瓦の凸面に縄叩きが明瞭に残る。胎土観察から、吉志部瓦窯産のKa2型式と考えられる[8)]。

軒平瓦では、平城宮6664型式の瓦22と、平城宮6663C型式の瓦23が整地層475から出土した。瓦22はナデ調整の段顎で、瓦23はヘラケズリによって平坦面の狭い曲線顎とし、ヨコナデで仕上げる。凹面は両者ともにヨコヘラケズリを施す。平城宮6663C型式は瓦24として池370からも出土している。このほか、池300東端の耕作溝中から平城宮6671C型式である瓦21が出土した。ナデ調整を施す直線顎をもつ。また、井戸470からは瓦25が出土している。ヨコナデによって平坦面の広い曲線顎に仕上げており、平瓦部凸面にはヨコ縄叩きが残る。文様面から6.5～10㎝の位置に朱線が認められる。凹面文様部側はヨコヘラケズリを施す。須恵質で粗い砂粒を多く含み、胎土観察から西賀茂瓦窯NS205A型式と考えられる[9)]。

９世紀後半の池250と溝43からも旧都搬入瓦が出土する。瓦２は難波宮式重圏文軒丸瓦である。瓦当裏面はユビナデ、側面上半から丸瓦部にかけてタテヘラケズリ、側面下半はヨコヘラケズリを施す。瓦20は難波宮式重郭文軒平瓦である。凸面はタテヘラケズリによる直線顎で、一部に縄叩きが認められる。凹面もヘラケズリとナデで布目を丁寧に消している。瓦27・28は平城宮6721型式軒平瓦である。瓦27は文様部で剥離するが、瓦28はやや広い平坦面をもち、ナデ調整で仕上げる。瓦29は平城宮6732型式軒平瓦である。やや広い平坦面をもつ曲線顎は、タテヘラケズリとナデで成形する。瓦30はヘラケズリによる直線顎をもつ唐草文軒平瓦である。胎土は緻密で、平城宮6685型式系統の搬入軒平瓦と考えられる。瓦２・27～30は池250、瓦20は溝43から出土した。池250の主流となる軒丸瓦は、瓦８～14の単弁十六弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面はヘラケズリやナデで平坦に仕上げ、丸瓦接合部にユビナデで溝を穿ち支持ナデも認められる。瓦８・10の向かって左側外区の珠文間に、瓦笵に刻んだ「近」字を正字で陽出するが表出は明瞭でなく、瓦９では表出すべき場所に文字は確認できない。冷然院周辺や、右京六条一坊五町の調査でまとまって出土している[10)]。瓦15は接合式の細弁蓮華文軒丸瓦で、右京職推定地である右京三条一坊三町の調査で出土している。このほか、小野瓦窯産の一本作り軒丸瓦（瓦16～18）と、栗栖野瓦窯産の

一本作り軒丸瓦（瓦19）が出土した[11]。

池250から出土した平安時代の軒平瓦は、瓦26が西賀茂瓦窯産のNS205A型式、瓦31がNS203型式軒平瓦である。瓦26は砂粒を多く含み西賀茂瓦窯産であることが確実であるが、文様面の剥離資料である瓦31は胎土が緻密であり、長岡宮からの搬入瓦の可能性もある。瓦32は、一本作り軒丸瓦（瓦16～19）に対応する均整唐草文軒平瓦である。ヘラケズリとナデによって、段差のある浅い曲線顎を形成する。

なお、池250の北岸埋没後に穿たれた耕作溝から、平安時代後期の讃岐産の連巴文軒平瓦（瓦35）が出土している[12]。断面撥形を呈し、凸面には斜め方向の粗い縄叩きが認められる。

（２）三条坊門小路・西坊城小路出土軒瓦（図版51・52・116・118・119）

三条坊門小路南側溝に相当する溝110・107は、それぞれ平安時代後期と江戸時代前期に埋没した溝であるが、出土遺物には前代の平安時代中期までの軒瓦が多く認められる。

個別にみると、軒丸瓦は軒平瓦に比べて少ない。瓦36は長岡宮7133型式の搬入軒丸瓦、瓦37は西賀茂瓦窯産のNS156型式軒丸瓦である。瓦38は瓦15と同笵、瓦39は瓦８～14と同笵の軒丸瓦である。これらは下層の溝110から出土した。瓦40は西賀茂瓦窯産のNS151B型式軒丸瓦である。瓦当裏面をユビナデで平坦に仕上げ、側面はヨコナデ調整を施すが、周縁までかぶる瓦笵の痕跡が明瞭に残る。瓦当裏面上半に丸瓦を押しつけ、ユビ押しで接合部を補強した後に補足粘土で接合するが、接合部できれいに剥離している。上層の溝107から出土した。

軒平瓦は、旧都からの搬入瓦から平安時代中期の瓦まで多く出土している。瓦41・42は難波宮式重郭文軒平瓦である。直線顎の凸面には縄叩きが残り、凹面はナデによって布目を丁寧に消している。瓦44は平城宮6664型式軒平瓦である。瓦45・46は平城宮6721型式軒平瓦である。平坦面の狭い曲線顎で、凹凸面ともにナデ調整で仕上げる。瓦44・45は下層の溝110から、瓦41・42・46は上層の溝107から出土した。

平安時代初頭の軒平瓦は少ないが、瓦47は胎土観察から吉志部瓦窯産のKb4型式軒平瓦である。瓦48と瓦49は、栗栖野瓦窯産と考えられる均整唐草文軒平瓦である。瓦49は段差のある浅い曲線顎で、タテヘラケズリとナデを施す。瓦50と瓦51は小野瓦窯産の複線均整唐草文軒平瓦である。ヘラケズリによってやや広い平坦面をもつ曲線顎を成形し、ナデ調整で仕上げるが一部に布目の圧痕が残る。凹面端部前面はヘラケズリを施す。顎部平坦面から曲線部にかけて朱が付着する。瓦52は蕨手状の唐草が並列的に展開する均整唐草文軒平瓦である。やや大型の軒平瓦で、凸面はタテヘラケズリを施す。同笵軒平瓦は右京職推定地の調査で多く出土している。瓦48～51は下層の溝110から、瓦47・52は上層の溝107から出土した。

三条坊門小路路面155からは軒平瓦が数点出土している。瓦43は平城宮6663型式である。平坦面の狭い曲線顎で、ナデ調整で仕上げる。瓦53と瓦54は、やや大型の平安時代中期の軒平瓦である。瓦54は狭い平坦面から段差をもつ曲線顎で、顎部の調整はナデである。瓦53はやや広い平坦面をもつ曲線顎で、調整は磨滅のため不明である。瓦52と同笵である。

三条坊門小路の北側溝にあたる溝114からは、軒瓦の出土は少ない。瓦55は平城宮6151A型式軒丸瓦である。瓦61は平城宮6663型式軒平瓦である。曲線顎はナデ調整、凹面はヨコヘラケズリである。瓦64は高杯の形状をした中心飾りの上から唐草が三転する独特の文様をもつ軒平瓦である。タテヘラケズリによって曲線顎を成形し、ナデ調整を施す。

なお、溝114からは鬼瓦の外区朱文部にあたる瓦68が出土しており、溝114の南の路面155からも外区朱文部の鬼瓦片（瓦69）が出土した。

さらに、六町域の東端で検出した西坊城小路の西側溝である溝173からは、軒平瓦が３点出土している。瓦65は瓦64と同笵の軒平瓦である。調整は磨滅のため不明。同笵軒平瓦は東隣の右京職推定地で多く出土しており、瓦15・瓦38あるいは瓦52・53とともに右京職関係の軒瓦である[13)]。瓦66は小野瓦窯産の均整唐草文軒平瓦である。曲線顎はタテヘラケズリで成形し、ナデ調整で仕上げる。瓦67は森ヶ東瓦窯産の唐草文軒平瓦である[14)]。

（３）七町域出土軒瓦（図版52・116・118）

七町域では池117の上層掘り下げ中に軒瓦が多く出土しており、これらの軒瓦は池117にともなうものと考えられる。瓦56は胎土観察から吉志部瓦窯産のKa2型式軒丸瓦と考えられる。瓦57は内区蓮華文の磨滅が激しいが、西寺系の複弁蓮華文軒丸瓦である。前者は池117上面から、後者は池117上層掘り下げ中に出土した。瓦58は西賀茂瓦窯NS151B型式と考えられるが、胎土は吉志部瓦窯産軒瓦に類似する。瓦59は西賀茂瓦窯NS156型式軒丸瓦である。瓦58と瓦59は池117本体から出土した。

軒平瓦は、すべて池117上層掘り下げ中に出土している。瓦60は藤原宮6647型式軒平瓦である。段顎で調整はナデと考えられる。瓦62は瓦52・53と同笵の均整唐草文軒平瓦である。瓦63は対向Ｃ字の中心飾りをもつ均整唐草文軒平瓦である。文様面の向かって右端部に笵割れの痕跡が認められる。曲線顎はタテヘラケズリで成形し、ナデ調整を施す。

（４）井戸470・池250出土丸瓦および平瓦（図版50・53・54・119～121、図24）

調査地全域で丸瓦と平瓦の破片が出土したが、遺構にともなう資料は少ない。その中で、井戸470と池250の資料は一括性が高い資料といえる。ここでは、丸・平瓦の分析にあたって、まず各遺構から出土した出土総重量を計測し、丸瓦と平瓦の重量比を明らかにしておく。そして、各遺構から出土した遺存状態の良好な資料について個別に報告することとしたい。

池470では、丸瓦の総重量は6.43kg、平瓦の総重量は36.92kgで、丸瓦と平瓦の重量比は１：5.7である。丸瓦の比率が若干大きいが、これらの比率から熨斗棟に使用された瓦群であることが想定できる。実際に、平瓦の良好な資料の大半が縦に半裁した形状であり、熨斗瓦であったことを裏付けている。

個別資料としては、瓦70が丸瓦である。玉縁部が大きく欠損するが、残存長は40.3㎝、玉縁を除く本体長34.8㎝、幅17㎝である。後述する瓦76の玉縁の長さを勘案すると全体の長さは42㎝前

後に復元できる。凸面の表面は、凍結のためか剥離が激しい。凹面側部には布筒端の縫い閉じ痕跡が確認できる。瓦71～73は凹面に枠板痕跡を残す半裁平瓦である。凸面の縄叩きも若干叩き締めの円弧を示しており、瓦72の凹面には粘土板合わせ目痕跡も確認できる。桶巻き作り平瓦を半分の幅に割って熨斗瓦とする資料である。幅は瓦71が14.2㎝、瓦72が14.1㎝、瓦73が17.0㎝である。瓦75は完存する熨斗瓦で、長さは32.5㎝、幅は14.5㎝である。凹面側端と広端に布端が確認できることから、一枚作りの平瓦を割って熨斗瓦としている。凸面は縦縄叩きである。瓦74は半裁を施さない平瓦である。凹面布目には枠板痕跡は確認できない。凸面は横縄叩きである。総瓦葺きとしての使用は想定できないことから、丸瓦とともに雁振瓦としての利用が考えられる。

つぎに池250の資料であるが、丸瓦の総重量は98.965kg、平瓦の総重量は284.44kgで、丸瓦と平瓦の重量比は１：2.9となり、出土比率からみると総瓦葺きの比率に近い数値がでている。ただ、個々の資料は完形となるものがなく、小破片がほとんどであり、使用実態を直接示すとは考えら

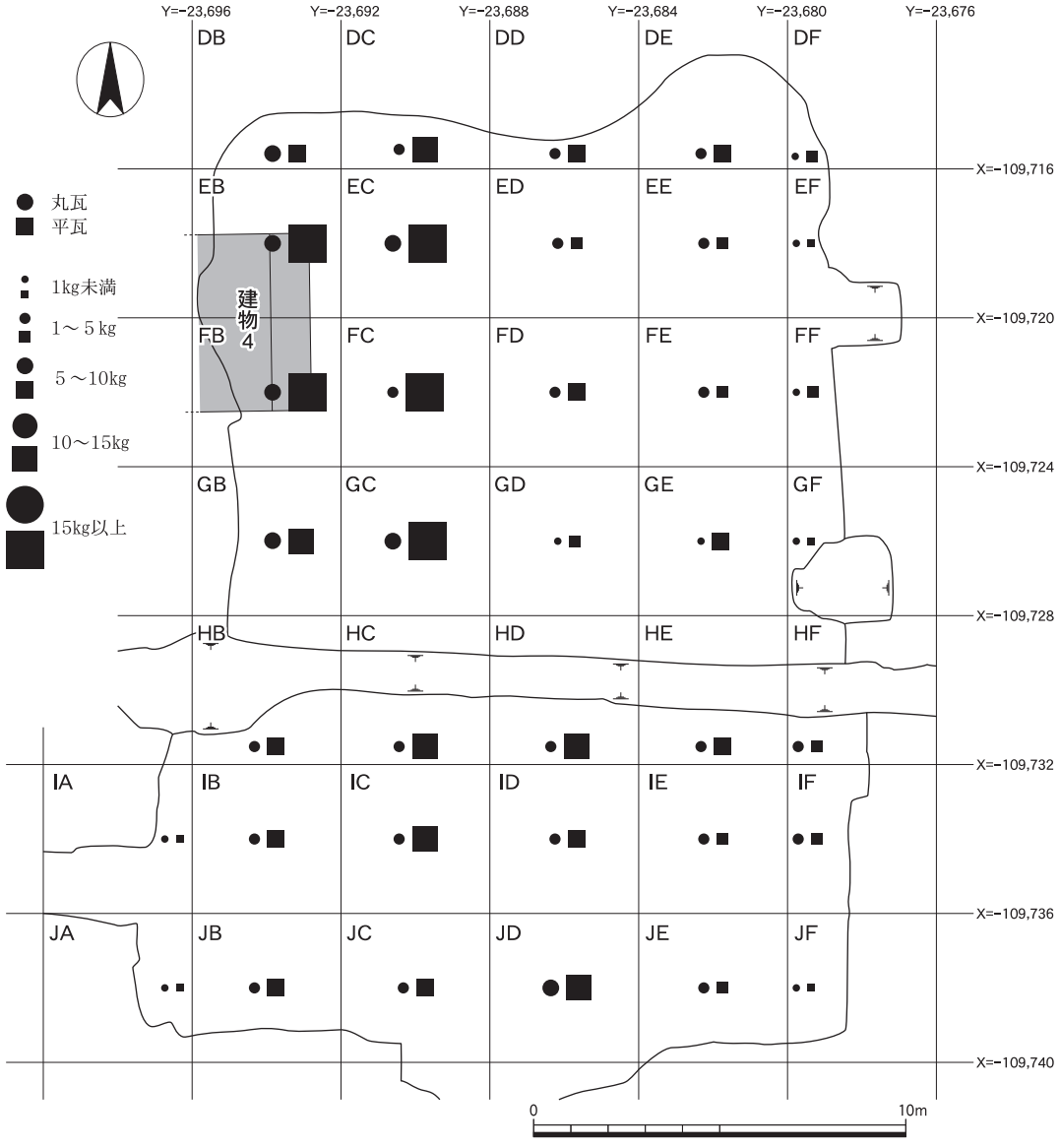


図24　池250出土丸瓦・平瓦の地区別重量集計図（１：200）

れない。遺存状態の良好な平瓦資料をみると、半裁幅の資料がほとんどであり、実際に半裁の目印を施す資料が確認できる。井戸470は遺構の性格から一括性が高いと判断できるが、池250の資料は一度に廃棄されたもののほかに、池の廃絶過程の中で順次廃棄されたものも含まれていることを考慮する必要があろう。

池250の個別資料として、瓦76は丸瓦の玉縁形状や幅が判明する唯一の資料である。残存長19.8㎝、玉縁長7.0㎝、幅16.8㎝で、幅は瓦70とほぼ同じである。凹面布目には布筒の重なり部分に施された布端纏り縫い痕跡が確認でき、凸面には縦縄叩きがかすかに残る。瓦77～81は半裁平瓦で、瓦79と瓦81の凹面には割り位置を示す目印が列点や幅広の刻線で施されており（図中の▲▼）、明らかに熨斗瓦として使用された資料群である。幅は瓦77が16.8㎝、瓦78が16.4㎝、瓦79が17.4㎝、瓦80が17.9㎝、瓦81が17.5㎝であるが、割り位置を明示する瓦79と瓦81をみると、幅14㎝ほどで割ろうとしていたことがわかる。全長は、完存する瓦80で37.7㎝、瓦81で35.0㎝である。凸面はすべて縄叩きで、瓦81では凹型調整台の痕跡が側端に残る。凹面は布目で一部縦ナデを施すが、枠板痕跡は認められない。なお、瓦80と瓦81の凹面には、板状工具で叩いた痕跡が残る。

なお、池250からは凹面に「右」銘を押印した平瓦が出土している。瓦33は押印だけでなく凹面全体を板状工具で叩いており、凸面も縄叩きが若干残るが全体はナデ調整で仕上げる。凹凸面ともに離れ砂が多量に付着する。瓦34は凹面布目、凸面縄叩きで、離れ砂が若干付着する。瓦33・34ともに「右」銘の下が欠損しているが、同印銘平瓦が池田瓦窯から出土しており、「右坊」銘であったことがわかる[15)]。

図24は池250から出土した丸瓦・平瓦を、地区ごとに重量で示したものである。丸瓦・平瓦の重さを記号の大きさで示しており、池の西半部、特にY=-23,688線以西から多く出土して居る。平瓦は15㎏以上、丸瓦は５～10㎏のものが最大であり、平均すると平瓦と丸瓦の比は１：３である。

４．銭　貨（図版55・122、観察表３）

平安時代に鋳造された皇朝十二銭が９枚、室町時代から江戸時代の渡来銭が10枚、江戸時代に鋳造された寛永通寶が５枚出土している。

隆平永寶（銭１）　４番目の鋳造で延暦十五年（796）初鋳である。井戸470の木枠上部から出土した。

承和昌寶（銭２）　６番目の鋳造で承和二年（835）初鋳である。１区中央部で地山直上から出土した。

長年大寶（銭３・４）　７番目の鋳造で嘉祥元年（848）初鋳である。２枚ある。銭３は池250北西部の第３層から、銭４は池250北西部の西肩第２層から出土した。

饒益神寶（銭５）　８番目の鋳造で貞観元年（859）初鋳である。池250西半中央部の第１層から出土した。

貞観永寶（銭６～９）　９番目の鋳造で貞観十二年（870）初鋳である。４枚ある。銭６は池250西肩部の第３層から、銭７・８は池250南西部と中央部の第２層から、銭９は池250南東部で池上面を検出中に出土した。銭８裏面には「笵ずれ」がみられる。銭９裏面には鋳造時の「ばり」が残されている。

渡来銭は10枚ある。１枚は判別不能のため９枚を提示する。北宋銭が８枚、明銭が１枚ある。洪武通寶（銭18）以外のものは、表面の残存状態が良好でなく、特に元豊通寶（銭16・17）は磨滅が著しい。天聖元寶（銭12）の中心孔はやや斜めに傾いている。

国内銭はすべて寛永通寶である。銭19としたものは「古寛永」、それ以外の４枚はすべて「新寛永」である。銭20は裏側に「文」をもつ。

これらより時代が新しい銭貨としては、明治十年の二銭銅貨、大正九年の一銭青銅貨がある。

５．金属製品（図版55・56・122～124、図25、観察表４）

鉄製品と銅製品があり、平安時代と江戸時代のものがある。平安時代のものから解説する。

釘（金１～８）　８本ある。金１のみ井戸470、それ以外は池250からの出土である。金１は頭部が一辺1.4㎝の方形で、身の断面形も方形を呈する。先端は欠損する。金２～７は頭部を叩いて折り曲げたもので、金２～５は両側に、金６・７は片側に延ばしている。全長が判明するものは金２が9.9㎝、金３が9.6㎝、金６が9.2㎝あり、他は先端を欠損する。

鋲（金９～12）　４本ある。頭部に円形の鉄板が付くもので、身の形状は釘と同じである[16)]。金９・10・12は先端まで完存し、長さは金９が3.4㎝、金10が6.2㎝、金12が10.1㎝ある。これらの頭部は、正円形ではなく一方にふくらみがある。また金９の頭部には鉄板を重ねた際の痕跡が残る。金11は頭部の中心からずれた位置に身が付けられている。

銅鏃（金13）　全長5.2㎝の小型品である。鏃身の断面形は菱形を呈し、鏑の両側には細い樋が設けられている。柄側は先端に行くほど太くなり、最後は一段細くなって終わる。鏃身の表面は黒色を呈し、非常に丁寧に製作されている。腐食もなく保存状態は良好である。

毛抜（金14）　完形品であるが、表面には剥離がみられる。頭部は環状を呈し、側面はふくらみをもつ。ふくらみは頭部の先端と左右に、合計５箇所配置される。ふくらみ部の表面には、羽状を呈する左右対称の文様が、毛彫りで表現されている。身の断面は外側に丸みをもつ。この面には金メッキの痕跡がわずかに観察でき、当初は銅地の上に金メッキが施されていたとみられる。頭部の先端には小さな突起がつき、突起の中央には孔があるため、吊るすことも可能であったとみられる。また身の断面形は、鉄製品の金19～25と同じである。

鉄鏃（金15）　頭部は鑿状を呈する。身と茎との境にはふくらみがある。身と茎の断面形は方形である。

刀子（金16・17）　２点あり、ともに保存状態は良好である。金16は地鉄が完存する。茎の比率は長い。金17は茎の上に被せられた柄の木質が残存する。

火箸（金18）　長さ28.5㎝ある。全体に錆が進行している。先端は尖がる。頭部は扁平で、１

回分巻き込んで終わる。断面形は、先端から16.5㎝付近までが正方形で、この範囲は叩いて成形している。それより頭部側は捻りが加えられており、断面形は円形を呈する。捻られた範囲は、方向が３回変化し、それぞれ長さ約４㎝で三等分されている。捻りの方向が変化する境界には挟んだような形跡があるため、２回ないし３回捻じって成形した後、柄側の先端を叩いて扁平に延ばし、丸く巻き込んでおさめたとみられる。

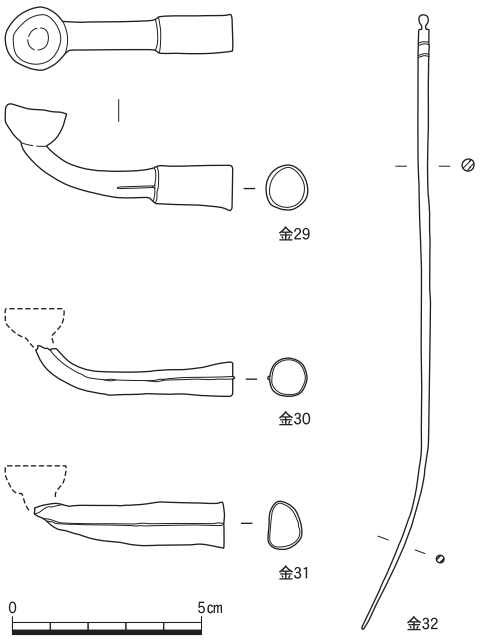


図25　金属製品実測図（１：２、江戸時代）

板状製品（金19～25）　３箇所から合計７点出土している。金19・20は単独で出土した。金21～25はまとまって出土し、同一個体とみられるが、接合できない。いずれも幅0.6～0.7㎝、厚さ0.2～0.3㎝の板状を呈する。断面形は金14の毛抜と同じく、片側が凸形を呈する。金19は片方の先端が弯曲しており、ピンセット状を呈していた可能性がある。全点とも青い錆が付着し、銅製品のように見えるが、磁性を帯びている。

鉄製品（金26・27）　破片はすべて弯曲面をもつ。口径の大きな管か、鍋や釜のような鋳造品の一部と推定される。赤い錆が浮き出ている。

飾鋲（金28）　全長2.3㎝の小型の飾鋲である。頭部は六角形を呈し、緩い稜が浮き出ている。先端まで完存する。[17)]

以下、江戸時代に属する金属製品を挿図で示す（図25）。

キセル（金29～31）　雁首の部分が３個体ある。金29のみ完存する。金30・31は火皿を欠く。

火箸（金32）　頭部先端には丸い蕾が付く。身はやや歪むが、先端まで完存する。

６．石製品（図版57・58・124～126、図26、観察表５）

縄文時代、平安時代、江戸時代に属するものがある。最初に平安時代、次に江戸時代、最後に縄文時代に属するものを解説する。

平安時代に属する石製品は、石帯、経軸端、碁石、石硯、砥石、その他にも凝灰岩、花崗岩を加工した石材片が出土している。

石帯（石１～６）　巡方と蛇尾が出土している。丸鞆は出土していない。石３・４は柱穴133、それ以外はすべて池250から出土した。石１は巡方で完形品である。保存状態は良好で、灰白色の地に淡い緑系統の脈が混じる。上面と側面は鏡のように研磨されているが、裏面は平坦に加工されただけで研磨されていない。潜り穴は４箇所とも横方向に空けられており、そのうちの１箇所には銀線が残存する（図版57）。石２は巡方で一隅を欠く。表面・裏面とも剥離によってザラザラした質感を呈するが、これは火災などで表面が罹災したためとみられる。裏面には黒い色調の粒

子が残るが、これは地中の藍鉄鉱がリンなどと化合してできたものとみられる。裏面の潜り穴は中心からみて放射状に空けられている。３箇所に銀と銅の切金が残存する。石３・４は巡方で、瑪瑙製とみられる。石３・４は接合できないが、同一個体と判断できる。白色の地に黒灰色の脈が渦巻き状を呈する。この渦巻きは鉱物によって生じたものであり、この脈に沿って破損している。石５は蛇尾である。材質中に鉱物の結晶が顕著で、大理石などのような鉱物が再結晶した変成岩とみられる。上面と側面は鏡のように研磨される。裏面は平坦に加工されただけである。表面は凸面を呈する。裏面に潜り穴が１箇所だけ残存する。石６は蛇尾である。石材は碧玉製で、上面と長側面は鏡のように研磨されるが、表面には曇りが生じ、反射率は低下している。弯曲する側も研磨は雑である。長側面には黒色の付着物があるが、これは石材内部から出た鉱物である。

経軸端（石７）　水晶製で透明度は非常に高い。円柱形で頭部側はやや太く、先端は円錐形となっている。巻物に差し込む側は平坦で、先端には汚れが付着している。池250第２層出土。

碁石（石８～14）　７点あり、すべて池250から出土した。黒石２点（石８・９）はいわゆる那智黒である。白石５点（石10～14）は水晶製であるが、すべて白濁しており、経軸端（石７）ほどの透明度はない。白石を意識したためであろう。黒石１点（石９）と白石３点（石10～12）は池250西肩からまとまって出土し（図版83-６）、黒石と白石が混在していたことから、これらを碁石と想定した[18)]。

石硯（石15・16）　池250から２点出土している。形態はともに風字硯で、石質は滑石製である[19)]。石15は風字硯の左下側の破片で、裏面には台形の脚部が削り出されている。上面は墨が付着する。各面とも平滑に仕上げられた優品である。石16は左側部の破片と想定したが、墨痕は付着しておらず、滑石製石釜などの転用品の可能性も残る。

砥石（石17～19）　３点ある。図版57では砥石に使用した面を表として図示した。石17と石19は長方形を呈する。石19は中央部がかなり磨り減っている。石18は塼状を呈する。表面は平滑であるが、裏面と側面にはノミによる加工痕跡が残る。石17は池117、石18は溝43、石19は池250第１層から出土。

石20～27は、名称や用途が特定できない。石20は中央が筒状に刳り抜かれており、この部分が軸受けなどに使用されたと考えられる。側面には縦方向に溝が掘られている。また外側の側面は直角に加工されているため、本来は箱形を呈する製品であったとみられる。池250第１層出土。石21・22は自然石の可能性もあるが、池250からは礫はほとんど出土しておらず、製品として掲載した。石21は円礫で砂岩製とみられる。使用痕跡から叩き石のような性格が想定される。池250第１層出土。石22は棒状を呈する円礫で、両端は円くなっている。池250第２層出土。石23は側面を研磨して平滑に仕上げた細長い石材で、一方の先端は破損する。断面は石刀形を呈する。花崗岩系統の石材である。池250第１層出土。石24は円礫で形状は不定形である。断面は楕円形を呈する。花崗岩系の石材であるが、自然石の可能性もある。井戸470木枠内出土。石25・26は凝灰岩製の石材である。井戸470木枠内から２点出土している。石材中に黒色の粒子が多数含まれることから、奈良県二上山産の凝灰岩とみられる。石25は表面に火を受けた痕跡がある。石26は保存状態が良

好で、残存する平坦面から、建物の基壇化粧に使用された石材とみられる。なお、同様の凝灰岩は、図示したもの以外にも、池300から１点、整地層475から１点出土しており、後者は火を受けた形跡がある。石27は花崗岩製で蒲鉾形を呈する。図示した上面はふくらみをもち、他の面は平坦に加工されている。縁石などに使用された石材とみられる。

以下では、江戸時代以降に属する石製品について解説する。

石硯（石28・29）　ともに長方形を呈し、江戸時代後期以後に普及する形態をもつ。石28は細長い形態で、裏面の中央部は浅く窪ませている。石29はそれより幅広く、裏面は平坦である。

砥石（石30・31）　石30は細長い角材状を呈し、側面には溝が掘られている。石31は硯の右半分の破片を砥石に転用したものである。

石盤（石32）　石のノートに相当するもので、左側面をとどめる。縦方向に浅い線が引かれる。明治時代以後に属する。

石筆（石33・34）　石の白墨（チョーク）に相当するもので、白い石材が棒状に加工されている。石33は先端が丸い。石34は先端を欠損する。

石匙・剥片（石35～37）　いずれも二上山産サヌカイトで、時期は縄文時代とみられる。出土層が近現代層直下であったことから、他地域から持ち込まれた可能性も払拭しきれないが、石表面の風化度合いから古いと判断した。実測できた３点を掲載する（図26）。

石35は石匙とみられるが、柄の部分を欠損する。折れた部分の切り合いが最終であることから、使用時に折れたものと考えられる。形状は台形を呈する。左右側面に大きな剥離で直線を作り出し、下側をやや弯曲気味に細かく押圧剥離して刃部を作る。刃部の押圧剥離は表面のみで、断面形状は片刃である。表裏面の剥離痕から、粗割段階で薄い剥片を作っていたとみられる。縦3.55㎝、横4.85㎝、厚さ0.7㎝、重さ9.8ｇを測る。池117から出土した。

石36は原石表面を粗割した石核の角部分を割りとってできた剥片である。打点は上部に位置する。上面および右側面は自然面とみられるが、風化が他の面より進行した剥離面の可能性がある。裏面下部に新しい剥離面がある。縦5.05㎝、横5.2㎝、厚さ1.55㎝で、重さは33.4ｇである。

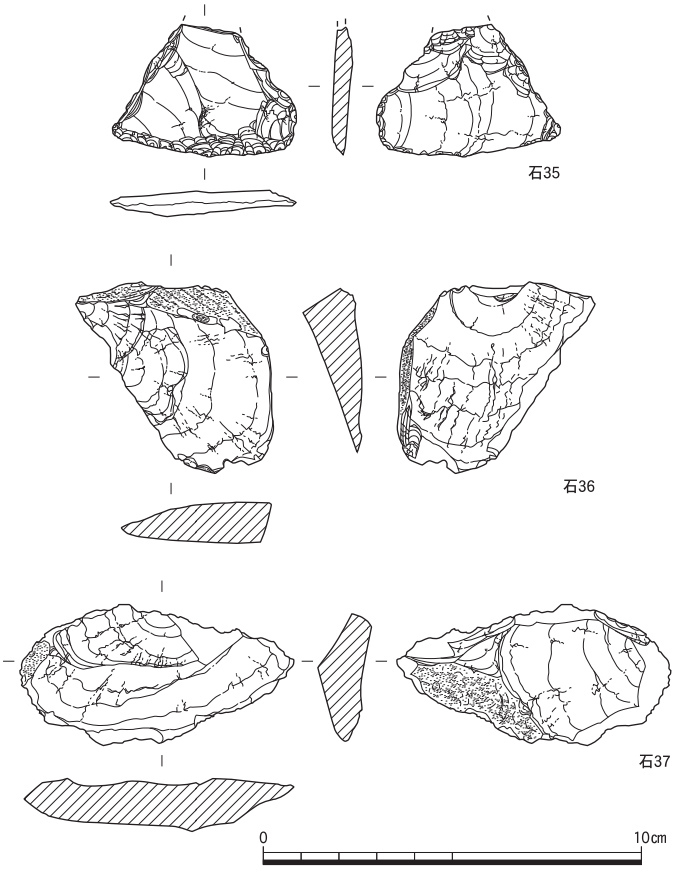


図26　石匙・剥片実測図（１：２）

池250第１層から出土した。

石37は自然面を左側面および裏面に残す剥片である。石核を調整する際の剥離面が裏面に残るが、表面は打点を欠損した大きな剥離面である。縦3.7㎝、横7.25㎝、厚さ1.4㎝、重さ34.6ｇである。池250上部から出土した。

７．土製品（図版58・59・126・127、図27、観察表６）

土錘（土１～15）　心棒に粘土を巻き付けて製作したものである。大きさ、重量は差異があり、土１～８は最大径が1.5㎝程度の小型品、土９～14は最大径が2.5㎝以上の大型品に二分できる。小型品の大半は、一方の先端が欠損する。土８のみ完存し、長さ4.6㎝ある。大型品は土９を除いて長さ５㎝以上あり、土14が最大で長さ8.2㎝ある。重量は、小型品が10g以下、大型品では土９が17ｇあるが、それ以外は40～70g台である。土15は側面を押さえて溝状に窪ませたもので、大型品に分類できるが、重さは28gある[20)]。すべて池250から出土。

土馬（土16～18）　通有の規模のものが２点とミニチュア製品が１点出土している。土16は首から下の胴前半が残存する。左前足は完存するが、右前足は根元から折れている。首の根元にはたてがみが表現されている。池370出土。土17は尻尾と胴の左半分が残存する。左後足と左前足の表現は粘土をつまみ出しただけで、土16に比べて著しく退化している。池250第１層出土。土18はミニチュア製品で、形状はさらに退化が顕著である。後方に立ち上がる尻尾と、左右に引き出された後足は認識できるが、左右の前足は粘土を整えただけで、足の形状を呈さない。残存長3.1㎝あり、頭部は欠損する。池250第３層出土。

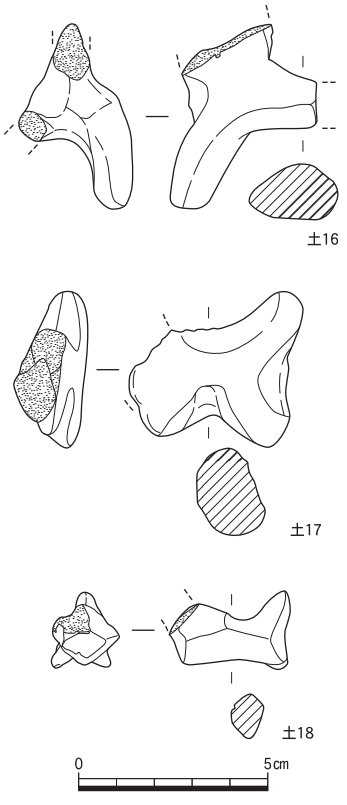


図27　土馬実測図（１：２）

陶硯（硯１～７）　須恵質の焼成をもちながら硯として製作されたものである。風字硯が４点（硯１～４）、円面硯が３点（硯５～７）、合計７点出土している。

風字硯　硯１は向かって左半分がほぼ完存する。海の部分は先端に花弁状（宝珠形）の土手が形成されている。擦面は非常に平滑で、墨痕が残る。左側の縁は高さ１㎝ほどあり、上面はヘラケズリで成形し、陸側端部もヘラで切断している。擦面と左縁との境界にはシワがあり、製作時に布が敷かれたようにみえる。裏面の脚は根本から折れており、ヘラで八角形に面取りした際の痕跡が裏面側に残る。反対側の脚部の面取り痕跡も残存するが、頭部にはこのような痕跡はみられない。裏面全体に自然釉がかかり、裏面を上にして焼成したことがわかる。池370第２層出土。硯２は向かって右下部が残存する。右側の縁は粘土を貼り付けて立ち上げたようにみえる。縁の上端はヘラケズリで成形し、両側面はナデで調整する。擦面は非常に平滑で、墨痕も薄く残る。脚部は円筒形で、周囲を指でナデて丸く整え

る。裏面はナデで調整する。３区現代盛土から出土。硯３は硯２と同じく右下部が残存する。右側の縁は粘土を貼り付け、ヘラで面取りする。擦面は非常に平滑であるが、墨痕はみられない。脚部は粘土板を縦方向に貼り付け、耳状に成形する。裏面には平行タタキのような筋がみられる。池250第１層出土。硯４も同じく右下部の破片である。右側の縁は粘土を貼り付け、ヘラで面取りする。擦面は非常に平滑で、墨痕がわずかに残る。裏面に自然釉がかかる状態は、硯１に類似する。江戸時代に属する溝145から出土したが、この硯は平安時代前期のものとみてよい。

円面硯　硯５は擦面中央部が平滑で、硯としてよく使用されている。脚部は、縦方向の透し孔と縦線を刻んだだけのものが交互に配置される。表面には自然釉がかかり、一部は銀化している。裏面は焼成時の灰を受けてザラザラした質感がある。裏面を上に向けて焼成したとみられる。井戸470木枠内出土。硯６は縁と側面の突帯、脚部が残存する。縁の上端部には墨痕が付着する。突帯は短く突出する。脚部には幅0.8㎝程の透し孔が、心々で2.5㎝間隔に配置される。池250西肩第１層出土。硯７は脚部の小片である。脚端部はゆるく外反し、上方には突帯がめぐる。突帯より上に透し孔を穿つが、間隔は不明である。焼成・質感は硯６に類似する。池250第２層出土。

黒色土器硯（硯８～12）　黒色土器で硯として製作されたものである。形態はすべて風字硯の特徴を有するが、陶硯の風字硯より全長が短く、隅は丸みをもつ。硯８は全容が判明する唯一の個体である。長さ13.6㎝、幅12.3㎝、深さ3.4㎝あり、陸側の裏面に脚を貼り付け、海側を傾斜させる。裏面は縦方向にヘラミガキを施した後、縁部に沿ってヘラミガキを密に重ねる。裏側から見た場合の右外面は、ヘラミガキが特に密で、銀器のような質感を呈する。裏面右下には脚部の剥離痕跡がある。表面は横方向にヘラミガキを施した後、縁部に沿ってヘラミガキを重ねる。体部と底部の境界付近にはラセン状の暗文が施される。暗文は海側に多く残存するが、陸側にも認められるため、本来は全面に施されていたとみられる。硯としてよく使用されたため、中央部は器壁が磨滅し、ヘラミガキも擦り消されている。縁部の内側は段があるが、これは黒色土器椀の口縁部に見られる沈線が採用されたものである。池250第３層出土。硯９は右下部の破片である。全体の特徴は上記の硯８に同じであるが、裏面はヘラで粗く調整しただけで終わっている。裏面の脚は、粘土を貼り付け、断面５角形にヘラで面取りする。表面は横方向にヘラミガキを施した後、縁部に沿ってヘラミガキを重ねる。右側面には縁部をヨコナデした時の終了点が観察できる。表面の中央部は硯としてよく使用されたため、ヘラミガキが消されている。縁部の内側には浅い沈線が施される。池250第３層出土。硯10は、硯８のヘラミガキの方向から復元した。裏面は縦方向にヘラミガキを施した後、縁部はさらにヘラミガキを重ねる。特に奥側の側面は銀器のような質感を保持する。表面もヘラミガキを施すが、中央部は硯として使用されたため、ヘラミガキが消されている。縁部は端が残存しないため、段や沈線は確認できない。池250西肩第２層出土。硯11は左下部の破片である。裏面は丁寧にヘラミガキを施す。裏側の脚は粘土を貼り付けた後、断面８角形にヘラで面取りする。表面は横方向にヘラミガキを施し、縁部側もヘラミガキを重ねる。縁部の内側には浅い沈線が施される。銀器のような質感を保持する。池250西肩第２層出土。硯12は硯11と同じく左下部の破片である。裏面の脚は欠損し、接合痕跡のみ残る。裏面のヘラミガキ

は、内側は縦方向、外側は口縁部に沿って施す。表面のヘラミガキは、中心部は磨滅している。縁部の内側には浅い沈線がめぐる。この個体もヘラミガキが丁寧で、銀器のような質感を保持する。池250第２層出土。

この他に、硯とみてよい破片が３点あるが、部位が特定できない。また、これら黒色土器硯はすべて池250西肩から出土しており、石硯（石15・16）２点も同じ西肩から出土している点で、関連性が注目される。

８．木　簡（図版60・61・128・129・142-２、図28、観察表７）

19点出土している。出土遺構は、９世紀初頭から前半に属する井戸470（木１～９）、池300（木10～12)、池117（木13・14・18)、溝119（木15）と、９世紀後半に属する池250（木17・19）と、江戸時代に属する溝145（木16）である。ただし、木16は、実際には溝145と同じ位置に重複する溝119の遺物と考えられる。

木１～６　檜扇６枚に墨書されたものである。特に木２～５は、下から木２、木３、木４、木５の順に重ねられた状態で墨書されている（図28)。墨書は中央の木３を中心に両端の木２、木５に及び、重ねた状態で「奈尓波都」と読める。

図28　檜扇復元図（１：２）

墨書が剥落した木６も、同じく「奈尓皮」と読める。難波津（なにはつ）の歌を記した出土文字資料については、最近、森岡隆「安積山の歌を含む万葉歌木簡三点と難波津の歌」『木簡研究』31、2009年で事例集成がなされているが、檜扇の事例ははじめてである。

これらの檜扇は、上端が幅3.0㎝、下端が幅1.5㎝あり、当時の尺度で１寸と半寸で製作されていたといえる。長さは24.5㎝ほどあり、これも八寸強で製作されたと判断できる。さらに上端から3.3㎝（同じく１寸１分）の左右両端には、互いを固定するための綴孔が穿たれている。

なお、木１は幅が狭く、墨書も片側に寄せて書かれており、他の５点とは別個体の可能性がある[21]。６点とも井戸470木枠内から出土[22]。

木７　厚みのある板材の一部に墨書がある。墨書は上下に長く配置される。「為」という字が数箇所にあり、他に「廿」など数字が数箇所に見える。詳細は不明だが、計算などに関わるものだろう。井戸470木枠内出土。

木８　頭部に切り込みを入れ、先端を尖らせた付札木簡。片側を大きく削り込んでおり、鳥形祭祀具として再利用されたとみられる。墨書は両面にある。表「讃岐国寒川郡」、裏「難破郷

木簡釈文1

木1

□□□　　(109)×9×1　061

木2～5

「奈尓波郡　○　」　　木2　(245)×29×1　061
木3　245 ×30×1　061
木4　(243)×23×1　061
木5　243 ×30×1　061

木6

「奈尓皮□〔都カ〕　　(193)×28×1　061

木7

□　□□□□□□為〔為カ〕　廿　□〔冊カ〕　□廿為又冊□〔為カ〕　」　(330)×(19)×8　019

木8

・「〈讃岐国寒川郡　」
・「〈難破郷秦武成　」　133×18×2　061

木9

・「□（6字～7字）　□」
・「□　□」　181×10×2　051

木10

一人十一月廿六日筆万呂　○　〈　」　(100)×25×3　039

木11

道道　(116)×15×7　081

木12

□〔二カ〕十□（4字カ）　□　(118)×14×6　081

木簡釈文2

木13

・神油幡身申文夫
　『身□□牧万呂』
・　□　(165)×50×8　081

木14

・□　□
・□　□　(132)×19×8　081

木15

「〆　　三□　□　(106)×10×2　039

木16

「□□□　□　(70)×9×2　051

木17

・「□多礼□□能无」
・「□　□」　206×22×2　011

木18

□　□
□　□　(138)×43×5　081

木19

　　□□
　　〔酒カ〕
□□〔廿カ〕酒□｜　209×(75)×3　061

補木1

・「齊衡四年三條
　　我我□□
・「院正倉帳　(85)×35×5　061

秦武成」と判読できる[23]。讃岐国寒川郡難破郷から当地に届けられた荷札木簡であり、当地と讃岐国との関わりを示す具体的な事例である[24]。井戸470木枠内出土。

木９　左半分を欠損する。頭部は圭頭で先端は串状に尖らせる。木８と同じ荷札木簡であるが、墨書は判読できない。井戸470木枠内出土。

木10　切込みと穿孔がある側が上端と判断されるが、ここでは墨書の方向を上として解説する。「一人」という墨書の下に割注で「筆万呂」「十一月廿六日」と判読できる。池300出土。

木11　上端・下端を欠損する。墨書は「道」「道」と二文字ある。習書木簡だろう。池300出土。

木12　下半を欠損する。上半に墨書があるが判読できない。池300出土。

木13　板材の片面に２行、反対側に１文字の墨書がある。２行の墨書がある面は、左端が板材の側面であるため、墨書は右側から続く文字列の最後の２行とみられる。墨痕は非常に明瞭であり、右列「神油幡身申文夫」、左列「身□□牧万呂」と判読できる。古代には「牧」と「枚」は通用される。裏面にも１文字あるが判読できない。池117出土。

木14　上端・下端が欠落する。墨書は上端にあるが判読できない。池117出土。

木15　右半分が欠損する。頭部が圭頭ですぐ下に切り込みがあり、荷札木簡の形状をもつ。墨書は下半にあるが、判読できない。溝119出土。

木16　片方を削り込んで尖らせている。墨書は３文字以上あるが、判読できない。江戸時代に属する溝145から出土（溝145と同じ位置には９世紀に属する溝119が重複）。

木17　薄い板材の両面に墨痕が付着する。表面は「□多礼□□能无」と読める。「多」は「た」、「礼」は「れ」、「能」は「の」、「无」は「む」または「ん」で、仮名が記された木簡である。字はかなり崩れ平仮名に近い。４文字目は「久」（「く」）もしくは「見」（「み」）の可能性がある。他は判読できない。池250出土。

木18　板状製品の上端の片方に墨書があるが不鮮明である。池117上面掘削時に出土。

木19　楕円形を呈する。折敷底板とみると上面に、長方形曲物の蓋板とみるとその上面に墨書をもつことになる。墨書は２文字以上あり、「酒□一」と判読できる。蓋板上面とみると、内部に納めた品名を記したことになる。池250出土。

補木１　2001年度に今回の調査地の西側で実施された発掘調査（図３の24地点）で池（SG24新）から題簽木簡が１点出土している[25]。

９．木製品（観察表８）

六町では井戸470・池300・池370・池250、七町では池117・溝119、溝145、条坊遺構では溝114・溝107・溝110などから出土しており、平安京跡の調査で出土する木製品としては、質量ともに豊富である。以下、時代順に解説する。

井戸470（図版61～68・130～132、図29・30、表12・13）

木枠内から木製品が多数出土した。製品としては、木簡（木１～９）、斎串、棒状製品、横櫛、杓子形、箸、曲物があり、その他にも加工痕跡がある板材、角材、棒材、部材、削り屑と松明の

付木、木炭、植物遺体として瓢箪、クリ核皮、樹木の皮、葉、井戸枠材の縦板と太杭がある。72点を図示する。共伴する土器類の所属時期は平安京Ⅰ期中の新相である。

斎串（木20～26）　木20は頭部が圭頭で、側面の８箇所に切り込みを入れる。完存し、長さ23.4㎝ある。木21は、頭部は木20に類似するが、切り込みは上の１箇所のみである。下半を欠損する。木22～24・26は頭部が平頭であり、下方に広がる形態をもち、上半に切り込みを入れる。斎串の可能性があると考え、ここで扱った。木26は完存品で長さ24.6㎝ある。

棒状製品（木27～36・38～40）　木27・28は頭部やや下方に切り込みを入れ、木簡に似た形状をもつが、墨書はみられない。木29は刀子形を呈するが、刃の部分は厚みがある。頭部は圭頭であるため、斎串の可能性がある。木30～36は片方の先端を尖らせたものである。木30・31は串状を呈する。木33・35・36は先端を薄く削り込んでヘラ状に加工する。木35は先端がやや厚い。木34は先端をくさび状に尖らせ、頭部に段差を作り出している。組合用の部材の一部であろうか。木38～40は丸棒に加工したもので、木39・40は工具の柄に該当するとみられる。

横櫛（木37）　図の右半部が欠損し、現存部分も歯が一部欠損する。歯の数は11本/１㎝である。

杓子形（木41）　身と把手の一部が欠損する。把手の先端は幅が広くなっている。

棒状加工部材（木42）　側面に斜め方向の切り込みがあり、ここに同様の部品が組み合って、製品を構成していたとみられる。

箸（木43～47）　面取り加工した棒状の製品で、箸として扱った。木43・44は完存するが、木45～47は先端が欠損している可能性がある。

曲物（木48～57）　木48～51は曲物の底板である。直径は、木48が12㎝、木49が推定23㎝、木50が19.6㎝、木51が22.4㎝に復元できる。側面には目釘穴が残存する。木52～54は身の側板が残存する。側板の高さは、木52が2.1㎝、木53が5.5㎝、木54が19.6㎝あり、端部は桜とみられる樹皮で固定されている。木54のみ側板が二重構造であり、外側板の幅は上段が6.5㎝、下段が８㎝ある。上段の外側板は２本の目釘で内側板と固定されるが、下段の外側板は７本の目釘が内側板を貫き、底板と固定される。木55は側板が縁より内側に取り付くため、蓋として扱った。側板は樹皮で蓋板と固定される。木56・57は曲物底板である。木56は直径20.8㎝あり、木54よりやや小さく、多方向に目釘穴が残存する。２つに割れたため、２対の小孔で固定していたようである。木57は直径34.9㎝あり、出土品では最大径を有する。ただし厚さは１㎝程度で、木54・56と同じである。

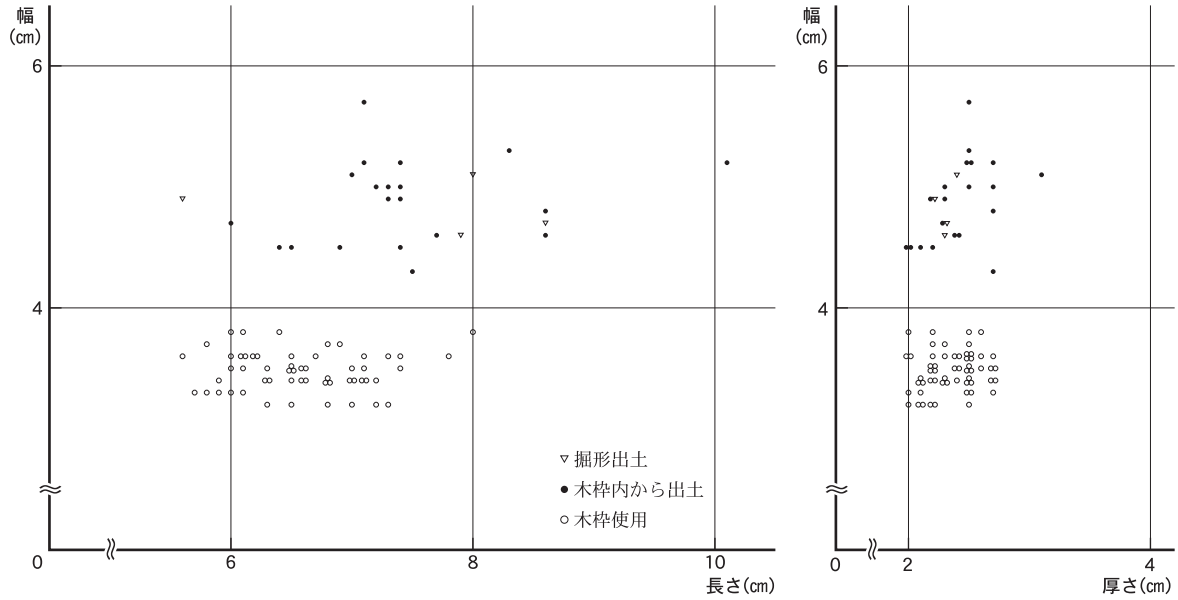
加工部材（木58・59・65・66）　木58・59は不定形に加工された板状の製品である。木65・66は台形を呈する板材で、下駄の歯のような形状を有する。両者はほぼ同じ規模・形状を持ち、ともに図の上方が欠損する。他の面は丁寧に加工されている。

角材（木60）　断面形は長方形を呈する。一方の先端を杭状に尖らせている。

付木（木61）　片方の先端が焼成されており、松明の付木として使用されたと推定される。[26)]

板材（木62～64）　木62・63は長方形に加工された板状の木片で、製品を作った際に生じた破材とみられる。木64は加工痕跡がある板材で、残存する形状は「Ｌ」形を呈する。製品を作った

表12　井戸470出土太杭の規模



際の破材であろう。

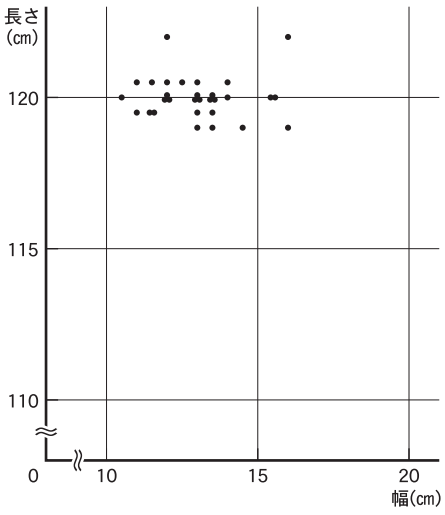
棒状製品（木67）　長さ16cmある棒状の製品で、両端とも丁寧に加工されており、この状態で完成品であったとみられる。

太杭（木68～85）　井戸470の木枠（縦板）を固定するために使用されていた太杭である。井戸470の木枠縦板は30枚で構成され、それぞれ側面の上半と下半の２箇所に杭穴をあけ、そこにこの太杭を打ち込んで相互を固定するものであった。結果、使用された太杭は60個となる[27]。すべて丁寧に面取りされており、両端を削り込んで幅と厚みを減少させ、差し込みやすくしている。長軸方向の断面は、一面は平坦であるが反対側の面は山形を呈するものが多い。材質は井戸枠材と同じく堅い木材が使用される。

木68～79は実際に木枠を固定していたものであり、木80～82は木枠内の埋土から、木83～85は井戸の掘形埋土から出土したものである。

出土した太杭すべての長さ、幅、厚さを計測し、縦横比のグラフを作成した（表12）。これをみると、実際に木枠を固定していた太杭は、長さ5.6～8.0cm、幅は3.2～3.8cm、厚さは2.0～2.7cmまでの間に収まり、規格性は非常に強いといえる。一方、木枠内と井戸掘形から出土した太杭は、長さは上記の太杭と変わらないが、幅は５cm付近に中心があり、実際に使用されていた太杭よりも幅が広いこと、規格性が乏しいことがわかる。ただし、厚さは両方とも2.5cm程度で差異がない。木枠内から出土した太杭は、保存状態が悪いこともあって、２段目以上の木枠で使用されていたものが内部に落下した可能性が高

表13　井戸470の木枠の規模



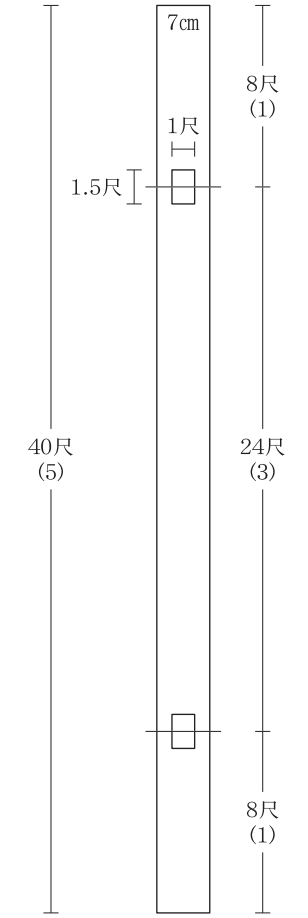


図29　井戸470木枠側面の寸法概念図（１：10）

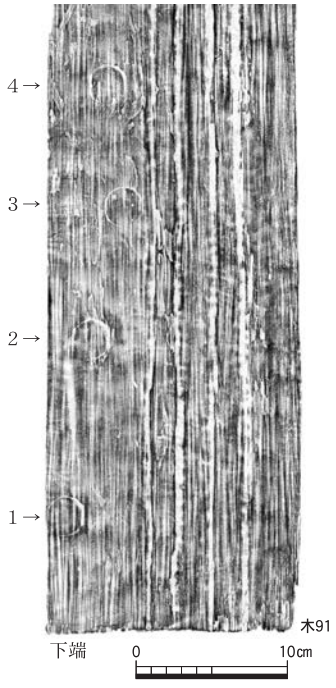


図30　井戸470木枠の刻印拓影（木枠№２の外側、１：５）

いと考えられる。一方、掘形埋土から出土した太杭は井戸470以前のものが掘形埋土に入った可能性が高く、保存状態も良いため、井戸470の木枠が組み立てられる段階で掘形に入ったと考えられる。

木枠（縦板、木86～91）　井戸470の井戸枠として使用されていた板材である。木目方向に割ったのち、各面を成形している。木枠は30本あり、それぞれの長さと幅の関係を表13で示した。長さは120㎝を中心とし、最短が119㎝、最長は122㎝である。一方で、木枠の幅はばらつきが大きい。内面よりも外面が１～２㎝広く、表13では外面の数値を採用した。上端幅と下端幅の差はほとんどない。幅は10㎝から16㎝に収まり、特に12㎝から14㎝の間に集中するが、顕著な集中傾向は見いだせない。図版66～68では、幅の狭いものから広いものへ配列した。

次に、側面に明けられた杭穴の位置に注目する（図29）。まず上端・下端から杭穴までの距離は、ほとんどが24㎝前後に収まる。木87は上端側が、木91は下端側が短く、その差は３㎝程ある。しかし、杭穴間の心々は71～72㎝で、差異は非常に小さい。したがって、杭穴間を揃えることが最も重視されたため、縦板材の長さの誤差を、上端側と下端側に分散させたとみられる。つまり、40尺（約120㎝）程度に切断された枠材の中央に杭穴間24尺（約72㎝）を設定し、残りを上端側と下端側に振り分けたため、結果として上端側と下端側が長さ８尺（約24㎝）前後となったのであろう。

図30に示した拓本は、木91（木枠№２）の下端付近外側に押刻された円形のスタンプで、直径はそれぞれ2.5㎝ある。

溝119（図版69・133）

29点を図示する。製品としては、木簡（木15）、斎串、筆、糸巻、棒状製品、横櫛、箸、皿、曲物、下駄があり、その他にも加工痕跡がある板材、角材、棒材、部材、削り屑と付木、木炭、種実などがある。棒状に加工された木片が多い点が留意される。共伴する土器類の所属時期は平安京Ⅰ期中～新である。

斎串（木92・93）　頭部を含む上半部の破片である。頭部は圭頭で、その下には斜め方向の切り込みを入れる。

筆（木94）　筆の柄の部分と推定するもので、桜の革を丁寧に巻き付けている。先端は不明である。

糸巻（木95～97）　３点あり、すべて糸巻の横木である、木95は先端に目釘が残り、図の下端は切断されている。木96は組み合わせ

部以外にも穿孔がある。図の下端は焼成されている。木97は全体がほぼ完存する。

棒状製品（木98～100）　木98はヘラ状の製品で、片側が薄く削り込まれており、井戸470出土品の木33に類似する。木99・100は各面が丁寧に面取りされている。

板材（木101）　各面が丁寧に面取りされた板材である。

横櫛（木102）　図の右半分を欠損する。歯の数は11本/１㎝である。

箸（木103～106）　すべて先端が破損している。最も長いものは木103で14.8㎝ある。

皿（木107・108）　ともに木目の方向に破損している。漆はみられない。直径は、木107が19.4㎝、木108が約22㎝と推定される。

曲物（木109～112）　木109～111の３点は曲物の底板である。直径は、木109が11.8㎝、木110・111が15㎝に復元できる。木110は側面に目釘穴が残存する。木112は桜皮が穴に巻かれた状態で残存するところから、蓋板と推定される。直径は20㎝に復元できる。

板材（木113・117）　木113は長辺側に小孔が連続する。別の製品と目釘で固定されていたものとみられる。木117は長方形に加工された板材である。

下駄（木114）　長さ16.7㎝あり、下駄としては小型である。歯は磨り減って非常に低くなっている。

加工部材（木115・116）　木115は角材の先端に枘を作り出しており、調度品の一部とみられる。木116は方形を呈する板材で、各面とも丁寧に加工されている。

付木（木118～120）　松材であり、一方の先端が焼成されている。松明に使用された付木とみられる。

池117（図版70・71・134）

26点を図示する。製品としては、木簡（木13・14）、木簡状製品、箸、曲物、下駄、漆器椀、棒状製品があり、その他にも加工痕跡がある板材、角材、棒材、削り屑と付木、竹材、種実ではモモ核がある。付木が多い点が留意される。共伴する土器類の所属時期は平安京Ⅰ期中～Ⅱ期中である。

木簡状製品（木121）　付札木簡の頭部に類似した形状をもつが、墨書は認められない。下半は円弧状に切断されている。

箸（木122）　黒色を呈するが漆塗りはなく、材質は黒檀とみられる。比重が大きいため、重量感がある。先端は欠損する。四面は丁寧に面取りされ、断面形は上端から10㎝付近までは方形、それより先は円形を呈する。頭部は角を面取りしている。

曲物（木123～128）　木123～125は曲物の底板である。直径は、木123・124が18㎝、木125が19.5㎝に復元できる。木124は周縁に汚れが付着する。木125は側面に目釘が１箇所残存する。木127・128は縁のやや内側に桜皮が残存することから、蓋板と推定される。木126は桜皮が中央寄りに取り付けられている。直径は、木126が11.7㎝、木127が17.2㎝、木128が28㎝に復元できる。

下駄（木129）　長さ22.9㎝あり、ほぼ完存する。先端は幅が狭く、歯はやや外側に張り出している。

板材（木130～135）　木130は一端を円弧状に削り込んで加工する。木131は一端を尖り気味に加工する。木132は長方形の厚い板材の中央を刳り抜こうとして止めており、作業途中の製品といえる。木133は縁のやや内側に小孔が２個穿たれた板材である。木134・135は長方形に丁寧に面取りされた板材である。

棒状製品（木136～143）　木136は断面正方形の角材の各面を丁寧に加工して仕上げている。木137は長さ54.9㎝ある角材で、１面の中央を溝状に削り込んでいる。木138は題簽の頭部に類似するが、墨書はみられない。木139は両端に孔が穿たれており、組み合わせをもつ製品の一部とみられる。木140～143は片方の先端を尖らせており、特に木143は先端を薄く削り込んでヘラ状に加工している。

付木（木144～146）　３点とも一方の先端が焼成されている。

池300（図版71・135）

22点を図示する。製品としては、木簡（木10～12）、漆器皿、漆器椀、椀、箸、棒状製品があり、その他にも加工痕跡がある板材、角材、棒材、部材、削り屑と付木、植物遺体としてモモ核、クルミ核などがある。共伴する土器類の所属時期は平安京Ⅰ期新～Ⅱ期古である。

漆器皿（木147）・漆器椀（木148）　ともに口縁部の破片で、内・外面には黒漆が塗られる。木147は非常に薄く仕上げられている。木148は体部と底部との境に段が付く。２点とも小片のため口径は復元できない。

椀（木149）　約半分が残存する。体部は深みがあり、器壁も厚い。漆は塗られておらず、現状では木目が浮き出ている。木目の観察から、木取りは口縁側を木材の中心に当てており、半分に割った木材から本器が製作されたと推定される。

箸（木150～152）　側面を面取りする。木150は完存し、長さは21.2㎝ある。木151・152は図の上方が欠損する。

板材（木153・154）　木153は隅が丸く加工された板材である。木154は両端を尖らせて菱形に加工している。

棒状製品（木155～165）　木155～157は板材を棒状に加工した製品である。木158は八角形に面取りされた製品で、図の上端を一段削り込んでいる。元は工具の柄であったとみられる。木159は図の上端と下端を、木160は下端を削り込んで薄く仕上げた製品である。木161～163と木165は細長い棒状の製品で、木162・165は一方の先端を尖らせている。木164は断面が正方形に加工されている。

加工部材（木166）　断面正方形の角材の一方を三角形に尖らせた製品である。

付木（木167・168）　松材で、片方の先端が焼成されている。松明に使用された付木であろう。

池370（図版72・136）

９点を図示する。製品としては、皿、下駄、棒状製品があり、その他にも加工痕跡がある板材、角材、棒材、部材、削り屑と付木などがある。共伴する土器類の所属時期は平安京Ⅱ期古である。

皿（木169）　保存状態は悪く、表面はかなり磨滅している。口径は推定で22㎝あったとみられ

る。

下駄（木170・171）　木170は長さ12.8㎝の小型品で、子供用とみられる。形状は長方形を呈し、通常の下駄よりも角張っている。一部焼けこげている。木171は長さ20.6㎝あり、下駄としては小型品である。歯はやや外側に張り出している。

板材（木172）　図の右上隅を丸く加工した板材である。断面は図の中央部が薄い。

棒状製品（木173・174）　木173は断面が円形を呈する棒状の製品である。木174は下端に孔が穿たれている。

薄板材（木175）　頭部に切り込みを入れて斎串状に加工した薄い板材である。左右からの切り込みが深いため、上端は幅が狭くなっている。

加工部材（木176）　加工痕跡がある厚い板材である。図の下方中央には切り込みがあり、上にも溝状の切り込みがある。中央部の空洞は木質が腐朽したためとみられる。

付木（木177）　一方の先端が焼成されている。

池250（図版72～76・137～141）

木製品の出土量は最も多い。製品としては、木簡（木17・19）、横櫛、檜扇、ヘラ状製品、串状製品、棒状製品、浮子、曲物、琴柱形、柄、弓、折敷、下駄、車輪形、舟形、箸、容器（椀・皿）、家具の一部らしきものがあり、その他にも加工痕跡がある板材、角材、棒材、部材と付木などがある。松材を裂いた松明の付木、曲物（底板）、箸など、他の遺構には多い製品はここでは少ない点が注意される。80点を図示する。共伴する土器類の所属時期は平安京Ⅱ期中を主体とする。

横櫛（木178～191）　10地点から出土しており、点数は合計14点ある。横方向の長さは判明しないが、背から歯先までの幅はすべて判明するため、それを基準にすると、幅1.5㎝（木178）、幅2.0㎝（木179）、幅3.2～3.4㎝（木180・181）、幅3.8～4.2㎝（木182～191）に分類できる。最後の規模のものが最も普遍的に出土する櫛である。図版72では小さいものから順に配列している。形態的にはほぼ類似するが、角が丸いもの（木178・190）と角張るもの（木183・185）がある。[28)] すべての櫛は、歯の付け根部分に横方向に直線が引かれており、歯を挽き出す際の目印になったとみられる。歯の挽かれた数であるが、小型品である木178と木179が14本/１㎝である以外は、９～12本/１㎝となっており、顕著な差異は認められない。この他、木178は幅が1.5㎝と極めて小さいため、幼児用か人形の装飾品として使用されたとみられる。

檜扇（木192～210）　19点を図示する。大きさから４種類以上に分類できる。小さいものから解説する。木192～194は最も小型の檜扇である。長さ23.8㎝前後あり、幅は先端が1.6㎝、基部が1.0㎝ある。木196～199は長さ26㎝前後あり、幅は先端が３㎝前後、基部が1.6～1.8㎝ある。ここでの中型品である。木200・201は上半が欠損するが、同じく中型品とみてよい。木195は両者の中間的な規模をもつが、これ以外に同じ大きさの個体は出土していない。木202～204は長さ33.5㎝ある最も大型の檜扇である。幅は先端が3.2㎝前後、基部が1.5㎝ある。基部は膨らみがなく直線的にそのままおわる。木205～209は基部側のみが残存し、すべて下端から16.5㎝前後で折れている。基部の幅は２ｍ前後あり、他の檜扇より大きいため、本来はさらに長い檜扇であったと推定

される。また、中央部よりも基部側の幅が広い形状は、小型品とした木192・193に類似する。木210は幅１㎝の厚みのある板材を使用するもので、上記の檜扇とは形態が異なり、扇の骨といえるものである。先端を欠損するため本来の長さが不明な点が惜しまれる。以上の檜扇は、木192～194の３本（他に１本ないし２本あるが未掲載）と、木196～201の６本（他に２本あるが未掲載）、木205～209の５本が、それぞれまとまって出土している（図版83-2参照）。また木196～199、木202～204には、井戸470出土檜扇（木２～６）に存在した上端部の綴孔は存在しない[29]。

ヘラ状製品（木211～219）　いずれも一方の先端をヘラ状に薄く加工した製品である[30]。木211～216は細長い板材の先端を薄く加工したもので、木214・216の２点は完存し、長さは木214が15.3㎝、木216が12.7㎝ある。木217～219は幅広い板材をヘラ状に加工したもので、木217・218は完存し、木218の頭部には穿孔がある。

串状製品（木220～222）　先端を串状に尖らせた製品である。木220・221は薄い板材であるが、木222は箸状を呈する。いずれも図の上半が欠損する。

棒状製品（木223～231）　長さと幅はさまざまである。木224は形状が箸に類似する。木225・230は断面がほぼ正方形に面取りされる。木228は図の上半部が焼成されている。木231は一方の先端を尖らせている。長さ92.3㎝あり、４分の１で図示している。

なお、上記の木220・221と木226～228は池250の東岸からまとまって出土したものである。

浮子（木232～234）　両端を尖らせた「浮子」と呼ばれる漁労具の一種である[31]。木233のみ完存し、長さ7.2㎝ある。

曲物（木235）　直径5.5㎝の円板で、中央に小孔があり、側面には目釘１本と釘穴が１箇所残存する。ミニチュア製品の曲物底板とみられる。

琴柱形（木236）　上端と下辺に切り込みを入れて、矢印形に加工した製品で、完存品である。

柄（木237・238）　木237は上端に枘穴があり、ここに錐のような鉄製工具が差し込まれていたとみられる。断面は６角形に面取りされている。木238は図の下端をグリップ状に加工しており、工具の柄とみられる。

弓（木239）　先端を削り込んで薄く加工しており、弯曲具合からみて弓の先端部とみられる。

曲物（木240）　底板とみられるが、目釘や綴孔はみられない。

折敷（木241）　隅丸長方形の板上に側板が残存しており、底板とみると折敷、蓋板とみると長方形曲物の蓋板が想定される。長方形板は長さ46.1㎝、幅19.5㎝あり、元の大きさを保持している。側板は長辺側のみにあり、長さ23㎝程残存する。高さはともに2.1㎝あり、下端は桜皮で固定されている。桜皮は、図の上方のものは下端で底板と固定されるが、中央付近のものは底板とは固定されず、側板内にとどまっている。短辺側には桜皮の綴孔はみられない。

下駄（木242）　長さ21.2㎝あり、完存する。成人用としては小型である[32]。底の歯はかなり磨り減っている。

車輪形（木243）　曲物の底板と同様の円板である。中心に孔があり、両面とも、縁には幅２㎝ほどの輪郭と中心に向かう針（スポーク）が墨書されている。祭祀具に分類される製品である。

舟形（木244）　中央を刳りぬいて舟形に加工したものである。同じく祭祀具として分類される。

角材（木245・246）　断面正方形に加工した角材である。木245は目釘が１箇所と釘穴が２箇所、木246は上端に目釘が残存する。

加工部材（木247～249）　木247は図のＡ面側が一段削り込まれており、この部分が別の個体に嵌め込まれていたと想定される。また、Ｂ面側は波状に加工されており、装飾性が高いといえる。各面とも丁寧に面取りされており、別の個体と組み合わせて使用されたのであろう。木248は図の下辺中央に切り込みがあり、この部分が別の部材と組み合あって製品を構成していたとみられる。右端には楕円形の孔が穿たれている。木249は上端が枘となり、直下には枘穴が２方向に開けられている。枘の部分を上方に差し込み、枘穴には横木が渡されて脚部として使用されたとみられる。先端は欠損する。

板材（木250・251）　ともに円板状の形状をもち、中央には円孔が穿たれている。

棒状製品（木252）　上端には削って切断した痕跡がある。

角材（木253）　断面正方形の大型の角材である。建築用部材の一部とみられる。

板材（木254～257）　比較的厚みのある大型の板材である。木254は長方形を呈するが、木255～257の３点は角を切り落し、三角形、ないし台形を呈する。４点とも図の状態で完存品である。

溝114（図版77）

４点を図示する。製品としては、曲物、脚台部とみられるものがあり、その他にも加工痕跡がある板材、角材、棒材と付木がある。共伴する土器類の所属時期は平安京Ⅲ期古～中である。

曲物（木258）　曲物の底板で、直径10.6㎝の小型品である。中心からややずれた位置に小孔が穿たれている。

脚台部（木259）　中央が高く盛り上がるところから、器具の脚台部か、あるいは蓋にあたると考えられる。中央に小孔があり、平面形は隅丸方形を呈する。

付木（木260・261）　２点とも片方の先端が焼成されている。

溝110（図版77）

２点を図示する。製品としては、漆器椀、箸があり、その他にも加工痕跡がある板材、棒材がある。共伴する土器類の所属時期は平安京Ⅴ期中～新である。

漆器椀（木262）　約半分が残存する、磨滅が著しく、器表に塗られていた黒漆はかなり剥落している。底部は平高台とみられるが、一部が残存するのみで、形状は判断できない。

箸（木263）　先端は尖り気味に加工される。頭部の方向は欠損する。

溝107（図版77）

７点を図示する。製品としては、箸、曲物と折敷の底板があり、その他にも加工痕跡がある板材、竹材がある。共伴する土器類の所属時期は京都XI期古～中である。

箸（木264～268）　木264は長さ25.7㎝あり、箸としては長い部類に属する。残りの４本は、それぞれ一方が欠損している。

板材（木269・270）　木269は４角形に加工された板材である。３辺は直線的であるが、図の上

辺のみ曲線的に切断されている。木270は曲物の底板のようにみえるが、中央に円孔が穿たれている。池250出土の木250・251に類似する。

溝145（図版77）

８点を図示する。製品としては、木簡（木16）、箸、柄杓、漆器があり、その他にも加工痕跡がある板材、棒材、角材、部材、削り屑と付木、種実がある。共伴する土器類の所属時期は京都ⅩⅢ期である。

板材（木271～273・275）　木271は側面が削り込まれ、図の上方ほど幅が狭い。木41のような杓子の可能性がある。木272は曲物底板に類似するが、厚さが1.3㎝あることや円孔があることが異なる。直径は推定34㎝に達する。木273は薄い板材で、図の下辺は円孔状に切断されている。右上隅には目釘が残存する。木275は幅4.6㎝ある細長い板材で、図の上方は欠損する。

箸（木274）　長さ22.6㎝あり、上方は欠損している。

加工部材（木276）　サイコロ状に加工された角材で、図の上方には突出部をもつ。２面に釘穴がある。

柄杓（木277・278）　木277は柄杓桝の底板、木278はそれに取り付いていた柄である。桝の側板は検出時には残存していたが（図15、写真14参照）、取り上げ以後に崩れ、図化できなかった。底板はやや楕円形を呈し、目釘は存在しない。

建物１（図版142、図31・32）

柱穴30・41・53・54・55・57・64の底部には礎板が入れられていたが、このうちの柱穴64を除いて、角盥とみられる木槽が破片状態で使用されていた。

礎板（木槽）（木279～282）　破片は約20片ある。このうち、底部は３片（Ａ～Ｃ）、側面は図上半の３片（Ｄ～Ｆ）と下半の６片（Ｇ～Ｌ）の合計12片が接合できた。接合部位と出土柱穴の間には関連があり、側面上半の３片は柱穴30から、下半は１片を除き柱穴54から出土している（第５章１の（２）、図36参照）。

木槽の全容は、部位が不足するため明らかにできないが、破片から判明した内容を解説する。まず底部は４分の３程度残存する。底部内面では、底部と体部の境に段があり、この段は径約28㎝の円弧に復元できる。ただしこの円弧は真円ではなく、図の横方向に長い楕円形を呈する。体部（側面）は人為的に破砕されており、木目方向に割られたため、破片はほとんどが菱形を呈する。破片の多くは底部と接合したが、破片数は不足しており、接合する個体がない箇所もみられた。体部の立ち上がりは底部から最大19㎝以上確認できた。また底部から高さ17㎝の位置に角度の変換点があり、ここを境に体部が直立していたことも判明した。内面と外面の調整は、ノミによって平滑に仕上げられている。

図の右上部に想定した破片（Ｍ）は、他の破片とは接合しないが、図の上端は把手状を呈している。この部位は、断面形が一辺7.4㎝程の方形で、粗く面取りされている。したがって、図の上端は把手の先端であり、それより上方には延長しないこと、反対側（図の下方）にも同様の把手が付いていたことは、破片Ｍの側面図から理解できる。結果、本製品には把手が上下２方向に延び

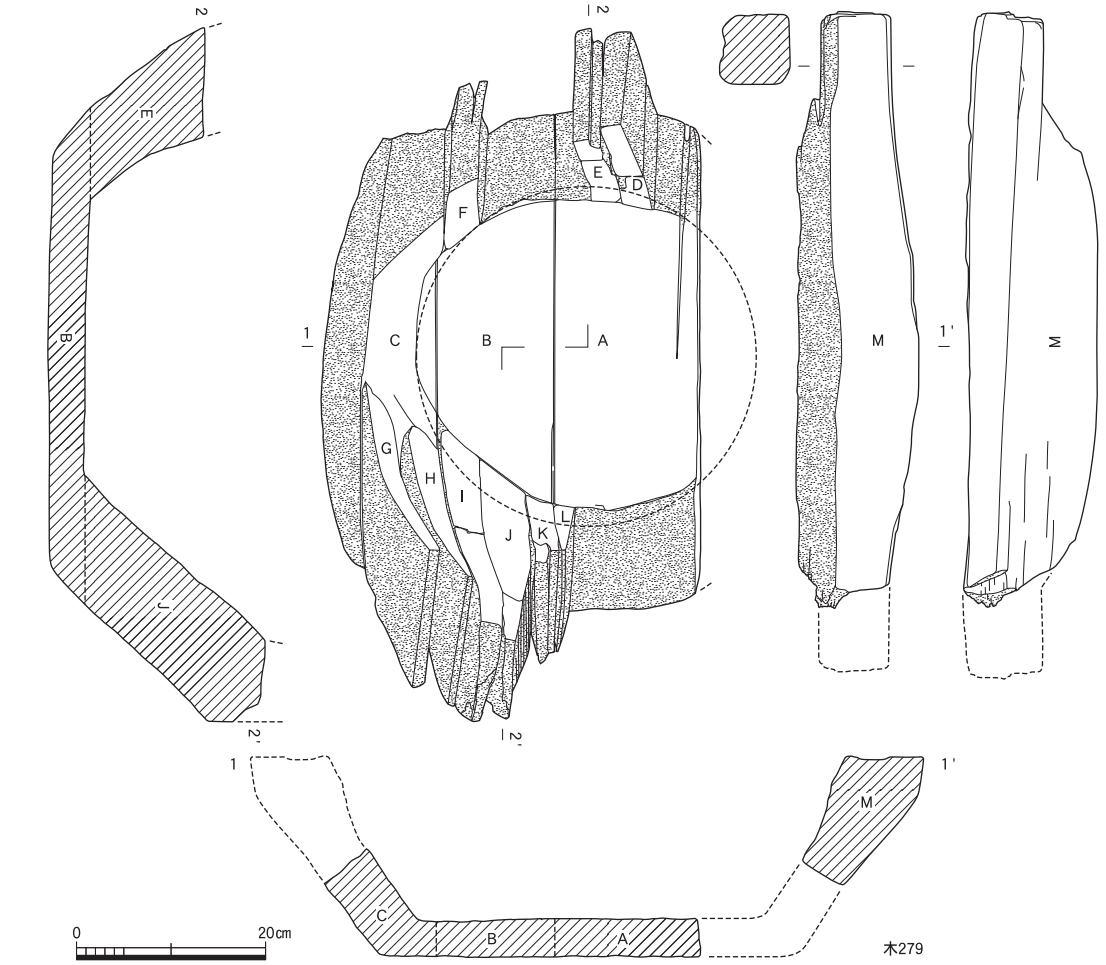


図31　建物１出土木槽実測図（１：８）

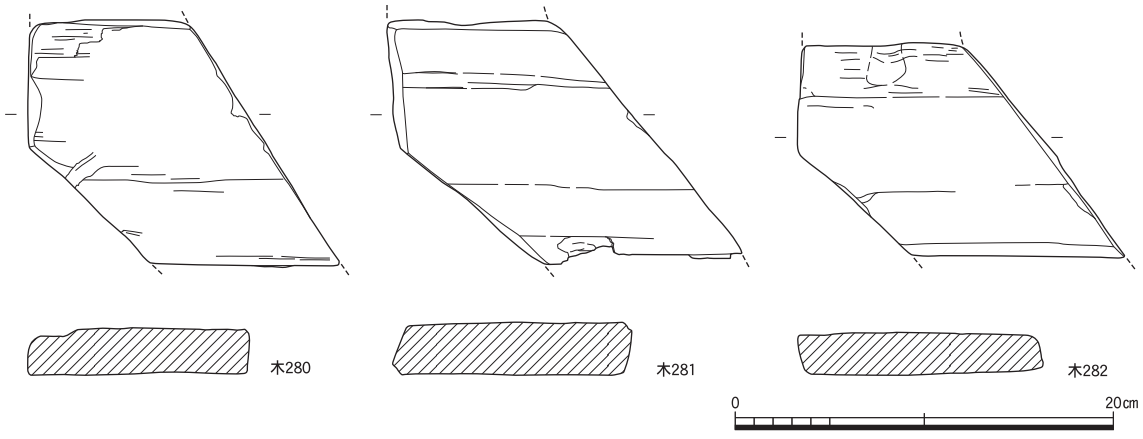


図32　建物１出土木槽の体部破片実測図（１：４）

ており、それは反対側にも存在したとみられるので、合計４本の把手をもった角盥状の容器が復元できる。

次に、図32で示した木280～282の３片は、いずれも体部外面の角度が変換する部位の破片である。残存する形状は五角形を呈し、斜め方向の長さは20～22㎝、対する幅は9.5㎝前後、厚さは2.5㎝前後ある。これら３片は底部とは接合しない。底部からこの変換点までの高さが判明する破

片は、図31で示した破片Ｊのみであった。

柱列６（図33）

柱列６を構成する柱穴111・112の底部にも礎板が使われていた。

礎板（木283・284）　両方とも長辺を東西方向に向け、礎石上に置かれた状態で出土している（写真11・12参照）。柱穴111の礎板（木283）は長方形で、長さ26.9㎝、幅9.1㎝、厚さ２㎝あり、当時の尺度では９寸と３寸に該当する。柱穴112の礎板（木284）は、長さ43㎝、幅9.5㎝、厚さ1.9㎝あり、尺による整数値は得られない。なお、両個体とも隅部が欠損するが、それらは調査時に生じたものである。

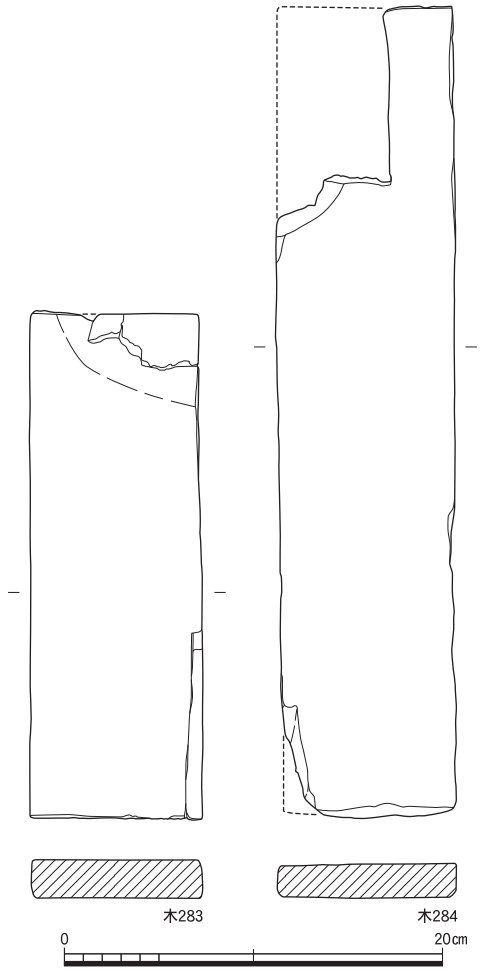


図33　柱列６出土礎板実測図（１：４）

10. 骨角製品（図版77・141）

鹿角製品（骨１）　井戸470木枠内から出土したもので、鹿角の緩く弯曲する部位を長さ17㎝に切断し、外反する側には細い溝が平行に刻まれている。溝の間隔は等間隔のようにみえるが、詳細にみると若干不揃いである。図の上端から３㎝程は、表面を削り込み、やや細くなっている。しかし、この部分にも溝が刻まれており、同様に図の下端側にも溝が刻まれることから、当初は外反する側の全面に溝が刻まれていたこと、次いで先端側が削り込まれ、結果として中央部の長さ4.5㎝ほどの範囲に溝が良く保存されることになったようである。溝が刻まれた側の裏側（内弯する側）はまったく加工された痕跡がみられない[33)]。

註

１）　平安京左京北辺四坊の溝Ｇ3415出土（平安京Ⅱ期中～新）から類似するものが出土している。底部は糸切りで、「杯」としている。
『平安京左京北辺四坊　－ 第１分冊　（公家町形成前）－ 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年　図版45の45-4

２）　同様の製品が西側の調査区でも出土している。
家崎孝治『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡　－ 西三条第（百花亭）跡－ 』古代文化調査会　2009年　図12　133「小壷」として報告されている。

３）　類似するものが土師器壷として出土している。体部は手づくねで成形され、体部上端に口縁部を付加させる。池1810の北肩に掘られた土坑1840から出土し、平安京Ⅳ期中に属する。

『平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008年　図版43の60。

4）　この「つまようじ」状の木片は、偶然入り込んだものではなく、当初からのものが残存したとすると、このミニチュア壷は「爪楊枝容器」として使用されたことになる。

5）　「白磁五輪花托」（五代、十世紀。『世界陶磁全集(11)　隋・唐』小学館　1991年　P167）や、滋賀県高島町の鴨遺跡出土「緑釉陰刻花文輪花段皿」（『文様陶磁の流れ』三好町歴史民俗資料館　1988年　P20）などから復元した。鴨遺跡出土品は猿投産とみられ、遺構からは貞観十五年九月十七日（873）と書かれた木簡も出土している。

6）　平城宮式軒瓦の型式については以下の文献を参照とした。

『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会　1996年

7）　長岡宮式軒瓦の型式については以下の文献を参照とした。

『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集　向日市教育委員会　1987年

8）　吉志部瓦窯産軒瓦の型式については以下の文献を参照とした。

『吹田市史第8巻　考古編』吹田市役所　1981年

『吉志部瓦窯跡－ 出土瓦整理報告書－ （図版編）』吹田市教育委員会　2011年

9）　西賀茂瓦窯産軒瓦の型式については以下の文献を参照とした。

『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告第４輯　財団法人古代学協会　1978年

10）　『平安京右京六条一坊　－ 平安時代前期邸宅跡の調査－ 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1992年

『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

11）　小野瓦窯と栗栖野瓦窯の資料については以下の文献を参照とした。

『栗栖野瓦窯址調査報告』京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告第15冊　京都府　1934年

『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

『京都市内遺跡発掘調査概報　平成16年度』京都市文化市民局　2005年

12）　上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14　1978年

13）　未報告であるが、これらの軒瓦は、平成９年度の右京職推定正殿域の調査で多く出土しており、平成14年度の右京職の調査でも出土している。

『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年

『平安京右京三条一坊三町（右京職）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

14）　『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1988年

15）　『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会　1984年

16）　ここでは鋲としたが、「釘」として報告されることが多い。

1. 堀内明博『北野廃寺発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第７冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983年　P68「鉄釘Ｅ群」

2. 家崎孝治『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡－ 西三条第（百花亭）の調査－ 』註２に同じ P18

17) 平安京右京四条二坊（淳和院跡）から類似品が出土している。
吉川義彦『淳和院跡発掘調査報告− 平安京右京四条二坊− 』関西文化財調査会　1997年　図版15

18) 平安京右京三条二坊十六町（斎宮邸）でも同様の石材が「玉」として報告されている。形態が整っていないため、用途が特定できなかったとするが、今回の出土品からみると、碁石の可能性がある。
網　伸也ほか『平安京右京三条二坊十五・十六町− 「齋宮」の邸宅跡− 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年。P74の図48。

19) 滑石製の風字硯は平安京右京三条二坊十六町（斎宮邸）でも出土している。
網　伸也ほか『平安京右京三条二坊十五・十六町− 「齋宮」の邸宅跡− 』註18に同じ　図版31の504。

20) 側面に溝を入れた土錘は同じ六町内の２箇所から出土している。
1. 本　弥八郎ほか『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年　P29。
2. 家崎孝治『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡− 西三条第（百花亭）跡− 』註２に同じ　P18。

21) 井戸470から出土した檜扇は全部で８点あり、図版60ではこのうちの墨書がある６点を図示した。図示していない２点は木２～６などと出土し、残存長11㎝前後、頭部幅2.3㎝前後ある。

22) 檜扇に年号を墨書したものが東寺食堂院の千手観音立像胎内から出土している。要や綴糸は失われているが、親骨２橋を含む１握分計20橋が残存する。骨板は縦26.8㎝、幅最大2.8㎝で、下端より1.6㎝に要の孔を穿ち、上方左右には綴糸を通した孔がある。全20橋中では１橋を除いて、墨書、針書による文字や墨描、朱描、針描による絵があり、うち１つに「元慶元年十二月専当」（877）の年号が記される。『重要文化財木造千手観音立像修理工事報告書』教王護国寺、1968年。P26から要約。

23) 讃岐国寒川郡難波郷は現在の香川県さぬき市大川町に属する。『倭名類聚抄』によれば、寒川郡には難破、石田、長尾、造田、鴨部、神崎、多和の七郷があった。難破郷は寒川郡の平野部の東端の大川町と白鳥町五名を合わせた区域で、のち富田郷と呼ばれた。富田の地名は、平安時代後期には安楽寿院領の庄園となって富田庄と呼ばれたものが、郷名に転じたとされる。『大川町史』大川町役場1978年　P123による。
讃岐の秦氏としては、香川郡出身で広隆寺別当として活躍し、大堰川の堤防を修復した道昌が著名である。木簡でも香川郡の出土事例が多いが、隣接する三木郡の事例も一例ある。平安期以後の古文書では多度郡など中讃地方を中心に分布が確認される。

24) 藤原良相の長男、藤原常行は貞観十年（868）正月十六日に讃岐守に任じられている（『日本三代実録』巻15同日条）。ただしこの井戸470が埋没してから半世紀程後のことである。

25) 2001年度の調査で出土。山口　真「京都・平安京跡右京三条一坊六町」『木簡研究』25、2003年、64頁で報告したが、今回再調査し釈文を変更した。題簽軸の頭部で、軸部分の大部分は欠損。前回、釈読できなかった裏面の第一字目は「院」で、表面の墨書と続けて読むと「齊衡四年三條院正倉帳」となる。表面の左端は別筆で「我」の習書だろう。今回出土した墨書土器（墨64）と合わせ、斉衡四年（857）時点で本調査地が「三条院」と呼称されていたことが判明した。

26) 以下、同様の焼成痕跡がある棒状の木材は、松明用の付木として扱った。

27) 木枠を取り上げた際に56個採取し、縦板自体にも３個固定されていたので合計59個確認した。１個は採集できていない。

28) 池250より古い時期の遺構である井戸470（木37)、溝119（木102）からも横櫛がそれぞれ１点出土しているが、いずれも角が丸いため、角が直角化した池250の横櫛は後出する形態とみられる。

29) 綴孔が存在しないため、井戸470出土の檜扇とは固定方法が異なっていたことになるが、実態は明らかにできない。紙が貼られていたのであろうか。

30) 『木器集成図録　近畿古代篇』奈良国立文化財研究所　史料第27冊　奈良国立文化財研究所　1985年　PL.19、本文P32では「留針」とする。

31) 『木器集成図録　近畿古代篇』註30に同じ　PL.13、本文P27。

32) 今回の調査で出土した下駄４点は、いずれも現代人の男子用としては小さ過ぎる。
木114（溝119、長16.7㎝、幅8.1㎝)、木129（池117、長22.9㎝、幅12.3㎝)、木171（池370、長20.6㎝、幅7.1㎝)、木242（池250、長21.2㎝、幅10.3㎝)。

33) この製品の性格について、１把手、２楽器、３祭祀具、４漢方薬、などであった想定してみると、以下のような解釈が考えられる。
１ではこれを握る部分とみて、何らかの器具に装着された把手とみる。両端の削り込んだ部分は、本体に装着するための加工痕跡とみられる。
２では溝を別の棒で擦ることで音を発生させる「ささら」（棒ささら）とみる。先端が細く削り込まれるのは、別の器具に差し込むことで、共鳴効果が得られたのではなかろうか。『日本列島発掘展古代の美とロマンをもとめて』展示図録、朝日新聞社、1988年の「２　音を掘る」の中で、Ｐ37「擦る楽器？（刻骨)」として、98京都府石本遺跡＜古墳後期＞１点。97岡山県津島江道遺跡＜弥生中期～古墳前期＞２点。が写真で紹介されている。ともに凸側のみに溝を刻む。
３では骨角製品に刻みを入れた呪術具として考える。平塚市博物館のホームページ「平塚の考古資料50選　30,呪術的な目的に使用された馬骨（刻み目のある馬骨)」では、本宿Ｂ遺跡から出土した馬の左前足骨には鋸状の工具で等間隔に溝が16本が刻まれており、動物の骨や鹿角に刻み目をつけた骨角製品は「彫骨」「刻骨」と呼ばれ、刻み目方向に摩耗することから楽器の「ささら」のように擦って音を出したとする説があるが、「卜骨」と鹿角製「刻骨」が共に出土することから、呪術的な目的に使用したと解説される。
４ではこの鹿角製品が「鹿茸（ろくじょう)」と呼ばれる漢方薬品（強壮剤）であり、刻まれた溝は粉末を採取した際の痕跡で、採取された角紛は擦り潰して薬として服用されたとみる。溝の間隔が不揃いである点は好都合である。鹿茸は雄の旧角が春に脱落した後に新生する幼角を乾燥させたもので、強壮、強精、長寿を目的とした珍奇な漢方薬である。

第５章　ま　と　め

１．遺構の特徴

（１）遺構群の変遷（図34・35）

ここでは、藤原良相の邸宅「西三条第」であることが確実となった右京三条一坊六町の遺構の変遷を解説する。

１期　2000年度調査SB01、柱列６、井戸470、池300、池370、溝173、溝400、土坑440などがある。平安京Ⅰ期中～新を中心とし、実年代では９世紀初頭から中葉に属する。

この時期の遺構は、2000年度調査SB01の北側に土坑440と井戸470が掘られ、西側には溝400が蛇行しながら流れていた。その西側にある柱列６は敷地を東西に区切る施設であったとみられるが、西側の様子は明らかでない。北側には池300と池370があるが、邸内はきわめて閑散としていたと考えられる。池300と池370は六町北内溝としても機能していたと考えられるが、溝400との間に遺構は見られず、排水経路については不明である。

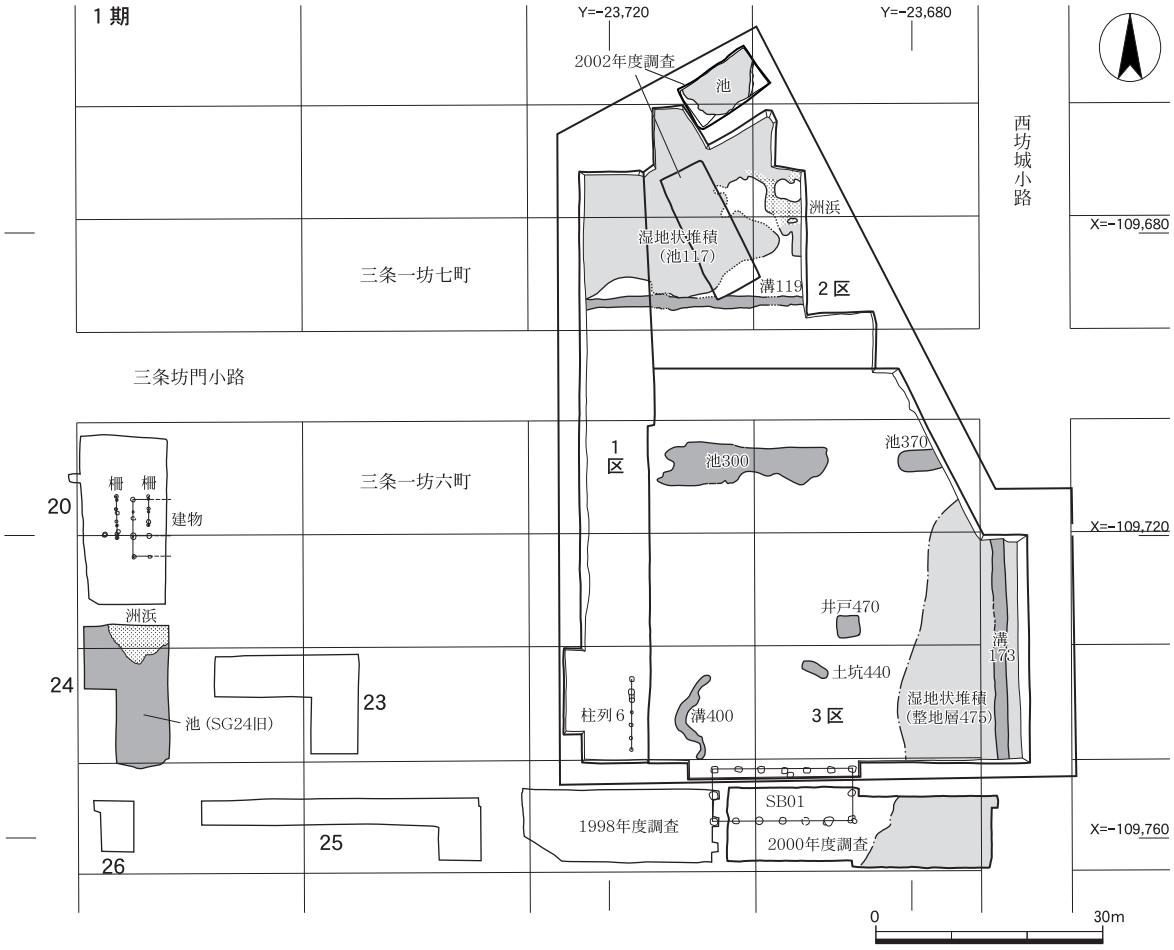


図34　右京三条一坊六・七町の遺構配置図１（１：1,000）

西側の調査地では、北西隅の2006年度調査地（図34の20地点）と2001年度調査地（同24地点）で１期に属する遺構が検出されている。20地点では掘立柱建物１棟と柵２条が検出されており、柵は南北２間と南北３間で規模が小さく、柱間寸法も1.65mと整数値でない点は、今回検出した柱列６に類似する。24地点で検出した池SG24旧は、北岸が礫敷きで護岸された洲浜をもつが、洲浜の一部は北西方向からの強い流れで削平されたと報告されている。SG24旧の南延長部は、2008年調査地（図34の23地点）と1995年調査地（同25地点）では確認されていない。

このように、１期は遺構が少ないものの、東半では建物、井戸、溝と内溝位置に小規模な池があり、北西部にも小規模な建物と池が存在した。特に北西部の池は北西方向から導水しており、２期との違いが明確となった点は特記できる。

２期　2000年度調査SB02、建物１・２・３・４・５、池250、溝43などで構成される。平安京Ⅱ期中を中心とする遺物が出土しており、９世紀後半代が想定される。

この段階で邸内には大幅な変更が加えられた。北東隅に池250が掘られ、排水目的で溝43が掘られた。溝43は西側に延び、西側で検出された洲浜をもつ本格的な池に水を運んでいたと想定される。１期から存在する池300と池370も、少量ではあるが２期に属する遺物が出土するため、２期においても内溝の機能を有し、雨水は池250に流れ込んでいたと考えられる。

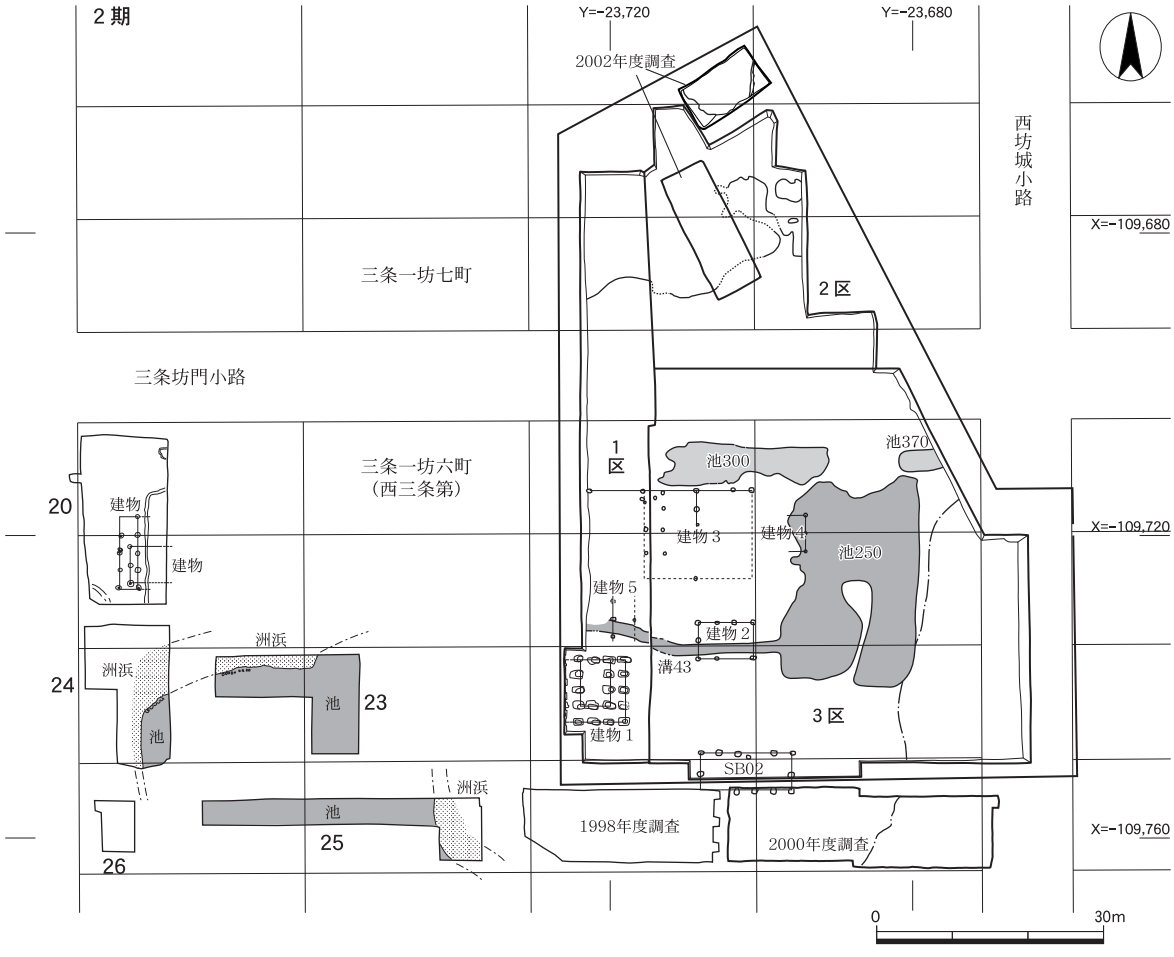


図35　右京三条一坊六・七町の遺構配置図２（１：1,000）

建物は、2000年度調査SB01跡に2000年度調査SB02が建てられ、その北側に建物２、さらに北側に建物３、東側に建物４が建てられた。これらの建物の柱間は、すべて８尺（約2.4m）で統一されており、１期の建物（2000年度調査SB01）より小規模である。建物３・４は、それぞれ規模は確定できないが、建物３の北側柱列は池300の南岸に沿って並ぶため、ここを北限とした広い空間をもつ建物が想定される。建物４は建物３と同じ建物の東端に当たり、池250内に張り出すかたちで建つ。建物４の南東池内から「三条院鈎〔釣〕殿高坏」と墨書した土師器高杯が出土したことから、建物４は池250西岸に建てられた「釣殿」であったことも判明した。建物１は柱掘形が大きく、柱間が6.5尺（約1.95m）と短いことから、背の高い建物（高楼）が復元できる。建物相互の関係性も指摘できる。建物２と建物３は南北方向の柱筋が通り、建物２と建物５はともに溝43をまたいでいる。その溝43は建物１を避けて北側に迂回しており、検出した遺構すべてが一体的に計画・配置されていた。これらの遺構群が、史料にみえる「西三条第」の一部であることは、今回出土した土器の年代観、ならびに墨書土器の内容からみて、間違いない。

次に池250の性格について整理する。西岸に建つ建物４（釣殿）の存在から、観賞用の池として使用されたことは明らかであるが、池の平面形は長方形で、池の東岸と南岸は直線的であり、洲浜や景石ももたず、平安時代の園池の形状からすると不自然な点が多い。中央部の中島風の高まりも特異であり、造られた目的についてはよくわからない。南西部に取り付く溝43は、西側に造られた本格的な池に水を運ぶ遣水とみてよい。西側においては、2008年調査地（図35の23地点）、2001年調査地（同24地点）、1995年調査地（同25地点）の３箇所で池が検出されており、池250と同じ９世紀後半の遺物が出土している。しかも池岸には小礫を敷いた洲浜が造られており、池の作りからすると、西側の池の方が「ハレ」の池に相応しい。今回検出した池250は溝43より池底が深いため、常時水を貯えていたことになり、西側の池に水を安定して供給するための「貯水池」でもあったことになる。したがって、この池を観賞したのは当邸の主とその一族であり、池250は私的な生活空間として利用されたとみられる。建物４上からは池越しに東山の移り行く景色を楽しんだであろうし、建物１に登って眼下に広がる２つの池の異なった景色を俯瞰したことであろう。

以上、今回の調査では建物、園池、遣水を一体的に検出し、釣殿、高楼と推定できる遺構が確認できた。この西三条第北半部の様相は、文献史料や建築指図、絵画資料で復元されてきた「寝殿造建物配置」に必要な諸条件が備わりつつある点で、大いに注目できる。

（２）建物１について（図36）

建物１柱穴底部には礎板として角盥とみられる木槽が入れられていた（木279、図版142）。木槽が出土すること自体、平安京内では希有なことであるが、今回は、木槽が破砕された後、礎板として使用されていた。

木槽が礎板に利用された柱穴は、建物１の柱穴30・41・53・54・55・57である（図36）。いずれも建物１の北東部を構成する柱穴であり、西半・南半の柱穴からは礎板がまったく出土していな

い点は対照的である。次に、図31に示した破片がどの柱穴から出土したかを示すと、底部の破片Ａは柱穴53、Ｂは柱穴57、Ｃは柱穴41から、また把手を含む体部片Ｍは柱穴55から出土しており、建物の北面列と東面列を構成する柱穴に入れられたことがわかる。つまり、大型の破片Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｍは北端と東端の柱穴列を選択して入れられたと考えられる。次に、体部の破片であるＤ・Ｅ・Ｆ・Ｌは柱穴30から、同じくＧ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋは柱穴54から出土しており、東から２列目の柱穴列に入れられたことがわかる。図31・36から出土柱穴と体部破片の関係を求めると、図31上半の破片は柱穴30、下半はＬを除いて柱穴54にまとめて入れられている。

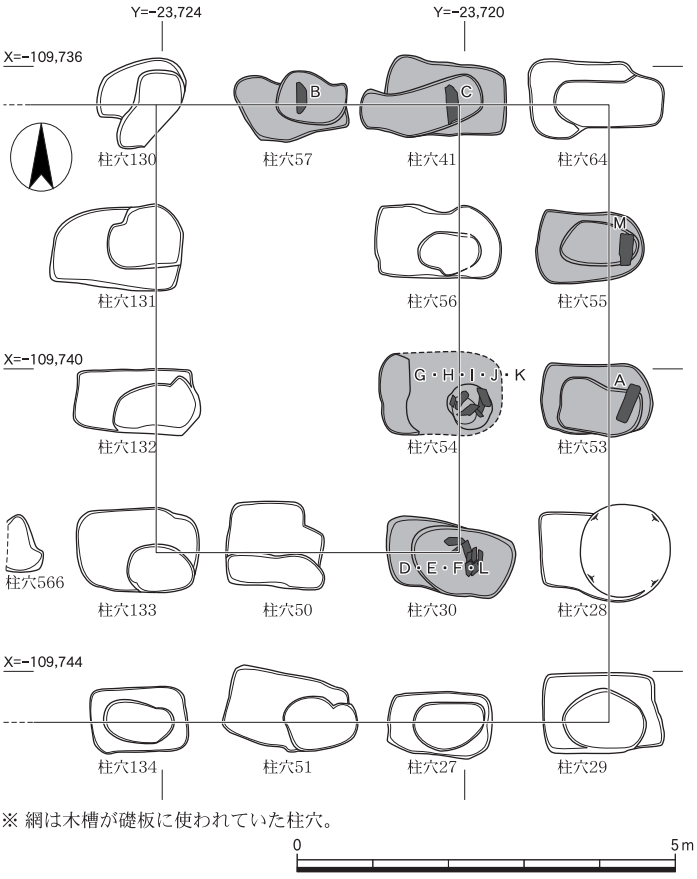


図36　建物１柱穴と木槽の部位（１：100）

建物１の柱穴は、２期に属する他の建物に比べると、柱穴掘形が東西に長いことや掘形東半が深く掘られるという特徴がみられた。その要因として、柱自体が太く長かったため、大きめの掘形が必要であったことが考えられる。これは建物１が高層建物（高楼）であったことを示すものであろう。また柱掘形の東半が深く掘られたことは、柱を西側から差し込むことを意図したためと考えられる。つまり、建築用資材は敷地の西半に仮置きし、北東側から順次柱が立てられたのであろう。その最初の段階で木槽が割られ礎板として使用されたのであるが、それが何を意図したかは明らかにできない[1)]。

この建物１は、溝43が建物の北側を迂回することや建物５が溝43をまたいで建物１に連接していた可能性があること、建物１の北東には池250、南西には洲浜をもつ本格的な池が配置されており、西三条第では極めて重要な施設であったことは確かである。『日本三代実録』貞観八年（866）三月二十三日条には清和天皇が当邸に行幸した記事があり、この中には「百花亭」という名称が見えるが、それより８日後の閏三月朔には藤原良相の実兄、太政大臣藤原良房の染殿に行幸された記事があり、そこには「望遠亭に還御して花樹を覧る。」とある。名称から、背が高く遠くを望むに適した建物を意味するようにとれる。西三条第では建物１が同様の性格をもった建物として存在したのではなかろうか。

この建物１では、柱材を抜き取った穴に焼土、炭、壁土が多量に含まれるおり、火災にあった

ことが想定できた。西三条第が火災で焼亡したとする史料はみられないが、考古学的な所見として十分想定できる。

２．藤原良相と西三条第（百花亭）について

（１）池250出土遺物の特徴

１　墨書土器について

出土した墨書土器には、仮名と漢字がある。仮名を墨書した土器は約20点あり、いずれも縦方向に墨書し、行数が多い点が注目できる。行数の多さは破片の大きさに比例するが、現状では４行以上（墨３・16）、５行以上（墨８）、９行以上（墨14）が確認できる。墨66・67は高杯の杯部と脚部の全面に墨書しており、脚部各面は２行ないし３行墨書するため、８面で合計18行以上墨書している。文字数が多いということは、文章として意味を伝えるという意識が含まれていたとみられるが、出土品はすべて破損するため、文意は復元できない。

漢字を墨書するものは、１字、ないし２字を記したものが多く、器が使用された建物、場所、地区を記したとみられる。代表は「三条院鈎〔釣〕殿高坏」（墨64）で、「釣殿」という具体名が記される。「膳所」（墨62）も邸宅内に置かれた厨房や配膳を担当する部署を指す。９世紀初めの井戸470から出土した「厨」（墨83）も同意語といえる。灰釉陶器では椀底部に「内」（墨73）、皿底部に「庄」（墨74）、壷の外面に「上」（図版48の493）がある。これらは、使用された場所を指すのであろう。「政所」（墨65）も、使用された部署、あるいは邸内に設置された機関名を記したものであろう。

器名に関しては、先述した「三条院鈎〔釣〕殿高坏」（墨64）の「高坏」がある。高杯の名称は現代も使用されている。土師器杯（墨１）に「坏」が見える。この器形も杯と呼称される器形である。井戸470から出土した土師器椀（墨82）には「酒坏」とある。この器形は椀と呼称されるが、宴席で「酒」を受ける容器として使用されたので「酒坏」と墨書されたのであろう。墨１には「月」がみえる。「ツキ」の発音から「坏」と同意語ともみられるが、観月の宴などで月を記した可能性もあり、決めがたい[2)]。

９世紀中頃から後半に当邸の主として活躍した右大臣藤原良相が文学の士を愛好したことは、『日本三代実録』貞観九年（867）の薨伝にみえる。良相の子供たちもみな英才で文学士であったとされる[3)]。清和天皇が当邸に行幸され「文人を喚て百花亭の詩を賦せしめた」ことも有名である。こうした既往の史料によって、当邸の様相はある程度推測されてきたが、今回池250から墨書土器が多数出土したことは、これらの記述を裏付けるものといえる。

なお、藤原良相の長男常行と在原業平は交友関係があり、貞観十七年（875）二月十七日に常行が薨じた際、追贈使として当邸に派遣されている（『日本三代実録』同日条）。在原業平は著名な歌人で、六歌仙の一人であるため、今回出土した仮名墨書土器との係わりが注目されるところである（付章４の鈴木論文参照）。

２　緑釉陶器の特徴

1. 優良品の多さ　池250から出土した猿投産緑釉陶器の中には、高級品と呼べる製品が数多く見られた。いずれも破損品ではあるが、今日においても輝きを保ち、器表はなめらかで美しい。釉は均質でむらがなく、調整も非常に丁寧で、焼き上がりは良好である。椀では405・406（稜椀）、412・413（陰刻花文をもつ）、415（稜椀）、417（釉がまだらを呈する）などが該当する。405と406は仕上がりが類似する。皿では433（稜皿）、436（陰刻花文をもつ）が該当する。香炉445と447は規格が異なるものの細部の意匠は同様であり、香炉蓋448・449も精緻な陰刻花文と透かし孔を施している。

池250から出土した緑釉陶器には、高級品を揃えようとした意図が感じられる。ここにあげた製品は猿投産平安京Ⅱ期中を中心とする時期に属し、９世紀後半の比較的早い段階に推定される製品である。この時期は、貞観元年（859）から翌年にかけて、藤原良相の実妹、藤原順子（皇太后）が西三条第に滞在し、貞観八年（866）には清和天皇の行幸が行われるなど、この西三条第が最も活況を呈した時期に当たる。池250の西側でこれらの高級国産陶器が使用されたことは、当邸の主であった藤原良相が良質の緑釉陶器を収集したことを示すものといえる。

2. 使用痕跡　池250から出土した緑釉陶器の中には釉薬が剥げ落ちたものがあり、長期間に渡り使い込まれた痕跡と判断できた。最も顕著な製品は415とした稜椀であり、高台、内面底、外面の稜線の釉が剥げ落ち、黒色を呈する状態がみられた。同様に、大型の稜椀（418）は稜線部分が黒色化しており、香炉蓋（448）も側面の釉が剥げかけている。香炉（445）、花瓶（452）も稜線の釉が剥げ落ちて黒色化している。いずれも突出する部位の釉薬が、周囲との摩擦で剥げ落ちたのであろう。永く愛用されたことをうかがわせる製品である。

3. 注文生産　緑釉陶器香炉（445）の底部内面には「二」、同じく香炉（447）の底部内面においても「十」が線刻されていた。２点が揃って出土したことによって、これらは数字であったと判断できた。両方とも焼成前に線刻されており、おそらく生産時に点数を確認する目的で記されたものとみられる。

通常の緑釉陶器には、こうした数字はほとんどみられないため、今回の出土例は注文者と生産者の関係を知る上でも重要な資料となりうる。２点とも香炉という稀少な高級品であり、右大臣藤原良相の西三条第跡から出土したということは、西三条第側から注文が伝達され、それに応じるかたちで生産者側が記号を線刻した可能性もあるのではなかろうか。その可否は判断できないものの数字を線刻した２つの緑釉陶器香炉は、特注品として生産されたものが当地にもたらされ、使用されたことは間違いない。なお、伝滋賀県浅井町出土として知られる緑釉陶器香炉にも同じ位置に「三」の線刻がある[4)]。

３　武官としての藤原良相を連想させる遺物

『日本三代実録』貞観九年（867）十月十日条にみえる藤原良相薨伝によると、藤原良相は

承和元年（834）　　右兵衛権大尉に拝せられる。

承和七年（840）　　左近衛少将に遷る。

承和十年（843）　左近衛少将もとの如し。

承和十三年（846）　中将に転ず。

仁寿四年（854）　右近衛大将に転ず。

天安元年（857）　左近衛大将に遷る。

とあるように武官の位に任じられている。一方、池250からは武官としての藤原良相を連想させる遺物が出土しているので、それらを紹介する。

1. 灰釉陶器椀の底部に「近」と墨書したものが出土している（墨76)。「近衛」との関連で注目できる。

2. 鉄鏃が１本出土している（金15)。先端が鑿形を呈する実用品である。銅鏃（金13)、弓の先端とみられる木製品（木239）が出土している。この２点は実戦用の器物とはみられないが、関連性は注目してよい。

3. 須恵器壷の内面に「兵　兵　兵　兵」の文字を習書したものがある（墨71)。破損品を墨壷として使用し、縁に習書したものであるが、「兵」の文字が並ぶことは、兵事に関わる文書を作成しつつある場面が想定できる。実際のところ藤原良相は、承和九年（842）七月十七日に起こった伴健岑・橘逸勢らの謀反（承和の変）では、「左近衛少将藤原良相に近衛四十人を率いさせて、皇太子（恒貞親王）の直曹を包囲した。中略。帯刀らを喚び集め、武装解除し、武器を勅使の前に積み置いた。」とする記述が『続日本後紀』（七月二十三日条）にある。また貞観八年（866）閏三月十日に起きた「応天門の変」では大納言伴善男と謀って源信邸を包囲しようとしたことが、『宇治拾遺物語』（巻第十「伴大納言応天門を焼く事」）に掲載されている[5)]。いずれも、武官としての一端を示す遺物として注目できる。

４　仏教的要素がみられる遺物

藤原良相が仏教を篤く敬ったことは、『日本三代実録』貞観九年（867）十月十日条の藤原良相薨伝に詳しいが、そのことを想起させる遺物が出土している[6)]。

1. 水晶製の経軸端（石７）　巻物の軸の両端を固定するために使用されていたもので、仏教の経典が存在した傍証となりうる。

2. 仏器の器形　黒色土器の鉄鉢形鉢（354)、ミニチュアの鉢（356）は仏器の写しとみられる。

3.「雑離」墨書土器（墨43）　土師器杯の内面に２文字以上墨書する。この個体のみ際だって丁寧な書体で墨書されており、経典の一部を書写したようにみえる。「雑離」は仏教経典には散見できる[7)]。また墨17が「南」であるなら、「南無」の可能性も考えられる。

4.「太一」墨書土器（墨75）　灰釉陶器底部の中央に大きく「太一」と墨書される。「太一」は真言では大日如来に相当し、宇宙の創造神の意味があるが、陰陽道においても天を司る神として特に重視された。邸内で様々な形態の祭祀が実施されたことを示す資料である。

５　女性的要素の多さ

女性が使用したとみられる遺物が出土しているので、それらを列記する。

1. 墨書土器に仮名文字が多い。仮名文字は「女手」と称され、漢字・漢文とは区別された。女

性だけに限定できないが、女性を含めて想定することに矛盾はないであろう。

2. 越州窯青磁の合子蓋（500・501）と緑釉陶器香炉蓋（449）は、小型品であり女性好みのようにみえる。

3. 化粧道具の毛抜（金14）が出土している。表装として毛彫りと金メッキが施されている。

4. 碁石（石８～14）が揃っている。

5. 櫛（木179～191）が多い。大・小の製品が揃っており、最小品は人形用か、玩具のようにみえる。

6. 檜扇（木192～210）が多い。こちらも大・小の製品が揃っている。

7. 土器の中にミニチュア製品がみられる。土師器高杯（309）、黒色土器椀（355）、同鉢（356）などであるが、これらは玩具として使用されたとみられる。

8.「政所」墨書土器が出土している。「政所」自体は邸内に設置された家政機関を指すが、皇太后藤原順子は貞観元年（859）四月から翌年四月にかけて当邸に滞在しており、関連性は無視できない。

６　土錘の出土について

平安京内の庭園遺構を調査すると、土錘が出土することが多く、今回も図版58に掲載した15点以上が出土している。右京三条一坊六町においては、西隣りで調査された２箇所の池からも土錘が数点出土している[8)]。庭園内の池では漁網の使用が想定されてきたが、土錘の出土はそのことを示す具体的な資料である。

池250は検出面から深さ0.8ｍあり、本来はさらに深かったことは確実で、池内に魚を放すことは十分に可能だったと推測できる。したがって、魚を一箇所に囲い込んだり捕獲する際には漁網が必要であり、これらの土錘は網に付けられたとみて大過ない。また池250から出土した木製品として浮子が３点（木232～234）出土している。この３点も漁具とされ、池内に漁網を仕掛け、魚を捕獲していたとみられる。

『日本三代実録』貞観八年（866）閏三月朔条には、清和天皇が太政大臣藤原良房の染殿に行幸し、「釣台に御して釣魚を観る。」とする記述がある。池内に魚が放たれていたことを示す史料として注目できる。

（２）藤原良相の西三条第・百花亭と藤原良房の染殿・望遠亭

『日本三代実録』貞観八年（866）三月二十三日条には清和天皇が藤原良相の邸宅、西三条第に行幸された記事がある。改めて記事の内容を点検してみる（第６章２　関係史料の（１）－ ③ 参照）。

右大臣藤原朝臣良相の西京第に幸す（１）。桜花を観る（２）。文人を喚して百花亭の詩を賦す（３）。射庭に御し射を賜う（４）。鵠（まと）に中（あ）てた者に布を賜う（５）。伶官は楽を奏す（６）。稚児が出て舞う（７）。晩に女楽を奏す（８）。歓宴は日におわる（９）。扈従の百官に禄を賜う（10）。夜分に宮に還る（11）。というのが内容である。

ところが、この日より８日後の閏三月朔条には藤原良相の実兄、太政大臣藤原良房の邸宅、染

殿に行幸された記事が載せられている。同様に内容を点検するが、西三条第と重複する部分はカッコ内に数字を示した。

太政大臣の東京染殿第に幸す（１）。桜花を観る（２）。釣台に御して釣魚を観る。射殿に遷り弓矢を御す（４）。東の門に御して田を耕す農夫田婦を覧る。雑楽皆作る。望遠亭に還御して花樹を覧る。伶人が歌に陪う。鼓鐘は備り陳ぶ（６）。紫竹繁り会いて、童男妓女が花の間を舞う（７）。能く文を属る者数人を喚して落花無数雪の詩を賦す（３）。終日楽飲す。皇の歓、是あまねく。群臣具に酔う。宴おわる（９）。親王已下に禄を賜う（10）。日暮れて車駕宮に還り給う（11）。とある。

このように整理すると、両邸では同じような行事が行われたことがわかる。しかし文字数は、良相邸が118字、良房邸は162字で、明らかに良房邸の方が多い。それだけ良房邸の方が行事が多く、盛大であったのだろう。

少し注意してみると、西三条第行幸の折り桜花は満開であったが、八日後に染殿を訪問された時、桜花はすでに散り始めていた。そこで「落花無数雪」降る状況が詩に賦されたのである[9)]。従来は「百花亭」という別称から、西三条第に様々な花樹が咲き誇っていたように理解されてきたが、染殿の様子を上のように理解するなら、桜花が満開であったため「百花」が詩の題に採用されたのである。仮に染殿行幸と西三条第行幸の順番が逆であったなら、西三条第には「百花亭」という美しい別称は与えられなかったであろう。

次に注目すべきは、良房邸に「釣台」が存在したことである。記事では、「天皇は釣台に御し釣魚を観る」と具体的に述べられている。このことから、庭園の池には魚が放され、実際に魚釣りが行われたことがわかる。先に出土遺物を検討した中で、土錘、浮子の出土から漁網の存在を指摘したが、『日本三代実録』貞観八年（866）閏三月朔条はそれを傍証する史料となりうる。また、西三条第では実際の遺構として釣殿（建物４）を検出しており、この点も、西三条第と染殿がそれぞれ同様の施設をもっていたことの証しとなる。

さらに注目したいのは、染殿に「望遠亭」と呼ばれる建物があったことである。望遠亭で桜花を観たとあり、「百花亭」と対語をなすようにも判断できるが、名称からは、遠景が望める背の高い建物が想定できる。西三条第で望遠亭にふさわしい建物といえば、柱穴の規模、寸法、掘形の大きさ、配置からみて建物１以外にありえない。釣殿の場合と同じく、高楼風建物が両邸に配置されていたのではなかろうか。

良房邸に行幸された清和天皇は、大いに楽飲され、群臣もことごとく酔ったとある。兄の邸宅を後で訪問された後ろめたさが、どこかにあったのではなかろうか。染殿行幸から間もない閏三月十日、応天門が炎上するという大事件が起きた[10)]。この事件を境に、拮抗していた兄弟の力関係は圧倒的に良房側が有利となる。そう考えると、事件直前のこの時期に両邸を行幸された清和天皇は、両臣間の均等を保とうと努力されたのではなかろうか。

（3）『今昔物語集』にみる西三条第

『今昔物語集』巻第14の第42には、藤原良相と仏教界に関する興味深い説話が掲載されている。以下、その大要を記す[11]。

西三条の右大臣、良相の御子、常行は色好みで東の京に愛念する女がいた。父母は夜行を制止したが、ひそかに舎人を具して大宮を登り東へ、美福門の前までくると東の大宮より多くの人が火を燃してののしりながらやって来るので、怖くなり神泉の北の門に隠れた。何者かと戸を細め見れば人ではなく鬼であった。鬼は「ここに人の気がある。搦めとろう」として近づくが、すぐ返っていく。指図していた鬼が近くまで来て、もはやこれまでと思い「尊勝真言が御します也けり[12]」というと、鬼は火を消して逃げ去った。自邸に戻ったが気分が悪く臥していると、乳母が様子をたずねるので経緯を話した。すると乳母は「奇異なこともあるものだ。昨年、己の兄弟の阿闍梨に尊勝陀羅尼を書いてもらって衣の頸に入れておいたので助かった。もし入れておかなかったら、どうなっていたか」といって泣くこと限り無かった。とする内容である。

この説話は根拠がなく載せられたわけではない。藤原良相が信仰心篤い人物であったことは、『日本三代実録』貞観九年（867）十月十日条の薨伝から知られる。仏教界とも係わりが深く、承和十四年（847）に唐から帰朝した天台僧円仁と密接な関係を保った[13]。斉衡三年（856）には文徳天皇とともに両部灌頂を受けると、さらに円仁に対して、修行謹慎の者を自らの身の代わりに得度させ、その僧を一生の師と仰ぐので推薦するように要請し、相応という僧を得た。藤原良相の娘で文徳天皇の女御であった多賀幾子が危篤となった際には円仁に書状を送り、相応の派遣を請う。相応はほどなく多賀幾子のもとに祈祷に訪れた。また、清和天皇の女御となった多美子のためにも相応は祈祷に訪れている。相応は良相の祈願僧であり、導師的な存在であったといわれる。

以上の経緯をみると、説話に登場する「乳母の兄弟の阿闍梨」がこの僧相応に重なる。その可否は判断できないが、仏心篤かった良相が円仁に代表される天台仏教界と深い関係にあったことが、説話の背景にあることは確かである[14]。また、今回の調査で出土した墨66・67は詳細な文字で高杯全体を埋めており、尊勝陀羅尼の霊験を具現化した様な特異な遺物として注目される。

なお、藤原良相については、『大鏡』第二巻「右大臣良相」にも『千手陀羅尼』の効験を受けたことが記されている。

（4）出土遺物と文献史料からみた西三条第の衰退

最後に、文献史料から知られることと今回の調査で判明したことを合わせて、西三条第の衰退について考える。

池250からは皇朝十二銭が６枚出土している。７番目に鋳造された長年大寶（嘉祥元年：848）が２枚、８番目に鋳造された饒益神寶（貞観元年：859）が１枚、９番目に鋳造された貞観永寶（貞観十二年：870）が３枚である。皇朝十二銭ではその後、10番目として寛平大寶（寛平二年：890）、11番目として延喜通寶（延喜七年：907）が鋳造されるが、池250からは出土していない。このこ

とは、池250の埋没年代を考える上で大いに参考になる。次に池250から出土した土器の年代観であるが、最も大量に出土した土師器皿・杯は、平安京Ⅱ期中を中心としており、実年代では９世紀後半代が想定される。

『日本三代実録』には、貞観元年（859）四月から翌年四月にかけて藤原良相の実姉、藤原順子（皇太后）が当邸に滞在したこと、貞観八年（866）三月には清和天皇が当邸に行幸されたことが記述されており、９世紀後半でも比較的早い段階に当邸が盛んに利用されたことがわかる。文献史料から得られた以上の年代観は、今回出土した銭貨や土器の年代観とは矛盾しない。

次に、当邸が衰退していく様子について整理する。貞観八年（866）閏三月十日、応天門が焼亡する事件が発生した（応天門の変）。この事件に際し、左近衛大将でもあった藤原良相は大納言伴善男と組みしたことから、太政大臣で実兄の藤原良房と対立する。この事件は良房側が勝利を収め、九月には伴善男が伊豆国に配流となる。良相は政治への関心を失い、十二月になるとさかんに辞意を表明する。そして翌貞観九年（867）十月初めには里邸に退き、この月の十日に没した。里第とあることから、最後は当邸で没したのであろう。続いて貞観十三年（871）九月には良相の実姉順子が、貞観十七年（875）二月には良相の長男常行が亡くなり、この頃を境に西三条第は急速に衰退したとみられる。このようにみると、西三条第が最も盛況を呈したのは850～870年代のおよそ30年間となる。実際にはその前後も使用されたとみられるが、そのことと出土遺物の年代観には大きな矛盾は認められない。

付章１自然科学分析では、池250からマツ属を初めとしてモミ属、ウメ、モモ、サクラ属、センダンなどの木本類植物化石と、水深の浅い場所、水深のある場所、沈水性を有するものなどの草本類植物化石が確認されたが、この中でサクラ属が確認されたことは、『日本三代実録』貞観八年（866）の清和天皇行幸との関連で注目すべき成果である。これら以外ではイネ、メロン、クリ、カキノキなどの大型植物化石も産出し、池250周辺で栽培されていたことが想定できた。またこれらの植物化石群は、池250が機能していた第３層には少なく、池が放置された上層には順次増加する傾向が認められた。池250の廃絶を推定する有益な情報である。この他、建物１の柱抜取穴から焼土塊や炭が出土し、建物１が火災に遭ったことが想定された。こうした邸内主要建物の罹災も西三条第が衰退する大きな要因となったとみられる。このように、西三条第の変遷は、平安京右京の中では最も利便性が良いと判断できる当地においても、10世紀に入ると荒廃が進むことを示す興味深い事例である。

嘉保二年（1095）には、散位従四位下であった大江公仲が隠岐国に流されたが、その際作成された財産処分状にこの六町の様子が記載されている（『平安遺文』第1338号）。六町を大江氏が所有したのは、藤原良相の室が大江氏であったため、藤原氏退去後、元の大江氏に帰していたのであろう[15)]。

註

１）　日本三代実録』貞観九年（867）十月十日条、藤原良相薨伝によると、左京六条に崇親院の別宅には

仏像を安置し、居住者には毎朝「盥」で洗浄させ、観音の名号を誦すことを令じたとする記述があり、関連性は注目してよい。建物造営の最初に砕いて礎板として使用することで、建物の安寧を祈願する意味があったのではなかろうか。『新訂増補　国史大系　日本三代実録　前篇』吉川弘文館1977年　P223。

2）　鈴木一雄・平田喜信「社交・遊戯と文学」『平安時代の信仰と生活』至文堂　1994年　P279「月見」

3）　『日本三代実録』貞観九年（867）十月十日条、藤原良相薨伝（註１に同じ）には、「文学の士を愛好し、大学中の貧寒の生を択びて、時に綿絹を賜ふ。冬天惨烈なれば多く被を縫ひ造りて、遍く四学堂に夜宿する者に賜ふ。時節、学生の文を能くする者を喚び詩を賦せしめ物を賚ふこと数あり。とある。また『本朝文粋』の注釈巻第八「詩序一」には「冬日愛すべし」賦すとして「貞観の初め、太階平らかにして寰海静かなり、右丞相（藤原良相）客館を開きて、以て英才を延く。枝の中丞（大枝音人）をして、毎旬試みるに文章筆札を以てし、その高下を第でしめ、随ふに賞賚を以てす。盛なるかな洋洋の美。（中略）相公（藤原良相）の両子、年皆成童なり、風度清格にして文藻日に新なり、また預りて学士の列に在り、自余の数子、各の詩篇有り、ゆへに具さに名姓を録さず、」とあり、藤原良相の一族は詩歌・文章作成が盛んであったことが記述されている。今回池250から墨書土器が多数出土したことは、史料にみえる藤原良相家の実態を示すものとして興味深い。『本朝文粋』については西山良平氏からご教示いただいた。史料の引用は第６章２ 関係史料の（２）による。

4）　『世界陶磁全集　２　日本古代』　小学館　1979年　Ｐ257に「264、265　緑釉　合子（十一世紀）伝滋賀県浅井町出土　口径17.8㎝、愛知県陶磁資料館」として掲載されている。またＰ317には「本器は、経塚から出土したと伝えるが、定かではない。内面中央に「三」の字が刻まれており、素地・釉薬からみて、猿投窯鳴海地区の緑釉陶窯の製品と考えられる。」とある。ちなみに今回の446は口径17.0㎝、器高7.4㎝で同規模であるが、脚部の透かしがやや大きい。

5）　瀧浪貞子『集英社版　日本の歴史５　平安建都』集英社　1991年　P182。

6）　『日本三代実録』貞観九年（867）十月十日、藤原良相薨伝（註１に同じ）には、「大臣、もと内典を習ひ真言に精熟す。ここに至りて腥鮮を撤却し、もっとも念仏を事とす。（中略）崇親院の中に一小堂を建て仏像を安置す。居住者をして毎旦盥洗し、観音名号を誦し以て後世の善根を植ゑしむ。（中略）正しく西方に面し阿弥陀仏の根本印を作して俄に薨ず。（中略）其の篤く仏道を信じ臨命に正念すること、時の人これを姚伯審に比ふ。」とある。史料の引用は第６章２ 関係史料の（１）－④ による。

7）　『大正新脩大蔵経テキストデータベース』の「雑離」検索による。

8）　2001年度調査（図３の24地点）の池から５点（本　弥八郎ほか『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年P29)、2008年度調査（図３の23地点）の池から４点（家崎孝治『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡　－ 西三条第（百花亭）跡－ 』古代文化調査会　2009年　P18）出土している。また断面がＸ形を呈する土錘（図版58の土15）も両地点から１点ずつ出土している。

9）　「賦す」とは、詩の六義の１つ。長い詩歌のことで、対句の型式で脚韻を有する長い漢文のことである。「六義」とは古代中国での詩を内容や様式から分類したもので６種あって、風、雅、頌、賦、比、興である。このうちの「賦」は、心に受けた感動をそのままに述べたものとする。

10）　『日本三代実録』貞観八年（866）閏三月十日条「夜。応天門火。延焼二　棲鳳翔鷲両楼一。」

11) 『今昔物語集』巻第十四の第四十二「依尊勝陀羅尼験力、遁鬼難語」　この説話は冒頭「西三条ノ右大臣ト申ス人御ケリ。御名ヲバ良相トゾ云ケル。（中略）大臣ノ家ノ西ノ大宮ヨリハ東、三条ヨリハ北、此レヲ西三条ト云フ。」とあることから、西三条第の所在地を考察する場合に注目されてきたが、本旨は、尊勝陀羅尼の験力によって鬼の難を逃れたとする部分で、良相と仏教界との結びつきが深かったことが背景にあったとみられる。史料の引用は第６章２ 関係史料の（４）による。

12) 仏頂尊勝陀羅尼という。仏頭（頂）には悪魔や外道を調伏する験力があり、陀羅尼とは一切の悪業障を消滅させる功徳をもった神秘的な呪句を意味する。

13) 小山田和夫「第５章　崇親院と藤原良相の仏教」『講座　日本教育史』第１巻　原始古代／中世　第一法規出版株式会社　1984年　その中でも「６　藤原良相と仏教」で詳しく論じられている。

14) この説話で注目されるのは、最後の「此ノ事ヲ聞キ及ブ人、皆尊勝陀羅尼ヲ書テ守ニシテナム具シ奉ケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。」の部分で、おそらく類似する行為が普及していたのであろう。史料の引用は第６章２ 関係史料の（４）による。

15) 『日本三代実録』貞観九年（867）十月十日条、藤原良相薨伝（註１に同じ）には、「室大江氏（大江乙枝娘）、大臣の生年卅余歳に臨み、旧寝に卒す。（中略）江氏を喪ひしより、また妻を娶ることなし。」とある。史料の引用は第６章２ 関係史料の（１）－ ④ による。

第６章　藤原良相と西三条第の関係年表・史料

１．関係年表

ゴシックは藤原良相薨伝の記事。〔　〕は『公卿補任』で補った。「　」は銭貨・木簡。

承和元年（834）　**禁中侍**〔蔵人〕。〔二年〕**右兵衛権大尉。**〔三年〕**内蔵助。**

「承和昌寶」（承和二年　１区地山直上）

承和五年（838）　**従五位下。**

承和六年（839）　**内蔵頭。**〔七年〕**兼因幡守。**

承和七年（840）　**左近衛少将。内蔵頭・因幡守は継続。**

承和八年（841）　**従五位上。**

承和九年（842）　七月十五日　嵯峨上皇が嵯峨院で没する。

七月十七日　伴健岑、橘逸勢らが謀反。（承和の変）

七月二十三日　藤原良相、近衛兵40人を率いて皇太子の直曹を囲む。

承和十年（843）　**正五位下。阿波守。内蔵頭・左近衛少将は継続。**

承和十一年（844）　蔵人頭・正五位上。

承和十三年（846）　**従四位下。左近衛中将、余官は継続。**

嘉祥元年（848）　**参議。**　「長年大寶」（嘉祥元年　池250　２枚）

嘉祥二年（849）　**兼相模守。**〔陸奥出羽按察使〕

右大弁。相模守は継続。

嘉祥三年（850）　三月　文徳天皇が即位し、惟仁親王が立太子、藤原順子が皇太夫人。

従四位上。

数月後、正四位下。陸奥出羽按察使を領ね、まもなく左大弁兼春宮大夫。

仁寿元年（851）　**従三位。権中納言。**

仁寿四年（854）　〔権〕**大納言兼右近衛大将。**藤原順子が皇太后。

斉衡二年（855）　**正三位。**

斉衡四年（857）〈天安元年〉　二月　藤原良房が太政大臣になる。**右大臣。**

従二位。左近衛大将。　「齊衡四年三條院正倉帳」題簽木簡（西側の池出土）

天安二年（858）　八月　文徳天皇が没し、清和天皇が即位。

同年、藤原多美子重病のため、相応が西三条第で加持祈祷を行う。

貞観元年（859）　**正二位。**

四月十八日　皇太后藤原順子が東宮より西三条第に遷る。

「饒益神寶」（貞観元年　池250　１枚）

貞観二年（860）　四月二十五日　皇太后藤原順子が東五条宮に帰る。

貞観三年（861）　正月　藤原順子が天台座主円仁を戒師として出家。

同年、藤原多美子重病のため、相応が西三条第で加持祈祷を行う。

貞観六年（864）　正月　藤原順子が太皇太后となる。

貞観八年（866）　三月二十三日　清和天皇が藤原良相の西三条第（百花亭）に行幸。

閏三月一日　清和天皇が藤原良房の染殿に行幸。

閏三月十日　応天門と左右の楼閣が焼亡（応天門の変）。

八月十九日　藤原良房が摂政になる。

十二月八日　藤原良相、表を抗し、職解を請う。

十二月十一日　藤原良相、重て抗表。

十二月十三日　藤原良相、重て抗表。

貞観九年（867）　三月十二日　清和天皇が母皇太后藤原明子らと内裏常寧殿で曲水の宴。参加した常行と多美子（清和女御）に叙位。

十月初　**直廬に病を得、里第に退く。**

十月十日　**藤原良相没（55才）。**〔贈正一位〕

貞観十年（868）　一月十六日　藤原常行が讃岐守に任じられる。

「貞観永寶」（貞観十二年　池250　３枚）

貞観十三年（871）　九月二十八日　太皇太后藤原順子が没し後山科陵に埋葬（63才）。

貞観十七年（875）　二月十七日　藤原常行没（40才）。従二位追贈の勅使として在原業平が遣わされる。

嘉保二年（1095）　散位従四位下大江公仲処分状案（『平安遺文』4-1338）に、「西三條地壹町〈在右京三條一坊六町、建三間四面屋一宇〉」と見える。

２．関係史料

（１）『日本三代実録』（新訂増補国史大系・訓読日本三代実録）

①貞観元年（859）四月十八日癸卯条　皇太后藤原順子、東宮から藤原良相三条第に遷る

十八日癸卯。皇太后遷レ自二東宮一。御二右大臣西京三条第一。去年八月廿九日。与二今上一同輿。遷レ自二冷然院一。御二於東宮一。擬レ還二五条宮一。暫御二大臣第一。為レ避レ忌也。

【書き下し文】

十八日癸卯。皇太后（藤原順子）東宮より遷りて、右大臣（藤原良相）の西京三条第に御（おはしま）す。去年八月廿九日。今上（清和天皇）と同輿して、冷然院より遷りて東宮に御す。五条宮に還らんことに擬（そな）へて、暫らく大臣第に御す。忌を避けんがためなり。

②貞観二年（860）四月二十五日乙巳条　皇太后藤原順子、藤原良相西京第から東五条宮に遷る

廿五日乙巳。皇太后遷レ自二右大臣西京第一、御二東五条宮一。授二従五位上行右近衛権少将兼周防権守藤原朝臣常行正五位下一。常行。右大臣之第一男也。

【書き下し文】

廿五日乙巳。皇太后（藤原順子）、右大臣（藤原良相）の西京第より遷りて、東五条宮に御す。従五位上行右近衛権少将兼周防権守藤原朝臣常行に正五位下を授く。常行は右大臣の第一男なり。

③貞観八年（866）三月二十三日己亥　清和天皇、藤原良相西京第を訪問・詩宴

廿三日己亥。鸞輿幸二右大臣藤原朝臣良相西京第一。観二桜花一。喚二文人一賦二百花亭詩一。預レ席者四十人。四位四人。五位八人。六位廿八人。天皇御二射庭一。賜二親王以下侍従以上射一。左右近衛中少将預焉。中レ鵠者賜レ布。伶官奏レ楽。玄髻稚歯十二人逓出而舞。晩奏二女楽一。歓宴竟レ日。賜二扈従百官禄一各有レ差。夜分之後。乗輿還レ宮。是日。進二参議右大弁従四位上兼行播磨権守大枝朝臣音人。参議右近衛権中将（侍従）兼備前権守藤原朝臣常行。参議左近衛中将兼伊予守藤原朝臣基経階一並加二正四位下一。授二従五位上行少納言兼侍従藤原朝臣諸葛正五位下一。従五位下左兵衛権佐藤原朝臣直方従五位上。散位正六位上大枝朝臣氏雄。木工少允従七位下布勢朝臣真継並従五位下。外従五位下伊統朝臣善子従五位下。已上叙位並是宴余之殊奨也。

【書き下し文】

廿三日己亥。鸞輿（清和天皇）、右大臣藤原朝臣良相の西京第に幸（みゆき）して桜花を観たまふ。文人を喚（めし）て百花亭の詩を賦せしむ。席に預る者四十人。四位四人。五位八人。六位廿八人なり。天皇射庭に御しまして親王以下侍従以上に射を賜ふ。左右の近衛中少将預れり。鵠に中（あ）てし者に布を賜ふ。伶官楽を奏し、玄髻稚歯十二人逓ひに出でて舞ふ。晩に女楽を奏し、歓宴日を竟む。扈従の百官に禄を賜ふこと各々（おのおのしな）差有り。夜分の後、乗輿（清和天皇）宮に還りたまふ。この日、参議右大弁従四位上兼行播磨権守大枝朝臣音人、参議右近衛権中将（侍従）兼備前権守藤原朝臣常行、参議左近衛中将兼伊予守藤原朝臣基経の階を進めて、並びに正四位下を加ふ。従五位上行少納言兼侍従藤原朝臣諸葛に正五位下、従五位下左兵衛権佐藤原朝臣直方に従五位上、散位正六位上大枝朝臣氏雄、木工少允従七位下布勢朝臣真継に並びに従五位下、外従五位下伊統朝臣善子に従五位下を授く。已上の叙位は並びにこれ宴余の殊奨なり。

④貞観九年（867）十月十日乙亥条　藤原良相死去・伝記

十日乙亥。右大臣正二位藤原朝臣良相薨。贈二正一位一。天皇不レ視レ事三日。良相朝臣者。贈太政大臣正一位冬嗣朝臣之第五子也。姉太皇大后。兄太政大臣忠仁公。並与二大臣一同胞也。大臣年在二童稚一。局量開曠。及二於弱冠一。始遊二大学一。雅有二才弁一。承和元年、仁明天皇徴令レ侍二禁中一。拝二右兵衛権大尉一。遷二内蔵助一。五年授二従五位下一。明年転レ頭。兼二因幡守一。小頃遷二左近衛少将一。内蔵頭因幡守如レ故。八年授二従五位上一。十年加二正五位下一。遷二阿波守一。内蔵頭左近衛少将如レ故。十三年至二従四位下一。転二中将一。余官如レ故。嘉祥元年拝二参議一。二年兼二相摸守一。同年秋拝二右大弁一。相摸守如レ故。三年授二従四位上一。数月加二正四位下一。尋領二陸奥出羽按察使一。未レ幾遷二左大弁兼春宮大夫一。仁寿元年授二従三位一。拝二権中納言一。四年転二大納言兼右近衛大将一。斉衡二年進二正三位一。四年拝二右大臣一。天安元年授二従二位一。遷二左近衛大将一。

貞観元年授二正二位一。嘗仁明天皇煎二煉五石一。試観二近侍一。先嘗欲レ知二精粗一。黄門数輩嬾無下飲二服之一者上。大臣引レ杯。一挙而尽。帝感二薬剤之間君臣不レ忘レ義焉。室大江氏。臨二大臣生年卅余歳一。卒二於旧寝一。大臣本習二内典一。精二熟真言一。至レ是撤二却腥鮮一。尤事二念仏一。自レ喪二江氏一。無二復娶レ妻。貞観之初。専二心機務一。志在二匡済一。当時飛レ鷹従レ禽之事。一切禁止。山川薮沢之利不レ妨二民業一。皆是大臣所二奏行一也。為レ人至性。意深睦レ親。勧学院南辺。更建二一院一。号二延命院一。以養下治藤氏生徒病困無二家業一者上。以二東京六条宅一。名二崇親院一。引下氏中子女不レ能二自存一者上以収養。並皆割二封戸一。入二庄田一給二其資用一。崇親院中建二一小堂一。安二置仏像一。令下居住者一。毎旦盥洗。誦二観音名号一。以植中後世之善根上。自製二願文一。多詞不レ載焉。愛二好文学之士一。択二大学中貧寒之生一。時賜二綿絹一。冬天惨烈。多縫二造被一。遍賜二四学堂夜宿者一。時節喚二学生能レ文者一。賦レ詩賚レ物数矣。是年十月初。直廬得レ病。退就二里第一。同月十日。告二諸子一曰。今日興福寺維摩会之初講。是吾閻浮業之終夕也。儻以二此日一。帰二吾寂滅一。旧郷安知。与二彼法会一。不レ有二因縁一乎。臨レ終乃命二侍児一扶起。正二面西方一。作二阿弥陀仏根本印一俄薨。時年五十五。遺言令二薄葬一。単衾覆レ棺。大臣蔬菲累レ年。羸痩過甚。迄レ終二一身一不レ虧二宿誓一。其篤信二仏道一。臨命正念。時人比二之姚伯審一。有レ子。男女九人。長子常行。官至二大納言一。自有レ伝。次直方。忠方並以二才行一見レ称。忠方最工二隷書一。

【書き下し文】

十日乙亥。右大臣正二位藤原朝臣良相薨ず。正一位を贈る。天皇（清和）、事を視ざること三日。良相朝臣は、贈太政大臣正一位冬嗣朝臣の第五子なり。姉は太皇大后（順子）、兄は太政大臣忠仁公（良房）。並びに大臣と同胞なり。大臣、年童稚に在りしより局量開曠なり。弱冠に及びて始て大学に遊ぶ。雅（もと）より才弁有り。承和元年（834）、仁明天皇徴（め）して禁中に侍らしむ。右兵衛権大尉に拝せられ内蔵助に遷る。五年、従五位下を授かり、明年、頭に転じ因幡守を兼ぬ。しばらくして左近衛少将に遷る。内蔵頭・因幡守もとの如し。八年、従五位上を授かり、十年、正五位下を加へられ阿波守に遷る。内蔵頭・左近衛少将もとの如し。十三年、従四位下に至り中将に転ず。余官もとの如し。嘉祥元年（848）、参議に拝せられ、二年、相摸守を兼ぬ。同年秋、右大弁に拝せらる。相摸守もとの如し。三年、従四位上を授かる。数月にして正四位下を加へらる。ついで陸奥出羽按察使を領（か）ね、いまだ幾くばくならずして左大弁を兼ね春宮大夫に遷る。仁寿元年（851）、従三位を授かり、権中納言に拝せらる。四年、大納言を兼ね右近衛大将に転ず。斉衡二年（855）、正三位に進み、四年、右大臣に拝せらる。天安元年（857）、従二位を授かり左近衛大将に遷る。貞観元年（859）、正二位を授かる。かつて仁明天皇、五石を煎煉して試に近侍に観せ、先に嘗しめて精粗を知らんとす。黄門数輩はばかりて飲服する者なし。大臣杯を引き一挙して尽す。帝、薬剤の間も君臣の義を忘れざるを感ず。室大江氏（大江乙枝〔角田文衛氏によれば乙枚〕娘）、大臣の生年卅余歳に臨み、旧寝に卒す。大臣、もとより内典を習ひ真言に精熟す。ここに至りて腥鮮を撤却し、もっとも念仏を事とす。江氏を喪ひしより、また妻を娶ることなし。貞観の初め、心を機務に専にし志は匡済にあり。当時、鷹を飛して禽を従（お）ふ事一切禁止し、山川薮沢の利に民業を妨げざるは、皆これ大臣の奏し行ふところなり（『日本三代実録』貞観元年八月八・十三日条、

『類聚三代格』)。人となり至性にして、意深く親に睦ぶ。勧学院の南辺に更に一院を建て延命院と号す(『日本三代実録』貞観元年二月十一日条)。以て藤氏の生徒の病困にして家業なき者を養ひ治む。東京六条宅を以て崇親院と名づけ、氏の中の子女の自存能はざる者を引きて以て収養す。並びに皆封戸を割き庄田を入れて其の資用に給ふ。崇親院の中に一小堂を建て仏像を安置す。居住者をして毎旦盥洗し、観音名号を誦し以て後世の善根を植ゑしむ。自ら願文を製するも多詞なれば載せず。文学の士を愛好し、大学中の貧寒の生を択びて、時に綿絹を賜ふ。冬天惨烈なれば多く被(ふすま)を縫ひ造りて、遍く四学堂に夜宿する者に賜ふ。時節、学生の文を能くする者を喚び詩を賦せしめ物を賚(たま)ふこと数あり。この年十月の初、直廬に病を得て退きて里第に就く。同月十日、諸子に告げて曰く、「今日は興福寺維摩会の初講なり。是れ吾が閻浮業の終夕なり。たまたま此の日を以て吾れ寂滅に帰す。旧郷安んぞ知らんや。彼の法会と因縁有らざるか」と。終に臨み、乃はち侍児に命じて扶け起さしむ。正しく西方に面し阿弥陀仏の根本印を作して俄に薨ず。時に年五十五なり。遺言して薄葬せしめ単衾棺を覆ふのみ。大臣蔬菲して年を累ね、羸痩過甚なり。一身を終るまで宿誓を虧かず。其の篤く仏道を信じ臨命に正念すること、時の人これを姚伯審に比(なずら)ふ。子は男女九人有り。長子常行は官大納言に至る。自ら伝有り。次の直方・忠方は並びに才行を以て称せらる。忠方は最も隷書に工なり。

＊良相については、『大鏡』第二巻「右大臣良相」にも略伝があり、西三条の大臣と呼ばれたこと、『千手陀羅尼』の効験を受けたこと、などが記されている。

(2)『本朝文粋』巻第8　詩序1　天象(新日本古典文学大系『本朝文粋』・『本朝文粋註釈』)

賦二冬日可レ愛　　橘贈納言

貞観之初、太階平、寰海静、右丞相開二客館一、以延二英才一焉、令下枝中丞毎旬試以二文章筆札一第中其高下上、随以二賞賚一、盛哉洋々之美、雖二周公吐レ哺、魏帝虚レ席、何以加レ旃、相公両子、年皆成童、風度清格、文藻日新、亦預在二学士之列一、自余数子、各有二詩篇一、故不三具録二名姓一、十一月中旬試、賦二得冬日可レ愛、請共二格律一成レ文、云レ爾、

【書き下し文】

「冬日愛すべし」を賦す　　橘の贈納言(橘広相)

貞観の初め、太階平らかにして寰海静かなり、右丞相(藤原良相)客館を開きて、以て英才を延く、枝の中丞(大枝音人)をして、毎旬試みるに文章筆札を以てし、その高下を第(つい)でしめ、随ふに賞賚を以てす、盛なるかな洋洋の美、周公、哺を吐き、魏帝、席を虚しくするといへども、何を以てか旃(これ)に加へん、相公(藤原良相)の両子、年皆成童なり、風度清格にして文藻日に新なり、また預りて学士の列に在り、自余の数子、各の詩篇有り、ゆへに具さに名姓を録さず、十一月中旬の試に、「冬日愛すべし」といふことを賦し得たり、請ふ格律を共にして文を成さんと爾云ふ、

＊冬日可愛：冬の日光のように暖かく慈愛深い人の喩え。

（３）『伊勢物語』七十八段（新日本古典文学大系『竹取物語　伊勢物語』153頁）

むかし、多賀幾子と申す女御おはしましけり。亡せ給て七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。右大将藤原の常行といふ人いまそがりけり。そのみわざにまうでたまひて、かへさに、山科の禅師の親王おはします、その山科の宮に、滝落し、水走らせなどして、おもしろく造られたるにまうでたまうて「年ごろよそには仕うまつれど、近くはいまだ仕うまつらず。こよひはこゝにさぶらはむ」と申たまふ。親王よろこびたまふて、夜の御座のまうけさせ給。さるに、かの大将、出でてたばかりたまふやう、「宮仕へのはじめに、ただなをやはあるべき。三条の大行幸せし時、紀の国の千里の浜にありける、いとおもしろき石奉れりき。大行幸ののち奉れりしかば、ある人の御曹司の前の溝にすへたりしを、島好み給君也、この石を奉らん」とのたまひて、御随身、舎人して取りにつかはす。いくばくもなく持て来ぬ。この石、きゝしよりは見るはまされり。これをただに奉らばすずろなるべしとて、人々に歌よませたまふ。右の馬頭なりける人（在原業平）のをなむ、あおき苔をきざみて、蒔絵のかたに、この歌をつけて奉りける。

あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ

となむよめりける。

＊人物の没年や官職に齟齬があり虚構と見られているが、藤原常行のことや清和天皇の西三条第行幸および同第の庭石のことが記されているので掲げる。なお、七十七段にも常行が登場している。

（４）『今昔物語集』巻第十四（新日本古典文学大系『今昔物語集』3　360頁）

依尊勝陀羅尼験力、遁鬼難語　第四十二

今昔、延喜ノ御代ニ、西三条ノ右大臣ト申ス人御ケリ。御名ヲバ良相トゾ云ケル。其ノ大臣ノ御子ニ、大納言ノ左大将ニテ常行ト云フ人御ケリ。其ノ大将、未ダ童ニテ、勢長ノ時マデ、冠ヲモ不着ズシテゾ御ケル。其ノ人ノ形美麗シテ、心ニ色ヲ好テ、女ヲ愛念スル事並無カリケリ。然レバ、夜ニ成レバ家ヲ出テ東西ニ行クヲ以テ業トス。而ル間、大臣ノ家ノ西ノ大宮ヨリハ東、三条ヨリハ北、此レヲ西三条ト云フ。其レニ、此ノ若君ミ、東ノ京ニ愛念スル女有ケレバ、常ニ行キケルヲ、父母夜行ヲ恐テ強ニ制シ給ヒケレバ、窃ニ、人ニモ不令知ズシテ、侍ノ馬ヲ召テ、小舎人童・馬ノ舎人許ヲ具シテ、大宮登リニ出デヽ東ザマニ行キケルニ、美福門ノ前ノ程ヲ行クニ、東ノ大宮ノ方ヨリ多ノ人、火ヲ燃シテ喤テ来。若君此レヲ見テ云ク、「彼レ何人ノ来ルナルラム。何ニカ可隠キ」ト。小舎人童ノ云ク、「昼ル見候ツレバ、神泉ノ北ノ門コソ開テ候ヒツレ。其レニ入テ、戸ヲ閉テ、暫ク御マシテ令過メ給ヘ」ト。若君喜テ馳テ、神泉ノ北ノ門ノ開タルニ打入テ、馬ヨリ下テ柱ノ本ニ曲リ居ヌ。其ノ時ニ、火燃タル者共過グ。「何者ゾ」ト戸ヲ細ソ目ニ開テ見レバ、早ウ、人ニハ非デ鬼共也ケリ、様々ノ怖シ気ナル形也。此レヲ見テ、「鬼也ケリ」ト思フニ、肝迷ヒ心砕テ、更ニ物ノ不思ズ。目モ暮テ□臥タルニ、聞ケバ、鬼共過グトテ云ナル様、「此ニ気ハヒコソスレ。彼レ搦メ候ハム」ト云テ、者一人走リ係テ来ナリ。「我ガ身、今ハ限リゾ」ト

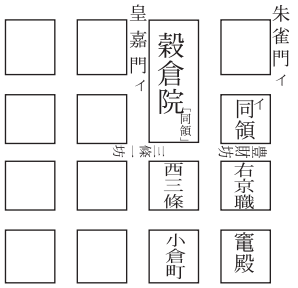
思フニ、近クモ不寄来ズシテ走リ返ヌナリ。亦音有テ「何ゾ不搦ザル」ト云ヘバ、此ノ来ツル者ノ云ク、「否不搦得ザル也」ト云フニ、「何ノ故ニ不搦ザルゾ。慥ニ搦メヨ」ト行ヘバ、亦他ノ鬼走リ来ル。亦前ノ如ク近クモ不寄来ズシテ走リ返ヌ。「何ゾ。搦タリヤ」ト云フニ、「尚、不搦得ザル也」ト云ヘバ、「怪キ事ヲ申スカナ。我レ搦メム」ト云テ、此ク俸ツル者走リ係テ来ルニ、始ヨリハ近ク来テ、既ニ手係ク許リ来ヌ。「今ゾ限リ也ケル」ト思フ間ニ、亦走リ返ヌ。「何ニ」ト問フナレバ、「実ニ不搦得ザル、理也ケリ」ト云ヘバ、亦、「何ナレバ然ルゾ」ト問フナレバ、「尊勝真言ノ御マス也ケリ」ト云フニ、其ノ音ヲ聞テ、多ク燃タル火ヲ一度ニ打消ツ、東西ニ走リ散ル音シテ失ヌ。中々、其ノ後、頭ノ毛太リテ物不思エズ。然レドモ、此クテ可有キ事ニ非ネバ、我レニモ非デ馬ニ乗テ、西三条ニ返ヌ。曹司ニ行テ、心地極テ悪シケレバ、弱ラ臥ヌ。身ニ暑ク成タリ。乳母、「何クニ行キ給ツルゾ」ト、「殿・御前ノ此ク許令申メ給フニ、『夜深ク行カセ給フ』ト聞カセ給ハヾ、何ニ申サセ給ハム」ナド云テ、近ク寄テ見ルニ、極テ苦シ気ナレバ、「何ゾ苦シ気ニハ御マスゾ」ト云テ、身ヲ掻キ捜レバ、極テ暑シ。然レバ、乳母、「此ハ御マスゾ」ト云テ、迷ヨフ。其ノ時ニ、若君有ツル様ヲ語リ給ケレバ、乳母、「奇異カリケル事カナ。去年、己レガ兄弟ノ阿闍梨ニ云テ、尊勝陀羅尼ヲ令書テ、御衣ノ頸ニ入レシガ此ク貴カリケル事。若シ不然マシカバ何ナラマシ」ト云テ、若君ノ額ニ手ヲ当テヽ泣ク事無限シ。此クテ三四日許暑シテ、様々ノ祈共被始レテ、父母モ囂ギ給ヒケリ。三四日許有テゾ、心地直タリケル。其ノ時ニ、暦ヲ見ケレバ、其ノ夜、忌夜行日ニ当タリケリ。此ヲ思フニ、尊勝陀羅尼ノ霊験極テ貴シ。然レバ、人ノ身ニ必ズ可副奉キ也ケリ。若君モ其ノ尊勝陀羅尼衣ノ頸ニ有リト云フ事不知給ザリケリ。其ノ比、此ノ事ヲ聞キ及ブ人、皆尊勝陀羅尼ヲ書テ守ニシテナム具シ奉ケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。

＊なお『大鏡』第二巻には、父藤原良相が『千手陀羅尼』の効験を受けたことが記されている。

（５）『拾芥抄』中（新訂増補故実叢書）

①第廿　諸名所部

西三条　三条北　朱雀（西）　又号二百花亭一　良相大臣旧跡



②第廿二　京程部　西京図

（６）『天台南山無動寺建立和尚伝（相応和尚伝）』（『群書類従』５）

文徳天皇天安二年、西三条女御嬰二重病一、殆及二死門一、右大臣頻馳二書信一、丁寧被レ請二和尚一、慈覚大師曰、八福田中看病第一、結縁之内、師檀尤深、件閣下身代令レ度二上人一、一深憑二祈念之力一、当二此急難一、称レ守二本願一、不レ趣二彼請一、一違二利生之意一、一背二知恩之旨一、早可二参下一矣、大師命難（背脱カ）、不レ竟二一十二年一、参二於彼殿一、山山寺寺名僧、有智有験僧綱凡僧、満レ堂溢レ席、側レ肩促レ膝、和尚不レ整二衣裳一、只着二麁布一、皆見二装儀之麁簡一、各懐二下劣之思惟一、和尚謙下、不レ上二殿中一、遥坐二廂檐一而誦レ咒、未レ幾咒二縛其霊一、彼此雷同、未レ知二誰験一、暫而擲二出自二几帳上一、過二度於衆人之中一、如レ飛到二於和尚之前一、躍踊昇降高声叫喚、和

尚宣下行可レ還二本処一由上、亦如レ飛還二於帳裏一、数剋之後、其声漸下、所レ着霊気陳二屈伏之詞一、種種雑語不レ可二勝計一、大臣感激歓喜云、我師斯在、豈有二何思一哉、満堂緇素、瞿然皆瞻二和尚一、是則顕験之最初也、（中略）　同年（貞観三）西三条女御復有レ悩、大臣請二和尚一、令二加持一。不レ幾而平復、大臣弥感、（以下略）

【書き下し文】

文徳天皇天安二年（858）、西三条女御（藤原多美子）重病に嬰り殆ど死門に及ぶ。右大臣（藤原良相）頻りに書信を馳せ丁寧に和尚（相応）を請ふ。慈覚大師曰く、「八福田の中、看病第一なり。結縁の内、師檀尤も深し。件の閣下（藤原良相）身代として上人を度せしめ、一深に祈念の力を憑めり。この急難に当りて、本願を守ると称し彼の請ひに趣かずんば、一つには利生の意に違ひ、一つには知恩の旨に背かん。早く参り下るべし」と。大師の命に背き難く、一十二年を竟へず彼の殿（西三条第）に参る。山山寺寺の名僧、有智有験の僧綱凡僧、堂に満ち席に溢れ、肩を側むけ膝を促づけたり。和尚、衣裳を整へず只だ麁布を着たり。皆な装儀の麁簡なるを見て、おのおの下劣の思惟を懐けり。和尚、謙り下りて殿中に上らず遥かに廂檐に坐して咒を誦す。未だ幾ばくならずして其の霊を咒縛せり。彼れ此れ雷同して未だ誰の験なるかを知らず。暫くして几帳の上より擲がり出で、衆人の中を過ぎ度り飛ぶが如くして和尚の前に到る。躃踊昇降し高声叫喚す。和尚、本処に還るべき由を宣行するに、亦た飛ぶが如くして帳裏に還り、数剋の後、其の声漸く下る。着く所の霊気、屈伏の詞を陳ぶ。種種の雑語、勝て計ふべからず。大臣、感激歓喜して云はく「我師ここに在り。豈に何の思ひ有らんや」と。満堂の緇素、瞿然として皆な和尚を瞻たり。これ則はち顕験の最初なり。（中略）　同年（貞観三・861）西三条女御、復た悩有り、大臣和尚を請ひて加持せしむ。幾ばくならずして平復す。大臣いよいよ感ず。（以下略）

＊920年頃成立の史料。高僧伝ゆえ誇張を考慮すべきだが、西三条邸における二度の密教修法の実施を伝える。藤原多美子（良相娘）は貞観六年（864）に清和に入内し女御となるので、天安二年（858）・貞観三年にはまだ女御ではないが、本史料は全体を通じて多美子を西三条女御と称している。

付章１　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平安京右京三条一坊六・七町跡の発掘調査では、平安時代前半の池跡、建物跡のほか、同時代の貴重な遺物が豊富に出土している。今回の自然科学分析調査では、９世紀前半およびその前後期の調査区の景観、土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、現地での堆積物の観察記載と分析試料採取を行い、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定を実施する。

１　調査地点の層序

上記調査区目的を踏まえて、現地にて堆積層の観察記載と15箇所の地点（１～15地点）から分析用の不撹乱柱状試料を採取した（図１）。以下に今回分析調査を実施した１区および３区における調査地点を中心とする堆積層の累重状況を以下に示す。

（１）１区

１区では、調査区北部の９世紀前半の池117が分布する領域を中心に調査を実施した。調査地点の堆積層の累重状況を図２に示す。現代の盛土直下の堆積物は、上位より大きく１層～５層に区分される。各層の層相を以下に示す。

１層：灰色を呈する、細～大礫、炭片が混じる、亜角～亜円でブロック状・板状をなす泥質細粒砂ないし細粒砂質泥の偽礫からなる。偽礫の大きさは15～３㎝と不揃いで不規則に分布する。礫は層下部に断続的に分布する。上位層準から連続する植物根痕これら層相から、１層は人為的営力により形成された客土からなる。

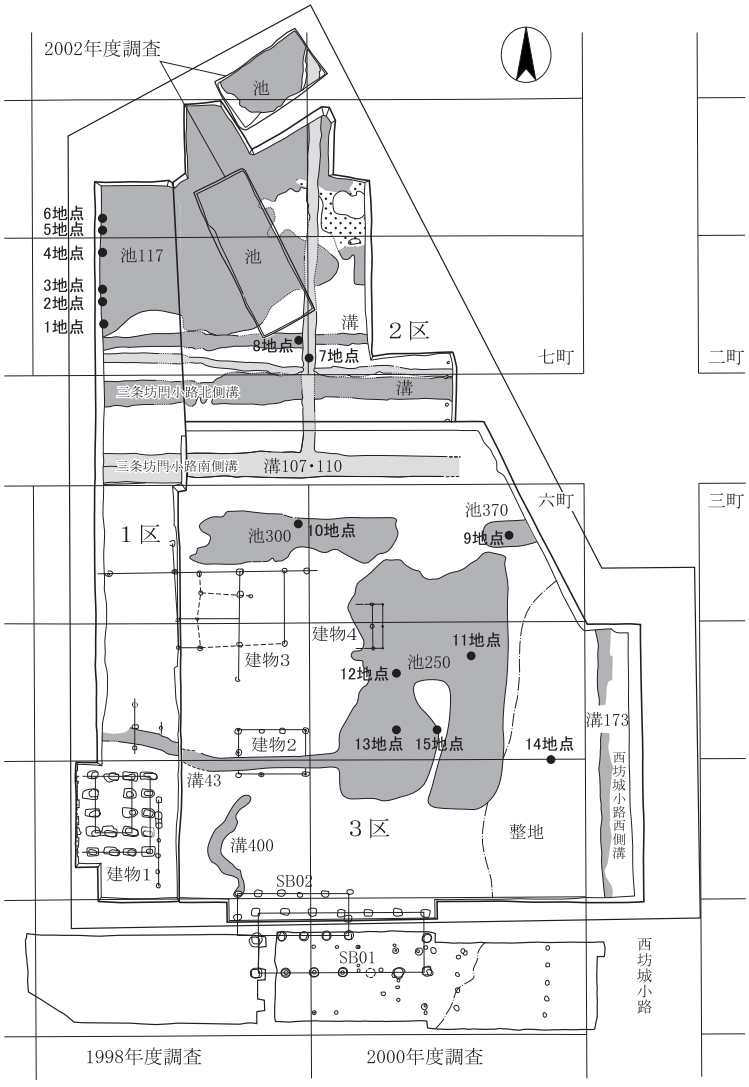


図１　調査地点の位置

２層：灰色を呈する、細・中礫、木片・炭片が混じる、亜角～亜円でブロック状・板状をなす細粒砂質泥の偽礫からなる。下位の３層との層界は明瞭で、著しい凹凸をなす。２層も１層と同様に人為的営力により形成された客土である。形成年代は９世紀以降であるが、出土遺物がなく特定できない。

３層：池117の充填堆積物である。暗灰を呈する、植物遺体片を多く含む、やや有機質に富む極細粒砂混じり泥からなる。下位の４層との層界は明瞭で、３層下部に４層由来の亜角でブロック状・刃状をなす偽礫や植物遺体片が散布する。また、上部は著しく擾乱されている。また、著しく含水塑性変形している。

４層：池117の基盤をなす堆積物である。池の掘削に伴い、多くが削剥されている。上位より植物遺体が多く混じる有機質泥質砂（4-1層）、粗粒～細粒砂（溝を充填する4-2層）、やや腐植を含む砂質泥（4-3層）、細粒～中粒砂（4-4層）、やや有機質な細粒砂質泥（4-5層）に細分される。これらの堆積物は、著しく含水組成変形している。後述するように地震動によるものと判断される。４層下部から下位の５層にかけて木本植物の根痕が存在し、４層形成期のある段階で植生が成立していたことがうかがえる。また、５層との層界は比較的明瞭であるが、層界は著しく変形している。上位の4-1層からは弥生時代前期の遺物片が出土している。

５層：灰白色を呈する葉理構造をなす細粒砂～細粒砂質泥からなる。上方細粒化する。層相から氾濫堆積物と判断される。４地点と５地点の間では本層上部まで池掘削の影響が及んでいる。上部は生物擾乱や人為的掘削、地震動に伴う変形により乱れている。が、下部は初生の堆積構造が残る。木材遺体および樹木根が比較的密に分布する。なお、木材遺体のうち、樹種が明らかになったものは全てコナラ亜属コナラ節に同定された。

（２）３区

３区では９世紀前半の池370、９世紀後半の池250、これら遺構の基盤堆積物を中心に調査を実施した。調査地点における堆積層の累重状況を図３に示す。９世紀の遺構の基盤をなす堆積物は扇状地性の氾濫堆積物および流路充填堆積物からなり、側方への層相変化が著しい。

９世紀前半の遺物が出土する池370は、氾濫堆積物である泥混じり細粒砂を掘削して構築されている。充填堆積物は、下部が灰色を呈する、基盤堆積物に由来する偽礫混じりの砂質泥から泥質砂からなる。偽礫は亜角でブロック状をなす泥質砂からなり、不規則に散布する。人為的掘削時に生じたものと判断される。このほか小礫・炭片も混じる。一方、上部は炭片が多く混じる有機質に富む砂質泥からなる。炭片の大きさは５㎜以下である。これら充填堆積物は、後述するように地震動により著しく含水塑性変形している。充填堆積物と下位の基盤堆積物との層界は明瞭であるが、含水塑性変形している。

９世紀後半の池250は、流路充填堆積物からなる沖積リッジと沖積リッジ間の凹地部分にかけて構築されている。必ずしも自然地形を利用しているとは限らない。９世紀後半の池250充填堆積物は上位より、１層～５層に区分される。

１層は偽礫混じりの砂質泥から泥質砂からなる。上部は人為的営力により形成された客土から

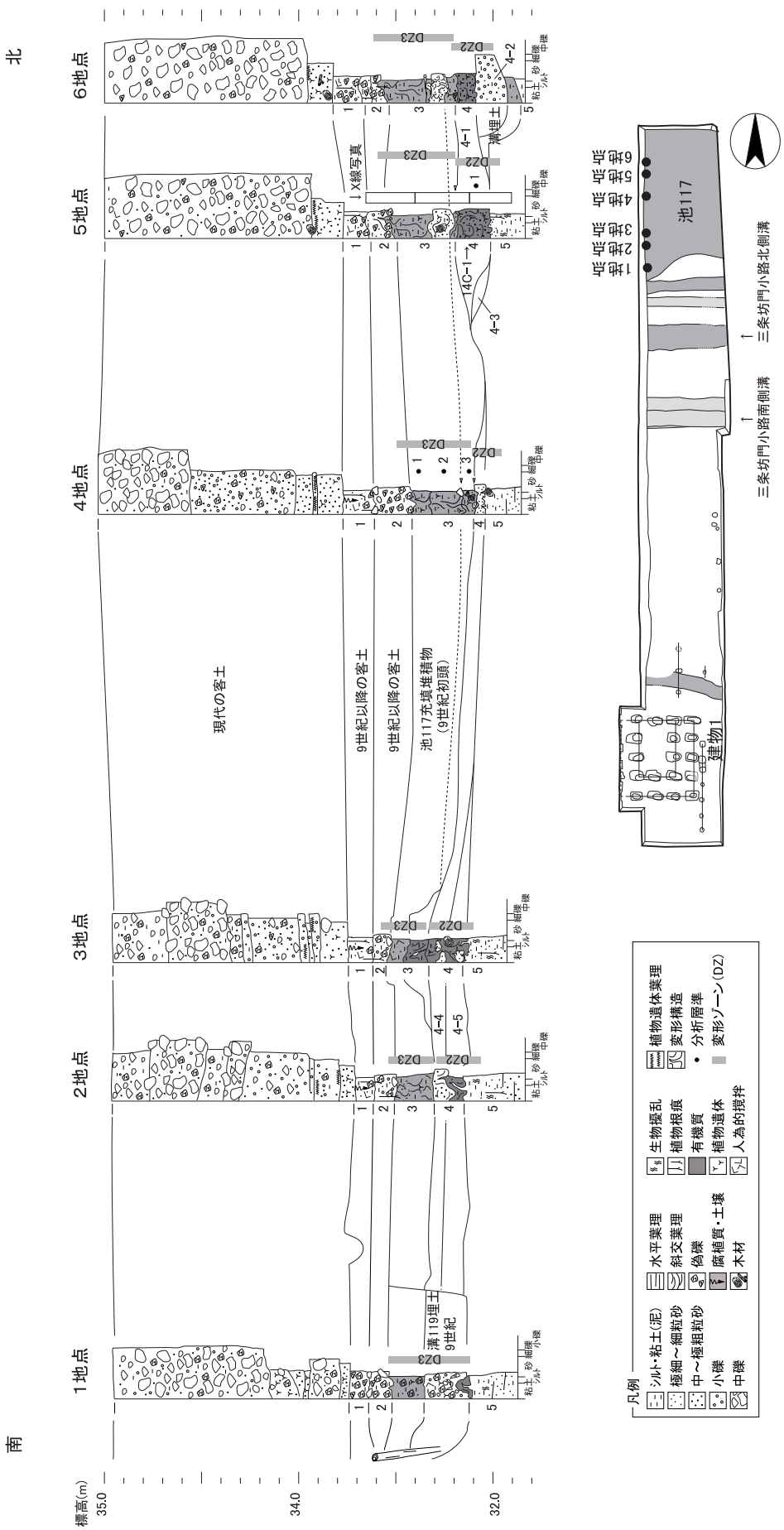


図２　調査地点の層序（１区）

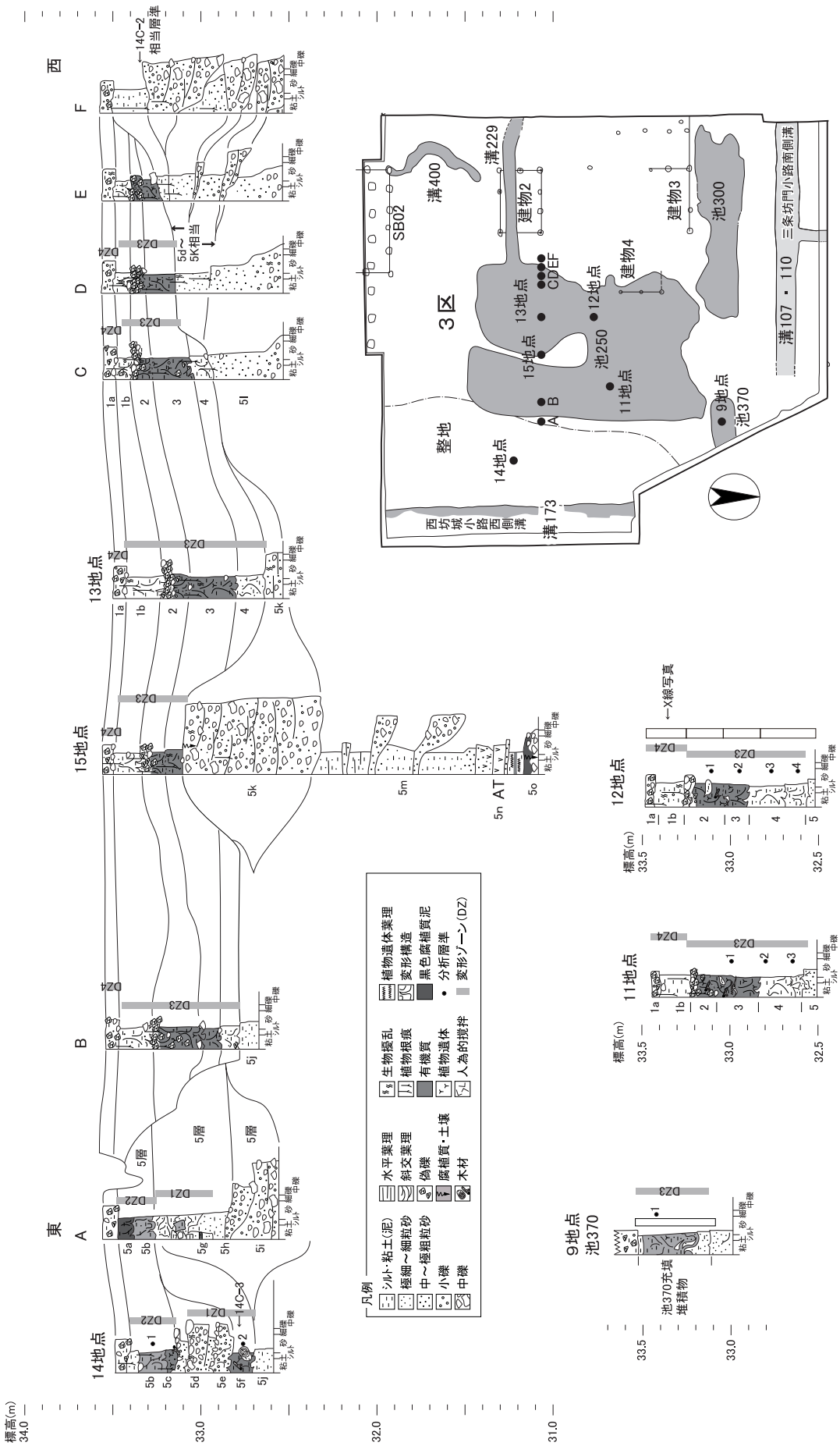


図３　調査地点の層序（３区）

なり、偽礫からなる。下部は偽礫が混じる砂質泥からなる。生物擾乱もしくは人為的撹拌を受けており、上位層準から連続する垂直方向の幅１㎜前後の根成孔隙が密に分布する。これらの堆積物も後述するように地震動により変形している。10世紀の遺物が混じる。

２層は人為的営力により形成された砂質泥ないし泥質砂の偽礫、礫、遺物などからなる。池西側の斜面には多量の遺物が投棄されている。下位の３層との層界は下に凸な構造をなす。なお、柱状図に示した２層の範囲はその影響を受けている範囲と判断されたい。出土遺物の年代は９世紀後半を主体とする。

３層はマツ属の球果や枝などの植物遺体が多く混じる、有機質砂混じり泥からなる。上部ほど植物遺体の密度が増し、層状に挟在し、さらに土壌生成作用の影響も受けている。充填に伴い、水位が低下し、乾湿を繰り返す状況におかれるようになったことが推定される。

４層は池充填堆積物最下部に堆積層する地層で主に泥質砂からなる。本層下位の基盤堆積物に由来する亜角をなすブロック状の偽礫が混じる。植物遺体は少ない。

以上の１層～４層は変形しており、後述するように２回の地震動に起因する。上位の変形構造は１層より上位、下位の変形構造は基盤堆積物の５層最上部～２層にかけて認められる。いずれも含水塑性変形であり、流線に沿って下位堆積物が引きずりあげられている。

これらの池充填堆積物のうち、４層～２層下部は池機能時から廃絶までの間の時期に形成された堆積物で、層相変化から上位に向かい水深が低下し、３層形成期には池沼から湿地へと変化していることが推定される。これら４層～２層下部の形成年代は出土遺物から、９世紀後半から10世紀頃と推定される。したがって、本層中の植物遺体は池機能期～放置期に生育していた植物に由来することになる。２層上部は池廃絶後に形成された人為的な堆積物と判断され、その上位を10世紀の遺物を含む砂質泥が累重する。このことは、調査地点の基準面が10世紀以降に上昇し、氾濫の影響を受けるようになったことを示唆する。

一方、池370や池250の基盤堆積物（５層と総称する）は、5a層～5o層に区分される。5a層は池東側肩部で確認される土壌生成が進行した黒色腐植質泥（いわゆる黒泥）、5b層がその母材となった腐植質泥からなる。5c層は植物遺体混じりの有機質砂質泥からなる。これら5a層～5c層は沖積リッジ間の凹地部分に堆積しているが、池の分布範囲などでは削剥されている。また、これに対応するリッジ部分での土壌層も確認されず、平安時代後半の遺構構築に伴い、地業が行われ、平坦面化していることがうかがえる。5d・5e層は逆級化する砂礫からなる、氾濫堆積物と判断される。その直下の5f層は有機質砂質泥からなり、最下部に5j層形成期に伴う木材遺体が認めれる。この木材遺体はコナラ亜属コナラ節に同定された。5g層～5k層までの堆積物は、流路充填堆積物、氾濫堆積物からなる。現地断面では部分的にしか確認されていないが、上方粗粒化の傾向にあり、氾濫原の発達期に形成された堆積物と判断される。形成年代は、後述する放射性炭素年代測定を踏まえると、縄文時代前期に形成されたことが推定される。5m層以深の堆積物は深堀トレンチ断面で観察された堆積物のため詳細は不明であるが、側方への層相変化が著しい、葉理をなす砂質泥から泥質砂、砂礫、などからなることから、扇状地性の氾濫原堆積物と推定される。その直下

にはバブル型火山ガラスからなる姶良Tn火山灰が確認される。

2　放射性炭素年代測定による基盤堆積物の形成年代

放射性炭素年代測定は、基盤堆積物の形成年代を把握することを目的として、１区の５地点の４層、３区の９世紀～10世紀の客土直下より出土した、沖積リッジをなす砂礫層中の木材（コナラ亜属コナラ節に同定)、14地点の5f層の植物遺体層について実施した。分析方法はAMS法で実施する。

（１）分析方法

試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（AAA処理)。

試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC　Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（yBP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stu、iver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

（２）分析結果

各地点・資料の放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表１・図４に示す。１区の９世紀初頭の池117の基盤をなす４層中の植物遺体は、2550±30yBP（cal BC 800-747:2σ確率１位）の年代値を示した。一方、３区の９世紀後半の池250の基盤をなす５層上面から出土した木材遺体の年代値は5880±30yBP（cal BC 4802-4694)、14地点の砂礫層直下の腐植質泥層中の木材は7410±30yBP（cal BC 6376-6225）を示した。

京都盆地における既存の年代測定結果をみると、長岡京跡左京第530次調査区の縄文時代後期後半の宮滝式期土器出土層準の炭化材片が3,110±30yBP（cal BP 1448-1297)、小泉川の氾濫原に位置する伊賀寺遺跡（京都府長岡京市所在）の縄文時代後期後半の元住吉山式～宮滝式の火葬墓中の炭化物で、3260±40yBP（calBC1622-1450)、3280±40yBP（cal BC 1641-1454年）の年代値が得られている（(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター,2009)。また、盆地北部の白河扇状地に位

表１　放射性炭素年代測定および暦年較正年代結果

試料名	種類	処理方法	測定年代 yBP	δ13C (‰)	補正年代 yBP	暦年較正結果				code no.
						誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
14C-1 5地点	植物遺体	AaA	2610±30	-28.63±0.54	2550±30 (2552±26)	σ	cal BC 796 - cal BC 756	cal BP 2,745 - 2,705	0.777	IAAA-113382
							cal BC 684 - cal BC 669	cal BP 2,633 - 2,618	0.208	
							cal BC 606 - cal BC 604	cal BP 2,555 - 2,553	0.014	
						2σ	cal BC 800 - cal BC 747	cal BP 2,749 - 2,696	0.595	
							cal BC 688 - cal BC 665	cal BP 2,637 - 2,614	0.177	
							cal BC 644 - cal BC 588	cal BP 2,593 - 2,537	0.176	
							cal BC 582 - cal BC 555	cal BP 2,531 - 2,504	0.051	
14C-2 9～10世紀整地層直下	木材	AAA	5910±30	-26.85±0.53	5880±30 (5881±28)	σ	cal BC 4,780 - cal BC 4,722	cal BP 6,729 - 6,671	1.000	IAAA-113383
						2σ	cal BC 4,827 - cal BC 4,815	cal BP 6,776 - 6,764	0.026	
							cal BC 4,802 - cal BC 4,694	cal BP 6,751 - 6,643	0.974	
14C-3 14地点	植物遺体	AaA	7460±30	-28.35±0.40	7410±30 (7405±32)	σ	cal BC 6,354 - cal BC 6,307	cal BP 8,303 - 8,256	0.534	IAAA-113384
							cal BC 6,303 - cal BC 6,294	cal BP 8,252 - 8,243	0.086	
							cal BC 6,266 - cal BC 6,232	cal BP 8,215 - 8,181	0.380	
						2σ	cal BC 6,376 - cal BC 6,225	cal BP 8,325 - 8,174	1.000	

1)前処理方法：AAA：酸処理－アルカリ処理－酸処理（アルカリ濃度が1N未満の場合はAaAと表記）。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値
4)暦年較正計算は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
5)暦年較正計算には、補正年代に0で示した、一桁目を丸める前の値を使用。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいよう に、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
6)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したもの。

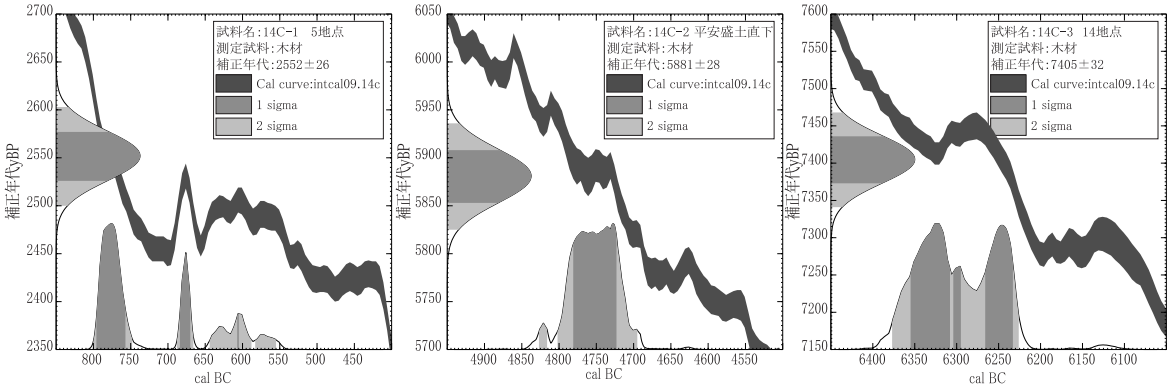


図４　暦年較正結果

置する北白河追分遺跡では、縄文時代晩期の滋賀里Ⅲb式の土器付着物で2760±40yBP（calBC 1000-825年）、滋賀里Ⅲb～Ⅳ式で2640±50yBP（calBC 915-755年）、滋賀里式（船橋式）で2480±50yBP（calBC 770-480年）と2410±50yBP（calBC 595-395年）の年代値が得られている（西本編,2006・2007）。一方、盆地周辺の地域では、湖東地域において、滋賀里Ⅱ式が2905±25yBP（calBC 1135-1010年）から2990±25yBP（calBC 1315-1125年）に集中し、滋賀里Ⅲa式が2985±25yBP（calBC 1310-1125年）・3085±25yBP（calBC 1420-1295年）、滋賀里Ⅲb式が2710±25yBP（calBC 905-810年）から2860±25yBP（calBC 1120-970年）に集中、滋賀里Ⅳ式の土器付着物が2650±25yBP（calBC 840-790年）、長原式の土器付着物が2580±40yBP（calBC 820-740年）から2360±40yBP（calBC 545-375年）に集中する年代値が得られている（西本編,2006・2007）。以上の縄文時代後・晩期の年代値を踏まえると、池117の基盤堆積物の年代値は縄文時代晩期末から弥生時代前期前半頃に形成されたと推定される。

一方、３区南西部の平安時代盛土直下の沖積リッジの形成年代は縄文時代前期頃、5f層の有機

質泥層が縄文時代早期頃と推定される。このことから、調査区内において氾濫原が発達する時期はおおよそ縄文時代前期頃と推定される。当該期における、土砂流出の増大傾向は、向日丘陵周辺や大阪平野周辺でも確認されており、広域的な環境変化を反映している可能性がある。

３　調査地で認められた古地震跡

今回の調査区の堆積物は、上記したように平安時代の遺構の基盤をなす堆積物および平安時代の遺構充填堆積物などが著しく変形している。観察された変形構造は、Matsuda(2000)により定義されている地震動による変形構造に類似する。ここでは、池117・池250充填堆積物のＸ線写真による変形構造の観察と、現地での堆積物の層相観察に基づいて、調査区の地震層序について検討する。

（１）Ｘ線写真撮影方法

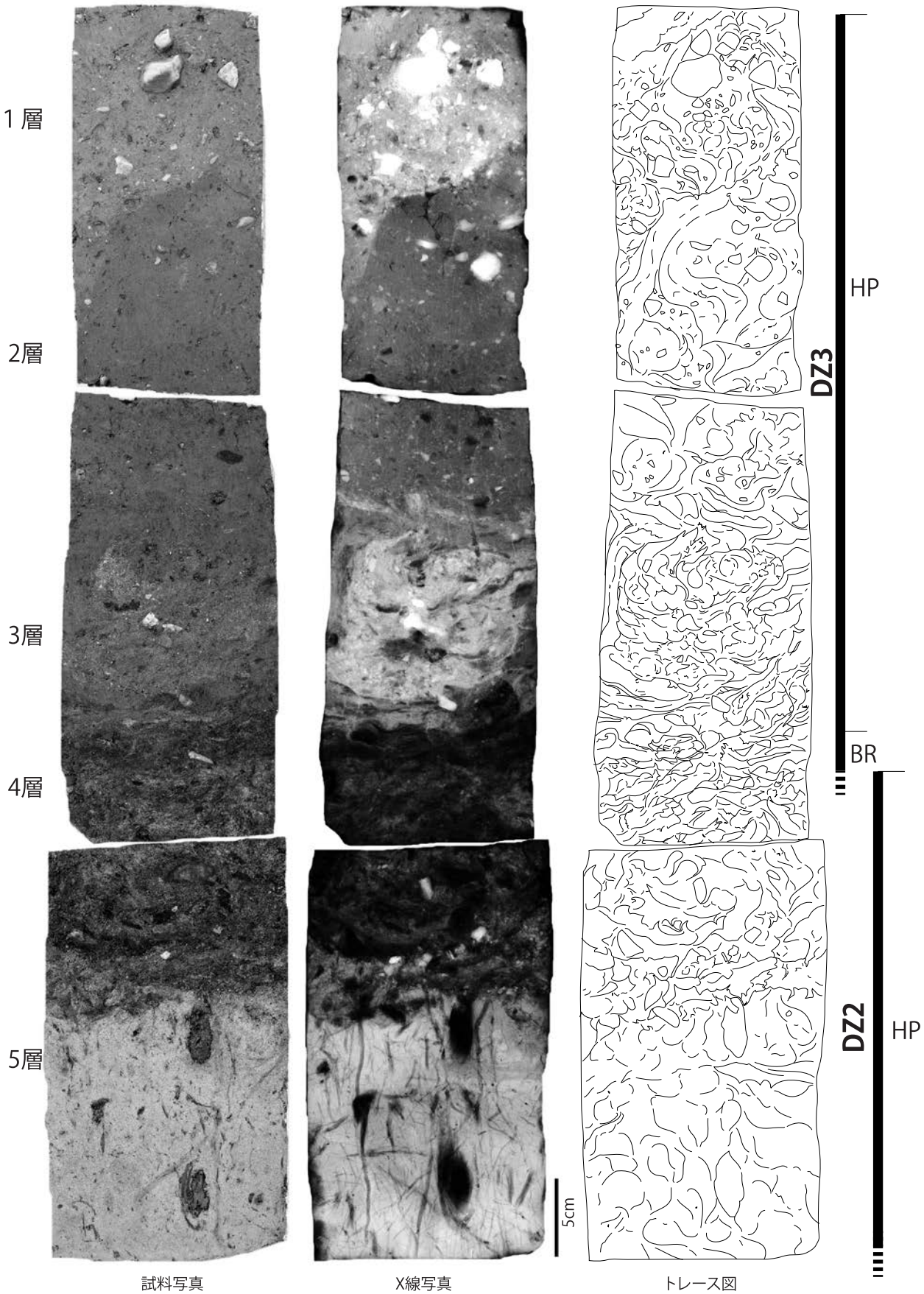
５地点・12地点の不攪乱柱状試料について、厚さ１㎝まで板状に成形し、湿潤状態のまま、管電圧50kvp、電流３mA、照射時間270秒のＸ線強度条件においてＸ線写真撮影を実施した。撮影は元興寺文化財研究所の協力を得た。

（２）観察結果

今回の調査区で確認された変形構造およびそのトレース図を図５～７に示す。Matsuda(2000)・松田(1999)によると、１回の地震動によって変形した堆積物の垂直範囲を変形ゾーンと呼び、水底に堆積した泥質堆積物（上部ほど水分を多く含むとともに、圧密を受けていないため流動性に富む。より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質をもつ）に認められる１つの変形ゾーンは、上から順に(1)水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット（liquidized deformation unit)、(2)上部で、変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焔状（ただしフレーム構造とは別種）の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下部に下向きに凸な形に変形した葉理から構成されるロード構造をなす含水塑性変形ユニット（hydroplastic deformation unit)、(3)下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット（brittle deformation unit)、から構成されるとされる。また、地震イベントの年代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まる(Matsuda,2000)。

この地震動による変形構造の特徴に基づき、調査区で確認された変形構造は４つの変形ゾーンに区分される。下位よりＤＺ-１～４と呼ぶ。

ＤＺ-１・２：３区の池250東側肩部の基盤堆積物で確認された変形構造（図７ａ・ｃ）。平安時代前期の整地層下の基盤堆積物のうち、5a層～5f層にかけて変形構造が確認される。5a～5c層の変形構造は上記のMatsuda(2000)による含水塑性変形ユニットに対比される。これに対して、その下位の5d層～5f層の変形構造は水平方向の剪断応力によって、地層が剪断され土塊として側方移動する変形を伴っている。これら5a層～5f層の変形構造は、一連の地震動によっても形成される可能性があるが、応力の規模の違いや堆積物の形成年代を踏まえると、ここでは別の地震動に起



HPは含水塑性変形ユニット、BRは脆性破壊変形ユニットを示す。

図５　５地点の試料・Ｘ線写真および変形構造のトレース図

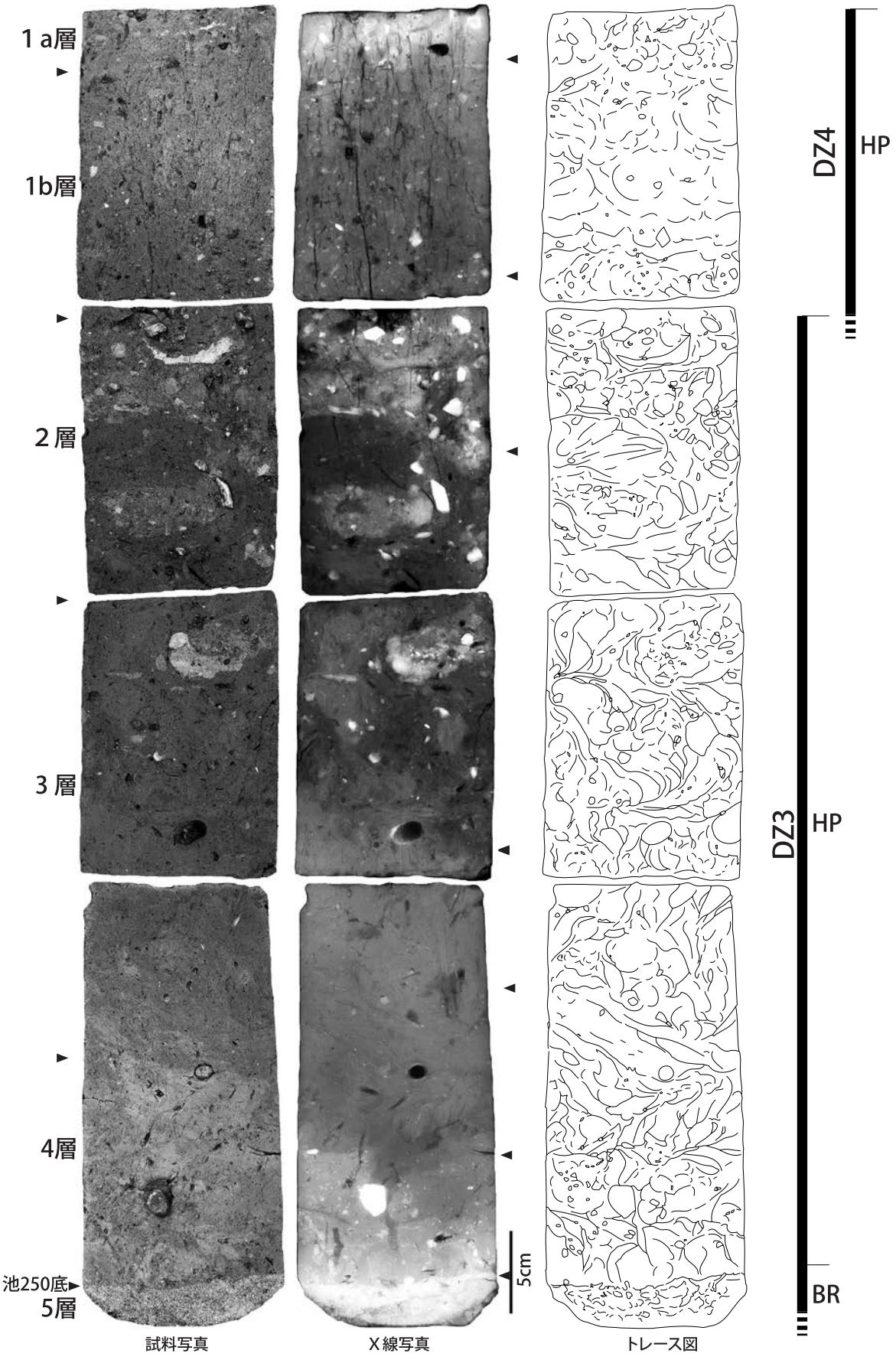
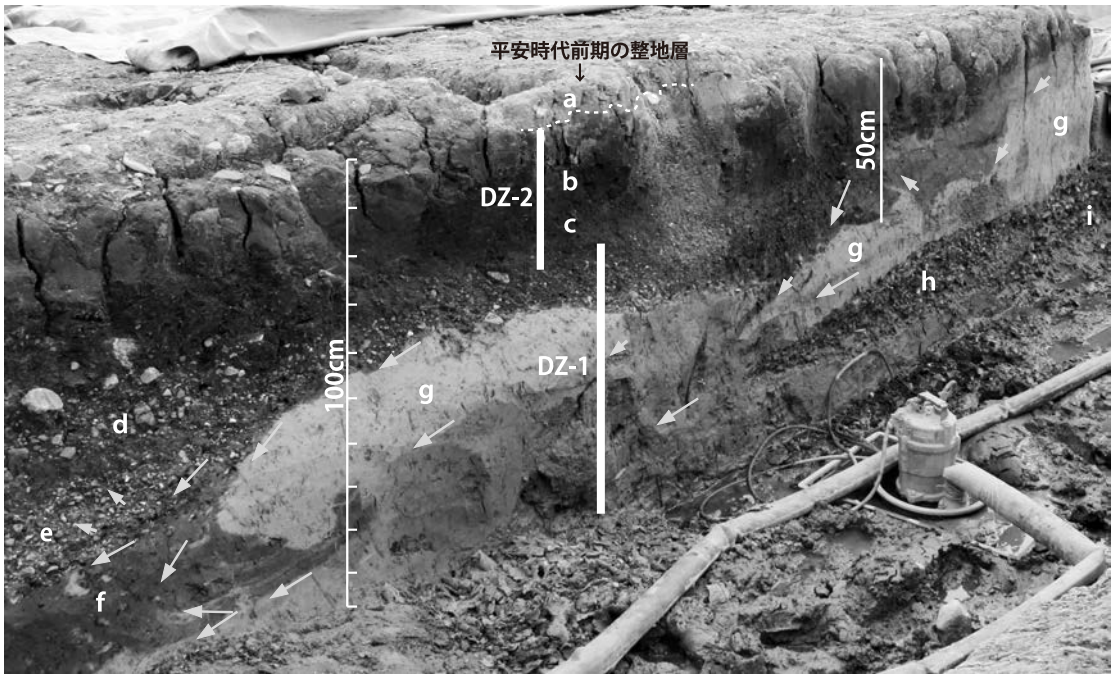
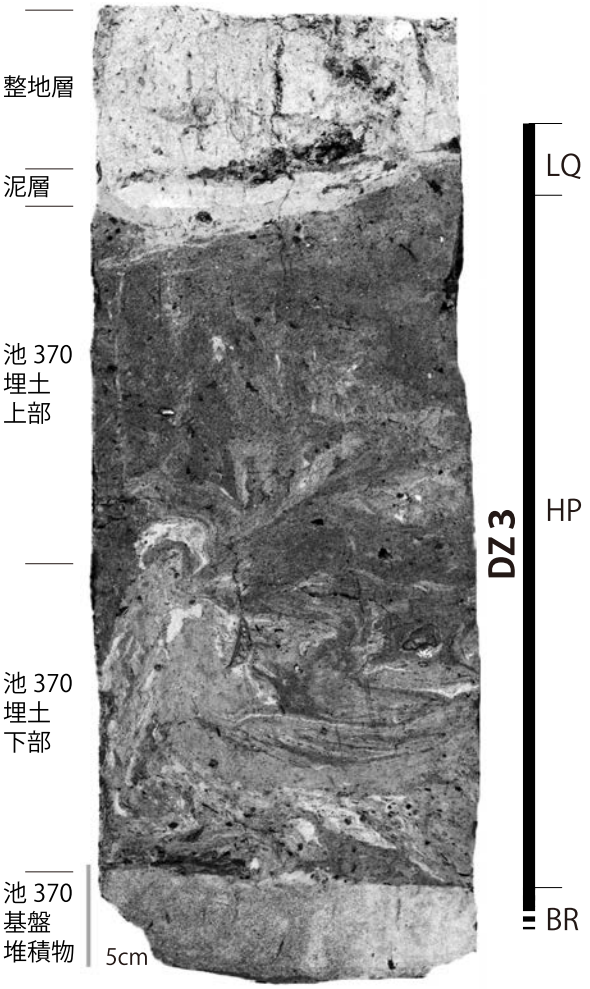


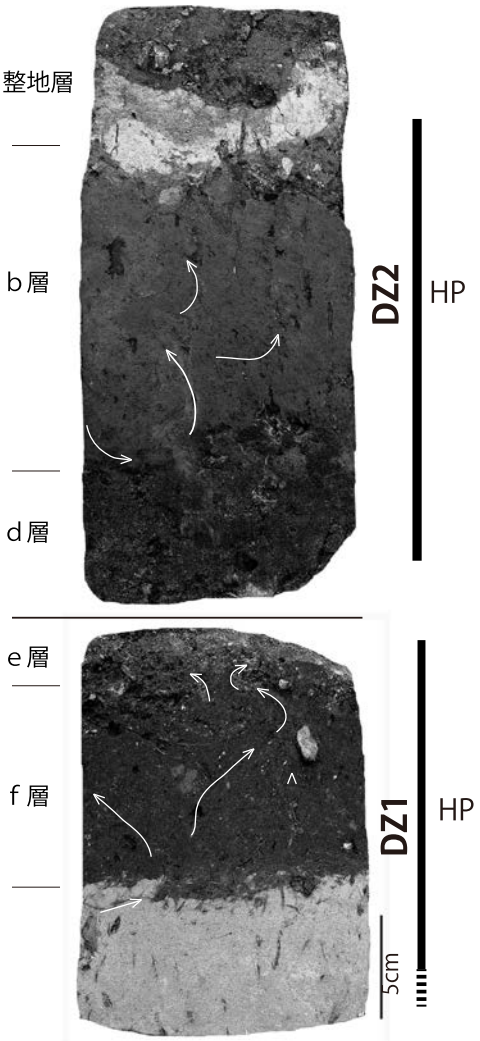
図６　12地点の試料・X線写真および変形構造のトレース図



a）池 250 東側の基盤堆積物の変形状況



b）池 370 充填堆積物の変形状況



c）14 地点（基盤堆積物）の変形状況
層名は上図 a）の層名に対応

図 7　基盤堆積物および池370充填堆積物の変形構造

因するものと考える。下位の剪断による土塊移動を伴う変形構造をＤＺ－１、上位の含水塑性変形ユニットをＤＺ－ ２とする。

ＤＺ－１は、図７写真ａの断面写真に示すように写真左側（東方向）の剪断応力によって、剪断された土塊が側方に移動している。上位の地層の土塊が下位の地層の土塊に対して緩い角度でずり上がった部分や、上位の地層に突入する部分が確認され、東方向に同様な構造が連続する。矢印が主なすべり面に相当する。地震の発生層準は5e層の氾濫堆積物形成期で、7000年前～5000年前の間と推定される。

ＤＺ－２は、３区の平安時代整地層直下の5c～5a層で確認される変形構造である。１区の池117の遺構の基盤をなす４層～５層で確認される変形構造も、層位関係や変形構造の状況を踏まえると、ＤＺ－２に対比される可能性が高い。この点については今後の検討が必要であるが、ここでは同時期の地震動による変形構造として考える。池117の基盤堆積物である５層～４層は含水塑性変形している。５層と４層は堆積物の密度や水文含量が違うため、同じ応力を受けても変形状況が異なり、密度の低い４層で変形が著しい。５層と４層の層界では５層堆積物が４層中に火焔状に引きずりあげられている。また、４層中では５層堆積物が乱れた流線に沿って散在し、粘性流動および塑性変形したことがうかがえる（図５）。14地点の5b層～5c層で認められた変形構造は、基本的に同様な変形構造をなす（図７ｃ）。この変形ゾーンを形成した地震の発生年代は、１区の４層の形成年代から縄文時代晩期後半～９世紀前半までの間の年代と推定される。

ＤＺ－３：９世紀の遺構充填堆積物で確認される変形構造。池117、池250、池370などの充填堆積物で確認される。いずれの地点でも含水塑性変形しており、下位堆積物が流線に沿って引きずり挙げられている。池250では本変形ゾーンの上位に10世紀の整地堆積物が挟在することから、地震の発生時期は９世紀後半～10世紀頃と推定される。

ＤＺ－４：池250の１層で確認される変形構造。人為的営力により形成された堆積物で確認されている。含水塑性変形しているが、上限の堆積物が後世の削平されているため、詳細については不明である。遺物の出土状況から10世紀以降の地震動に由来するものと思われる。

平安時代から中世前半にかけて京都盆地に大きな影響を与えたとみられる大規模な記録地震（京都市防災会議, 1996）は下記のものがある。

827 年 8 月11日（天長４年７月12日、Ｍ（マグニチュード）6.8）

887 年 8 月26日（仁和３年７月30日、Ｍ８級）

938 年 5 月22日（天慶元年４月15日、Ｍ７）

976 年 7 月22日（貞元元年６月18日、M6.7以上）

1096年12月17日（永長元年11月24日、Ｍ８級）

1099年 2 月22日（康和元年１月24日、Ｍ８級）

1185年 8 月13日（文治元年７月９日、M7.4）

1317年 2 月24日（文保元年１月５日、M6.5～７）

1361年 8 月 3 日（正平16年６月24日、Ｍ８級）

今回の調査区で確認されたＤＺ－３は887年、938年、976年の記録地震に対応する可能性があり、ＤＺ－４はそれ以降の記録地震に対応する可能性がある。

４　珪藻化石からみた池の水域環境（写真１）

調査区内で確認された池117および池370・池250の水域環境に関する情報を得ることを目的として、水質判定にも利用される珪藻分析を充填堆積物を中心に実施する。

（１）分析方法

湿重約５ｇをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバー ガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラー トを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステー ジを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985～1991)、Desikachiary(1987)などを参考にした。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、ｐＨ、水の流動性の３適応性についても生態分類し結果表に示した。また、堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集層位分布図を作成した。出現率は化石総数を基数とした百分率で表した（図中の ● 印は、総数が100個体以上産出した試料うち１％以下の種を示す)。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・ｐＨ・流水の相対頻度について図示した。

（２）結果

各地点の分析結果を表２、図８に示す。以下、結果の記載を、地点毎に行う。

ａ）池117

４地点では、３層準の分析が行われ、３試料すべてにある程度の量の珪藻化石が含まれており、100個体以上が検出された。認められた珪藻殻の保存状態は、３試料いずれも半壊した殻が多いだけでなく、殻表面に溶解の痕跡が認められることから、状態としては、極不良～極々不良である。検出された分類群は、淡水生種のみであり、海水生種あるいは汽水生種は認められない。種類構成は、層準によって若干（一部の種）異なるが、基本的には近似した群集が認められた。多産し

表２　珪藻分析結果（１）

種　　類	生態性			環境指標種	1 区				3 区							
					池117				池370	池250						
					4地点			5地点	9地点	11地点			12地点			
	塩分	pH	流水		1	2	3	1	1	1	2	3	1	2	3	4
Diploneis smithii (Breb.ex W.Smith) Cleve	Euh-Meh			E2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Nitzschia scalaris (Ehr.e.p.) W.Smith	Euh-Meh				−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
Caloneis rhombica H.Kobayashi	Meh			E1,E2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Anomoeoneis sphaerophora (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Navicula goeppertiana (Bleisch) H.L.Smith	Ogh-Meh	al-il	ind	S	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
Achnanthes hungarica (Grunow) Gruunw	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	2	−
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Actinella brasiliensis Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O	−	−	−	−	−	39	43	23	−	19	23	−
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Amphora ovalis var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	4	1	−	−	2	−	2	6	−	7	−	4
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	−	23	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	M,U	3	3	−	−	−	−	5	2	−	−	−	−
Aulacoseira spp.	Ogh-unk	unk	l-ph	U	−	2	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O	1	−	−	−	1	1	4	4	−	2	−	2
Caloneis silicula var. *intermedia* Mayer	Ogh-ind	al-il	ind	O	−	−	−	−	−	1	1	6	−	1	−	3
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	−	−	−	2	−	1	−	−	−	−	1
Craticula cuspidata (Kutz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	19	23	21	−	19	14	−	13	−	7	18	−
Cymbella heteropleura (Eheenbrg) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		2	−	2	−	−	−	−	−	−	2	−	−
Cymbella heteropleura var. *minor* Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	−	1	−	−	−	−	−	−	11	−	−
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−
Cymbella perpusilla A.Cleve -Euler	Ogh-hob	ac-il	l-ph		−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	−	12	13	−	−	−	−	4	−	−	−	−
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) Ven Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	−	−	−	−	−	3	16	−	−	5	6	−
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		23	−	9	−	6	14	5	5	3	3	1	−
Diploneis finnica (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind	O	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Encyonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	−	1	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenhorst) D.G. Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	3	−	−	−	1	13	6	−	14	4	−
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	−	−	1	−	−	−	1	1	−	−	3	−
Eunotia exigua (Breb.) Rabennorst	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Eunotia fallax A.Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	1	1	3	−	−	−	2	−	−	−	4	−
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	−	−	−	−	−	2	3	−	−	−	−	−
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Eunotia lunaris (Ehr.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	1	1	−	2	−	3	−	−	2	4	−
Eunotia pectinalis (Dillwyn) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	−	19	2	−	1	8	5	3	−	−	3	1
Eunotia pectinalis var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	33	9	−	−	17	17	18	−	−	1	8
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Eunotia serra Ehrenberg	Ogh-hob	ac-bi	l-bi	P	−	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	2
Eunotia tropica Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		9	9	14	28	17	16	10	9	−	7	7	3
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	7	−	−	5	4	3	−	−	5	14	−
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Frustulia rhomboides (Ehr.) De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	2	−
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	−	−	3	−	3	3	11	5	−	8	13	3
Gomphonema affine Kutzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	−	−	−	−	1	3	2	−	−	4	−
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	U	−	1	−	−	−	19	8	3	−	2	3	−
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	−	2	1	−	−	−	1	8	−	−	2	3
Gomphonema parvulum (Kuetzing) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	−	−	−	−	−	4	4	16	−	3	26	23
Gomphonema quadripunctatum (Oestrup.) Wislouch	Ogh-ind	al-bi	r-ph	K,T	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	−	−	−	−	−	2	1	4	−	2	2	−
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	−	−	−	−	−	9	9	−	−	−	3	−
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	−	1	−	−	6	−	2	−	1	3	−
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	−	−	−	18	−	4	−	−	3	1	9
Hantzschia amphioxys var. *capitata* O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Hantzschia amphioxys var. *vivax* (Hantz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
Meridion circulare var. *constrictum* (Ralfs) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−
Navicula elginensis var. *cuneata* H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Navicula muticoides Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	1	1
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	−	1	1	−	−	−	3	4	−	4	−	−
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
Nitzschia angustata (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,P	−	−	1	−	−	3	8	1	−	2	5	−
Pinnularia braunii (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	S	−	1	−	−	−	1	1	−	−	2	−	−
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Pinnularia brevicostata var. *sumatrana* Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O	−	1	5	−	5	−	−	−	−	−	−	−
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	2	−
Pinnularia divergens var. *elliptica* (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind	O	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	−	4	3	−	−	1	8	−	−	8	3	4
Pinnularia gibba var. *dissimilis* H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	1	−	−	−	−	1	−	−	1	1	−
Pinnularia gibba var. *linearis* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	2	1	−	1	−	3	−	−	10	4	5
Pinnularia gibba var. *mesogongyla* (Ehr.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
Pinnularia gracillima Gregory	Ogh-hob	ind	ind		−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−

表２　珪藻分析結果（２）

種　　類	生態性			環境指標種	1 区				3 区							
					池117				池370	池250						
					4地点			5地点	9地点	11地点			12地点			
	塩分	pH	流水		1	2	3	1	1	1	2	3	1	2	3	4
Pinnularia karelica Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph		－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
Pinnularia lagerstedtii (Cleve) Cleve-Euler	Ogh-ind	ind	ind	RI	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Pinnularia legumen Ehrenberg	Ogh-hob	ind	ind		－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
Pinnularia macilenta (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	－	－	－	－	－	1	1	－	4	1	9
Pinnularia nobilis Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Pinnularia rivularis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	2	－	－	1	－	1	－	－	1	1	1
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	O,RI	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,P	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	2
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	－	－	－	－	2	1	3	－	－	－	－	2
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	O	3	6	2	－	12	－	1	5	－	8	2	5
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	3
Pinnularia sudetica (Hilse) M.Peragallo	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O,P	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1
Pinnularia viridiformis Krammer	Ogh-ind	ind	ind		5	11	7	－	2	－	4	3	－	5	2	3
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	－	2	1	－	1	－	1	1	－	4	－	－
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		21	7	21	－	28	10	14	9	8	17	7	11
Sellaphora americana (Ehr.) Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
Sellaphora bacillum (Ehr.) Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
Sellaphora pupula (Kutz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S,U	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	－	－	－	－	1	1	－	－	1	－	－
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	－	－	－	－	－	1	－	2	－	－	3	－
Stauroneis anceps fo. *gracilis* (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	unk	T	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		－	－	－	－	－	3	9	－	－	3	8	6
Stauroneis nobilis fo. *alabamae* (Heiden) A.Cl.-Eu.	Ogh-hob	ac-il	ind		－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	4	1	－	14	8	6	10	－	16	7	9
Stauroneis phoenicenteron fo. *gracilis* (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	－	－	－	－	－	1	5	4	－	－	1	3
Stauroneis phoenicenteron var. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	－	－	－	－	－	－	3	2	－	－	1	－
Stauroneis phoenicenteron var. *signata* Meister	Ogh-ind	ind	ind	O	5	－	－	－	9	－	3	－	－	4	－	3
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	2	3	－	6	11	3	11	－	1	－	5
Surirella robusta Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-bi		－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	1	－
Surirella spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	3
Tabellaria fenestrata (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O,T	1	1	－	－	－	2	1	－	－	－	－	－
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	－	3	－	－	－	1	3	－	－	－	－	－
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
淡水生種					113	194	132	28	161	210	274	212	11	211	208	148
珪藻化石総数					113	194	132	28	161	210	275	214	11	212	208	152

凡例

塩分・pH・流水に対する適応性

H.R.:塩分濃度に対する適応性	pH:水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性	C.R.:流水に対する適応性
Euh　:海水生種	al-bi:真ｱﾙｶﾘ性種	l-bi:真止水性種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種	al-il:好ｱﾙｶﾘ性種	l-ph:好止水性種
Meh　:汽水生種	ind　:pH不定性種	ind　:流水不定性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種	ac-il:好酸性種	r-ph:好流水性種
Ogh-ind:貧塩不定性種	ac-bi:真酸性種	r-bi:真流水性種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種	unk　:pH不明種	unk　:流水不明種
Ogh-unk:貧塩不明種		

環境指標種

A:外洋指標種　B:内湾指標種　C1:海水藻場指標種　C2:汽水藻場指標種
D1:海水砂質干潟指標種　D2:汽水砂質干潟指標種
E1:海水泥質干潟指標種　E2:汽水泥質干潟指標種　F:淡水底生種群(以上は小杉,1988)
G:淡水浮遊生種群　H:河口浮遊性種群　J:上流性河川指標種　K:中～下流性河川指標種
L:最下流性河川指標種群　M:湖沼浮遊性種　N:湖沼沼沢湿地指標種　O:沼沢湿地付着生種
P:高層湿原指標種群　Q:陸域指標種群(以上は安藤,1990)
S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種(以上はAsai & Watanabe,1995)
RI:陸生珪藻(RA:A群,RB:B群、伊藤・堀内,1991)

た種は、淡水生種で流水不定性種のCymbella aspera、Eunotia pectinalis、Eunotia pectinalis var.minor、Pinnularia viridis、止水性種のAulacoseira ambigua、Cymbella subaequalis、等である。

５地点では、池117の基盤堆積物である４層の分析が行われ、少ないながら珪藻化石が検出された。化石の保存状態は、認められたほとんどの殻が半壊しているだけでなく、溶解の痕跡が認められることから、状態は極々不良である。検出された分類群は、淡水生種のみであり、海水生種あるいは汽水生種は認められない。多産した種は、Eunotia spp.であり、他の属は認められない。極めて貧弱な群集である。

ｂ）池370

池370充填堆積物上部の有機質泥層からは、ある程度の量の珪藻化石が含まれており、100個体

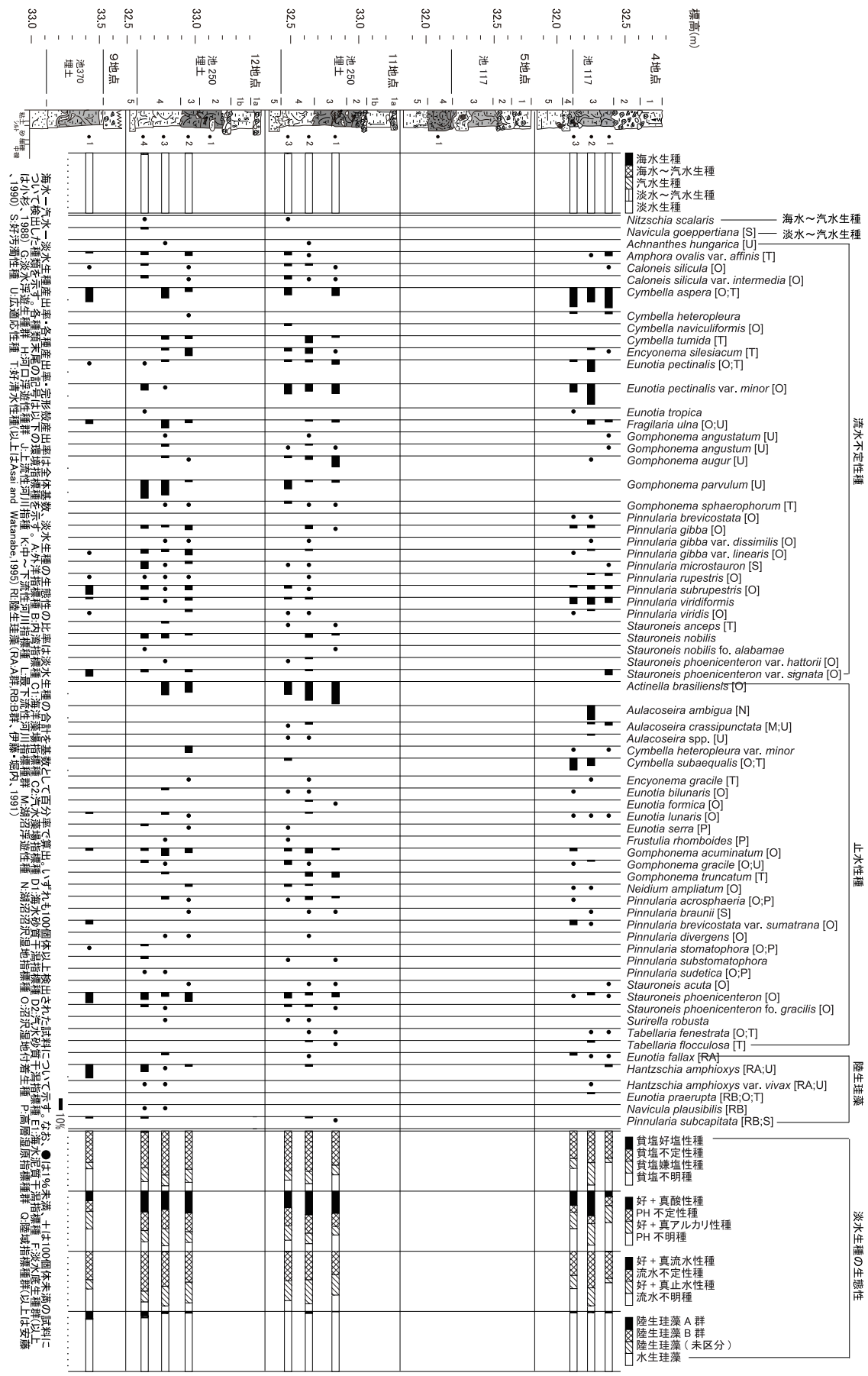


図８　各地点の主要珪藻化石群集の層位分布

以上が検出された。化石殻の保存状態は、半壊した殻が多いだけでなく、殻表面に溶解の痕跡が認められることから、状態としては極々不良である。検出された分類群は、淡水生種のみである。多産した種は、淡水生種で流水不定性種のCymbella aspera、Pinnularia subrupestris、Stauroneis phoenicenteron var. signata、止水性種のStauroneis phoenicenteron、陸生珪藻のStauroneis phoenicenteron等である。

ｃ）池250

11地点は、３層準の分析が行われ、すべての試料に比較的多くの珪藻化石が含まれており、いずれからも200個体以上が検出された。検出された分類群は、淡水生種のみといってもよい組成であるが、試料２から１個体のみ淡水～汽水生種が認められた。種類構成は、層準によって若干（一部の種）異なるが、基本的には近似した群集が認められた。多産した種は、淡水生種で流水不定性種のCymbella aspera、Eunotia pectinalis、Eunotia pectinalis var.minor、Gomphonema augur、Pinnularia viridis、止水性種のActinella brasiliensis、Gomphonema acuminatum、Gomphonema truncatum、Stauroneis phoenicenteron、陸生珪藻のHantzschia amphioxys等である。

12地点は４層準の分析が行われ、産出率は異なるものの、すべての層準から珪藻化石が検出された。化石の保存状態は、層準によって異なり、試料２および４は、半壊した殻が多いだけでなく、溶解の痕跡が認められるため、状態としては極不良である。試料３は、半壊した殻は認められるものの、溶解の痕跡が認められる殻が少ないため、状態は不良である。試料１はほとんど半壊しているだけでなく、著しく溶解しているため、状態は極々不良である。検出された分類群は、いずれの層準もほとんど淡水生種のみといってもよい組成であるが、試料２に１個体の汽水生種、試料４に海水～汽水生種および淡水～汽水生種がそれぞれ1個体を含んでいる。100個体以上が検出された試料２～４における多産または優占した種は、淡水生種で流水不定性種のCymbella aspera、Encyonema silesiacum、Eunotia pectinalis var.minor、Gomphonema parvulum、Pinnularia gibba var.linearis、止水性種のActinella brasiliensis、Gomphonema acuminatum、Stauroneis phoenicenteron等である。

（３）珪藻化石群集からみた水域環境

ａ）池117

充填堆積物の珪藻石群集は、層準によって若干（一部の種）異なるが、基本的には近似した淡水生の群集が認められた。多産した種の生態性あるいは生育環境は、まず、淡水生種で流水不定性種のCymbella asperaは、一般に貧塩不定、好アルカリ性種、流水不定の広域頒布種であるが沼沢湿地あるいは湿地に普遍的かつ優占的に認められる。Eunotia pectinalisおよびEunotia pectinalis var.minor は、普通の水域にも認められるが湿地に多産する種とされる（埼玉県教育委員会、1962）。Gomphonema parvulumは、流水に対して不定なだけでなく、塩分濃度やｐＨに対しても不定であり、極めて高い適応能力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai and Watanabe(1995)は、広域適応種としている。Pinnularia viridis は、比較的、広

範囲に分布するが、好湿地性種とも呼ばれ泥炭性の湿源・沼に普通に認められる種（Hustedt、1959；加藤他、1978など）とされるほか、Pinnularia 属の他の種に比べて鉱物成分の多い水域に認められるとされる（Patrick and Reimer,1966)。止水性種のAulacoseira ambigua は、浮遊性で富栄養の池・湖の沿岸等に多いとされる（Hustedt,1930)。また、安藤(1990)によると、湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着性種としても優勢な出現がみられるが、これらの地域以外のところでみられることは希であることから、湖沼、沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きいため、湖沼沼沢湿地指標種群とされている。なお、本種は好アルカリとされてはいるが、現生の調査の結果、弱酸性水域に特徴的に認められることが少なくない。そのため、基本的に広域適応種であるものの、好酸性の種である可能性がある。Cymbella subaequalisは、安藤(1990)によれば沼沢湿地付着生種群の中の一種とされている。一般的には、湿地に普遍的に認められる種である。また、Asai and Watanebe(1995)によると好清水性種とされる。

以上のように、検出された群集は、沼沢～湿地に生育する種類で構成されることから、堆積時の環境は、概ね沼沢湿地の環境下にあったものと推定される。ただし、珪藻殻の保存が不良であることから、地下水位が低下するなどして、部分的あるいは時期によっては、乾湿を繰り返した可能性が示唆される。このような状況下で樹林が形成されていたことが推定される。

なお、池117基盤堆積物の４層（５地点）は、珪藻化石の産出率が特に低いために、無理に堆積環境を推定するのは危険と考えられるが、若干の考察を行うと以下のように考えられる。まず、本試料のように、産出率が低いことについての考えられる原因としては、①堆積時に珪藻自体が少なかったまたは堆積速度が速いために取り込まれる量が少なかった、②堆積後に大半の殻が分解消失した等である。本試料の場合、層相と検出された化石の保存状態からみて、②の堆積後に分解消失した可能性が高いと考えられる。堆積後の珪藻殻の分解消失については、堆積後の続成作用による物理・化学的な影響によるが、経験的に陸成層の場合、堆積場が水域ではない場所では、堆積時から堆積後にかけて、大気に曝されているとバクテリア等の影響により、分解が促進されることが知られている。一方、本試料から低率に検出された種群は、すべてが同属で湿地性の種である。群集は単調であり、それらの産状（産出率が低いこと）を考慮すると、堆積時は基本的には広範な水域であったとは考えにくく、低地部等にみられる好気的な環境下にあった可能性が示唆される。

ｂ）池370

充填堆積物上部の有機質泥の珪藻化石群集は、池117の充填堆積物の群集に近似した群集が認められた。多産種で前述していない種について述べると、流水不定性種のPinnularia subrupestrisは、貧塩―嫌塩性種、好酸性、流水不定性であり、比較的広範に生育するが、湿原、湿地あるいは沼沢地などに生育していることの多い種である。流水不定性種としたStauroneis phoenicenteron var. signataは、塩分、ｐHおよび流水のいずれに対しても不定であるが、承名変種のStauroneis phoenicenteronに伴って生育していることが多いため、概ね湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種と考えられる。止水性種としたStauroneis phoenicenteron は、

比較的、広範に止水域に認められる種であるが、Cholnoky(1968)は最適ｐＨを6.8に持つ種類であるとしている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。よって、本層準形成期の池内は、沼沢地～湿地様の堆積環境下にあったものと推定される。形成年代は出土遺物から９世紀前半と推定される。

c）池250

池250の充填堆積物は、上記した層相から、４層～２層下部が機能期～放置期、２層上部～１層が人為的営力による埋め戻しの時期に形成されたことが推定される。

11地点の珪藻化石群集は、層準によって若干異なるものの、基本的には近似した群集が認められた。多産種の生態性で前述していない種について述べると、流水不定性種のGomphonema augurは、塩分・ｐH・流水に対しては不定であり、比較的、適応能力が高いことから、広範に認められるが、通常は沼沢湿地に多産する傾向にある種である。Pinnularia viridisは、好湿地性種とも呼ばれ泥炭性の湿源・沼に特徴的に認められるほか、比較的広範に生育し、他の種群に比較して殻が大きく、生産力の高い種である。止水性種としたActinella brasiliensisは、塩分不定、好酸性、好止水性とされ、生育場所としては、湿地あるいは湿原に生育する種である。止水性種のGomphonema acuminatumは、貧塩不定、ｐｈ不定の止水性種であり、安藤(1990)によれば水深が１ｍ内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地に認められることか多いことから、沼沢湿地付着性種とされている。Gomphonema truncatumは、比較的、水の綺麗な池沼等の岸付近に生育することが多く、Asai and Watanabe(1995)は本種を好清水性種としている。陸生珪藻のHantzschia amphioxysは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1986）である。特に、本種は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内、1989；1991）。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70～80％以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。以上のような種群が特徴的に認められたことから、本地点は概ね安定した湿地の環境下にあったものと推定される。なお、安定した池沼～湿地ではあったものの、部分的には水位が下がって、好気的な場所も存在した可能性が示唆される。

12地点の試料２～４は、前述の11地点に近似した群集が認められた。試料１は、珪藻化石の産出率が低いために、少ない種群から堆積環境を推定するのは危険と考えられるが、若干の考察を行うと以下のように考えられる。本試料から検出された種群は、すべてが湿地性の種と思われる。群集は単調であり、認められた個体の保存状態が極度に悪いことからすると、堆積時は好気的な環境下にあった可能性が示唆される。そのため、本地点でも試料２～４の堆積時は、概ね安定した湿地の環境下にあったものと推定される。

各地点の結果を総合して考えると池の環境は比較的浅く、しばしば乾燥する場所も存在していたと考えられる。後述する植物化石分析の結果、本層準では水深数十センチ以内に生育する抽水植物や浮葉植物が多い傾向にあるが、珪藻化石で推定される水域環境と同調的である。

５　植物化石による古植生復元（写真２～５）

１区および３区の９世紀の池を充填する機能期から放置期の堆積物について、花粉・植物珪酸体・大型植物化石分析を実施し、当時の池内やその周辺の植生に関する情報を得る。各分析層準については図２・３に示す。

５－１　分析方法

（１）花粉分析

試料湿重約10ｇについて、フッ化水素酸処理、水酸化カリウム処理、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）分離、フッ化水素酸処理、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理を行い、花粉・胞子化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman(1952,1957)、Faegri and Iversen(1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（２）植物珪酸体分析

各試料について、乾燥重量を秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを一定量を秤取り、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）と、その層位分布図として示す。この際、100個/ｇ未満は「<100」で表示する。各分類群の含量密度は10の位で丸める（100単位にする）。

（３）大型植物化石分析

試料200ccを水に浸し、粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体をピンセットで拾い出す。なお、４地点の試料３、５地点の試料１、11地点の試料１は、堆積物中に含まれる大型植物遺体の個数が多いため、分析量を50ccとしている。

大型植物化石の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)などを参考に実施し、個数を

数えて結果を一覧表で示す。樹皮、木材、炭化材、植物のトゲ、蘚苔類、昆虫類、土器片などは、代表的なものを抽出して一覧表の下部に産状を示す。このうち炭化材、木材片は可能な限り木材組織を観察し種類同定を実施した。分析後は、大型植物化石を約70%のエタノール溶液を入れた容器中で保存する。

また、木材については、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、自然乾燥させた後、実体顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

５－２　結果

（１）花粉分析

結果を表３、図９に示す。５地点の試料１以外から花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。以下、地点ごとに述べる。

ａ）池117

池117充填堆積物（４地点）の試料１～３の組成をみると、木本花粉ではモミ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが多く認められ、ツガ属、イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科、ハンノキ属、シイ属等を伴う。層位的な変化についてみると上位に向かってマツ属が増加し、スギ属が減少する傾向が認められる。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンポポ亜科等を伴う。特に試料1ではイネ科の多産が顕著である。また、ミズアオイ属をはじめ、ガマ属、ミクリ属、オモダカ属、スブタ属、ホシクサ属、イボクサ属、ゴキヅル属、デンジソウ属、サンショウモ、アカウキクサ属等の水湿地生草本・シダ類も認められる。栽培の可能性があるものとしては、カキノキ属、ソバ属、ベニバナ属などが挙げられる。なお、多産するイネ科花粉中に、栽培種であるイネ属に類する形態を示すもの（以下、イネ属型とする）も確認された。

池117の基盤堆積物である４層（５地点試料１）は花粉化石がほとんど検出されず、木本花粉のスギ属、イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科、コナラ亜属、モチノキ属が、１～３個体認められるに過ぎない。

ｂ）池370

充填堆積物上部（９地点試料１）の花粉化石群集は草本花粉の割合が高い。木本花粉ではスギ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科、コナラ亜属、アカガシ亜属等を伴い、栽培の可能性があるカキノキ属等も検出される。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)、ミズアオイ属が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属等を伴う。また、オモダカ属、イボクサ属、デンジソウ属などの水湿地生植物も認められる。

表３　花粉分析結果

種　類	1 区				3 区									
	池117				池370	池250							基盤堆積物	
	4地点			5地点	9地点	11地点			12地点				14地点	
	1	2	3	1	1	1	2	3	1	2	3	4	1	2
木本花粉														
マキ属	－	2	1	－	1	－	1	－	1	1	1	1	3	－
モミ属	13	30	16	－	18	8	15	33	10	7	8	14	46	30
ツガ属	9	9	5	－	16	5	7	16	11	7	11	10	26	12
トウヒ属	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	2	1	8
マツ属単維管束亜属	1	－	－	－	－	－	2	－	－	－	1	－	－	－
マツ属複維管束亜属	46	13	3	－	16	185	149	45	60	108	136	30	7	10
マツ属(不明)	14	13	7	－	16	128	94	31	98	83	79	19	18	31
コウヤマキ属	4	－	5	－	4	1	1	1	1	3	3	5	3	1
スギ属	38	46	60	1	64	13	23	59	43	23	34	62	72	12
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	2	9	13	1	11	－	2	2	8	5	3	6	1	1
マオウ属	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ヤマモモ属	2	－	－	－	1	1	1	1	－	1	－	－	2	1
サワグルミ属	1	1	2	－	2	1	－	－	3	－	1	1	1	1
クルミ属	－	2	－	－	2	－	－	1	1	－	2	－	1	1
クマシデ属ーアサダ属	6	4	1	－	3	1	1	4	7	5	4	4	4	12
カバノキ属	6	3	3	－	5	1	1	2	3	2	1	4	3	1
ハンノキ属	2	13	17	－	2	1	1	1	1	1	1	1	9	9
ブナ属	6	4	3	－	5	3	3	2	2	6	3	3	2	7
コナラ属コナラ亜属	27	36	23	3	11	－	5	11	5	5	7	13	13	66
コナラ属アカガシ亜属	20	39	31	－	38	14	17	24	13	10	7	27	44	2
クリ属	－	1	1	－	－	－	1	－	－	1	1	－	1	－
シイ属	2	3	6	－	1	1	1	－	－	1	1	2	4	－
ニレ属ーケヤキ属	3	5	1	－	3	1	6	1	2	2	2	－	6	7
エノキ属ームクノキ属	6	1	1	－	2	1	2	1	5	2	2	1	－	7
カラスザンショウ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－
キハダ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
ミカン科	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－
アカメガシワ属	－	1	－	－	－	1	7	1	1	－	2	－	－	－
ウルシ属	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－
モチノキ属	1	1	1	1	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－
カエデ属	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
トチノキ属	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
ツタ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－
ウコギ科	1	－	2	－	－	1	－	－	1	2	－	－	－	－
ミズキ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
ツツジ科	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－
カキノキ属	1	－	－	－	1	1	1	－	1	2	2	1	－	－
イボタノキ属	1	－	－	－	2	1	－	1	1	－	－	－	－	1
トネリコ属	－	－	1	－	－	－	1	－	1	1	－	－	－	－
ガマズミ属	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
草本花粉														
ガマ属	－	－	1	－	－	1	－	1	－	－	－	－	1	－
ミクリ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
サジオモダカ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	2	1	－
オモダカ属	1	－	5	－	1	－	－	1	3	3	2	－	2	－
スブタ属	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
イネ属型	171	29	29	－	48	15	13	28	64	31	18	22	43	9
他のイネ科	490	74	81	－	95	17	38	87	82	65	32	68	93	38
カヤツリグサ科	44	41	51	－	25	3	3	27	25	15	10	29	41	13
ホシクサ属	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
イボクサ属	2	－	1	－	1	－	1	－	4	2	1	－	－	－
ミズアオイ属	14	16	27	－	133	4	8	18	20	13	6	25	1	－
ユリ科	－	－	2	－	－	1	－	－	－	－	－	1	－	4
クワ科	－	－	－	－	1	－	－	1	1	－	－	1	－	1
ギシギシ属	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1	－	－
サナエタデ節ーウナギツカミ節	6	1	－	－	2	3	2	2	2	－	1	7	1	5
タデ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ソバ属	1	－	－	－	－	－	－	1	－	1	1	－	－	－
アカザ科	2	1	2	－	6	1	－	1	3	－	1	1	－	－
ナデシコ科	8	1	－	－	1	2	1	1	1	3	3	1	－	－
コウホネ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－
ハス属	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	1	－	－	－
キンポウゲ属	4	－	－	－	1	1	1	－	1	1	1	2	－	－
キンポウゲ科	6	－	－	－	1	－	－	2	－	－	－	－	1	－
アブラナ科	13	－	1	－	3	－	－	1	2	1	－	1	－	－
ワレモコウ属	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
バラ科	－	－	－	－	－	2	1	－	－	1	2	2	－	－
マメ科	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4
フウロソウ属	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	－
カタバミ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
トウダイグサ科	－	1	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ツリフネソウ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
キカシグサ属	1	－	1	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－
ヒシ属	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－
アカバナ属ーミズユキノシタ属	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
アリノトウグサ属	2	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	1	－
セリ科	1	1	2	－	2	1	2	1	3	1	1	5	1	1
アサザ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ネナシカズラ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
オオバコ属	－	－	1	－	1	－	1	1	－	1	－	1	－	－
ヤエムグラ属ーアカネ属	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－
オミナエシ属	1	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	2
ゴキヅル属	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ヨモギ属	3	11	9	－	28	2	2	6	4	2	3	14	8	17
ベニバナ属	1	－	－	－	－	1	2	－	1	1	4	－	1	－
キク亜科	2	1	9	－	4	1	2	2	2	1	1	2	2	10
タンポポ亜科	5	7	1	－	－	1	－	5	4	3	1	3	1	1
不明花粉														
不明花粉	6	18	16	－	11	3	6	6	10	5	3	14	11	8
シダ類胞子														
デンジソウ属	1	－	－	－	1	1	－	－	1	－	1	－	－	－
ゼンマイ属	－	4	2	－	－	－	1	1	－	－	－	－	2	1
イノモトソウ属	－	－	－	－	1	－	2	－	1	－	－	－	－	－
サンショウモ	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
アカウキクサ属	8	－	－	－	－	1	3	－	1	1	2	－	－	－
他のシダ類胞子	190	90	95	2	53	22	50	80	61	36	45	55	144	125
合　計														
木本花粉	214	239	204	6	225	370	344	238	280	280	313	209	269	222
草本花粉	780	187	230	0	357	57	79	189	224	147	94	190	201	106
不明花粉	6	18	16	0	11	3	6	6	10	5	3	14	11	8
シダ類胞子	206	94	97	2	55	24	56	81	64	37	48	55	146	126
合計(不明を除く)	1200	520	531	8	637	451	479	508	568	464	455	454	616	454
その他														
回虫卵	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
鞭虫卵	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－
肝吸虫卵	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－

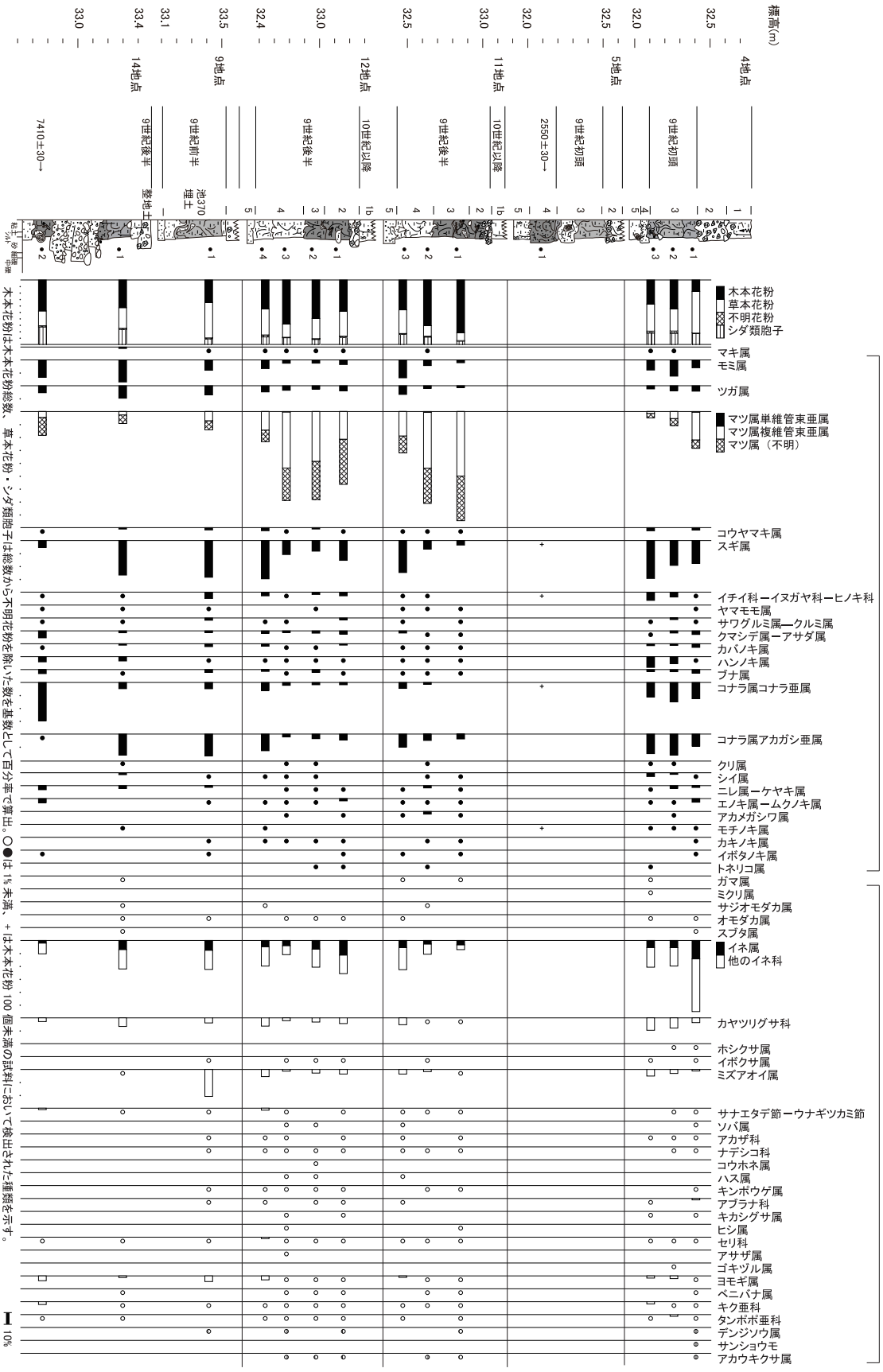


図９　各地点の主要花粉化石群集の層位分布

ｃ）池250

充填堆積物の花粉化石群集は、11地点の試料１～３は、上位に向かって木本花粉の割合が増加する。木本花粉ではマツ属が多産し、上位に向かって増加する傾向が顕著である。その他ではモミ属、ツガ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属等を伴うが、いずれも上位に向かって減少する傾向を示す。草本花粉はイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属等を伴い、水湿地生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ハス属、ヒシ属、デンジソウ属、アカウキクサ属等も認められる。なお、栽培の可能性があるものとしては、カキノキ属、イネ属型、ソバ属、ベニバナ属等が挙げられる。

12地点の木本花粉をみると、試料４でスギ属が、試料１～３でマツ属がそれぞれ多産し、それぞれモミ属、ツガ属、クマシデ属− アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、サナエタデ節− ウナギツカミ節、セリ科、ヨモギ属等を伴う。水湿地生植物ではサジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、コウホネ属、ハス属、ヒシ属、アサザ属、デンジソウ属、アカウキクサ属等が、栽培の可能性がある種類ではカキノキ属、イネ属型、ソバ属、ベニバナ属等が認められる。

ｄ）３区　基盤堆積物

7000年前の放射性炭素年代値を示した14地点5f層（試料２）の花粉化石群集は、木本花粉をみると、コナラ亜属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、クマシデ属− アサダ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属− ケヤキ属、エノキ属− ムクノキ属等を伴う。一方、5000年前以降に形成された5b層の有機質泥層中（試料１）の花粉化石群集ではスギ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属等を伴う。草本花粉は、２試料とも概ね類似しており、イネ科が多く認められ、カヤツリグサ科、サナエタデ節− ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科等を伴う。試料１からはガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属、ベニバナ属なども産出する。なお、14地点の２試料の分析残渣中には、微細な炭化植物片（微粒炭）が多量に含まれる。

（２）植物珪酸体分析

結果を表４、図10に示す。各地点の堆積物試料からは植物珪酸体が検出され、保存状態が良好なものが多い。以下に、各地点での産状を述べる。

ａ）池117

４地点の充填堆積物の植物珪酸体含量は、試料３が約2,300個/gと少なく、試料２で約7,500個/g、試料１で約6,500個/gである。各試料で植物珪酸体含量が異なるものの、検出される分類群や産状は同様であり、メダケ属（メダケ節・ネザサ節）を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。また栽培植物であるイネ属も産出し、葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、短細胞珪酸体が100個/g未満～500個/g、機動細胞珪酸体が100個/g未満～200個/gである。試料１では、短細胞列も見られる。なお、池117の基盤堆積物である４層（５地点試料１）では植物珪酸体含量が極めて少なく、約200個/g

表４　植物珪酸体分析結果

分類群	1区				3区				
	池117				池370	池250			
	4地点			5地点	9地点	12地点			
	1	2	3	1	1	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属	500	<100	<100	−	<100	200	100	<100	−
メダケ属メダケ節	200	300	<100	−	<100	200	<100	<100	−
メダケ属ネザサ節	200	100	<100	−	<100	200	<100	<100	−
タケ亜科	2,100	2,200	600	<100	400	1,500	1,000	1,300	100
ヨシ属	<100	700	100	−	<100	300	300	300	−
ウシクサ族ススキ属	<100	<100	<100	−	−	<100	100	<100	<100
イチゴツナギ亜科	300	300	<100	<100	<100	<100	<100	<100	−
不明	1,400	1,300	500	<100	300	1,800	1,100	1,200	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属	200	<100	<100	−	<100	300	200	<100	−
メダケ属メダケ節	<100	200	<100	−	<100	500	200	100	<100
メダケ属ネザサ節	100	<100	<100	−	<100	400	100	100	<100
タケ亜科	700	1,000	400	<100	300	1,500	1,100	1,400	200
ヨシ属	<100	400	<100	<100	<100	400	500	400	<100
シバ属	<100	−	−	−	−	<100	<100	<100	−
不明	500	700	300	<100	200	1,600	1,100	1,100	300
合計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	4,800	5,100	1,400	100	900	4,200	2,800	3,100	400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,700	2,400	900	100	700	4,600	3,300	3,300	700
合計	6,500	7,500	2,300	200	1,600	8,800	6,100	6,400	1,100
珪化組織片									
イネ属短細胞列	*	−	−	−	−	*	−	−	−

数値は含量密度（個/g：10の位で丸めている）を示す。<100は100個/g未満、−は未検出、＊は検出を示す

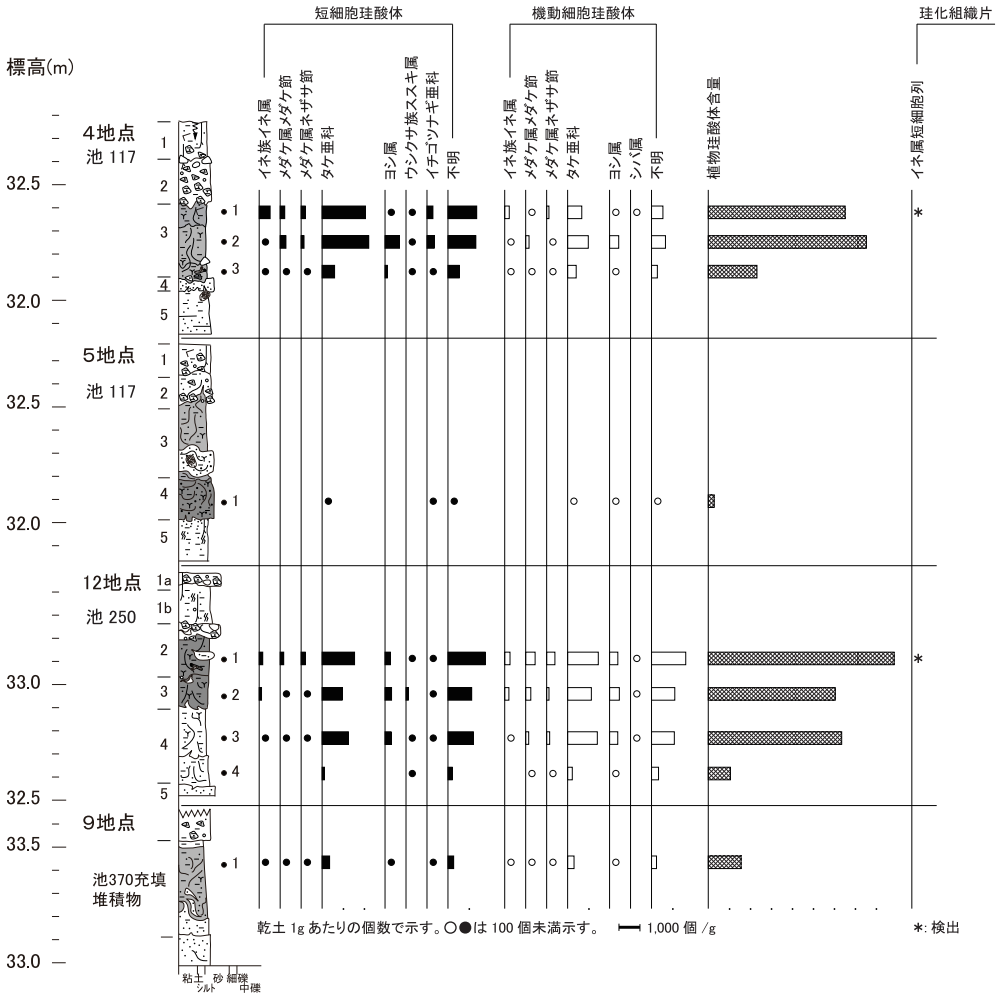


図10　各地点の植物珪酸体群集の層位分布

である。タケ亜科やヨシ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに見られるに過ぎない。

b）池370

充填堆積物上部（試料１）の植物珪酸体含量は少なく、約1,600個/gである。メダケ属を含むタケ亜科、イネ属、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。周辺から植物珪酸体流入や生育が相対的に少なかったことが示唆される。

c）池250

池の機能期の堆積物である12地点試料４で植物珪酸体含量が少なく、約1,100個/gである。メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに見られるに過ぎない。試料３～１の植物珪酸体含量は試料４よりも多く、約6,000～9,000個/gである。メダケ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。イネ属の含量は、短細胞珪酸体が100個/g未満～200個/g、機動細胞珪酸体が100個/g未満～300個/gである。試料１では、植物葉の存在を示唆する短細胞列も見られる。

（３）大型植物化石分析結果（樹種同定も含む）

結果を表５に示す。全地点・層準を通じて、産出した分類群（種類）は、裸子植物６分類群（アカマツ、マツ属複維管束亜属、モミ属、ヒノキ、ネズミサシ属？、カヤ）271個、被子植物79分類群（広葉樹のヤマモモ、ヒメグルミ、ハンノキ属、クリ、クリ?、ツブラジイ、ムクノキ、ヒサカキ属、キイチゴ属、ウメ、モモ、スモモ、サクラ節、サクラ属、アカメガシワ、センダン、ブドウ属、ノブドウ、タラノキ、カキノキ属、エゴノキ属、ムラサキシキブ属、草本のオモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、ミズオオバコ?、スブタ、ヒルムシロ属、ホッスモ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、ミズアオイ属、イボクサ、イネ、エノコログサ属、イネ科（複数種）、ミクリ属、アゼスゲ類、テンツキ属、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科（小型、２面小型、２面、３面小型、３面）、カラムシ属、ミゾソバ近似種、サナエタデ近似種、タデ属（２面網目、３面平滑、３面網目）、ナデシコ科、ヒユ科、タガラシ、キンポウゲ属、マツモ、ミズオトギリ、キジムシロ類（隆条）、カタバミ属、エノキグサ、ツリフネソウ、スミレ属、モモルデイカメロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、ミズユキノシタ、チドメグサ属、セリ科、サクラソウ科、イヌコウジュ属、シロネ属、シソ科、ナス属、ナス科、タカサブロウ、メナモミ属、キク科）1434個、計1705個の大型植物遺体が同定された。その他に、不明の種実が６個と、樹皮、木材、炭化材、植物のトゲ、蘚苔類、昆虫類、土器片などが確認された。

栽培種は、カキノキ属、ウメ、モモ、イネの穎、メロン類（モモルデイカメロン型、マクワ・シロウリ型）が確認される。

栽培種以外の分類群は、草本類では、オモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、ミズオオバコ?、スブタ、ヒルムシロ属、ホッスモ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、ミズアオイ属、イボクサ、イネ科、ミクリ属、アゼスゲ類、テンツキ属、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ミゾソバ近似種、タデ属、タガラシ、マツモ、ミズオトギリ、ツリフネソウ、ミズユキノシタ、セリ科、シロネ属、タカサブロウなどの水湿地生植物を含む分類群が大半を占め、４地点、５地点、９地点

表５　大型植物化石・樹種同定結果（１）

分類群	部位	状態	池117		池370	池250												備考
			4地点	5地点	9地点	11地点			12地点				X716 Y690 −692	X716 Y690 −692	X724 Y692 −696	X732 Y684 −680	X732 Y692 −696	
			3層	4層	埋土	3層	4層	4層	2層	3層	4層		2層		3層	2層	3層	
			3	1	1	1	2	3	1	2	3	4	8-1	8-3	8-8	9-1	9-7	
木本																		
アカマツ	葉	破片				1												横断面確認
マツ属複維管束亜属	球果	完形				3										1		
		破片				2				1						2		
	種鱗	破片		1		7	6			2						8		
	種子	完形				1												
		破片								2				1				
	短枝	破片				24	31	18		5	11	2						
	葉	破片(先端部)				3	5	3		1	1							
		破片				36	14	36		8	8	3						
	木材	生材破片				4	1		1	1								
モミ属	種子	完形					1											
	葉	破片(先端部)				2	2				1							
		破片				1	1	2			1							
ヒノキ	枝条	完形					1											
ネズミサシ属?	種子?	完形						1			1							
		破片											1					長さ6.0mm,径4.1mm
カヤ	種子	破片													2			
ヤマモモ	核	破片												1				
ヒメグルミ	核	破片											1					長さ27.4mm+,幅25.4mm,半
ハンノキ属	果鱗	完形	1	4														
		破片	2	7														
	木材	炭化材破片		1														
ブナ属	木材	炭化材破片			1													
コナラ属コナラ亜属クヌギ節	木材	生材破片		1														
コナラ属アカガシ亜属	木材	炭化材破片			2					1	1							
コナラ属?	果実	破片													1			
クリ	果実	破片													12			最大片:長さ18.2mm+
クリ?	果実	破片						1							2			
ツブラジイ	果実	破片													1			長さ7.7mm+,径6.9mm
ムクノキ	核	破片	1	1	1		2				1							
ヒサカキ属	種子	破片							1									
ウメ	核	破片													5			最大片:長さ10.5mm+
スモモ	核	完形													1			長さ14.1mm,幅10.7mm,厚さ
モモ	核	完形													1			長さ24.0mm,幅18.7mm,厚さ
サクラ属サクラ亜属サクラ節	核	完形														1		長さ6.4mm,幅5.4mm,厚さ
		破片											3			2		
サクラ属	小枝	生材破片															2	径:約5mm
キイチゴ属	核	完形				1												
		破片			1													
アカメガシワ	種子	完形											1					
		破片						1	2									
センダン	核	完形														3		
		破片				3	1						1					
クスノキ科	木材	炭化材破片			1													
ブドウ属	種子	破片									1							
ノブドウ	種子	完形											1	1				
		破片		1														
タラノキ	核	完形		1														
カキノキ属	種子	破片(基部)							1									
		破片													1			
エゴノキ属	種子	破片	6	13														
トネリコ属	木材	炭化材破片		2														
ムラサキシキブ属	核	完形	1	2														
草本																		
オモダカ属	果実	完形	1						1	7	2							
		破片								2	1							
サジオモダカ属	果実	完形	4															
オモダカ科	種子	完形	5						16	12	3							
ミズオオバコ?	種子	完形	5						5	8	1							
スブタ	種子	完形	5	1														
		破片	8		1													
ヒルムシロ属	果実	完形		2			1		1		3							
		破片					1	2		5	1	1						
ホッスモ	種子	完形	3						10	4	1							
		破片	4						13	3	1							
ミズアオイ近似種	種子	完形	1		57		2	1			2							
コナギ近似種	種子	完形			2						2							
ミズアオイ属	種子	完形								16								
イボクサ	種子	完形	20		33					3	1							
		破片	8		1													
イネ	穎	破片(基部)	17		6	3				1	1							9地点:1個炭化
		破片	68		13	1			2	3	1							9地点:2個炭化
エノコログサ属	果実	完形	2		2													
		破片	2		1						1							
イネ科(複数種)	果実	完形	7		2													
		破片	4		1			1		1								
ミクリ属	果実	完形	1															
アゼスゲ類	果実	破片	1	2														
		破片		1														
テンツキ属	果実	完形	31															
		破片	27															
ホタルイ属	果実	完形	49	48	2				1	1	1	1						
		破片	90	67	2					1	2	1						
カヤツリグサ属	果実	完形									1							
カヤツリグサ科(小型)	果実	完形	7			2			1	3								
		破片	1															

表５　大型植物化石・樹種同定結果（２）

分類群	部位	状態	池117		池370	池250												備考
			4地点	5地点	9地点	11地点			12地点				X716 Y690 -692	X716 Y690 -692	X724 Y692 -696	X732 Y684 -680	X732 Y692 -696	
			3層	4層	埋土	3層	4層	4層	2層	3層	4層		2層		3層	2層	3層	
			3	1	1	1	2	3	1	2	3	4	8-1	8-3	8-8	9-1	9-7	
カヤツリグサ科(2面小型)	果実	完形	114		1	4				3	1							
		破片	29			1				3	6							
カヤツリグサ科(2面)	果実	完形		13														
		破片		11														
カヤツリグサ科(3面小型)	果実	完形	23															
		破片					1											
カヤツリグサ科(3面)	果実	完形	6	24														
		破片	3	4														
カラムシ属	果実	完形		1														
ミゾソバ近似種	果実	完形	1			2												
		破片	3			1												
ササエタデ近似種	果実	完形			1													
タデ属(2面網目)	果実	完形			1													
		破片			2													
タデ属(3面平滑)	果実	完形	3															
		破片	10			1												
タデ属(3面網目)	果実	完形	2	1					1									
		破片	12	31					1	10		1						
ナデシコ科	種子	完形	8		2	4			4	4		1						
		破片	2															
ヒユ科	種子	完形			1													
タガラシ	果実	完形			6		1				1							
		破片			17		2			1								
キンポウゲ属	果実	完形	2															
マツモ	果実	完形									1							
ミズオトギリ	種子	完形	1	4														
キジムシロ類(隆条)	核	完形	1						1									
		破片		1			1											
カタバミ属	種子	完形			1	2	1											
		破片	1		5		1			2								
エノキグサ	種子	破片			1						1							
ツリフネソウ	種子	破片	1	1														
スミレ属	種子	破片		3	1						1							
ﾓﾓﾙﾃﾞｨｶﾒﾛﾝ型	種子	完形												1				長さ8.6mm,幅3.7mm,厚さ
		破片													1			長さ8.7mm+,幅3.9mm
ﾓﾓﾙﾃﾞｨｶﾒﾛﾝ型-ﾏｸﾜ・ｼﾛｳﾘ型	種子	破片													1			長さ7.5mm+,幅3.8mm(頂部
ﾏｸﾜ・ｼﾛｳﾘ型	種子	破片											1		2			土8-1:長さ6.1mm+,幅3.3mm,
メロン類	種子	破片(基部)								2								
		破片										4						
ミズユキノシタ	種子	完形								1	1	1						
チドメグサ属	果実	完形	4									1						
		破片	12		2		1		1	2	1							
セリ科	果実	完形			1													
サクラソウ科	種子	完形						1										
イヌコウジュ属	果実	完形	6	6	1			1										
		破片	6	5	13	6		1	2	5	13	3						
シロネ属	果実	完形	3		1													
シソ科	果実	完形		1														
		破片		3														
ナス属	種子	完形			2													
		破片									1							
ナス科	種子	完形				1												
タカサブロウ	果実	完形			1		1					1						
		破片			3													
メナモミ属	果実	破片	1															
キク科	果実	破片	1															
不明							2			2								
その他																		
樹皮							+	+	+	+	+							
木材				+		+	+		+	+		+						
炭化材			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+						
植物のトゲ									+									
蘚苔類				+		+	+		+	+	+	+						
昆虫類			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		1				
土器片										1								
計																		
木本			11	34	6	88	65	62	5	21	26	5	8	3	26	17	2	
草本			626	230	186	28	13	7	60	103	52	15	1	1	4			
木本+草本			637	264	192	116	78	69	65	124	78	20	9	4	30	17	2	
分析量(cc)			50	50	200	50	200	200	200	200	200	200	−	−	−	−	−	
分析量(g)			75.03	65.49	337.2	54	265	292	337	278	261	284	−	−	−	−	−	

で顕著である。４地点、５地点では、テンツキ属やホタルイ属が多産するのに対し、９地点ではミズアオイ近似種が多産するなどの違いもみられる。木本類では、アカマツを含む複維管束亜属が最も多く（235個）、11地点からの多産に特徴づけられる。その他に、モミ属、ヒノキ、ハンノキ属、クリ?、ムクノキ、センダンなどの高木類や、明るく開けた場所に先駆的に侵入する中・低木類のヒサカキ属、キイチゴ属、アカメガシワ、タラノキ、エゴノキ属、ムラサキシキブ属、籐本類のブドウ属、ノブドウなどが確認された。

遺構別では、池117、池370では草本主体の組成を示すが、池250では木本類も比較的多産する。ただし、池250では地点によって産状が異なり、11地点では木本類が多いのに対して、12地点では草本類が多い。

5－３　植物化石群集からみた古植生

（１）基盤堆積物形成期の古植生

３区の平安時代の遺構の基盤をなす堆積物は、側方への層相変化が著しい、扇状地性堆積物からなる。基盤堆積物の花粉化石の産状をみると、放射性炭素年代測定で7500年前頃の年代値を示す14地点5f層では、コナラ亜属、エノキ属− ムクノキ属、ニレ属ーケヤキ属などの落葉高木となる種類が多産する組成を示し、平安時代前期の整地層直下の5b層では針葉樹のスギ属と常緑広葉樹のアカガシ亜属が多産する組成に変化している。

一方、１区の平安時代前期の池117の基盤堆積物は、５層が氾濫原の堆積環境、４層が湿地のような堆積環境で形成されたことが推定される。４層の形成年代は放射性炭素年代測定結果から縄文時代晩期後半と推定される。４層では花粉化石の保存状態が悪かったが、木材および大型植物化石においてハンノキ属、クヌギ節、ムクノキ、エゴノキ属、トネリコ属などの落葉広葉樹が確認されている。

京都盆地周辺の植生史研究（深泥ヶ池団体研究グループ，1967a,b，中堀、1981,岡田，1997など）によると、完新世以降の気候の温暖化に伴い、落葉広葉樹が分布を拡げ、縄文時代前期以降に常緑広葉樹林に変化していくことが確認されている。今回の結果も、これらの成果と同調的である。縄文時代早期頃の5f層形成期にはナラ類などの落葉広葉樹が卓越する林分が成立しており、平安時代前期の整地が行われる直前には常緑広葉樹のカシ類が既に分布を拡げていたことが推定される。また、縄文時代晩期後半頃の１区一帯にはハンノキ属などの河畔林ないし湿地林が成立していたことが推定される。

（２）平安時代の古植生

平安時代前期頃の古植生の検討は、９世紀初頭以降の池117充填堆積物、9世紀初頭の池370充填堆積物、９世紀後半〜10世紀の池250充填堆積物を対象として、複合的な植物化石分析調査を実施した。過去の植生復元調査では、堆積物中に取り込まれている花粉・胞子・種実・葉・木材・植物珪酸体といった、植物体の各部位の化石の産状（種類や量）に基づいて検討されている。この際、各植物化石群がどのような過程（堆積物中への取り込まれ方、堆積時後の分解作用の影響など）を経て形成されたものか、層相解析に基づいて評価する必要がある。このような各化石群の形成にかかわる全過程をタフォノミーと呼び、このタフォノミーは部位によって異なっているため、同じ堆積物中の各部位の植物化石群を複合的に調査することで、母植物の統一的把握、母植物の生育地の推定や植生の空間的分布状況の把握が可能となる（辻,2000)。今回の調査でも、このような視点から平安時代前期の各池埋積期の古植生について検討する。

１）池117（平安時代前期：９世紀初頭以降）

池117を充填する３層は、層相・珪藻化石群集から、湿地のような堆積場で形成されたと推定される。ただし、中・上部形成期には池周囲からの砕屑物の流れ込みが顕著となることから池周辺環境に変化が起こっていることが推定される。

３層下部の植物化石群集の産状をみると、花粉化石群集では木本類と草本類がほぼ同程度の比率で産出するが、大型植物化石群集は草本類主体の組成を示し、木本類がほとんど産出しない。このような部位による産状の差異は、上記のタフォノミーの違いに起因するもので、花粉・大型植物化石群集の双方で多産する草本類は、部位間で対応する種類も多いことから、池内およびその近辺の植生を反映していると推定される。これに対して、花粉化石群集でのみ多産する木本花粉は、その多くが風媒性でかつ花粉生産量の多い種類からなることから、池117より離れた場所に生育していた樹木に由来する花粉が飛来堆積していると推定される。

草本類の種類構成をみると、抽水植物のオモダカ属・サジオモダカ属、スブタ、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミクリ属、ミズオオバコ？、ミズアオイ近似種、タデ属、沈水植物のホッスモなど、水生植物およびその種を含む分類群が主体をなしている。このほかメナモミ、カタバミ属、イヌコウジュ属など山野や道ばたに生育する種類も僅かに産出する。また栽培種のイネの頴が多産する。このような組成から、３層下部形成期の池117内は、水生植物が繁茂する湿地であったと推定される。池周囲にはメナモミ、カタバミ属、イヌコウジュ属などが生育していたと思われるが、乾いた場所に生育する草地を形成する種類・産出数が少ないこと、イネ科植生を反映する植物珪酸体群集でも乾いた場所に草地を形成するススキ属などの草本類がほとんど産出しないことを踏まえると、池周囲は草本植生に覆われない開けた場所であった可能性が高い。また、栽培種のイネの頴が産出するものの、イネ属の植物珪酸体がほとんど産出しないことを踏まえると、池周囲にイネ属が生育していた、あるいは栽培されていた可能性は低く、脱穀後の籾殻などが生活残滓として池内に何らか過程を経て取り込まれたものと推定される。

３層中・上部形成期になると、上記したように周囲からの流れ込みなどの影響を受けるようになる。本時期も花粉化石において水生植物が生育する湿地のような場所であったと推定されるが、土砂流入の増大傾向を踏まえると、池周辺では植生に覆われていない裸地が拡がったことが推定される。３層上部では栽培種のイネ属花粉を含むイネ科花粉が増加し、植物珪酸体でもイネ属が増加する。さらに栽培種のソバ属やベニバナ属などの花粉化石も産出するようになる。池の埋没がほぼ終了する３層上部形成期には調査地点ないしその近辺で耕作が行われるようになった可能性がある。

一方、池より離れた場所に成立していたとみられる森林植生は、３層上部にかけて二次林の代表的な樹種であるマツ属が増加傾向を示すことから、９世紀以降に人為的植生撹乱（伐採など）の影響が強くなり、二次林としてのマツ属の分布域が拡大したことが推定される。

２）池370（平安時代前期：９世紀中葉）

池370充填堆積物上部の形成期の池内は、有機質に富む砂質泥が堆積する湿地のような堆積場で

あったことが推定される。本層準の植物化石の産状をみると、大型植物化石群集は草本主体の組成を示し、花粉化石群集は木本・草本の割合で草本花粉がやや多い組成を示す。上記の池117と同様に、草本植物は池内およびその近辺の植生、木本花粉は距離的に離れた場所の植生を反映しているとみられる。

草本類の種類構成をみると、水生植物を主体とする点で池117の３層下部と類似するが、産出する種類はミズオアイ属・イボクサ属などの小型の抽水植物が主体であり、池117で多産したカヤツリグサ科（ホタルイ属を含む）やタデ属などはほとんど産出しない。このことは、池370と池117では景観が大きく異なっていたことを示しており、池370では小型の抽水植物が生育するものの、池全体を草本植物が覆うような状況でなかったと推定される。なお、池370からも栽培種のイネの頴が産出するが、植物珪酸体の産状を踏まえると、生活残滓に由来する可能性がある。

広域の植生を反映している木本花粉組成は、池117の３層下部層準と類似することから、池370充填堆積物上部と池117の３層下部が生層序学的に対比可能である。後背地にはナラ類・カシ類などの暖温帯性の植生が存在したと推定される。また、これらの層準の時期の植生環境が、下記する池250が構築される直前の景観であった可能性が高い。

３）池250（平安時代前期：９世紀後半～10世紀頃）

池250は、層相および珪藻化石群集から、埋積の進行に伴い、水位変動のある、水深の浅い沼沢地（４層形成期）から湿地へと変化し、最終的には人為的営力により埋め立てられたことが確認される。また、最下層の４層中上部より上位では、池内および周囲に生育していた植物に由来する植物遺体が取り込まれるようになる。

池250の植物化石群集の産状をみると、上述してきた池117や池370とは大きく異なり、大型植物化石群集でも木本植物由来の化石が比較的多産する。花粉化石群集も木本花粉の占める割合が相対的に高い。このような産状と上記の堆積環境を踏まえると、池250の周囲には樹木が生育していたことは確かで、それら樹木の多くが植栽樹であった可能性が考えられる。特に大型植物化石において複数部位（例えば葉、枝、種子など）が同時に比較的多く産出する種類、大型植物化石と花粉化石で対応関係にある種類、池周辺に生育していた樹木に由来する可能性が高い。また、草本類についても大型植物化石で産出する種類や水生植物の草本花粉などは池内およびその周縁部に生育していた可能性が高い。このような視点から、池250の植栽・前栽について検討する。

池250機能期に形成された４層～３層まで堆積物から産出する木本類のうち、上記したような産状を示す、針葉樹のアカマツを含むマツ属複維管束亜属、モミ属、ネズミサシ？、広葉樹のウメ、モモ、サクラ属サクラ亜属サクラ節、ネズミサンザシ？、センダンは、当時の植栽樹として存在した可能性が高い。一方、池内には、水際などの水深の浅い場所にオモダカ属、ミズオオバコ？、ミズアオイ属、イボクサ、ホタルイ属、タガラシ、デンジソウ属などの抽水植物が生育し、池内の水深のある場所には抽水植物のハス属、コウホネ属、浮葉植物のヒシ属、ヒルムシロ属、アサザ属、池の水中に沈水植物のホッスモ、マツモなどが生育していたとみられる。このうち、ハス属は先述の池117・370では確認されていない種類であり、植栽された植物の一種であった可能性

がある。池の周囲にはイヌコウジュ属やカタバミ属なども分布していたとみられるが、産出量が少なく、うっそうとした草地を形成していたとは考えにくい。また、栽培植物であるベニバナ属の花粉化石も連続して産出しており、本種も前栽などして存在した可能性がある。

これらの植物のほか、池内の堆積物からは栽培種のイネ（頴)、メロン類（種子)、クリ（果皮片)、カキノキ属（種子）といった有用植物の大型植物化石も産出している。これらの種類は当時の人間が利用していた植物と判断され、その残滓が池内堆積物に何らかの過程を経て取り込まれた可能性が高い。ただし、カキノキは植栽樹として存在した可能性もある。

このように池250およびその周囲には多くの花木が存在したことが確認される。池250は、発掘調査の結果、「三条院鈎〔釣〕殿高坏」と墨書された土器が検出されたことから、「百花亭」と称された平安時代前期の右大臣・藤原良相の邸宅「西三条第」跡内の園池と考えられている。飛田(2002)によると、平安時代前期後半になると、平安京の庭園ではサクラの植栽および前栽が行われるようになり、マツが有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあったことが文献等の調査より明らかにされている。今回の池250の植物化石の産状は、これらの発掘調査成果や古文書の記載事項とも同調的な結果といえる。

ところで、平安時代以降の古植生については、平安京右京五条二坊九町・十六町跡（パリノ・サーヴェイ,1991)、平安京右京三条一坊三・六・七町跡（環境考古学研究会,2002)、平安京右京三条一坊二町跡（環境考古学研究会,2004)、史跡二条離宮（環境考古研究会,2001)、大覚寺大沢池（未公表)、平安京右京六条一坊三町跡（パリノ・サーヴェイ,2008)、平安京右京三条三坊三町跡（パリノ・サーヴェイ,2009）などで古植物学的情報が得られている。これらの調査成果をみると、平安京域では、12世紀以降にマツ属花粉が急増する場合が多いが、宅地域は庭園などの調査地では９世紀頃に急増する傾向が確認される。このような傾向は、上記の飛田(2002)による指摘と同調的であり、宅地域などを中心にアカマツなどのマツ類が広く植栽されるようになったことを示していると考える。

引用文献

安藤一男,1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42(1990), 73～88, aNN. Tohoku Geogr. Assoc.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35- 47.

Cholnoky, B. J., 1968, Die Okolgie der Diatomeen in Binnen-Gewassern. Lehre. Desikachiary, T. V., (1987A) Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-10, Plates : 22-400A.

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I).Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II),147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.

Hustedt, F., 1930, Bacillariophyta (Diatomeae). In Pascher, Die Susswasser Flora Mitteleuropas, Part 10, 466p. Jena, G. Fischer.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

石川　茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 －－ 陸生珪藻の細分－－.日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌,6, 23-44.

環境考古学研究会,2002,自然遺物の環境考古学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　2002-5　平安京跡右京三条一坊三・六・七町,財団法人　京都市埋蔵文化財研究所,33-47.

環境考古学研究会,2004,溝64の土壌分析について.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　2004-6　平安京右京三条一坊二町跡,財団法人　京都市埋蔵文化財研究所,21-23.

加藤君雄・小林 弘・南雲 保, 1978, 八郎潟調整池のケイソウ類. 八郎潟調整池の生物相調査報告, 八郎潟調整池生物相調査会, 秋田県, 63-137.

近藤錬三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義- わが国への導入とその展望- . 植生史研究, 1, 9-44.

小杉正人,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27,(1), 1-20

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa

2(2)：596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3)：576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4)：437p.

Lowe, R. L., 1974, Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water daitoms. In Environmental Monitaing Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop. U. S. Environ. Protect. Agency. cincinati. 1-344.

松田順一郎,1999,瓜生堂遺跡第45-2時発掘調査でみられた古地震痕跡,都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45時発掘調査概要報告,財団法人東大阪市文化財協会,233-242.

Matsuda,J.-I,2000,Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan,Sedimentary Geology,135,99-116.

尾池和夫,1996,京都と周辺地域の地震活動の特性 ： 京都と周辺地域の有感地震データベース（解説）.京都市防災会議,81p.

中堀謙二,1981,深泥池の花粉分析.深泥池の自然と人深泥池学術報告書,京都市文化観光局,163-180.

中山　至大・井之口希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.

深泥ヶ池団体研究グループ,1967a,深泥ヶ池の研究(1),地球科学,30,15-38.

深泥ヶ池団体研究グループ,1967b,深泥ヶ池の研究(2),地球科学,30,122-140.

岡田俊子,1997,京都府南部巨椋池堆積物の花粉化石組成にみられる人為的影響- アカガシ亜属の減少とイネ属の増加- .第四紀研究,36,207-213.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査花粉・植物珪酸体報告,平安京右京五条二坊九町・十六町　京都市右京区西院三蔵町,京都文化博物館,108-116.

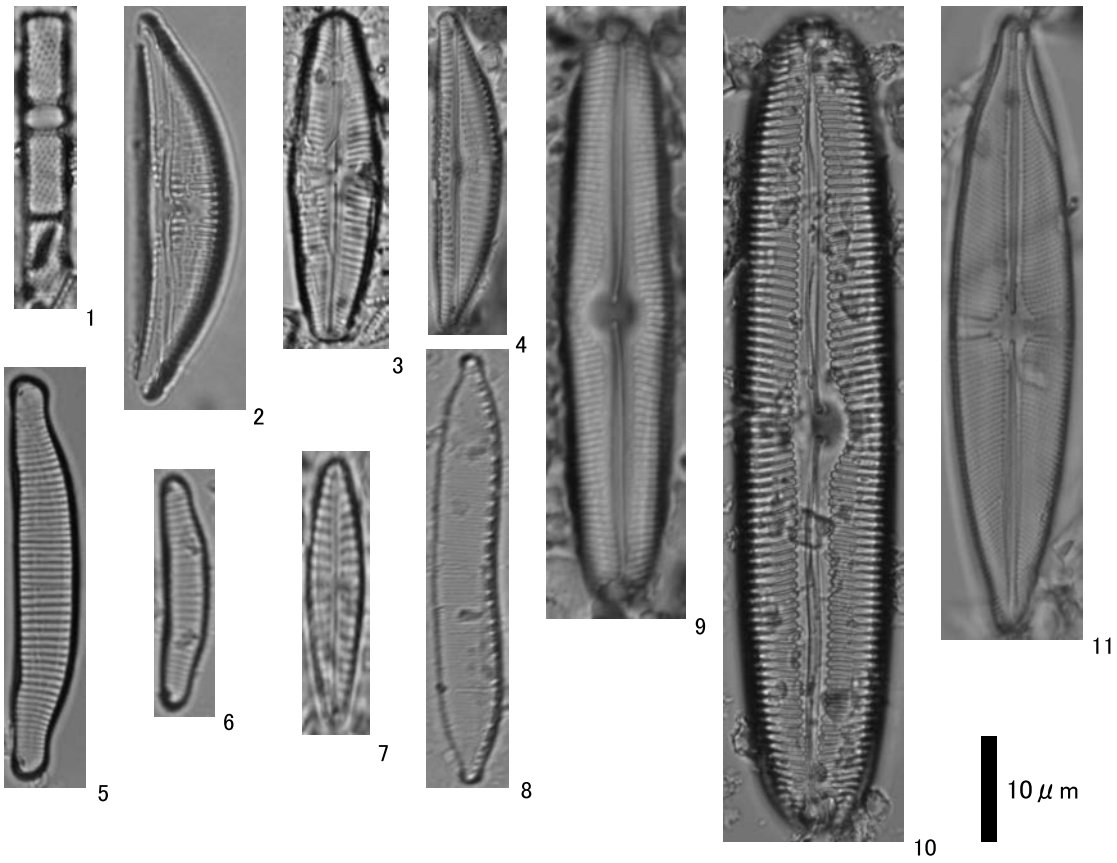
Patrick, R. and Reimer, C. W., 1966, The diatoms of the United States exclusive of Alaska and Hawaii. Vol. 1, 688p. Monographs of Acad. Nat. Sci. Philadelphia 13.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集,60p.

Stuiver M. and Polash H.A.,1977, Discussion:Reporting of 14C data,Radiocarbon 19,355-363.

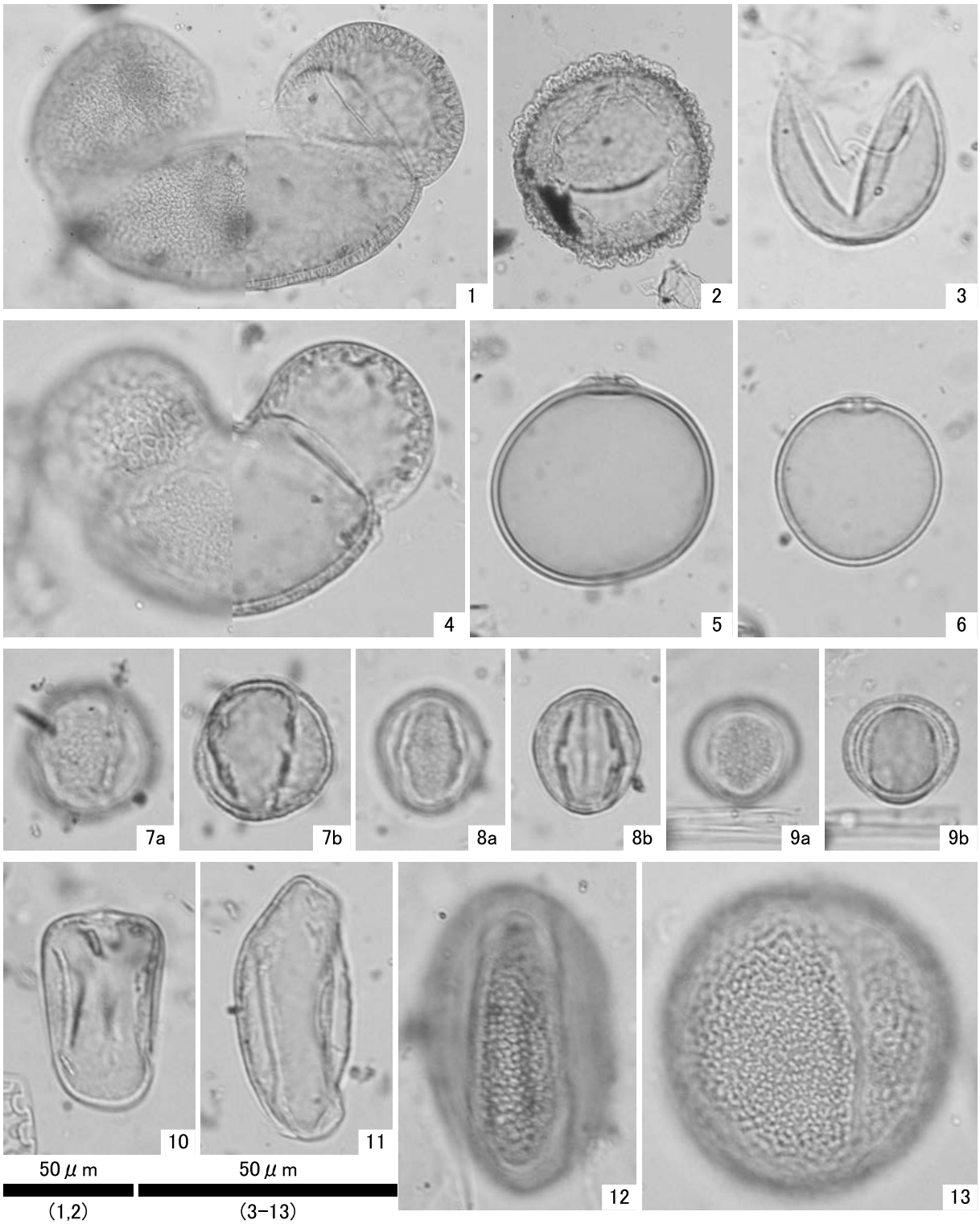
飛田　範夫,2002,日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会,435p.

辻　誠一郎　編,2000,考古学と植物学（考古学と自然科学）.同成社,247p.



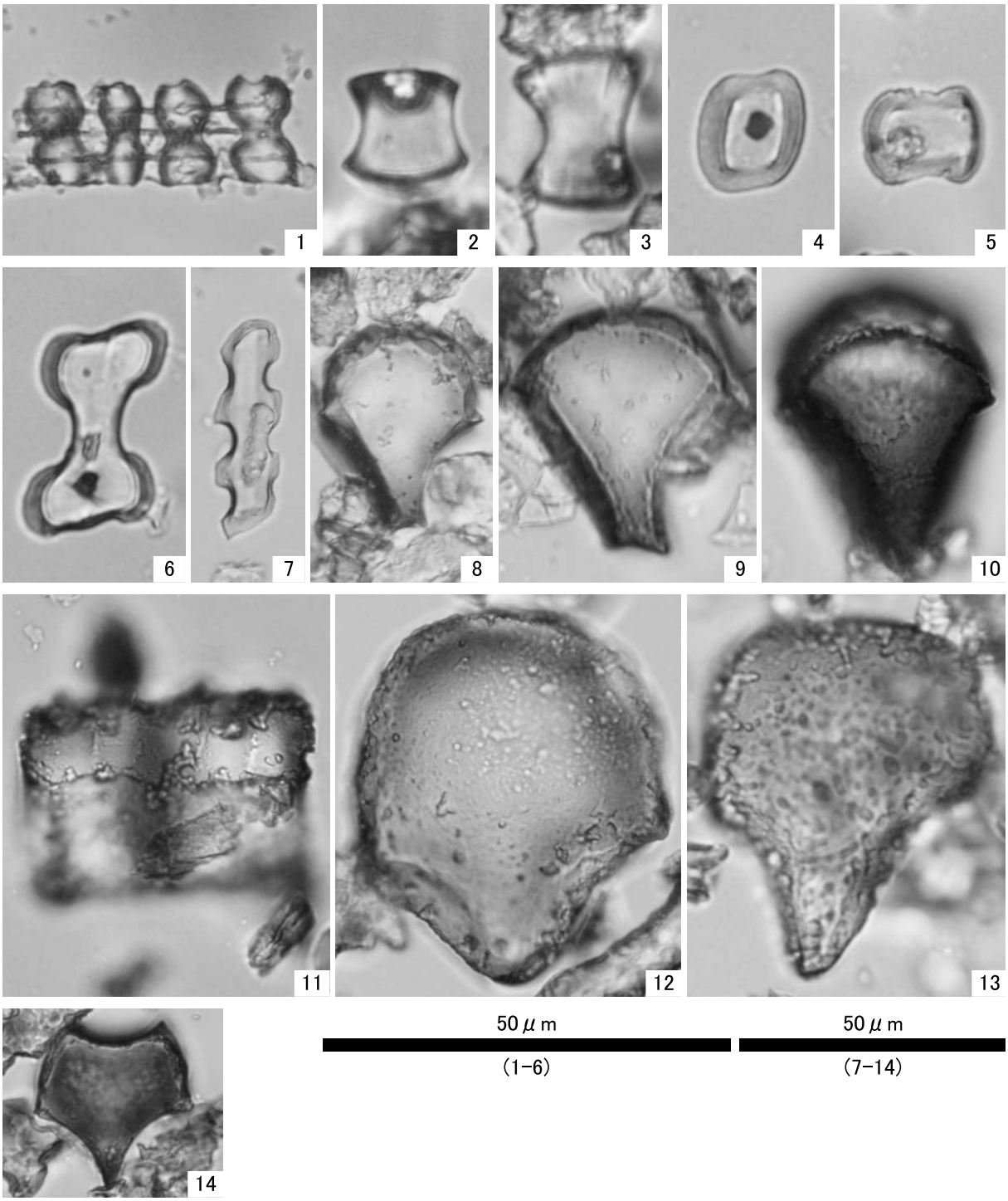
1．*Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen(4地点;2)
2．*Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck(12地点;2)
3．*Cymbella subaequalis* Grunow(4地点;2)
4．*Encyonema silesiacum* (Bleisch) D.G. Mann(11地点;2)
5．*Eunotia pectinalis* (Dillwyn) Rabenhorst(4地点;2)
6．*Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst(4地点;2)
7．*Gomphonema parvulum* (Kuetzing) Kuetzing(11地点;3)
8．*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow(9地点;1)
9．*Pinnularia subrupestris* Krammer(9地点;1)
10．*Pinnularia viridiformis* Krammer(4地点;2)
11．*Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg(12地点;2)

写真１　珪藻化石



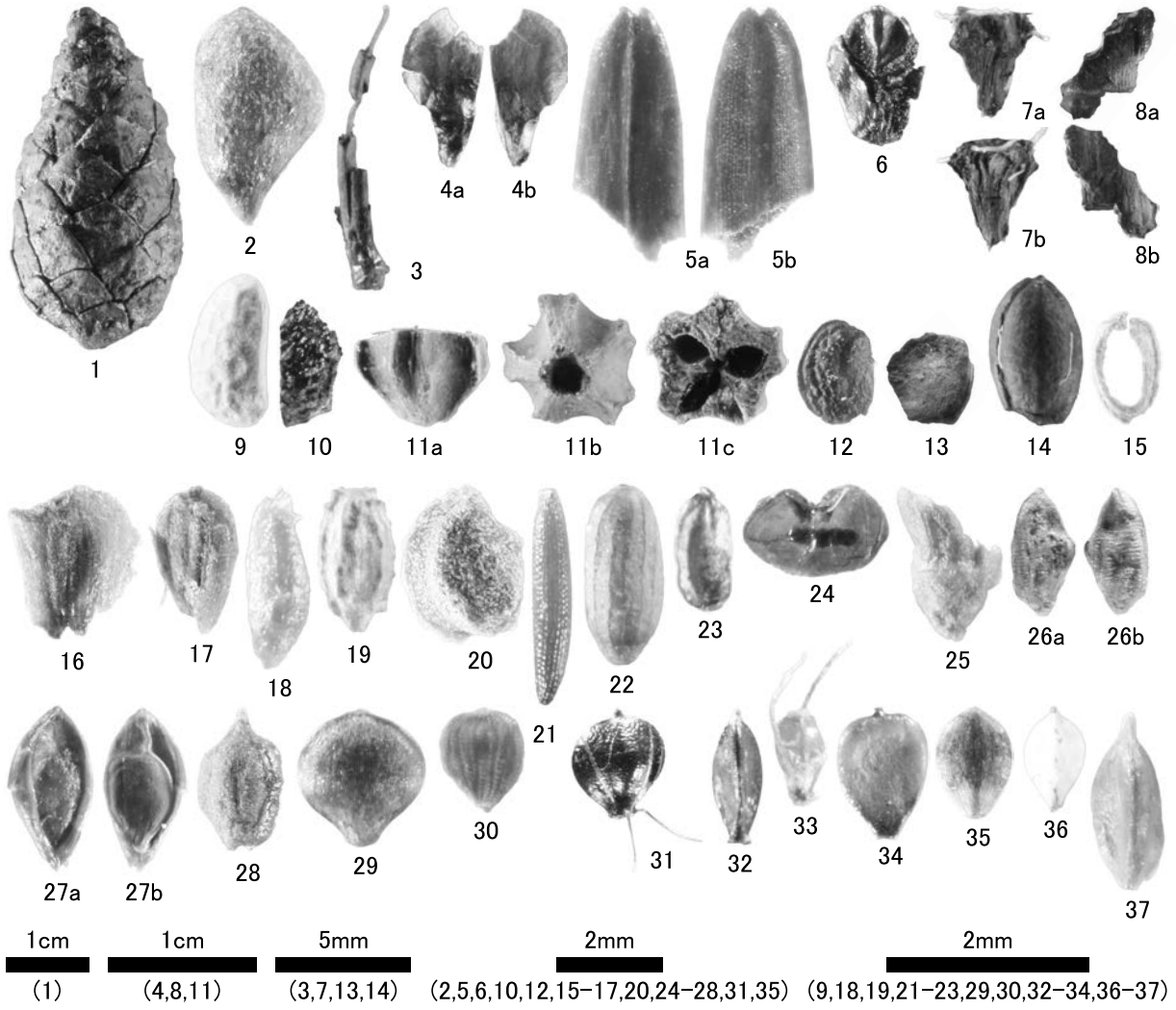
1．モミ属(4地点;2)
2．ツガ属(9地点;1)
3．スギ属(4地点;1)
4．マツ属(4地点;1)
5．イネ科(4地点;1)
6．イネ科(4地点;1)
7．コナラ属コナラ亜属(4地点;1)
8．コナラ属アカガシ亜属(4地点;1)
9．ヨモギ属(9地点;1)
10．カヤツリグサ科(4地点;1)
11．ミズアオイ属(4地点;1)
12．ソバ属(4地点;1)
13．ハス属(12地点;3)

写真２　花粉化石



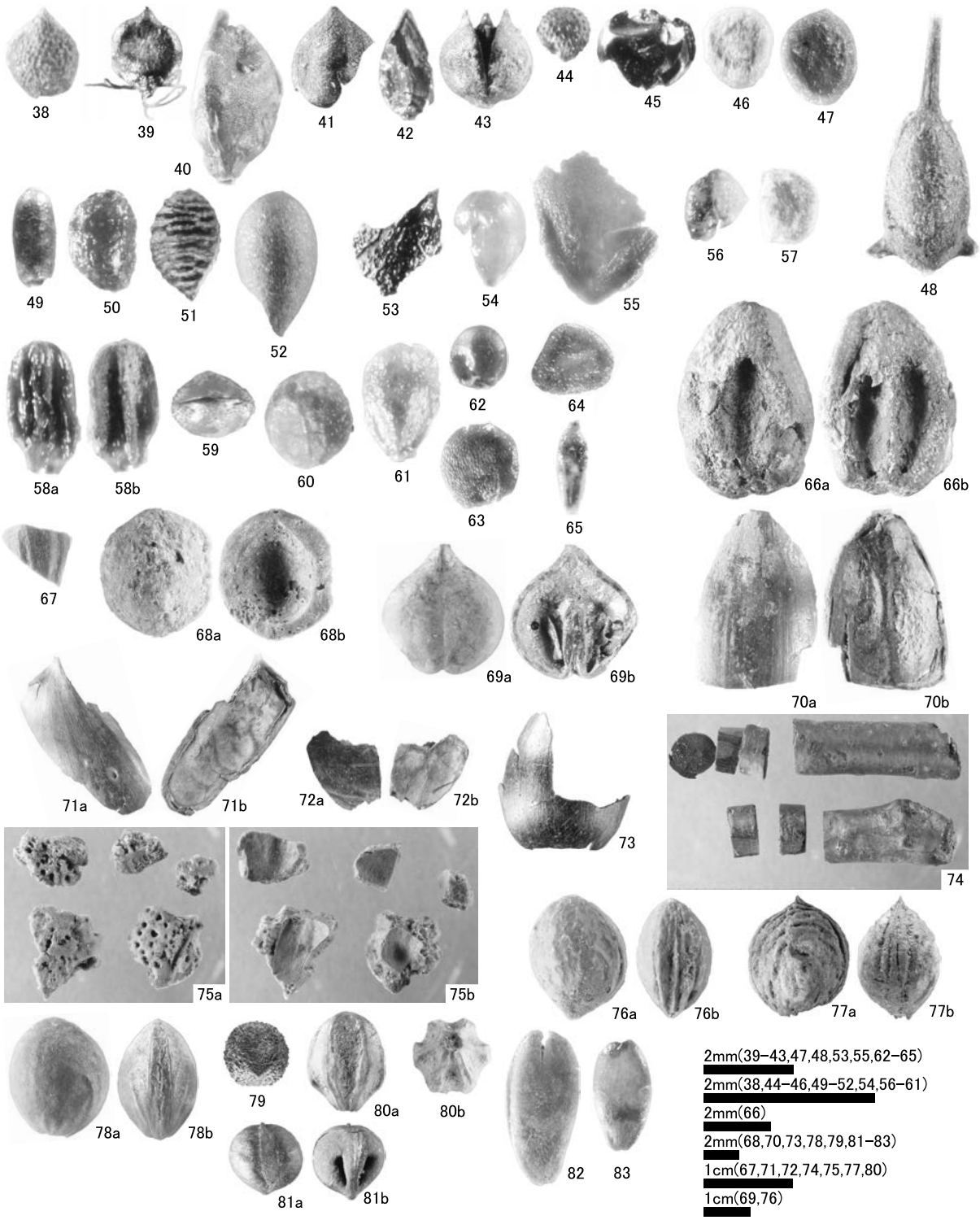
1．イネ属短細胞列(4地点;1)
2．メダケ節短細胞珪酸体(12地点;1)
3．ネザサ節短細胞珪酸体(9地点;1)
4．ヨシ属短細胞珪酸体(4地点;2)
5．ヨシ属短細胞珪酸体(12地点;2)
6．ススキ属短細胞珪酸体(12地点;1)
7．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(4地点;1)
8．イネ属機動細胞珪酸体(4地点;1)
9．イネ属機動細胞珪酸体(12地点;3)
10．メダケ節機動細胞珪酸体(12地点;1)
11．ネザサ節機動細胞珪酸体(9地点;1)
12．ヨシ属機動細胞珪酸体(4地点;2)
13．ヨシ属機動細胞珪酸体(12地点;2)
14．シバ属機動細胞珪酸体(4地点;1)

写真３　植物珪酸体



1．マツ属複維管束亜属 球果(11地点;1)
2．マツ属複維管束亜属 種子(11地点;1)
3．マツ属複維管束亜属 短枝・葉(11地点;1)
4．モミ属 種子(11地点;2)
5．モミ属 葉(11地点;2)
6．ヒノキ 枝条(11地点;2)
7．ハンノキ属 果鱗(5地点;1)
8．クリ? 果実(11地点;3)
9．キイチゴ属 核(11地点;1)
10．アカメガシワ 種子(12地点;1)
11．センダン 核(11地点;2)
12．タラノキ 核(5地点;1)
13．カキノキ属 種子(12地点;1)
14．エゴノキ属 種子(5地点;1)
15．ムラサキシキブ属 核(5地点;1)
16．オモダカ属 果実(12地点;2)
17．サジオモダカ属 果実(4地点;3)
18．ミズオオバコ? 種子(12地点;1)
19．スブタ 種子(4地点;3)
20．ヒルムシロ属 果実(12地点;3)
21．ホッスモ 種子(12地点;1)
22．ミズアオイ近似種 種子(9地点;1)
23．コナギ近似種 種子(9地点;1)
24．イボクサ 種子(9地点;1)
25．イネ 穎(4地点;3)
26．エノコログサ属 果実(4地点;3)
27．イネ科 果実(4地点;3)
28．ミクリ属 果実(4地点;3)
29．アゼスゲ類 果実(5地点;1)
30．テンツキ属 果実(4地点;3)
31．ホタルイ属 果実(4地点;3)
32．カヤツリグサ属 果実(12地点;3)
33．カヤツリグサ科(小型) 果実(4地点;3)
34．カヤツリグサ科(2面小型) 果実(4地点;3)
35．カヤツリグサ科(2面) 果実(5地点;1)
36．カヤツリグサ科(3面小型) 果実(4地点;3)
37．カヤツリグサ科(3面) 果実(5地点;1)

写真４　大型植物遺体（１）



38.カラムシ属 果実(5地点;1) 39サナエタデ近似種 果実(9地点;1) 40.ミゾソバ近似種 果実(4地点;3) 41.タデ属(2面網目) 果実(9地点;1) 42.タデ属(3面平滑) 果実(4地点;3) 43タデ属(3面網目) 果実(4地点;3) 44ナデシコ科 種子(4地点;3) 45ヒユ科 種子(9地点;1) 46タガラシ 果実(9地点;1) 47キンポウゲ属 果実(4地点;3) 48マツモ 果実(12地点;3) 49ミズオトギリ 種子(5地点;1) 50キジムシロ類(隆条) 核(12地点;1) 51.カタバミ属 種子(11地点;1) 52.エノキグサ 種子(9地点;1) 53.ツリフネソウ 種子(5地点;1) 54.スミレ属 種子(5地点;1) 55.メロン類 種子(12地点;2) 56.ミズユキノシタ 種子(12地点;2) 57.チドメグサ属 果実(4地点;3) 58.セリ科 果実(9地点;1) 59.サクラソウ科 種子(11地点;3) 60.イヌコウジュ属 果実(4地点;3) 61.シロネ属 果実(4地点;3) 62.シソ科 果実(5地点;1) 63.ナス属 種子(9地点;1) 64.ナス科 種子(11地点;1) 65.キク科 果実(4地点;3) 66.ネズミサシ属? 種子?(池250;8-1) 67.カヤ 種子(池250;8-8) 68.ヤマモモ 核(池250;8-3) 69.ヒメグルミ 核(池250;8-1) 70.コナラ属? 果実(池250;8-8) 71.クリ 果実(池250;8-8) 72.クリ 果実(池250;8-8) 73.ツブラジイ 果実(池250;8-8) 74.サクラ属 小枝 (池250;9-7) 75.ウメ 核(池250;8-8) 76.モモ 核(池250;8-8) 77.スモモ 核(池250;8-8) 78.サクラ属サクラ亜属サクラ節 核(池250;9-1) 79.アカメガシワ 種子(池250;8-1) 80.センダン 核(池250;9-1) 81.ノブドウ 種子(池250;8-3) 82.モモルディカメロン型 種子(池250;8-3) 83.マクワ・シロウリ型 種子(池250;8-1)

写真５　大型植物遺体（２）

付章２　平安京右京三条一坊六町出土資料に付着した赤色顔料に関する分析

北野信彦（東京文化財研究所）

１．はじめに

平安京右京三条一坊六町付近は、平安宮大内裏の南に近接しているため、平安時代の初期には有力な貴族屋敷が所在した区域と比定されてきた。今回の発掘調査においても、『拾芥抄』が記録する右大臣の藤原良相の邸宅であった「西三条第」との関連性が指摘される平安時代前期頃（９世紀代）の池跡（南北約24m×東西18m）や建物跡などの遺構や遺物が多数出土した。そのため、当該地点が平安時代の早い時期から有力貴族屋敷関連遺跡であったことが改めて裏付けられたと考えられている。

この池跡は、井戸跡や溝跡などを破却造成して構築されており、この井戸跡などの遺物包含層からは貴族屋敷跡に先行する平安時代初期（８世紀末～９世紀初期頃）の木簡や土師器、瓦などが多数出土している。このうちの井戸470の木枠（井筒）内や溝110からは、赤色顔料の痕跡が瓦胎部に明確に付着した軒平瓦２点、平瓦１点、赤色顔料の痕跡が飛び散った状態で観察される塼１点が検出された。この軒平瓦のうち、試料１が付着した瓦は西賀茂瓦窯産（写真1-1・1-2)、試料２が付着した瓦は小野瓦窯産（写真2-1・2-2）である。近年の平安京内の発掘調査では、同様の文様を有する軒平瓦が数多く検出されており、これらが平安時代前期頃の平安宮内建造物か築地塀、もしくは周辺の有力貴族屋敷や寺院伽藍建造物の軒平瓦として使用されたものと理解されている。一方、縄目文様を瓦胎部に有する無文平瓦は、熨斗棟瓦もしくは甍棟瓦として使用されたと考えられる瓦である（写真３)。また、塼は基壇上の床面に敷かれたタイル状の瓦胎である（写真4-1・4-2)。そのため、これらは建造物のなかでは異なる箇所で使用された資料である。このような瓦の瓦胎部に付着残存した赤色顔料（写真５～７)、もしくは塼に付着残存した赤色顔料（写真８）は、瓦と接する部材の外観塗装材料が瓦胎部にハケ塗り痕跡と

写真1-1　軒平瓦に観察される赤色顔料（試料１、瓦25、井戸470木枠内）

写真1-2　同　軒平瓦の瓦当部

写真2-1　軒平瓦に観察される赤色顔料（試料２、瓦51、溝110）

写真2-2　同　軒平瓦の瓦当部

して付着したもの、もしくは柱などの部材から垂れたものであろう。そのため、当時の建造物の外観塗装の状況を知る上で有効な物的証拠の一つとなりうる。本章では、この赤色顔料について分析調査を行い、平安時代初期頃の平安京内建造物関連の外観塗装材料として用いられた赤色顔料についてみていく。

写真３　平瓦に観察される赤色顔料
（試料３、井戸470木枠内）

２．調査方法

① 分析対象試料の採取

赤色顔料の付着が明確に観察される瓦や塼の表面に付着した土壌は、エタノール＋純水の混合液を用いて慎重に除去した。その後、残存状態が良好な部分３箇所から１～２㎜角の赤色顔料の剥離片を注意深くサンプリングした。これを粘着性がある分析用のカーボンテープに固定させて、分析に供した。

写真4-1　塼に観察される赤色顔料
（試料４、井戸470木枠内）

② 赤い色相の測色測定

赤色顔料の赤い色相の測色は、本来ならば機器分析装置である測色計などを用いてL*、a*、b*で表示し、a*/b*で客観的数値として算出した上で比較検討を行うべきものである。しかし、本試料の赤色顔料は出土軒平瓦に僅かに付着残存した状態で肉眼観察されている。そのため、かなり微小部径の計測を行わなければ出土瓦本体の胎土の色相を同時に測定する恐れがある。この点を考慮して、本調査では測色計計測による客観的数値の計測は行なわず、新版標準土色帳のマンセル標示色見本（農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・日本色彩研究所　色表監修；1991年版）と各試料の色相を自然採光条件下で比較して基本的な赤い色相のグルーピング作業を行った。

写真4-2　同上

③ 無機元素の定性分析

試料の分析には、あらかじめ分析用カーボンテープに固定した試料を（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光Ｘ線分析装置に装着し、電子線を照射して特性Ｘ線を検出した。設定条件は以下の通り。分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、Ｘ線管ターゲットはRh、Ｘ線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μAおよび20μA、検出強度は40.0～160.0cps、定量補正法はスタンダードレスFP法である。

④顔料粒子の集合状態や色相の観察

まず顔料の塗装状態や顔料粒子の集合状態の観察は、（株）キーエンス社製のVH-7000S型デジタ

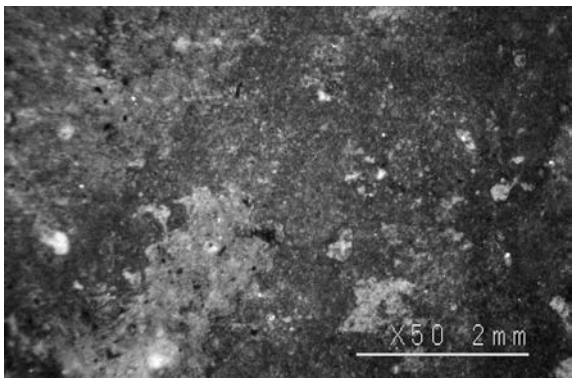


写真５　赤色顔料（試料１）の塗装痕跡

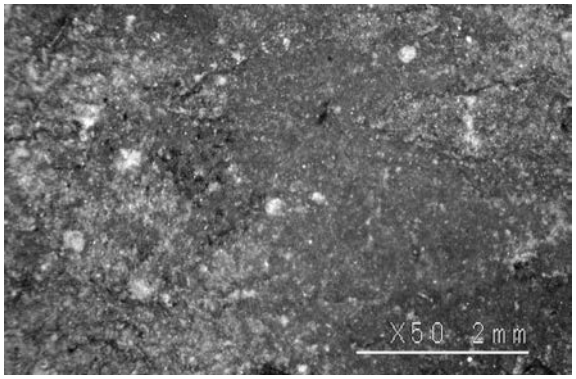


写真６　赤色顔料（試料２）の付着痕跡

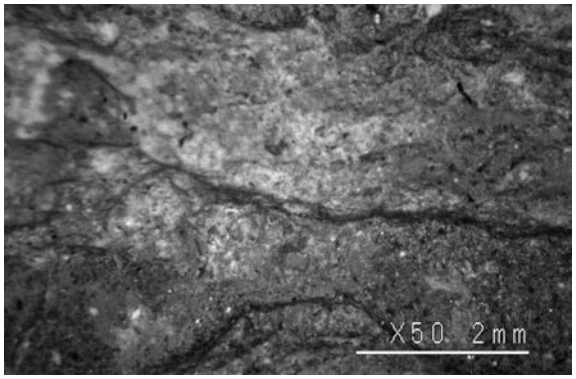


写真７　赤色顔料（試料３）の付着痕跡

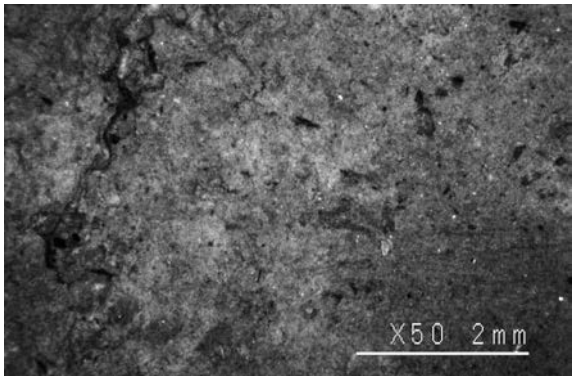


写真８　赤色顔料（試料４）の付着痕跡

ルマイクロスコープと、（株）スカラ製のDG-3型デジタル現場顕微鏡を観察箇所における作業性や安全性を重視してそれぞれ使い分けて行った。観察は外観塗装の残存状態が比較的良好な部分を中心に、50倍から500倍の倍率で行った。

⑤赤色顔料の粒子形態の観察

各試料の個々の粒子形態の観察は、走査型電子顕微鏡を用いた画像（SEM画像）観察を行った。試料は必要量をカ－ ボンテープに固定した上で分析試料台に取り付け、鉄（Fe）が検出される部分を中心に画像観察した。マッピング分析の設定時間は600秒である。次に、個々の顔料の粒子形態を詳細に観察するための50,000倍の高倍率画像観察を、（株）日立ハイテクノロジーズ分析センターにおいて、（株）日立製作所製のS-3200N型走査電子顕微鏡を用いて行った。試料は、先の分析用カーボンテープに固定した試料のうち、実体顕微鏡および金属顕微鏡観察で赤い色相の物質の集積が良好であり、かつ電子顕微鏡観察で鉄（Fe）がマッピング検出された部分を中心に観察した。

⑥鉱物結晶相の同定

本試料のうち分析量の確保が可能であった試料１と試料３について、結晶鉱物相の同定を行った。分析は（株）コベルコ科研において、Ｘ線回析分析装置（リガク製RINT-2500型）と定性ソフトウェア（JADE-6）を使用して行った。測定条件は以下のとおりである。対陰極はCu-Kα、Ｘ線管電圧は50kV、Ｘ線管電流は30mA、検出器はシンチレ－ ションカウンタ、走査速度は１度/１分、走査範囲は5-90度、散乱スリットは1deg.で受光スリットは0.15㎜、モノクロメ－ タ－ は使用である。

３．調査結果

本試料の赤色顔料について無機元素を分析した結果、シリカ（Si）、チタン（Ti）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）などの夾雑物も多いものの、基本的には鉄（Fe）元素の特性Ｘ線が強く検出され、水銀（Hg）や鉛（Pb）元素のピークは検出されなかった（図１～３）。そのためこれらの試料は、いずれも朱（辰砂もしくは水銀朱；HgS）や鉛丹（四酸化三鉛；Pb_3O_4）顔料ではなく、酸化鉄の赤い色相を基調としたベンガラ（酸化第二鉄；α-Fe_2O_3）顔料であると理解した。

次に、この試料の性格を詳細に把握するために、赤い色相の数値化と、顔料の集合状態と粒子形態の低倍率（200～500倍）観察を行った。その結果、試料１・２はマンセル表示で10R 5/8：赤、試料３は7.5R4/8：赤であった。試料４は、付着した土壌が堅く着していたため目視観察ではやや赤い色相が不明瞭な肌色系を呈しているものの、詳細に観察した結果、2.5ＹＲ4/8：赤褐～10R４/8：赤であると解釈した。そのため、いずれも基本的には鮮紅色で良好な赤い色相を呈していた。

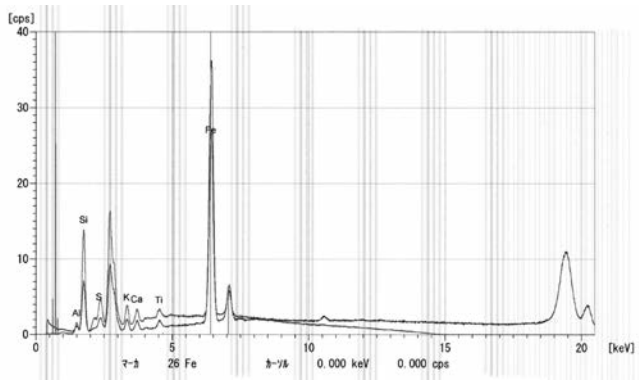


図１　試料１の蛍光Ｘ線分析結果

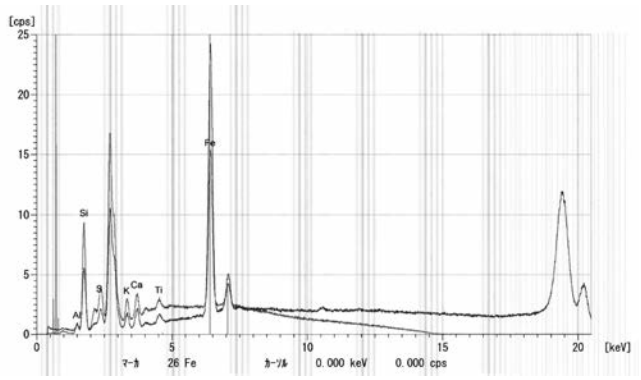


図２　試料２の蛍光Ｘ線分析結果

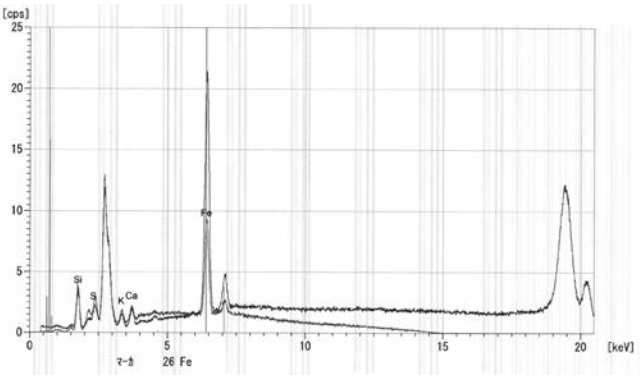


図３　試料３の蛍光Ｘ線分析結果

これらの集合状態を拡大観察した結果、試料１・２は良好な赤い色相を呈するやや微細で角ばった数μm程度のベンガラ顔料の集合体が多数確認された（写真９・10）。その一方で、試料３は試料１・２のそれとは大きく異なり、ヒゲ状の形状を有するベンガラ顔料の集合体が多数確認された（写真11）。試料４も試料１・２とほぼ同様のベンガラ顔料の集合体であるが、付着した土壌粒子の中に数μmから十数μm程度のやや大きな粒子を含む良好な赤色を呈する鉱物粉砕物も多数確認された（写真12・13）。

この状況を綿密に理解するために、個々のベンガラ顔料の粒子形態を1,000～50,000倍の高倍率SEM画像で観察した。その結果、試料１・２・４で観察されたや

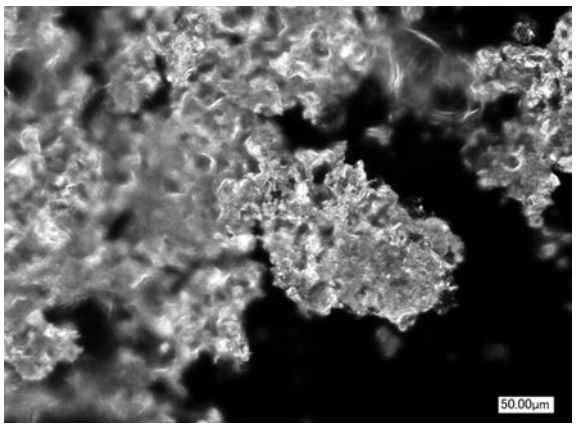


写真９　試料１の金属顕微鏡観察

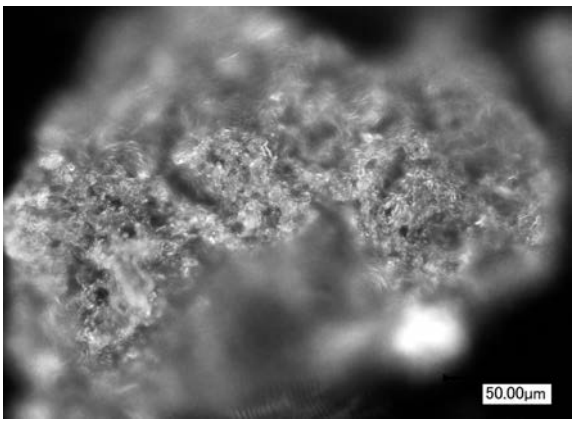


写真10　試料２の金属顕微鏡観察

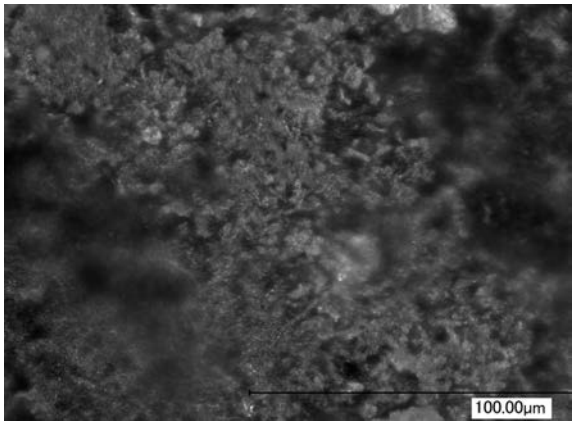


写真11　試料３の金属顕微鏡観察

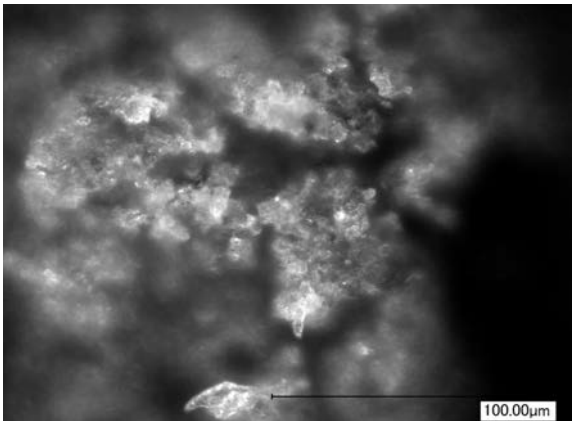


写真12　試料４の金属顕微鏡観察①

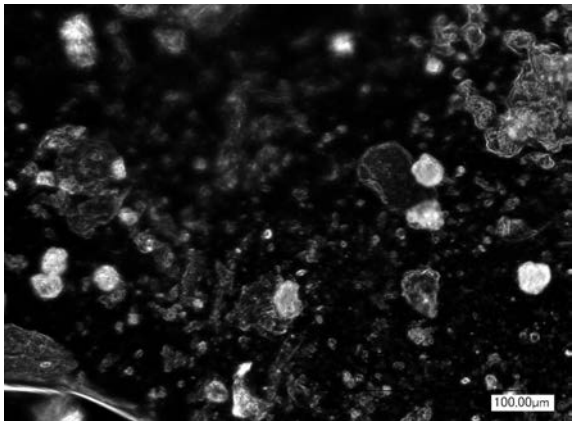


写真13　試料４の金属顕微鏡観察②

や角った微細な粒子の赤色顔料は、0.1～0.3μm前後の六角板状型もしくは薄片雲母状の微粒子の集合体である鉱物結晶体の粉砕物質であった（写真14・15）。また、前記したヒゲ状の赤色顔料の粒子の集合体が確認された試料３は、試料１・２・４とは大きく異なり、0.1μm前後のベンガラ粒子が一定の規格性（らせん状）をもって1μm程度の直径を有する中空円筒状（パイプ状）の形状を呈する集合体であった（写真16・17）。そしてこのうちの試料１と試料３について、鉱物結晶相の分析を行った。その結果、試料１・３ともに採取できた分析量が少なかったためか、鉱物結晶相自体の検出は微弱ではあるが、試料１は石英（Quartz：SiO_2）とともに鉱物結晶度が良いためか鋭いピークを有する酸化第二鉄（Hematite：α-Fe_2O_3）が検出された（図４）。また、試料３においても石英（Quartz：SiO_2）やカルサイト（Calcite：$CaCO_3$）とともに鉱物結晶度が良いためかピーク自体はやや鋭い酸化第二鉄（Hematite：α-Fe_2O_3）が検出された（図５）。

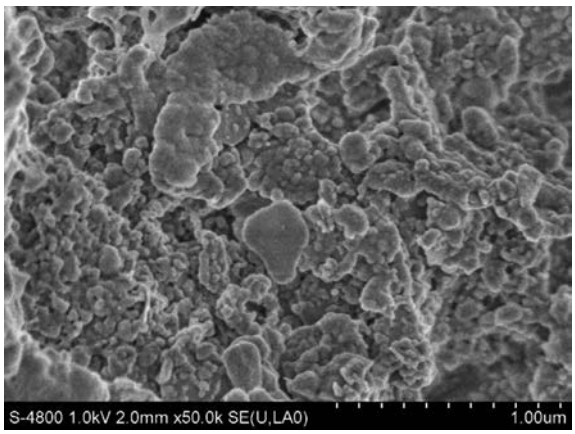


写真14　試料１の電子顕微鏡観察（50,000倍）

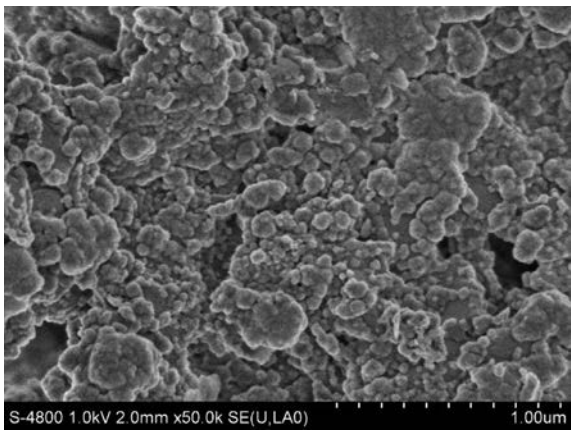


写真15　試料４の電子顕微鏡観察（50,000倍）

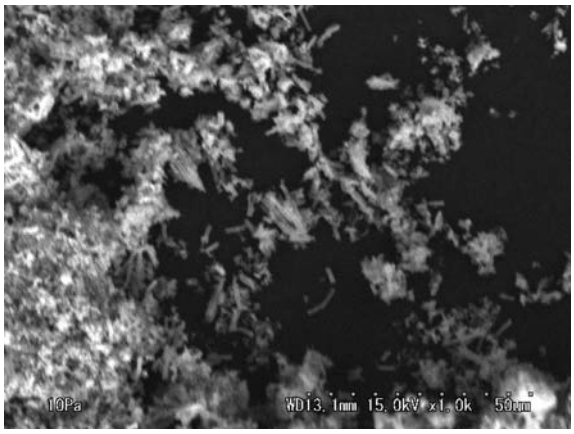


写真16　試料３の電子顕微鏡観察①（1,000倍）

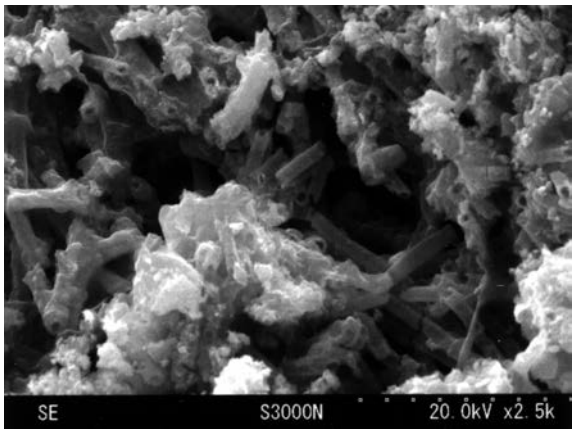


写真17　試料３の電子顕微鏡観察②（2,500倍）

４．考察

平安京右京三条一坊六町跡出土の軒平瓦および塼に付着していた試料１・２・４の赤色顔料は、調査の結果、いずれも0.3～0.5μm程度で厚みは0.05μm以下の扁平な徴薄片の六角板状型もしくは薄魚鱗状（薄板雲母状）の形態を呈する赤い発色が良好な微細粉末粒子の集合体であった。これらの鉱物結晶相も、結晶度が良好な酸化第二鉄であった。これらは後の時代の文献史料ではあるが江戸時代の本草書が「破レバ堅クシテ、薄クヘゲルナリ」と記述する、赤い色相が良好であり、かつ材料学的にも安定したいわゆる天然赤鉄鉱の原石鉱物を磨り潰して作成した「赤土ベンガラ」の形態的特徴である。この点に関連して『延喜式』は赤鉄鉱原石を原材料とした天然ベンガラに相当する「赤土ベンガラ」を示す「赤土」という固有名詞が管見されるため、本試料群はこれらの物的証拠であると理解した。

一方、平瓦に付着していた試料３の赤色顔料も、鉱物結晶度は比較的良好な酸化鉄系の赤色顔料であり、なかには直径1μm、長さは長いもので約20μmにおよぶ中空円筒状の形状を有するものも含まれていた。これらは、通称「パイプ状ベンガラ」と呼称されるベンガラ顔料の一種である。このベンガラの特徴である中空円筒状を呈する形状は、自然界に広く分布する二価の鉄イオンを三価の鉄に替える力をエネルギーとして生息する鉄バクテリア（*Leptothrix Ochraceae*）の鞘状

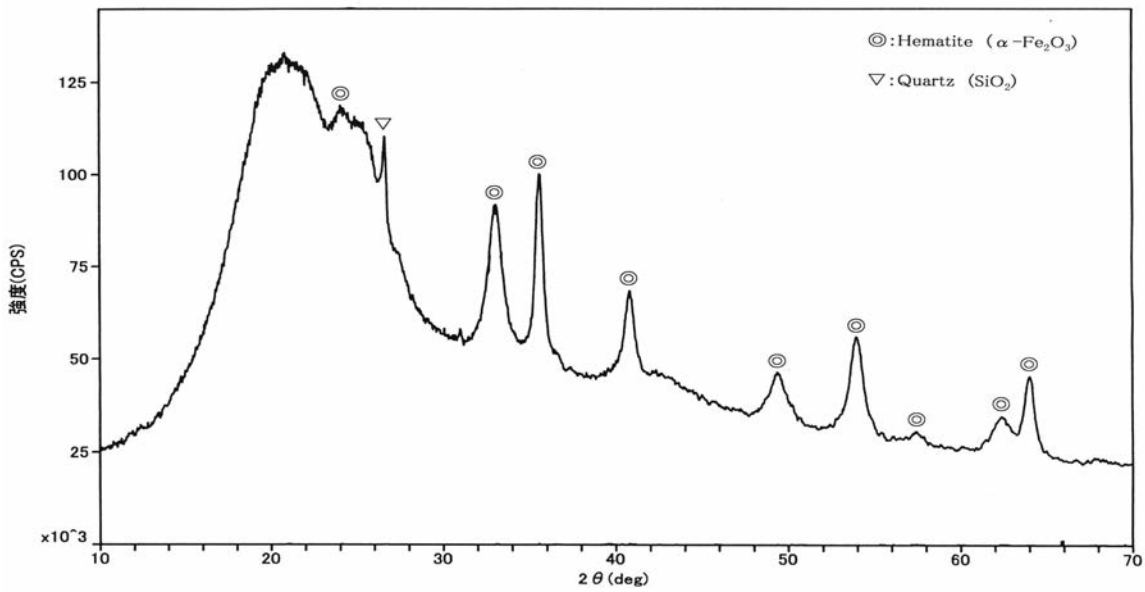


図４　試料１のＸ線回折分析結果

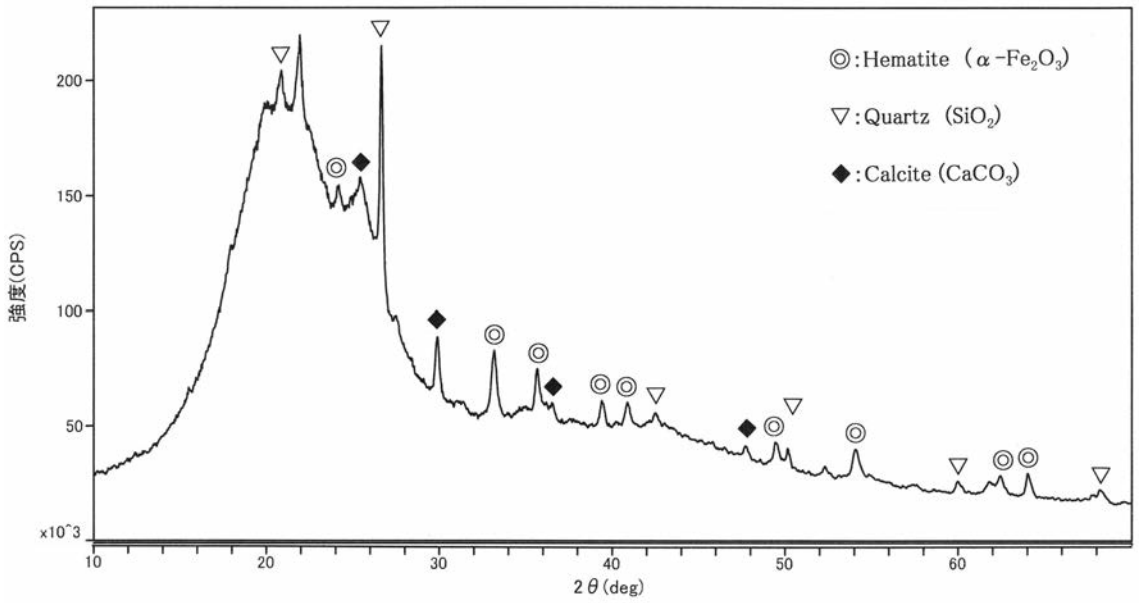


図５　試料３のＸ線回折分析結果

殻の形態に由来する。鉄バクテリアは、主に停滞水が豊富な湿地の環境下で赤褐色もしくは黄褐色を呈して沈殿もしくは綿屑状に浮遊して密集生息するが、それ自体の鞘状殻には鉄酸化物の沈着物質が豊富であるため、通常、沼鉄鉱とも呼称される。このような純度の高い鉄イオンの集合体物質を回収して原材料とし、酸化促進剤（硫酸物質である強酸性の温泉水など）を添加して700℃ほどの設定温度で加熱すると、極めて良好な赤色を呈するベンガラ顔料を獲得することが可能であることが報告者のこれまでの調査でも確認されている。しかし、鉄バクテリアの回収量自体は概して少ないため、量産化には不向きである。そのため、古い年代の赤彩土器や赤色漆、装飾古墳の使用顔料などの少量使用には対応できても、古代寺院伽藍群や宮殿建造物群などの木造建造物の外観塗装材料としては、安定的な供給が困難であるため不適であるとこれまで考えられ

てきた。ところが近年になって、飛鳥・白鳳期では尼寺廃寺跡塔芯礎石と北白川廃寺跡出土軒平瓦付着赤色顔料の２例、奈良時代では元興寺五重小塔創建期の各種部材、平安時代では伝世品ではあるが正倉院御物である彩絵仏像幡の幡脚塗装赤色顔料の１例とともに、本試料との関連性が指摘される平安宮民部省跡出土の平城宮搬入軒平瓦（出土状況から平安時代前期頃の民部省主税寮の築地塀に使用された瓦と考えられている）にその使用例が確認された。さらに同じ平安宮内建造物関連の朝堂院跡出土の平安時代前期頃に生産年代が求められる西賀茂系軒平瓦付着の赤色顔料や平安京左京三条二坊（堀川院）跡出土の難波宮搬入軒平瓦の付着した赤色顔料にも、本試料群のうちで試料１・２・４と同じ天然赤鉄鉱由来の赤土ベンガラの中に試料３と同じパイプ状ベンガラの混入が明確に確認された。このことは平安宮中央政庁建造物群の外観塗装材料として、天然赤鉄鉱を原材料とした「赤土ベンガラ」とともに「パイプ状ベンガラ」が併用された可能性を指摘するものである。

古代国家成立以降には、宮殿や政庁・郡役所建造物群、中央官寺や地方の国分寺・国分尼寺の古代寺院伽藍群など、中央・地方それぞれに大規模の木造建造物の建造が盛んとなる。これらの外観塗装としてベンガラ塗装が為されたことは、出土資料に付着した赤色顔料の痕跡からも推察される。このことは、それまでの少量の使用が基本であったベンガラ顔料の生産に対しても、社会の要請としての大量需要と、それに対応するための安定供給の必要性が高まったことをも意味しよう。しかしこの点を反映したためか、実際に各地で検出される飛鳥・白鳳期から平安時代にかけての廃寺跡などの寺院関連遺跡や宮殿跡出土軒平瓦付着のベンガラ顔料の分析結果は、本試料で確認された「赤土ベンガラ」や「パイプ状ベンガラ」と比較すると、赤い色相や安定性には若干劣るものの、大規模建造物の外観塗装材料としての大量調達や大量使用に対処しうる鉄分の含有量が多い黄土を加熱して作成する、廉価で量産可能な「丹土ベンガラ」が中心であった。

今回調査を行ったベンガラ顔料は、これらとは異なり、赤い色相や材料学的な安定性にも優れた天然赤鉄鉱の原石鉱物を原材料とした「赤土ベンガラ」、量産には向かないものの赤い色相は良好な「パイプ状ベンガラ」など、それぞれの起源や由来が異なる良質な二種類のベンガラ顔料が確認された。この点は本試料と年代観や場所が近似している平安宮内建造物関連の朝堂院跡出土の西賀茂系軒丸瓦や民部省出土の平城宮搬入軒平瓦付着のベンガラ顔料、平安京左京三条二坊（堀川院）跡出土の難波宮搬入軒平瓦付着のベンガラ顔料とも類似した結果である。本試料群が平安時代前期頃の有力貴族屋敷の庭園造営に先行する平安時代初期頃の遺構に伴う資料群から検出されたものであるため、やはり平安宮関連建造物の外観塗装材料と何らかの相互関連性があるものと理解した。

参考文献

岡田文男（1997）「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『第14回大会日本文化財科学会　発表要旨集』（奈良）

北野信彦（2003）「尼寺廃寺出土遺物に付着した赤色顔料に関する調査」『尼寺廃寺跡Ⅰ-北廃寺の調査-』p. 95-98、香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館編

北野信彦（2006a）「平安宮内建造物群のベンガラ塗装に関する一知見」『研究紀要vol.10』 p.49-72 （財）京都市埋蔵文化財研究所
北野信彦（2006b）「北白川廃寺跡出土瓦に付着した赤色顔料に関する調査」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』p.36-38、京都市文化市民局
北野信彦（2007）「古代木造建造物におけるベンガラ塗装の研究（Ⅱ） -パイプ状ベンガラの生産と使用に関する基礎的調査-」『考古学と自然科学 vol.56』、p.41-63、日本文化財科学会
北野信彦・狭川真一・窪寺茂（2008a）「元興寺五重小塔における外観塗装材料に関する調査」『保存科学vol.47』、p.53-68、東京文化財研究所
北野信彦（2008b）「付章４ 出土瓦に付着した赤色顔料に関する分析」『平安京左京三条二坊（堀川院）跡』p.156-161、（財）京都市埋蔵文化財研究所
北野信彦（2009）「歴史的な木造建造物におけるベンガラ塗装の研究（Ⅰ） -文献史料に登場する「赤土」に関する基礎的調査-」『考古学と自然科学 vol.59』 p.1-28 日本文化財科学会
北野信彦（2013）「ベンガラ塗装史の研究』雄山閣
朽津信明（2006）「古代地方寺院の外観塗装の色について」『保存科学 第45号』p.177-186、東京文化財研究所
国史大系編集会（1972）『新訂増補 国史大系（普及版）延喜式 後篇』吉川弘文館
地団研地学事典編集員会（1970）『地学事典』平凡社
成瀬正和（2004）「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要 第26号』宮内庁正倉院事務所
西山巖（1977）「べんがら」『改訂増補 最新顔料便覧』p.448-451、日本顔料技術協会編、誠文堂新光社
山崎一雄（1987）『古文化財の科学』思文閣出版
吉木文平（1959）「3 酸化鉄（Fe_2O_3,FeO）」p.196-216、『鉱物工学』技報堂

付章３　平安京右京三条一坊六・七町出土の動物遺存体

丸山真史（奈良文化財研究所）

１．概要

平安京内では、平安時代前期から近世まで様々な動物遺存体が出土している。特に、溝や井戸などの湿潤な土壌環境の遺構で出土することが一般的である。当調査も例外ではなく、池、溝、井戸などの遺構から動物遺存体が出土している。

報告する資料は、主に平安時代前期と江戸時代後期から明治時代の遺構から出土した動物遺存体であり、破片数にして53点を数える（表１・２）。そのうち種類や部位などを同定したものは、貝類３点、魚類６点、鳥類１点、哺乳類10点にのぼる。また、鹿角や牛馬骨を素材とする骨角製品が２点出土している。調査中に動物遺存体を検出した時は形態を保持していたが、保存状態に恵まれず取り上げられなかったものや、取り上げ後に崩壊したものも含まれている。脆弱な状態の資料は、アクリル系樹脂（パラロイドB-72を５～10%に希釈）を塗布して補強した。

２．種類別の特徴

ａ）貝類

３区井戸470（９世紀初）から、アカニシが２点出土している。また、２区土坑144（江戸時代：18世紀）からアカニシと思われる破片が、１点出土している。２区溝114（10世紀前～11世紀初）からカワシンジュガイ科の殻皮が１点出土している。マツカサガイに類似するが、殻皮だけでは種同定が困難である。

このほか２区溝119（９世紀前）からサザエと思われる殻軸が１点、３区池250（９世紀後～10

表１　種名表

軟体動物門　Mollusca
　腹足綱　Gastropoda
　　古腹足目　Vetigastropoda
　　サザエ科　Turbnidae
　　サザエ？　*Turbo cornutus*
　　新腹足目　Neogastropoda
　　アッキガイ科　Muricidae
　　アカニシ　*Rapana venosa*
　斧足綱　Bivalvia
　　マルスダレガイ目　Veneroida
　　マルスダレガイ科　Veneridae
　　ハマグリ　*Meretrix lusoria*
脊椎動物門　Vertebrata
　硬骨魚綱　Osteichthyes
　　スズキ目　Percidae
　　アジ科　Carangiae
　　ブリ属の一種　*Seriola* sp.
　　タイ科　Sparidae
　　キダイ　*Dentex tumifrons*
　　サバ科 Scombridae
　　カジキ亜目　Xiphioidei
　　カジキ亜目の一種　Xiphioidei fam., gen. et sp. indet.
　　マグロ属の一種　*Thunnus* sp.
　鳥綱　Aves
　　キジ目　Galliformes
　　キジ科　Phasianidae
　　ニワトリ　*Gullus domesticus*
　哺乳綱　Mammalia
　　霊長目　Primates
　　ヒト科　Hominidae
　　ヒト　*Hommo sapiense*
　　奇蹄目　Perissodactyla
　　ウマ科　Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
　　偶蹄目　Artiodactyla
　　ウシ科　Bovidae
　　ウシ　*Bos Taurus*
　　シカ科　Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*

写真１　ウマの中手骨

写真２　ウマの距骨

写真３　歯ブラシ

世紀初）からハマグリと思われる殻が２点出土している。

ｂ）魚類

３区埋甕180（明治時代）からブリ属の椎骨１点、キダイの前鰓蓋骨（左１右１）２点が出土している。ブリ属の大きさは体長60㎝程度、キダイは体長20㎝程度と推定される。３区埋甕178（明治時代）からマグロ属の椎骨２点、メカジキ科とバショウカジキ科の区別ができないカジキ類の椎骨１点が出土しており、いずれも体長100㎝を越える大型個体である。

ｃ）鳥類

３区埋甕180からニワトリの脛足根骨（左）が１点出土しており、近位部に切傷が見られる。近位端幅（Dip）が19.2㎜を測る。

ｄ）哺乳類

３区溝107（16世紀末～17世紀初）から、ヒトの大腿骨（右）あるいは脛骨（右）が１点出土している。骨幹部から遠位部と思われるが、部位の同定には至らない。

３区溝173（９世紀初～10世紀）からウマの中手骨（左、写真１）、大腿骨（右）、脛骨（左右）、距骨（右、写真２）、中手骨あるいは中足骨（左右不明）が１点ずつ出土している。大腿骨の最大長は364.8㎜、中手骨の近位端最大幅は47.2㎜を測り、いずれも体高120～125㎝と推定される。同遺構でウマと思われる肋骨２点、椎骨１点が出土しているが、保存状態に恵まれず種の同定には至らない。３区溝302（江戸時代：18・19世紀）から、顎骨から遊離したウマの臼歯が２点出土している。１点は下顎第１あるいは第２後臼歯（右）、他の１点は上顎第３後臼歯（右）である。歯冠高はそれぞれ57.6㎜以上、72.0㎜を測り、生後５～７年以内、３～４年と推定される。これらのほか３区溝110（12世紀前中～後）から、顎骨から遊離したウマの上顎臼歯（左右不明）が１点出土している。

３区池250から、ウシの角芯が１点出土しているが、小片となっているため、左右の判別は困難である。また、３区溝173からウシと思われる大腿骨（左？）が１点出土している。

ｅ）骨角製品

３区井戸470木枠内から、鹿角を素材とする角幹に刻みを施した刻角が１点出土している（第４章10骨角製品参照）。３区埋甕187（明治時代）から、牛馬骨を素材とする歯ブラシが１点出土している（写真３）。

３．水産物利用

近世、京都の公家屋敷跡、武家屋敷跡、町屋跡では、ハマグリ、シジミ類、アカガイなどの貝類、マダイ、キダイ、ハモ属などの魚類が一般的に出土する。当地で魚類遺存体の出土量が少ないことは、遺跡土壌の水洗篩別を行っていないことが要因の一つと考えられる。

出土した魚類はキダイやブリ属のほかに、外洋性大型回遊魚のマグロ属、カジキ類がある。マグロ属は平安京左京三条二坊十町跡、同六条三坊五町跡で出土しており、いずれも18世紀後半以降の遺構から出土している。当資料は明治時代の遺構から出土しているが、京都市内の遺跡においてカジキ類は初出となる。外洋性大型魚のマグロ属とともに、江戸時代後期から近代にかけて、大型魚が骨付きの状態で京都市中に流通するようになったと考えられる。また、９世紀の井戸470からアカニシが出土しており、平安時代前期には海産貝類が京内に持ち込まれていたことを裏付ける資料である。

４．平安京の馬利用

平安京右京八条二坊跡では、大量の牛馬骨が平安時代前期の西靱負小路の側溝から出土し、その近辺で斃牛馬処理が行われたと考えられている（辻・近藤1996、松井2005）。平安京右京六条三坊七・八・九・十町跡では、平安時代前期の流路から、平安京左京六条三坊五町跡では平安時代後期の楊梅小路の路面から、大量の牛馬骨が出土している（丸山・松井2004、丸山・松井2005）。平安京右京六条三坊七・八・九・十町跡、左京六条三坊五町跡のいずれでもウシよりウマが多く、ウマは体高125㎝以上の日本在来の御崎馬などの中型馬に相当する個体も多く出土している。右京六条三坊七・八・九・十町跡では、牛馬骨が出土した付近で人面墨書土器や人形、斎串などの祭祀遺物が出土しており、祭祀と関連した可能性がある。また、長岡京左京二条二坊十五町跡の二条大路南側溝でも、祭祀に伴って埋葬されたウマが出土している（渡辺1989）。

当調査では、平安時代前期の西坊城小路西側溝（溝173）からウマ５点のほか、ウマと思われるもの３点、ウシと思われるもの１点、大きさからウシまたはウマと考えられる肋骨や四肢骨が少量出土している。このように出土量は少ないが、ウマの方が多いことは、従来の調査結果と一致する。ウマは体高120～125㎝と推定され、日本在来のトカラ馬などの小型馬に相当する大きさであり、従来の平安京出土のウマの中ではやや小さめである。大腿骨や脛骨などの後肢が折り重なって出土しているが、解剖学的な正位置を保持しておらず、その周囲にウマと思われる椎骨や肋骨も出土しており、比較的近い場所で解体され、皮や肉などの資源を取り去った後に、この道路側溝に投棄したことも考えられよう。あるいは、ウマの骨と共伴して祭祀を示唆するような遺物が含まれていれば、祭祀に関連してウマが溝に投棄されたことも考えられる。

５．小結

当調査では、平安時代から近代までの動物遺存体が出土しており、貝類、魚類、鳥類、哺乳類

表２　動物遺存体一覧表

地区	遺構	時期	大分類	小分類	部位	左右
3区	井戸470木枠内	9世紀初	腹足綱	アカニシ	殻質	－
3区	井戸470木枠内	9世紀初	腹足綱	アカニシ	殻質	－
3区	井戸470木枠内	9世紀初	斧足綱	不明	殻質	－
3区	井戸470木枠内	9世紀初	斧足綱	不明	不明	－
3区	井戸470木枠内	9世紀初	斧足綱	不明	不明	－
3区	井戸470木枠内	9世紀初	斧足綱	不明	不明	－
3区	井戸470木枠内	9世紀初	斧足綱	不明	不明	－
3区	井戸470木枠内	9世紀初	骨角製品	刻角		－
2区	溝119	9世紀前	腹足綱	サザエ？	殻質	－
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウマ	中手骨	左
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウマ	大腿骨	右
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウマ	脛骨	右
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウマ	距骨	右
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウマ	中手骨/中足骨	－
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウマ？	肋骨	－
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウマ？	肋骨	－
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウマ？	椎骨	－
3区	溝173下層	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウシ/ウマ	四肢骨	－
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウシ/ウマ	肋骨？	－
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウシ/ウマ	肋骨？	－
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウシ/ウマ	椎骨？	－
3区	溝173下層	9世紀初～10世紀	哺乳綱	ウシ？	大腿骨	左
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	不明	不明	－
3区	溝173	9世紀初～10世紀	哺乳綱	不明	不明	－
3区	溝173上層	9世紀初～10世紀	哺乳綱	不明	不明	－
3区	池250第2-3層	9世紀後～10世紀初	斧足綱	ハマグリ？	殻質	－
3区	池250第2-3層	9世紀後～10世紀初	斧足綱	ハマグリ？	殻質	－
3区	池250西肩第2層上	9世紀後～10世紀初	哺乳綱	ウシ	角芯	－
3区	池250第3層	9世紀後～10世紀初	哺乳綱	ウシ/ウマ？	四肢骨	－
3区	池250第2層	9世紀後～10世紀初	哺乳綱	ウシ/ウマ？	四肢骨	－
3区	池250第2層	9世紀後～10世紀初	哺乳綱	不明	不明	－
3区	池250第3層	9世紀後～10世紀初	哺乳綱？	不明	不明	－
3区	池250第2層	9世紀後～10世紀初	哺乳綱？	不明	不明	－
2区	溝114	10世紀前～11世紀初	斧足綱	カワシンジュガイ科	殻皮	－
3区	溝110	12世紀中～後	哺乳綱	ウマ	遊離歯	－
3区	溝110	12世紀中～後	哺乳綱	ウシ/ウマ	四肢骨	－
3区	溝110	12世紀中～後	哺乳綱	ウシ/ウマ	四肢骨	－
3区	溝110セクション	12世紀中～後	哺乳綱	不明	不明	－
3区	溝107第3層	16世紀末～17世紀初	哺乳綱	ヒト	大腿骨/脛骨	右
3区	溝107第2層	16世紀末～17世紀初	哺乳綱	ウシ/ウマ	遊離歯	－
1区	溝107下層	16世紀末～17世紀初	哺乳綱	ウシ/ウマ	四肢骨	－
2区	土坑144	18世紀	腹足綱	アカニシ？	殻質	－
3区	溝302	18・19世紀	哺乳綱	ウマ	遊離歯	右
3区	溝302	18・19世紀	哺乳綱	ウマ	遊離歯	右
3区	埋甕178	明治	硬骨魚綱	カジキ類	椎骨	－
3区	埋甕178	明治	硬骨魚綱	マグロ属	椎骨	－
3区	埋甕178	明治	硬骨魚綱	マグロ属	椎骨	－
3区	埋甕180	明治	硬骨魚綱	ブリ属	椎骨	－
3区	埋甕180	明治	硬骨魚綱	キダイ	前鰓蓋骨	右
3区	埋甕180	明治	硬骨魚綱	キダイ	前鰓蓋骨	左
3区	埋甕180	明治	硬骨魚綱	不明	鰭棘	－
3区	埋甕180	明治	鳥綱	ニワトリ	脛足根骨	左
3区	埋甕187	明治	骨角製品	歯ブラシ		－

を同定した。明治時代には、外洋性の大型回遊魚であるマグロ属とカジキ類が出土しており、近代における漁獲・流通技術の発達を窺うことができる資料である。また、平安時代前期の道路側溝からウマが出土しており、斃牛馬の処理や祭祀などの可能性が示唆される。今後、出土状況や共伴遺物をあわせて吟味し、京内における馬利用について考察を深める必要がある。

人骨の同定は、大藪由美子氏（奈良県立橿原考古学研究所）のご教示を得た。末筆ではありますが、謝意を表してここに記します。

参考文献

辻裕司・近藤知子1996「平安京右京八条二坊」『平成５年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所pp. 49-55

西中川駿編1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告

松井章1997「堺環濠都市遺跡（SKT78地点）出土の動物遺存体」『堺市文化財調査概要報告』第61集　堺市教育委員会pp. 31-38

松井章2005「考古学から見た動物と日本人の歴史」『周縁文化と身分制』脇田晴子、マーチン・コルカット、平雅行共編　思文閣出版pp. 187-239

丸山真史・松井章2004「平安京右京六条三坊七・八・九・十町出土の動物遺存体」『平安京跡研究調査報告』第20輯　平安京右京六条三坊　（財）古代學協會pp. 169-179

丸山真史・松井章2005「平安京左京六条三坊五町から出土した脊椎動物遺存体」『平安京左京六条三坊五町』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8　（財）京都市埋蔵文化財研究所pp. 126-137

渡辺博1989「長岡京左京第162次（7ANKDE地区）～左京二条二坊十五町、二条条間大路・東二坊大路交差点～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告第27集』（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会pp. 187-233

付章４　平安京右京三条一坊六町（藤原良相西三条第）出土の仮名墨書土器

鈴木景二（富山大学）

はじめに

平安京右京三条一坊跡における今回の発掘調査で出土した文字資料は、９世紀から10世紀初めの檜扇をふくむ木簡、墨書土器からなる。

９世紀初期の井戸ＳＥ470から出土した２組の檜扇の橋には、難波津歌の書き出しが記されている。いずれも楷書の万葉仮名で書かれたもので、遺構の年代観に対応するものであり当該地区の文化的環境を窺わせるものである。

これらにもまして注目される資料が、９世紀後半から10世紀初頭の池250から出土した多くの文字資料である。そのほとんどは墨書土器であり、そのなかに仮名文字が含まれていた。この時期は、在原業平や小野小町といったいわゆる六歌仙の時期から、紀貫之らが活躍し『古今和歌集』が成立した時代、すなわち和歌・和文・仮名が隆盛し国風文化が成立した時代にあたる。これまで、当該期の仮名の資料はわずかしか知られておらず、それらの資料も都以外の地域で作成された文書や出土品が多く、かえって先進地であった都の資料に恵まれていなかった。今回の出土資料は、その空白の時期と空間を埋める稀有な資料群である。しかも９世紀後半の最高級貴族である藤原良相邸であることが確実な遺跡から出土したことにより、歴史資料、遺構・共伴遺物などと有機的に関連づけることが可能な資料群となった。書かれた時期やこれを生み出した人びとの階層、生み出された文化的環境を把握することができるので、この前後の時期の仮名文字資料、およびそれに関連する各分野の基準資料として位置づけられるものである。以下、その概要を述べよう。

１．当該地で以前に出土した仮名資料

平安京右京三条一坊六町では、これまでも数度の発掘調査が行われ、藤原良相邸に対応する可能性のある遺構・遺物が検出されていた。とりわけ2008年の発掘調査では、苑池とみられる池跡の遺物として、９世紀後半から10世紀にかけての数点の木簡、20点程の墨書土器の出土が報告されている[1)]。

木簡は「赤参升阿古屎」とあるもの、「□〔見カ〕見」とあるものの２点があり、他に檜扇の橋２点、そのうちの１点に墨痕があるとされる。墨書土器には「君我念」という字句を含むものがあり、報告書では平城宮跡出土の類品や中国唐の事例を取り上げた考察が加えられている。それらに加え、出土品の中には注目すべき仮名墨書土器も含まれていた。本報告書では、それについての釈読や検討は行わないが、これまであまり知られていない貴重な資料であるので、写真を掲載することとした（写真２）。これらの既出の檜扇、木簡、仮名墨書土器は、今回の資料群と時期、遺跡ともに一連のものであり、今後あわせて検討されるべきものである。

２.「草仮名」という用語

本章で取り上げる仮名文字資料は、草体化した漢字を一字一音に充てたとみられるもので、これらはやまと言葉を仮名で表記したものとみてよく、そのなかには一般的に「草仮名」と呼ばれている字形や平仮名といってもよい字形が含まれている。このうちの「草仮名」という用語は、観点によって指示内容が異なる場合があるので、まず整理しておきたい。

平仮名の成立過程を考える観点には、主に字体の変遷をたどる書道史の見方、主に語彙・語法や表記の体系の変遷として考える国語学分野の見方がある。

書道史の見方[2)]では、やまと言葉に多様な漢字を充てて表記する万葉仮名の段階から、字母が淘汰され数が限られ、字体が草体になり簡略化された草仮名の段階、それがさらに洗練されて平仮名（女手）が成立した段階、という過程が考えられている。その草仮名段階の基準となる資料が「藤原有年申文」（867）（写真１）・「円珍病中言上状」などである。また完成した平仮名の段階の資料が10世紀前半の紀貫之『土左日記』（藤原定家臨模部分）（写真５）、「因幡国司解案紙背仮名消息」など、そしてさらに洗練された到達点というべきものが『古今和歌集』高野切などである。いっぽう平仮名が完成するとともに書としての仮名が意識され、用途に応じて字体の使い分けが行われるようになった。この段階では視覚的な表現として意図的に草仮名の字体による筆記がおこなわれることがあった。その資料が「綾地切」・『秋萩帖』や『古今和歌集序（巻子本)』（大倉集古館蔵）の柿本人麻呂・山部赤人歌の部分などである。

国語学分野の見方については、矢田勉氏が築島裕氏の指摘をふまえて、おおむね以下のように述べている[3)]。「草仮名」という用語は、文字の草体化の度合いを基準として平仮名と万葉仮名の中間に位置づけられているが、それは仮名の史的展開の実態とは合致しない。すなわち、草仮名には①平仮名完成以前に現われるものと、②それ以後、『秋萩帖』にみるような「平仮名とはやや違う原理」で現れるものがある。万葉仮名から平仮名への移行期には草体の仮名①が現れるが、その草化度を基準として前後と区別し線引きすることは困難であり、「藤原有年申文」にみられる仮名のありかたは平仮名の史的一段階としてとらえるべきである。

以上のような諸分野の研究状況をみると、「草仮名」という用語が指す字体には、①平仮名が完成する過程にあらわれた漢字草体の仮名文字、②平仮名成立以後に視覚的効果などを意図して用いられた漢字草体の仮名文字、この双方の場合があることになる。この点は共通認識となっている。両者のうち、平仮名の成立過程で問題となるのは①の字体である。

この①の字体について、イ．平仮名成立の歴史過程に「草仮名」という段階を設け、そこに位置づける見方と、ロ．平仮名の体系という観点から、それを独自の段階とすることはできず、①の「草仮名」字体は、平仮名の範疇に含まれるとする見方に整理できる。

現在のところ、本書で報告される仮名墨書の解読は十分ではなく、語意・文意を考察する段階には至っていない。それゆえ本章では、字形についてのみ概要を述べるにとどめたい。ここでは「草仮名」という呼称を上記①の意味、つまり多賀城跡出土仮名漆紙文書（図１）、「藤原有年申文」

にみられるような字形を指す用語として使用することとする。また平仮名という呼称は、紀貫之自筆『土左日記』、「因幡国司解案紙背仮名消息」以下、『古今和歌集』高野切などにみられるような字体（女手）、すなわち漢字の要素を消し去り表音に純化したというべき字体を指す用語として使用することとしたい。

３．時期的位置づけ

池250出土の仮名墨書土器資料は、遺跡・遺物の考古学的年代観により９世紀後半から10世紀初のものとされている。これまで知られている当該期の仮名資料は、おおむね以下のようである。[4)]

① 多賀城跡出土仮名漆紙文書　９世紀中ごろ（図１）
② 讃岐国司解端書　藤原有年申文　867年（写真１）
③ 東寺檜扇墨書　877年
④ 周易抄　897年頃
⑤ 富山県赤田Ⅰ遺跡出土草仮名墨書土器　９世紀後半～（写真３）
⑥ 富山県東木津遺跡出土難波津歌木簡　９世紀後半か
⑦ 円珍病中言上書　９世紀末
⑧ 三重県斎宮跡出土仮名墨書土器　９～10世紀
⑨ 伊州某書状写　904年（1809写）
⑩ 育然生誕書付　938年
⑪ 新潟県門新遺跡出土漆紙文書第三号　10世紀第２四半期
⑫ 茨城県小作遺跡出土仮名墨書土器　10世紀前半（写真４）
⑬ 因幡国司解案紙背仮名消息　10世紀前半
⑭ 紀貫之筆土左日記（藤原定家臨模部分）　935年頃（写真５）
⑮ 平安宮左兵衛府跡出土和歌墨書土器　10世紀前半から半ば（図版143）
⑯ 醍醐寺五重塔初層天井板落書　951年
⑰ 虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息　10世紀半ば
⑱ 金剛界入曼荼羅受三昧耶戒行儀表紙紙背消息　10世紀半ば
⑲ 鹿児島県気色の杜遺跡出土仮名墨書土器　９世紀から10世紀末

本報告の仮名墨書土器は、上記の９世紀代の資料に並行するものとなる。それらの多くが、わずかな文字数もしくは当時の地方の遺跡から出土したものである点をかえりみると、本資料の特色が際立っている。

このほかに管見に入った出土仮名文字資料を参考として紹介しておきたい。[5)]山野原遺跡（鹿児島県南さつま市）から、９世紀代の土器に「多井」と墨書したもの、およびヘラ書したものが出土している。「多」が草体となっており、草仮名として書いた可能性がある。大宰府条坊跡（筑紫野市）からは、外面に「れ」などの仮名を重ねて習書した11世紀後半の土師器皿が出土している。薩摩国府跡（鹿児島県薩摩川内市）からは、良く紹介される戯画を伴う仮名墨書土器が出土して

いるが、時期が判然としない。的場遺跡（新潟市）からは、「魚の贄」と解釈されている「をの尓へ」とほぼ平仮名で書いた付け札木簡が出土している。時期は不明とされるが、他の遺物の年代からみて10世紀前半が下限となるようである。斎宮跡（三重県）からは引き続いて仮名墨書土器が出土しており、近年いろは歌の墨書土器が出土している。

４．字形の概観

本資料は墨痕の保存状態が良好で、肉眼で十分に読み取ることが可能であり、筆勢や墨色まで識別できる点でも貴重である。また、点数が多く、字数・字種・字形も豊富なので、一括資料群内において相互比較できることも重要である。多くの字形は、多賀城跡出土仮名漆紙文書、「藤原有年申文」に近似しており、上記①の草仮名と呼んで差し支えないものである。

この資料群を一覧し書風を大きく区分すると、だいたいＡ・Ｂ・Ｃの三つのタイプが見受けられる。Ａタイプはいくらか連綿が見られるが、線の抑揚が少なく個々の文字が離れた感じをうけるタイプである。既報告の皿（写真２）や墨14、墨12、墨４、それに仮名書き木簡（木17）などの文字である。「藤原有年申文」と近似する書風で、古風または素朴な印象を受け、墨14、墨12のように稚拙に見えるものもある。筆記者の書の技量が未熟なためか、あるいは時代の書風と見るべきかもしれない。それらより洗練された印象を受けるものが、墨８である。さらに墨３、墨11、墨15、墨16は手慣れた感がある。特に墨15や墨８は安定感があり、後者は書としてみるべきものがある。Ａタイプの典型と位置付けてよいのではないかと思う。これに対してＢタイプは、墨66のうち、高杯の八角柱状の脚の側面に書かれた繊細で抑揚のある線による、流麗な連綿体の文字である。この文字は、これまでの９世紀代の資料からイメージされていた字体、書風とは異なり、平安宮左兵衛府跡出土の和歌墨書土器に近い印象を受ける。Ｃタイプはその高杯の上端の杯内面の文字、およびその口縁部分の可能性のある墨67で、特異かつ細密な書風である。Ｂ・Ｃは同一個体の高杯に書かれているから、意図に応じて字体、書風を異にしていたことを示している。

これらを含んでいた土層の埋没期間をどれだけの時間幅で考えるかにもよるが、すべて同時期の一括資料としてよいとすれば、「藤原有年申文」のような草仮名が書かれた時代に、流麗な連綿体の平仮名に近い書風が並存していたことになる。これまでも、「藤原有年申文」と平仮名に近い東寺檜扇墨書が10年しか隔たっていないことから、草仮名から平仮名への移行が９世紀後半の短期間に進んでいたのではないかという見解が示されていた[6)]。本資料群は、その問題を考える具体的材料となる。

書風・字体の違いは、Ｂ・Ｃにみるように筆記意図による使い分けが考えられるが、筆記者の技量の差も想定される。また、例えばそれぞれの筆記者が高齢者と若者であるというように、世代間の違いとみることもできよう。現時点では記述内容を読み取れていないため可能性の指摘にとどめざるを得ないが、いずれにせよこれらの書風、字形の多様性は、万葉仮名から平仮名への移行のありようを象徴するものであろう。

５．墨書のありかた

奈良時代以来の文学作品のなかに、土器に和歌を書く事例のみられることが知られており、平安宮から出土している和歌墨書土器がその実例とされている[7)]。文学作品の事例は、饗宴の場におけるものや、土器などを和歌贈呈の媒体とするものなどである。いっぽう鹿児島県霧島市気色の杜遺跡出土品の事例は、器の内面に言祝ぎの和歌の下句とみられる墨書があり、何らかの儀式作法が想定され饗宴と和歌と墨書土器の関係を窺わせるものである。墨８は、器の内面に整った草仮名が行を揃えて書かれている。和歌かどうか不明であるが、単なる習書ではなく儀式作法に伴うものと思われる。富山県赤田Ⅰ遺跡出土品の事例は、詠歌の場において手近な土器に習書や試し書きをした可能性を示している。

一般的に土器への墨書は外面、内面のいずれにも見られるが、器物の所属を示す場合は内容物に接触しない外面に書かれるのが普通である。また、使用時に見えないところに書く場合があり、今回の出土品でも高杯の脚部の内側に書いたものがある。習書や試筆の場合は、書きやすい外面に記される傾向が強いように思われる。今回の仮名資料についても、試筆、習書とみられるものが多いが、前述のように高杯の脚部と上端杯内面に墨書した墨66は、そのようなものではなく特定の意図をもって書かれたものと想像される。

なお、土器ではなく木簡に草仮名を書いたものも１点出土しており注目される（木17)。字数が判明する片面が７文字であるのは偶然かもしれないが、和歌の句である可能性も想起される。

６．伝世資料との接点

今回の仮名墨書には、いまのところ確実に和歌であると推定できるものは見出されていない。また、高杯脚部の墨66も墨14・墨８も文字数などからみて散文の可能性が高く、当時の仮名使用の状況や環境についての問題を提起している。

現段階で釈読できているもののうち、いくらか文意を窺えるものには次の事例がある。墨14の文字列のうち「…ひとに／くしとお」「はれ…」と解読されている部分について、「人憎しと思はれ」と解する案が出されている。墨66の高杯脚部の文字列には「なかつせ」という部分があり「中津瀬」と解する案がある（以上、第４章１　墨書土器参照)。墨15の仮名は字体も明瞭で「かつらきへ」と解読され、書き様から五文字の句であるとみられる。この文言は神楽歌「朝倉」のうちの一首の初句と一致する。「朝倉」は、平安時代の鍋島本『東遊歌神楽歌』に「此歌、為御前返歌、是延喜廿一年勅定也」と注記があり、延喜年間に宮廷の神楽に加えられたとされる歌謡で、「かつらきへ」を含む一首は、同本の該当部分の紙背に或本からの引用として次のように書き留められている[8)]。

又説　本

安佐久良也　乎女のみなとに　安比支セハ　タマ乃メさしに　あひきあひにけり

（朝倉や　をめの湊に　網引きせば　玉の童女に　網引きあひにけり）

末

カツラキへ　ワタルクメ千乃　ツ支ハシ乃　コヽロ毛しら須　イさカへリなん

（葛城へ　渡る久米路の　継橋の　心も知らず　いざ帰りなむ）

墨15に書かれた句が、この歌謡の句を書いたものかどうかは判断できない。しかし神楽歌はひろく口誦されていた歌謡を含むので、この歌も貴族らに知られていて何かの折に唱われていたことが考えられる。そうした歌の出だしを、手元の土器に書き留めたものである可能性がある。創作ではあるが『うつほ物語』嵯峨の院・菊の宴両巻には、源正頼の西三条邸での神楽の模様が記され、酒宴を伴っていたことが読み取れる。共伴遺物の状況も勘案して検討すべきであるが、藤原良相の西三条邸においても、宴が開かれ歌が唱われたことを想定することもできる。この１点は、仮名墨書群とそれを生み出した場、また文学作品との接点になる可能性のある資料である。

むすびにかえて

今回の仮名墨書土器は、この時期の仮名資料としては文字数が多いにも関わらず、語意・文意が想定しにくく、現段階では個々の文字の解読、意味づけとも十分とは言えない。これは筆者らの能力によるが、古い仮名文の解読に取り組んで同じような経験をした人が平安時代にもいたことは興味深い。藤原定家、為家親子である。文暦二年（1235）、蓮華王院宝蔵にあった紀貫之自筆『土左日記』を目の当たりにし感激して書写した定家は、「不二読得一所々多、只任レ本書也、」と付記している。また、その翌年に同じ貫之自筆本を写した為家も「不二読解一事、少々在レ之」と記している。写真５に見るように、ほぼ整った平仮名であったとみられる貫之の仮名文のなかに、当代一流の文学知識の持ち主である定家らによっても解読できない部分があったということは、字形の解読よりも語意や文意を推定しにくい状況があったことを思わせる。この事象は、平仮名の定着や『古今集』成立の前と後で、字体はもとより和文のありかたにも変化があったことを物語っているのではないだろうか。

前述のように、今回の資料群の出土は万葉仮名から平仮名（女手）への移行が９世紀代に急速に進んだという先学の見通しを裏付けるものとなった。この結果は、なぜその移行がこの時期に起こったのかという問題を提起している。平仮名への移行は、筆記の迅速化、省力化に起因すると考えられ、それは仮名による和文を筆記する頻度が格段に高まったことによって促進されたと推定できる。その要因として考えられるのは、紙の生産増と多用化である。木簡は奈良時代が終わると短期間で使われなくなるが、それは紙の利用が容易になったことによるとみられる。木簡に比べはるかに多くの文字を記すことができ、しかも小さく折畳むことのできる紙が利用しやすくなったことにより、それまで口頭で表現・伝達されていたような情報も、微妙なニュアンスを表現できる仮名の和文で紙に筆記することが一般化したと想像される。紙の多用化に起因するこのような動向が、万葉仮名を利便性のより高い平仮名へ変化させたのであろう。

いまあらためて藤原良相に関する史料をみれば、彼とその一族の文化的素養の高さが特筆されている。その子の直方、忠方がともに才行をもって称され、特に忠方は隷書に巧みであったとい

う。さらに長男の常行は『伊勢物語』（77・78段）に登場し、在原業平と親交があったことをうかがわせている。ちなみに貞観十七年（875）二月十七日に常行が没した際、業平は従二位追贈を伝える勅使として遣わされている（『日本三代実録』）。本資料群は業平と同時代資料であるだけでなく、少なくとも間接的につながっていたと考えてよいであろう。また近年、国風文化についてその国際性が議論されるなどの研究が進んでいる[9)]。本資料とともに輸入陶磁器（図版48の497～511）が出土していることは、その実態を示すものとして貴重な事例となる。今回の資料群は、『古今和歌集』成立前の仮名文字文化を、多方面の要素と関連付けて王朝貴族文化の中に位置付けることのできる基準資料となるものである。

註

1） 『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡－西三条第（百花亭）跡－』　古代文化調査会　2009、『木簡研究』32　15頁。これ以外にも平安京跡から仮名墨書土器が出土している（京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和62年度　1988　図版20ほか）。

2） 小松茂美『かな』岩波新書　1968、森岡隆『図説かなの成り立ち事典』教育出版　2006、築島裕『仮名』日本語の世界５　156頁　中央公論社　1981。「草仮名」の問題および平仮名成立の問題については、矢田勉『国語文学・表記史の研究』（汲古書院　2012）第一編第二章において綿密な検討が行われている。

3） 前掲註２）矢田著書　25頁、築島裕『平安時代語新論』東京大学出版会　1969、279頁。小松英雄「書記テクストの包括的解析　『讃岐国司解端書』を例にして」『日本語書記史原論』第七章（笠間書院　1998、補訂版2000）は、草仮名の問題を含めて極草（本稿でいう平仮名）の成立を、仮名文表記上の機能という面から考察している。

4） 以下の資料の多くは、前掲註２）森岡著書、小松著書、『図説日本書道史』芸術新聞社　1992、『かなの美』京都国立博物館　1994、小林芳規『図説日本の漢字』大修館書店　1998、などに写真が掲載され、各種ホームページに掲載されているものもあるが、個々の関係文献として以下のものがある。

① 築島裕「多賀城跡漆紙文書仮名文書について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報一九九一　多賀城跡』1992。

② 小松英雄「書記テクストの包括的解析　『讃岐国司解端書』を例にして」『日本語書記史原論』第七章（笠間書院　1998、補訂版2000）。東京国立博物館HPの情報アーカイブス画像検索により端書・国解全体の鮮明な写真を見ることができる（画像番号C0035529）。

④『皇室の至宝　東山御文庫御物』3　毎日新聞社　1999。

⑤ 鈴木景二「平安前期の草仮名墨書土器と地方文化－富山県赤田Ⅰ遺跡出土の草仮名墨書土器－」『木簡研究』31　2009。

⑥『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』高岡市教育委員会　2001、川﨑晃「気多大神宮寺木簡と難波津歌木簡について」『古代学論究』慶應義塾大学出版会　2012。

⑧ 山本真吾「平仮名史に於ける斎宮跡出土仮名墨書土器の座標」、小濱学「斎宮跡出土平仮名墨書土器の現状と課題」『斎宮歴史博物館研究紀要』14　2005。

⑨『平安遺文』１－190号　正親町家旧蔵文書。近世の模本であるが、文中に「太氐末つ利之（たてまつりし）」という文言がある。東京大学史料編纂所「所蔵史料目録データベース」に画像がある（「唐招提寺施入田券文写」で検索。第15紙）。

⑪ 藤森健太郎・田中靖・鐘江宏之「新潟県長岡市門新遺跡出土の漆紙文書」『長岡市立科学博物館研究報告』42　2007。

⑫『小作遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告346　2011。

⑭ 藤原為家書写本は、『弘文荘敬愛書図録』Ⅱ　1984、などに部分の写真がある。その写しである青谿書屋本は『東海大学蔵桃園文庫影印叢書』9　所収。川瀬一馬校注『土佐日記』講談社文庫1989参照。

⑮『平安京跡発掘調査概報　京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅱ』1978、藤岡忠美『王朝文学の基層』和泉書院　2011。

⑯ 前掲森岡著書。

⑱ 小林芳規「金剛界入曼荼羅受三昧耶戒行儀」『石山寺資料叢書』史料篇１　法藏館　1996、同『図説日本の漢字』大修館書店　1998年　97頁。

⑲『気色の杜遺跡（大隅国府跡)』霧島市教育委員会　2011。

5）『山野原遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書7　1995、『大宰府条坊跡　第166次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書102　2010、『薩摩国府・国分寺跡』鹿児島県考古学会　1975　第15図、『新潟市的場遺跡』新潟市教育委員会　1993、新名強「『いろは歌』墨書土器に関する覚書」『Mie history』21　2012。この他にも、平安京跡出土のイロハ木簡（『平安京跡発掘調査報告- 左京四条一坊- 』平安京調査会　1975)、平泉出土の仮名について、岡陽一郎ほか「平泉出土文字資料の再検討」その１・その２（『平泉文化研究年報』12　2012・同13　2013)、がある。さらに平安京左京三条二坊九町からも、平仮名いろは歌の墨書土器が出土している。

6）前掲註２）小松著書85頁、築島裕『仮名』日本語の世界５　102頁　中央公論社　1981。

7）宮谷聡美「『かはらけ』に書かれた歌- 『うつほ物語』実忠物語における歌物語の継承と発展- 」『叢書　想像する平安文学』４　勉誠出版　1999、前掲註４）⑮藤岡著書、⑤および⑲所収鈴木論文など。

8）『東遊歌神楽歌』古典保存会　1938、『神楽歌　催馬楽　梁塵秘抄　閑吟集』日本古典文学全集　小学館　1976　98頁。『体源抄』巻12にも記述されている。

9）河添房江『源氏物語と東アジア世界』ＮＨＫブックス　2007。

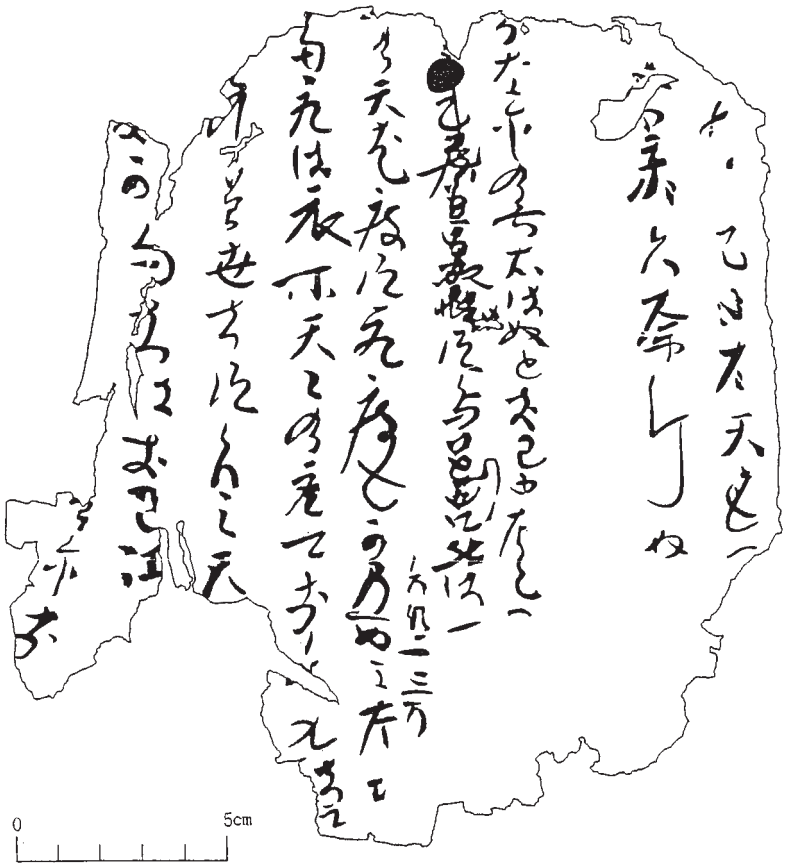


図１　多賀城跡出土仮名漆紙文書トレース図（宮城県多賀城跡調査研究所所蔵、東北歴史博物館の承認を得て転載）

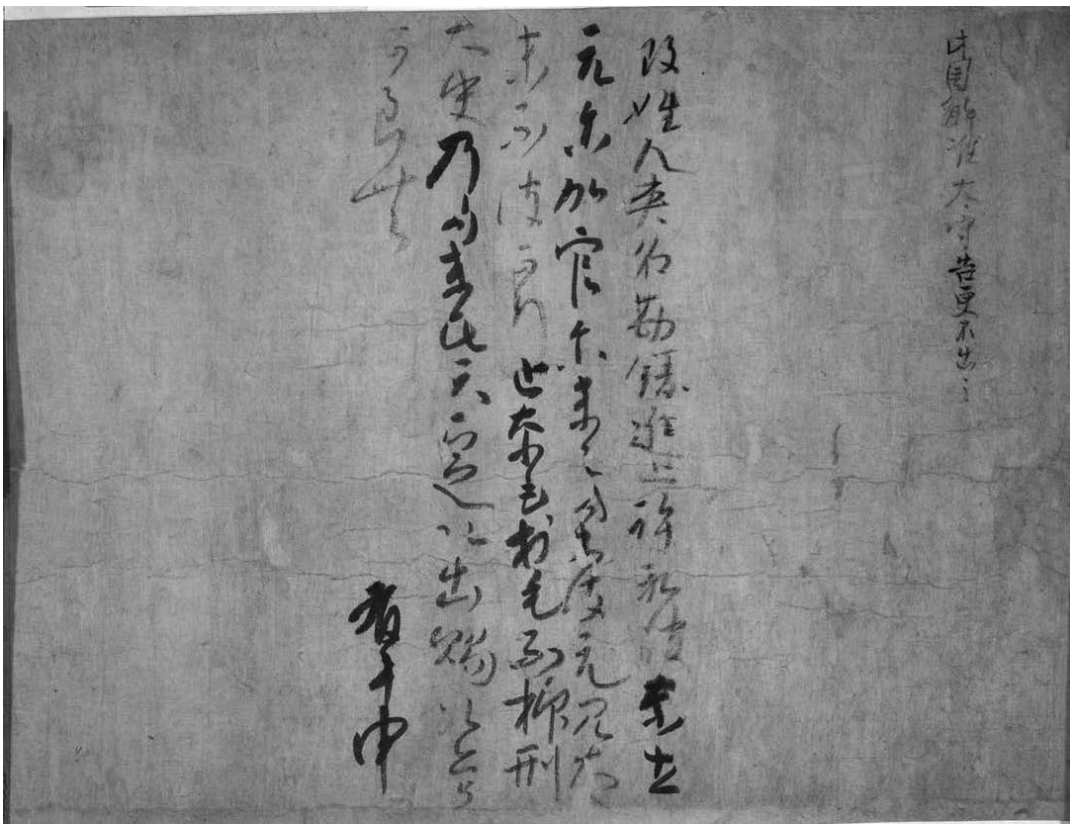


写真１　讃岐国司解端書藤原有年申文（東京国立博物館所蔵）

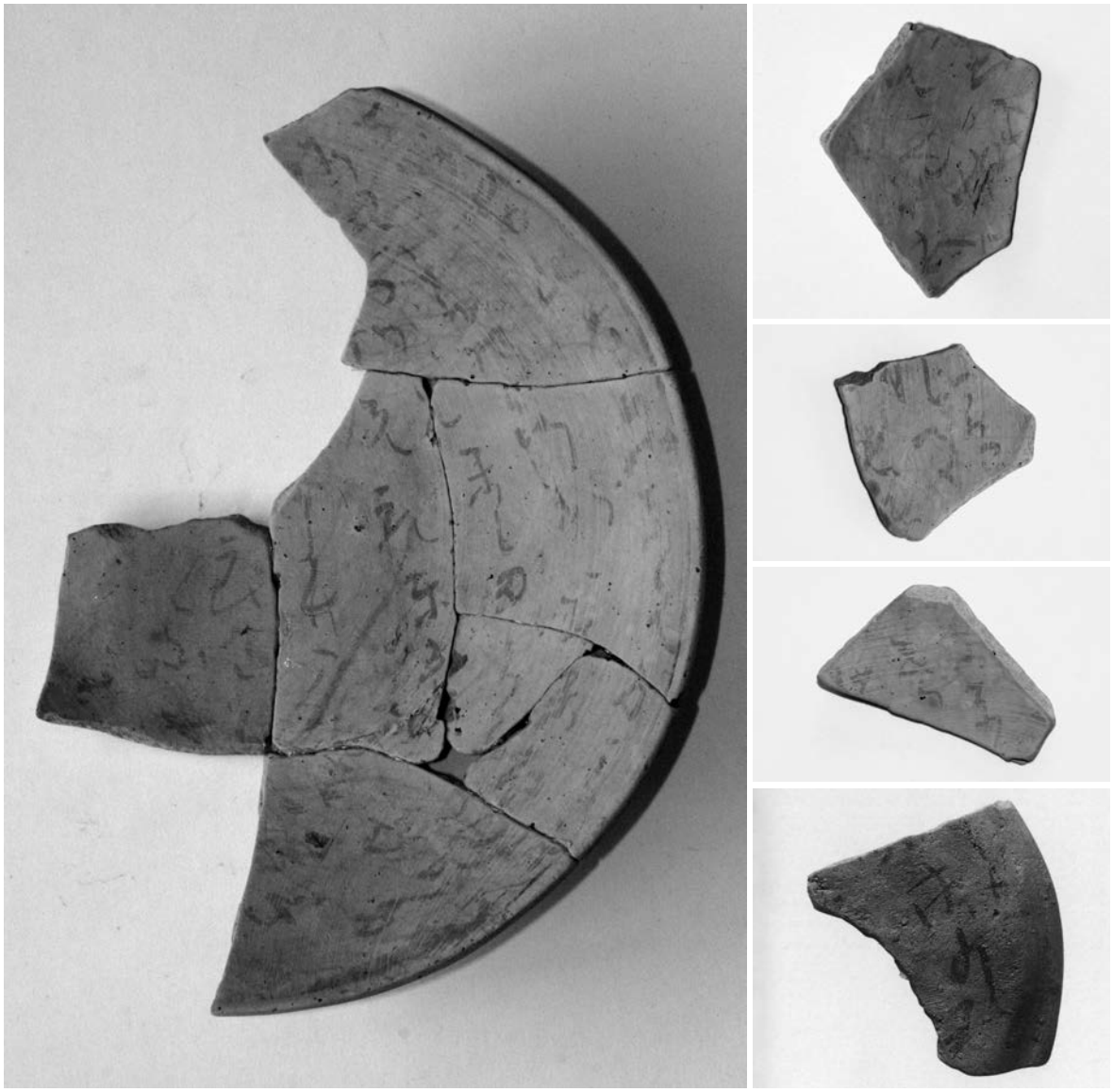


写真２　平安京右京三条一坊六町池出土墨書土器（古代文化調査会提供）

写真３　富山県赤田Ⅰ遺跡出土草仮名墨書土器
（射水市教育委員会所蔵）

写真４　茨城県小作遺跡出土仮名墨書土器
（公益財団法人茨城県教育財団提供）

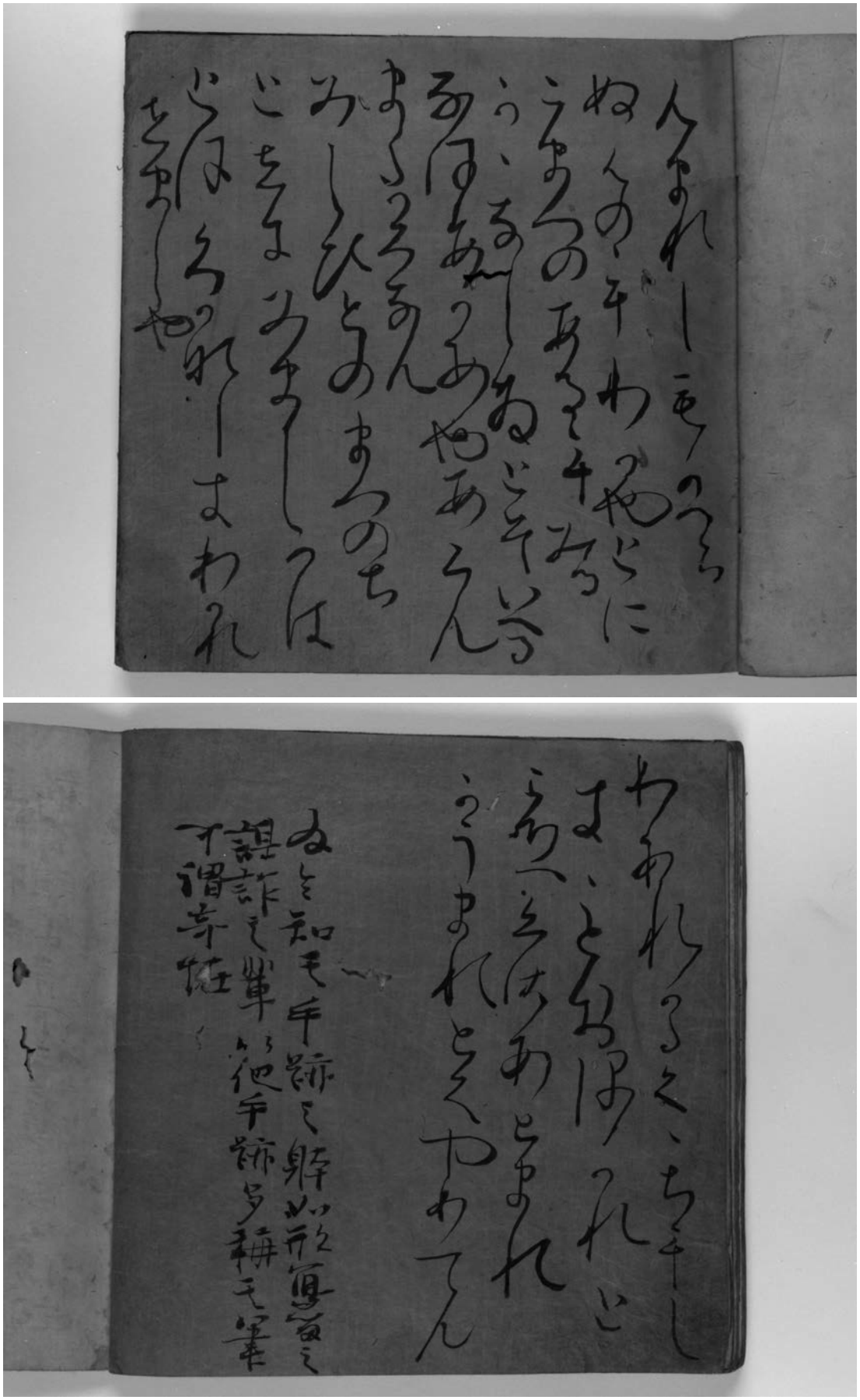


写真５　紀貫之筆土左日記　藤原定家臨模部分（財団法人前田育徳会所蔵）

付章５　平安宮・京出土の仮名墨書土器（図版143）

丸川義広

今回の調査では、仮名文字を記した墨書土器が多数出土したことから、その存在が注目されたが、過去の調査においても少数ではあるが類似資料が出土している。改めて紹介してみる。時期的には池250が所属する９世紀後半以後のものを中心に、以下の６例を提示する。

１　平安京右京一条三坊二町　溝202

10世紀初めの南北小径の東側溝から出土した。土師器皿の内面と外面に仮名が墨書される。外面は５行17字以上あり、草仮名から平仮名への移行期の資料とされる。この土師器皿は、口径13.6㎝、器高1.5㎝あるが、今回池250から出土した土師器皿に比べると明らかに小さい。外面の全面に墨書していた可能性があり、そうすると今回の墨14に類似するかも知れないが、文字は雑な印象をうける。

文献：久世康博「平安京右京一条三坊」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998年　P33。また『第104回京都市考古資料館文化財講座資料』京都市考古資料館　1997年10月　資料４に写真を掲載。

２　平安宮左兵衛府・侍従所間　SD１

左兵衛府・侍従所間の宮内道路西側溝SD１から出土した。土師器杯の内面に細い筆で秀麗な仮名文字が３行墨書されている。内容から、和歌が書かれたことが判明しており、仮名墨書土器の代表例として著名である。釈文は複数提示されている。代表的な釈文は以下である。「いつのまにわすられ　にけん　あふみちはゆめの　　はか　はるうつゝなり」。うち、「乃」「由」「女」などは草書化した漢字が使用されている。SD1出土土器群については、報告では10世紀中頃とされるが、現在ではそれよりもやや古い10世紀前半代と推定されている。

文献：平尾政幸「平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅱ　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1978年　P85。図版88に写真を掲載。『紫式部の生きた京都　つちの中から』ユニプラン　2008年　P13には駒井鷲静・福山敏男・藤岡忠美・石川九楊各氏の釈文が掲載されている。

３　平安宮内裏内郭北西部　SK22

登華殿の東側の調査でSK22とした土坑から11世紀代の土師器皿（小型皿）の外面に算用数字「６５００」と読めそうな墨書があり、その横には太い筆で３行以上の文字列がある。また白色土器三足盤の内面にも墨書があり「の」「ひ」が判読できると報告されている。

文献：丸川義広「平安宮内裏（１）」『平安京跡発掘調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局1988年　P36。図版20に写真を掲載。

４　平安宮内裏北西部

外郭西面築地の西側の調査で多くの遺物が出土した。墨書土器はすべて土師器であるが、大半は意味不明である。

仮名が書かれたとみられるものは、図版27の上列右端の高杯脚部内面、上から２列目の左端の小型皿内面、上から３列目右端の高杯杯部外面の３点である。この他に人物、騎馬、獣などの戯画があり、興味深い資料である。

文献：網　伸也「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年　P16。図版27に写真を掲載。

５　平安京左京三条三坊九町　SX10

江戸時代遺構SX10から出土した須恵器鉢の体部外面に縦に３行の墨書があり、「佐りの」「丹」「の」などが判読できるという。時期は10世紀以降とされる。この土器は鉢として報告されているが、類例が少ない特異な器形である。底部はヘラケズリするが器壁は厚く、当初は壷として製作されたものが途中で口頸を短くしたようにみえる。

文献：大立目　一『平安京左京三条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-15　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年　P28に図と写真を掲載。

６　平安京右京三条一坊六町　池１　（付章４の写真２）

今回の調査地の西側では、2008年に古代文化調査会が調査を実施し、池１とした遺構から墨書土器が多数出土している。その中には仮名文字も含まれている。98とした土師器杯は内面に仮名がびっしり記されているが判読されていない。同じ個体の破片は他に３片確認されている。209とした土師器皿は外面に仮名があり、今回の墨８と書体が類似する。

文献：家崎孝治『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡　－ 西三条第（百花亭）跡- 』古代文化調査会　2009年　図版11・13に写真を掲載。

小結

仮名を記した墨書土器は、平安宮・京内においても点数が少なく、まとまって出土したのは今回が最初であり、この点は特記できる。他地点から出土した資料についても、難解であるため解読は進んでいない。「の」「ひ」などが通有に解読されるが、正解かどうかは、前後の文字が判明していないため、判断できない。

２番目に報告した左兵衛府・侍従所間の溝SD１出土の墨書土器は、書体が抜きんでて秀逸である。達筆な筆使いというのは当然としても、丁寧に文字を書くことが求められたように推測できる。その他の出土資料は、走り書きや詞書きのようで、自由に文字が書かれている。環境面での違いが背後にあったとみておきたい。

付章６　西三条第の占地形態について

佐藤亜聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）

はじめに

今回の調査ではこれまで諸説あった西三条第について、その位置が確定しただけでなく、内部構造を含めた空間利用について検討可能な情報が得られたことが大きな成果であった。しかし同時に新たな課題も生まれている。本章ではそのうち西三条第の占地を中心に検討を行い、平安時代前期大規模宅地のありかたについて予察を述べたい。

１．右京一条三坊六町の土地利用

今回の調査対象となった右京一条三坊六町は、これまで町内北半（7,200㎡）のうち約50％（3,650㎡）が調査されてきた。その結果、「西三条第」として使用された９世紀後半以降には、今回見つかった池250のほかに、これと連結して同時期に存在したと考えられる巨大な池が町内西側にも存在したことが明らかになっている。東側の池250には釣殿と考えられる建物４が、その西側に実態不明ではあるが関連性が考えられる建物３が存在し、さらに東西の池をつなぐ溝43を跨いで建物２・５が存在するほか、望楼と考えられる建物１が存在する。これらは南側の2000年度調査SB02も含めた、西三条第の中心的空間を構成した建物群と考えられる（図版１参照）。

さて、こうした主要建物群に対し、池250から出土した墨書土器には「政所」「膳所」という文字が見られ、多様な家政機関とそれに伴う複雑な雑舎空間の存在が想定できる。また、西側の池からは「齊衡四年三條院正倉帳」と記す題簽が出土していることから、邸宅に伴う正倉の存在も指摘できる。ではこれらの雑舎はどこに存在したのだろうか。まず候補地として考えられるのは六町の南半である。六町南半はこれまでほとんど発掘調査が行われていないが、1988年に六町南西隅にあたる小倉町22で行われた立会調査では（第２章図３-27に該当）、沼状の堆積が確認されている（京都市文化観光局1989）。限定された立会調査のため、西側の池がここまで伸延していたのか造京以前の湿地堆積だったのかを断じることは難しいが、後者であれば伴うはずの整地層について記述がないことを考えると、前者の可能性が高い。仮定を重ねることになるが、そうすると六町西半は大半が池であったとみることができよう。

次に候補地として挙げられるのは、墨書土器や題簽の出土地に近い六町北西部である。しかし、六町北西隅で行われた調査（第２章図３-20に該当）では西面に庇を持つと思われる掘立柱建物が見つかっており（市埋文研2006）、また、北西部は楼と考えられる建物１から借景としての愛宕山を望むラインにかかるため、雑舎が集中する空間を設けることは考えにくい。残る可能性は六町南東部であるが、2000年度調査SB02は主殿とするには規模が小さく[1)]、庇も持たないことから、主殿はSB02よりもさらに南に展開していたと考えられる。そうすると六町内に雑舎が入る可能性があるのはもはや南東隅のわずかな空間しかなく、ここに正倉を含む多様な雑舎を押し込める余地があるのか、疑問を禁じ得ない。

２．平安京内１町占地邸宅における雑舎空間

前節において右京三条一坊六町内に雑舎が入る空間が確保できない可能性を考えた。では平安京内において実際に雑舎空間が見つかっている、もしくは雑舎空間の推定が可能な１町占地邸宅における雑舎空間の占有率について検討してみよう。

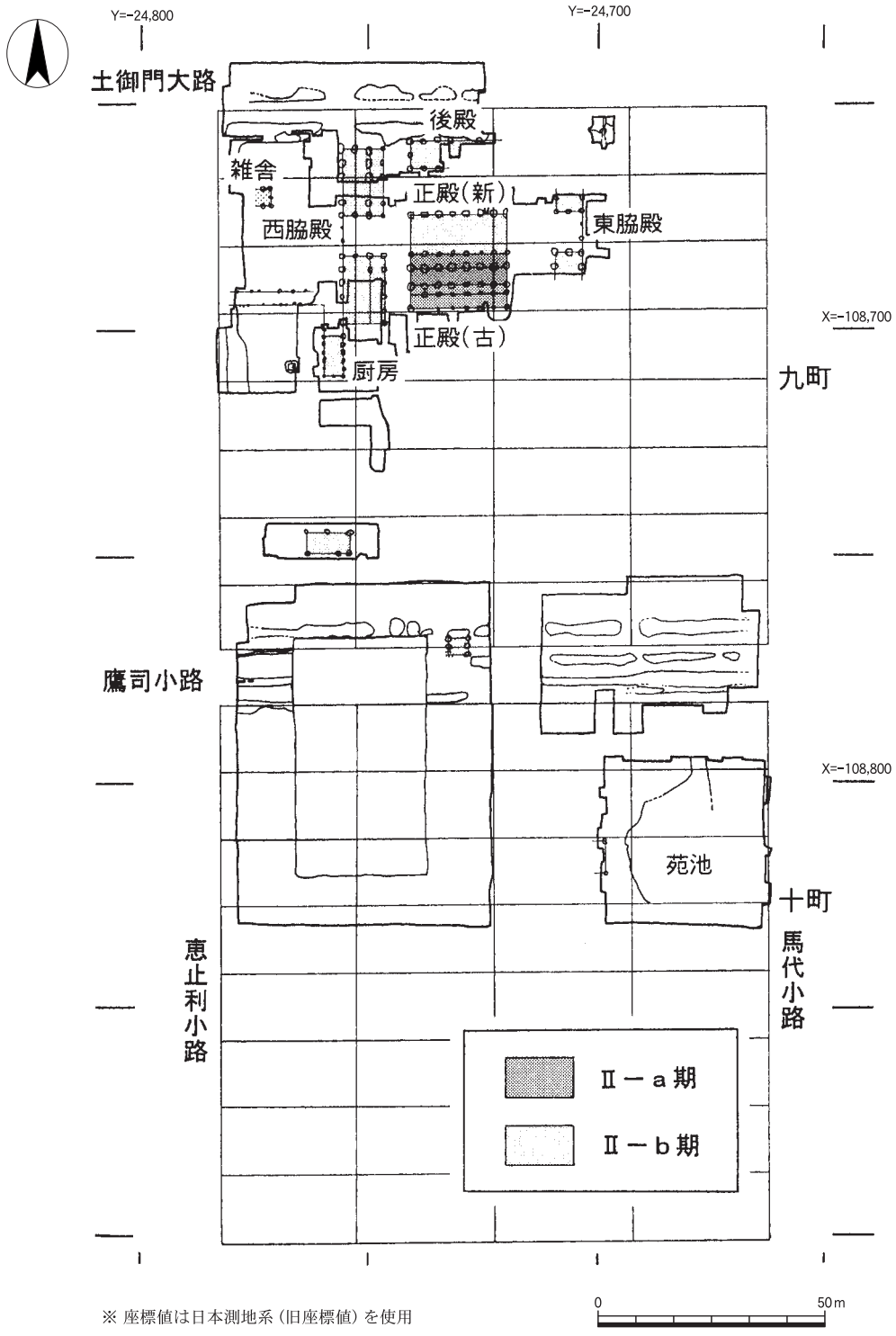


図１　右京一条三坊九町遺構配置図（１：1,500、京都府埋文センター2006を一部改変）

・右京一条三坊九町（図１）

現京都府立山城高等学校敷地内にあたり、1979年以降10次にわたる調査が行われている。南北に庇を持つ東西棟を主殿として、東西に４棟の脇殿を持つ平安時代初期の建物群が検出されている（京都府教育委員会1981ほか)。平城京型の重郭構造を持ち、柵列によって区画された東西部分と、南北を分ける区画施設（築地？）以南の部分に雑舎が配置されると思われる。推定内門以南の状況が不明確だが、以北の主要施設配置部分でも雑舎空間は約40％の面積比を占める。

・右京六条一坊五町（図２）

１町占地宅地の３/４が調査され、平安時代初期の大規模宅地が明らかになっている（京都市埋

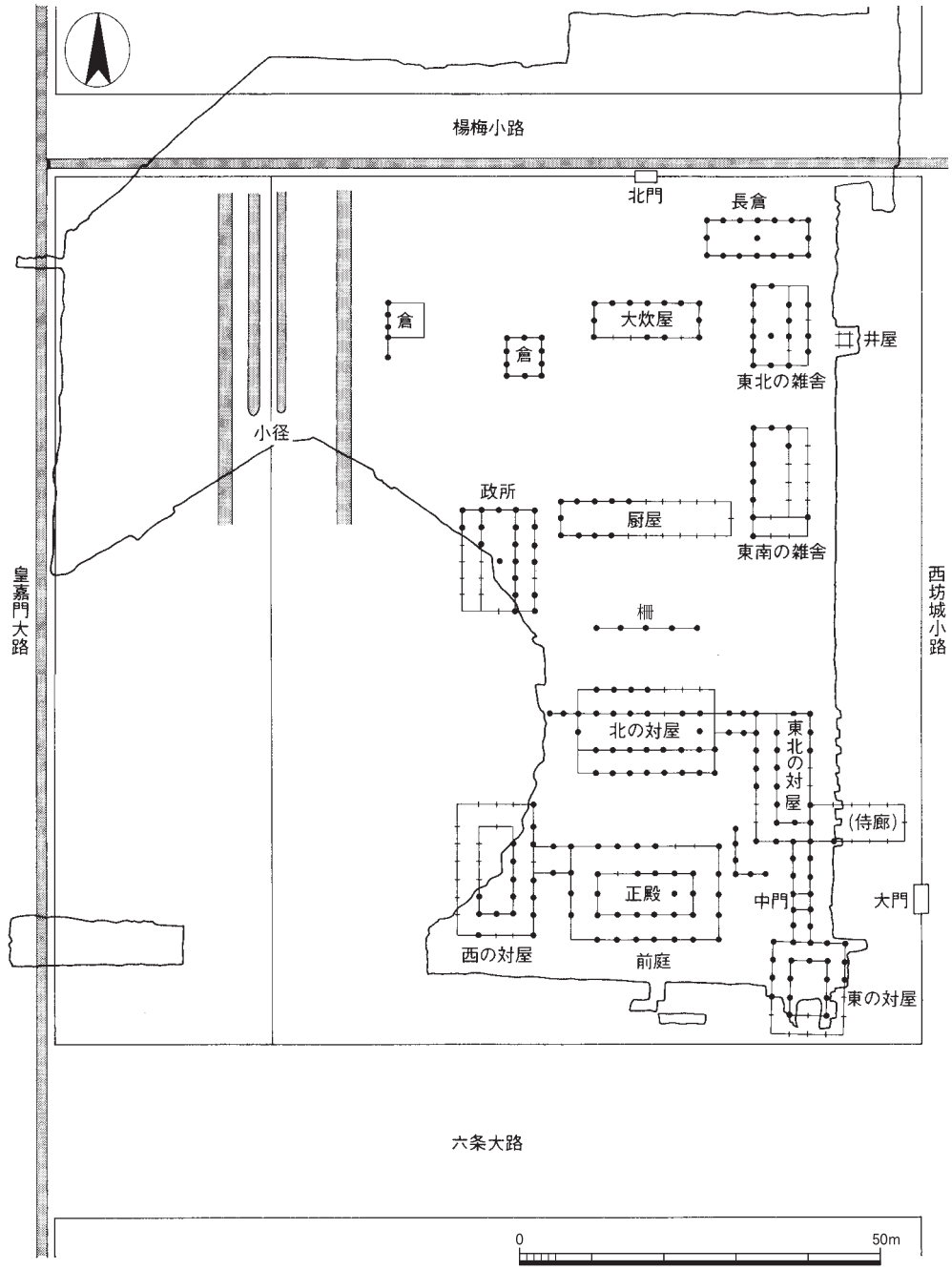


図２　右京六条一坊五町遺構配置図（１：1,000、京都市埋文研1992から作成）

文研1992)。主殿は東西棟を中心に東西に南北棟を配し、これらを回廊でつなぐという「プレ寝殿造」（丸川2012）的配置を持つ。主殿の北側にはやや規模の小さな掘立柱建物群が配され、梅川光隆氏はこれらの建物群に「倉」「政所」「長倉」「大炊屋」「厨屋」「東北の雑舎」「東南の雑舎」を復元している（京都市埋文研1992)。敷地面積に占める雑舎空間の割合は約50%を占める。

右京三条二坊十六町（図３）

伊勢斎王の邸宅を意味する「斎宮」墨書土器が出土したことから邸宅所有者が判明した貴重な

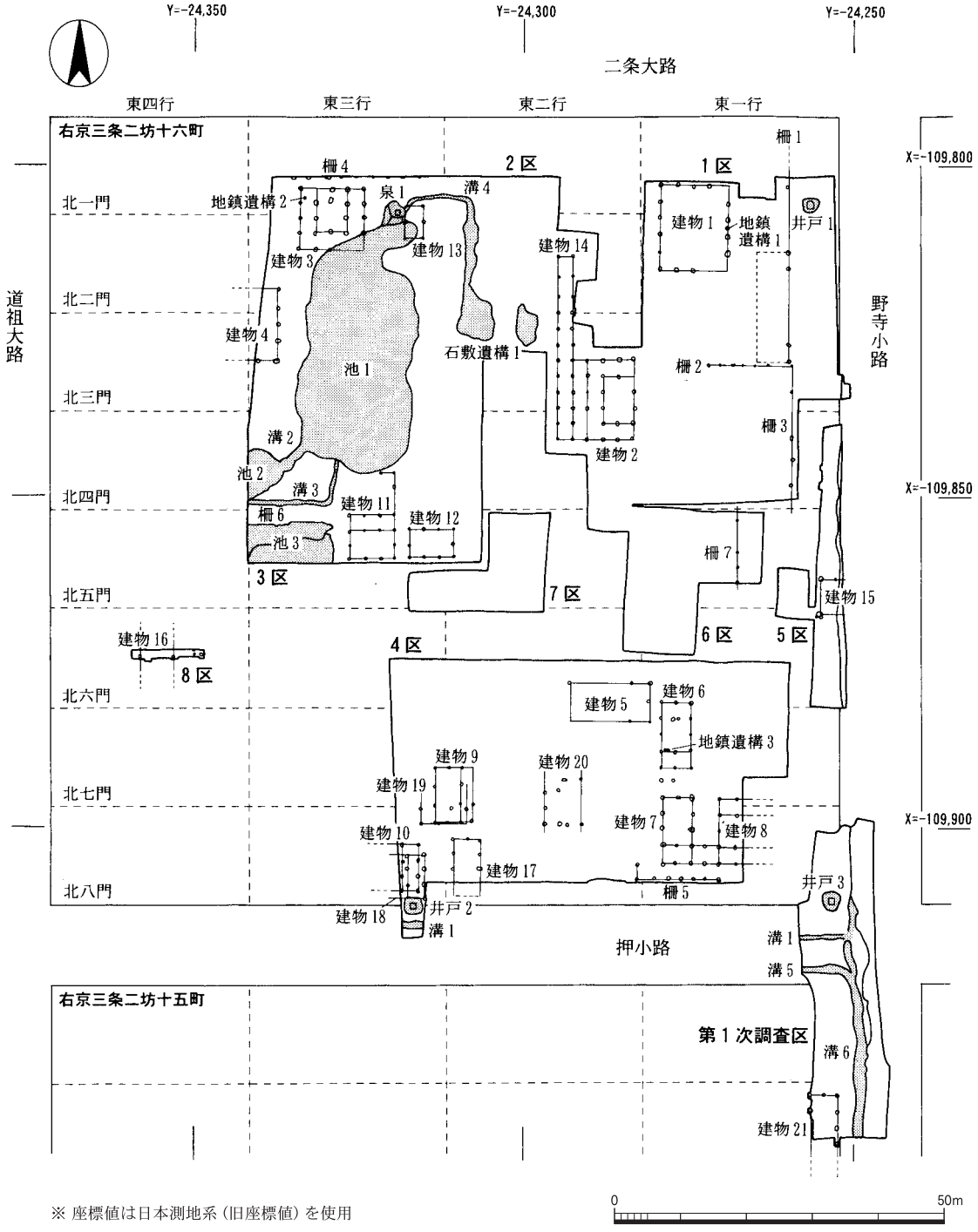


図３　右京三条二坊十六町遺構配置図（１：1,000、京都市埋文研2002を一部改変）

例である（京都市埋文研2002）。１町占地を有し、中央やや北寄りおよび西寄りにそれぞれ池を配し、北東部に主殿と考えられる大型建物を、南半には中・小規模の掘立柱建物群を配する。建物の地鎮関連資料から、10世紀初頭の整備が判明している。南半の掘立柱建物群が雑舎に相当するものと考えられる。雑舎空間の正確な占有率はわからないが、建物配置から南３行分（約40%程度）を雑舎が占めていたと考えられている（藤田2012）

以上、平安京内で１町占地邸宅内部における雑舎空間の占有率を見てきた。事例は少ないものの、いずれの事例も敷地面積の40～50%を雑舎空間が占めている。こうした事実からも、やはり右京三条一坊六町南東部の狭い空間に雑舎空間を押し込めることは困難と言わざるを得ない。

３．西三条第の位置比定と雑舎空間

前節までに右京三条一坊六町における池の範囲と主殿域の推定を行い、雑舎の占有し得る面積が著しく狭いことを確認した。さらに、同時期の平安京内１町占地邸宅における雑舎の占有面積率が40～50%であったことを示し、右京三条一坊六町内部に雑舎が存在する可能性を否定した。

ここで原点にかえり文献史料における西三条第の位置記述について確認しておきたい。西三条第の位置に関する記述は『二中歴』（「朱雀西　三条北」）『今昔物語』（「西ノ大宮ヨリハ東　三条ヨリハ北」）『拾芥抄』『帝王編年記』（「朱雀院西（朱雀西カ）三条北」）『中古京師内外地図』（「朱雀西　三条北　壬生東」）『山城名勝志』（「拾芥抄云　三条ノ北　朱雀ノ西　壬生ノ東」）『古本説話集』（「西の大宮よりは東　三条より北なり」）『真言伝』（「西ノ大宮ヨリ東三条ノ北ナル所ヘ」）などに見られる[2)]。

文献史料は比較的多く残されているが、これらを元にした西三条第の位置推定は栗原弘氏や西山良平氏の研究を除きこれまでほとんど行われていない。栗原弘氏は『拾芥抄「西京図」』の記述だけが孤立していることをもとにこれを誤りとし、『古本説話集』の十三町記述以外の史料が示す四・五町を候補として挙げる（栗原1994）。これに対し西山良平氏は大路で限定する表記は西京の名家に特徴的な記述方法で信憑性は低いとし、『拾芥抄「西京図」』の右京三条一坊六町を候補地にあげる（西山2012）。

このように従前の説では『拾芥抄「西京図」』の六町説と『二中歴』ほかの四・五町説が存在していた。今回の調査によって六町こそが西三条第であることが明らかとなり、問題は解決したかに見える。しかし、ではなぜ『拾芥抄「西京図」』以外のすべての史料が六町以外の場所を比定していたのか、また、同じ『拾芥抄』内においても本文中には「三条北朱雀西」と、『二中歴』と同様の記述が存在したのだろうかという疑問が残る。確かに『二中歴』ほかは西山氏が指摘するように大路で限定して、町までを表記する意図を持っていなかっただけかもしれない。しかし後世の史料とはいえ『中古京師内外地図』には「三条北壬生東」の表記もあり、西三条の位置比定には解釈の難しい混乱が見られる。この混乱の原因は何処にあったのだろうか。そこで今一度『拾芥抄

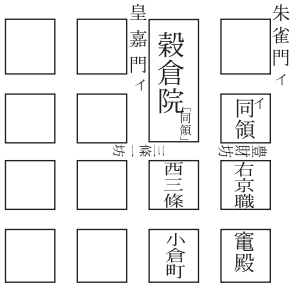


図４　拾芥抄「西京図」

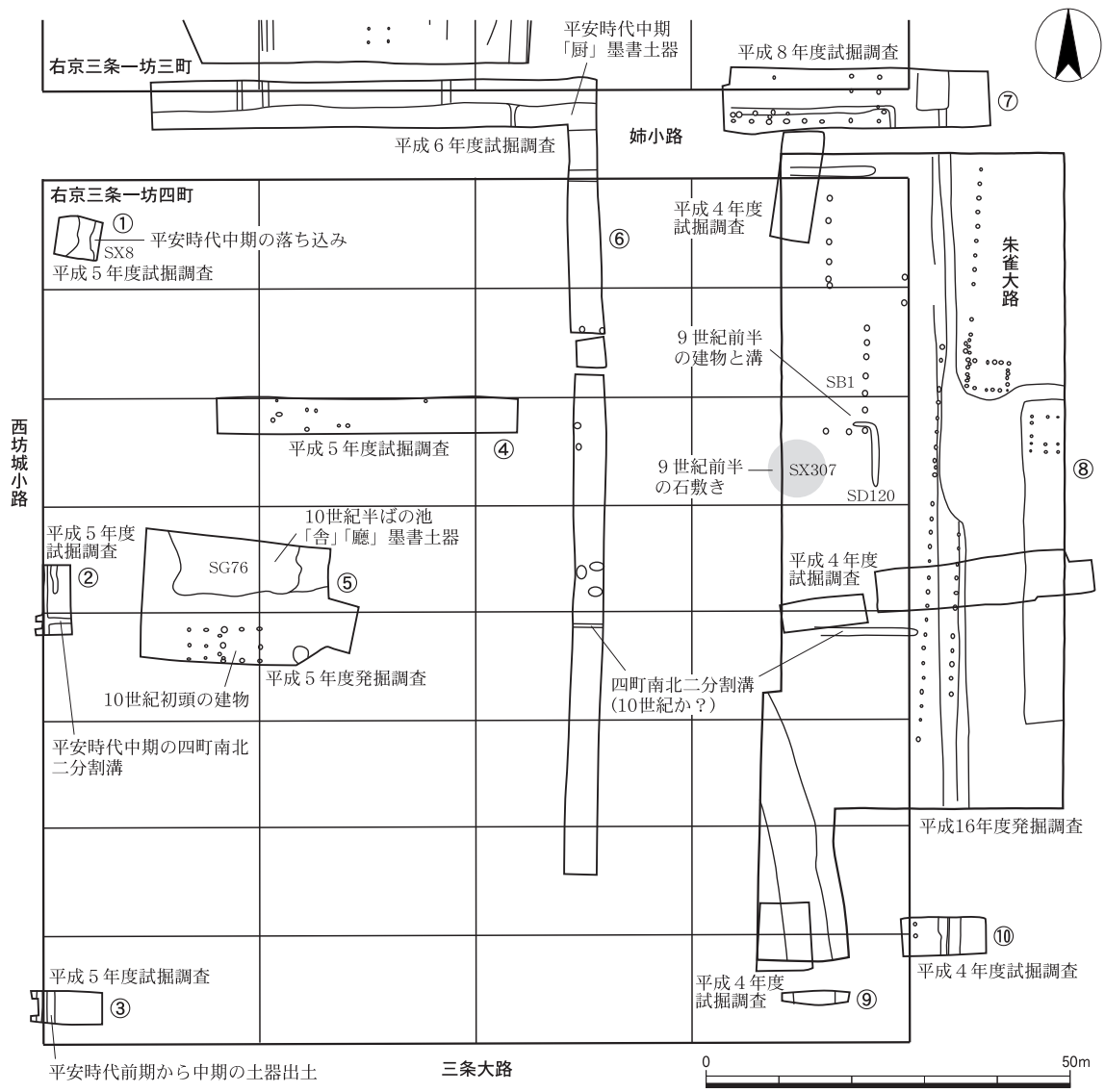


図５　右京三条一坊四町における発掘調査（１：1,000、京都市埋文研2005をもとに作成）

「西京図」』に立ち戻ってみたい。

『拾芥抄「西京図」』には六町に「西三條」と記載され、北に「穀倉院」、東に「右京職」が見られる（図４）。今回判明した「西三條」だけでなく、1998年に「右京職」推定地で行われた発掘調査では右京職の存在を示す「右籍所」「籍所」「計帳所」「人給」と書かれた墨書土器が出土し、今回の調査と合わせて『拾芥抄「西京図」』の信憑性が確かめられている（京都市埋文研1999）。ここで注目したいのは四町、五町にそれぞれ「竈殿」「小倉町」の記述がある事である。結論から述べると、筆者はこの「小倉町」が六町に収まりきれなかった「三条院正倉」が配置された御蔵町、「竈殿」が同じく「膳所」「政所」が配置された場所ではないかと考えている[3)]。『拾芥抄「西京図」』には平安時代前期から鎌倉期までの情報が記載されている。御蔵町の成立は平安時代後期頃からと考えられてきたことから、「小倉町」の表記は平安時代前期のものではないと考えることもできる。しかし、六町周辺では後述する四町も含めて11・12世紀の遺構は条坊道路側溝以外ほとんど見られず、平安時代後期に御蔵町が展開した可能性は低い。鎌倉期以前に御蔵町が展開する可能

性があるのは当地が居住空間として機能していた平安時代前～中期の短い期間しか考えられないのである[4]。また六町に収まらなかった「三條院正倉」が遠く離れた場所に所在した可能性も考えにくい。

ではこうした可能性を発掘調査から考えることはできないだろうか。残念ながら「小倉町」と記載された五町については発掘調査が行われておらず、実態を考古学的に明らかにすることはできないが、「竈殿」と記載されている四町は平成４年度以降15箇所が調査されている（うち４箇所は本調査と重複する試掘調査）。簡潔な報告が多く、実態を把握しにくいが、概ね９世紀前半から中世の遺構変遷が把握できる（京都市埋文研1996a･b）。

遷都直後の９世紀前半の遺構には平成16年度調査（図５-⑧）でみつかった建物もしくは柵列（SB１）と溝（SD120）、性格不明の石敷き遺構（SX307）がある。土地利用の実態は不明であるが、石敷き遺構（SX307）は園池の可能性も指摘されており、邸宅として使用されていた可能性が考えられる。その後９世紀半ば～末までの遺構はみられない。大きな画期は10世紀である。四町内を南北に二分する東西溝が設けられ、北側には湿地状の自然地形を利用した池（平成５年度発掘調査⑤、SG76）が掘削、南側には掘立柱建物が建てられる。北西隅でも当該期の落ち込みが確認されており（平成５年度試掘調査①、SX８）、10世紀にはいると四町では半町以下の規模の宅地が展開するようである。

これら発掘調査事例からは、四町が西三条第の栄えた９世紀後半を中心とした時期に宅地としての利用を停止していたことを指摘できる。10世紀に降る遺構からであるが、平成５年度発掘調査⑤では「舎」「廳」と墨書した緑釉陶器、灰釉陶器が、平成６年度試掘調査⑥では「厨」の墨書土器が出土しているなど、当地の雑舎的性格の一端をうかがわせる[5]。

４．西三条第の占地形態

以上のように、今回明らかになった右京三条一坊四町の西三条第は、池の面積と主殿空間の規模推定から六町内に雑舎が入りきらないものであった可能性が高い。そして『拾芥抄「西京図」』には、四町に「竈町」五町に「小倉町」の記載があるが、発掘調査が行われている四町では平安時代中期以降にまとまった遺構の展開がみられないことから、これらの表記が平安時代前・中期の土地利用を示したものと判断できる。また四町における発掘調査成果をみると、９世紀前半に一時的に宅地利用の痕跡が見られるものの、本格的に宅地が展開するのは10世紀以降であり、六町における西三条第主殿の衰退直後に四町内部が半町以下の宅地として宅地化することが判明した。これらの点を総合的に勘案した結果、西三条第は右京三条一坊六町に主殿空間を、四・五町に「膳所」「政所」「正倉」といった雑舎を配置する複数町占地の邸宅であった可能性を指摘したい[6]。先に確認したように文献史料にみる西三条第の位置表記には右京三条一坊四・五・六町に候補地が散在し混乱が見られたが、その原因は雑舎空間を含めた四・五・六町すべてが西三条第として扱われていたことに起因したのではないだろうか[7]。

おわりに

本稿では西三条第の占地について考察を行い、六町に主殿、五町に御蔵町、四町に家政機関を置く複数町占地を想定した。さらに文献史料にみられる位置の混乱はこの複数町占地形態に起因することを指摘した。平安京の宅地班給基準では右大臣は１町占地が基準であり[8)]、主殿域以外は買得によって得たものと考えられる。平城京における複数坪占地邸宅では長屋王邸に見られるように班給による占地の拡大縮小に伴い条坊道路の廃絶・復興が行われる。平安京の場合も道路を迂回させた小六条殿のような場合（京都市埋文研1992）や高陽院のように遷都当初から複数町占地計画を持つ離宮（網2007）には道路を敷設しないもしくは廃絶させる事例がみられるが、一般貴族が買得によって宅地を拡大した場合、相伝に際し分割や分譲の可能性が内包されていることから道路を残したまま複数町を宅地として利用していた可能性もある。実際、四町で平成５年に行われた試掘調査（図５-③）では西坊城小路東側溝もしくは築地雨落溝と考えられる溝から平安時代前期から後期の遺物が出土しているが（京都市埋文研1996a）、こうした条坊道路の扱いは宅地伝領の問題とも関係することから、今後の重要な課題と考える。

今回推定した西三条第の占地形態は平城京型重郭構造から平安京型寝殿造り構造への過渡期的な形態と言えるのか、平安京における宅地形態の一類型と位置付けられるのか、なお検討と検証が必要である。残念ながら六町南半と五町の発掘調査が行われていない現状では情報不足の感が否めない。今回の推定の是非も含め、今後の発掘調査の進展に期待する部分が多い。

註

１） SB02の建物面積は65㎡だが、同じ１町規模の邸宅である右京六条一坊五町の主殿は建物面積約260㎡、右京一条三坊九町の主殿は七間二面庇の245㎡を測る。

２） 栗原1994より引用。

３） この考えは網伸也氏が現地調査の際に提唱され、丸川義広氏と筆者を交えて三者で議論したものである。ただし分析過程は筆者の責にあり、網氏、丸川氏の意図と異なる部分があればそれは全て筆者の責であることを明記しておきたい。

４） 嘉穂二年（1095）の財産処分状（平安遺文1338）には大江公仲の没官財として「西三條地壱町在右京三条一坊六町、建三間四面屋一宇」と記されており、屋地があったことが記されている。六町西半の池状遺構は平安時代後期に改変を受けており、あるいは公仲の屋敷と関係するかもしれないが、調査の結果からは当該期の屋敷遺構は見つかっていない。

５） ただし「厨」墨書土器については出土地点が姉小路北側溝でもあり、右京職に伴うものである可能性がある。

６） 『源氏物語』に登場する六条院は４町占地のうち西側にあった「冬の町」が御蔵町であったとされるが（浅尾2007）、西三条第もこうした光景に近いものであったといえる。ただし西三条第は六条院にくらべ町毎の機能分化が明確にみえる。

７） この点について栗原弘氏は、西三条第の位置を「朱雀西三条北」であることから四町もしくは五町

であるとし、「位置の伝承が混乱した原因の一つとして、同第が、東西もしくは南北にわたる大邸宅であったことに起因する、とも考えられるであろう」と指摘している（栗原1994）。

8）　『続日本紀』天平六年九月辛未条にある難波京宅地班給基準に則ると考えられる。

参考・引用文献

浅尾広良2007「『源氏物語』の邸宅と六条院復元の論争点」『王朝文学と建築・庭園』竹林舎

網　伸也2007「賀陽親王邸宅・初期高陽院」『古代庭園に関する研究会（平成19年度）資料集− 平安時代前期庭園の遺構と貴族邸宅− 』奈良文化財研究所

京都市文化観光局1989『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』　P51

京都府教育委員会1981『平安京（右京一条三坊九・十町）昭和55年度　発掘調査概要』ほか

栗原　弘1994『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』高科書店

(財)京都市埋蔵文化財研究所1992『平安京右京六条一坊　− 平安時代前期邸宅跡の調査− 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊

(財)京都市埋蔵文化財研究所1996a『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　P36、P105

(財)京都市埋蔵文化財研究所1996b『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　P41

(財)京都市埋蔵文化財研究所1999『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　P102

(財)京都市埋蔵文化財研究所2002『平安京右京三条二坊十五・十六町　−「齊宮」の邸宅跡− 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊

(財)京都市埋蔵文化財研究所2005『平安京右京三条一坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-16

(財)京都市埋蔵文化財研究所2006『平安京右京三条一坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-13

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2006『京都府埋蔵文化財論集　第５集　− 創立二十五周年記念誌− 』　P63

西山良平2007「平安京の住まいの論点」『平安京の住まい』京都大学学術出版会

西山良平2012「平安京と貴族の住まいの論点」『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会

藤田勝也2012「寝殿造と斎王邸跡」『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会

丸川義広2012「里内裏の庭園遺構」『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会

観察表１　墨書土器一覧表（巻頭図版５～15、図版24～32・92～99）

（L-はH=34.20mからの値）

番号	遺構名・層序・地区（A34）		器種・器形	部位と調整
墨１	池250 第3層	FC	土師器　杯	体部・底部の内面・外面に墨書「月」「坏」「筧」「處」など。口径15.0㎝、器高2.2㎝。
墨２	池250 第3層（L-141㎝）	DB東	土師器　杯	体部・底部内面・外面に文字多数あるが摩滅して読みづらい。外面は凹凸あり、内面底部はハケメがつく。口径13.8㎝、器高2.5㎝。
墨３	池250 第3層（L-141㎝）	EC西	土師器　杯	底部外面に仮名多数墨書。４行以上。外面には押圧痕跡が残る。口径14.0㎝、器高2.3㎝。
墨４	池250 第3層（L-140㎝）	FB東	土師器　杯	体部・底部外面に墨書。内面にも墨書。外面に爪の圧痕が付く。口径14.0㎝、器高2.6㎝。
墨５	池250 東西セクション 第3層	FC南	土師器　杯	体部外面に墨書。体部はやや深い。
墨６	池250 第3層（L-140㎝）	FB東	土師器　杯	体部外面に墨書「な」。内面に墨痕。
墨７	池250 第3層（L-154㎝）	GC西	土師器　杯	体部内面に多数墨書。４列以上にわたる。口縁は歪みが大きい。口径16.0㎝、器高3.4㎝。
墨８	池250 第3層（L-142㎝）	EB東.EC西	土師器　杯	体部内面に仮名多数墨書。体部はやや深い。外面には凹凸がある。口径14.0㎝、器高2.8㎝。
墨９	池250 西肩 第2層（L-102㎝）	GB.HB	土師器　杯	体部内面に墨書。
墨10	池250 第3層	HC西	土師器　杯	体部内面に墨書。
墨11	池250 第3層（L-140㎝）	FB東	土師器　皿	体部の内面・外面に仮名多数墨書。口径12.8㎝、器高1.4㎝。
墨12	池250 第2層	HC南	土師器　皿	体部の外面に仮名多数墨書。内面に墨痕。口径16.2㎝、器高2.1㎝。
墨13	池250 第3層（L-143㎝）	FE西	土師器　皿	底部内面に花弁文様。外面にも墨痕。口径13.8㎝、器高1.8㎝。
墨14	池250 第2層（L-120～130㎝）	GC西	土師器　皿	外面全面に仮名多数墨書。９行以上。口径13.3㎝、器高1.7㎝。
墨15	池250 南北セクション 第3層	GC	土師器　皿	体部外面に墨書「かつらきへ」。口径12.0㎝、器高1.3㎝。
墨16	池250 第3層	GC西	土師器　皿	体部外面に仮名墨書。口径13.6㎝、器高1.6㎝。
墨17	池250 第3層（L-156㎝）	FC西	土師器　杯	体部外面に墨書。
墨18	池250 第3層（L-140㎝）	FB東	土師器　杯	体部外面に墨痕。
墨19	池250 第3層（L-158㎝）	GC西	土師器　杯	体部外面に墨痕。
墨20	池250 第3層	FD 西	土師器　杯	体部内面に墨痕。
墨21	池250 第3層（L-135㎝）	HC南	土師器　杯	体部外面に墨書。
墨23	池250 第2層（L-123㎝）	GE	土師器　杯	体部外面に仮名墨書。
墨24	池250 第3層	FD東	土師器　皿	体部外面に仮名墨書。口縁端部は厚く、内湾する。
墨26	池250 第3層（L-131㎝）	HC東	土師器　杯	体部外面に墨書。内面に墨痕。
墨27	池250 第3層（L-140㎝）	FB東	土師器　杯	体部外面に墨書「町口」。
墨28	池250 西肩 第2層（L-129㎝）	EB	土師器　杯	体部外面に仮名墨書。
墨29	池250 第2層	FB東	土師器　杯	底部外面に仮名墨書。
墨30	池250 第2層（L-133㎝）	EC西	土師器　杯	体部外面に仮名墨書。
墨31	池250 西肩 第2層（L-124㎝）	GB東	土師器　杯or皿	底部外面に墨痕。
墨33	池250 南北セクション第2層	FC	土師器　杯or皿	体部外面に墨書。
墨34	池250 第2層（L-133㎝）	EC西	土師器　杯or皿	底部外面に墨痕。
墨35	池250 第3層（L-140㎝）	FD西	土師器　杯or皿	底部外面に墨書。
墨36	池250 第2層（L-133㎝）	EC西	土師器　杯or皿	底部外面に仮名墨書。
墨37	池250 第3層（L-159㎝）	GC東	土師器　杯or皿	底部外面に墨書。
墨38	池250 東西セクション 第2層	FB.GB	土師器　杯or皿	底部外面に墨書。
墨39	池250 第2層上（L-133㎝）	EB東	土師器　杯or皿	底部外面に墨書。

※ 墨22・25・32は欠番

番号	遺構名・層序・地区(A34)		器種・器形	部位と調整
墨40	池250 西肩 第2層（L-102cm）	GB.HB	土師器　杯or皿	体部内面・外面に墨書。
墨41	池250 底部	FB.FC	土師器　杯	体部の内面・外面に墨痕。内面は草本状。
墨42	池250 第3層（L-135cm）	HC南	土師器　杯	底部の内面・外面に墨書。内面は「大」「鴈」「夫」。外面は「夫」「天」「飯」など。墨痕は黒く鮮やか。
墨43	池250 第3層（L-145cm）	EC西	土師器　杯	体部内面に墨書「雑離」。
墨44	池250 第3層（L-132cm）	DC西	土師器　皿	体部内面に墨痕。
墨46	池250 第3層（L-140cm）	FD西	土師器　杯	体部内面に墨痕。
墨47	池250 第3層	FD西	土師器　杯	体部内面に墨痕。
墨50	池250 北肩 第1層（L-94cm）	DB南	土師器　杯or皿	底部内面に墨痕。
墨51	池250 東西セクション 第2層	HC.IC	土師器　杯or皿	底部内面に墨書。
墨52	池250 第3層（L-145cm）	EC西	土師器　杯or皿	底部内面に墨書。
墨53	池250 第3層（L-132cm）	DC西	土師器　杯or皿	底部内面に墨書。
墨55	池250 第2層	HC南	土師器　高杯	杯部外面に墨痕。
墨56	池250 第2・3層（L-143cm）	GC西	土師器　高杯	杯部外面に墨痕。
墨57	池250 北肩 第1層（L-94cm）	DB南	土師器　高杯	杯部外面に墨痕。
墨58	池250 第2層	HC南	土師器　高杯	杯部外面に墨痕。
墨59	池250 第3層（L-132cm）	DC西	土師器　高杯	脚部外面に墨書。
墨60	池250 第2層（L-147cm）	ID	土師器　高杯	脚部内面に仮名墨書。
墨61	池250 南北セクション 第2層	GC	土師器　高杯	脚部外面に墨書。縦線が２本。粘土継目が残る。裾部径16.0cm。
墨62	池250 第3層	FB東	土師器　高杯	脚部内面に墨書「膳所」。
墨63	池250（L-95cm）	DB南	土師器　高杯	脚部内面に墨書。ミニチュア製品。裾部径8.6cm。
墨64	池250 第2層（L-138cm）	GC西	土師器　高杯	杯部内面に墨書「三条院鈎（釣）殿高坏」。外面にも墨書。口縁部をヨコナデ調整し、外から中心にヘラケズリする。外面に粘土継目あり。内面には油煙がつく。口径26.3cm。
墨65	池250 第3層（L-147cm）	GC西	土師器　高杯	脚部に墨書「政所」。反対側にも墨書「政所」。杯部外面のヨコナデは幅が広く、ヘラケズリは雑。内面は粗いハケを多方向に施す。脚部は７角形に面取り。口径25.8cm。残存高19.0cm。
墨66	池250 第3層（L-135cm）	HC西	土師器　高杯	杯部の内面中央と八角形の脚部全面に細かい文字がびっしり墨書される。残存高6.2cm。
墨67	池250 第1層（L-87cm）	IC	土師器　高杯	杯部内面に細かい文字。墨66と同一個体とみられる。
墨68	池250 第3層（L-125cm）	EB東	黒色土器　椀	底部外面に墨書「は」。外面はヘラケズリ。内面はヨコ方向のヘラミガキで上に暗文。内面底部は一方向にヘラミガキ。口径17.0cm、器高4.9cm、高台径9.7cm。
墨69	池250 東西セクション第3層	DB.EB	黒色土器　椀	底部外面に墨痕。
墨70	池250 第3層（L-156cm）	FC西	須恵器　鉢	底部外面に墨書。
墨71	池250 第3層（L-124cm）	EB東	須恵器　壺	内面、下方向から上に墨書「　月　兵　兵　兵　兵」。外面は釉が垂下する。底部付近はヘラケズリ。破片の状態で硯として使用したため、文字は墨縁で習書したようにみえる。高台は平坦。高台径8.35cm。
墨72	池250 第3層	FB東	緑釉陶器　椀	底部外面に墨書「四条」。口縁端部は外反する。底部は無釉で糸切り跡が残る。口径8.4cm、器高3.4cm。山城産。
墨73	池250 西肩	EB北	灰釉陶器　椀	底部外面に墨書「内」。底部はヘラ切りのまま。高台径7.4cm。猿投産。
墨74	池250 第2層	EC	灰釉陶器　皿	底部の内面に墨書「庄」。外面にも墨書「庄」。体部は開きが小さく、高台は大きい。釉は口縁にかかる。口径14.4cm、器高3.1cm、高台径8.2cm。猿投産。

※ 墨45・48・49・54は欠番

番号	遺構名・層序・地区 (A34)		器種・器形	部位と調整
墨75	池250 第2層（L-110cm） 第3層（L-132cm）	DC西	灰釉陶器　椀	底部外面に墨書「太一」。高台は高く体部は小さい。底部は重ね焼きにより無釉。口径15.0cm、器高5.4cm。高台径8.3cm。猿投産。
墨76	池250 西肩	EB北西	灰釉陶器　椀	底部外面に墨書「近」。煤の汚れでわかりにくい。底部は重ね焼きにより無釉。内面は墨痕あり、硯に転用されている。口径19.2cm、器高6.4cm。高台径7.0cm。猿投産。
墨77	池250 東西セクション 第1層	FC南. GD北	灰釉陶器　椀	底部内面に墨書。内面は硯に使用される。高台内に糸切り跡。高台径7.4cm。美濃産。
墨78	池117		須恵器　杯	底部外面に墨書。口径12.6cm、器高5.6cm、高台径7.6cm。
墨79	池117		須恵器　杯	底部外面に墨書「専師」。高台は付かない。外面には重ね焼き痕跡あり、口縁部は黒色を呈する。口径13.3cm、器高3.7cm。
墨80	溝110		灰釉陶器　椀	底部外面に墨書。脚部径6.4cm。猿投産。
墨81	溝145		須恵器　杯	底部外面に墨痕。
墨82	井戸470 木枠内		土師器　椀	底部外面に墨書「酒坏」。外面はヘラケズリを４分割で施す。口径13.0cm、器高3.1cm。
墨83	井戸470 木枠内（L-320cm以上）		土師器　椀	底部外面に墨書「厨」。外面は雑なヘラミガキ。下半はオサエで凹凸が顕著。口径12.0cm、器高3.5cm。
墨84	井戸470 木枠内（L-320cm以上）		土師器　皿	底部外面に墨書「稲」。外面はヘラケズリで底部も一方向のヘラケズリ。口径15.4cm、器高2.6cm。
墨85	井戸470		須恵器　蓋	天井部外面に墨書「万」。内面にも墨痕付着し平滑。硯として使用される。
墨86	整地層475		須恵器　杯	底部内面に墨書「犬」。高台は付かない。口径13.8cm、器高3.8cm。
墨87	池370 南北セクション		土師器　皿	底部外面に墨書「富」。
墨88	池370 第1層（L-74cm）		土師器　皿	底部内面に墨書。
墨89	池300 第1層（L-105cm）		土師器　杯or皿	底部内面に墨痕。
墨90	池300 第1層（L-96cm）		土師器　杯or皿	底部外面に墨書。

観察表２　池250出土土器表（図版39～48・104～115）

(L-はH=34.20mからの値)

番号	器種・器形	地区(A34)	層　序	口径	器高	底径	備　考
212	土師器　皿	EC西	第3層（L-129cm）	13.1	1.5		完形品。油煙付着。
213	土師器　皿	GC	第3層	13.4	1.7		外面に指頭圧痕。
214	土師器　皿	GB東		13.5	1.8		
215	土師器　皿	DB東	第3層（L-141cm）	13.5	2.0		
216	土師器　皿	GC西	第3層（L-147cm）	13.6	1.5		完形品。指紋、藁状圧痕。
217	土師器　皿	GC	第3層	13.8	1.9		外面に指頭圧痕。
218	土師器　皿	GC西	第3層（L-143cm）	13.9	1.9		
219	土師器　皿	GC西	第2層（L-120cm）	13.9	2.1		
220	土師器　皿	HB東	(L-129cm)	14.0	1.8		外面に粘土継目。
221	土師器　皿	GC西	第3層（L-145cm）	14.0	2.0		外面に指頭圧痕。
222	土師器　皿	GB.GC	第2・3層	14.1	1.6		油煙付着。
223	土師器　皿	GC西	(L-141cm)	14.1	1.8		内面に黒斑。
224	土師器　皿	GB東	(L-130cm)	14.1	1.8		外面に指頭圧痕。
225	土師器　皿	HC西	第3層（L-140cm）	14.2	2.0		
226	土師器　皿	GB東.GC西	(L-129cm)	14.2	2.2		外面に指頭圧痕。
227	土師器　皿	EB東	(L-150cm)	14.3	2.0		
228	土師器　皿	DC西.EC西	第3層（L-144cm）	14.3	2.0		外面に指頭圧痕。
229	土師器　皿	FB東		14.4	1.6		
230	土師器　皿	HC西	第3層（L-147cm）	14.5	1.6		外面に粘土継目。
231	土師器　皿	FB北	西肩	14.5	2.2		
232	土師器　皿	GC西	第3層（L-155cm）	14.5	2.2		完形品。
233	土師器　皿	EC西	第3層（L-137cm）	15.0	1.9		外面に粘土継目。
234	土師器　皿	EC西	第3層（L-136cm）	15.3	1.8		外面に粘土継目。
235	土師器　皿	GC西	第3層（L-154cm）	16.5	2.1		外面に黒斑。
236	土師器　杯	FC.GC	東西セクション 第3層	13.6	2.4		
237	土師器　杯	DB東.EB東	第3層（L-141cm）	13.6	3.0		外面に黒斑。
238	土師器　杯	GB東	(L-121cm)	13.6	3.0		完形品。
239	土師器　杯	GB東.GC西	(L-129cm)	13.7	2.7		油煙付着。
240	土師器　杯	GB東.GC西	(L-136cm)	13.8	2.8		外面に粘土継目。
241	土師器　杯	GB東	(L-118cm)	13.8	2.9		ほぼ完形品。
242	土師器　杯	GC西	第3層（L-145cm）	13.8	2.9		外面に指頭圧痕。底面にヘラ記号。
243	土師器　杯	GC西	(L-141cm)	13.9	2.9		外面に指頭圧痕。油煙付着。
244	土師器　杯	EB東	第3層（L-129cm）	14.0	2.6		外面に指頭圧痕。
245	土師器　杯	HB東	(L-115cm)	14.0	3.1		油煙付着。
246	土師器　杯	GC西	(L-140cm)	14.1	3.0		ほぼ完形品。
247	土師器　杯	GB東	(L-118cm)	14.1	2.9		油煙付着。
248	土師器　杯	FC西	第3層（L-136cm）	14.2	2.4		
249	土師器　杯	FC西	第3層	14.2	2.5		外面に指頭圧痕。
250	土師器　杯	GC西	第3層（L-149cm）	14.2	2.7		外面に板状圧痕。
251	土師器　杯	DB東	第3層（L-141cm）	14.6	2.9		
252	土師器　杯	GC西	第3層（L-145cm）	14.6	3.0		外面に指頭圧痕。
253	土師器　杯	GC西	第2層（L-138cm）	14.7	3.1		
254	土師器　杯	FB北	西肩	15.1	3.0		
255	土師器　杯	GB東.GC西	(L-136cm)	15.6	3.3		外面に粘土継目。
256	土師器　杯	GB東	(L-118cm)	15.4	2.8		油煙付着。
257	土師器　杯	FB東		15.8	2.9		外面に指頭圧痕。
258	土師器　杯	GB東	(L-118cm)	15.8	3.6		外面に粘土継目。板状圧痕。

番号	器種・器形	地区(A34)	層　序	口径	器高	底径	備　考
259	土師器　杯	HB東	(L-120cm)	16.2	3.5		
260	土師器　杯	GC西	(L-141cm)	13.9	2.9		外面に竹管文を押印。
261	土師器　杯	DB東	第3層 (L-94cm)	13.6	2.7		内面に草木状の文様を線刻。
262	土師器　杯	GB東.GC西	(L-140cm)	15.6	(3.3)		
263	土師器　杯	FC	南北セクション 第2層	19.5	4.0		
264	土師器　杯	EB東	第2層 (L-123cm)	20.5	4.0		
265	土師器　杯B	EB東	第2層 (L-123cm)	15.8	3.1	8.6	油煙付着。
266	土師器　杯B	FC西	第3層 (L-138cm)	15.8	4.6	7.0	
267	土師器　杯B	FC西	第3層	16.3	3.7	8.9	
268	土師器　杯B	EC西	第3層 (L-141cm)	16.8	3.1	9.2	油煙付着。
269	土師器　杯B	GC西	(L-136cm)	18.6	4.5	7.4	油煙付着。
270	土師器　杯B	GB東		20.5	5.4	9.3	
271	土師器　杯B	EB東	(L-147cm)	16.9	4.1	7.3	
272	土師器　杯B	HB	第3層	17.0	3.8	8.3	
273	土師器　杯B	EB東	(L-150cm)	17.6	3.8	9.1	
274	土師器　杯B	EB東	(L-150cm)	17.6	4.0	9.2	
275	土師器　杯B	EB東	(L-150cm)	21.3	5.9	9.7	
276	土師器　杯B	EC西	第3層 (L-137cm)	21.4	5.9	9.2	
277	土師器　高杯	EC西	第3層 (L-123cm)	27.6	19.5	17.0	
278	土師器　高杯	EB東	第3層 (L-127cm)	28.2	19.4	15.8	
279	土師器　高杯	GC西	第2層 (L-120cm)	25.0	(19.2)		
280	土師器　高杯	EC西	第2層 (L-144cm)	25.0	(4.2)		
281	土師器　高杯	GC	南北セクション 第2・3層	25.2	(3.1)		
282	土師器　高杯	EC西	第2層 (L-133cm)	26.8	(3.2)		
283	土師器　高杯	GB東	(L-114cm)	27.4	(3.8)		油煙付着。外面に黒斑。
284	土師器　高杯	FC西	第3層 (L-151cm)	27.4	(5.2)		
285	土師器　高杯	GC西	第2層 (L-120cm)	27.8	(4.7)		
286	土師器　高杯	GC西	第3層 (L-147cm)	28.2	(3.9)		
287	土師器　高杯	EC西	第3層 (L-142cm)	28.8	(3.8)		
288	土師器　高杯	EB東	第2層 (L-123cm)	29.0	(3.5)		
289	土師器　高杯	EC西	第3層 (L-131cm)	24.6	(3.8)		
290	土師器　高杯	FC西	第3層 (L-144cm)	28.4	(3.8)		外面に黒斑。
291	土師器　高杯	EB東	第2層 (L-123cm)		(19.9)	15.3	
292	土師器　高杯	GC西	第2層 (L-120cm)		(17.8)	15.2	
293	土師器　高杯	DC西	第3層 (L-131cm)		(17.9)	14.8	
294	土師器　高杯	GC西	(L-140cm)		(18.0)		
295	土師器　高杯		(L-126cm)		(12.1)	15.2	油煤付着。
296	土師器　高杯	FC西.FB東	第3層		(7.1)	15.4	
297	土師器　高杯	FC西	第3層 (L-156cm)		(15.6)		油煙付着。
298	土師器　高杯	FC西.FB東	第3層		(17.9)		
299	土師器　高杯	GC西	第2層 (L-138cm)		(15.8)		油煙付着。
300	土師器　高杯	FC	南北セクション 第1層		(16.8)		
301	土師器　高杯	DB東	第3層 (L-94cm)		(17.1)		
302	土師器　高杯	KD	第1層 南肩貼土		(15.3)		
303	土師器　高杯	HB東	(L-120cm)		(14.5)		
304	土師器　高杯	FC西	第3層		(15.4)		
305	土師器　高杯	DB東	第3層 (L-88cm)		(15.0)		

番号	器種・器形	地区(A34)	層　序	口径	器高	底径	備　考
306	土師器　高杯	FB東			(14.8)		
307	土師器　高杯	HB東	(L-120cm)		(14.7)		
308	土師器　高杯	EB東	第3層 (L-132cm)		(14.8)		
309	土師器　高杯	FB東	第2層 (L-123cm)		(1.5)	7.2	ミニチュア。
310	土師器　盤	DB.EB	東西セクション 第2層	33.5	(3.8)		
311	土師器　盤	GC東	第2層 (L-136cm)	34.6	(5.0)		
312	土師器　盤	GE	第2層 (L-123cm)	35.6	(6.8)		油煙付着。
313	土師器　盤	GC	南北セクション 第2層		(2.8)	13.3	
314	土師器　甕	GC	南北セクション 第1層	16.2	(5.4)		外面に黒斑。
315	土師器　甕	GC	南北セクション 第2層	18.1	(9.0)		
316	土師器　甕	DB南	(L-95cm)	19.4	(7.5)		外面に煤付着。
317	土師器　甕	DB.EB	東西セクション 第2層	20.8	(4.5)		
318	土師器　甕	JD	第1層 (L-91cm)	22.6	(4.5)		
319	土師器　甕	FC	第3層	21.2	(14.2)		
320	土師器　甕	ED東	第3層 (L-143cm)	21.0	(11.8)		外面に粘土継目。
321	土師器　甕	FD西	第3層 (L-140cm)	22.2	(8.1)		
322	土師器　甕	DB西.EB西	(L-79cm)	23.1	(4.5)		
323	土師器　甕	HB	西肩 第2層	23.4	(5.1)		
324	土師器　甕	HC南	第2層	11.4	(5.7)		外面に煤付着。
325	土師器　甕	EB東	第2層 (L-123cm)	12.1	(5.8)		外面に煤付着。
326	土師器　甕	EB東	第2層 (L-123cm)	15.0	(2.9)		
327	土師器　甕	GB東	西肩 第2層	17.1	(6.3)		全面に煤付着。
328	土師器　甕	ED東	第3層 (L-143cm)	19.1	(14.2)		外面に煤付着。底部に内容物。
329	土師器　甕	JD	第2層	17.8	(3.8)		外面に煤付着。
330	土師器　羽釜	JD	第1層 (L-94cm)	22.6	(7.5)		煤付着。
331	土師器　羽釜	ID	第2層 (L-147cm)	25.2	(5.8)		煤付着。
332	土師器　羽釜	JD	第2層	26.2	(6.8)		煤付着。
333	土師器　羽釜	JD	第1層 (L-91cm)		(6.9)		煤付着。
334	土師器　鉢	FB東		7.0	(4.1)		外面に粘土継目。
335	土師器　鉢	FD西	第3層 (L-140cm)	8.0	4.0		
336	土師器　鉢	GB東	(L-130cm)	12.4	7.6		
337	黒色土器　椀	GB.GC	第2・3層	12.0	3.3	7.6	
338	黒色土器　椀	FC西	第3層 (L-144cm)	12.6	3.6	6.2	油煙付着。
339	黒色土器　椀	GB北	西肩	13.4	3.6	7.1	油煙付着。
340	黒色土器　椀	GC東	第3層 (L-159cm)	18.0	6.1	9.6	
341	黒色土器　椀	DB	北西肩 第2層 (L-110cm)	19.0	5.1	9.3	
342	黒色土器　椀	GB東	第3層 (L-116cm)	15.0	4.2	8.6	
343	黒色土器　椀	FB東	第2層 (L-123cm)	15.0	4.4	7.0	
344	黒色土器　甕	FB東	第3層 (L-133cm)	13.2	(4.7)		外面に煤付着。
345	黒色土器　甕	GC東	第3層 (L-159cm)	16.2	(6.8)		外面に煤付着。
346	黒色土器　甕	FB東	第3層	17.0	(11.2)		
347	黒色土器　甕	FC西	第2層 (L-123cm)		(6.7)		
348	黒色土器　甕	JB	第1層 (L-82cm)		(6.7)		
349	黒色土器　鉢	FC西	第2層 (L-126cm)		(2.2)	3.9	
350	黒色土器　鉢	EC	南北セクション 第3層				把手。
351	黒色土器　鉢	GC西	(L-141cm)	8.3	5.8		
352	黒色土器　鉢	DC	第3層	10.2	7.5		

番号	器種・器形	地区(A34)	層　序	口径	器高	底径	備　考
353	黒色土器　鉢	GB東	(L-123cm)	13.8	7.2	6.6	
354	黒色土器　鉢	GC西	第3層 (L-158cm)	17.0	6.7		鉄鉢形。
355	黒色土器　椀	GB	西肩	5.7	1.7	3.1	ミニチュア製品。
356	黒色土器　鉢	FC	第3層	5.6	1.9		ミニチュア製品。鉄鉢形。
357	黒色土器　壷	FC西	第3層	1.4	2.9	2.5	ミニチュア製品。完形品。線刻「+」。
358	黒色土器　壷	GB東	第3層 (L-133cm)	1.8	3.1	2.2	ミニチュア製品。完形品。
359	黒色土器　壷	EB東	第3層 (L-120cm)	2.0	3.3	2.8	ミニチュア製品。完形品。
360	黒色土器　壷	DC東	第2層 (L-122cm)	1.7	(2.7)		ミニチュア製品。
361	黒色土器　壷	GC西	第2層 (L-120cm)	1.8	(2.7)		ミニチュア製品。
362	黒色土器　壷	FC.GC	東西セクション 第2層	1.9	(3.2)		ミニチュア製品。
363	須恵器　杯蓋	HB	西肩 第1層 (L-112cm)	16.0	1.5		内面に墨痕。
364	須恵器　杯蓋	DE	第2層 (L-99cm)	18.0	1.2		
365	須恵器　杯	FB東	第3層 (L-140cm)	12.6	3.7		内・外面に墨痕。
366	須恵器　杯	GC西	第3層 (L-156cm)	14.2	4.0		
367	須恵器　杯	HF南	第2層 (L-110cm)	17.2	5.0		
368	須恵器　皿	DC東	北肩 第1層 (L-90cm)	14.0	(1.2)		段皿。内面に墨痕。
369	須恵器　皿	HB	西肩 第1層 (L-112cm)	13.8	2.6		内面に墨痕。
370	須恵器　皿	FE西	南北セクション 第2層	7.2	1.2		
371	須恵器　椀	ID	第2層 (L-147cm)	16.0	(3.0)		
372	須恵器　椀	GB東	(L-114cm)	15.6	5.7	5.0	内面に墨痕。
373	須恵器　鉢	DC	北肩 第1層 (L-79cm)	23.0	(3.5)		
374	須恵器　鉢	FC西	第3層 (L-142cm)	25.0	(7.0)		
375	須恵器　鉢	DB.EB	東西セクション 第2層	22.5	13.4	10.2	
376	須恵器　鉢	GB	西肩 第1層 (L-107cm)	22.0	(6.8)		
377	須恵器　鉢	GC西	第2層 (L-120cm)	22.8	9.5	7.0	
378	須恵器　鉢	DB.EB	東西セクション 第1層				内面に墨痕。
379	須恵器　鉢	FE西	南北セクション 第1層	26.0	(6.2)		内面に墨痕。
380	須恵器　鉢	FC西	第3層 (L-152cm)		(9.7)		内面に墨痕。
381	須恵器　鉢	JD	第2層		(7.2)		
382	須恵器　壷	FB東	第3層 (L-107cm)	3.5	9.2	3.4	完形品。
383	須恵器　壷	HC	第3層 (L-150cm)	3.9	9.9	3.8	
384	須恵器　壷	FB	(L-120cm)	3.9	9.7	3.8	
385	須恵器　壷	EC東	第3層	4.5	11.6	4.1	
386	須恵器　壷	GC西	第2・3層 (L-143cm)	6.2	(12.7)		
387	須恵器　壷	FC	第3層		(8.9)	3.6	
388	須恵器　壷	FC西	第3層		(8.0)	3.7	
389	須恵器　壷	GC西	第3層 (L-150cm)		(8.2)	4.7	
390	須恵器　壷	EB北西	西肩		(4.5)	7.4	外面に線刻「一」。
391	須恵器　壷	DC西	北西肩 第2層 (L-110cm)	10.4	(6.9)		
392	須恵器　壷	FC東	第3層	9.8	(6.2)		内面に漆付着。
393	須恵器　壷	IF	第1層 (L-115cm)	8.7	(4.3)		
394	須恵器　壷	KD	第1層 南肩貼土 (L-73cm)	6.8	19.2	4.2	
395	須恵器　壷	JC.KC	南端肩 第1層 (L-80cm)		(15.2)		
396	須恵器　壷	DE	第2層 (L-99cm)		(5.8)	9.0	
397	須恵器　壷	HC.IC	東西セクション		(5.4)	8.8	
398	須恵器　壷	DF	北東		(5.4)	7.2	
399	須恵器　壷	EC西	第3層 (L-123cm)		(5.6)	12.9	内面に墨痕。底部に爪圧痕。

番号	器種・器形	地区(A34)	層　序	口径	器高	底径	備　考
400	須恵器　甕	FC南.GD北	東西セクション 第2層		(9.9)		
401	須恵器　甕	JF	第1層（L-76cm）	21.2	(6.3)		
402	須恵器　甕	DC	北肩 第1層（L-79cm）	24.0	(7.9)		
403	須恵器　甕	GB	第1層（L-98cm）		(4.2)		
404	須恵器　壷	JB.JC	第1層（L-83cm）		(6.2)		
405	緑釉陶器　椀	FB.GB	東西セクション 第2層	9.0	2.7	5.3	小型品。稜椀。
406	緑釉陶器　椀	FC	第3層	13.0	4.1	6.4	稜椀。
407	緑釉陶器　椀	EB西	西肩 第1層（L-98cm）	14.0	4.0	7.0	稜椀。
408	緑釉陶器　椀	GC西	第2層（L-120cm）	14.6	4.5	6.9	輪花椀。底部に線刻「＋」。
409	緑釉陶器　椀	GB.HB	西肩 第2層（L-102cm）	14.7	4.6	7.2	輪花椀。
410	緑釉陶器　椀	FC西	第3層（L-156cm）	15.0	4.4	7.3	輪花椀。
411	緑釉陶器　椀	FC西	第3層	15.1	4.7	7.4	
412	緑釉陶器　椀	FC西	第3層（L-146cm）	16.2	4.8	7.6	内面に陰刻花文。
413	緑釉陶器　椀	EC西	第3層（L-123cm）	16.2	5.6	7.3	内面に陰刻花文。
414	緑釉陶器　椀	EB	西肩 第2層（L-129cm）	16.2	5.2	8.1	稜椀。
415	緑釉陶器　椀	GB東	第3層（L-122cm）	17.4	5.4	8.0	稜椀。
416	緑釉陶器　椀	DC	第2層	18.0	5.3	8.0	
417	緑釉陶器　椀	FC	第3層	18.0	5.6	8.3	
418	緑釉陶器　椀	GB東	(L-118cm)	25.0	(6.8)		稜椀。
419	緑釉陶器　椀	ID	第2層（L-147cm）	29.0	9.6	13.2	内面に陰刻花文。
420	緑釉陶器　椀	EB東	第2層（L-123cm）	10.4	3.2	5.4	輪花椀。
421	緑釉陶器　椀	HD北	第2層（L-119cm）	10.6	4.2	4.2	稜椀。
422	緑釉陶器　椀	EB北西	西肩	13.4	4.5	5.6	輪花椀。
423	緑釉陶器　椀	EB北西	西肩	13.8	4.6	6.9	
424	緑釉陶器　椀	GB東	(L-114cm)	13.9	4.4	7.0	輪花椀。
425	緑釉陶器　椀	DB南	北肩 第1層（L-94cm）	14.4	4.6	6.8	稜椀。
426	緑釉陶器　椀	DC西	北肩 第1層（L-102cm）	(14.6)	4.4	(6.1)	内面に陰刻花文。
427	緑釉陶器　椀	DB	北肩	18.0	6.4	7.7	稜椀。
428	緑釉陶器　椀	FB.GB	東西セクション 第2層		(3.3)	6.4	
429	緑釉陶器　椀	DE	第2層（L-99cm）		(2.7)	7.0	
430	緑釉陶器　椀	DC東	北肩 第1層（L-90cm）	11.0	3.4	6.6	
431	緑釉陶器　椀	GC西	第2層（L-120cm）	17.0	6.3	7.8	
432	緑釉陶器　椀	EB東	第3層（L-112cm）	14.5	4.4	7.3	防長産。
433	緑釉陶器　皿	GC西	第3層	13.9	2.2	7.8	稜皿。
434	緑釉陶器　皿	FB西	西肩 第1層（L-91cm）	13.7	3.0	7.2	輪花皿。
435	緑釉陶器　皿	GB.GC	第2・3層	14.0	2.4	7.0	輪花皿。
436	緑釉陶器　皿	EC西	第3層（L-146cm）	22.0	(2.6)		段皿。内面に陰刻花文。
437	緑釉陶器　皿	GC西	第2層（L-138cm）	14.2	3.3	6.5	輪花皿。
438	緑釉陶器　皿	HB.IB	東西セクション 第3層	16.0	3.6	7.2	
439	緑釉陶器　皿	FC西	第2層（L-131cm）	16.0	3.1	6.9	内面に陰刻花文。
440	緑釉陶器　皿	FC南.GD北	東西セクション 第2層	11.0	2.5	6.3	
441	緑釉陶器　皿	EB西	北西肩 第1層（L-88cm）	13.0	2.1	6.6	
442	緑釉陶器　皿	DB東	第3層（L-93cm）	15.0	3.5	7.5	
443	緑釉陶器　耳皿	FB.GB	東西セクション 第2層		3.7	6.0	
444	緑釉陶器　耳皿	EC東	第2層（L-128cm）		2.9	4.7	底部高台に墨痕。
445	緑釉陶器　香炉	FC西	第3層	17.0	7.4	20.3	内面に線刻「二」。
446	緑釉陶器　香炉	JC.KC	南端肩 第1層（L-80cm）	15.0	(6.5)		

番号	器種・器形	地区(A34)	層　序	口径	器高	底径	備　考
447	緑釉陶器　香炉	GE西	第2層（L-130cm）		(2.7)	12.0	内面に線刻「士」。
448	緑釉陶器　香炉蓋	GC西	第2層（L-120cm）	13.0	(3.2)		外面に陰刻花文。透かし孔。
449	緑釉陶器　香炉蓋	FC西	第3層	7.7	2.9		外面に陰刻花文。透かし孔。
450	緑釉陶器　香炉蓋	DE	第2層（L-99cm）		(1.8)		外面に陰刻花文。
451	緑釉陶器　蓋	FC東	第3層（L-153cm）	11.0	(1.3)		外面に陰刻花文。
452	緑釉陶器　壷	GB	西肩	12.2	1.9		
453	緑釉陶器　唾壷	HC南	第2層（L-128cm）	(6.4)	(3.3)		
454	緑釉陶器　椀	GC	南北セクション 第1層		(3.3)		内面に陰刻花文。
455	緑釉陶器　皿	FC	南北セクション 第2層		(2.1)		内面に陰刻花文。
456	緑釉陶器　椀	DB南	北肩 第1層（L-94cm）		(4.8)		内面に陰刻花文。
457	緑釉陶器　椀	FD	第1層（L-79cm）				内面に陰刻花文。
458	緑釉陶器	HD南	第2層（L-125cm）		(0.8)		内面に陰刻花文。
459	緑釉陶器	EB東	第2層（L-123cm）		(1.5)		内面に陰刻花文。
460	緑釉陶器	DB.EB	東西セクション 第3層				内面に陰刻花文。
461	緑釉陶器	HD	第2層（L-115cm）		(0.7)	8.4	内面に陰刻花文。
462	緑釉陶器　壷	ID	第1層（L-91cm）		(3.3)		内面に陰刻花文。
463	白色土器　椀	FB東	(L-133cm)	10.5	3.2	5.1	外面に墨痕。
464	白色土器　椀	DC.EC	第2層	11.6	3.7	5.7	
465	白色土器　椀	DC東	第2層	15.6	(4.2)		
466	白色土器　椀	FB西	西肩 第1層（L-100cm）		(2.7)	9.9	
467	白色土器　椀	GE	第1層（L-127cm）		(2.8)	8.2	
468	白色土器　椀	ED東	北肩 第1層（L-107cm）		(1.5)	5.9	
469	白色土器　皿	HB	第3層	17.4	3.3	7.9	ほぼ完形品。
470	白色土器　皿	GC	南北セクション 第1層		(1.1)	6.6	内面に墨痕。
471	白色土器　皿	DB	北西肩 第2層（L-110cm）		(1.8)	7.8	
472	白色土器　皿	EB西	北西肩 第1層（L-88cm）		(1.6)	7.9	
473	白色土器　皿	JC	第2層（L-91cm）		(0.8)	6.3	
474	白色土器　皿	HE.IE	東西セクション 第2層		(1.2)	8.3	
475	白色土器　皿	HE	第1層（L-125cm）		(1.1)	6.8	
476	灰釉陶器　皿	EB東	第3層（L-97cm）	14.0	2.7	7.3	高台内に墨痕。
477	灰釉陶器　皿	HC	第3層（L-150cm）	14.2	2.7	6.6	釉はまだら。
478	灰釉陶器　皿	FB西	西肩 第1層（L-100cm）	14.2	2.8	6.6	釉はまだら。
479	灰釉陶器　皿	EE北	東西セクション 第2層	15.0	2.3	7.7	段皿。
480	灰釉陶器　皿	EC	第3層	19.0	3.8	9.8	内面に墨痕。
481	灰釉陶器　皿	HD北	第2層		(1.6)	7.0	
482	灰釉陶器　皿	GB北	西肩		(2.3)	8.9	高台内に墨痕。
483	灰釉陶器　椀	GB.GH	西肩 第1層（L-87cm）	9.9	2.9	4.8	
484	灰釉陶器　椀	EC西	第2層（L-133cm）	13.5	4.5	6.8	
485	灰釉陶器　椀	CH西	第2層（L-133cm）	14.6	5.1	7.1	
486	灰釉陶器　椀	FF	第1層（L-118cm）	14.0	3.6	6.9	
487	灰釉陶器　椀	DC	北肩 第1層（L-79cm）	(13.2)	(3.0)	8.8	
488	灰釉陶器　椀	JD	第2層（L-110cm）	(11.0)	(2.5)	7.9	
489	灰釉陶器　椀	HC南	第3層（L-145cm）	(12.8)	(2.6)	7.8	内面に墨痕。
490	灰釉陶器　椀	EB東	第1層（L-98cm）	(11.8)	(2.8)	7.5	
491	灰釉陶器　壷蓋	GC西	第2層（L-138cm）	10.4	5.4		
492	灰釉陶器　壷	FC	南北セクション 第2層	(12.6)	(7.4)		
493	灰釉陶器　壷	GB.HB	西肩 第2層（L-102cm）	(2.6)	(10.2)	5.3	外面に墨書「上」。底に線刻「一」。

番号	器種・器形	地区(A34)	層　序	口径	器高	底径	備　考
494	灰釉陶器　壷	JB	第2層	10.0	(5.1)		
495	灰釉陶器　壷	GC	南北セクション 第2層	(14.2)	(3.5)	8.0	
496	灰釉陶器　壷	GC西	第3層		(16.2)		内面に墨痕。
497	青磁　椀	DB南	北肩 第1層（L-94cm）	15.2	6.0	5.7	
498	青磁　椀	IC	第2層（L-122cm）	14.0	(3.4)		
499	青磁　椀	FC南.GD北	東西セクション 第2層		(3.3)	8.4	
500	青磁　合子蓋	DB	北西肩 第2層（L-110cm）	5.4	1.4		外面に陰刻花文。
501	青磁　合子蓋	DB.EB	東西セクション 第3層	7.8	2.7		
502	青磁　合子	GB東	(L-100cm)	9.8	5.2	5.2	
503	白磁　椀	GB南東	西肩（L-112cm）	14.6	4.3	6.4	
504	白磁　椀	FD	第1層（L-96cm）	15.2	4.7	5.6	
505	白磁　椀	FB.GB	東西セクション 第2層	15.0	4.2	6.4	
506	白磁　椀	DB南	北肩 第1層（L-94cm）	14.0	(3.2)		
507	白磁　椀	ID	第2層（L-111cm）	13.0	(3.7)		輪花椀。
508	白磁　椀	GB東.GC西	(L-129cm)	13.4	3.3	5.4	輪花椀。
509	白磁　皿	EC西	第3層（L-141cm）	15.8	3.6	6.8	五輪花皿。稜皿。
510	白磁　托	GC西	第2層（L-120cm）	(13.5)	(1.9)		五輪花托。
511	褐釉　壷	DC西	北西肩 第2層（L-110cm）		(12.6)	11.8	
512	白釉緑彩　壷	EC東	第1層（L-117cm）				
513	二彩陶器　壷	HC南	第1層（L-88cm）	(14.0)	(2.2)		

観察表３　銭貨一覧表（図版55・122）

番号	種　類	出土遺構・層序	外径、穿孔径、厚(㎝)	重量(g)	初　鋳　年　・　備　考
銭１	隆平永寶	井戸470 木枠上部	2.44、0.67、0.14	2.76	延暦15年 (796) 初鋳
銭２	承和昌寶	１区中央部検出中	2.01、0.61、0.14	1.90	承和２年 (835) 初鋳
銭３	長年大寶	池250 第3層	1.95、0.57、0.17	1.73	嘉祥元年 (848) 初鋳
銭４	長年大寶	池250 西肩 第2層	1.96、0.58、0.18	1.41	嘉祥元年 (848) 初鋳
銭５	饒益神寶	池250 第1層	1.91、0.56、0.14	1.58	貞観元年 (859) 初鋳
銭６	貞観永寶	池250 西肩 第3層	1.92、0.51、0.14	1.84	貞観12年 (870) 初鋳
銭７	貞観永寶	池250 第2層	1.95、0.45、0.19	2.37	貞観12年 (870) 初鋳
銭８	貞観永寶	池250 第2層	1.94、0.47、0.18	2.63	貞観12年 (870) 初鋳。裏面に「笵ずれ」。
銭９	貞観永寶	検出中	1.98、0.51、0.18	2.59	貞観12年 (870) 初鋳。裏面に「ばり」残る。
銭10	咸平元寶	土坑26	2.50、0.58、0.12	6.06	北宋、咸平元年 (998)。銭12と融着。
銭11	祥符元寶	路面155	2.49、0.64、0.14	2.21	北宋、大中祥符元年 (1008)
銭12	天聖元寶	土坑26	2.48、0.61、0.14	6.06	北宋、天聖元年 (1023)。 方孔が傾く。銭10と融着。
銭13	皇宋通寶	土坑26	2.44、0.66、0.14	2.97	北宋、宝元２年 (1039)
銭14	皇宋通寶	土坑26	2.46、0.65、0.15	2.86	北宋、宝元２年 (1039)
銭15	熙寧元寶	溝107	2.42、0.66、0.16	2.84	北宋、熙寧元年 (1068)
銭16	元豊通寶	溝145	2.37、0.65、0.10	2.54	北宋、元豊元年 (1078)
銭17	元豊通寶	溝107・110 上層	2.44、0.61、0.15	3.18	北宋、元豊元年 (1078)
銭18	洪武通寶	耕作溝	2.35、0.51、0.16	2.68	明、洪武元年 (1368)
銭19	寛永通寶	土坑289	2.64、0.56、0.12	2.16	「古寛永」
銭20	寛永通寶	池117 上面	2.48、0.58、0.12	3.55	裏面に「文」あり
銭21	寛永通寶	重機掘削	2.30、0.58、0.11	2.21	
銭22	寛永通寶	耕作溝	2.35、0.61、0.14	2.30	
銭23	寛永通寶	検出	2.49、0.64、0.11	1.84	

観察表４　金属製品一覧表（図版55・56・122～124、図25）

番号	種類	出土遺構・層序	長、幅、厚(㎝)	材質	重量(g)	特　徴　・　備　考
金１	釘	井戸470 木枠内	6.3、頭幅1.4、身幅0.5	鉄	6.0	頭部は方形。先端を欠く。
金２	釘	池250 第3層	9.9、頭幅0.6～1.6、身幅0.5	鉄	11.5	頭部は両側に延ばす。
金３	釘	池250 第3層	9.6、頭幅0.7～1.6、身幅0.4	鉄	11.4	頭部は両側に延ばす。
金４	釘	池250 西肩 第2層	9.2、頭幅0.7～1.5、身幅0.6	鉄	16.8	頭部は両側に延ばす。先端を欠く。
金５	釘	池250 第2層	6.0、頭幅0.7～1.6、身幅0.7	鉄	13.4	頭部は両側に延ばす。先端を欠く。
金６	釘	池250 第3層	9.2、頭幅0.6～1.2、身幅0.6	鉄	7.3	頭部は片側に延ばす。
金７	釘	池250 第3層	7.9、頭幅0.7～1.3、身幅0.4	鉄	7.3	頭部は片側に延ばす。先端を欠く。
金８	釘	池250 第2層	3.1、身幅0.5	鉄	2.3	身の一部のみ。
金９	鋲	池250 第3層	3.4、頭径3.4、身幅0.7	鉄	21.6	頭部に成形痕跡あり。身は短い。
金10	鋲	池250 第3層	6.2、頭径3.2～3.4、身幅0.5	鉄	16.0	頭部は一方向が突出する。
金11	鋲	池250 第3層	6.7、頭径3.0～3.2、身幅0.5	鉄	16.7	頭部は一方向が突出する。先端を欠く。
金12	鋲	池250 第2層	10.1、頭径3.3、身幅0.6	鉄	22.2	頭部は一方向が突出する。
金13	銅鏃	池250 第2層	5.2、身長2.2、幅0.7、厚0.4、茎長3.0、径0.6	銅	6.0	小型品。身の断面は菱形で各面に溝がある。
金14	毛抜	池250 第2層	11.1、ふくらみ幅2.5、板幅0.5、厚0.2	銅	16.2	金銅製。身に金メッキあり。ふくらみ部に毛彫り文様を施す。
金15	鉄鏃	池250 第3層	16.5、身長10.8、幅1.0、厚0.6、茎長4.6、径0.6	鉄	28.6	頭部は鑿形。鏃身と茎との境にふくらみあり。
金16	刀子	池250 第2層	14.0、刃長7.4、幅0.7、厚0.3、茎長6.6、径0.4	鉄	5.6	完存。茎が長い。
金17	刀子	池250 第2層	22.0、刃長12.2、幅1.0、厚0.3、柄長9.8、径1.6	鉄	32.4	茎の先端を欠く。茎に木質をとどめる。
金18	火箸	池250 第3層	28.5、角部0.4、丸部0.4	鉄	14.9	頭部は扁平で巻き込む。柄は３方向に捻る。
金19	板状製品	池250 第3層	14.2、0.6、0.3	鉄	9.8	細長い板状の製品。湾曲部あり。
金20	板状製品	池250 第3層	12.0、0.7、0.3	鉄	7.3	細長い板状の製品。
金21	板状製品	池250 第3層	9.2、0.7、0.3	鉄	5.0	細長い板状の製品。
金22	板状製品	池250 第3層	8.1、0.7、0.3	鉄	4.9	細長い板状の製品。
金23	板状製品	池250 第3層	6.6、0.7、0.3	鉄	2.8	細長い板状の製品。
金24	板状製品	池250 第2層	9.0、0.6、0.2	鉄	2.6	細長い板状の製品。
金25	板状製品	池250 西肩	8.7、0.6、0.2	鉄	3.1	細長い板状の製品。
金26	鉄製品	池250 第3層	7.9、6.1、0.5	鉄	31.3	板状。鍋・釜の一部か。
金27	鉄製品	池250 第3層	8.6、5.8、0.5	鉄	34.5	板状。鍋・釜の一部か。
金28	飾鋲	池250 第3層	2.3、頭径1.0、身幅0.3	銅	1.3	小型の鋲。頭部は六角形を呈する。
金29	キセル	土坑294	6.0、径1.1	銅	10.0	完存。江戸時代。
金30	キセル	検出中	5.2、径1.0	銅	4.3	火口を欠く。江戸時代。
金31	キセル	検出中	5.0、径1.1	銅	8.8	火口を欠く。江戸時代。
金32	火箸	池117 上面	16.2、径0.3	銅	6.8	頭部に蕾が付く。江戸時代。

観察表５　石製品一覧表（図版57・58・124～126、図26）

番号	種　類	出土遺構・層序	長、幅、厚(㎝)	重量(g)	特　徴・備　考
石１	石帯（巡方）	池250 第2層	4.3、4.1、0.7	30.2	比重2.65。完形品。潜り穴に銀線残存。
石２	石帯（巡方）	池250 第1層	3.6、3.5、0.5	14.5	比重2.74。表面は風化。潜り穴３箇所に銀と銀の切金残存。
石３	石帯（巡方）	柱穴133	3.1、2.5、0.8	7.3	比重2.44。黒灰色の脈が渦巻きを呈する。
石４	石帯（巡方）	柱穴133	2.5、2.0、0.4	1.9	比重2.44。石３と同一。
石５	石帯（蛇尾）	池250 第1層	3.9、4.5、0.9	24.6	比重2.66。鉱物結晶が顕著。
石６	石帯（蛇尾）	池250 第1層	6.3、4.4、0.7	31.2	比重2.66。
石７	経軸端	池250 第2層	2.7、径0.9～1.2	7.2	水晶製。透明度は高い。
石８	碁石	池250 第2層	径1.7、厚さ0.8	3.4	黒石。
石９	碁石	池250 西肩 第2層	径1.6、厚さ0.7	2.6	黒石。
石10	碁石	池250 西肩 第2層	径1.6、厚さ0.8	2.6	白石。白濁した水晶製。
石11	碁石	池250 西肩 第2層	径1.6、厚さ0.7	2.3	白石。白濁した水晶製。
石12	碁石	池250 西肩 第2層	径1.7、厚さ0.8	3.1	白石。白濁した水晶製。
石13	碁石	池250 第2層	径1.6、厚さ0.7	2.6	白石。白濁した水晶製。
石14	碁石	池250 第3層	径1.6、厚さ0.7	2.6	白石。白濁した水晶製。
石15	石硯	池250 第3層	9.0、7.7、3.5	119	風字硯。滑石製。
石16	石硯	池250 第2層	6.8、3.9、1.3	54	湾曲面をもった滑石製品で、硯以外の可能性もある。
石17	砥石	池117	6.6、5.2、4.4	224	長方形。
石18	砥石	溝43	6.9、5.6、3.2	162	凝灰岩か。
石19	砥石	池250 第1層	12.4、4.9、2.0	186	長方形。
石20	石材	池250 第1層	7.2、6.9、5.9	265	中央に穴が開く製品。凝灰岩か。
石21	石材	池250 第1層	5.5、径4.2	117	楕円形の円礫、砂岩。
石22	石材	池250 第2層	13.5、4.1、3.7	316	棒状の円礫、砂岩か。
石23	石材	池250 第1層	10.6、7.1、3.4	409	断面は石刀形。
石24	石材	井戸470 木枠内	18.2、12.2、7.5	2135	花崗岩か。
石25	石材	井戸470 木枠内	12.6、11.9、11.6	1621	火を受けている。凝灰岩。
石26	石材	池250 第1層	21.9、20.9、9.2	2891	基壇化粧用の石材か。凝灰岩。
石27	石材	井戸470 木枠内	23.4、15.0、15.5	7420	基壇化粧用の石材か。花崗岩。
石28	石硯	攪乱	17.3、6.0、2.3	499	裏面を浅く窪ませる。江戸時代後期。
石29	石硯	重機掘削	10.9、6.0、1.4	180	江戸時代後期。
石30	砥石	溝107	10.4、3.0、2.8	139	側面に溝を掘る。江戸時代後期。
石31	砥石	耕作溝	9.2、3.5、1.5	61	石硯を転用。江戸時代後期。
石32	石盤	攪乱	5.3、3.2、0.3	7	罫線が入る。明治時代以後。
石33	石筆	検出	5.2、径0.9～1.2	12	明治時代以後。
石34	石筆	検出	3.1、径0.8～0.9	4	明治時代以後。
石35	石匙	池117	4.8、3.5、0.7	9.8	サヌカイト。柄は欠損。
石36	剥片	池250 第1層	5.2、5.0、1.5	33.4	サヌカイト。
石37	剥片	池250 上部	7.2、3.7、1.4	34.6	サヌカイト。自然面が残る

観察表６　土製品一覧表（図版58・126・127、図27）

番号	種　類	出土遺構・層序	長、最大径、孔径(㎝)	重量(g)	特　徴　・　備　考
土１	土錘	池250 第2層	2.5、1.5、0.4	5	小型品。両端を欠損する。
土２	土錘	池250 第1層	3.5、1.4、0.4	6	小型品。片端を欠損する。
土３	土錘	池250 第2層	3.7、1.5、0.3	8	小型品。片端を欠損する。
土４	土錘	池250 第3層	3.9、1.5、0.4	10	小型品。片端を欠損する。
土５	土錘	池250 第2層	3.9、1.5、0.3	8	小型品。片端を欠損する。
土６	土錘	池250 第2層	4.1、1.6、0.3	8	小型品。片端を欠損する。
土７	土錘	池250 第2層	4.2、1.5、0.3	9	小型品。片端を欠損する。
土８	土錘	池250 第1層	4.6、1.4、0.3	7	小型品。完存する。
土９	土錘	池250 第3層	4.1、2.3、0.5	17	大型品。片端を欠損する。
土10	土錘	池250 第2層	5.2、3.3、0.8	49	大型品。完存する。
土11	土錘	池250 第2層	5.4、3.0、0.8	46	大型品。片端をわずかに欠損する。
土12	土錘	池250 第3層	5.5、3.3、1.0	49	大型品。両端をわずかに欠損する。
土13	土錘	池250 第2層	6.2、3.7、0.8	78	大型品。片端をわずかに欠損する。最も重い。
土14	土錘	池250 第3層	8.2、3.1、0.8	53	大型品。両端をわずかに欠損する。最も長い。
土15	土錘	池250 第1層	5.6、幅2.4、厚さ2.3	28	側面を押さえて溝状に窪ませる。
土16	土馬	池370 第1層	3.9、3.0、4.9	27	胴前半が残存。左前足は完存。右前足は折れる。
土17	土馬	池250 東西セクション　第1層	4.6、2.0、4.1	21	尻尾と胴の左半分が残存。足は粘土をつまみ出す。
土18	土馬	池250 第3層	3.2、1.8、2.1	4	小型品で退化が顕著。
硯１	陶硯　風字硯	池370 第2層	15.4、8.0、高1.5		海部の先端には花弁状の土手をもつ。脚は剥離。
硯２	陶硯　風字硯	３区現代盛土	9.4、7.8、高3.6		右下部と脚が１箇所残存。
硯３	陶硯　風字硯	池250 第1層	8.9、5.8、高4.2		右下部と脚が１箇所残存。
硯４	陶硯　風字硯	溝145	8.1、6.7、高2.2		右下部の破片。
硯５	陶硯　円面硯	井戸470 木枠内	突帯径15.0、器高4.5		透し孔は長方形と線刻が交互に配置される。
硯６	陶硯　円面硯	池250 西肩 第1層	突帯径16.2、器高3.4		
硯７	陶硯　円面硯	池250 西肩 第2層	3.5、3.5		脚部の小片。突帯がめぐる。
硯８	黒色土器硯　風字硯	池250 第3層	13.6、12.3、高3.4		唯一全容が判明する。脚は剥離。ヘラミガキが丁寧で銀器の質感をもつ。
硯９	黒色土器硯　風字硯	池250 第3層	8.5、7.3、高3.3		右下部。脚は５角形に面取りする。
硯10	黒色土器硯　風字硯	池250 西肩 第2層	9.5、5.8、高2.4		ヘラミガキが丁寧で銀器の質感をもつ。
硯11	黒色土器硯　風字硯	池250 西肩 第2層	4.7、3.3、高3.6		右下部。脚部は８角形に面取りする。
硯12	黒色土器硯　風字硯	池250 第2層	5.9、2.4、高1.1		脚部は剥離。銀器の質感をもつ。

観察表７　木簡一覧表（図版60・61・128・129）

番号	種　類	出土遺構・層序	長さ、幅、厚さ(㎝)	内　　容	備　　考
木１	木簡（檜扇）	井戸470 木枠内	10.9、下0.9、0.1		上半欠損。左端に墨書あり。
木２	木簡（檜扇）	井戸470 木枠内	24.5、上2.9、下1.6、0.1	「奈　尓　波　都　」	下端に墨書あり。下端に穿孔。
木３	木簡（檜扇）	井戸470 木枠内	24.5、上3.0、下1.6、0.1	「奈　尓　波　都　」	墨書あり。下端に穿孔。
木４	木簡（檜扇）	井戸470 木枠内	24.3、上2.3、下1.3、0.1	「奈　尓　波　都　」	左端に墨書あり。
木５	木簡（檜扇）	井戸470 木枠内	24.3、上3.0、下1.4、0.1	「奈　尓　波　都　」	左端に墨書あり。下端に穿孔。
木６	木簡（檜扇）	井戸470 木枠内	19.3、上2.8、0.1	「奈　尓　皮　」	下端欠損。墨書はほとんど欠落。
木７	木簡（板材）	井戸470 木枠内	33.0、1.9、0.8	□　　□□□□□□為　　廿 □廿為又冊□　」	長い板材の一部、数字を記載。
木８	木簡（荷札）	井戸470 木枠内	13.3、1.8、0.2	表「讃岐国寒川郡」 裏「難破郷秦武成」	上端に抉りあり。下端を尖らせる。 片側を加工して鳥形祭祀具に改変。
木９	木簡（荷札）	井戸470 木枠内	18.1、1.0、0.2		左半分欠損。先端を尖らせる。
木10	木簡（荷札）	池300	10.0、2.5、0.3	「一人　筆万呂　十一月廿六日」	上半欠損。下端に抉り、穿孔あり。
木11	木簡（棒状）	池300	11.6、1.5、0.7	「道道」	上端・下端が欠損。
木12	木簡（棒状）	池300	11.8、1.4、0.6		下半欠損。墨書は不明。
木13	木簡（板材）	池117	16.5、5.0、0.8	「神油幡身申文夫　身□□牧万呂」	片面は２行の墨書。裏面にも１文字が墨書される。
木14	木簡（板材）	池117 洲浜上面	13.2、1.9、0.8		板材の一部に墨書あり。
木15	木簡（付札）	溝119	10.6、1.0、0.4		上端付近に切り込みあり。下半に墨書。
木16	木簡（棒状）	溝145	7.0、0.9、0.2		上半に墨書。下半は片方を尖らせる。溝119出土か。
木17	木簡（板材）	池250 第2層	20.6、2.2、02.	「□多礼□□能无」	薄い板材の両面に墨痕あり。
木18	木簡（板材）	池117 上面	13.8、4.3、0.5		板材の一部に墨書あり。
木19	木簡（折敷蓋）	池250 底部	20.9、7.5、0.3	「酒　□　一」	折敷底板とみると上面、長方形曲物の蓋板とみると上面に墨書。

観察表８　木製品一覧表（図版61～77・130～142、図31～33）

番号	種　類	出土遺構・層序	長さ・幅・厚さ(cm)	特　徴　・　備　考
木20	斎串	井戸470 木枠内	23.4、2.3、0.1	両側８箇所に切り込み。完存。
木21	斎串	井戸470 木枠内	7.3、2.0、0.7	両側１箇所に切り込み。下半は欠損。
木22	斎串	井戸470 木枠内	12.5、1.9、0.4	下半は欠損。
木23	斎串	井戸470 木枠内	20.1、1.6、0.4	頭部側がやや細い。両側１箇所に切り込み。下半は欠損。
木24	斎串	井戸470 木枠内	20.6、1.6、0.4	木23と同形で同大。
木25	斎串	井戸470 木枠内	14.8、1.5、0.3	上下両端は欠損。
木26	斎串	井戸470 木枠内	24.6、2.2、0.5	頭部側を尖り気味に成形する。完存。
木27	棒状(木簡状)製品	井戸470 木枠内	13.7、1.5、0.4	頭部下に切り込みあり。
木28	棒状(木簡状)製品	井戸470 木枠内	10.7、1.6、0.5	頭部下に切り込みあり。
木29	棒状(刀子形)製品	井戸470 木枠内	18.7、0.9、0.3	刀子形を呈するが厚みがある。
木30	棒状(串状)製品	井戸470 木枠内	19.9、0.9、0.6	片方の先端を尖らせる。
木31	棒状(串状)製品	井戸470 木枠内	14.9、0.8、0.7	片方の先端を尖らせる。
木32	棒状製品	井戸470 木枠内	16.3、0.9、0.3	片方の先端を尖り気味に加工する。
木33	棒状(ヘラ状)製品	井戸470 木枠内	17.0、0.9、0.4	先端を削り込む。
木34	棒状(くさび状)製品	井戸470 木枠内	11.8、1.3、1.3	先端を削り込む。頭部に段差あり。部材の一部か。
木35	棒状(ヘラ状)製品	井戸470 木枠内	15.7、1.1、1.0	先端を削り込むが、やや厚い。
木36	棒状(ヘラ状)製品	井戸470 木枠内	23.4、1.2、1.0	先端を削り込む。
木37	横櫛	井戸470 木枠内	8.2、3.8、0.7	右半部は欠損。歯の一部欠損。11本/１cm。
木38	棒状(丸棒)製品	井戸470 木枠内	34.2、2.6、2.0	先端がやや細く加工される。
木39	棒状(丸棒)製品	井戸470 木枠内	19.6、2.0、1.9	柄の部分とみられる。
木40	棒状(丸棒)製品	井戸470 木枠内	7.8、2.4、2.3	柄の部分とみられる。
木41	杓子形	井戸470 木枠内	25.6、5.6、0.5	把手の先端は幅が広い。
木42	棒状加工部材	井戸470 木枠内	24.1、2.9、1.1	側面に斜めの切り込みがあり、製品の一部。
木43	箸	井戸470 木枠内	24.3、径0.5	完存。
木44	箸	井戸470 木枠内	23.1、径0.6	完存。
木45	箸	井戸470 木枠内	19.7、径0.5	完存か。
木46	箸	井戸470 木枠内	19.6、径0.5	完存か。
木47	箸	井戸470 木枠内	17.8、径0.5	完存か。
木48	曲物(底板)	井戸470 木枠内	12.0、5.6、0.6	直径12cm。側面に目釘穴あり。
木49	曲物(底板)	井戸470 木枠内	14.5、2.4、0.5	直径23cmと推定。側面に目釘穴あり。
木50	曲物(底板)	井戸470 木枠内	18.6、6.5、1.2	直径19.6cmと推定。側面に目釘穴あり。
木51	曲物(底板)	井戸470 木枠内	19.8、5.9、1.1	直径22.4cmと推定。側面に目釘穴あり。
木52	曲物(身)	井戸470 木枠内	外径13.7、内径12.3、高2.1	側板が残存し、目釘で底板と固定する。
木53	曲物(身)	井戸470 木枠内	外径13.9、内径13.0、高5.7	側板が残存し、目釘で底板と固定する。
木54	曲物(身)	井戸470 木枠内	外径26.7、内径22.3、高19.6	側板は二重以上残存し、目釘７本で底板と固定する。
木55	曲物(蓋)	井戸470 木枠内	外径19.3、内径17.3、高2.7	側板は蓋板の内側に桜皮で固定される。
木56	曲物(底板)	井戸470 木枠内	径20.8、1.0	側面の多方向に目釘穴が残存する。
木57	曲物(底板)	井戸470 木枠内	径34.9、1.0	直径35cmあり最も大きい。側面に目釘穴あり。
木58	加工部材	井戸470 木枠内	5.1、3.8、1.0	不定形に加工した板材。

番号	種　類	出土遺構・層序	長さ、幅、厚さ(cm)	特　徴　・　備　考
木59	加工部材	井戸470 木枠内	5.6、5.5、2.4	不定形に加工した板材。
木60	角材	井戸470 木枠内	6.7、4.8、3.6	先端を杭状に尖らせる。
木61	付木	井戸470 南半	24.7、1.4、0.8	片方の先端が焼成されている。
木62	板材	井戸470 木枠内	9.9、8.6、2.3	長方形の板材。
木63	板材	井戸470 木枠内	10.3、6.0、1.6	長方形の板材。
木64	板材	井戸470 木枠内	10.3、10.0、2.9	加工痕跡がある板材。
木65	加工部材	井戸470 木枠内	11.6、6.0、3.6	台形を呈する板材。
木66	加工部材	井戸470 木枠内	11.7、6.2、3.6	台形を呈する板材。
木67	棒状製品	井戸470 木枠内	16.0、4.0、3.9	両端は加工される。
木68	太枘	井戸470	7.9、3.9、2.6	検出木枠で使用。
木69	太枘	井戸470	7.8、3.7、2.6	検出木枠で使用。
木70	太枘	井戸470	7.4、3.6、2.7	検出木枠で使用。
木71	太枘	井戸470	7.0、3.6、2.2	検出木枠で使用。
木72	太枘	井戸470	7.1、3.5、2.6	検出木枠で使用。
木73	太枘	井戸470	7.1、3.7、2.9	検出木枠で使用。
木74	太枘	井戸470	6.6、3.8、2.4	検出木枠で使用。
木75	太枘	井戸470	6.4、3.8、2.6	検出木枠で使用。
木76	太枘	井戸470	6.5、3.7、2.2	検出木枠で使用。
木77	太枘	井戸470	5.9、3.5、2.2	検出木枠で使用。
木78	太枘	井戸470	5.7、3.8、2.4	検出木枠で使用。
木79	太枘	井戸470	5.6、3.7、2.5	検出木枠で使用。
木80	太枘	井戸470 木枠内	8.6、5.4、2.9	木枠内から出土。
木81	太枘	井戸470 木枠内	7.5、4.8、2.8	木枠内から出土。
木82	太枘	井戸470 木枠内	7.1、5.4、2.9	木枠内から出土。
木83	太枘	井戸470 掘形北半	8.6、4.9、2.4	掘形埋土から出土。
木84	太枘	井戸470 掘形北半	8.1、5.2、2.6	掘形埋土から出土。
木85	太枘	井戸470 掘形北半	5.6、5.0、2.2	掘形埋土から出土。
木86	木枠(縦板)	井戸470	121.1、10.2、6.6	木枠№28。
木87	木枠(縦板)	井戸470	121.8、12.2、8.0	木枠№18。
木88	木枠(縦板)	井戸470	120.8、12.7、7.6	木枠№８。左下段に太枘が残存。
木89	木枠(縦板)	井戸470	120.7、14.1、6.7	木枠№７。左上段に太枘が残存。
木90	木枠(縦板)	井戸470	121.8、15.0、9.5	木枠№１。
木91	木枠(縦板)	井戸470	119.7、16.4、7.3	木枠№２。外面に円形のスタンプ４箇所。
木92	斎串	溝119	8.3、2.4、0.2	頭部は圭頭で、下に切り込みを入れる。
木93	斎串	溝119	9.3、2.0、0.2	頭部は圭頭で、下に切り込みを入れる。
木94	筆	溝119	11.9、径1.0	桜皮を巻き付ける。
木95	糸巻(横木)	溝119	7.6、2.7、1.3	先端に目釘が残る。
木96	糸巻(横木)	溝119	7.7、3.4、1.3	別の箇所にも穿孔あり。
木97	糸巻(横木)	溝119	10.0、1.8、0.8	ほぼ完存。

番号	種　類	出土遺構・層序	長さ、幅、厚さ(cm)	特　徴　・　備　考
木98	棒状(ヘラ状)製品	溝119	15.6、1.3、0.4	先端を削り込んで薄く加工する。
木99	棒状製品	溝119	15.2、径0.9	各面が丁寧に面取りされる。
木100	棒状製品	溝119	10.4、径1.4	各面が丁寧に面取りされる。
木101	板材	溝119	12.1、2.3、0.6	各面が丁寧に面取りされる。
木102	横櫛	溝119	4.5、4.4、0.7	右半部は欠損。11本/1㎝。
木103	箸	溝119	14.8、径0.5	先端が破損する。
木104	箸	溝119	14.5、径0.7	先端が破損する。
木105	箸	溝119	12.9、径0.5	先端が破損する。
木106	箸	溝119	11.6、径0.5	先端が破損する。
木107	皿	溝119	17.5、5.9、高1.5	直径19.4cmと推定。
木108	皿	溝119	17.6、2.3、0.8	直径22cmと推定。
木109	曲物(底板)	溝119	11.8、3.8、0.7	直径11.8cmと推定。
木110	曲物(底板)	溝119	11.8、5.4、0.7	直径15cmと推定。目釘穴あり。
木111	曲物(底板)	溝119	15.0、7.4、0.8	直径15cmと推定。
木112	曲物(蓋板)	溝119	16.1、4.6、0.5	直径20cmと推定。桜皮が残存する。
木113	板材	溝119	6.4、2.4、0.5	長辺側に小孔が連続する。
木114	下駄	溝119	16.7、8.1、高さ1.9	小型品。歯は磨り減っている。
木115	加工部材	溝119	9.5、4.6、4.3	角材で先端に枘を作り出す。
木116	加工部材	溝119	5.1、4.6、2.5	方形の板材。
木117	板材	溝119	11.0、5.2、1.5	長方形の板材。
木118	付木	溝119	11.9、2.4、1.1	片方の先端が焼成されている。
木119	付木	溝119	17.2、2.2、1.7	片方の先端が焼成されている。
木120	付木	溝119	17.7、1.1、0.9	片方の先端が焼成されている。
木121	木簡状製品	池117	6.6、3.3、0.4	付札木簡の頭部に類似するが墨書はない。
木122	箸	池117	15.2、1.2～0.5	黒檀製で重量感がある。頭部は角が面取りされる。
木123	曲物(底板)	池117	16.3、6.0、0.7	直径18cmと推定。
木124	曲物(底板)	池117	18.2、6.0、0.9	直径18.2cmと推定。周縁によごれ付着。
木125	曲物(底板)	池117	19.2、9.2、0.9	直径19.5cmと推定。目釘が残存する。
木126	曲物(蓋板)	池117	11.7、5.8、0.5	直径11.7cmと推定。桜皮は中央寄りにある。
木127	曲物(蓋板)	池117	11.9、4.7、0.4	直径17.2cmと推定。桜皮が残存する。
木128	曲物(蓋板)	池117	13.8、4.6、0.6	直径28cmと推定。桜皮が残存する。
木129	下駄	池117	22.9、12.3、3.6	ほぼ完存。歯は外側に張り出す。
木130	板材	池117	21.2、5.1、1.4	一端を削り込んだ板材。
木131	板材	池117	19.6、6.0、1.8	一端を尖り気味に加工した板材。
木132	板材	池117	14.0、6.4、2.4	厚板の中央を刳り抜こうとした製品。
木133	板材	池117	7.9、3.6、1.0	端部に小孔を2個穿つ。
木134	板材	池117	8.9、5.5、0.9	長方形の板材。
木135	板材	池117	11.3、4.4、0.8	長方形の板材。
木136	棒状製品	池117	6.4、1.8、1.4	6面を加工して角材とする。

番号	種　類	出土遺構・層序	長さ、幅、厚さ(cm)	特　徴　・　備　考
木137	棒状製品	池117	54.9、2.7、1.8	１面の中央を溝状に削り込む。
木138	棒状製品	池117	8.6、2.5、1.3	題箋頭部に類似する。墨書なし。
木139	棒状製品	池117	10.1、1.9、0.7	両端に孔を穿つ。
木140	棒状製品	池117	13.4、1.6、1.2	片方の先端を尖らせる。
木141	棒状製品	池117	16.4、2.8、2.3	片方の先端を尖らせる。
木142	棒状製品	池117	18.6、2.7、1.2	片方の先端を尖らせる。
木143	棒状(ヘラ状)製品	池117	21.6、1.6、1.1	先端を削り込むが、やや厚い。
木144	付木	池117	10.0、1.2、1.2	片方の先端が焼成されている。
木145	付木	池117	13.0、2.2、1.5	片方の先端が焼成されている。
木146	付木	池117	21.8、1.5、0.9	片方の先端が焼成されている。
木147	漆器皿	池300	不明	口縁端部のみ。非常に薄い優品。
木148	漆器椀	池300	不明	口縁端部のみ。体部に段をもつ。
木149	椀	池300	径17.3、高8.8	漆は塗られず、木目が浮き出る。
木150	箸	池300	21.2、径0.6	完存。
木151	箸	池300	17.9、0.5、0.4	片方が欠損。
木152	箸	池300	17.3、0.7、0.5	片方が欠損。
木153	板材	池300	10.2、2.0、0.7	隅丸の板材の一部にあたる。
木154	板材	池300	13.0、1.5、0.3	両端を尖り、菱形を呈する。
木155	棒状製品	池300	10.7、101、0.3	棒状を呈する板材。
木156	棒状製品	池300	9.7、1.0、0.3	棒状を呈する板材。
木157	棒状製品	池300	13.3、1.5、0.5	棒状を呈する板材。
木158	棒状製品	池300	8.1、1.5、1.3	八角形に面取りされる。工具の柄とみられる。
木159	棒状製品	池300	14.2、1.0、0.5	上端と下端を削って薄くする。
木160	棒状製品	池300	14.6、1.2、0.9	下端を削って薄くする。
木161	棒状製品	池300	15.4、0.7、0.6	細長い棒状の製品。
木162	棒状製品	池300	17.5、0.9、0.4	細長い棒状の製品。先端が尖る。
木163	棒状製品	池300	15.4、1.2、0.9	細長い棒状の製品。
木164	棒状製品	池300	22.3、0.9、0.8	断面正方形に加工される。
木165	棒状製品	池300	23.5、1.3、0.6	細長い棒状の製品。先端が尖る。
木166	加工部材	池300	7.2、4.9、3.4	断面正方形の角材を三角形に尖らせる。
木167	付木	池300	17.4、1.7、1.2	片方の先端が焼成されている。
木168	付木	池300	29.2、0.9、0.8	片方の先端が焼成されている。
木169	皿	池370	18.1、6.4、高1.4	残存状態は悪い。口径22cmと推定。
木170	下駄	池370	12.8、6.8、1.9	長方形で小型品。子供用か。
木171	下駄	池370	20.6、7.1、4.0	小型品。歯は外側に張り出す。
木172	板材	池370	24.9、8.2、1.5	隅丸の形状をもち、断面は中央が薄い。
木173	棒状製品	池370	9.5、径1.0	断面円形の棒状製品。
木174	棒状製品	池370	14.6、1.5、1.2	断面楕円形の棒状製品で下端に孔を穿つ。
木175	薄板材	池370	9.1、2.6、0.2	頭部に斎串状の切り込みがある。

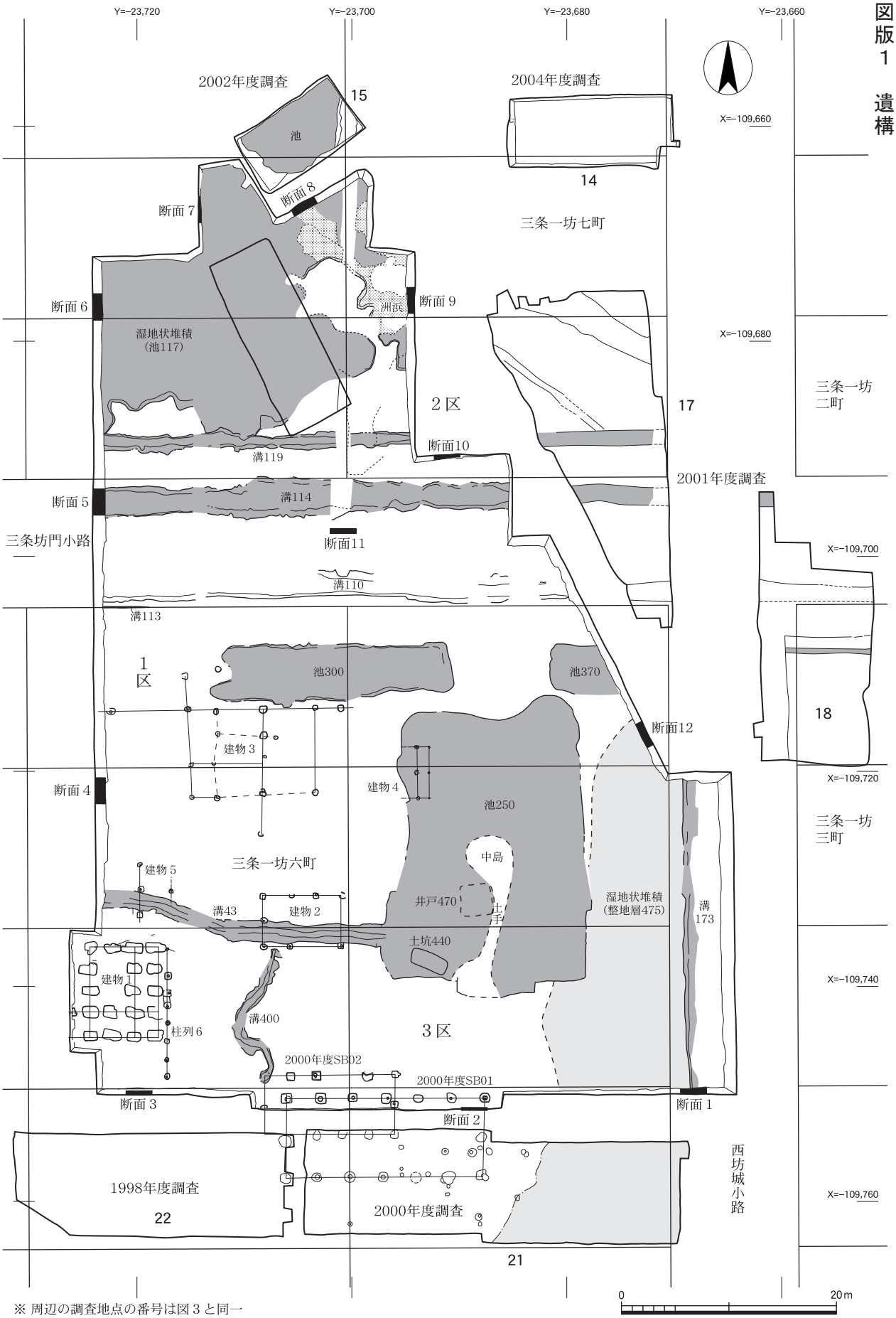
番号	種　類	出土遺構・層序	長さ、幅、厚さ(cm)	特　徴　・　備　考
木176	加工部材	池370	10.1、5.7、3.0	上・下に切り込みがある。腐朽のため中央が空洞化。
木177	付木	池370	21.7、1.9、0.7	片方の先端が焼成されている。
木178	横櫛	池250 第2層	残長3.9、幅1.4、厚0.3	最も小型品。右端のみ完存。14本/1cm。
木179	横櫛	池250 第2層	残長5.1、幅2.0、厚0.6	小型品。中央部が残存。14本/1cm。
木180	横櫛	池250	残長4.0、幅3.2、厚0.8	やや小型品。中央部が残存。12本/1cm。
木181	横櫛	池250 西肩	残長2.1、幅3.4、厚0.7	やや小型品。中央部が残存。11本/1cm。
木182	横櫛	池250 西肩	残長4.3、幅3.8、厚0.8	通常製品。中央部が残存。11本/1cm。
木183	横櫛	池250 第2層	残長9.1、幅3.8、厚0.9	通常製品。中央部から右端まで残存。11本/1cm。
木184	横櫛	池250 第2層	残長2.6、幅3.9、厚0.9	通常製品。中央部が残存。11本/1cm。
木185	横櫛	池250 西肩	残長5.1、幅3.9、厚0.9	通常製品。左半が残存。10.5本/1cm。
木186	横櫛	池250 第2･3層	残長5.2、幅3.9、厚0.9	通常製品。中央部が残存。11本/1cm。
木187	横櫛	池250 第3層	残長4.0、幅3.9、厚1.0	通常製品。右半が残存。12.5本/1cm。
木188	横櫛	池250 西肩 第2層	残長7.4、幅4.0、厚0.9	通常製品。中央部から左端まで残存。９本/1cm。
木189	横櫛	池250 西肩	残長5.3、幅4.1、厚0.9	通常製品。右半が残存。11本/1cm。
木190	横櫛	池250 西肩	残長4.8、幅4.1、厚0.9	通常製品。右半が残存。11本/1cm。
木191	横櫛	池250 第2層	残長11.8、幅4.2、厚0.8	通常製品。中央部が残存。10本/1cm。
木192	檜扇	池250 第2層	長23.7、基幅1.0、厚0.1	小型品。完存。
木193	檜扇	池250 第2層	長23.8、基幅1.0、厚0.1	小型品。完存。
木194	檜扇	池250 第2層	残長11.7、頭幅1.6、厚0.1	小型品。下半が欠損。
木195	檜扇	池250 第2層	残長19.5、頭幅1.7、厚0.2	下半が欠損。同規模品なし。墨痕付着。
木196	檜扇	池250 第3層	長25.9、基幅1.7、厚0.2	中型品。ほぼ完存。
木197	檜扇	池250 第3層	残長25.8、基幅1.7、厚0.2	中型品。上端が欠損。
木198	檜扇	池250 第3層	長25.9、基幅1.6、厚0.2	中型品。ほぼ完存。
木199	檜扇	池250 第3層	長25.9、頭幅3.0、厚0.2	中型品。下半の一部が欠損。
木200	檜扇	池250 第3層	残長20.2、基幅1.8、厚0.2	中型品。上半が欠損。
木201	檜扇	池250 第3層	残長18.9、厚0.2	中型品。上半が欠損。
木202	檜扇	池250 第3層	長33.5、頭幅3.2、基幅1.5、厚0.2	大型品。完存。
木203	檜扇	池250 第3層	長33.5、頭幅3.2、基幅1.4、厚0.2	大型品。完存。
木204	檜扇	池250 第3層	長33.6、頭幅3.2、基幅1.5、厚0.2	大型品。完存。
木205	檜扇	池250 第3層	残長16.6、基幅1.9、厚0.2	下半のみ残存。
木206	檜扇	池250 第3層	残長16.6、基幅2.0、厚0.3	下半のみ残存。
木207	檜扇	池250 第3層	残長16.6、基幅1.9、厚0.2	下半のみ残存。
木208	檜扇	池250 第3層	残長16.4、基幅2.0、厚0.2	下半のみ残存。
木209	檜扇	池250 第3層	残長16.5、基幅1.9、厚0.2	下半のみ残存。
木210	檜扇	池250 第2層	残長21.7、幅1.0、厚0.3	幅が狭く厚みがある。上半が欠損。
木211	ヘラ状製品	池250 第2層	23.0、1.6、0.6	先端を薄く加工する。
木212	ヘラ状製品	池250 第2層	15.6、2.0、0.6	先端を薄く加工する。
木213	ヘラ状製品	池250 西肩 第2層	15.5、2.0、0.6	先端を薄く加工する。
木214	ヘラ状製品	池250 第2層	15.3、1.6、0.6	先端を薄く加工する。完存。

木218	ヘラ状製品	池250 第3層	10.8、4.1、0.9	板材をヘラ状に加工。頭部に穿孔。完存。
木219	ヘラ状製品	池250 第3層	11.2、2.9、0.5	板材をヘラ状に加工する。
木220	串状製品	池250 東肩 第2層	7.8、0.8、0.2	先端を尖らせる。
木221	串状製品	池250 東肩 第2層	9.3、1.0、0.2	先端を尖らせる。
木222	串状製品	池250 第2層	9.1、0.6、0.6	先端を尖らせる。
木223	棒状製品	池250 第2層	18.2、0.9、0.6	一端が欠損する。
木224	棒状製品	池250 第3層	18.7、0.6、0.4	完存。箸か。
木225	棒状製品	池250 第3層	20.9、1.2、0.9	断面がほぼ正方形を呈する。
木226	棒状製品	池250 東肩 第2層	25.3、0.9、0.6	両端が欠損する。
木227	棒状製品	池250 東肩 第2層	28.2、1.0、0.5	両端が欠損する。
木228	棒状製品	池250 東肩 第2層	34.4、0.8、0.6	両端が欠損する。焼成されている。
木229	棒状製品	池250 第3層	37.5、0.9、0.7	両端が欠損する。
木230	棒状製品	池250 西肩	44.7、1.1、0.8	断面がほぼ正方形を呈する。完存か。
木231	棒状製品	池250 第2層	92.3、1.4、1.2	長さ92cmに達する。先端を尖らせる。完
木232	浮子	池250 第2層	9.3、1.2、0.5	先端を尖らせる。
木233	浮子	池250 第2層	7.2、0.9、0.6	先端を尖らせる。完存。
木234	浮子	池250 第2層	9.4、1.0、0.5	先端を尖らせる。
木235	曲物（底板）	池250 第2層	5.5、3.2、0.4	径5.5㎝ある曲物のミニチュア製品。
木236	琴柱形	池250 第2層	4.5、3.0、0.5	上・下に切り込みを入れ、矢印形に加工て
木237	柄	池250 第3層	15.7、径1.0	６角形に面取りされ、上端に枘穴がある。
木238	柄	池250 第3層	13.6、径3.0	下端径4.0㎝。一端をグリップ状に膨らま
木239	弓	池250 第3層	13.5、径1.4	先端を薄く加工する。
木240	曲物（底板）	池250	径13.0、0.8	底板とみられるが目釘や綴じ穴はない。
木241	折敷	池250 第2層	46.1、19.5、0.4	長方形曲物の蓋板か。側板は桜皮で綴じら
木242	下駄	池250 第3層	21.2、10.3、2.7	ほぼ完存。歯は磨り減っている。
木243	車輪形	池250 第3層	径10.0、0.8	円板。中心に円孔。縁とスポークを墨書。
木244	舟形	池250 第3層	19.6、2.4、1.0	中央を刳りぬいて舟形に加工する。
木245	角材	池250 北西肩 第2層	23.0、1.6、1.6	断面ほぼ正方形。目釘１箇所と釘穴２箇所
木246	角材	池250 第2層	19.7、2.1、1.4	断面ほぼ正方形。上端に目釘あり。
木247	加工部材	池250 北肩	8.3、3.2、4.0	段差や波状に加工され、装飾性が高い。ク
木248	加工部材	池250 第2層	14.3、3.9、1.4	角材で、切り込みや穿孔がある。完存。
木249	加工部材	池250 西肩	19.2、3.5、3.0	上端に枘と枘穴がある。脚部の部品か。
木250	板材	池250	7.5、5.5、0.7	円板。中央に円孔あり。
木251	板材	池250 第2層	10.9、7.5、0.6	円板。中央に円孔あり。
木252	棒状製品	池250 第3層	11.9、3.4、2.6	上端を削り込んで切断する。
木253	角材	池250 第3層	8.5、7.6、7.2	断面正方形。建築用の部材か。

木265	箸	溝107	15.4、0.7、0.5	先端が尖り気味。片方が欠損。
木266	箸	溝107	14.7、0.6、0.6	片方が欠損。
木267	箸	溝107	9.8、0.6、0.6	片方が欠損。
木268	箸	溝107	9.5、0.6、0.6	片方が欠損。
木269	板材	溝107	6.4、5.1、0.7	４角形に加工された板材。
木270	板材	溝107	6.1、0.4	円板。中央に円孔を穿つ。
木271	板材	溝145	13.0、4.0、0.6	側面が削り込まれる。杓子か。
木272	板材	溝145	13.6、1.7、1.3	円板であるが厚い。円孔あり。直径34㎝
木273	板材	溝145	11.0、4.5、0.4	１辺は円孔状に切断される。目釘が残存。
木274	箸	溝145	22.6、0.5、0.5	先端は欠損する。
木275	板材	溝145	23.0、4.6、0.2	幅4.6㎝ある細長い板材。
木276	加工部材	溝145	4.6、3.5、3.0	サイコロ状の角材で１面に突出部がある。
木277	柄杓柄（底板）	溝145	径11.1～10.5、厚0.7	柄の底板でやや楕円形を呈する。
木278	柄杓柄	溝145	56.5、2.5、1.3	先端は尖り気味。
木279	木槽（角盥）	建物１各柱穴	底部径43、内径26～28、残高23	柱穴底で礎板として使用。
木280	木槽（角盥体部片）	建物１柱穴30	20.5、10.5、2.5	柱穴底で礎板として使用。
木281	木槽（角盥体部片）	建物１柱穴30	22.3、10.3、2.8	柱穴底で礎板として使用。
木282	木槽（角盥体部片）	建物１柱穴54	20.3、10.1、3.3	柱穴底で礎板として使用。
木283	礎板	柱列６柱穴111	43.0、9.5、1.9	柱穴底で使用。
木284	礎板	柱列６柱穴112	26.9、9.1、2.0	柱穴底で使用。

図　　版

図版1　遺構

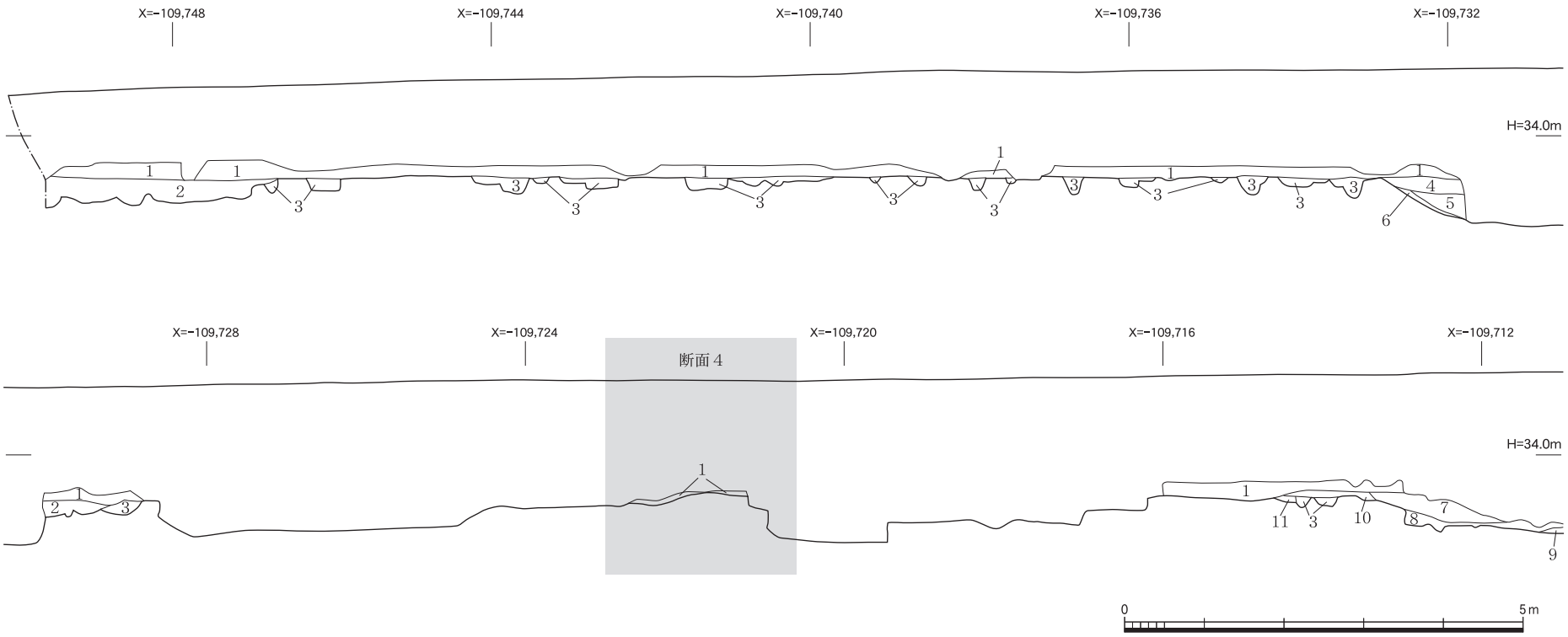


※ 周辺の調査地点の番号は図3と同一

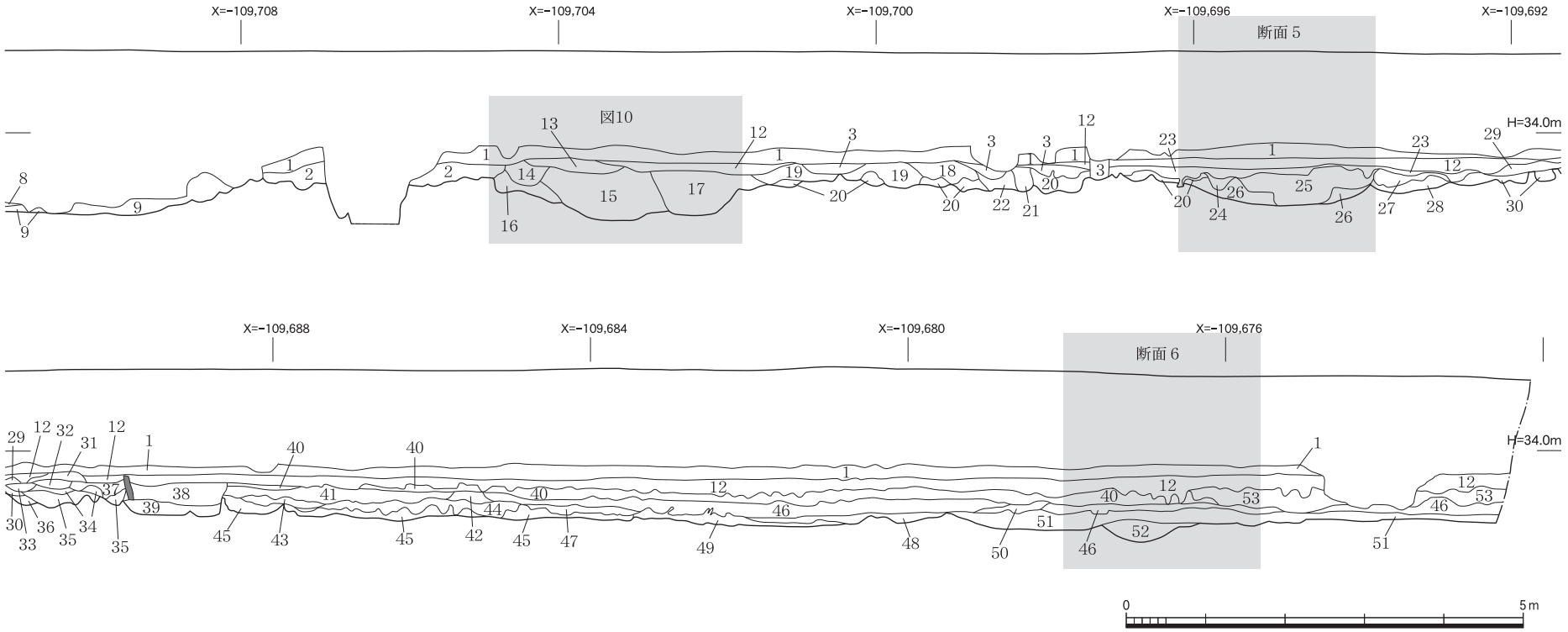
遺構配置図（1：500）

図版２　遺構

1区西壁断面図１（１：80）



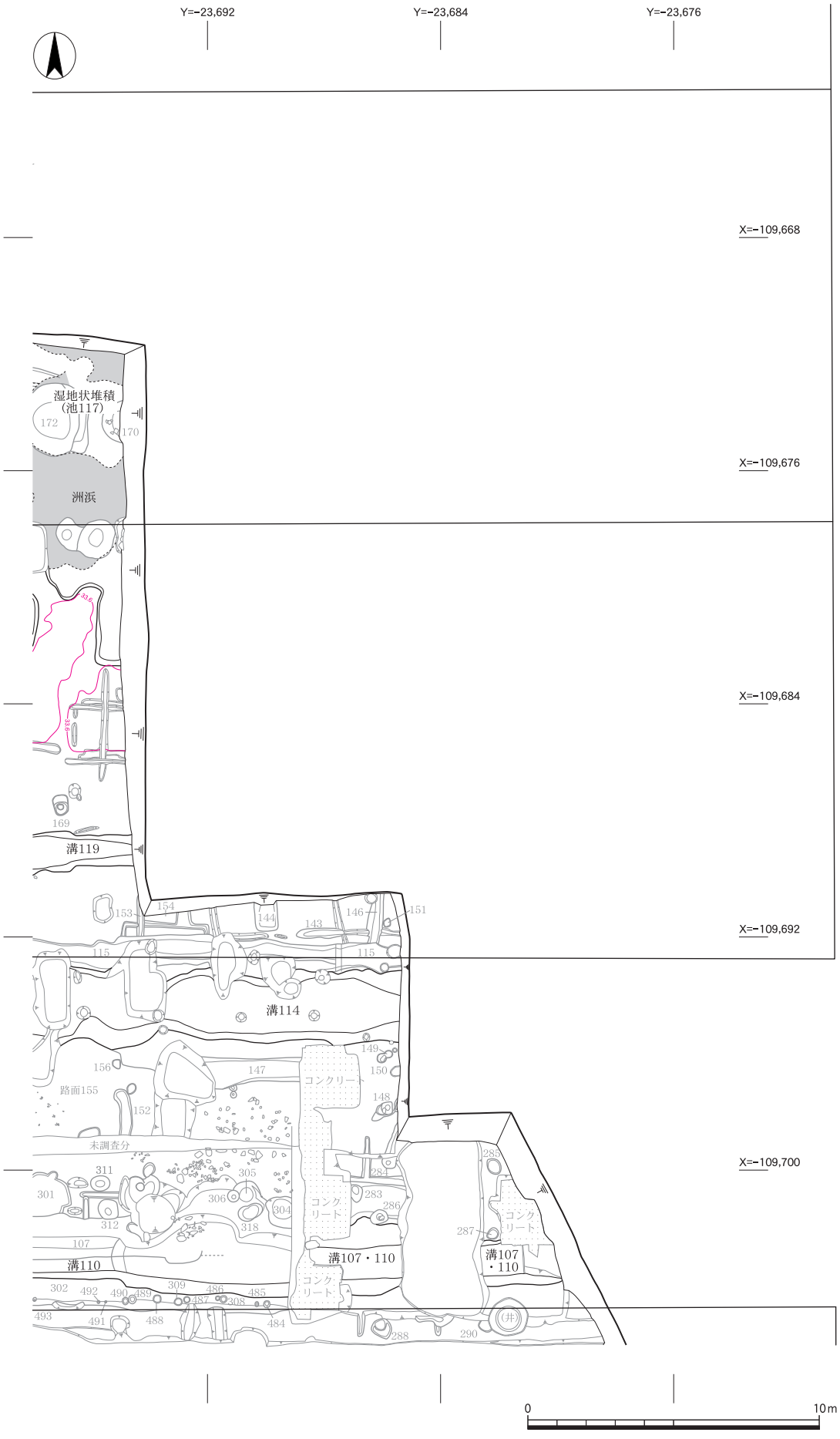
1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土（旧耕土）
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混（土取穴）
3　5Y5/1 灰色粘質土（耕作溝）
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土（溝43）
5　2.5Y4/1 黄灰色粘質土（溝43）
6　2.5Y4/1 黄灰色粘質土に5Y6/1 灰色シルト混（溝43）
7　10YR4/2 灰黄褐色粘質土に2.5Y8/1 灰白色粘質土ブロック混
8　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土、植物遺体少量含
9　2.5Y4/1 黄灰色粘質土に2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘質土混、植物遺体少量含
10　10YR4/2 灰黄褐色粘質土、炭少量含
11　2.5Y3/2 黒褐色粘質土（柱穴105）
12　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（旧耕土）
13　5Y3/2 オリーブ黒色砂質土（耕作溝）
14　2.5Y4/1 黄灰色微砂
15　10YR3/1 黒褐色砂質土（溝110）
16　2.5Y4/1 黄灰色粘質土（溝113）
17　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（溝107）
18　2.5Y3/2 黒褐色砂質土（耕作痕跡）
19　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土に5Y5/1 灰色粘質土ブロック混
20　5Y5/1 灰色粘質土に5GY5/1 オリーブ 灰色粘質土 地山と2.5Y2/1 黒色粘質土混
21　2.5Y3/2 黒褐色砂質土（耕作痕跡）
22　5Y5/1 灰色粘質土に礫多量混
23　2.5Y3/2 黒褐色粘質土
24　2.5Y3/2 黒褐色粘質土
25　10YR3/1 黒褐色粘質土（溝114）
26　5GY5/1 オリーブ灰色粘質土（溝114）



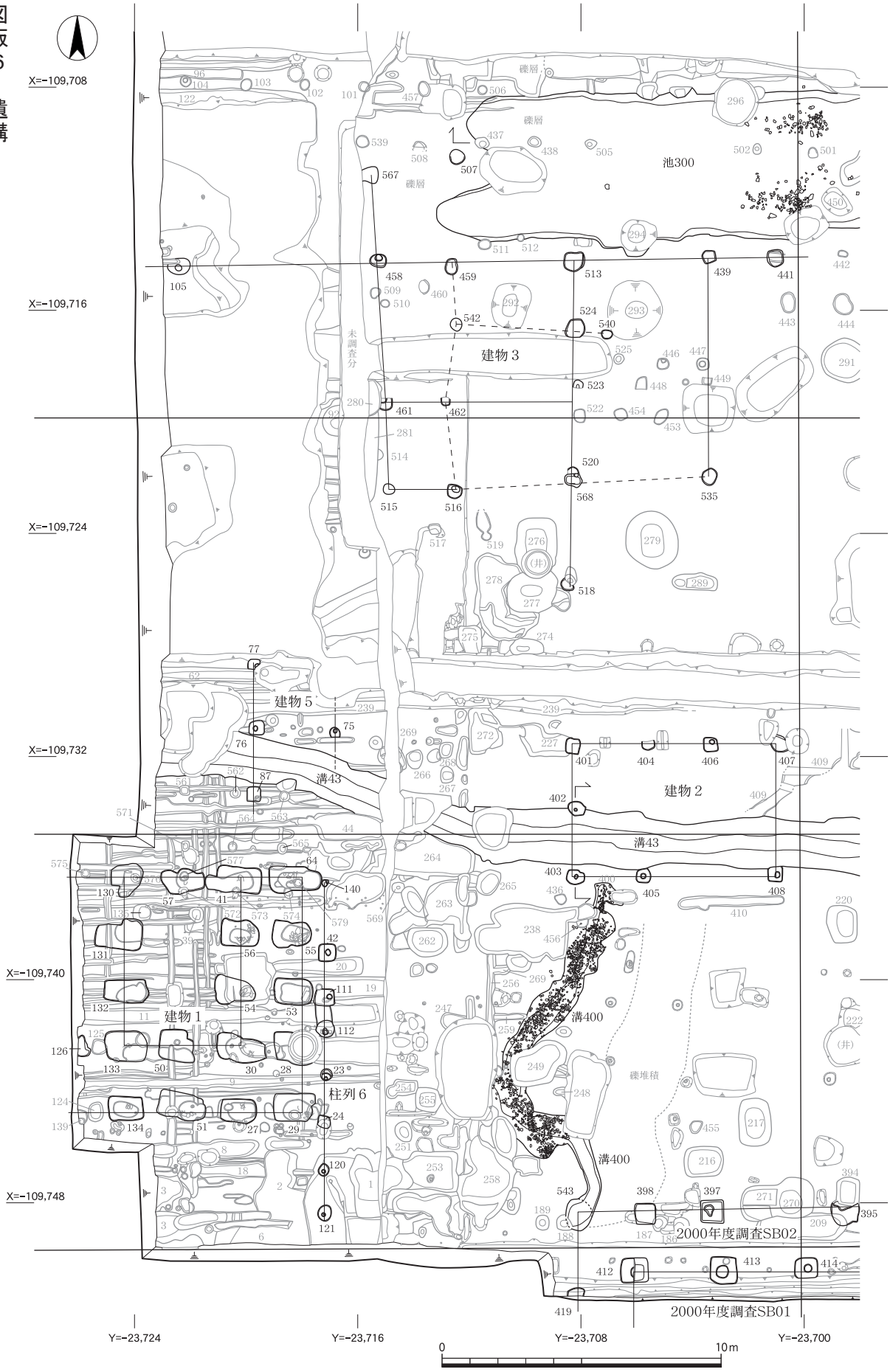
27　10YR3/2 黒褐色粘質土に10YR5/2 灰黄褐色粘質土混
28　10YR6/1 褐灰色粘質土に2.5Y4/1 黄灰色粘質土混
29　2.5Y3/2 黒褐色粘質土に礫混（畦畔？）
30　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土に5GY5/1 オリーブ灰色粘質土 地山混
31　2.5Y3/2 黒褐色粘質土に礫混（溝115）
32　2.5Y3/2 黒褐色粗砂礫（溝115）
33　10YR3/1 黒褐色粘質土
34　10YR6/3 にぶい黄燈色細砂
35　2.5Y3/2 黒褐色微砂と2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂の互層
36　5Y3/2 オリーブ黒色微砂に10YR3/1 黒褐色粘質土と5GY5/1 オリーブ灰色粘質土 地山混
37　2.5Y3/1 黒褐色粘質土
38　2.5Y2/1 黒色粘質土（溝119）
39　10YR3/1 黒褐色砂質土、植物遺体含（溝119）
40　10YR2/2 黒褐色粘質土
41　2.5Y2/1 黒色粘質土、植物遺体少量含（湿地状堆積）
42　10YR3/1 黒褐色粘質土（畦畔状の高まり）
43　10YR4/2 灰黄褐色微砂に礫混
44　2.5Y3/2 黒褐色砂質土、植物遺体含、変形構造あり
45　2.5Y3/2 黒褐色砂質土に5GY5/1 オリーブ灰色粘質土 地山混、変形構造が顕著
46　10YR3/1 黒褐色粘質土（湿地状堆積、池117）
47　7.5YR2/1 黒色粘質土と10YR6/2 灰黄褐色微砂の互層
48　2.5Y2/1 黒色粘質土、植物遺体少量含
49　10YR6/2 灰黄褐色微砂、植物遺体少量含
50　2.5Y3/2 黒褐色微砂
51　10YR2/1 黒色粘質土、植物遺体多量含
52　10YR4/2 灰黄褐色粗砂礫
53　10YR2/1 黒色粘質土

図版3　遺構

遺構平面図１（平安時代、１：200）



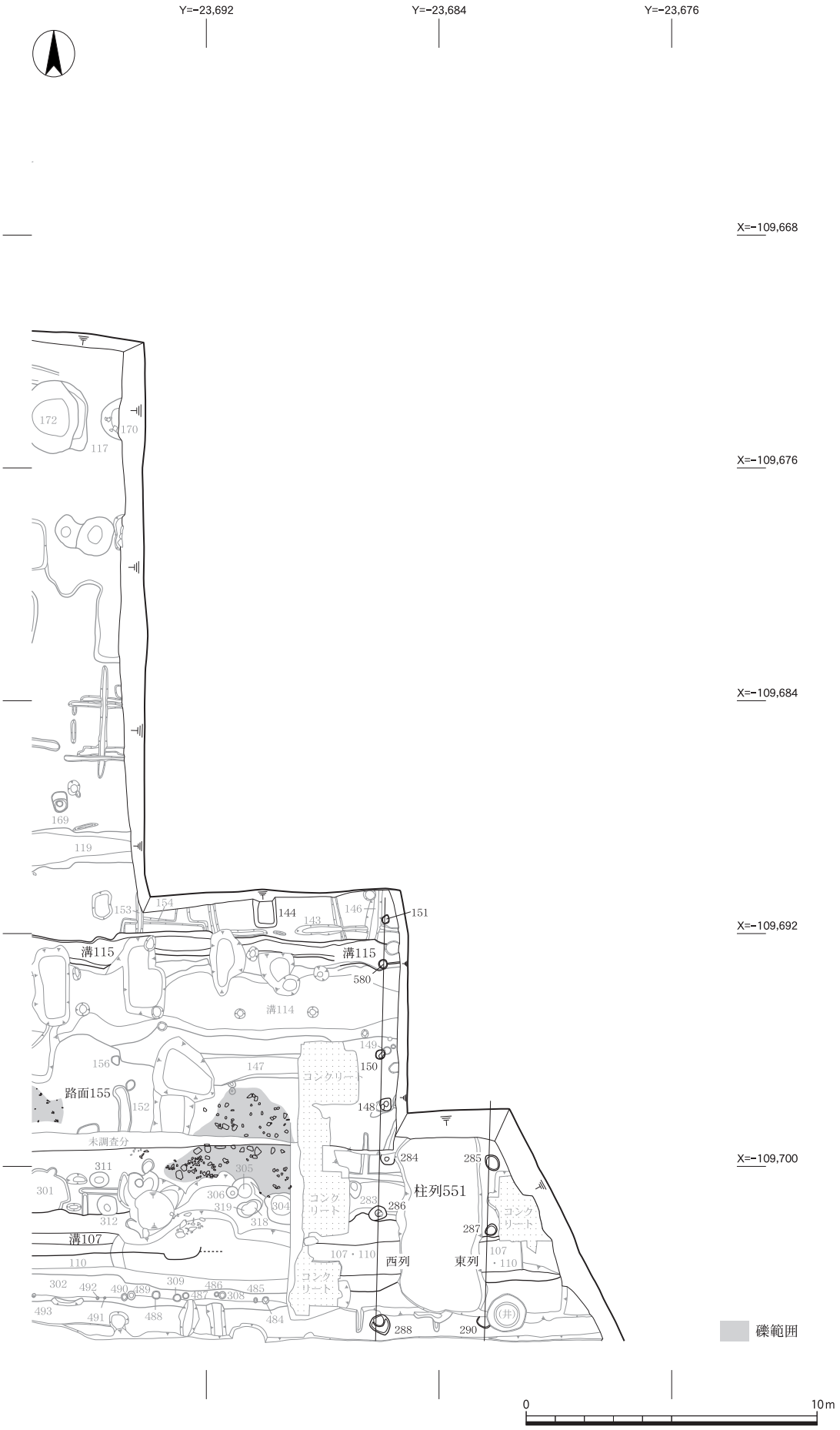
遺構平面図２（平安時代、１：200）



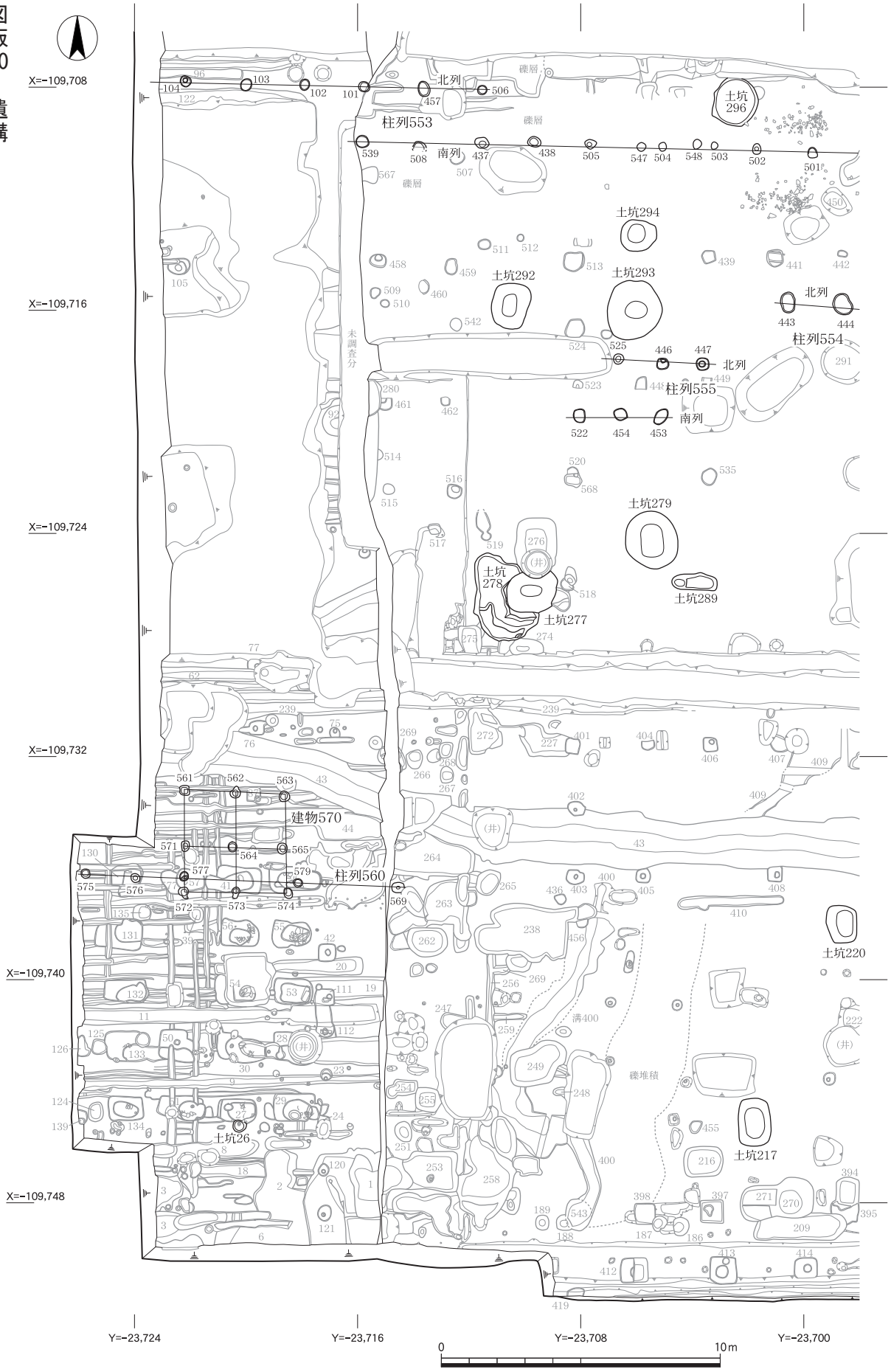
遺構平面図３（平安時代、１：200）

遺構平面図４（平安時代、１：200）

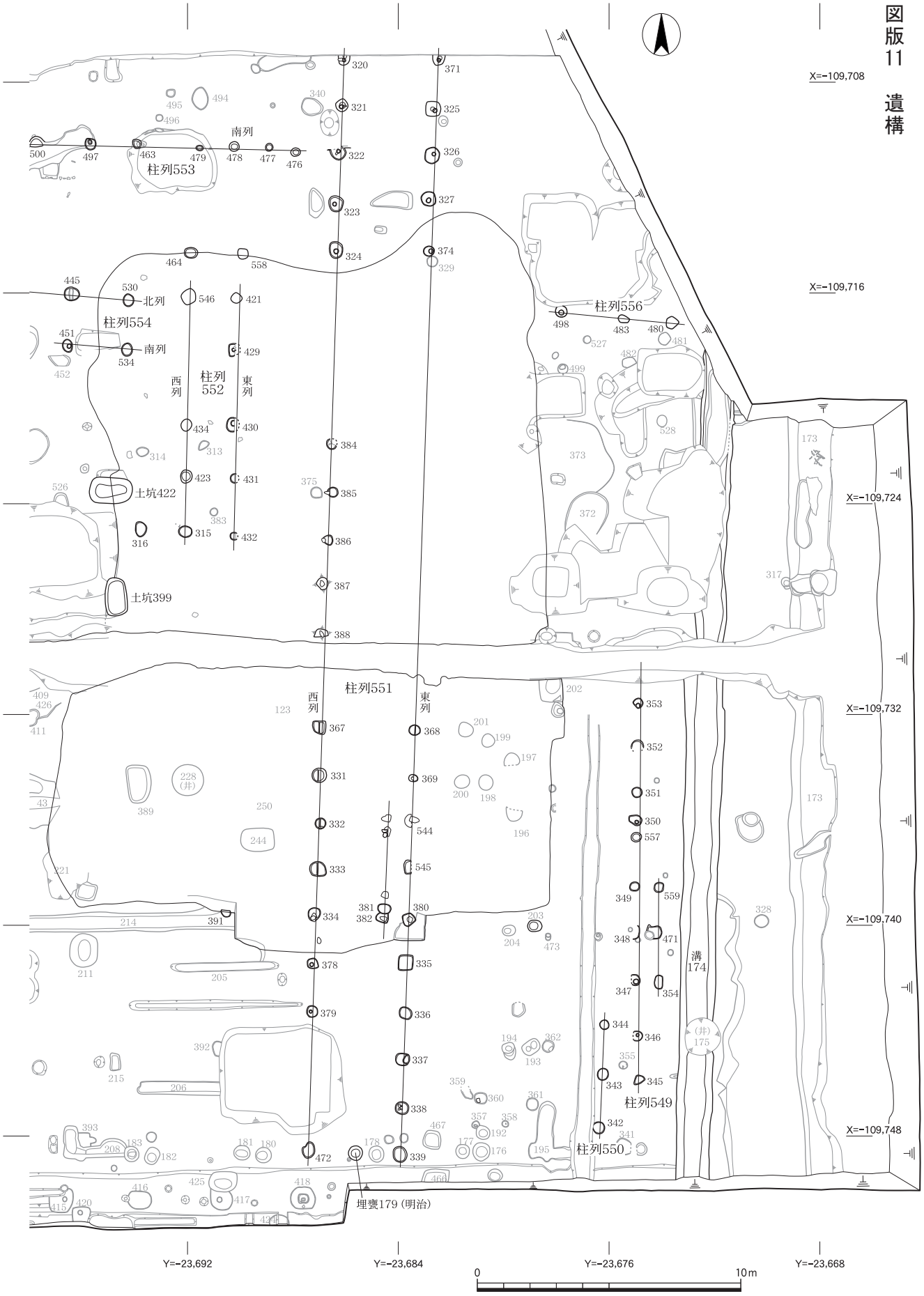
遺構平面図５（江戸時代、１：200）



遺構平面図６（江戸時代、１：200）

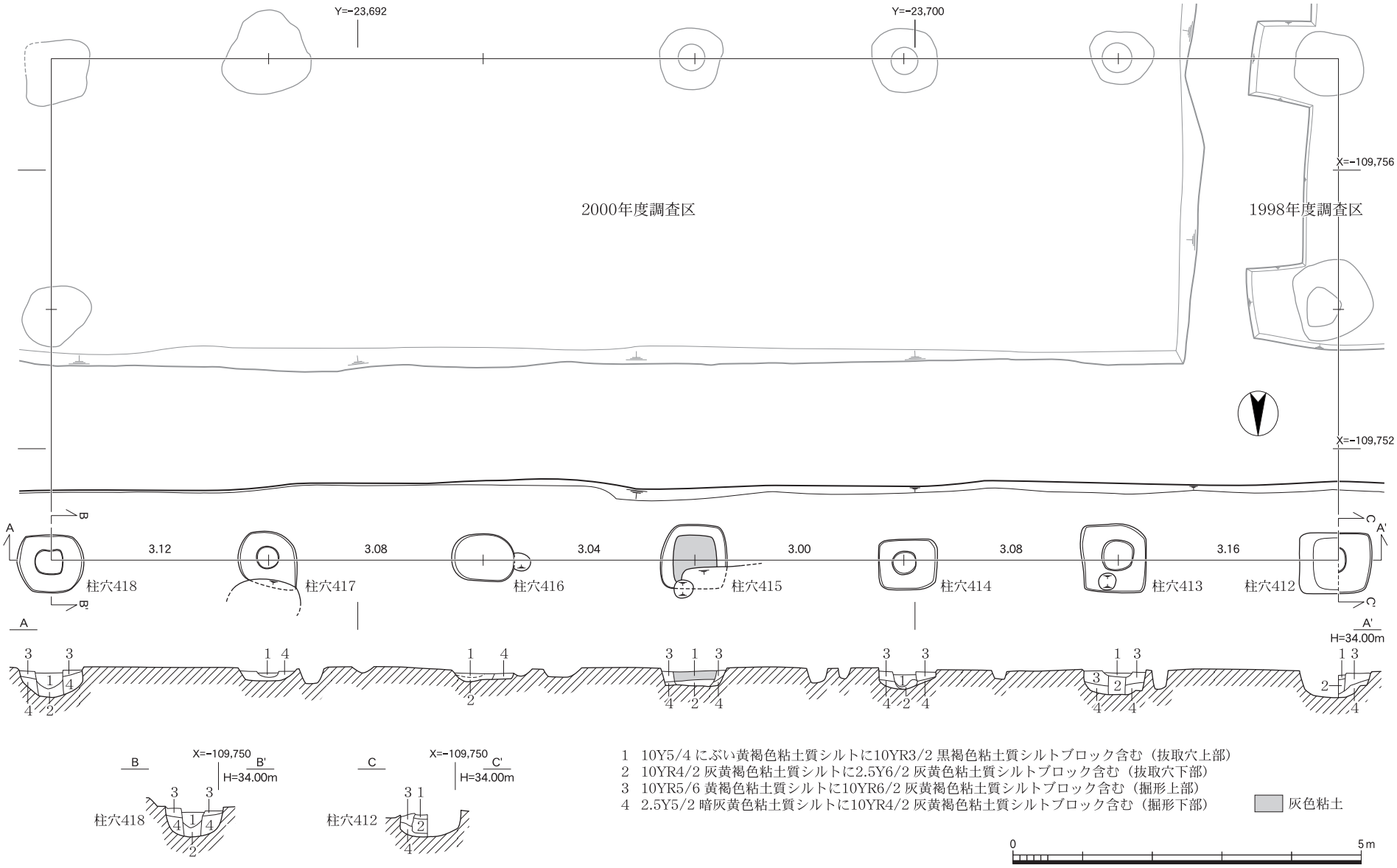


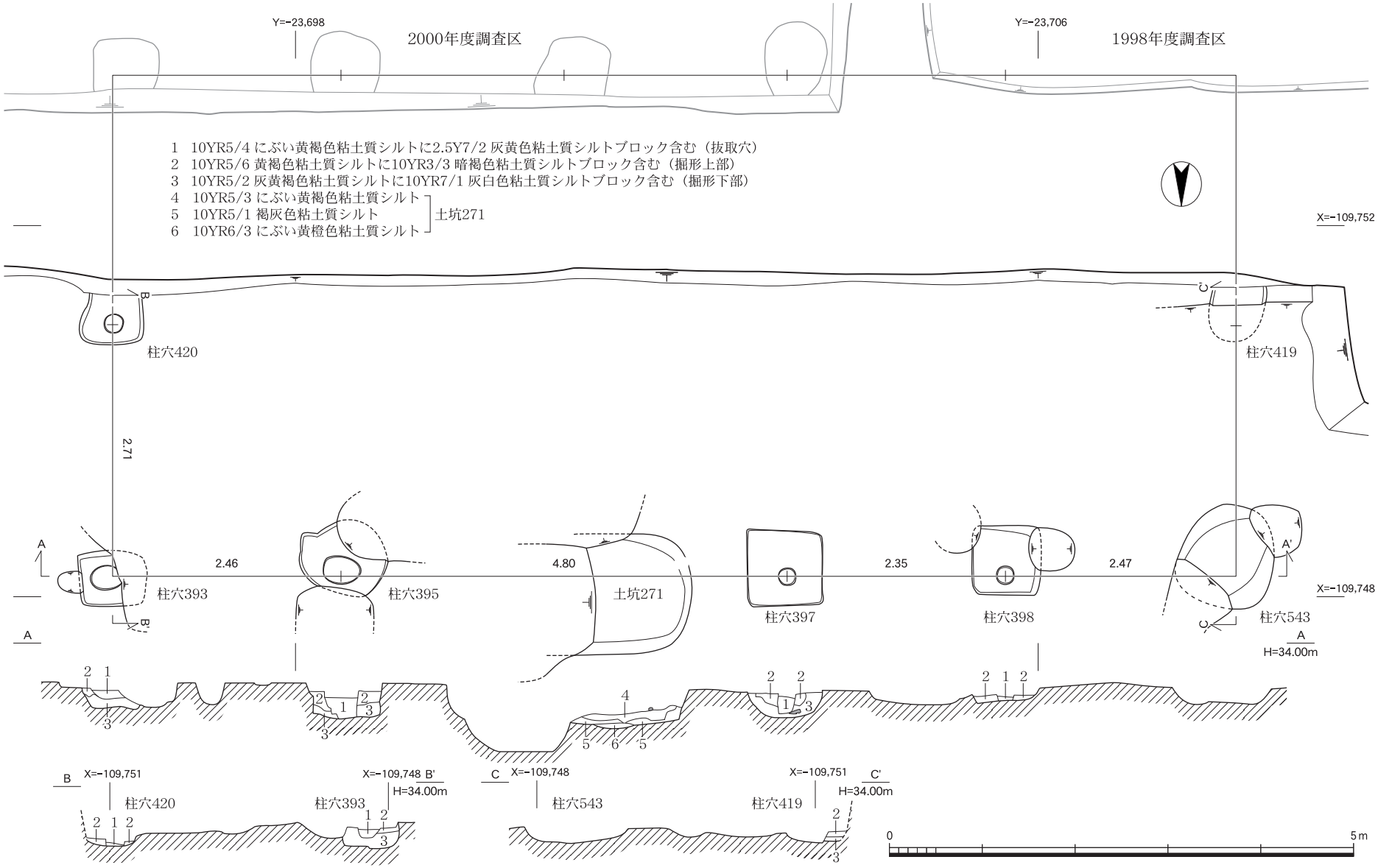
遺構平面図７（江戸時代、１：200）



遺構平面図８（江戸時代、１：200）

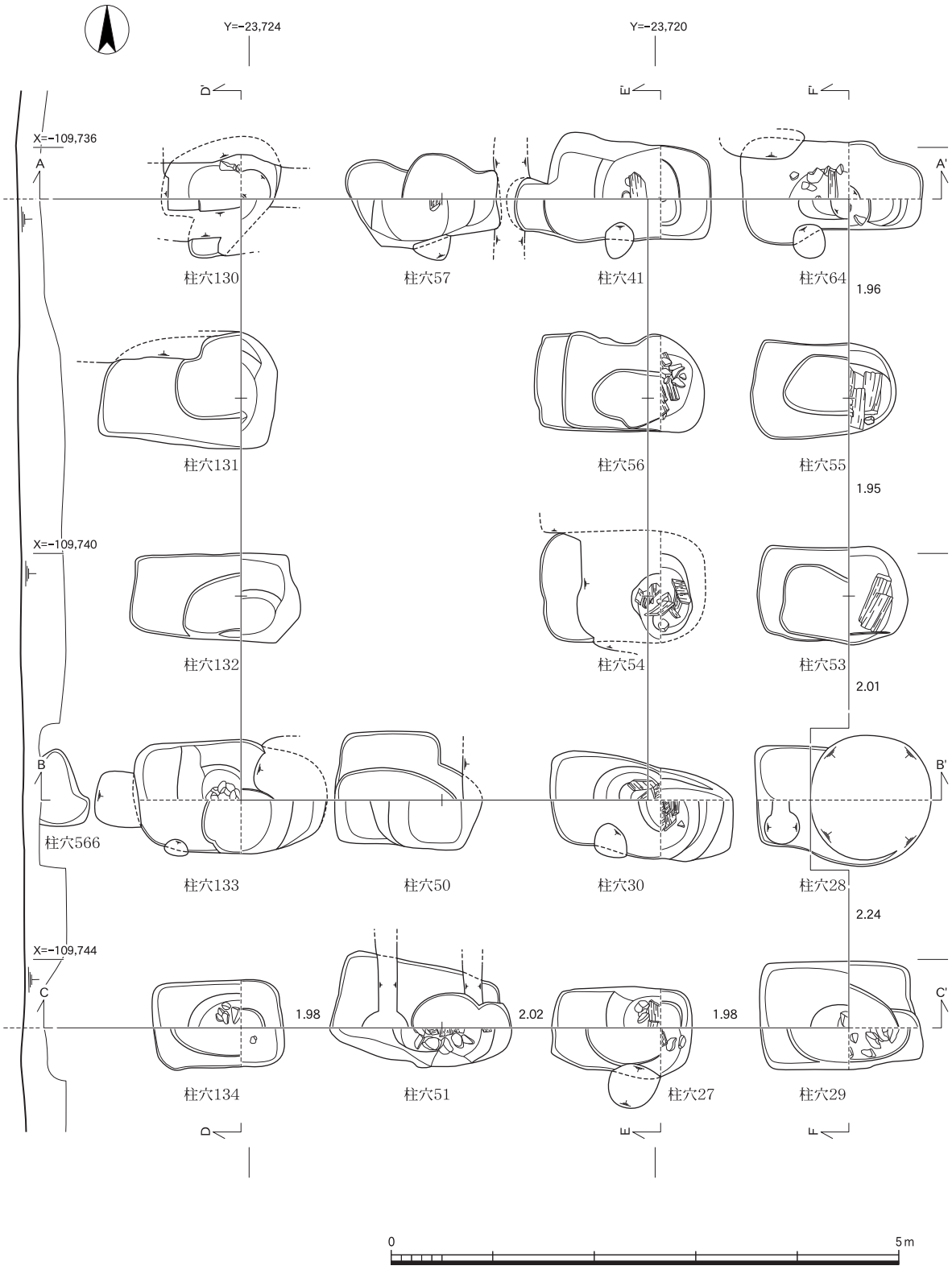
2000年度調査SB01実測図（1：80）





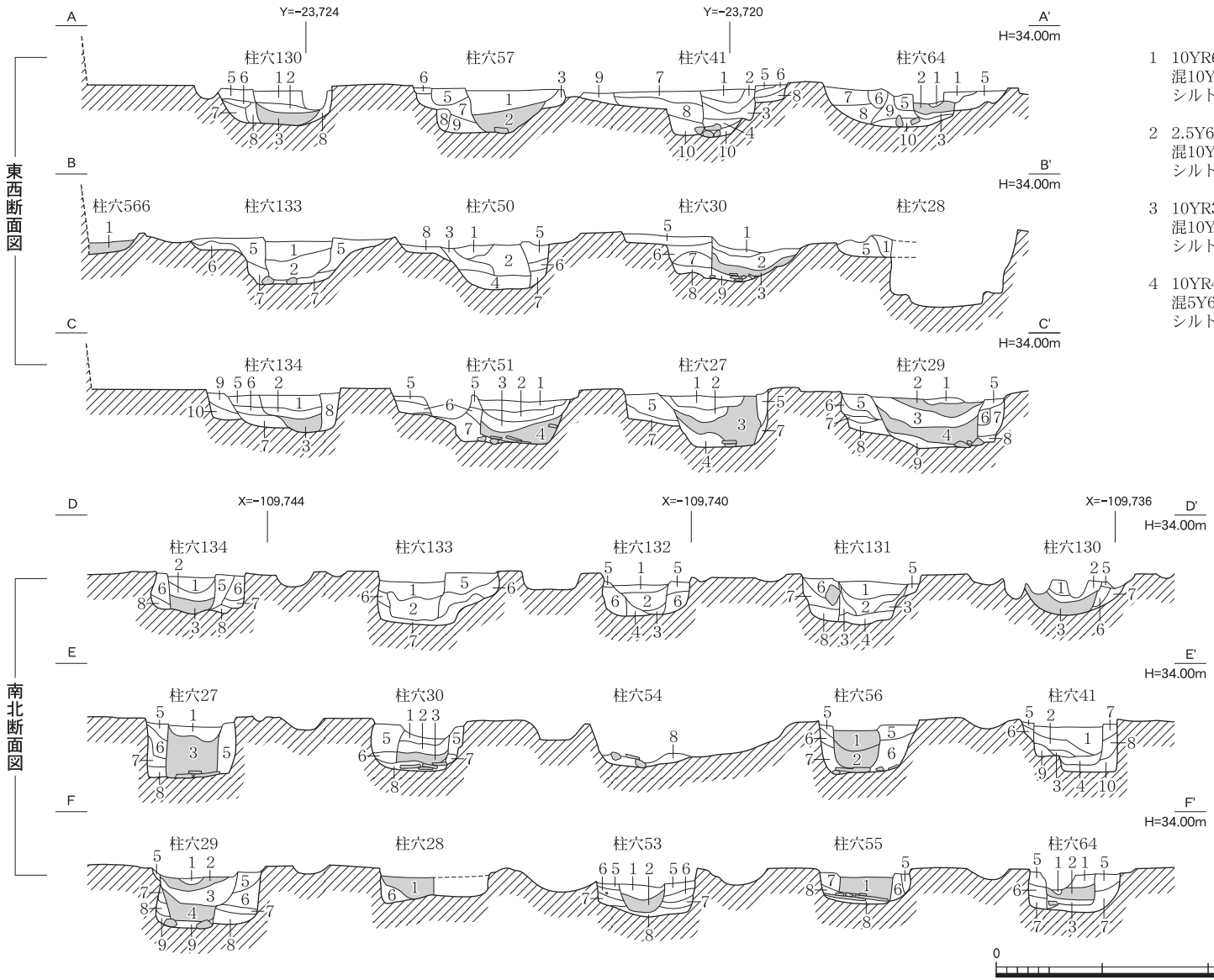
2000年度調査SB02実測図（1：60）

図版13 遺構


Y=-23,724
Y=-23,720
D
E
F
X=-109,736
A
A'
柱穴130
柱穴57
柱穴41
柱穴64
1.96
柱穴131
柱穴56
柱穴55
1.95
X=-109,740
柱穴132
柱穴54
柱穴53
2.01
B
B'
柱穴566
柱穴133
柱穴50
柱穴30
柱穴28
2.24
X=-109,744
C
C'
1.98
2.02
1.98
柱穴134
柱穴51
柱穴27
柱穴29
D
E
F
0
5m

建物１平面図（１：60）

建物１断面図（１：60）



1　10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト
混10YR4/2 灰黄褐色粘土質
シルトブロック（抜取穴、焼土・炭含む）

2　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルト
混10YR5/2 灰黄褐色粘土質
シルトブロック（抜取穴、焼土・炭含む）

3　10YR3/2 黒黄褐色粘土質シルト
混10YR6/3 にぶい黄橙色粘土質
シルトブロック（抜取穴、焼土・炭含む）

4　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
混5Y6/1 灰色粘土質
シルトブロック（抜取穴、焼土・炭含む）

5　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
混2.5Y5/3 黄褐色粘土質
シルトブロック（掘形）

6　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
混2.5Y6/2 灰黄色粘土質
シルトブロック（掘形）

7　10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
混2.5Y6/2 灰黄色粘土質
シルトブロック（掘形）

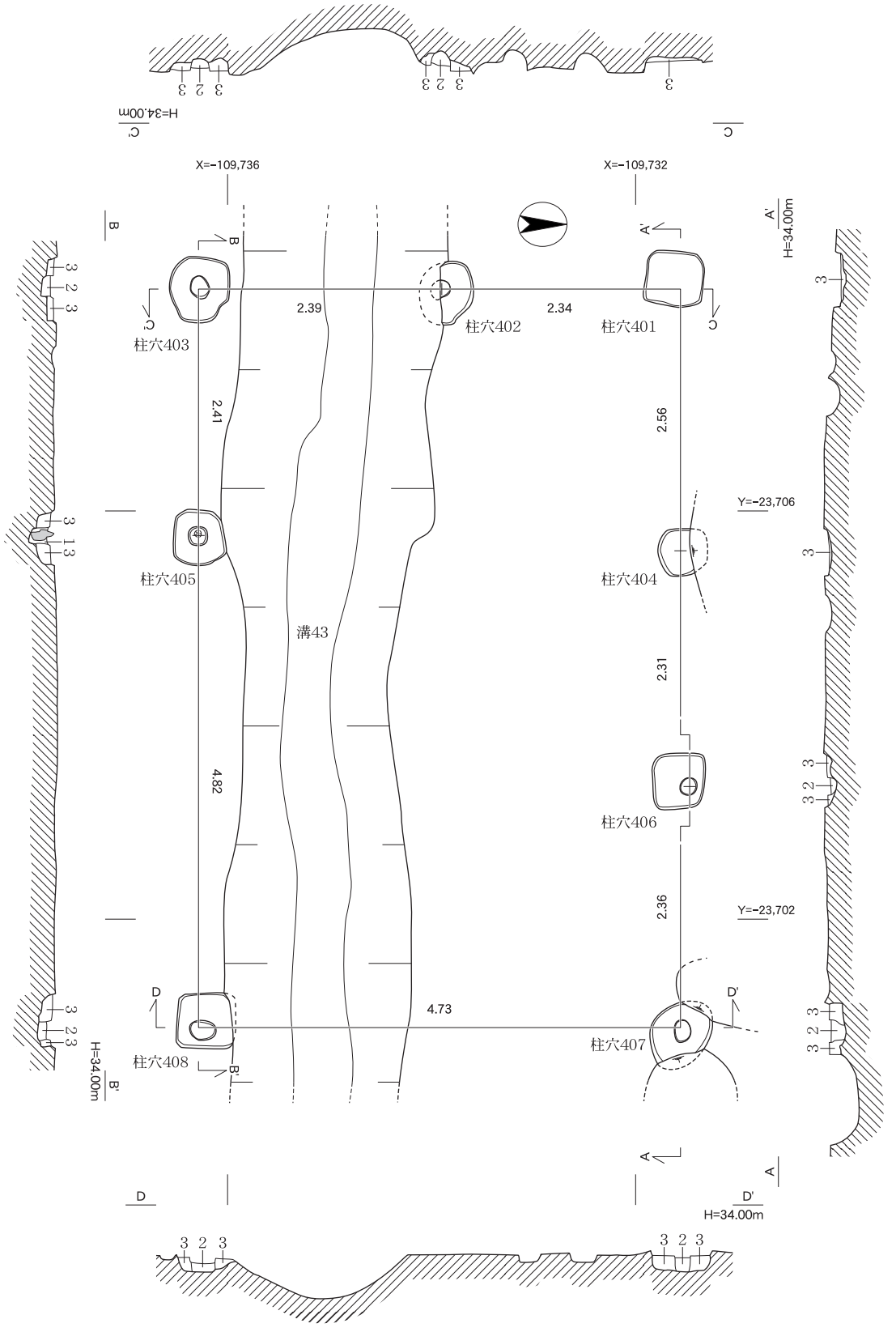
8　10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
混10YR4/2 灰黄褐色粘土質
シルトブロック（掘形）

9　2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト
混10YR4/2 灰黄褐色粘土質
シルトブロック（掘形）

10　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
混2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質
シルトブロック（掘形）

焼土が多い

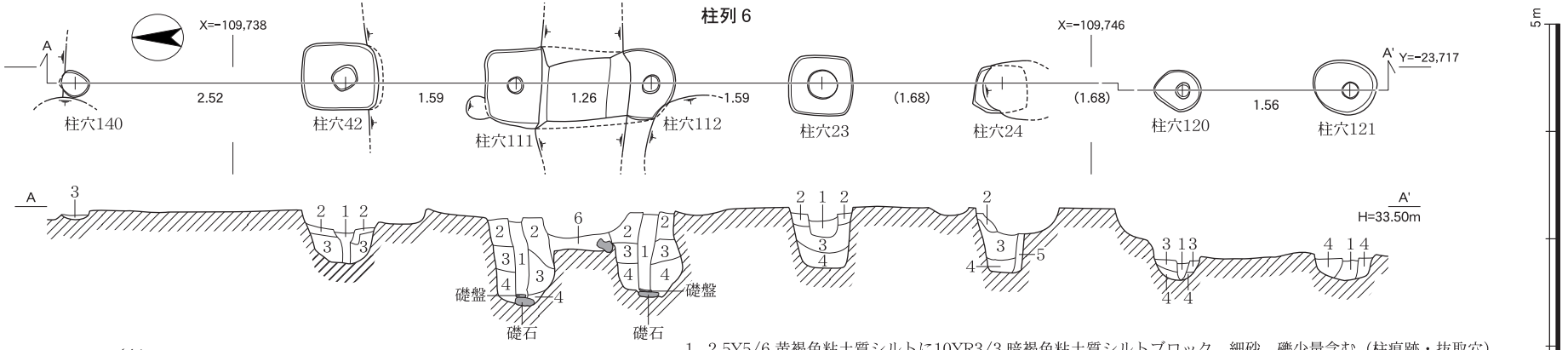
0　5m



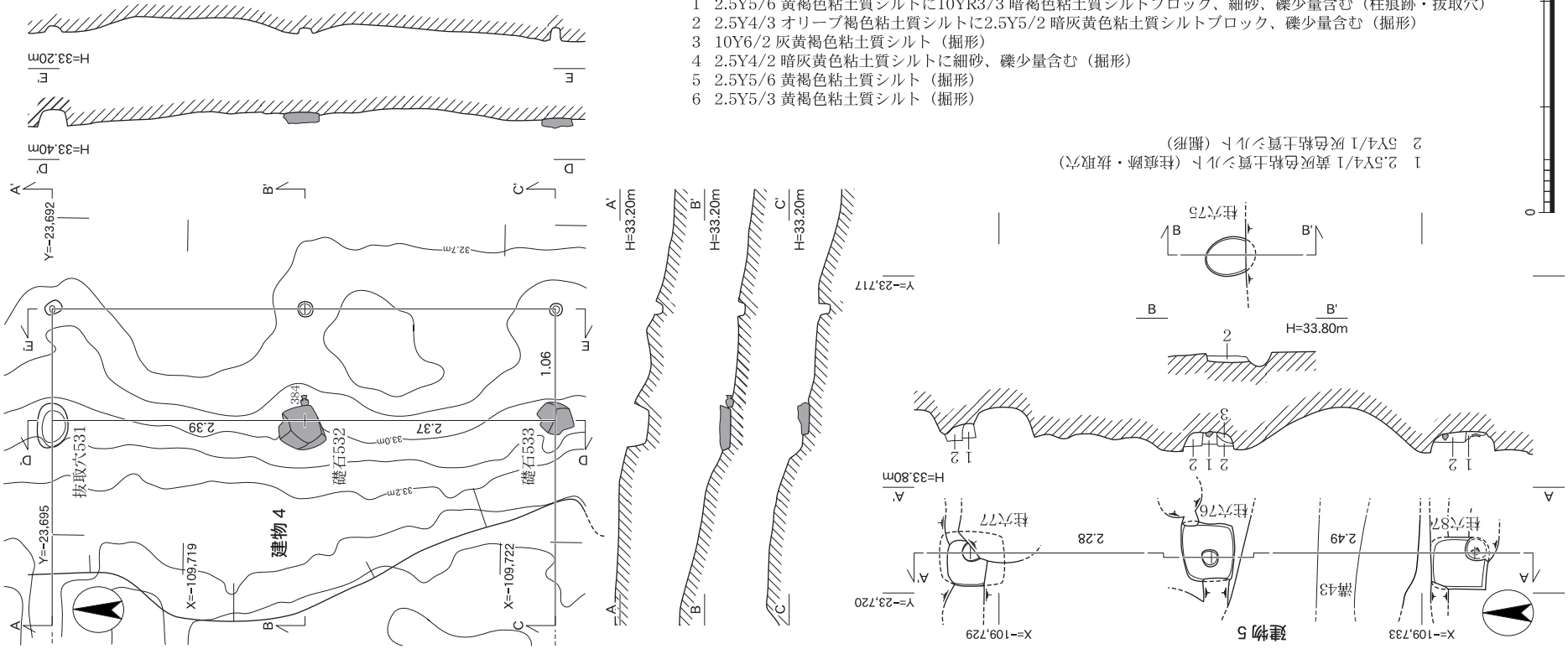
1　10YR6/1 褐灰色粘土（柱材周囲）
2　10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルトに10YR3/2 黒褐色粘土質シルトブロック含む（柱痕跡・抜取穴）
3　10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルトに10YR3/1 黒褐色粘土質シルトブロック含む（掘形）

0　5m

建物２実測図（１：60）

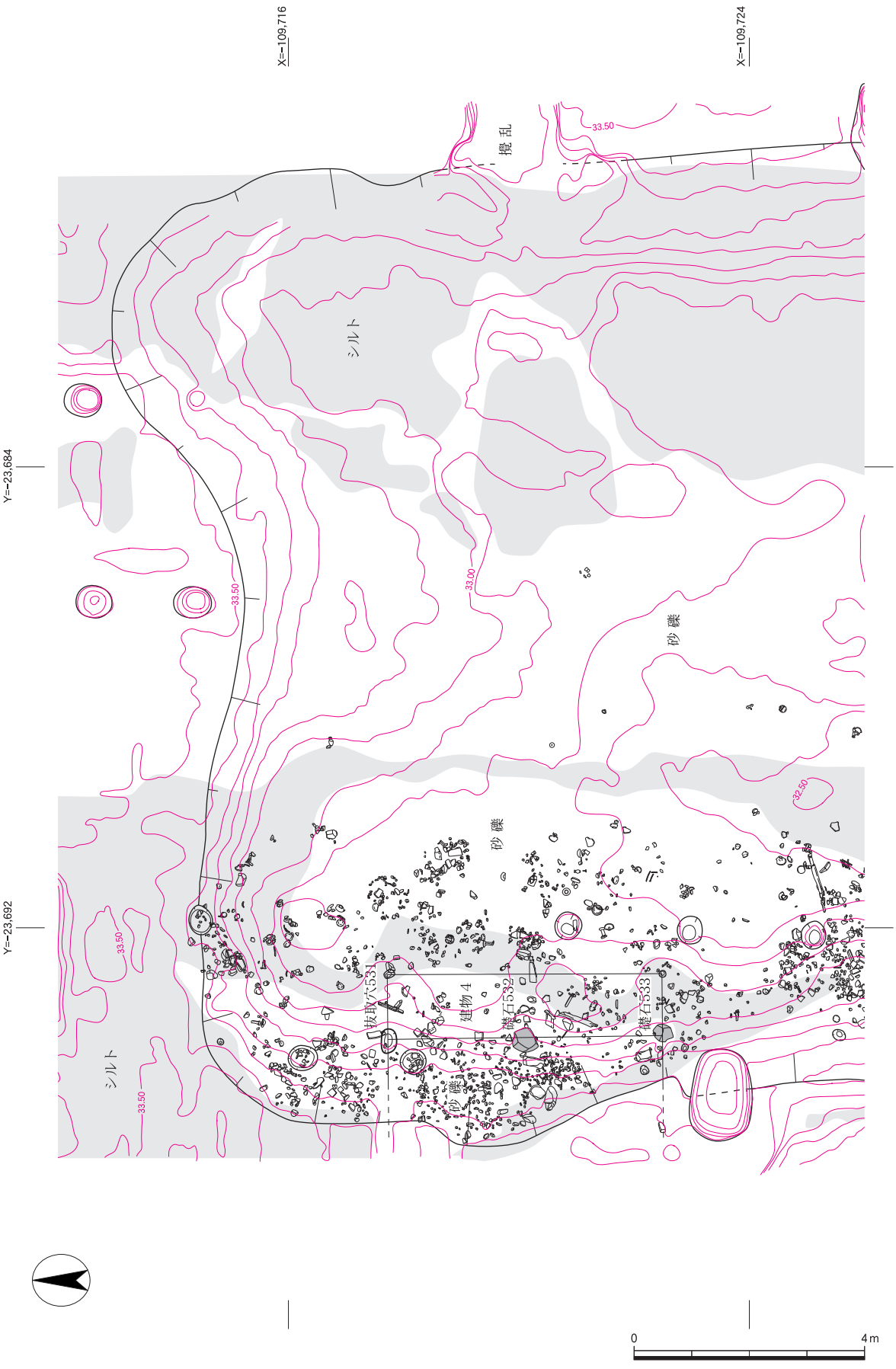


1　2.5Y5/6 黄褐色粘土質シルトに10YR3/3 暗褐色粘土質シルトブロック、細砂、礫少量含む（柱痕跡・抜取穴）
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトに2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトブロック、礫少量含む（掘形）
3　10Y6/2 灰黄褐色粘土質シルト（掘形）
4　2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトに細砂、礫少量含む（掘形）
5　2.5Y5/6 黄褐色粘土質シルト（掘形）
6　2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト（掘形）

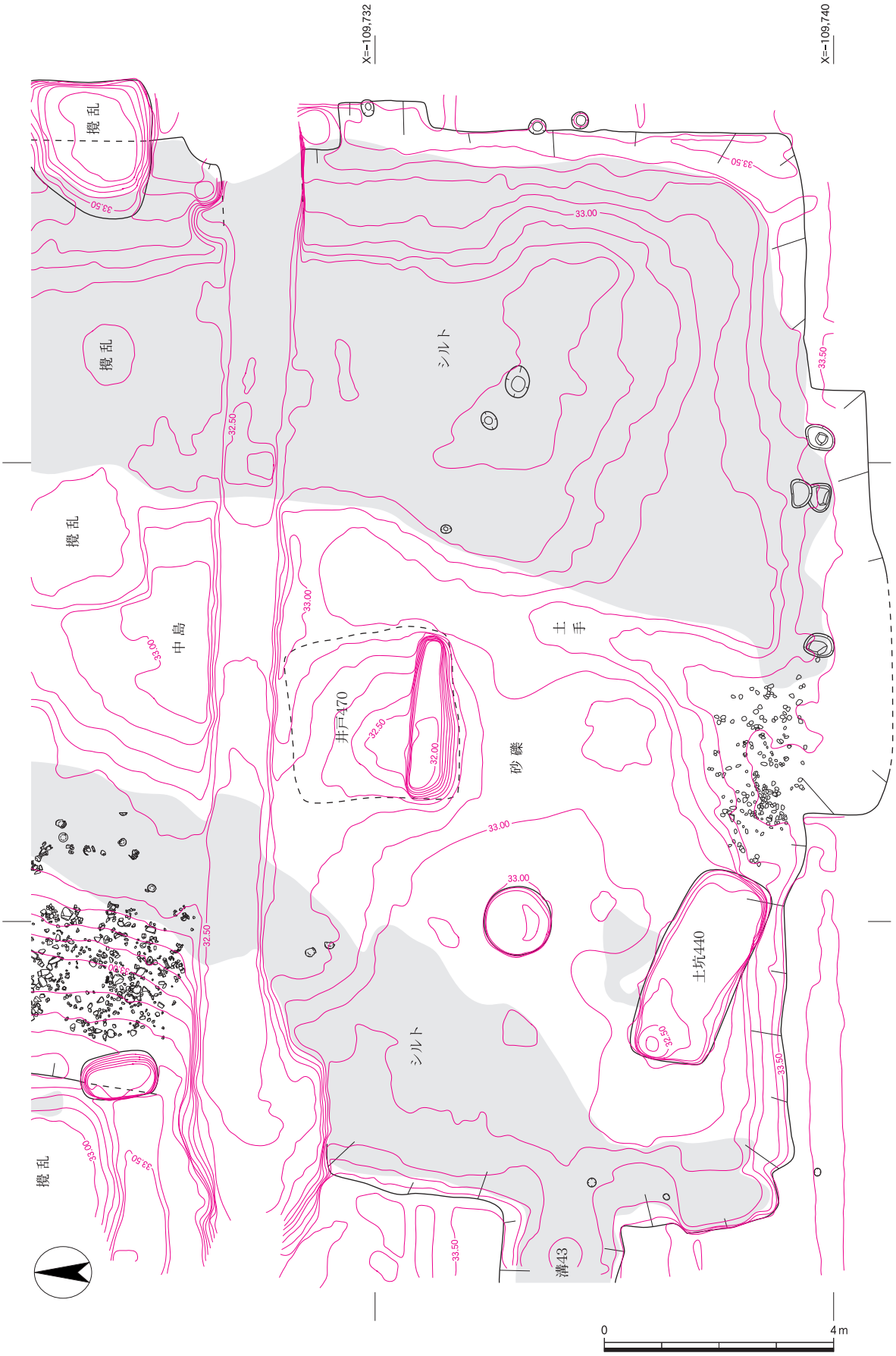


1　2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト（柱痕跡・抜取穴）
2　5Y4/1 灰色粘土質シルト（掘形）

建物4・建物5・柱列6実測図（1：60）

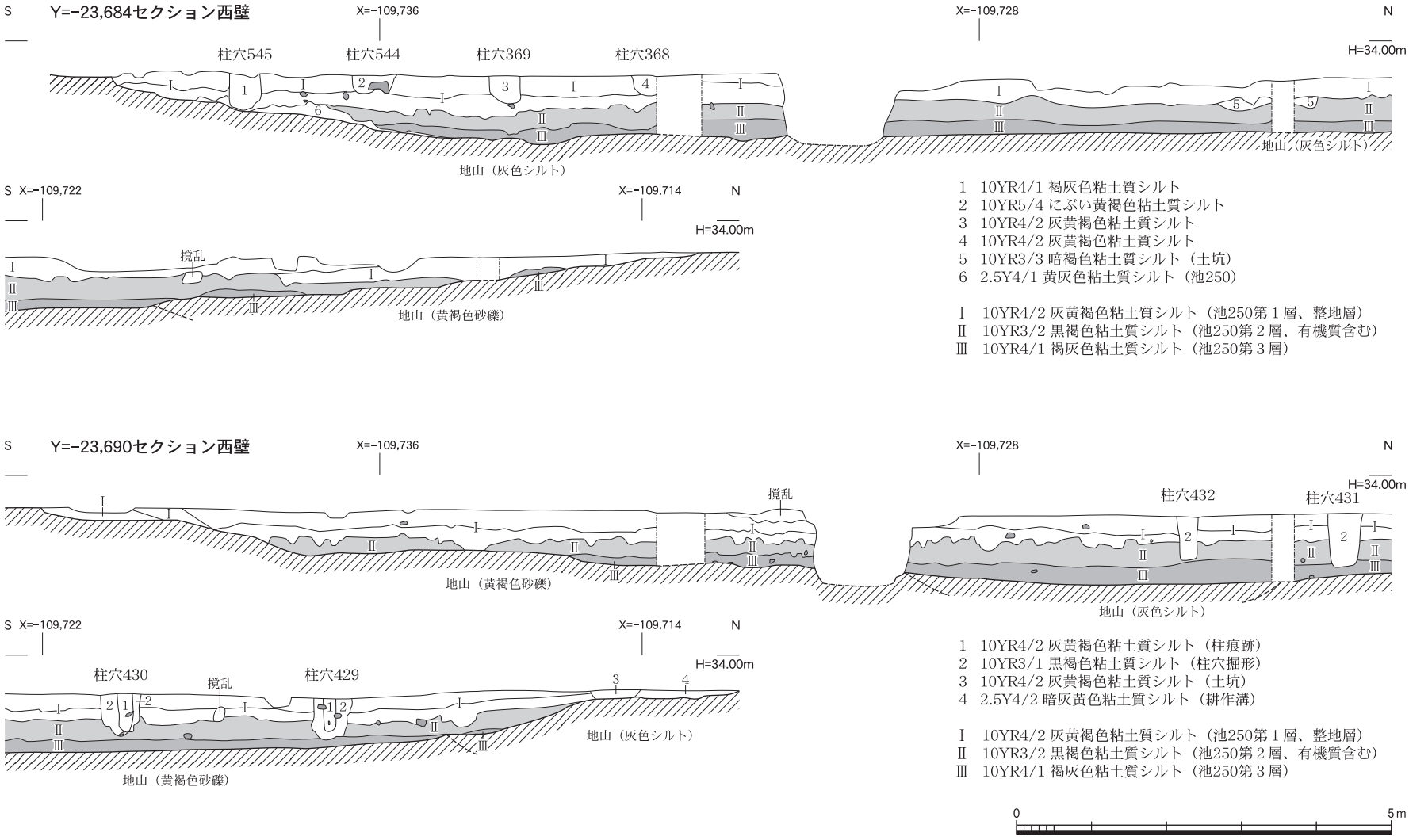


池250平面図１（１：100）



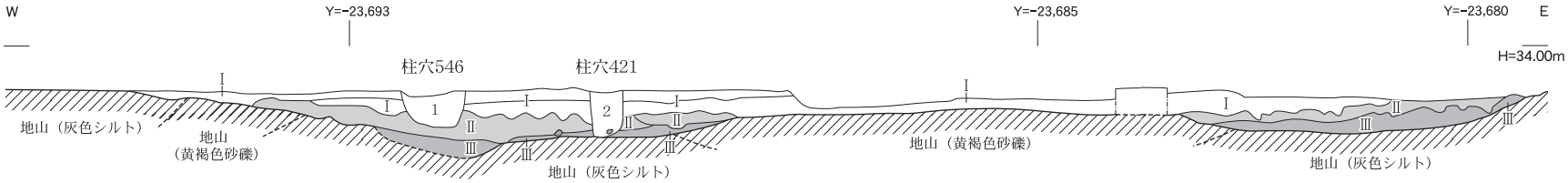
池250平面図２（１：100）

池250断面図1（1：80）



池250断面図２（１：80）

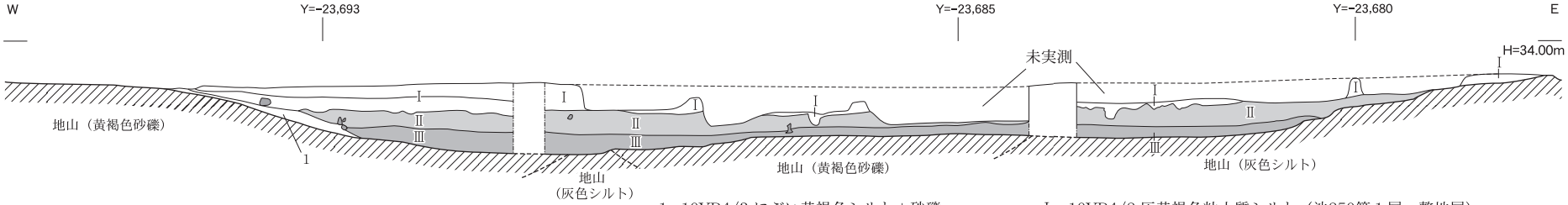
X=−109,716セクション北壁



1　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
2　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト

Ⅰ　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池250第１層、整地層）
Ⅱ　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（池250第２層、有機質含む）
Ⅲ　10YR4/1 褐灰色粘土質シルト（池250第３層）

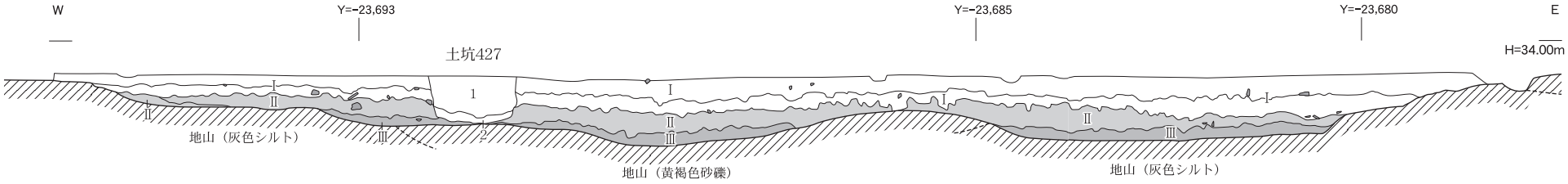
X=−109,724セクション北壁



1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト＋砂礫

Ⅰ　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池250第１層、整地層）
Ⅱ　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（池250第２層、有機質含む）
Ⅲ　10YR4/1 褐灰色粘土質シルト（池250第３層）

X=−109,732セクション北壁



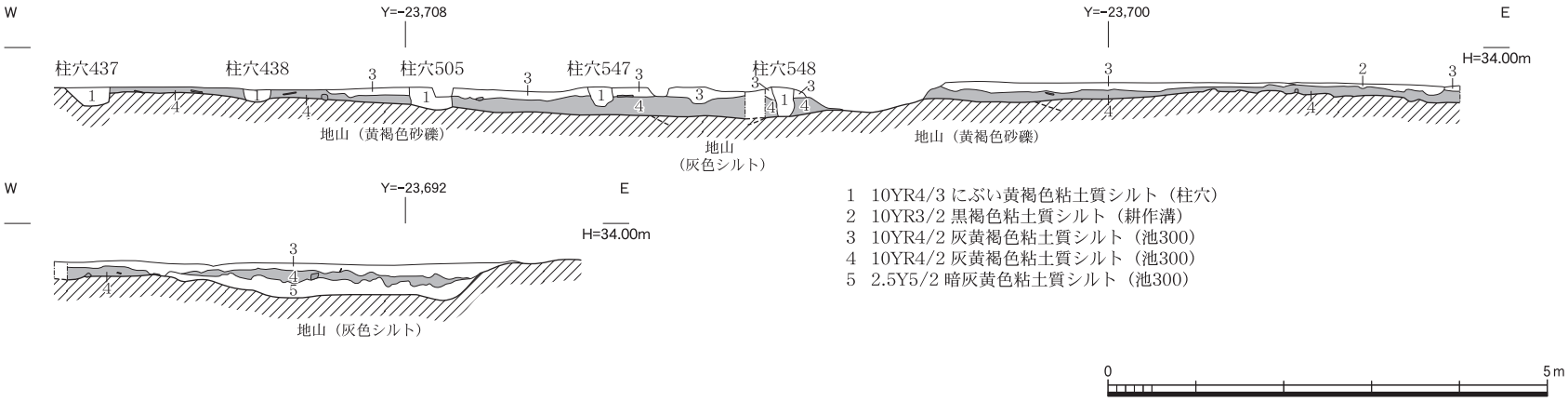
1　10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
2　2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト

Ⅰ　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池250第１層、整地層）
Ⅱ　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（池250第２層、有機質含む）
Ⅲ　10YR4/1 褐灰色粘土質シルト（池250第３層）

図版21　遺構

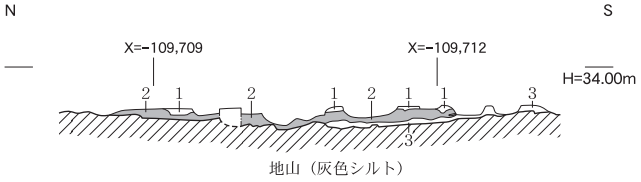
池300・池370断面図（1：80）

池300　X=−109,710セクション北壁



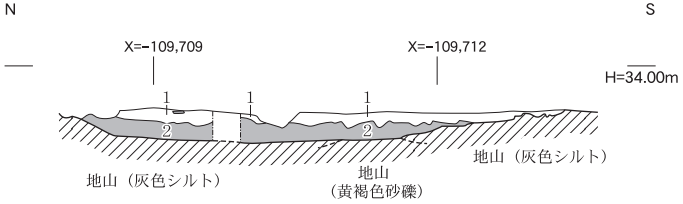
1　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（柱穴）
2　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（耕作溝）
3　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池300）
4　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池300）
5　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト（池300）

池300　Y=−23,696セクション東壁



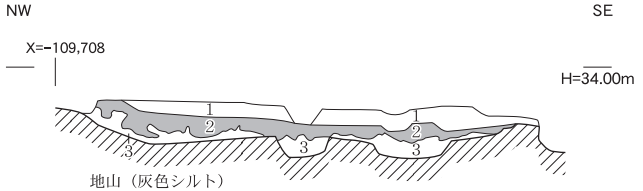
1　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池300）
2　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池300）
3　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池300）

池300　Y=−23,704セクション東壁



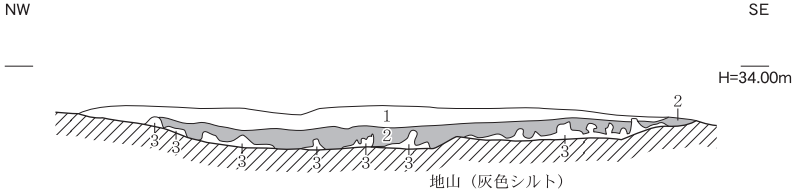
1　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池300）
2　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（池300）

池370　調査区北東壁

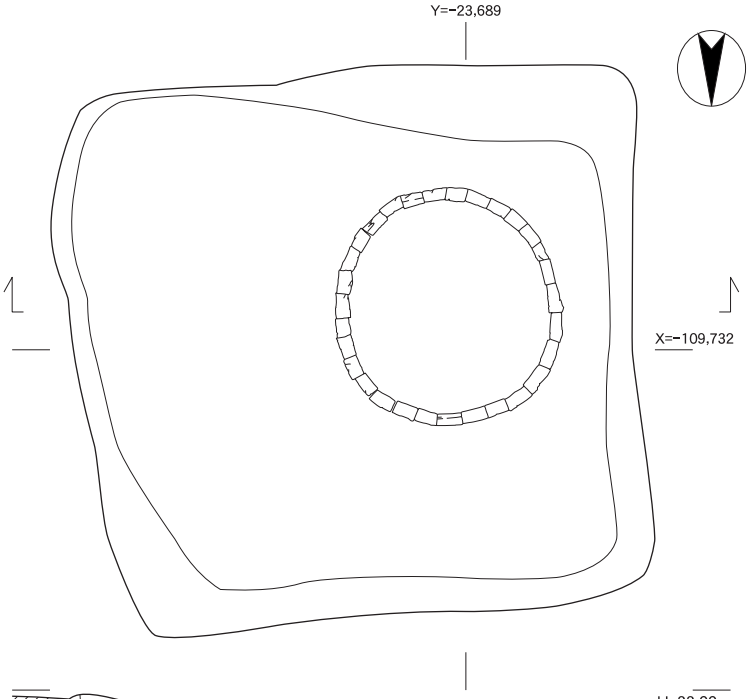


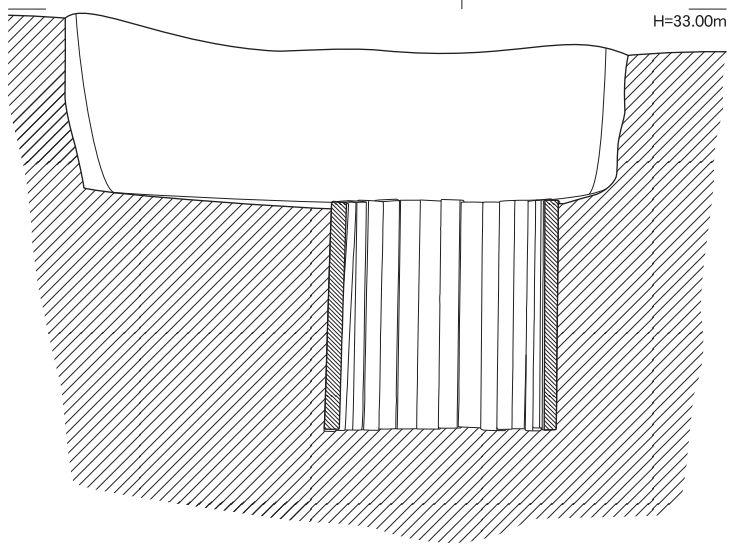
1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト（池370）
2　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（池370）
3　2.5Y7/2 灰黄色粘土質シルト（池370）

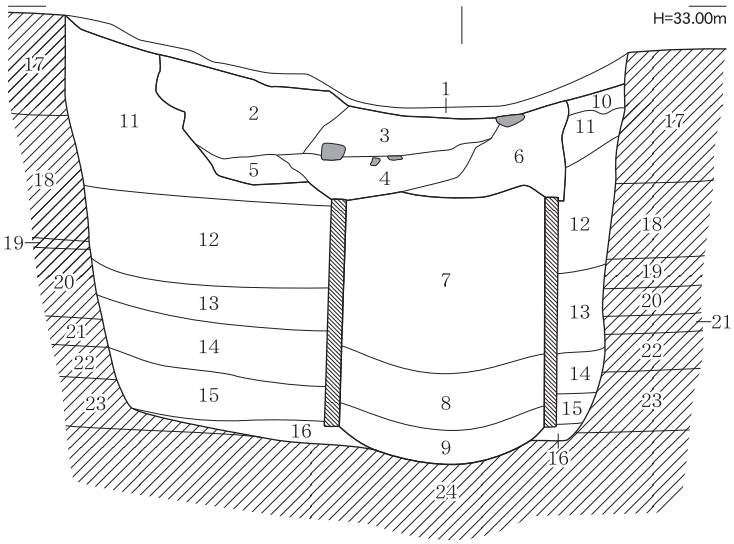
池370　セクション北東壁



1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト（池370）
2　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（池370）
3　2.5Y7/2 灰黄色粘土質シルト（池370）

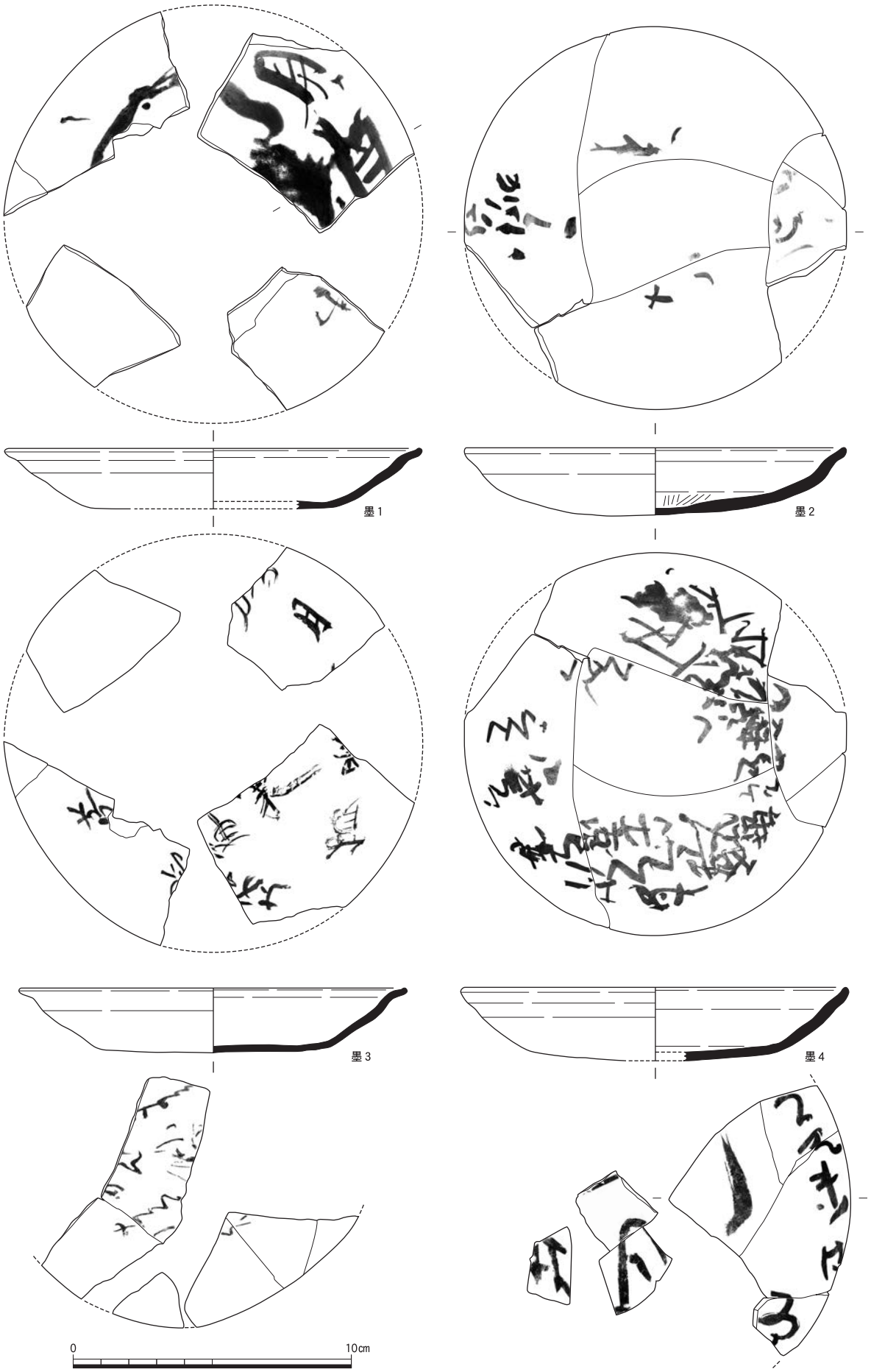




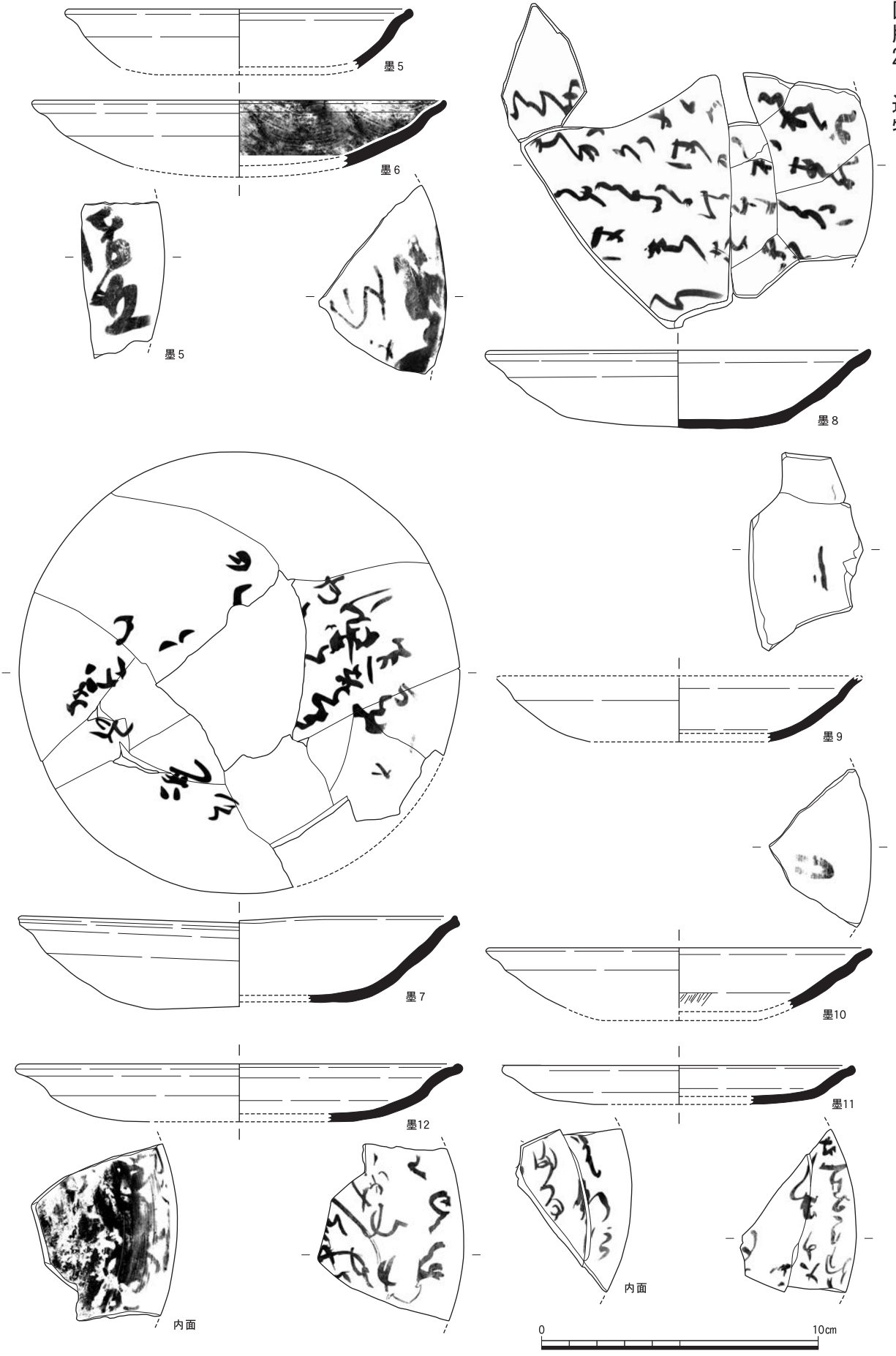


1　7.5Y4/1 灰色砂礫（池250底部）
2　7.5Y5/1 灰色砂礫（木枠上部の凹部）
3　2.5Y4/1 黄灰色シルト（木枠上部の凹部）
4　5Y4/1 灰色シルト（木枠上部の凹部）
5　5Y3/1 オリーブ黒色シルト
（木枠上部の凹部）
6　2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト混小礫
（井戸枠抜取）
7　5Y3/1 オリーブ黒色粘土（木枠内）
8　5Y4/2 灰オリーブ色粘土（木枠内）
9　2.5Y5/2 暗黄灰色粘土混砂礫（木枠内）
10　2.5Y4/1 黄灰色シルトに粘土ブロック含む
（掘形）
11　2.5Y4/2 暗黄灰色粘土質シルトに黄色粘土
ブロック多く含む（掘形）
12　5Y4/1 灰色粘土に5Y6/3 オリーブ黄色粘土
ブロック含む、5Y6/1 灰色砂礫やや多く
含む（掘形）
13　5Y5/1 灰色砂質粘土に5Y6/3 オリーブ 黄色
粘土ブロック多く含む （掘形）
14　5Y4/1 灰色粘土に5Y6/3 オリーブ黄色粘土
ブロック含む、5Y6/1 灰色砂礫やや多く含む
（掘形）
15　5Y4/1 灰色粘土（掘形）
16　5Y3/1 オリーブ黒色砂質粘土（掘形）
17　5Y5/1 灰色砂礫　酸化して褐色化進む
（地山）
18　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色細砂と灰色粘土の
互層堆積（地山）
19　10Y4/1 灰色粗砂（地山）
20　5Y4/1 灰色粘土に炭化物、木質少量含む
（地山）
21　10YR5/2 灰黄褐色火山灰
（姶良Tn火山灰、地山）
22　5Y4/1 灰色粘土に炭化物、木質少量含む
（地山）
23　5Y3/1 オリーブ黒色礫混粘土 （地山）
24　N4/ 灰色砂礫（湧水層、地山）

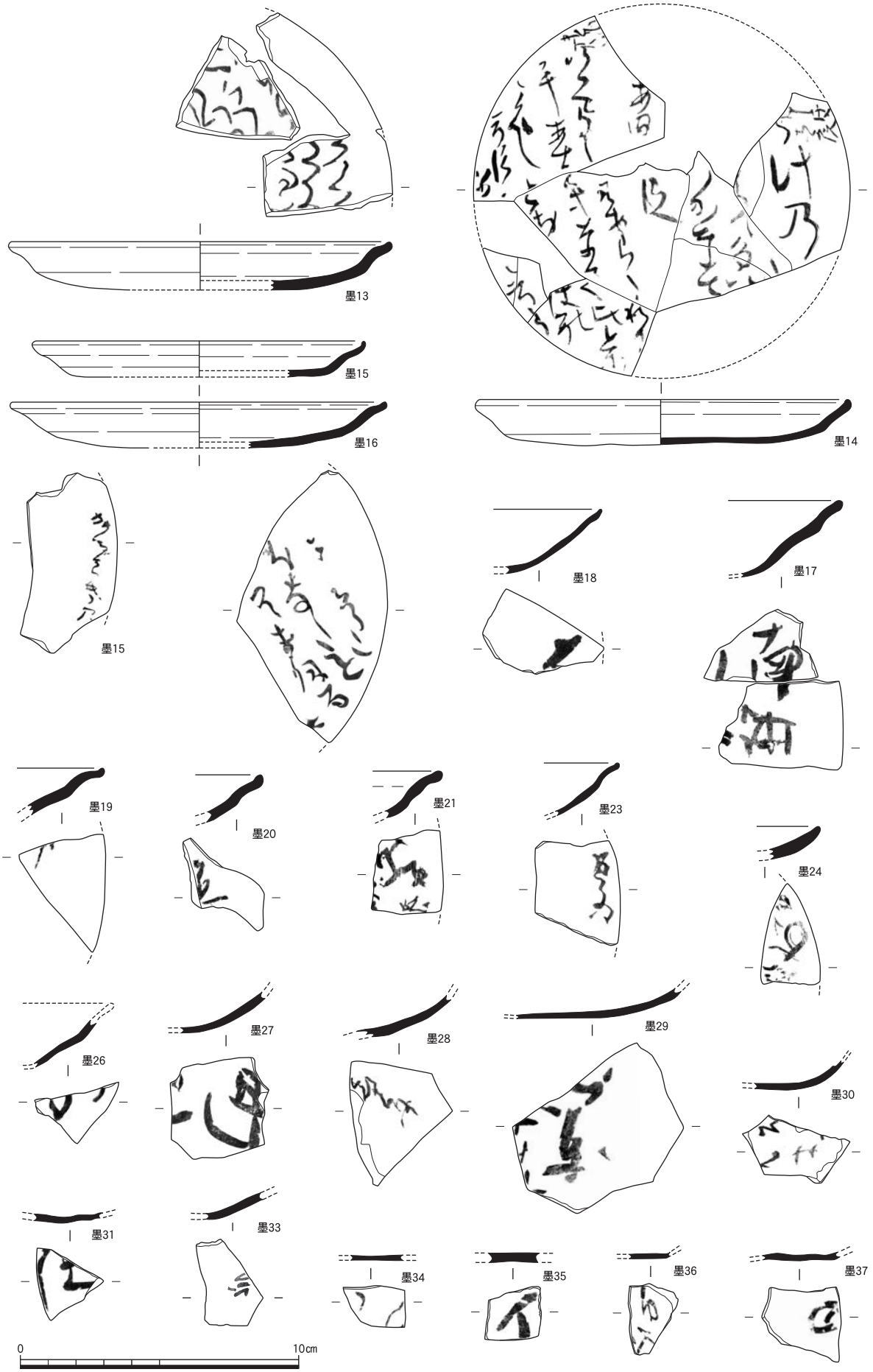
井戸470実測図（１：40）



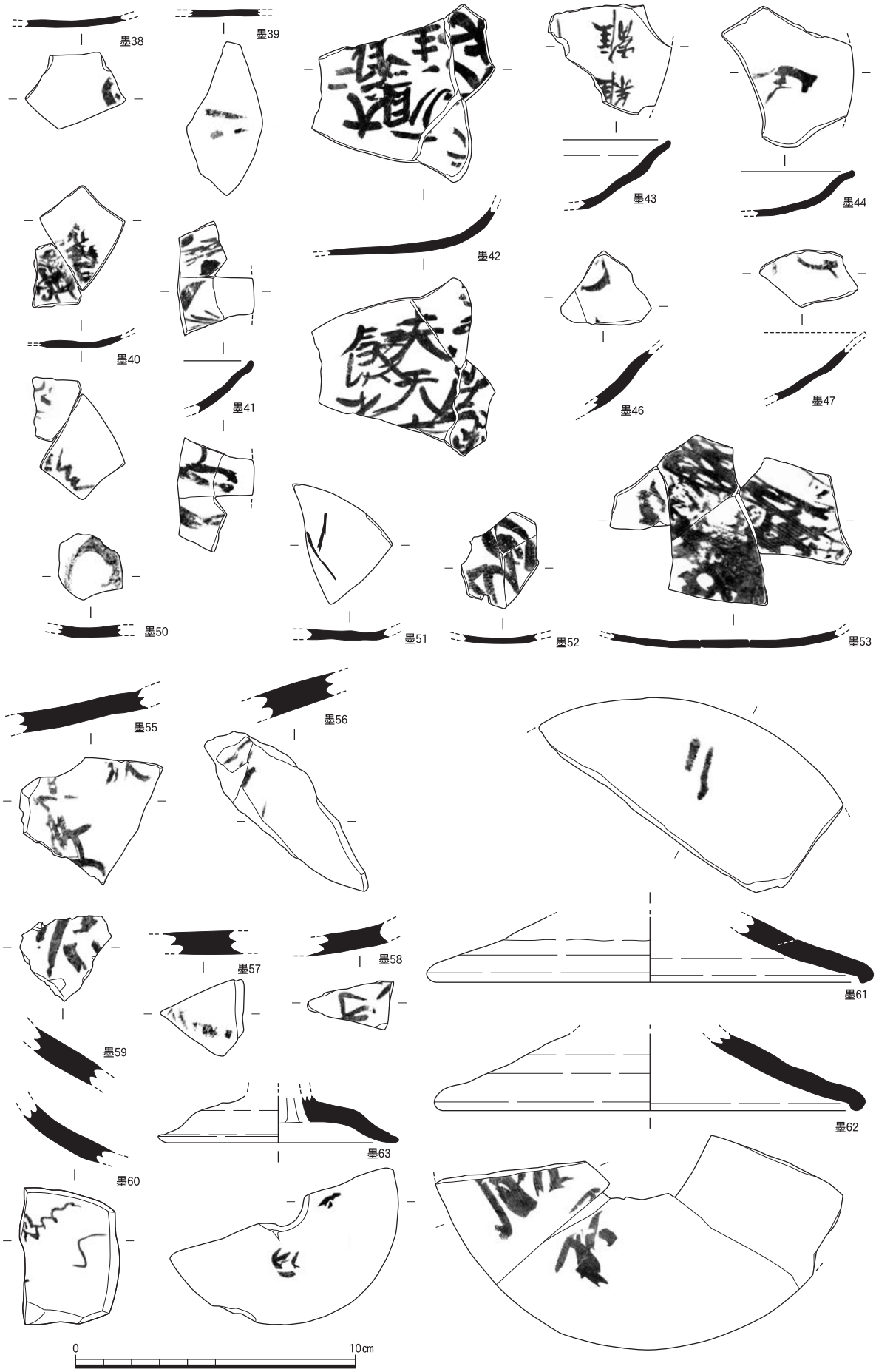
墨書土器実測図１（１：２）　池250



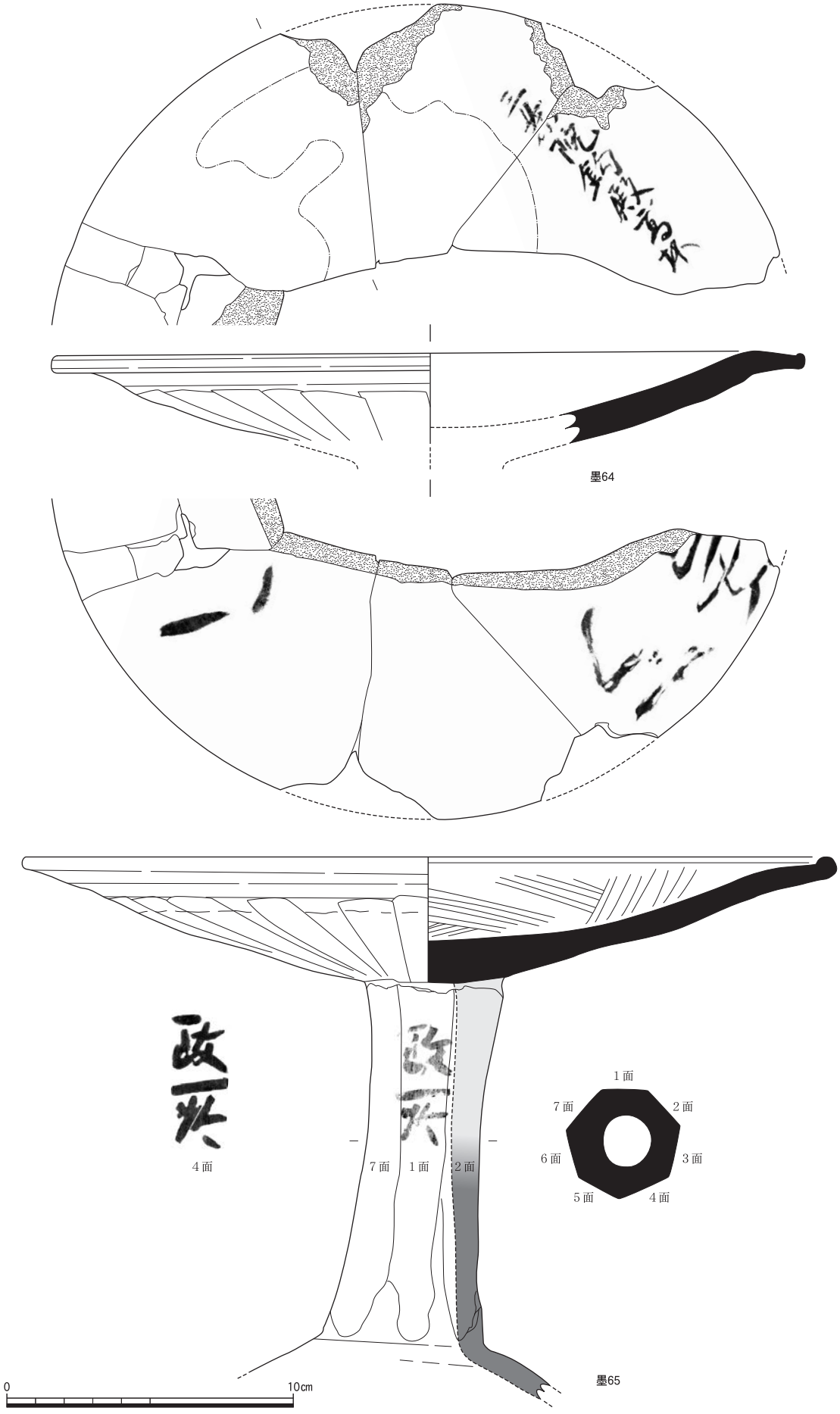
墨書土器実測図２（１：２）　池250



墨書土器実測図３（１：２）　池250

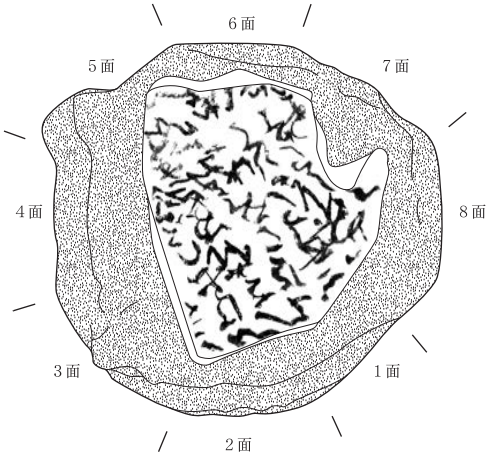


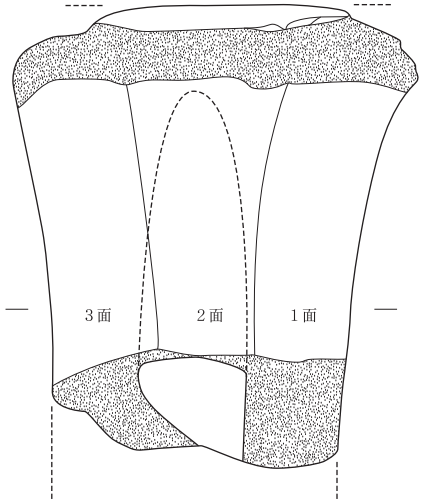
墨書土器実測図４（１：２）　池250

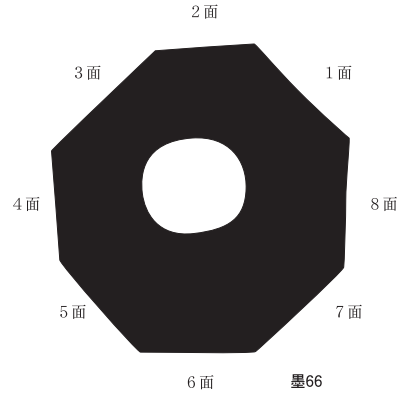


墨書土器実測図５（１：２）　池250

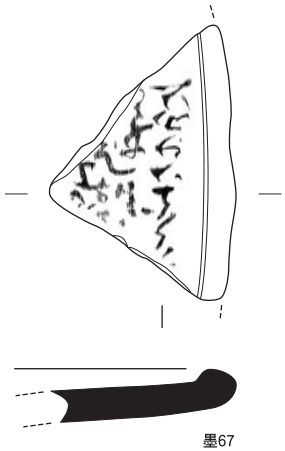
墨書土器実測図６（１：１）　池250

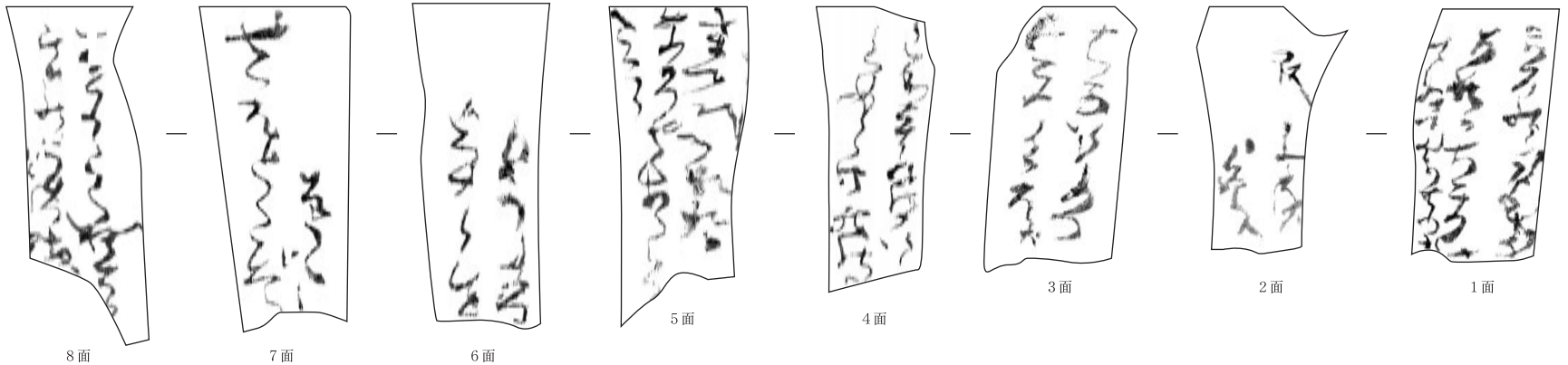




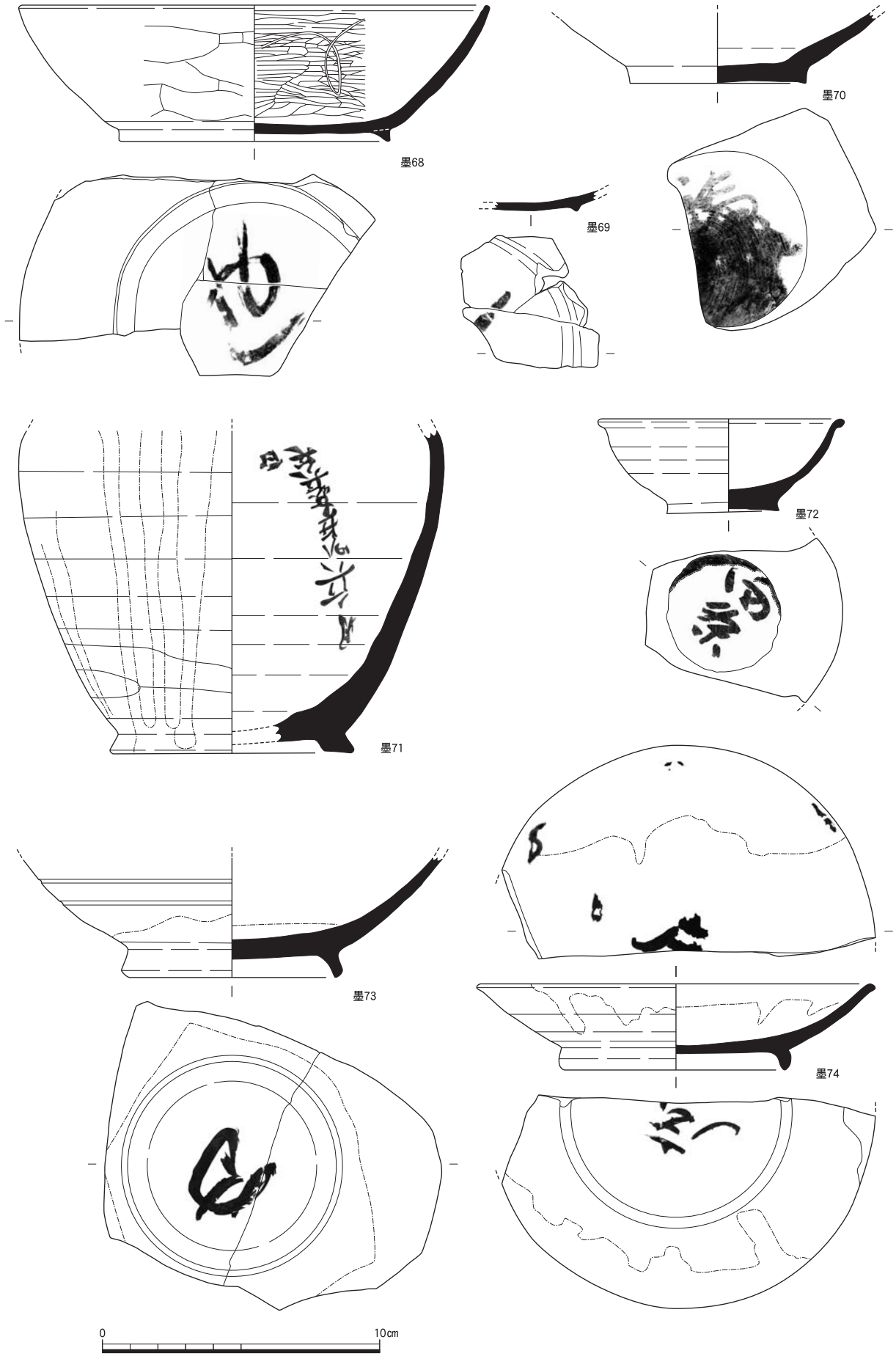


墨66

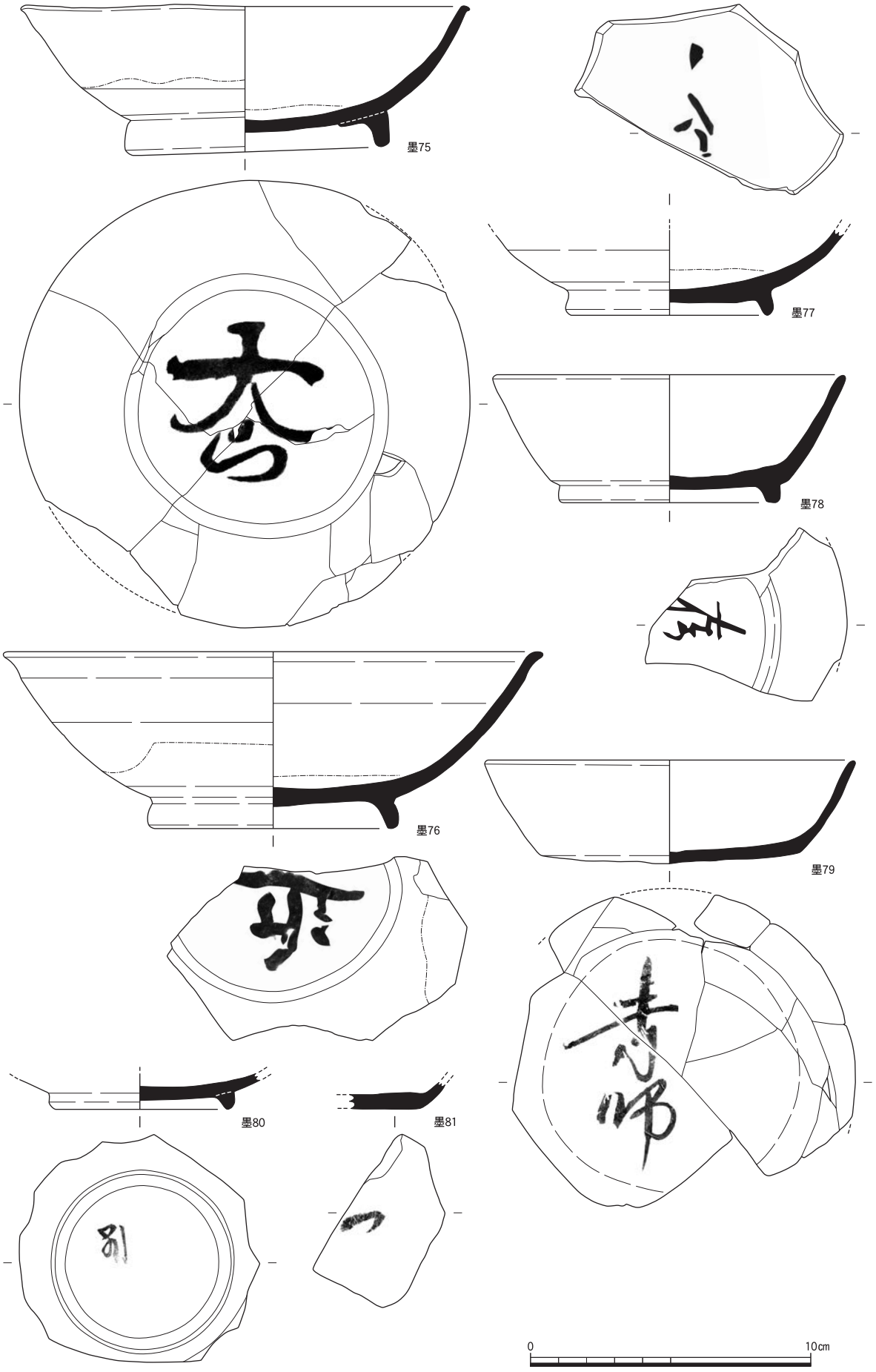

墨67



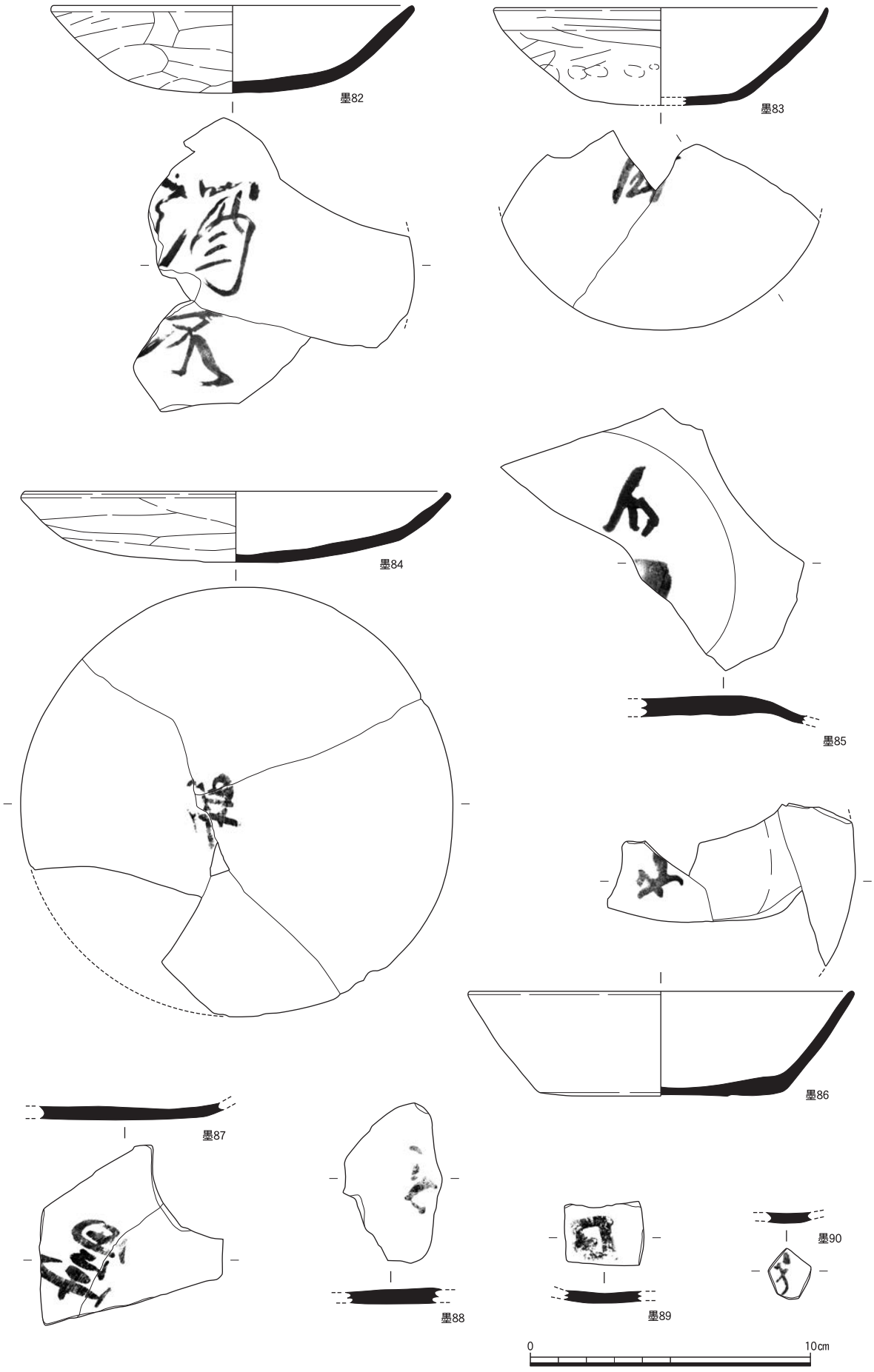
図版29　遺物



墨書土器実測図７（１：２）　池250

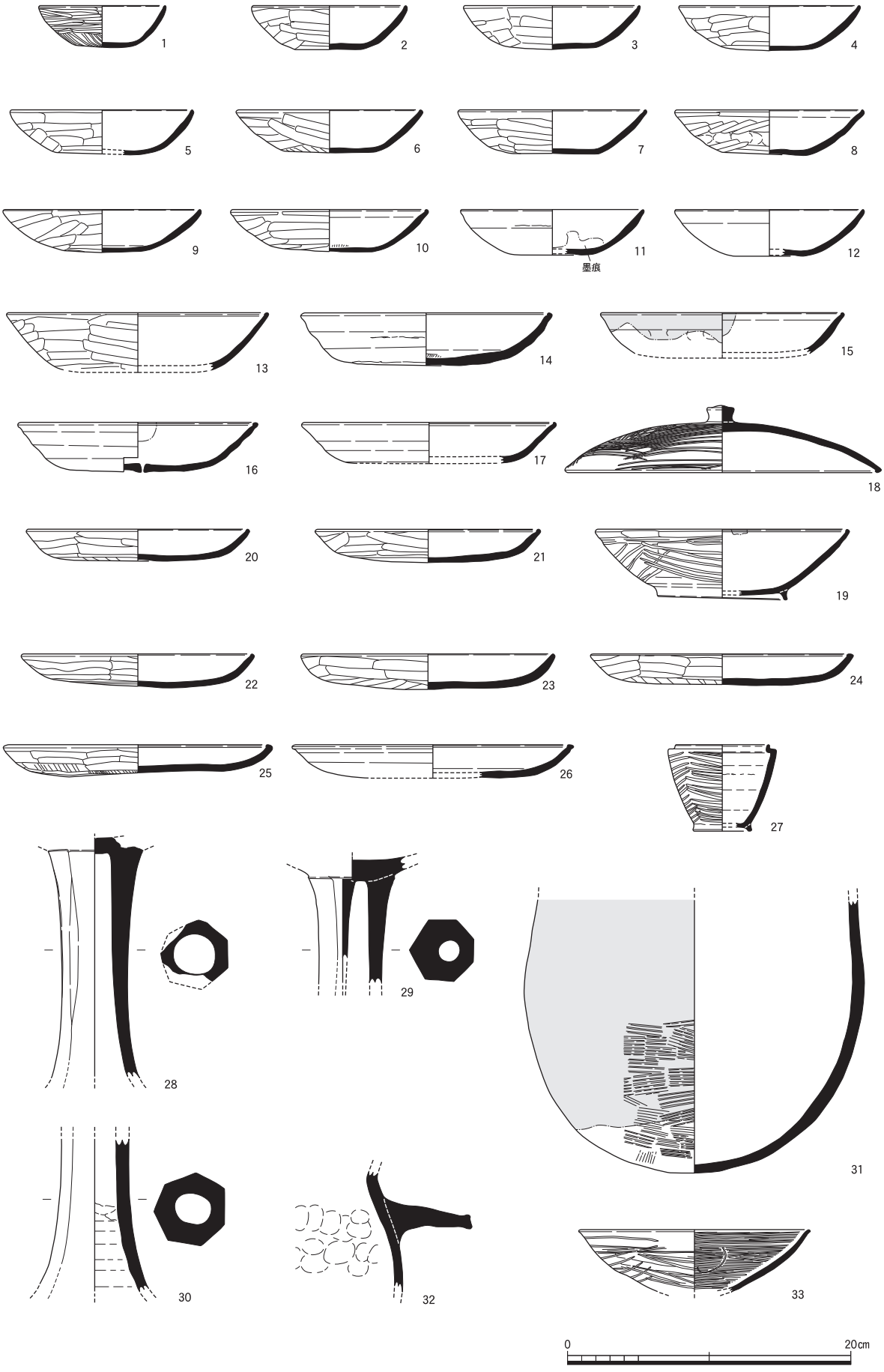


墨書土器実測図８（１：２）　池250・池117・溝110・溝145



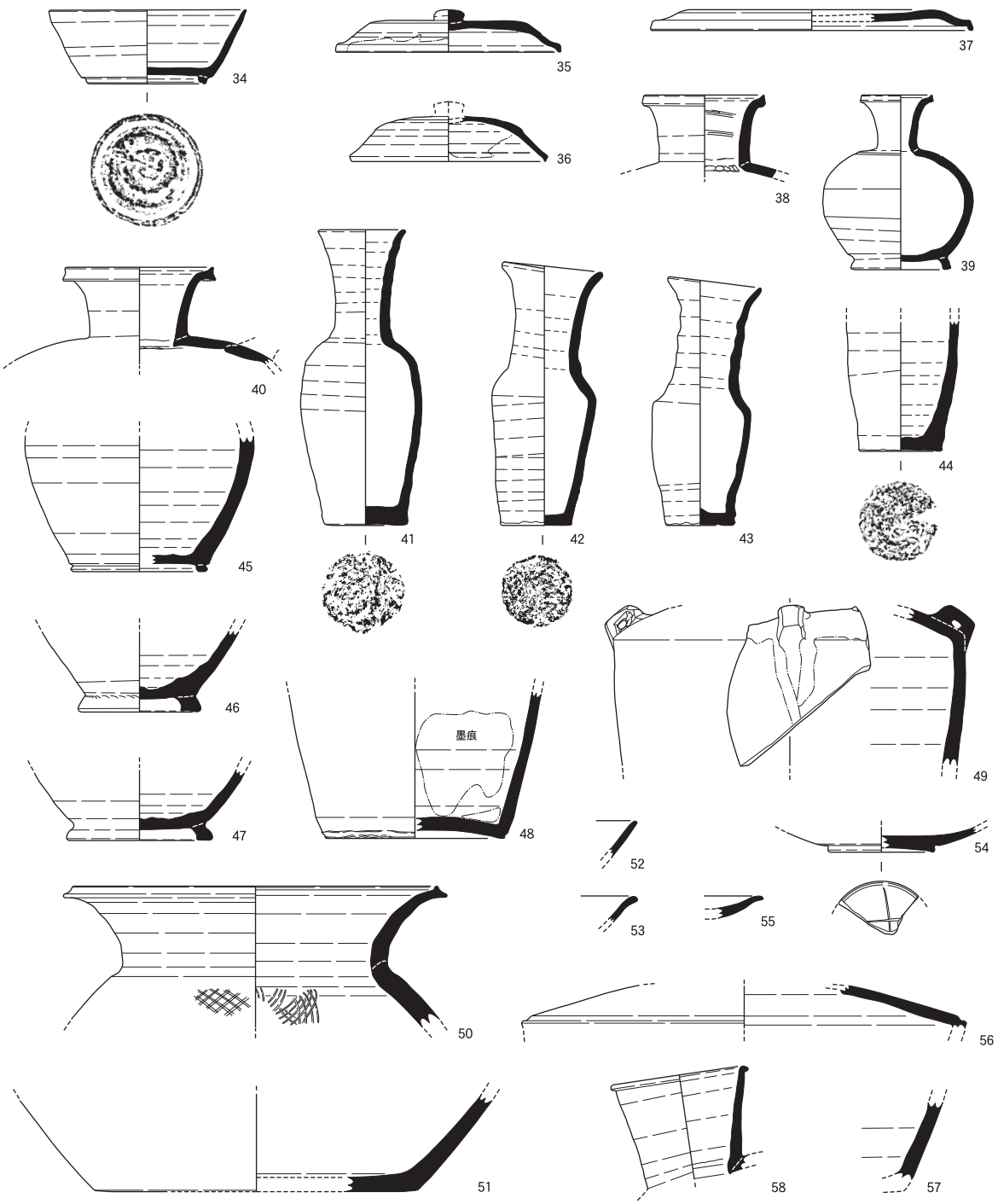
墨書土器実測図９（１：２）　井戸470・整地層475・池370・池300

井戸470

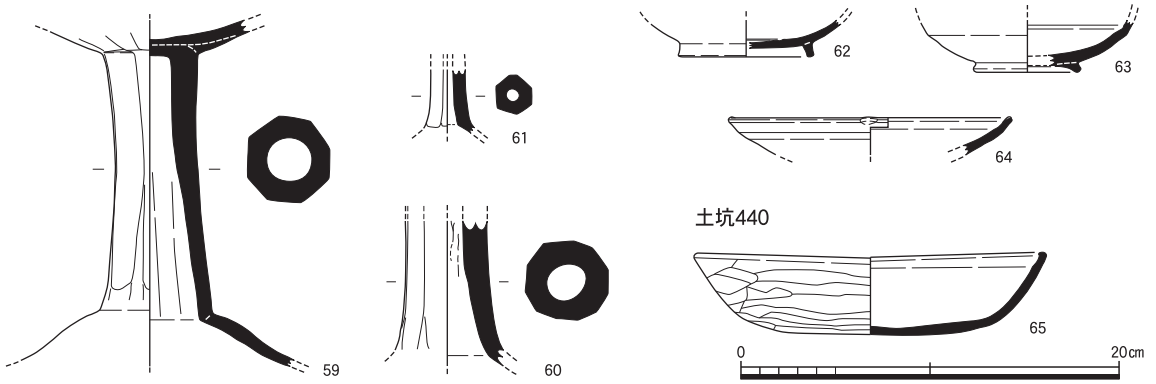


井戸470出土土器実測図１（１：４）

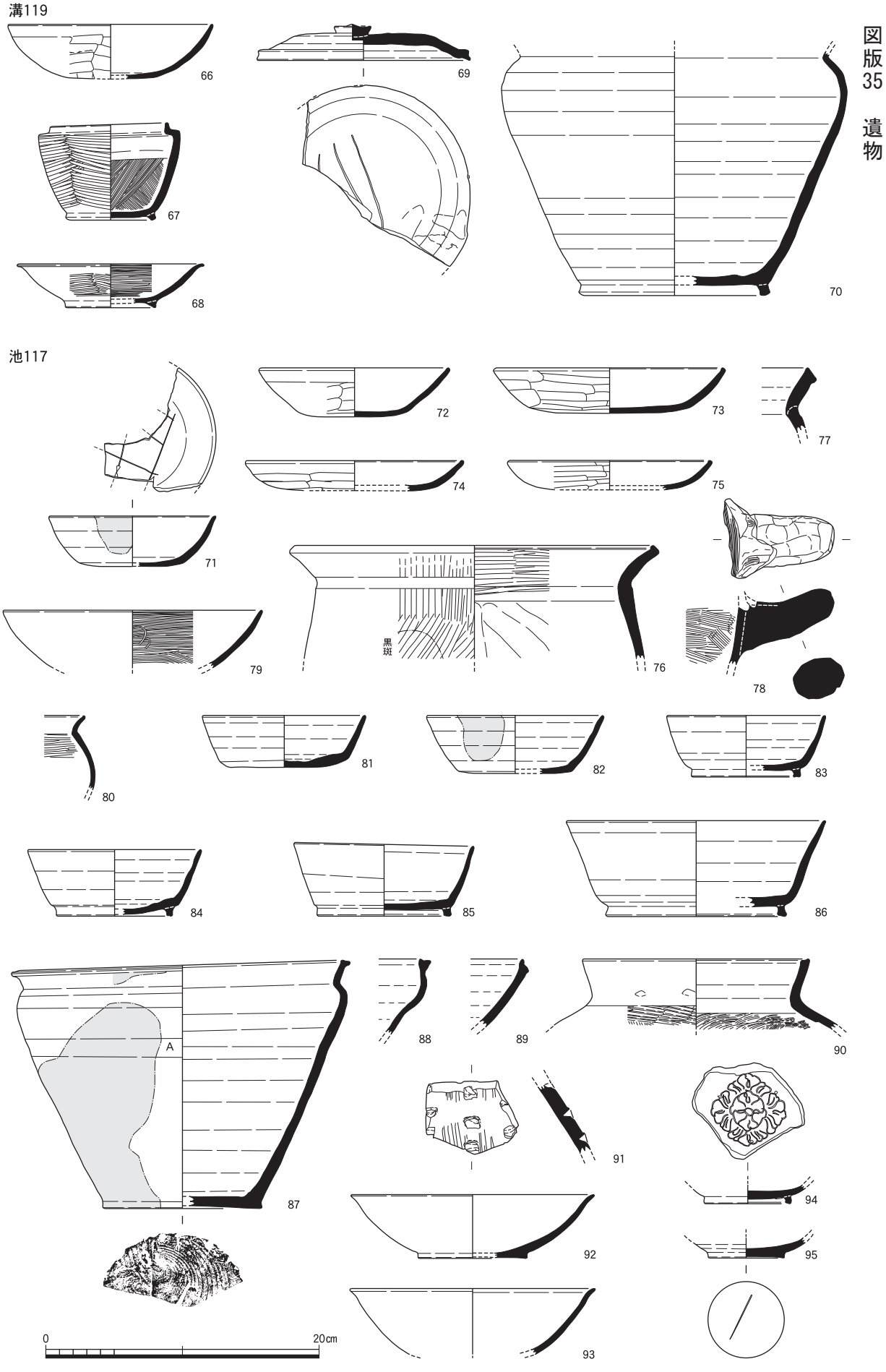
井戸470



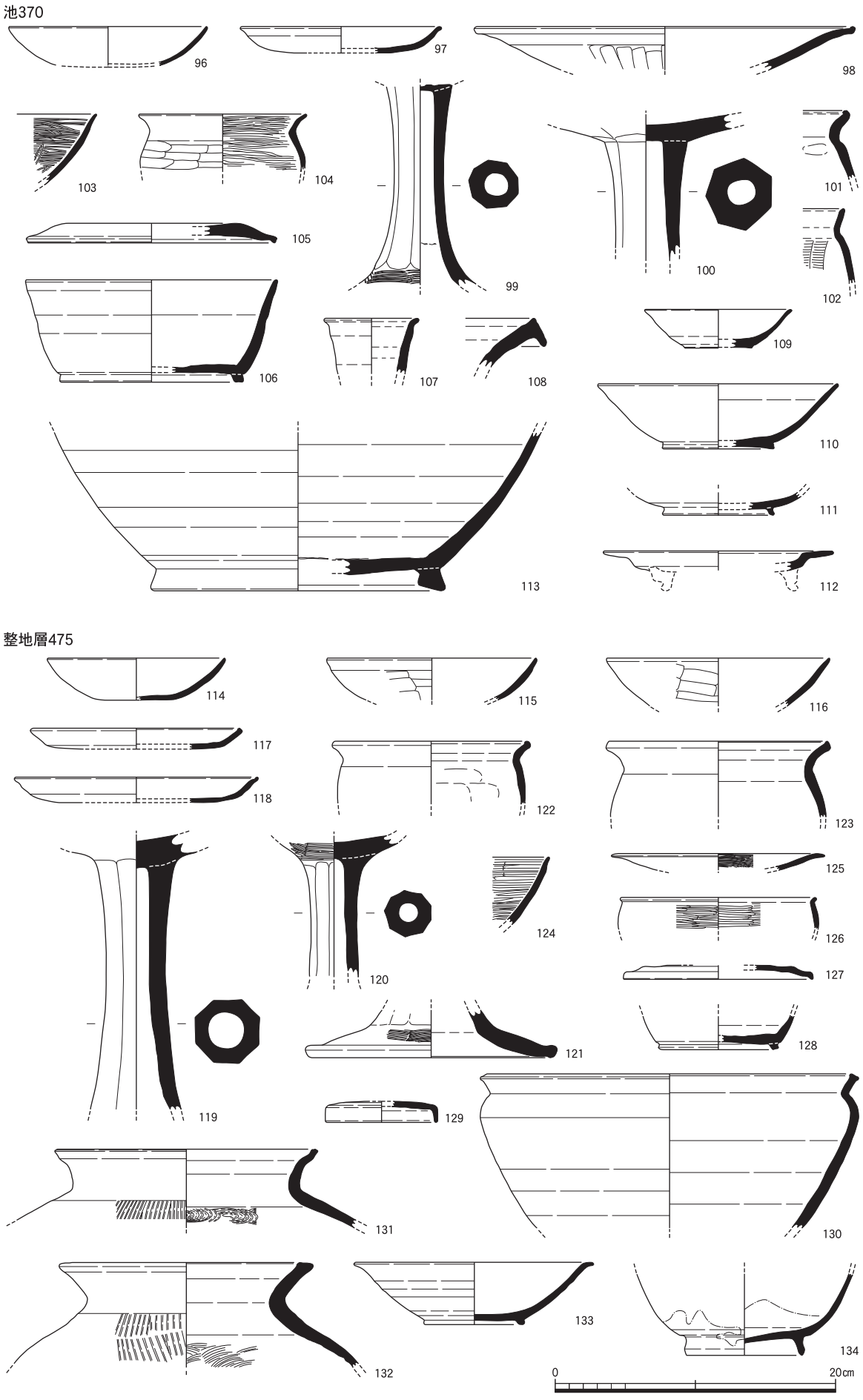
溝400



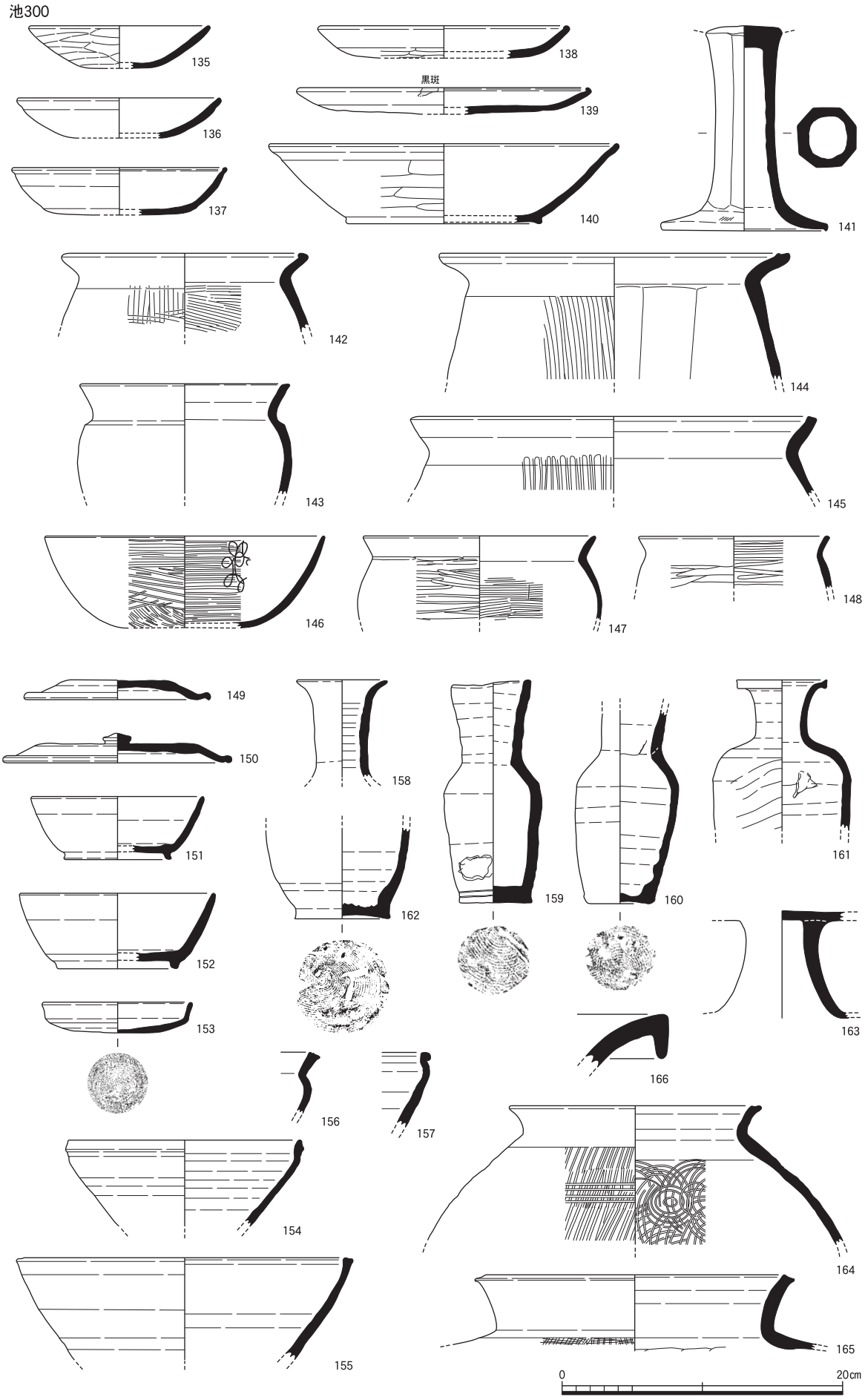
井戸470出土土器実測図２、溝400・土坑440出土土器実測図（１：４）



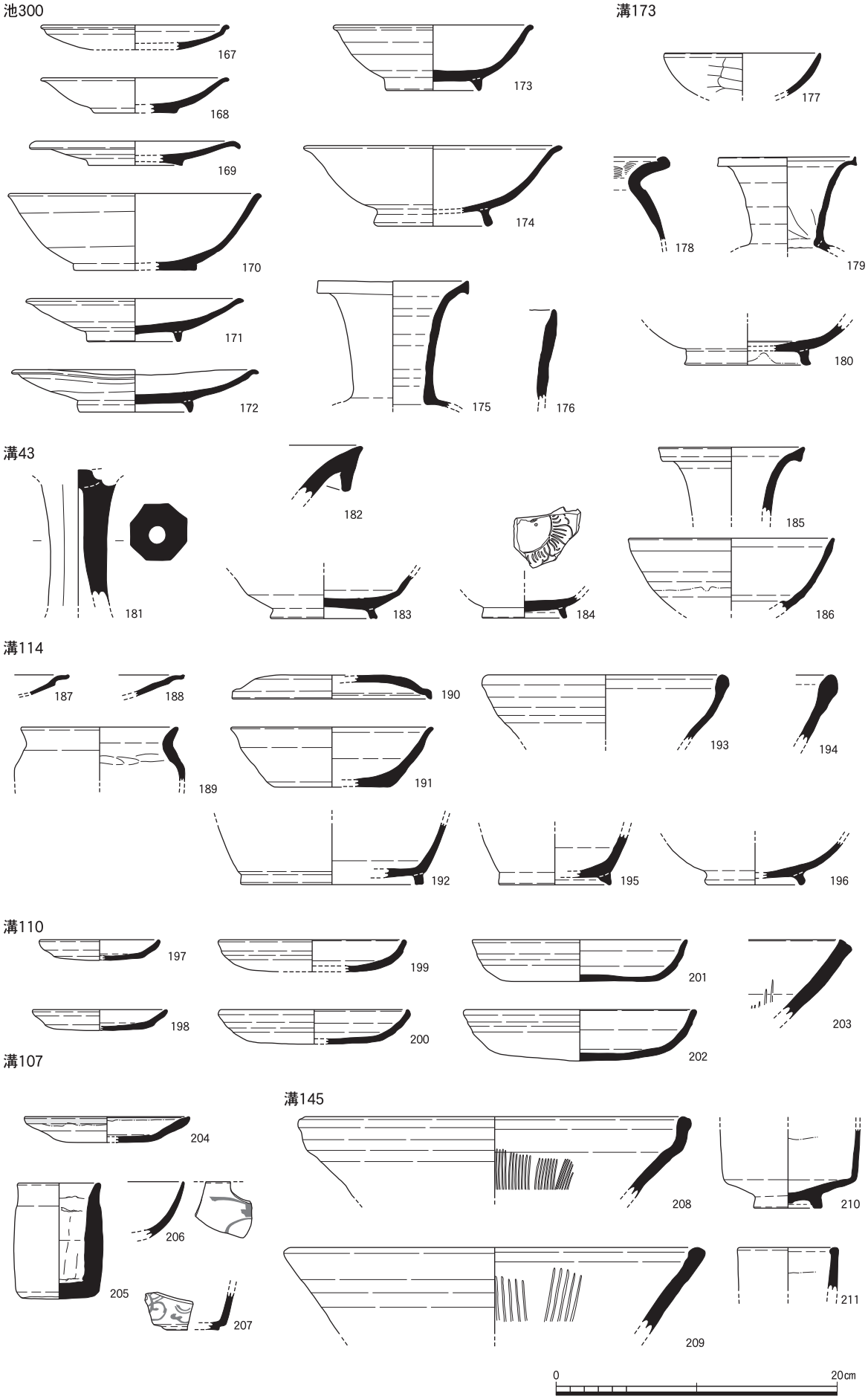
溝119・池117出土土器実測図（１：４）



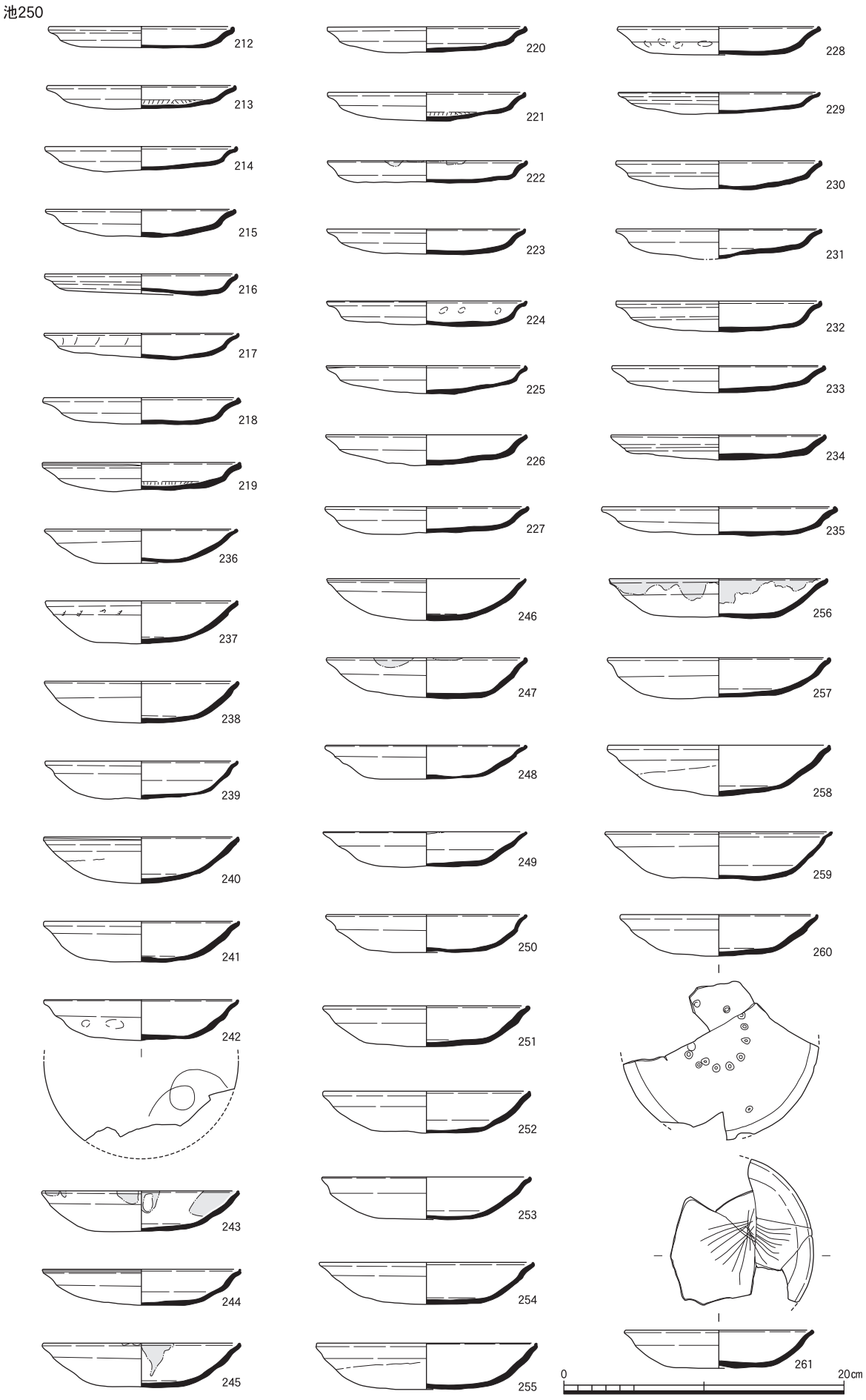
池370・整地層475出土土器実測図（１：４）



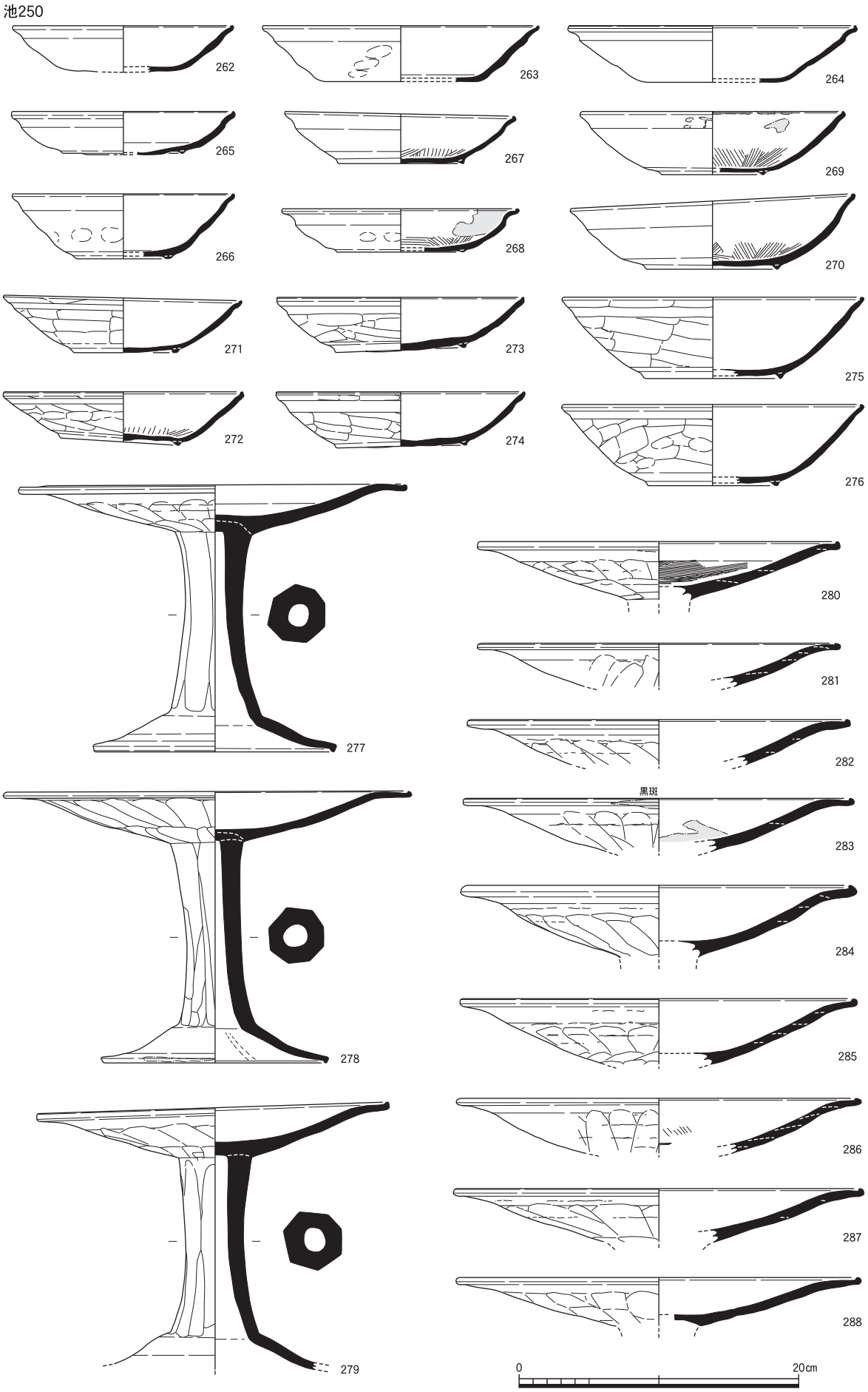
池300出土土器実測図１（１：４）



池300出土土器実測図２、溝173・溝43・溝114・溝110・溝107・溝145出土土器実測図（１：４）

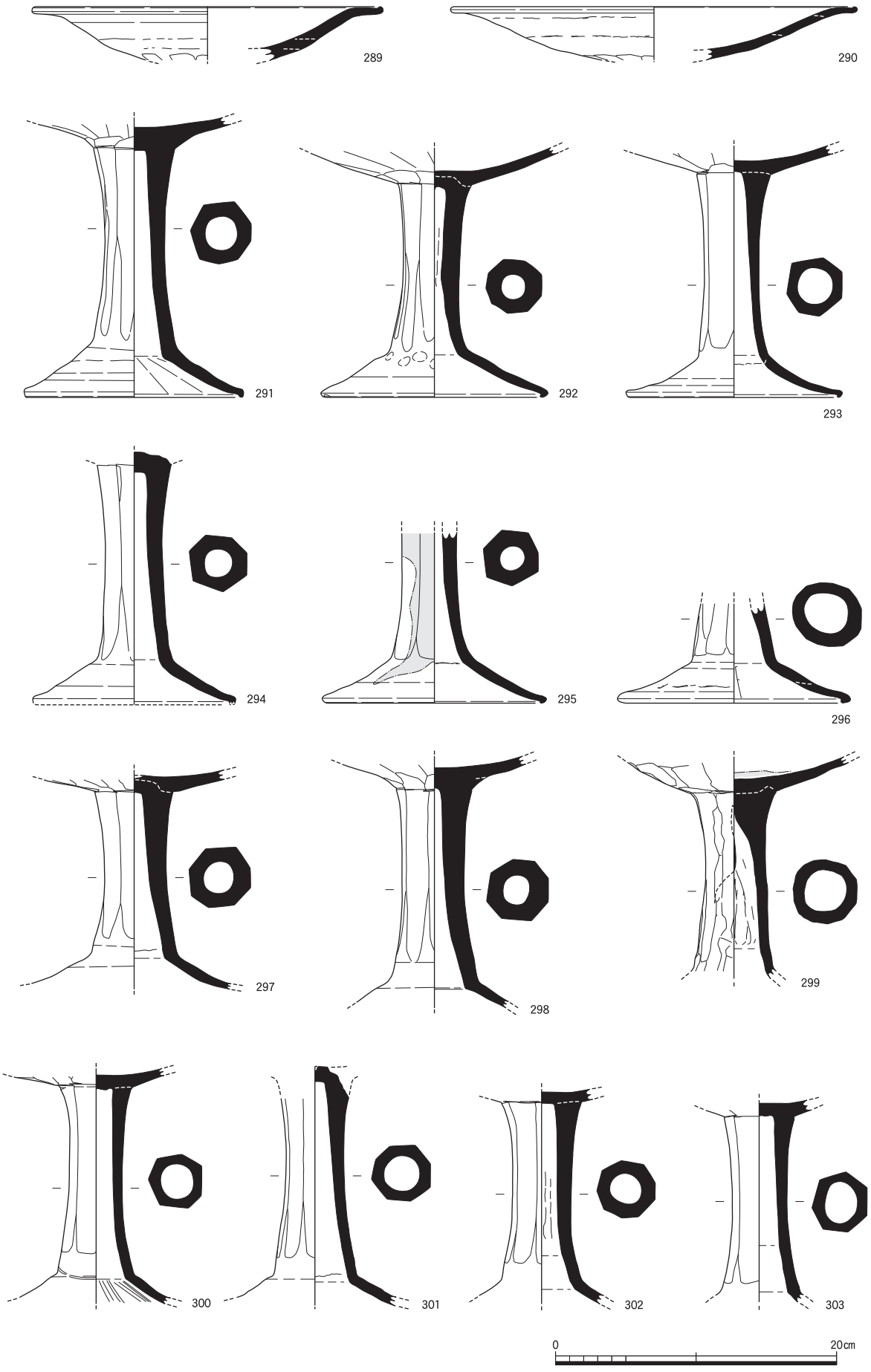


池250出土土器実測図１（１：４）



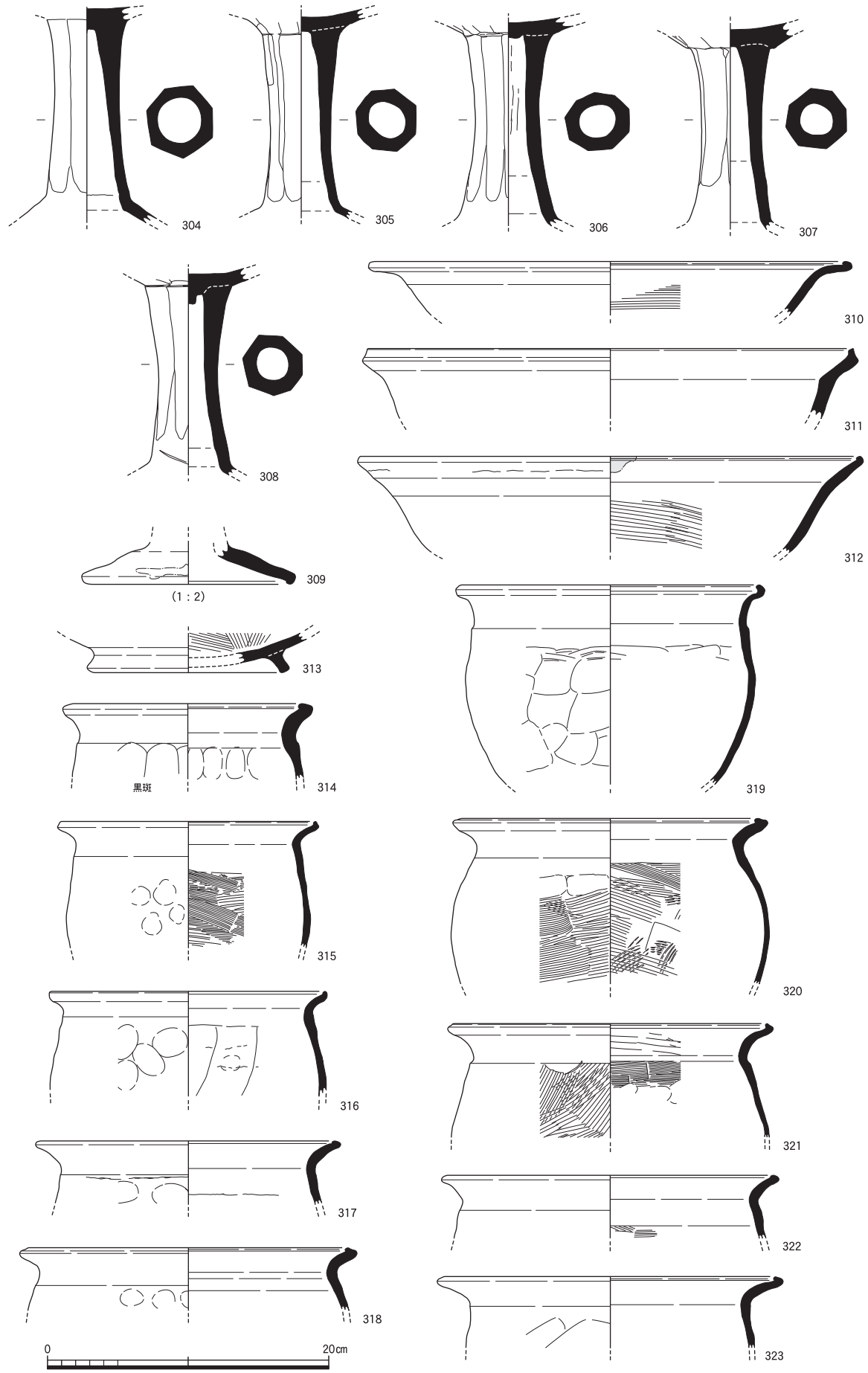
池250出土土器実測図２（１：４）

池250

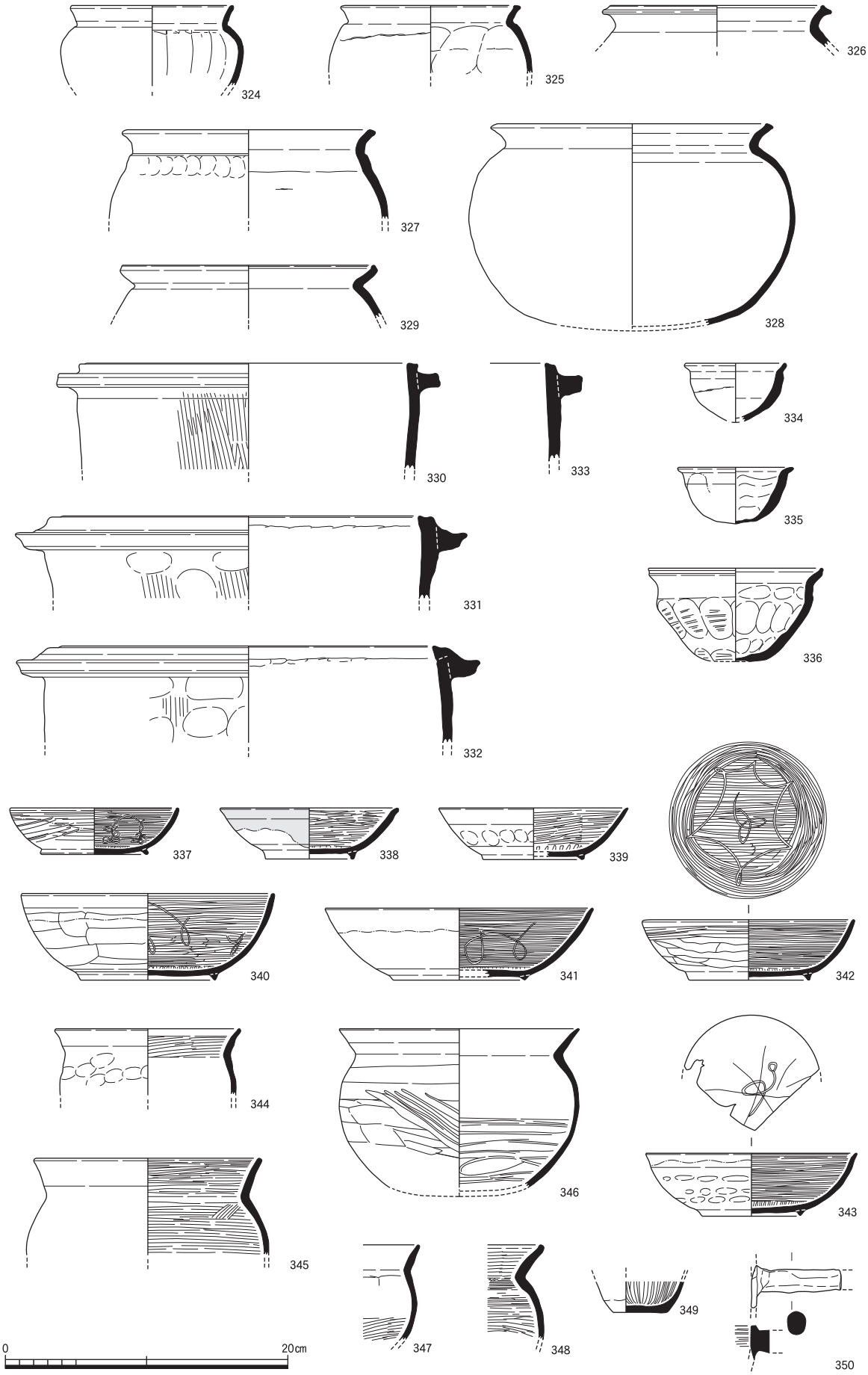


池250出土土器実測図３（１：４）

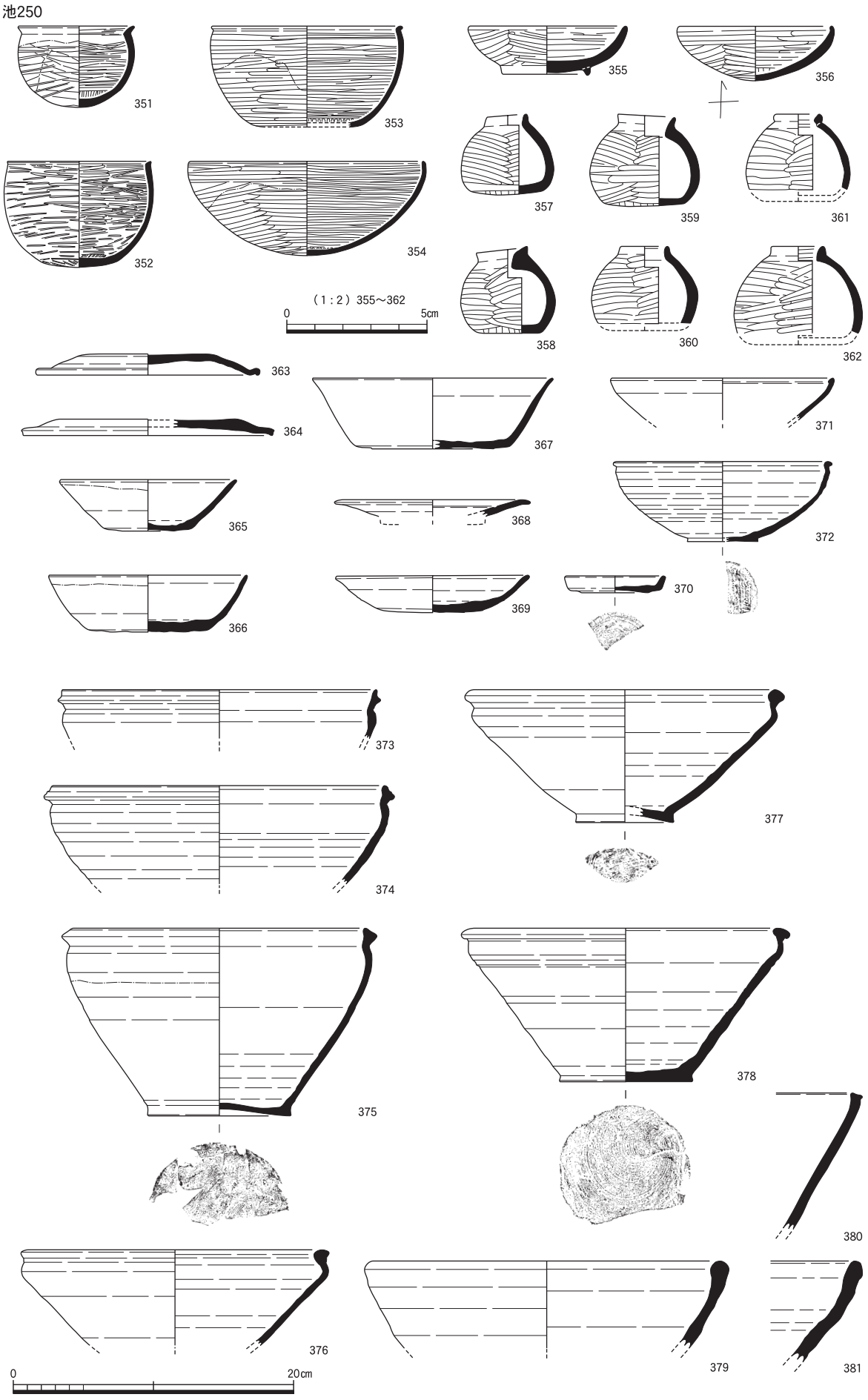
池250



池250出土土器実測図４（１：４）

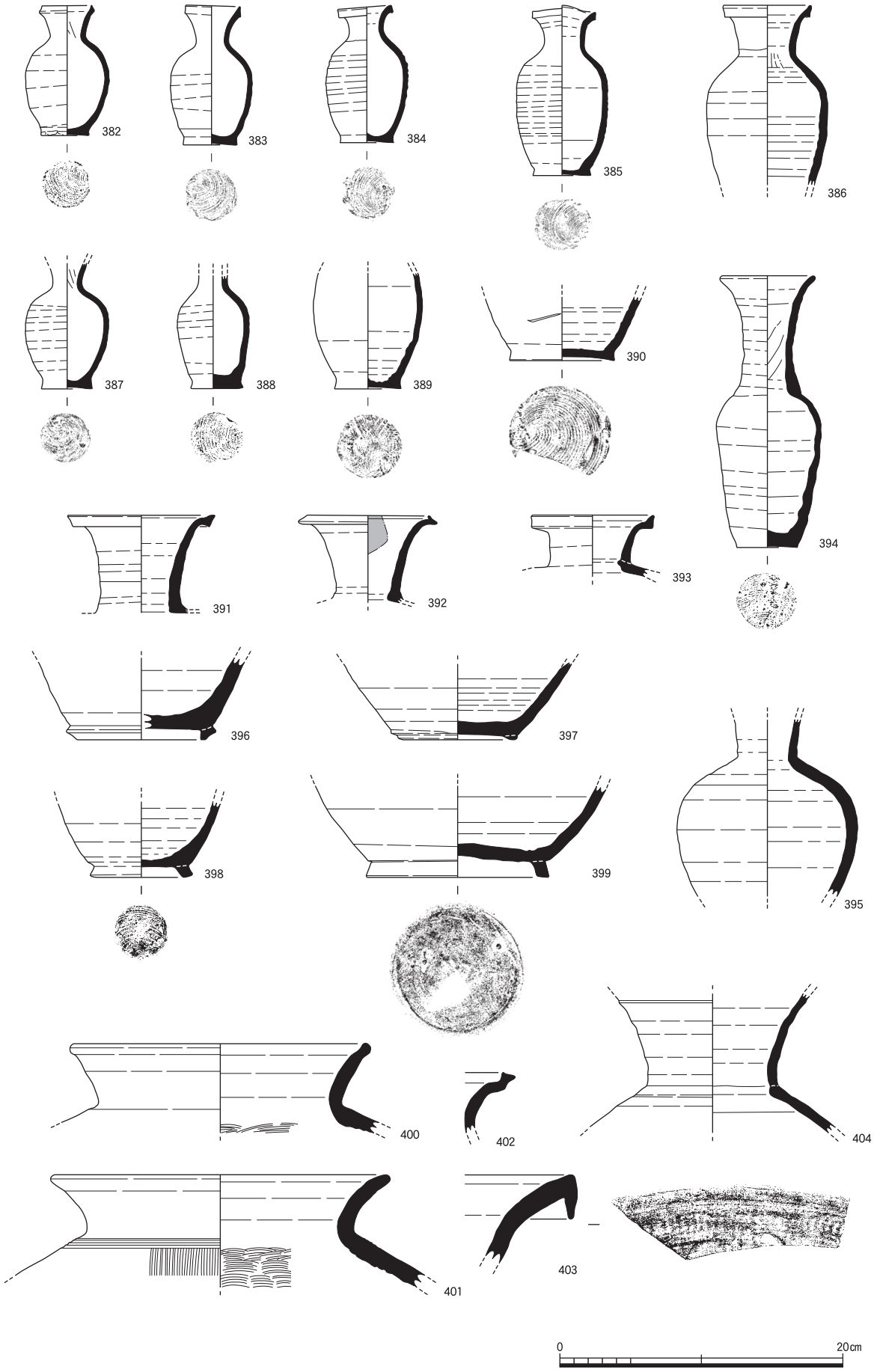


池250出土土器実測図５（１：４）



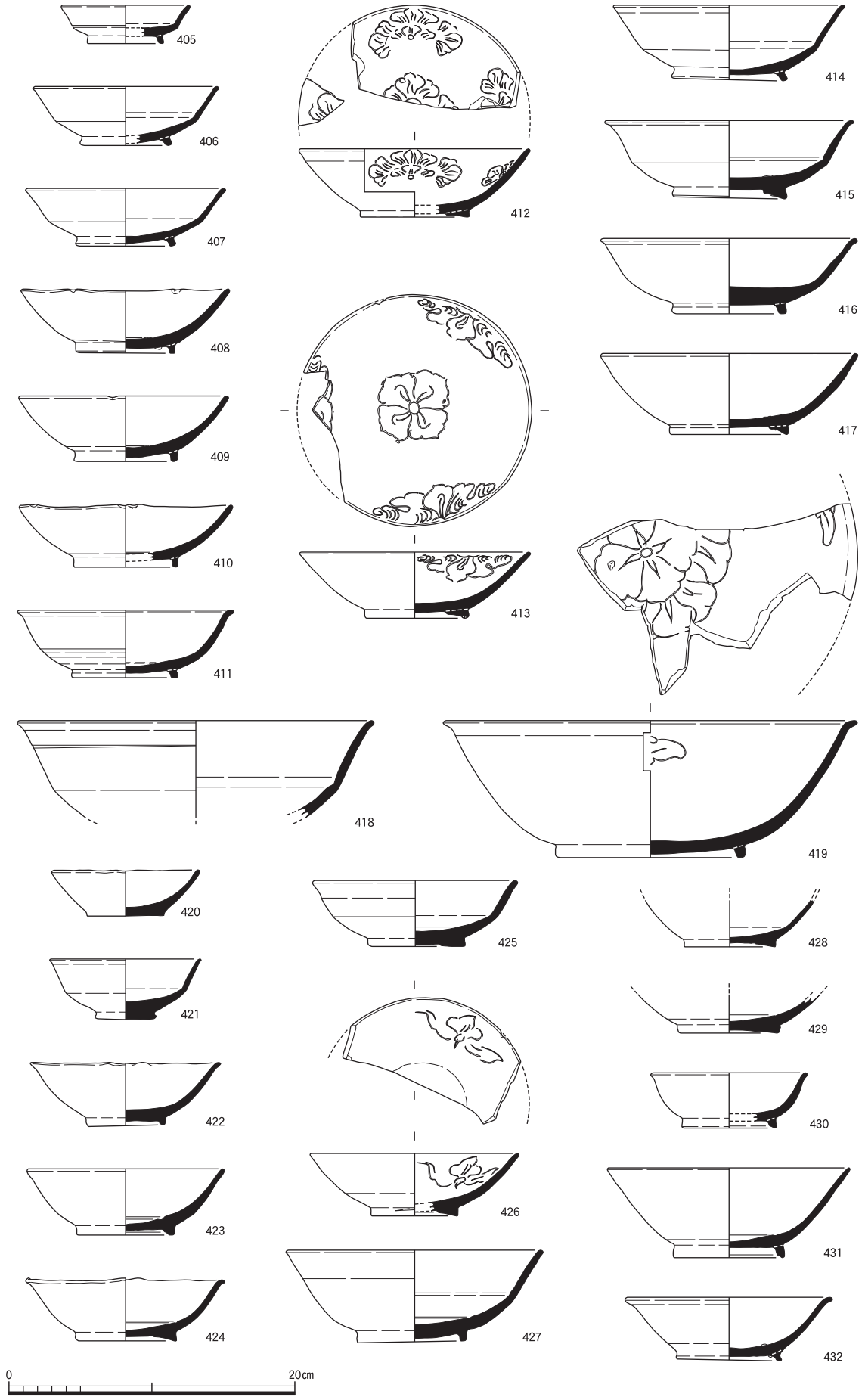
池250出土土器実測図６（１：４、355～362のみ１：２）

池250



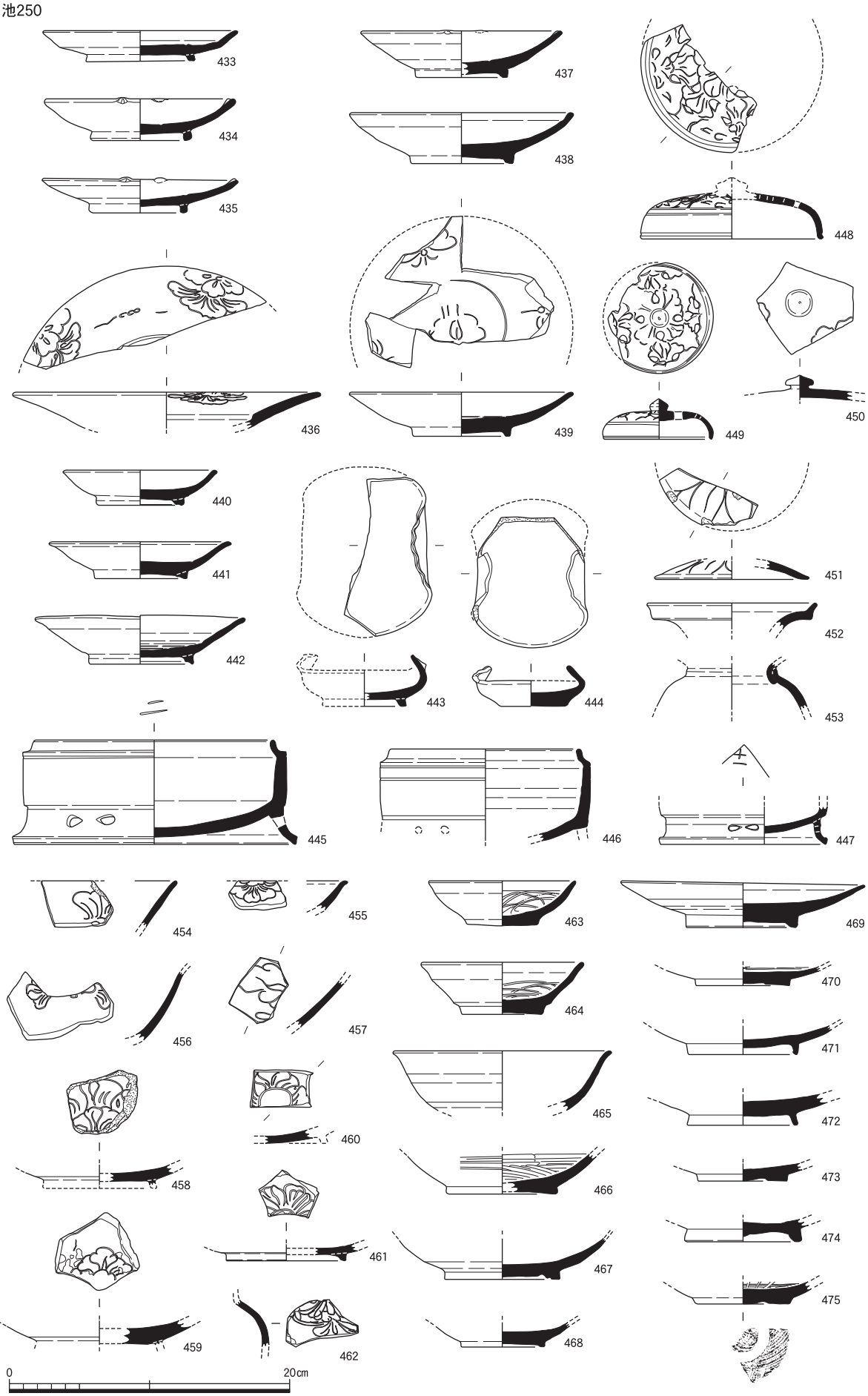
池250出土土器実測図７（１：４）

池250



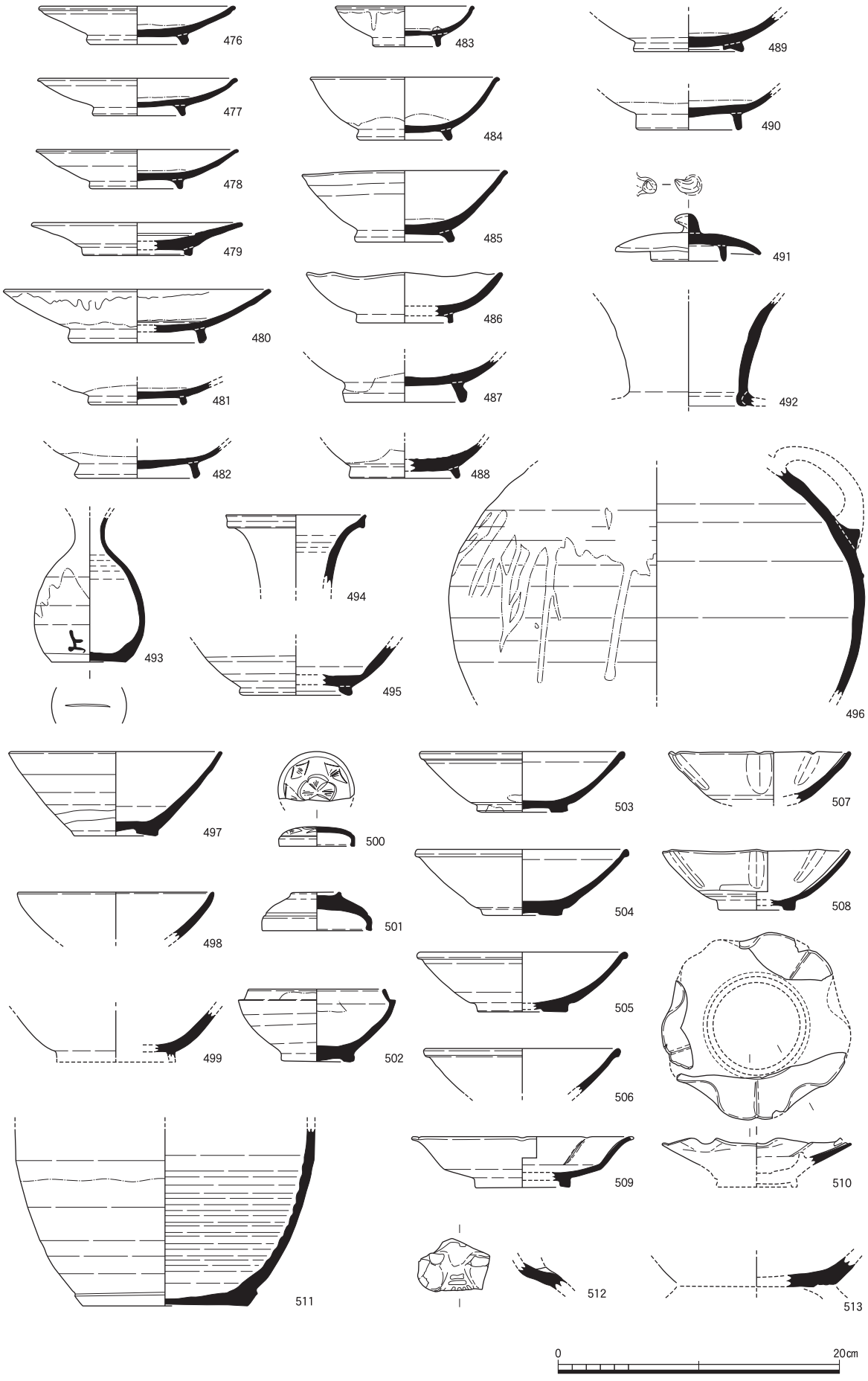
池250出土土器実測図８（１：４）

池250

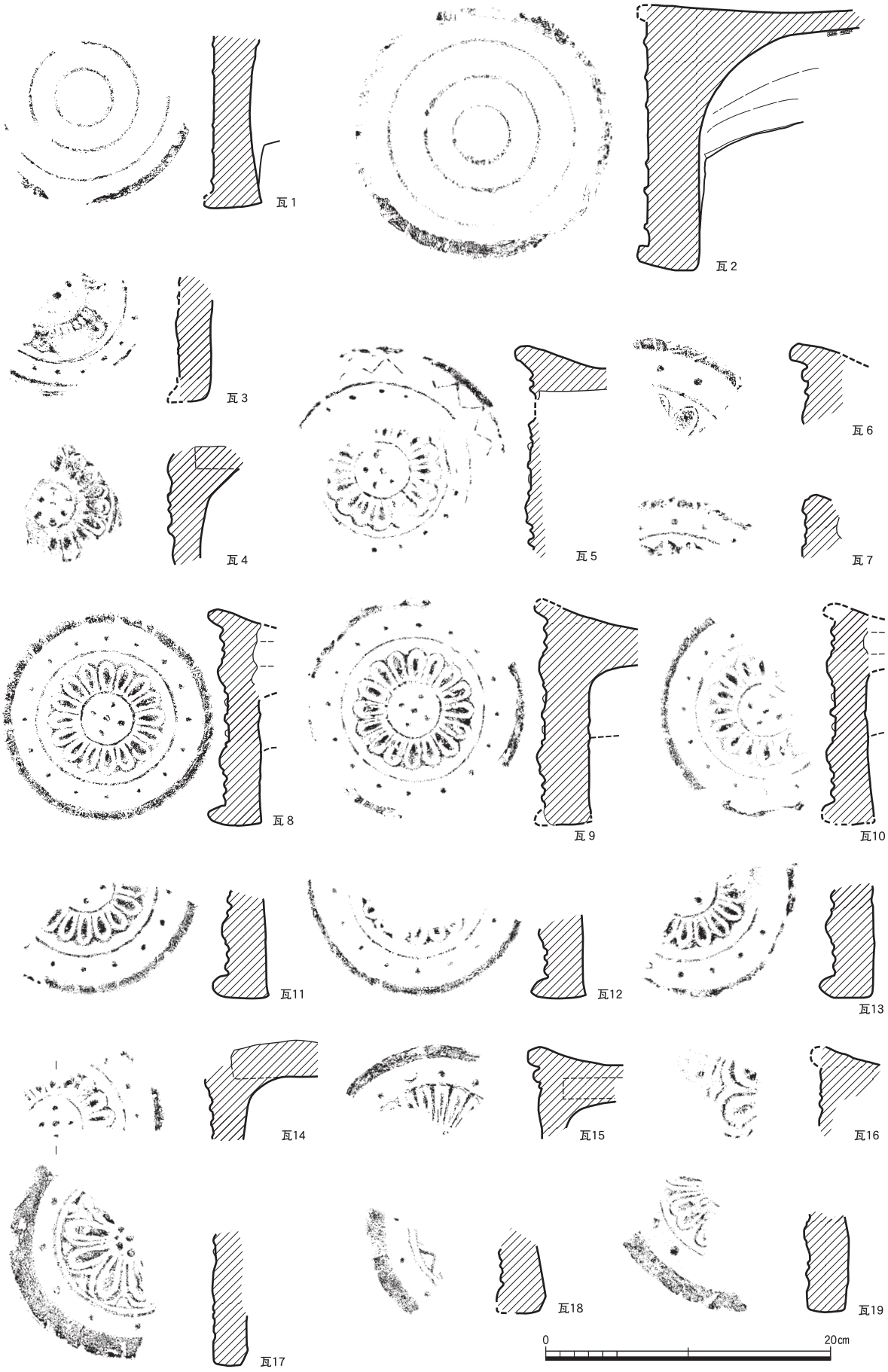


池250出土土器実測図９（１：４）

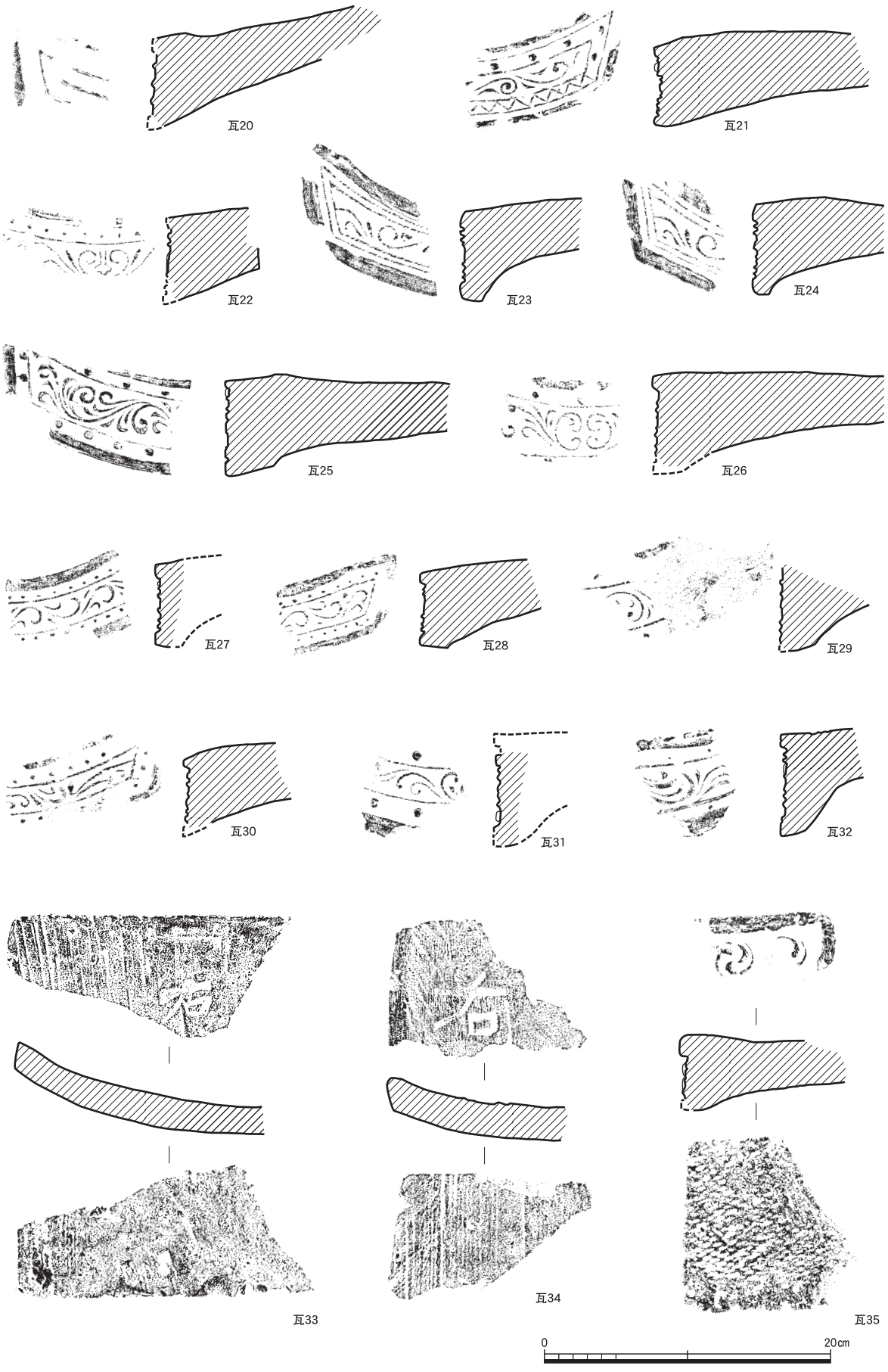
池250



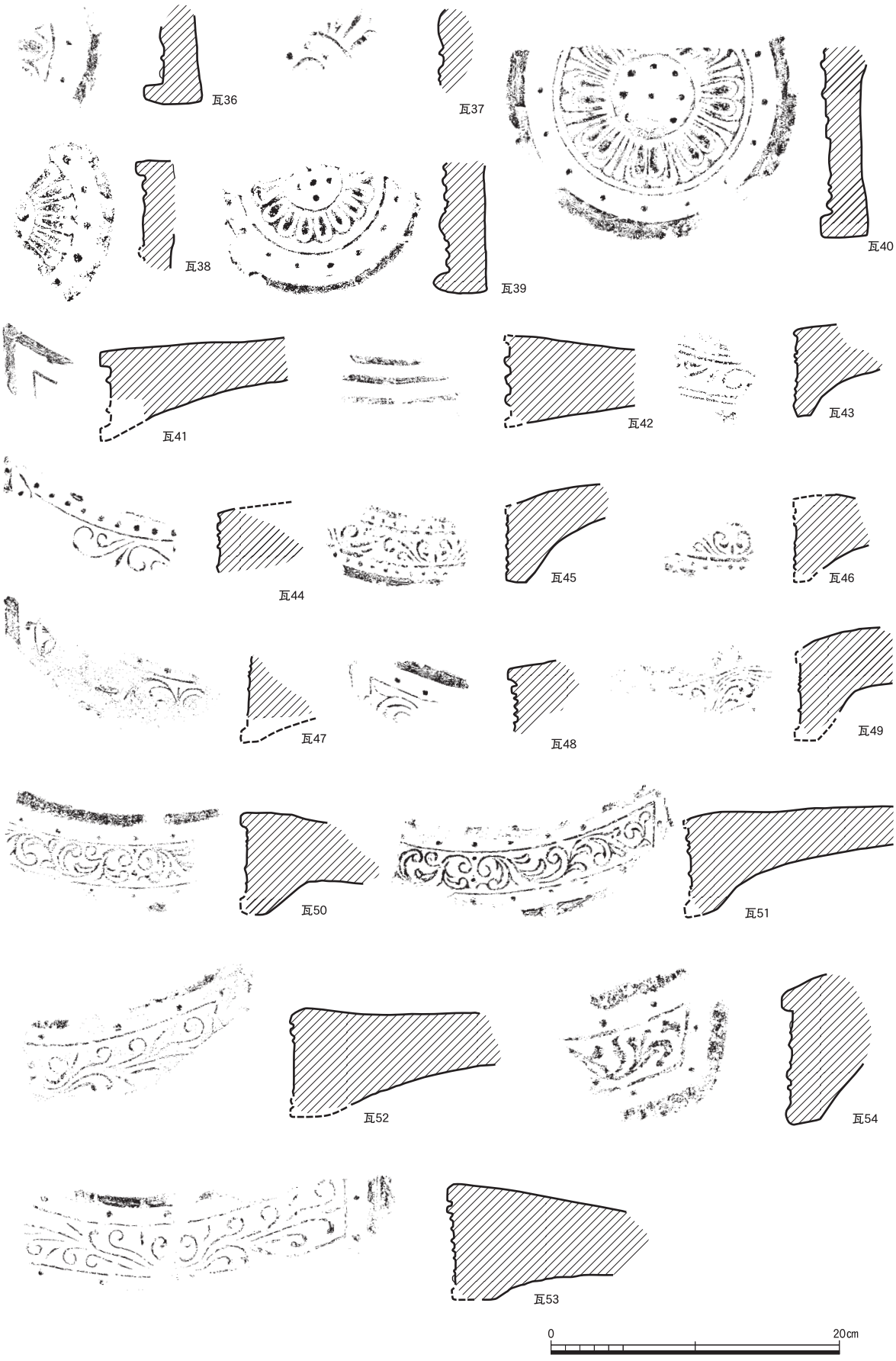
池250出土土器実測図10（１：４）



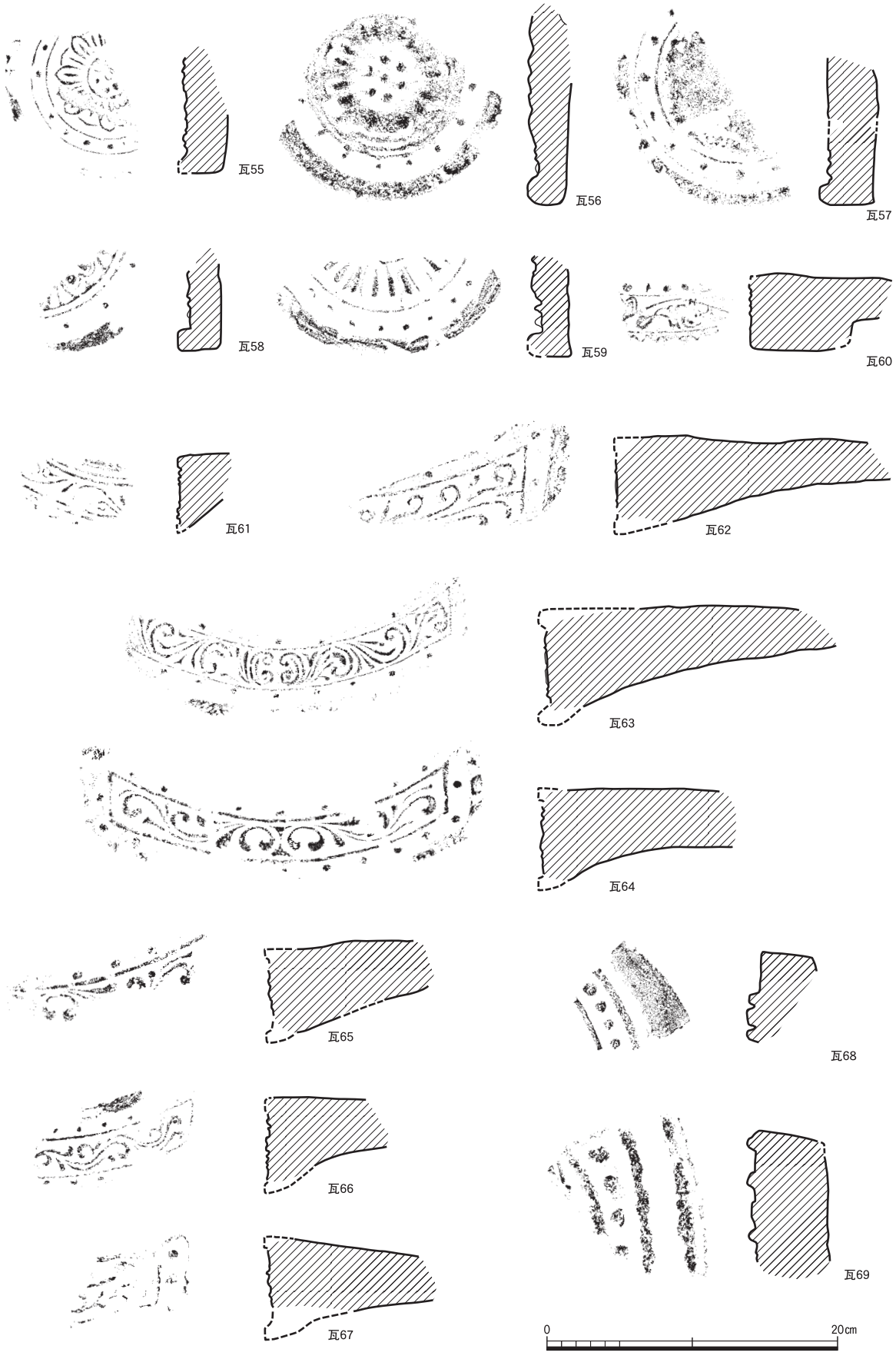
六町域出土軒丸瓦拓影および実測図（１：４）



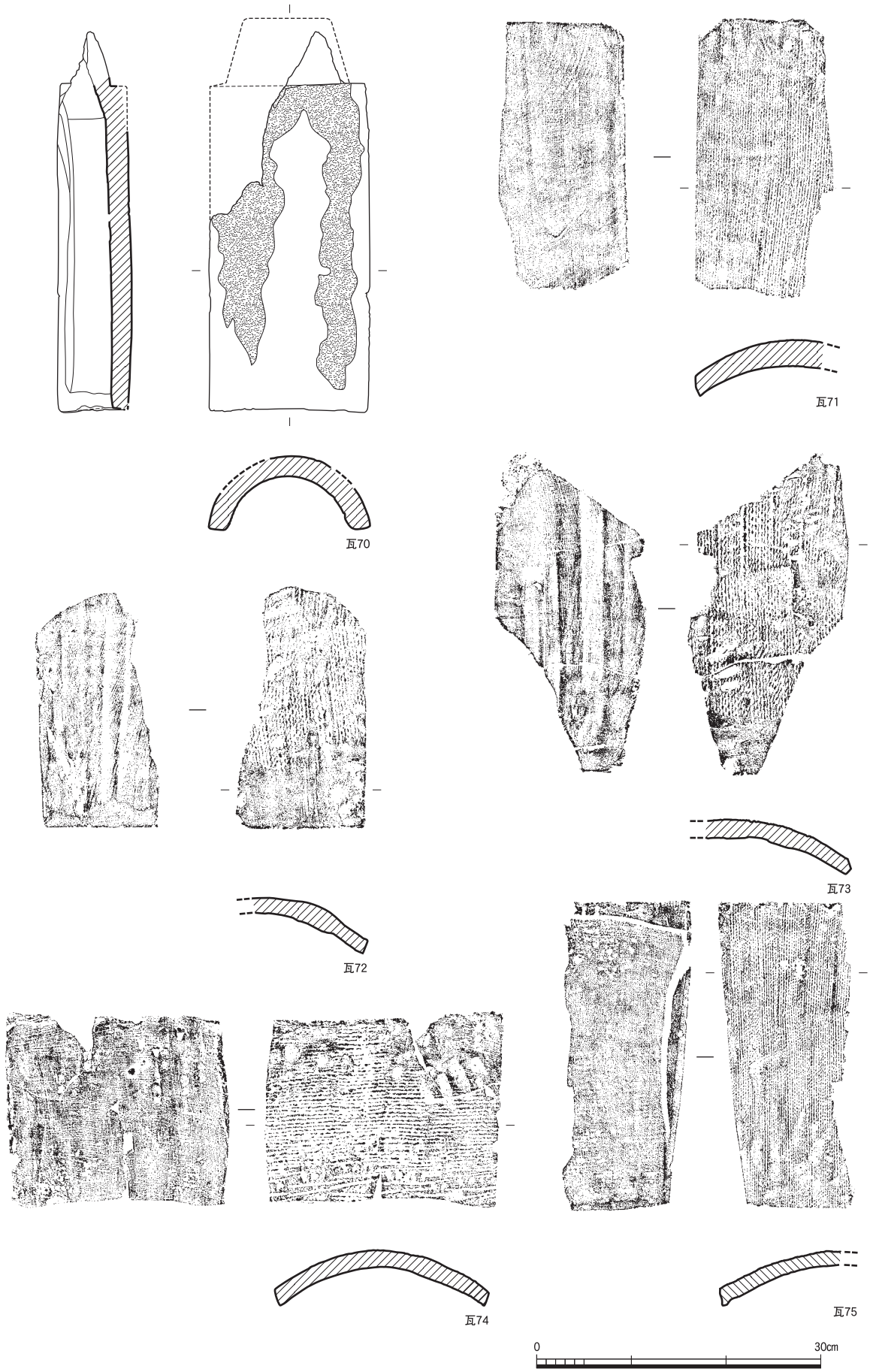
六町域出土軒平瓦・文字瓦拓影および実測図（１：４）



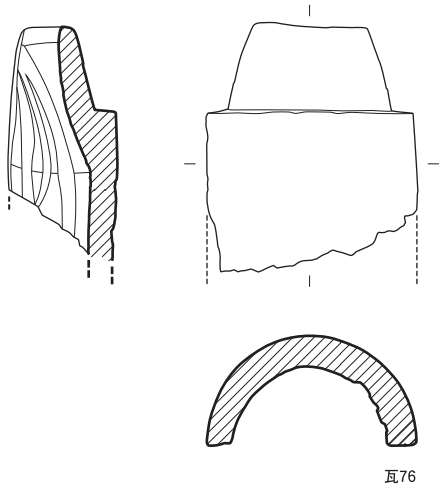
三条坊門小路出土軒瓦拓影および実測図（１：４）

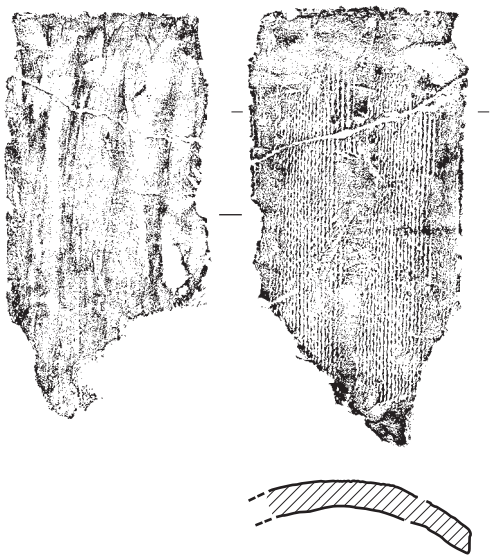


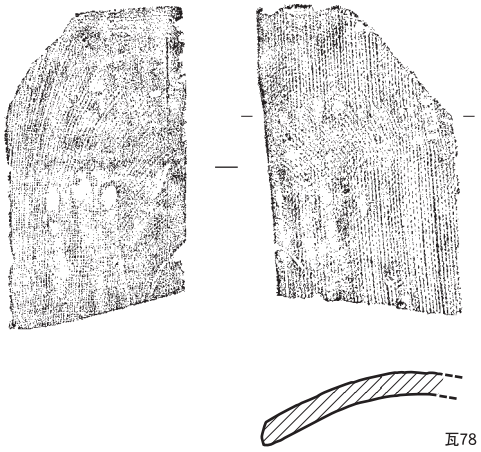
三条坊門小路出土軒瓦・鬼瓦、西坊城小路・七町域出土軒瓦拓影および実測図（１：４）

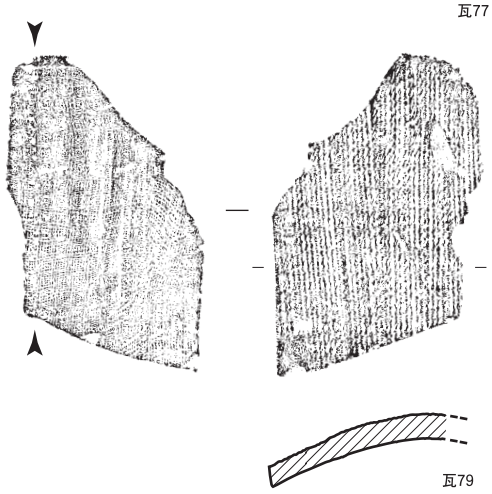


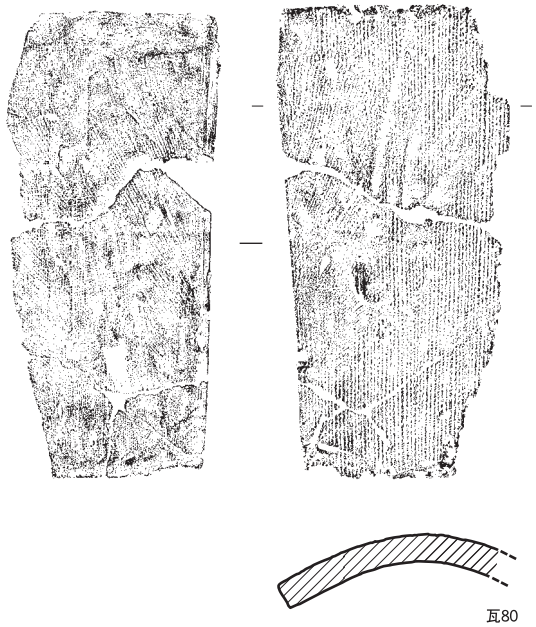
井戸470出土丸瓦・平瓦拓影および実測図（１：６）

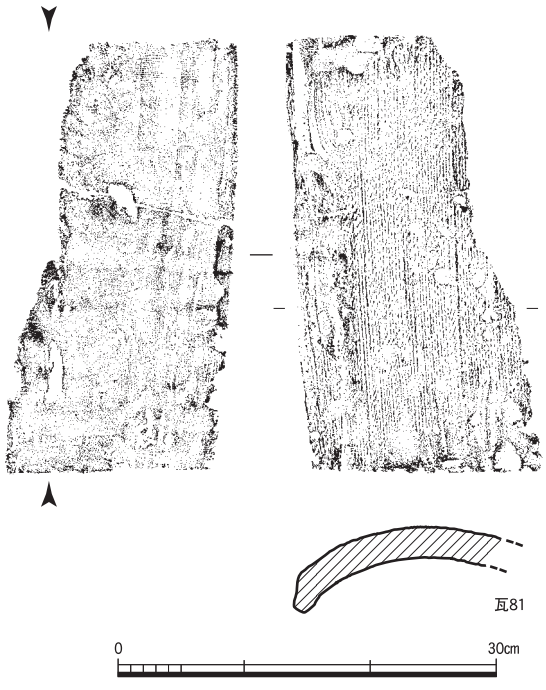

瓦76


瓦77


瓦78

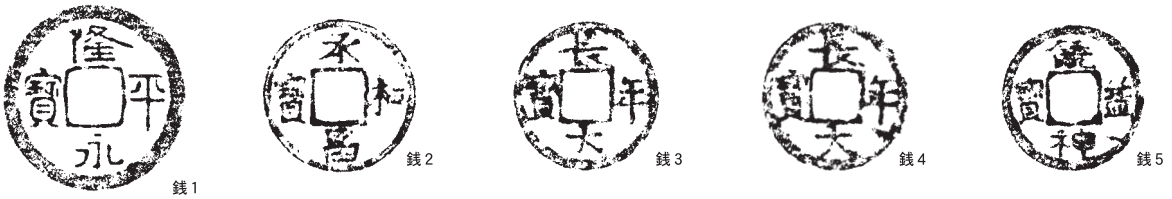

瓦79

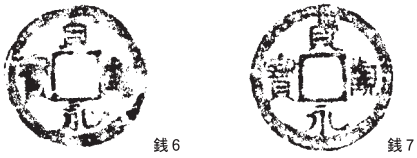

瓦80

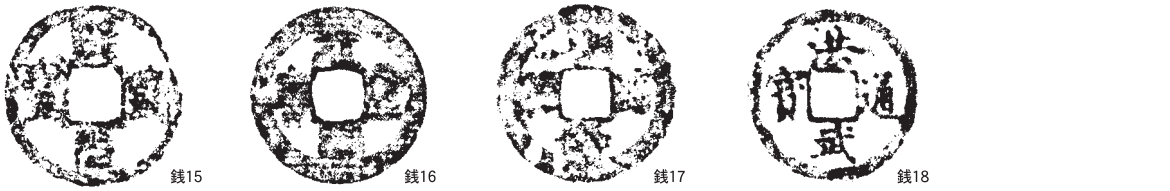

瓦81

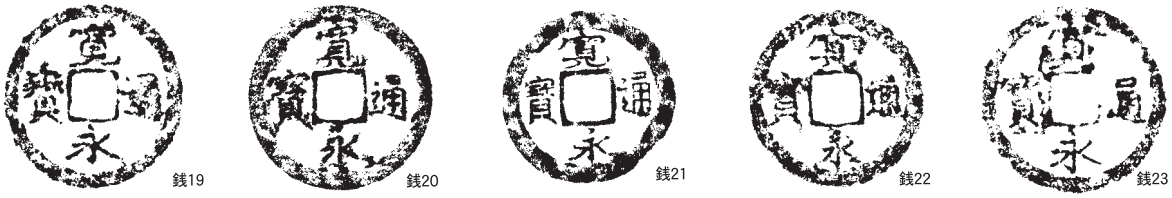
0　30cm

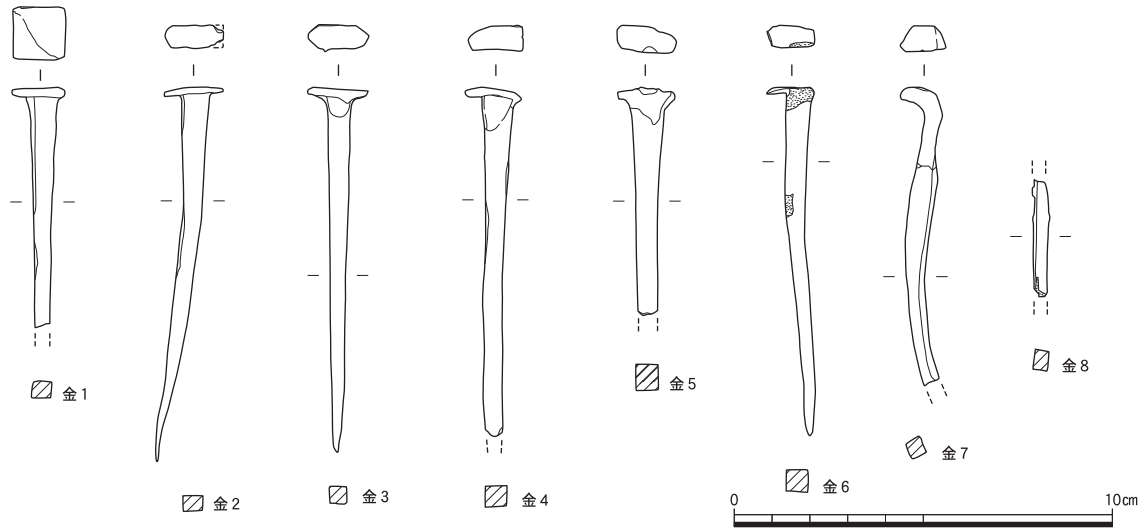
池250出土丸瓦・平瓦拓影および実測図（１：６）



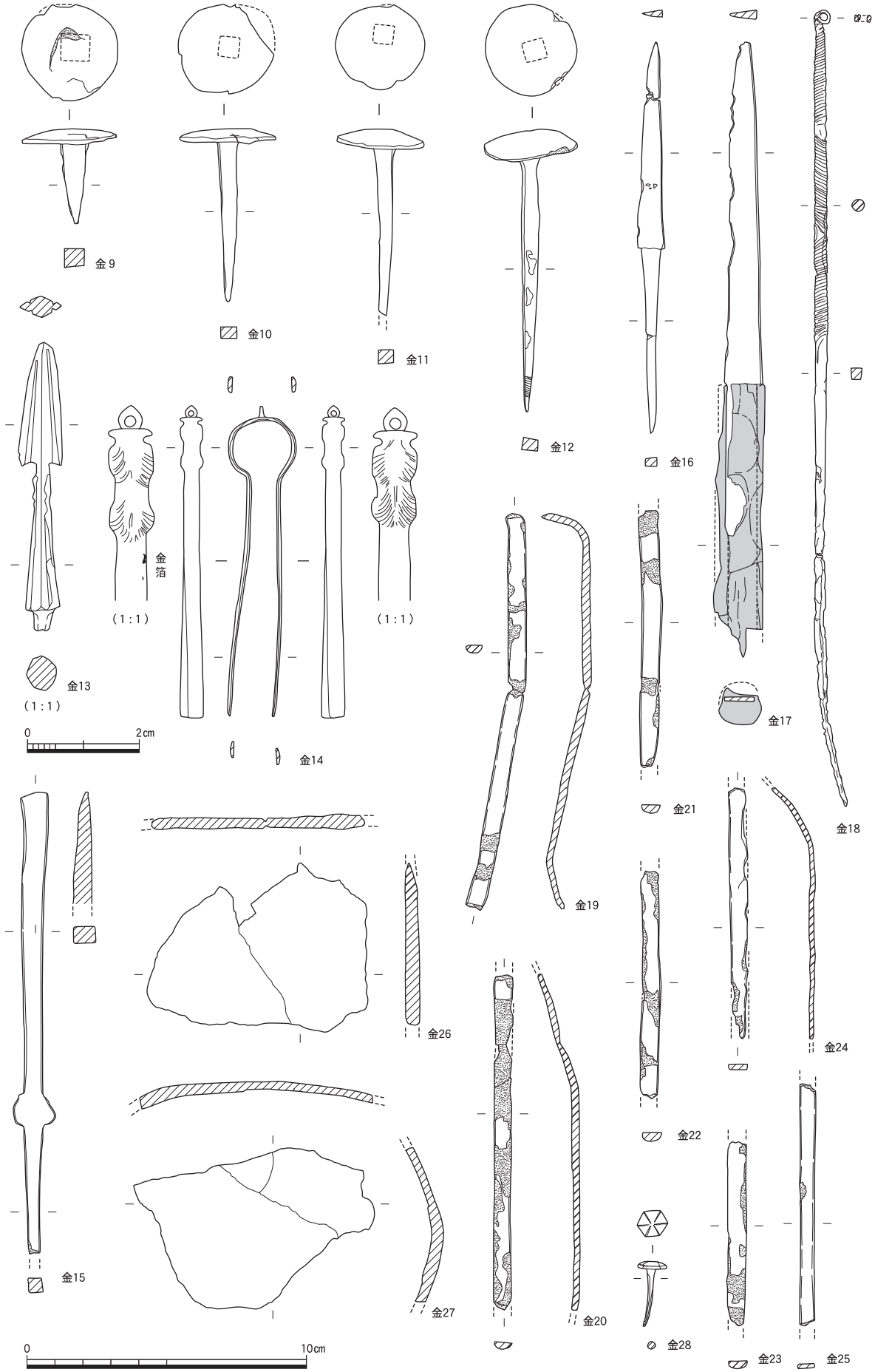




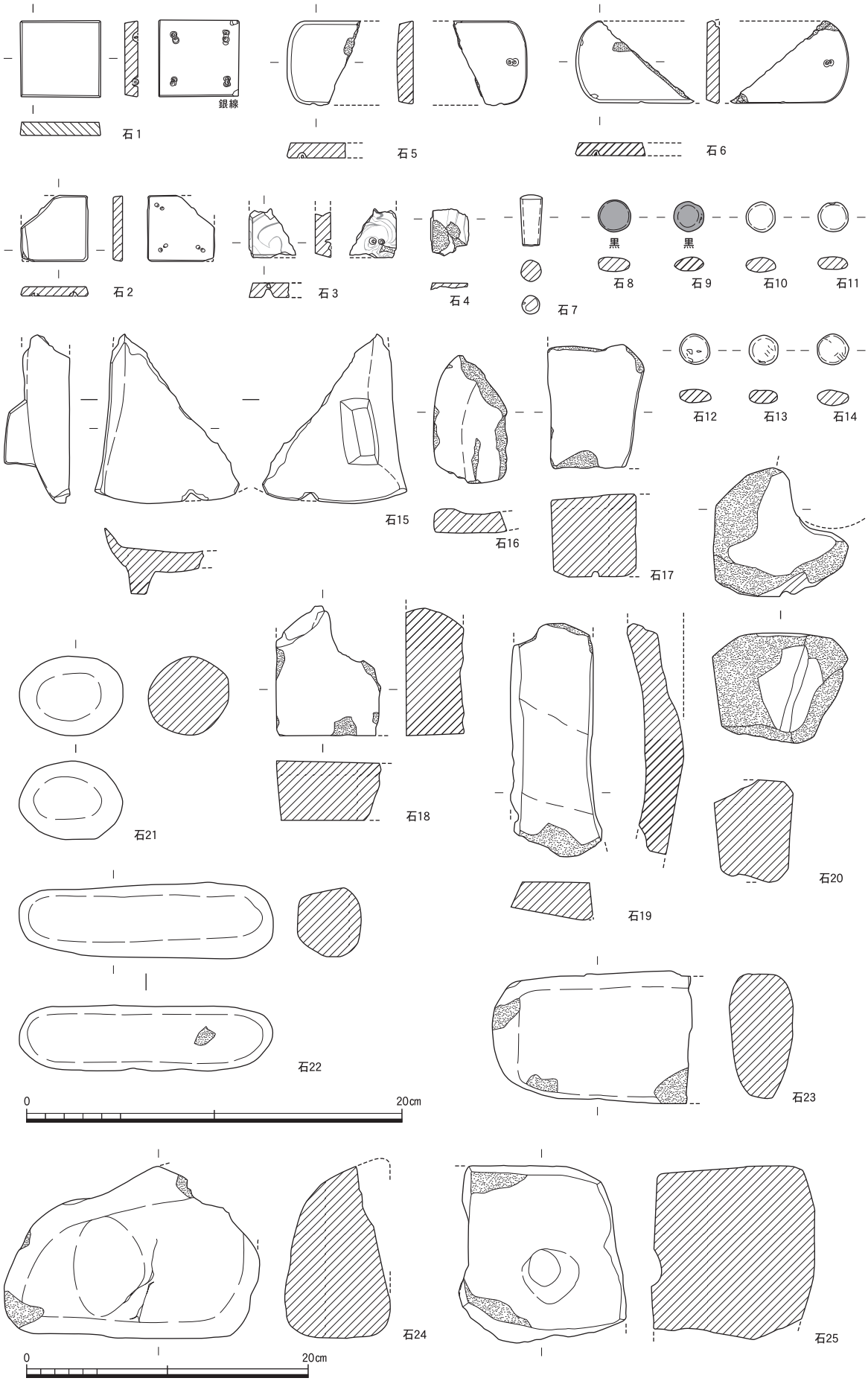




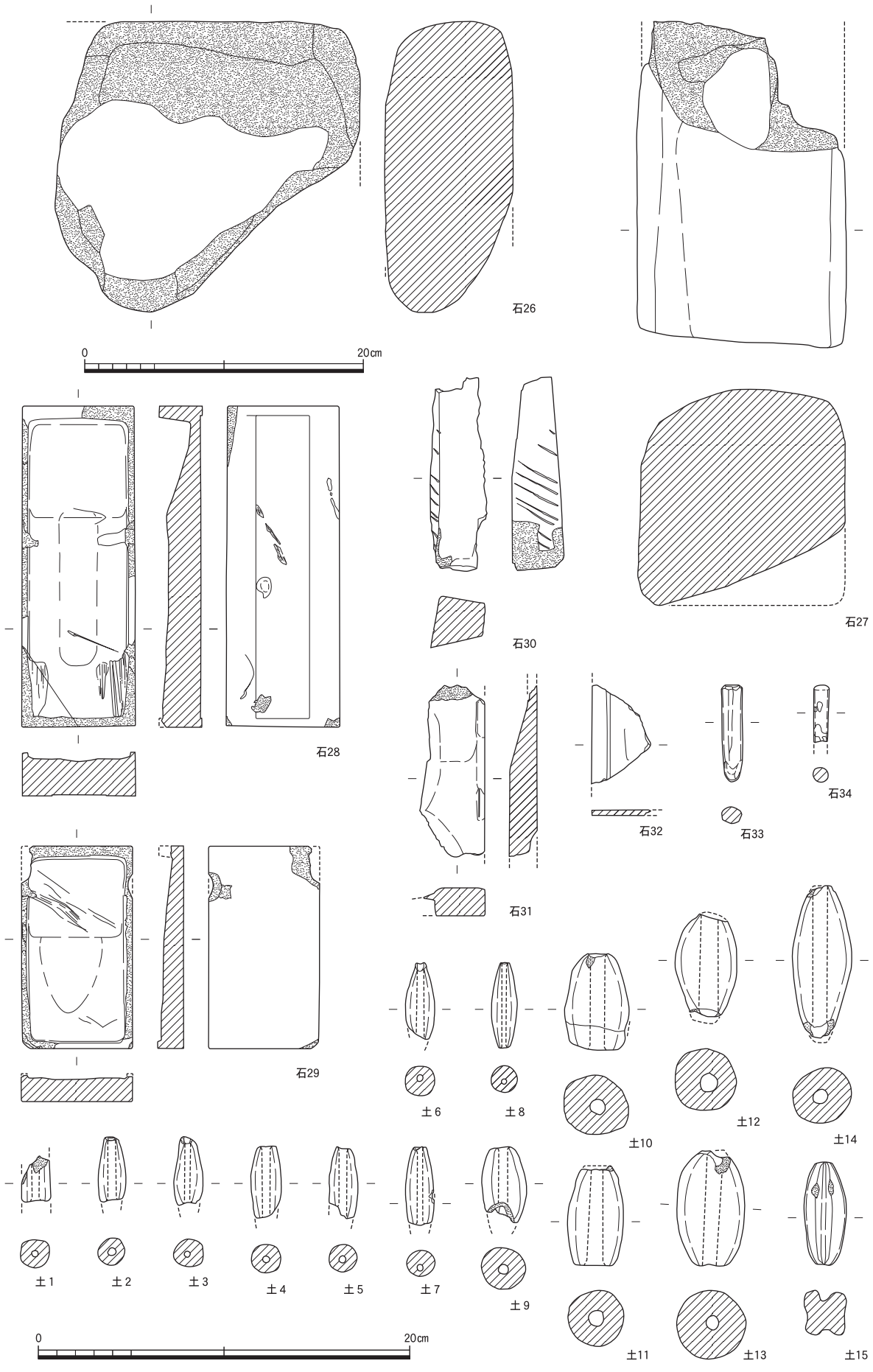
銭貨拓影（１：１）、金属製品実測図１（１：２）



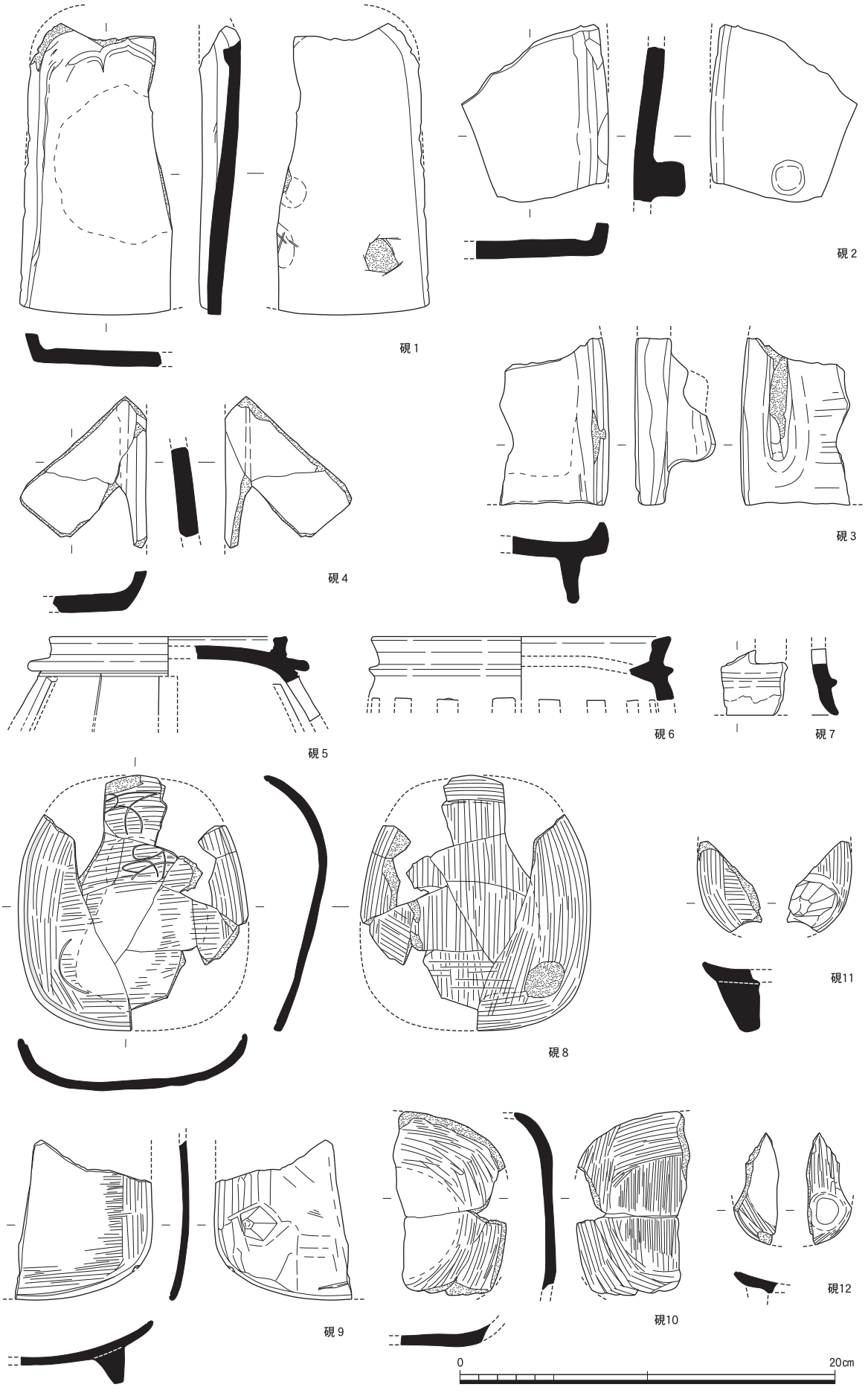
金属製品実測図２（１：２、金13と金14部分のみ１：１）



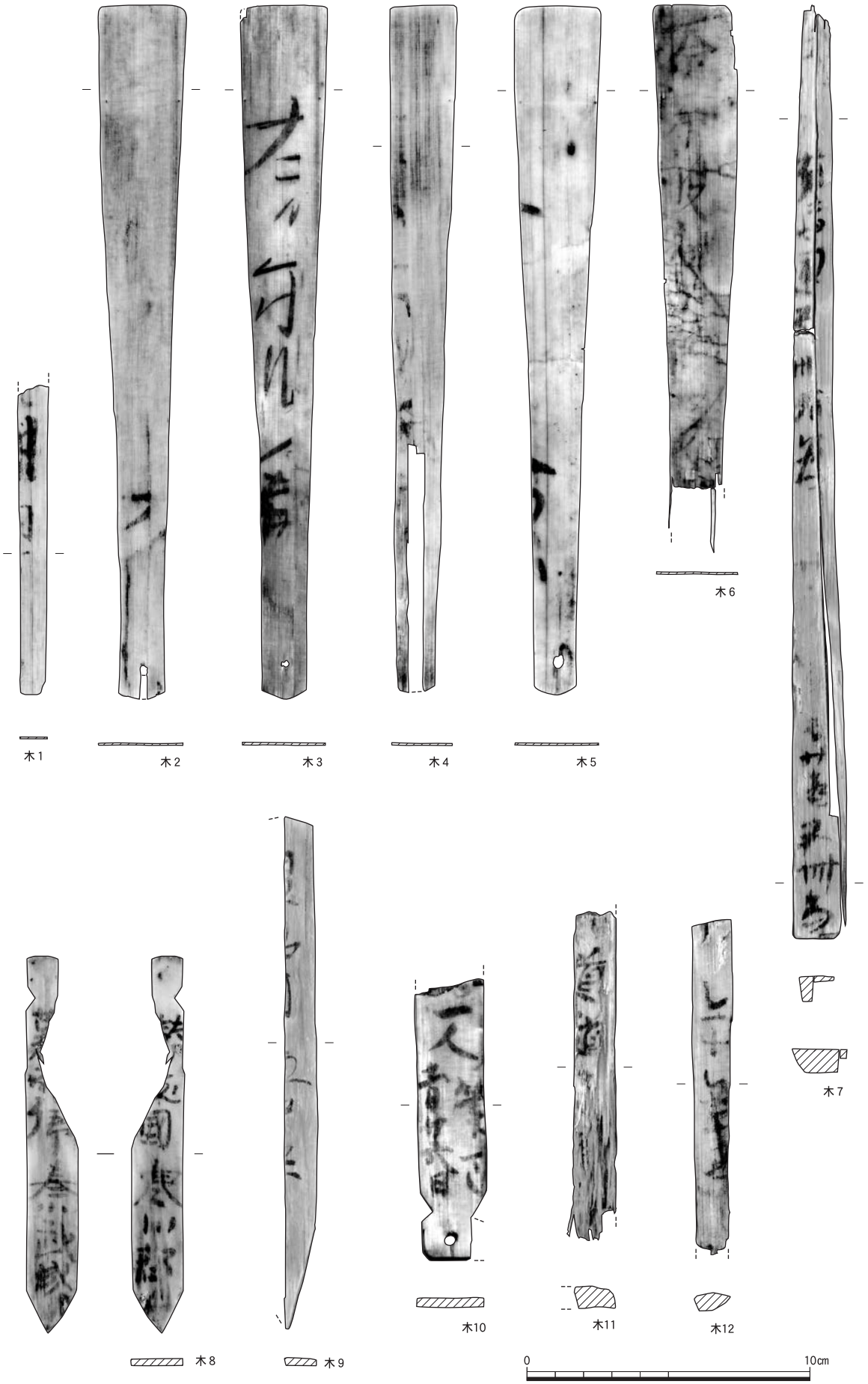
石製品実測図１（１：３、石24・25のみ１：４）



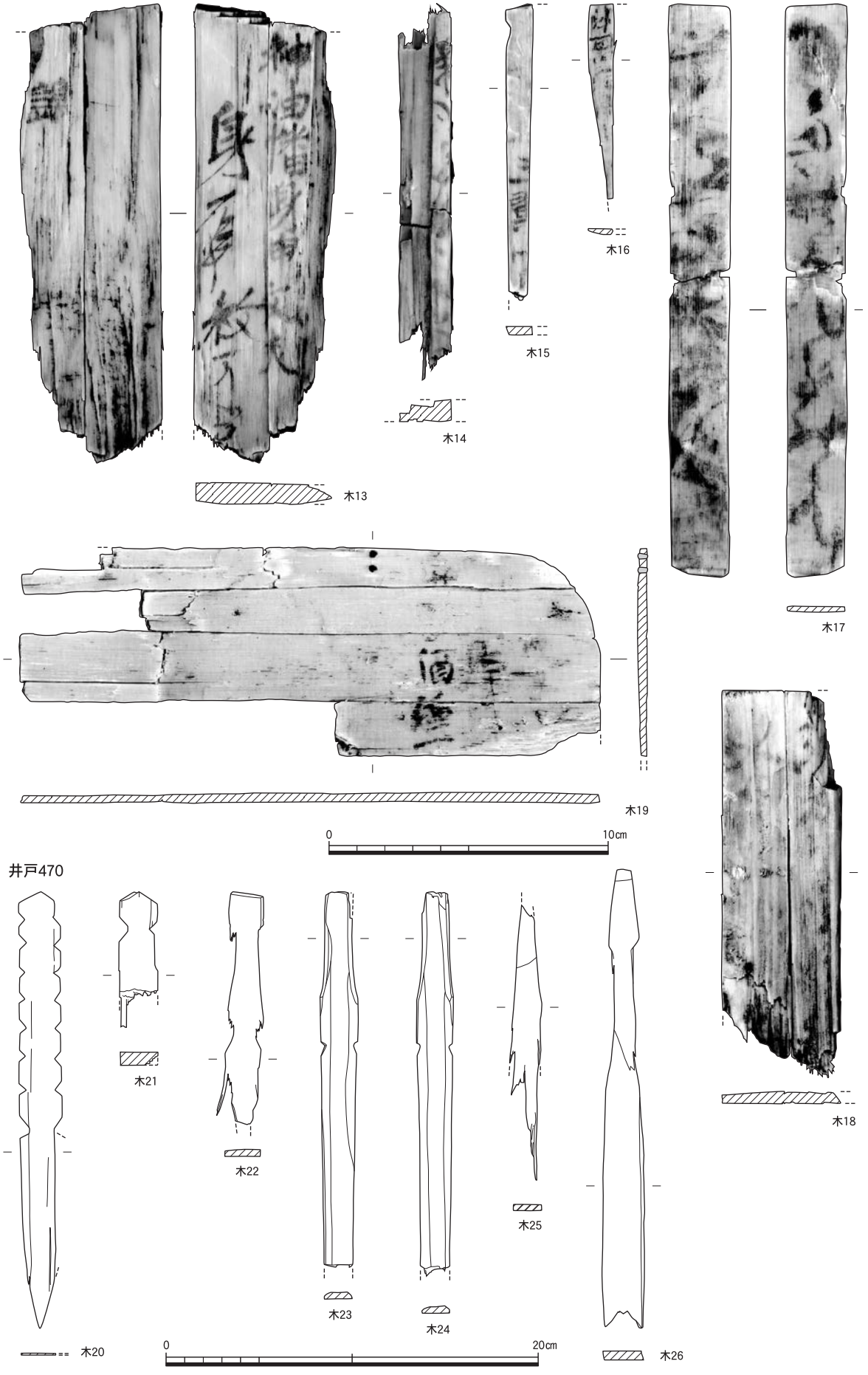
石製品実測図２（１：３、石26・27のみ１：４）、土製品実測図１（１：３）



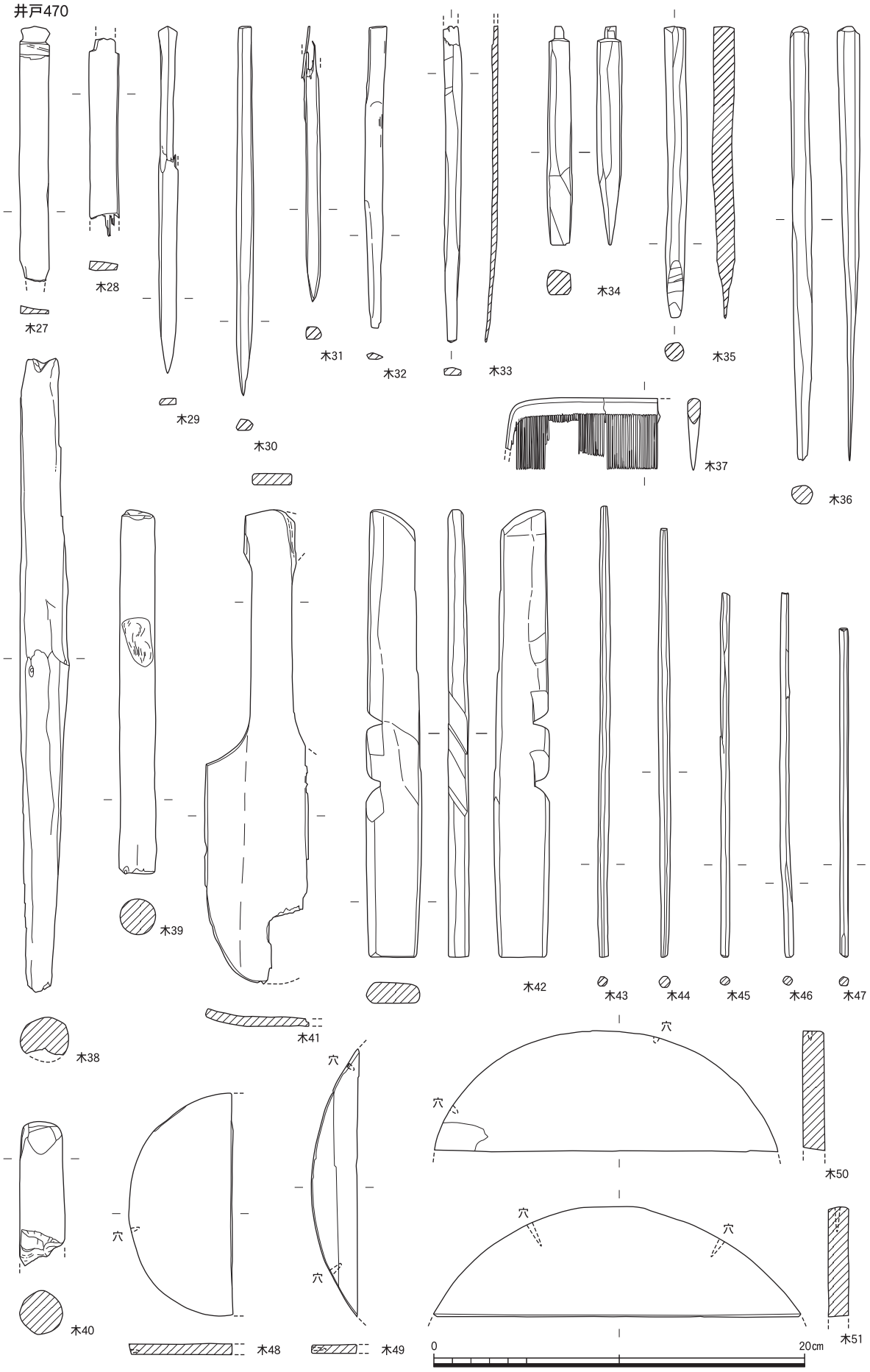
土製品実測図２（１：３）



木簡実測図１（１：２）

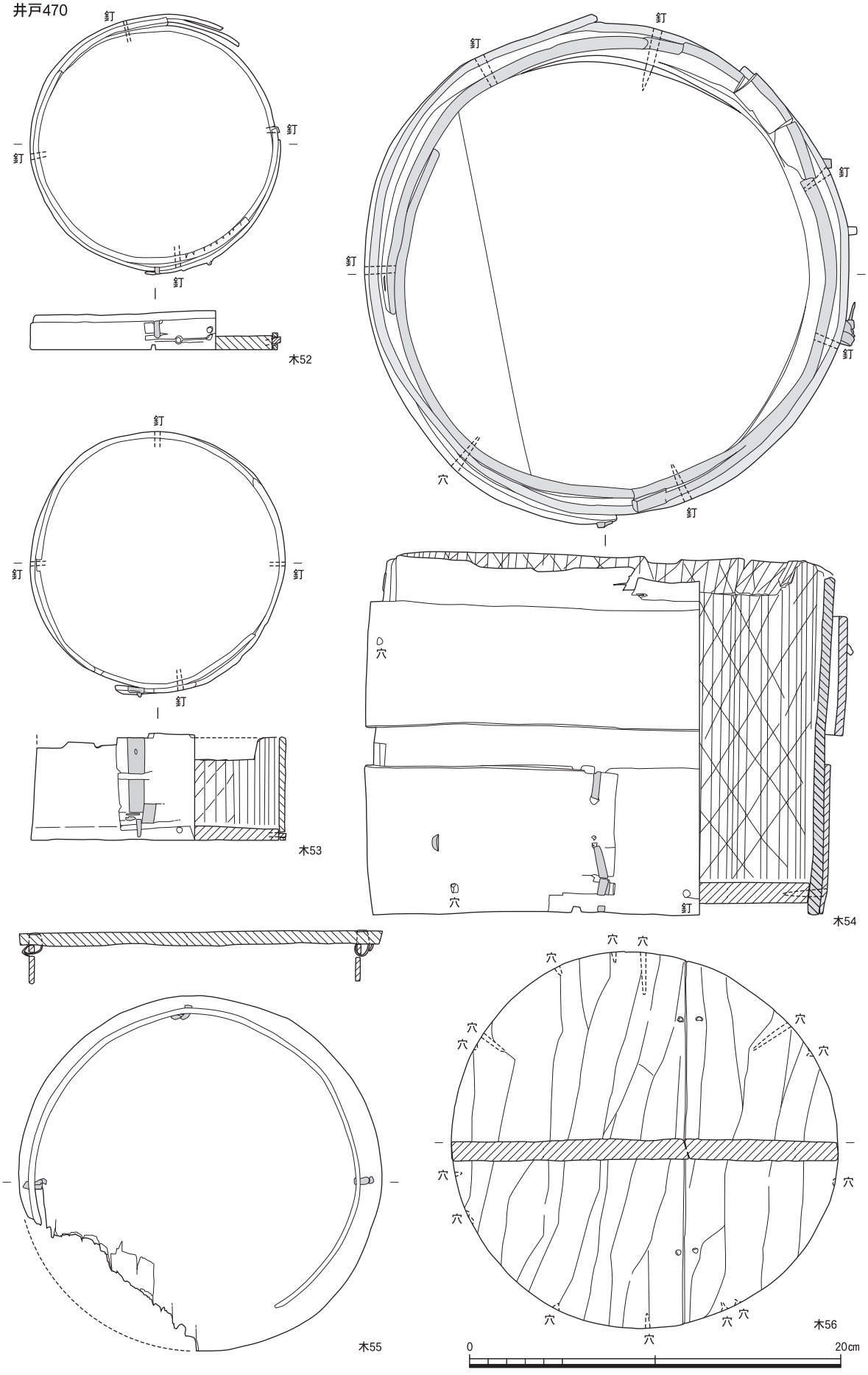


木簡実測図２（木13～19、１：２）、井戸470出土木製品実測図１（木20～26、１：３）

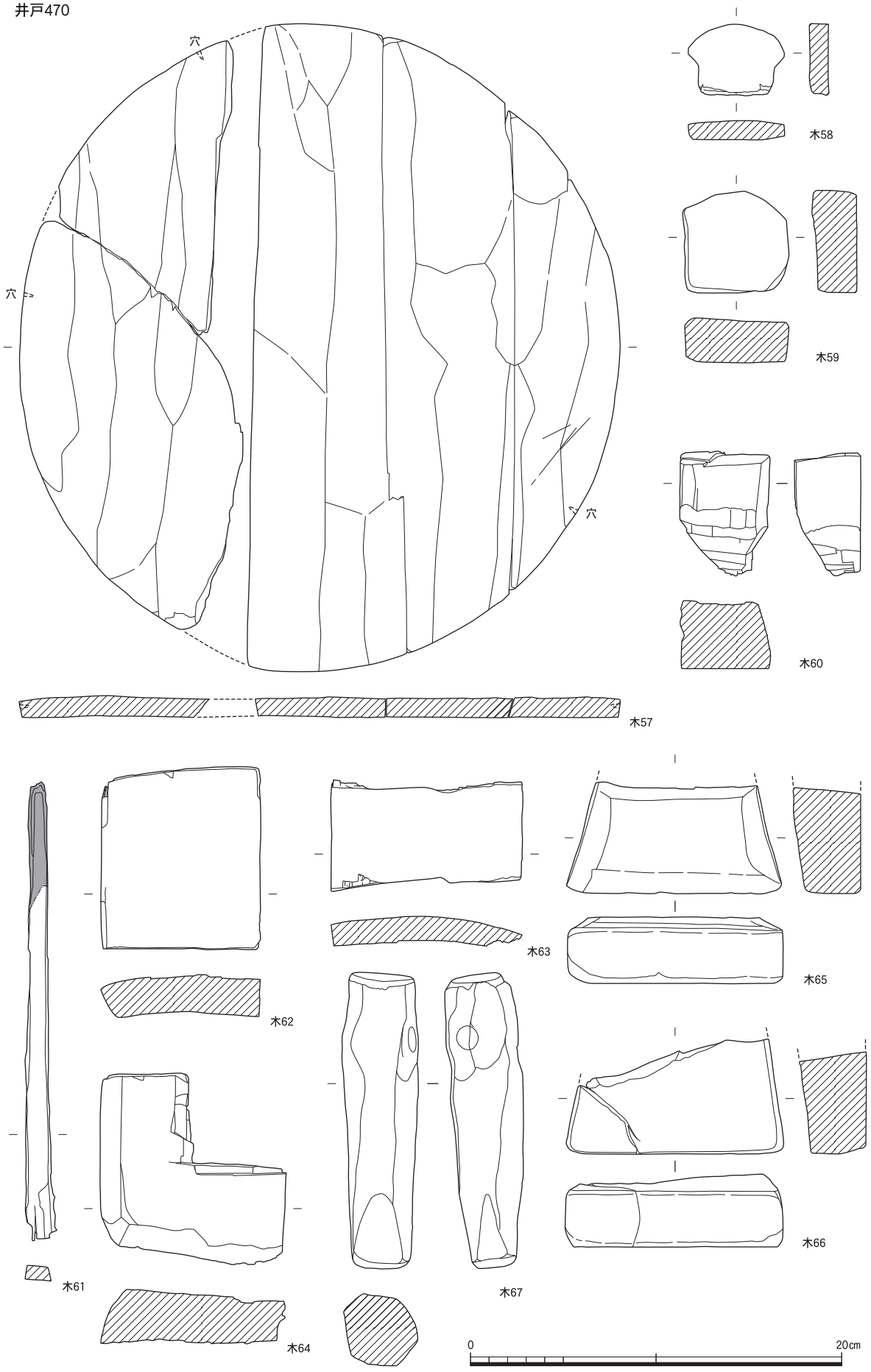


井戸470出土木製品実測図２（１：３）

井戸470

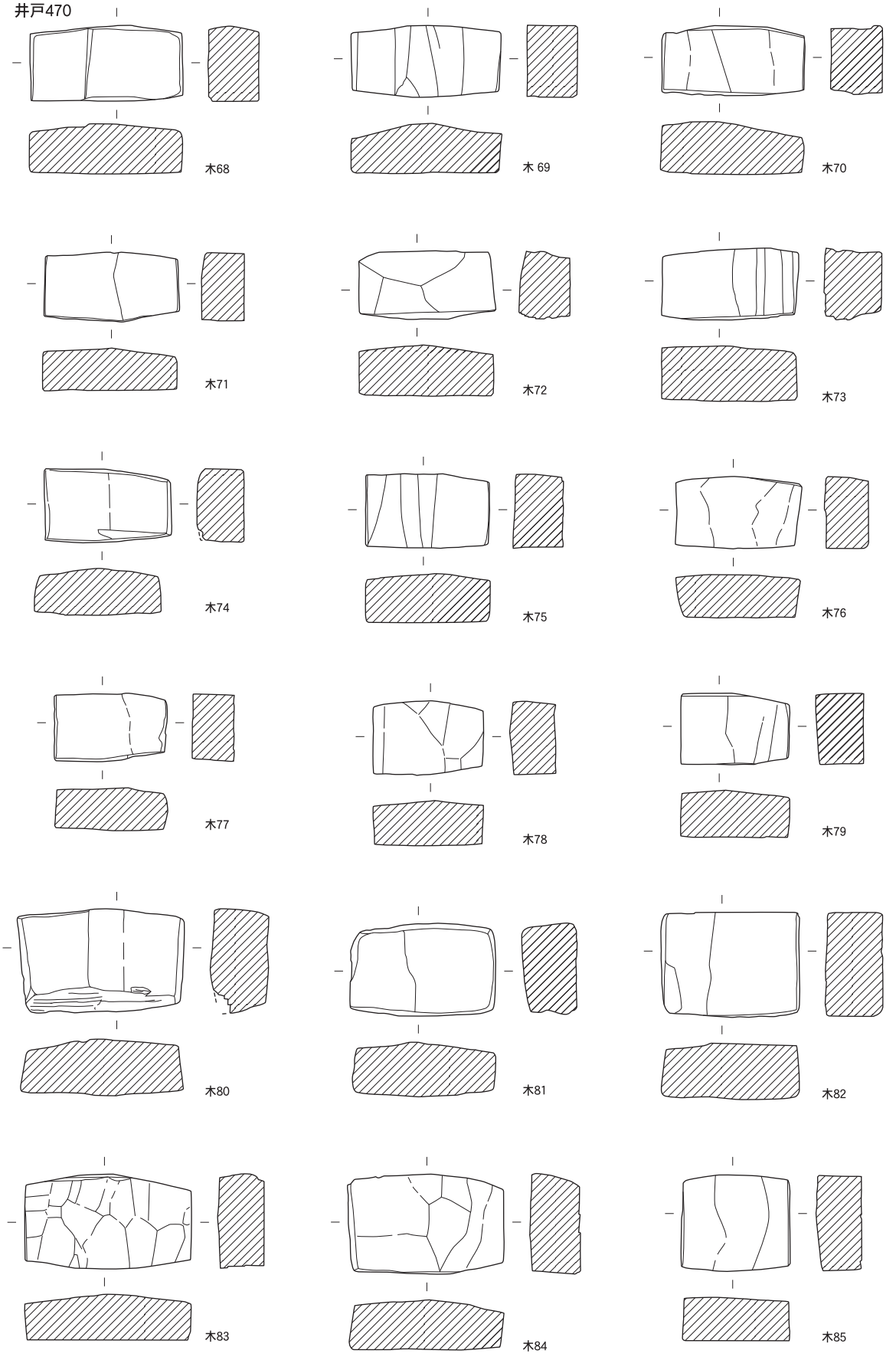


井戸470出土木製品実測図３（１：３）



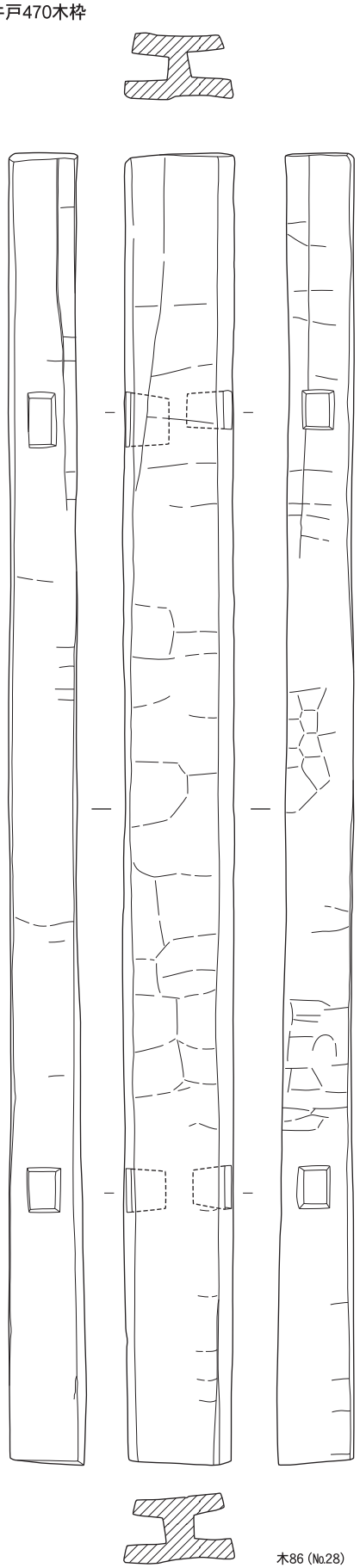
井戸470出土木製品実測図４（１：３）

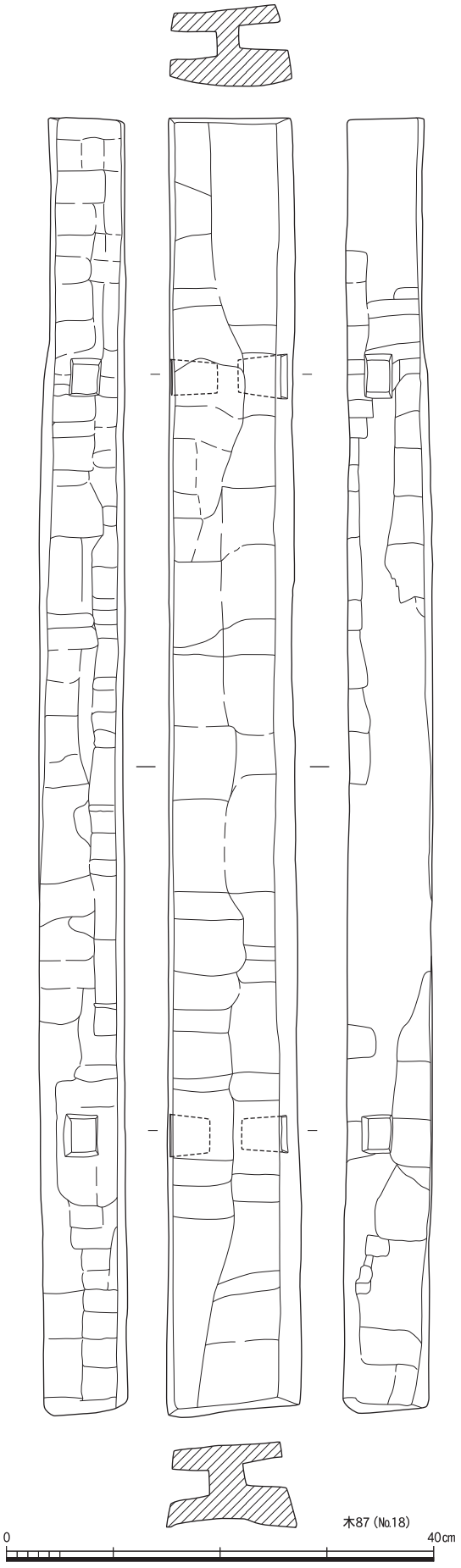
井戸470



井戸470出土木製品実測図５（１：３）

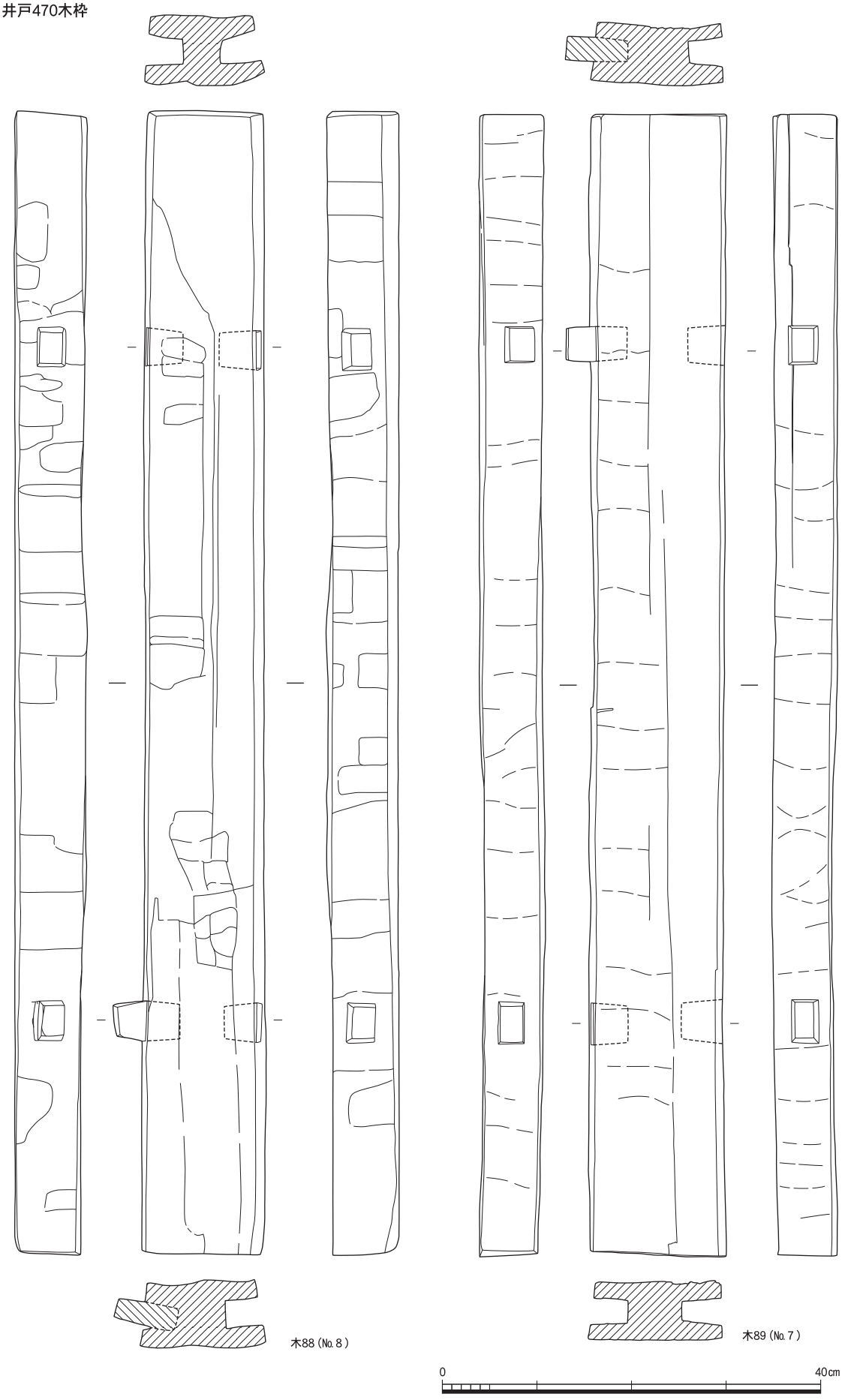
井戸470木枠





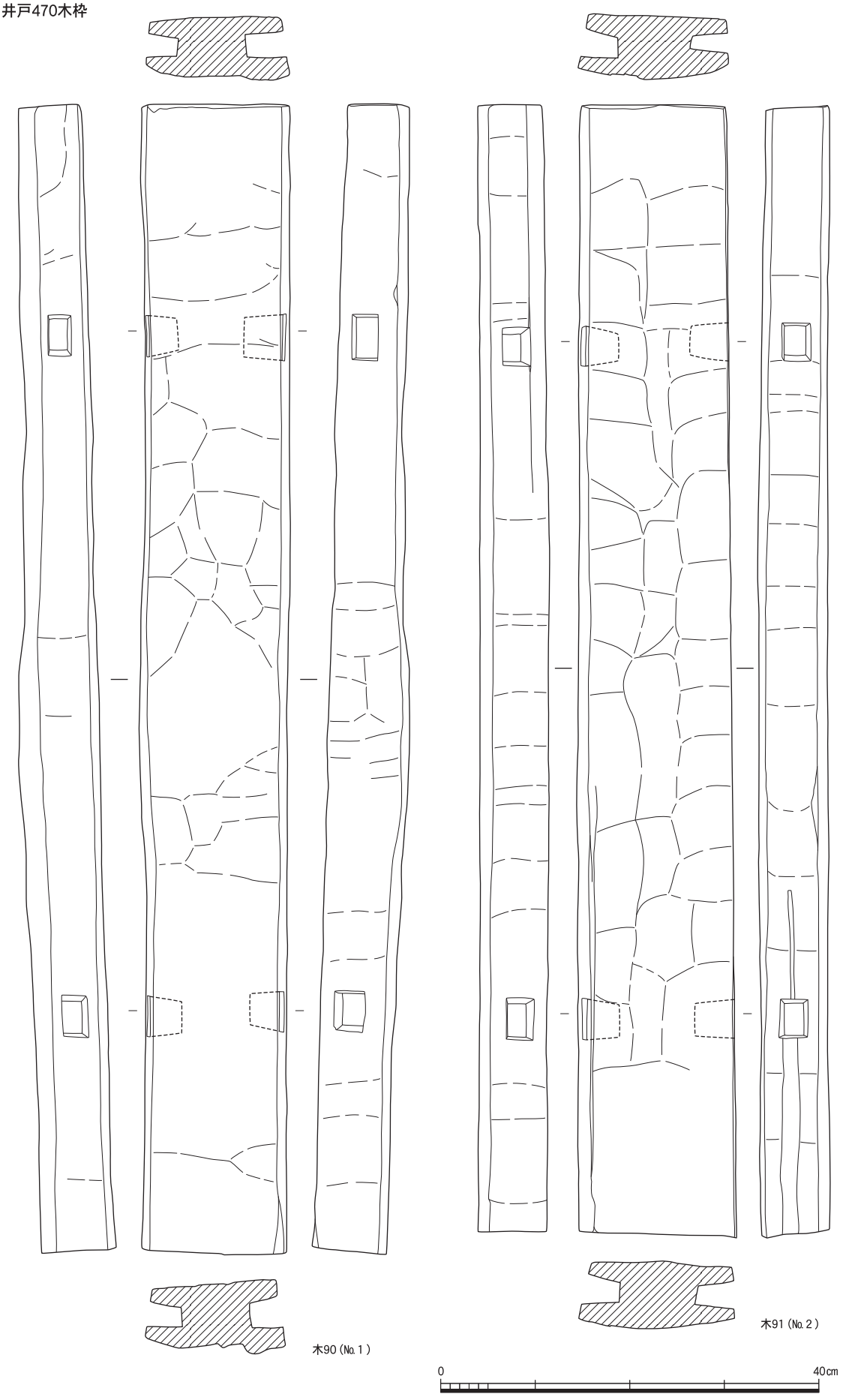
井戸470出土木製品実測図６（１：６）

井戸470木枠



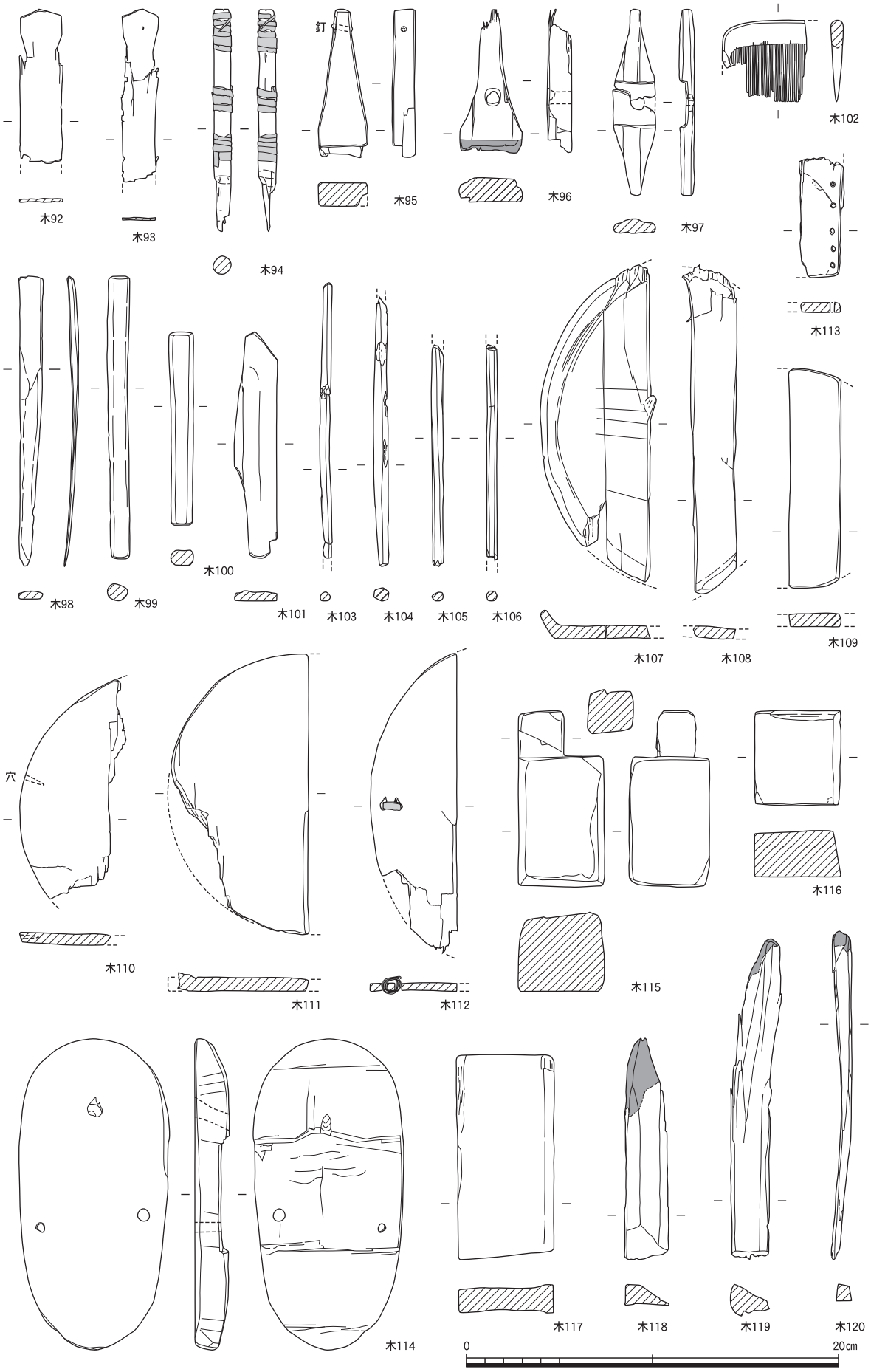
井戸470出土木製品実測図７（１：６）

井戸470木枠

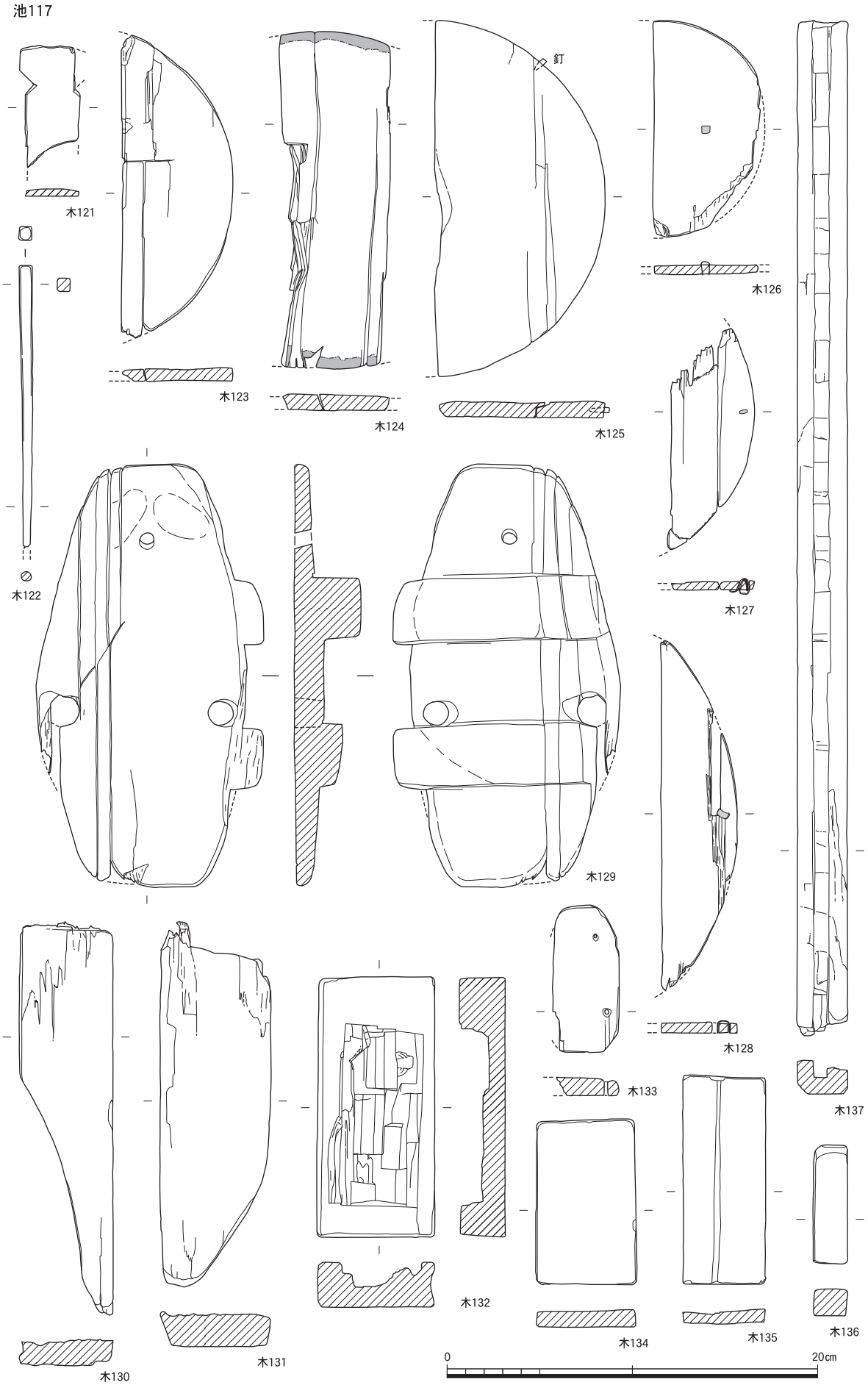


井戸470出土木製品実測図８（１：６）

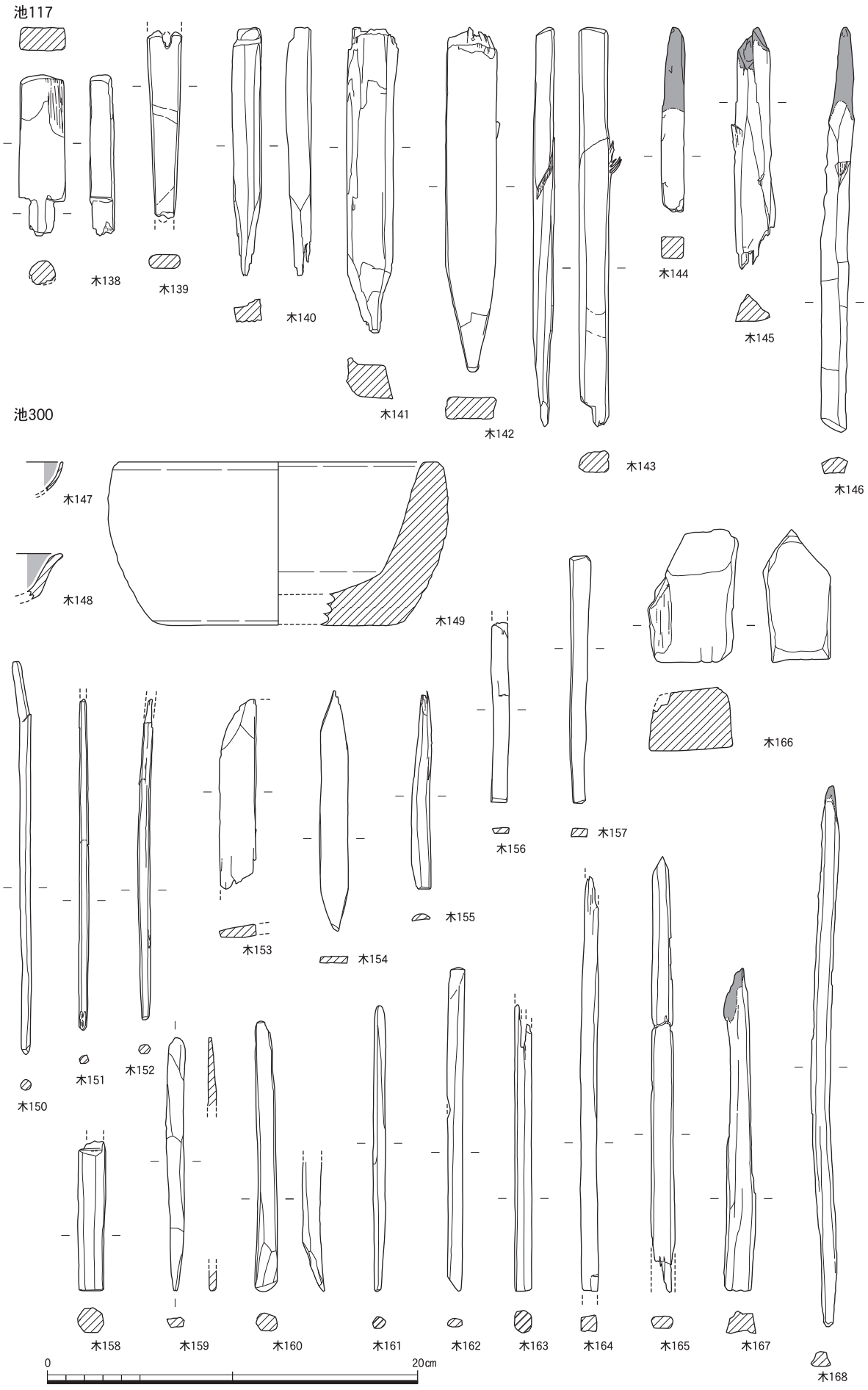
溝119



溝119出土木製品実測図（１：３）

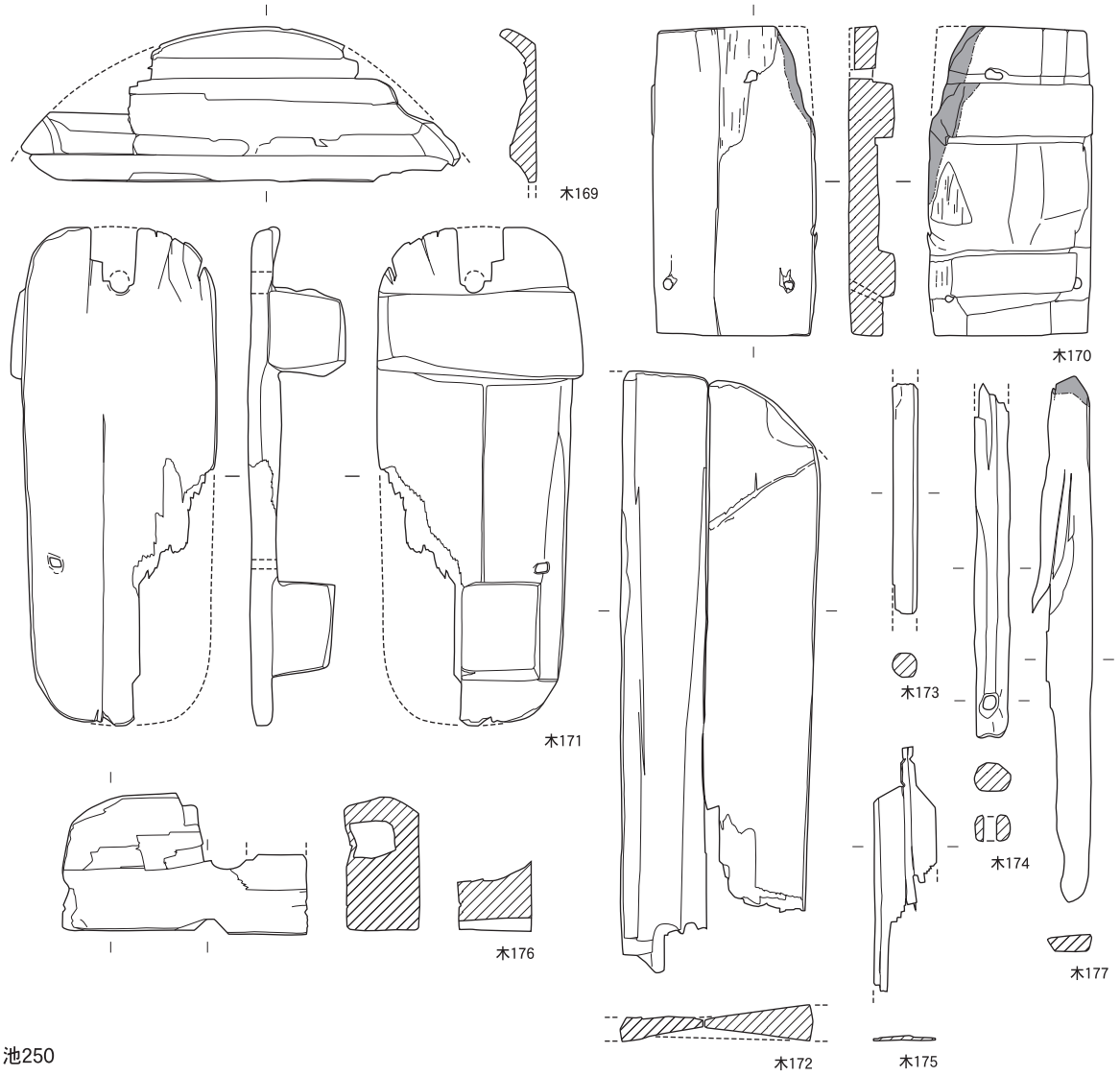


池117出土木製品実測図１（１：３）

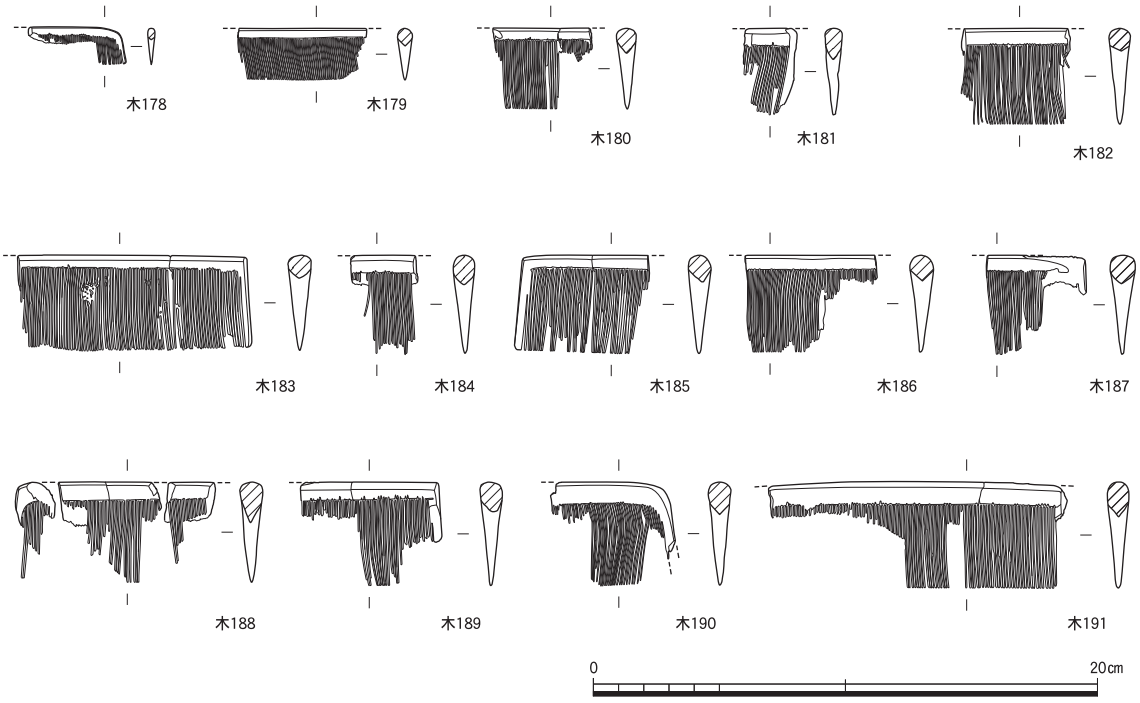


池117出土木製品実測図２、池300出土木製品実測図（１：３）

池370

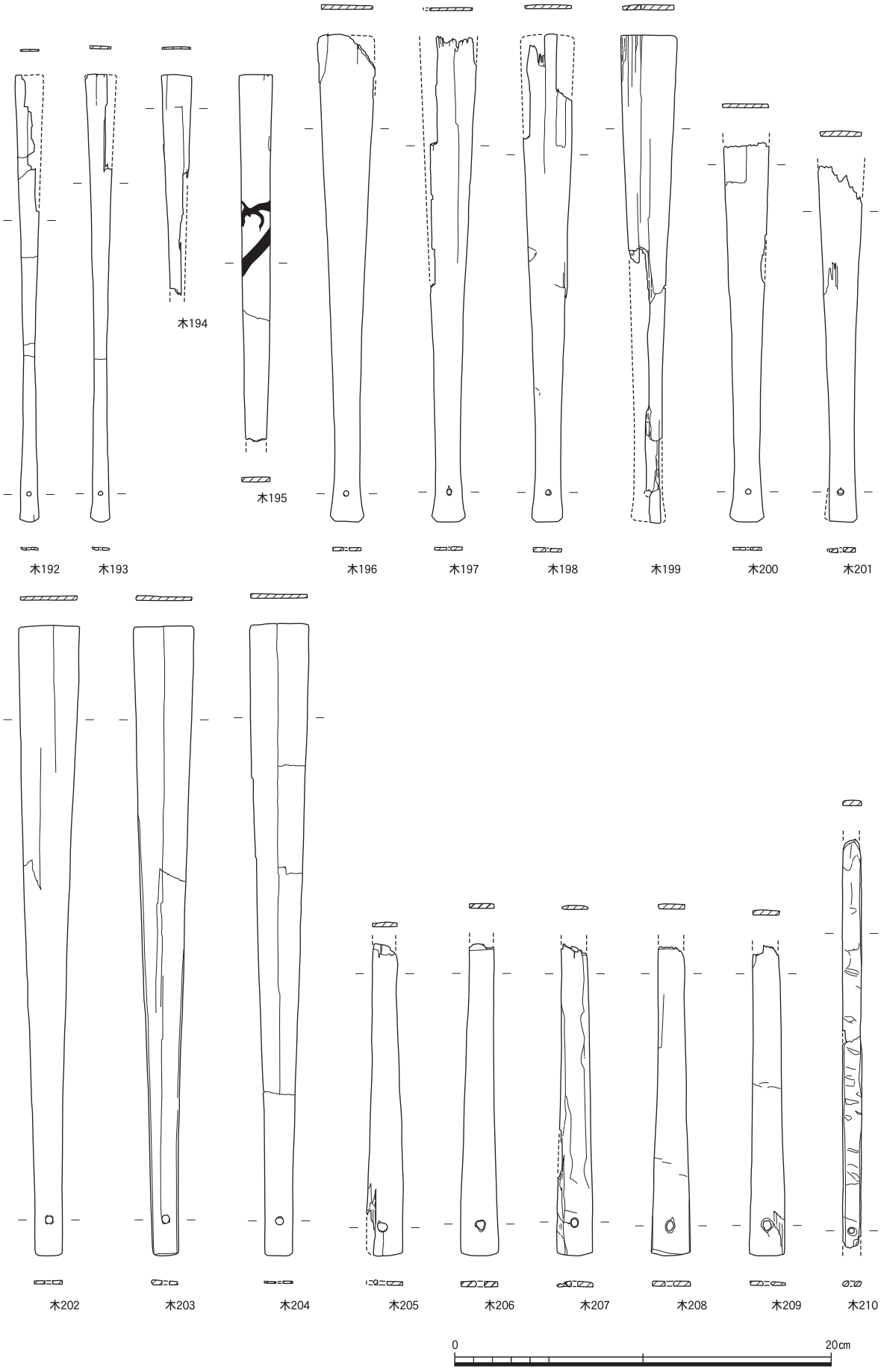


池250

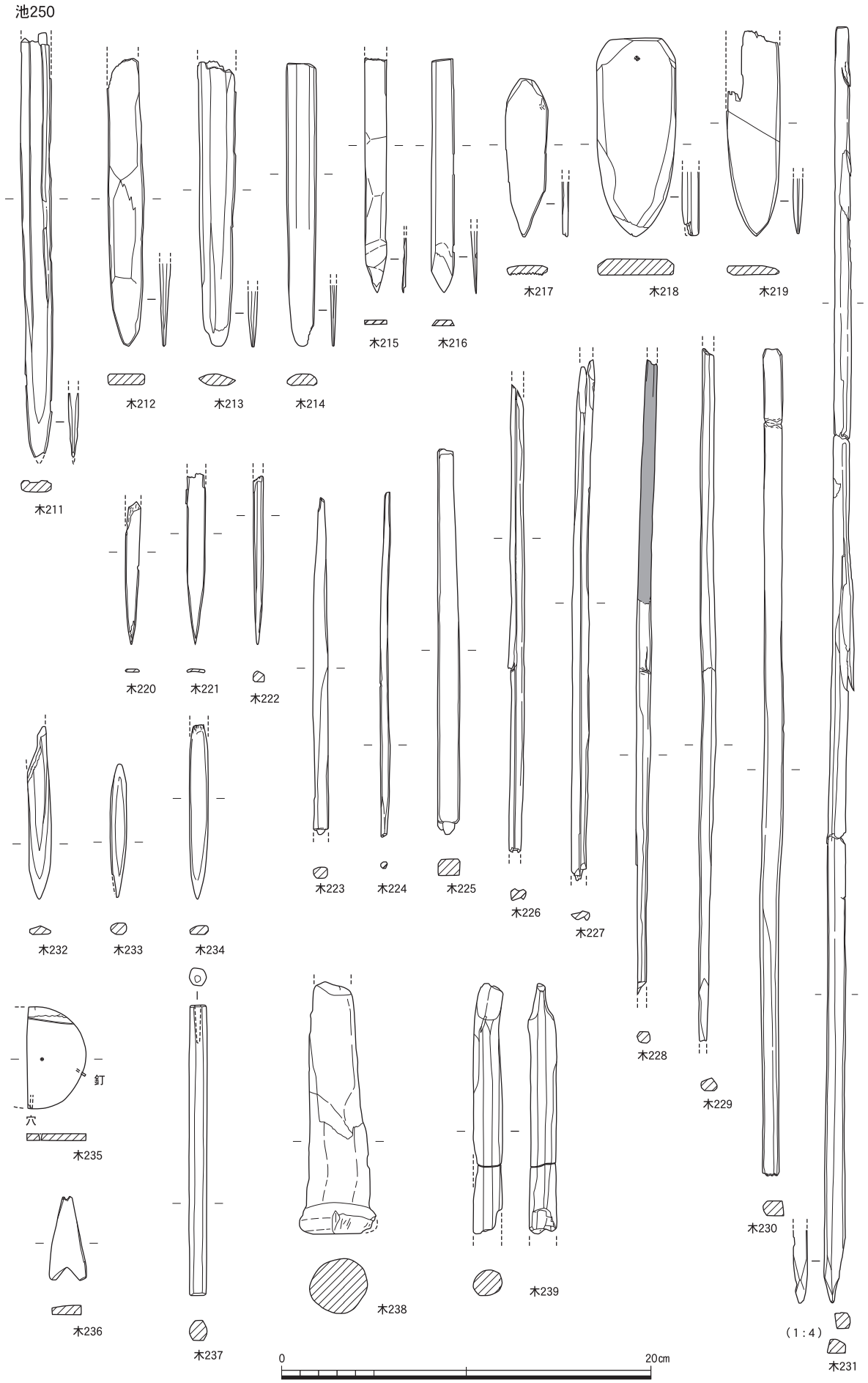


池370出土木製品実測図、池250出土木製品実測図１（１：３）

池250

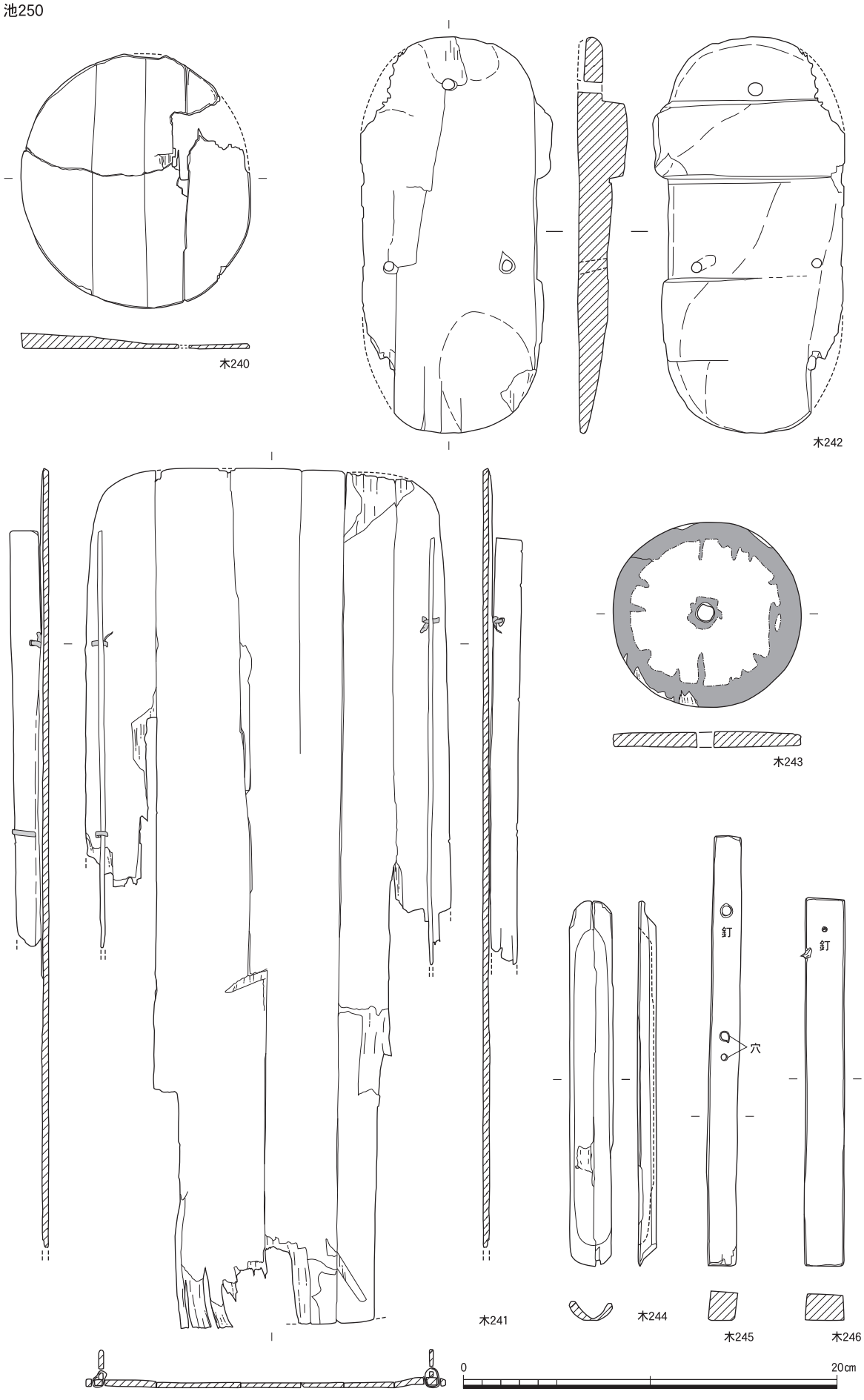


池250出土木製品実測図２（１：３）



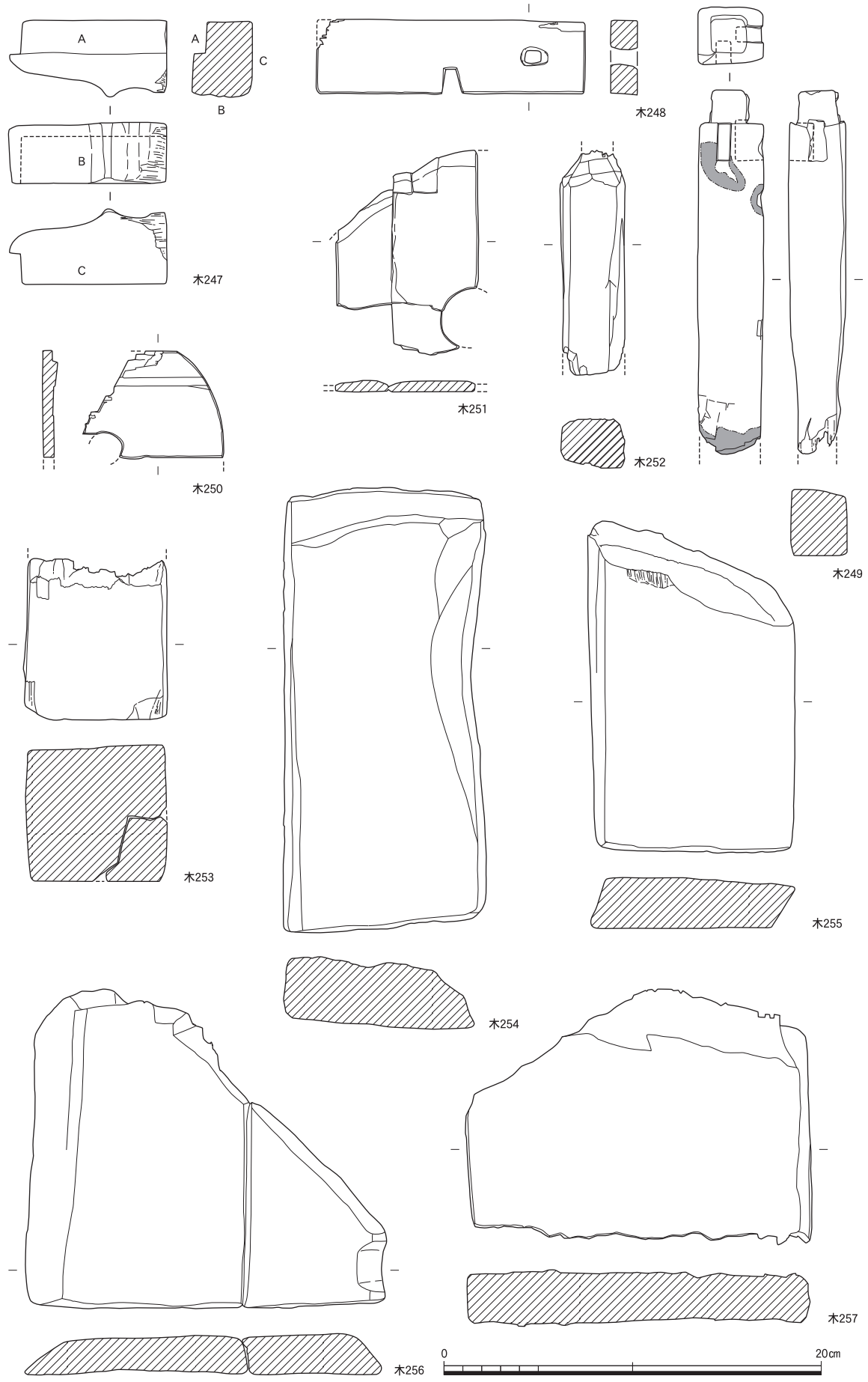
池250出土木製品実測図３（１：３、木231のみ１：４）

池250

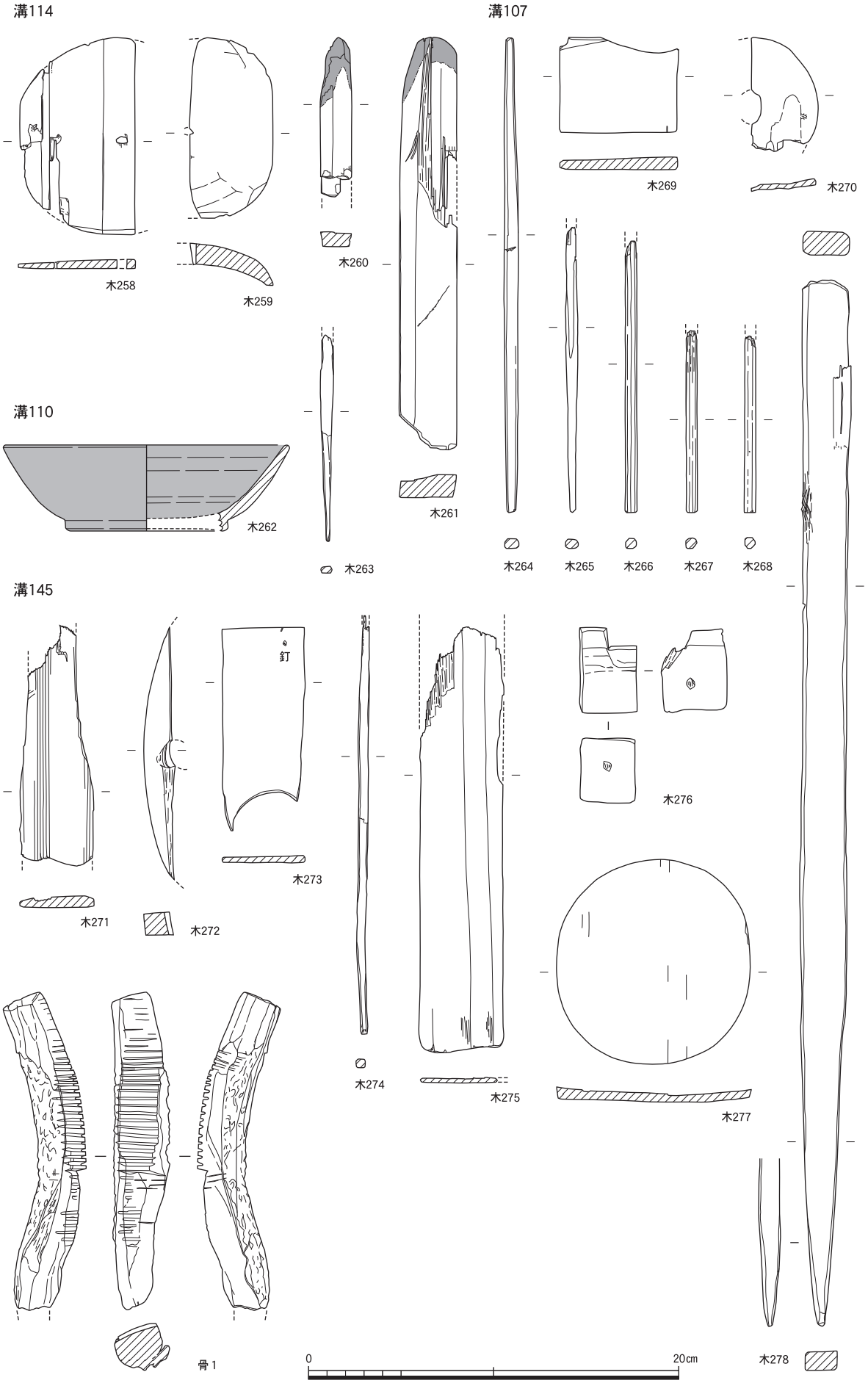


池250出土木製品実測図４（１：３）

池250



池250出土木製品実測図５（１：３）



溝114・溝110・溝107・溝145出土木製品実測図、井戸470出土鹿角製品実測図（１：３）

1　西部全景（１区、北から）

2　三条坊門小路（凹凸の部分が路面の範囲、北東から）

1　１区の南半全景（北から）

2　柱穴55断面（建物１、南東から）

3　柱穴27断面（建物１、南東から）

4　柱穴133断面（建物１、北西から）

1　北部全景（２区、北西から）

2　三条坊門小路（左端が路面155、中央が北側溝114、東から）

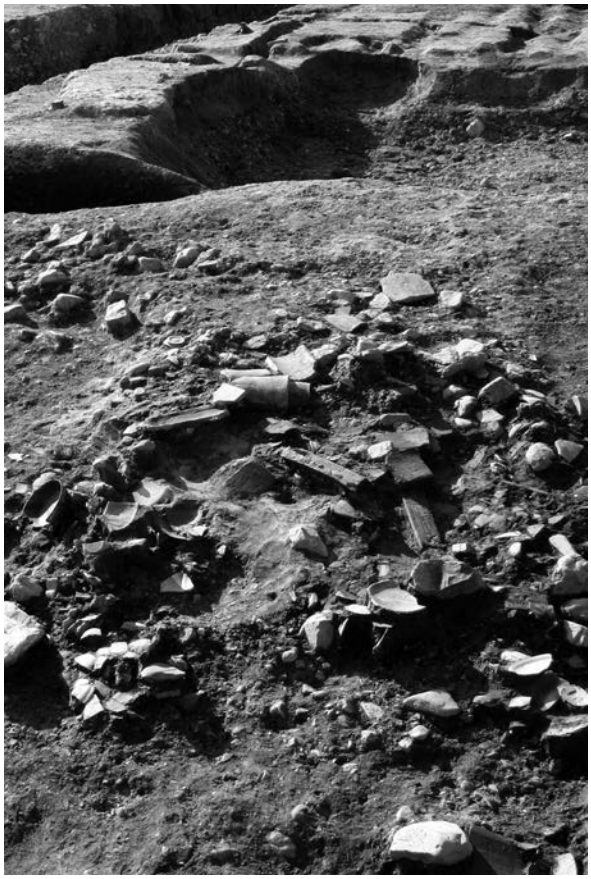
1　池117（２区、西から）

2　池117洲浜（南東から）

3　池117洲浜（北から）

1　池250（北から）

2　池250南半部（セクションはX=-109,732線上、北東から）



1　池250西肩の遺物出土状況（北東から）

2　池250遺物出土状況（木205～209：檜扇、東から）

3　池250遺物出土状況（金17：鉄刀子、南東から）

4　池250遺物出土状況（金14：毛抜、南東から）

5　池250遺物出土状況（木183：横櫛、南東から）

6　池250遺物出土状況（石９～12：碁石、南東から）

1　池250遺物出土状況（左は墨64：墨書土師器「三条院鈎〔釣〕殿高坏」、中央は491：灰釉陶器、北から）

2　池250遺物出土状況（墨72：墨書緑釉陶器「四条」、西から）

3　池250遺物出土状況（左上は金６：鉄釘、右下は358：黒色土器ミニチュア壷、北東から）

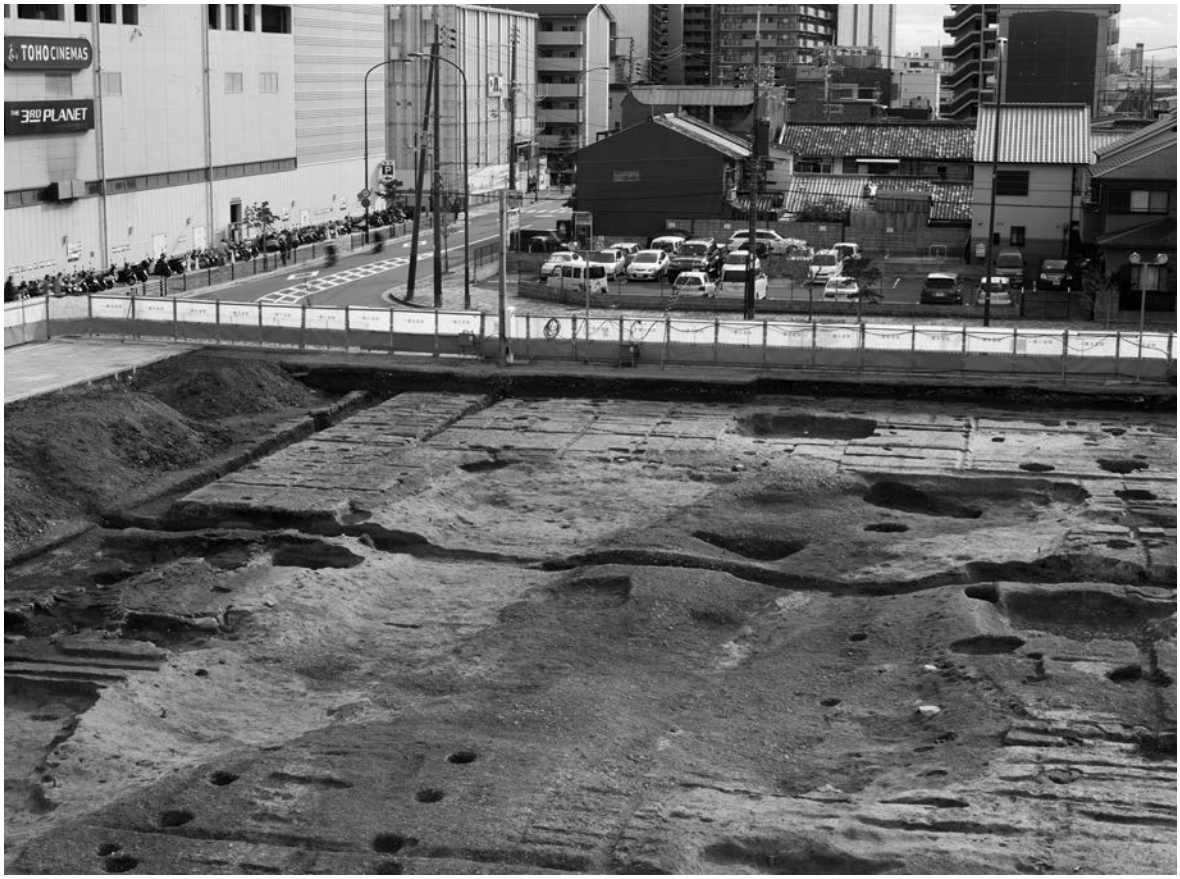
4　池250遺物出土状況（359：黒色土器ミニチュア壷、北から）

5　池250遺物出土状況（銭５：饒益神寶、北から）

6　池250遺物出土状況（石１：石帯、南西から）

7　池250遺物出土状況（石13：碁石、北西から）

8　池250遺物出土状況（中央上は木242：下駄、右下は382：須恵器壷、北西から）



1　池250（北西から）

2　池250北西部の建物４礎石（北東から）

1　池300（北西から）

2　池300遺物出土状況（東から）

3　池370（西から）

4　池370断面（南西から）

1　池250に取り付く溝43（西から）

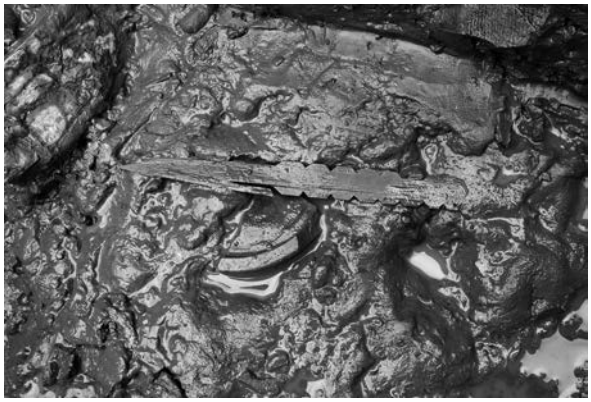
2　溝43と建物２の位置（西から）

1　溝400（手前）と2000年度調査SB01・02（右上、北西から）

2　2000年度調査SB01・02（北東から）

1　井戸470木枠検出状況（北から）

2　井戸470木枠内遺物出土状況（西から）

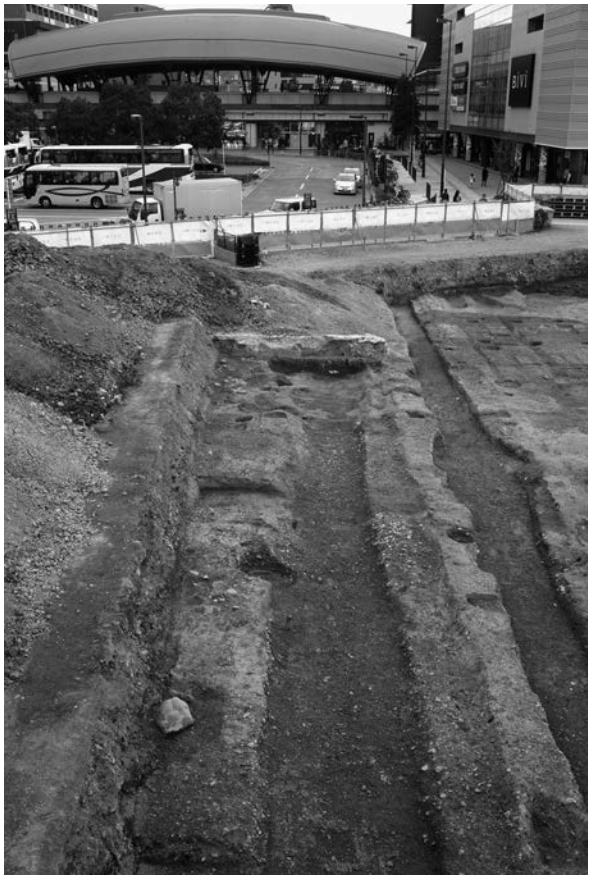


3　井戸470木枠内遺物出土状況（木20：斎串、南から）

4　井戸470木枠完掘状況（北から）

1　溝173（西坊城小路西側溝、北から）

2　溝173の倒木・獣骨出土状況（北東から）



3　溝107と溝110（三条坊門小路南側溝、西から）

1　溝173断面（南から）

2　溝43断面（東から）

3　溝107・110断面（東から）

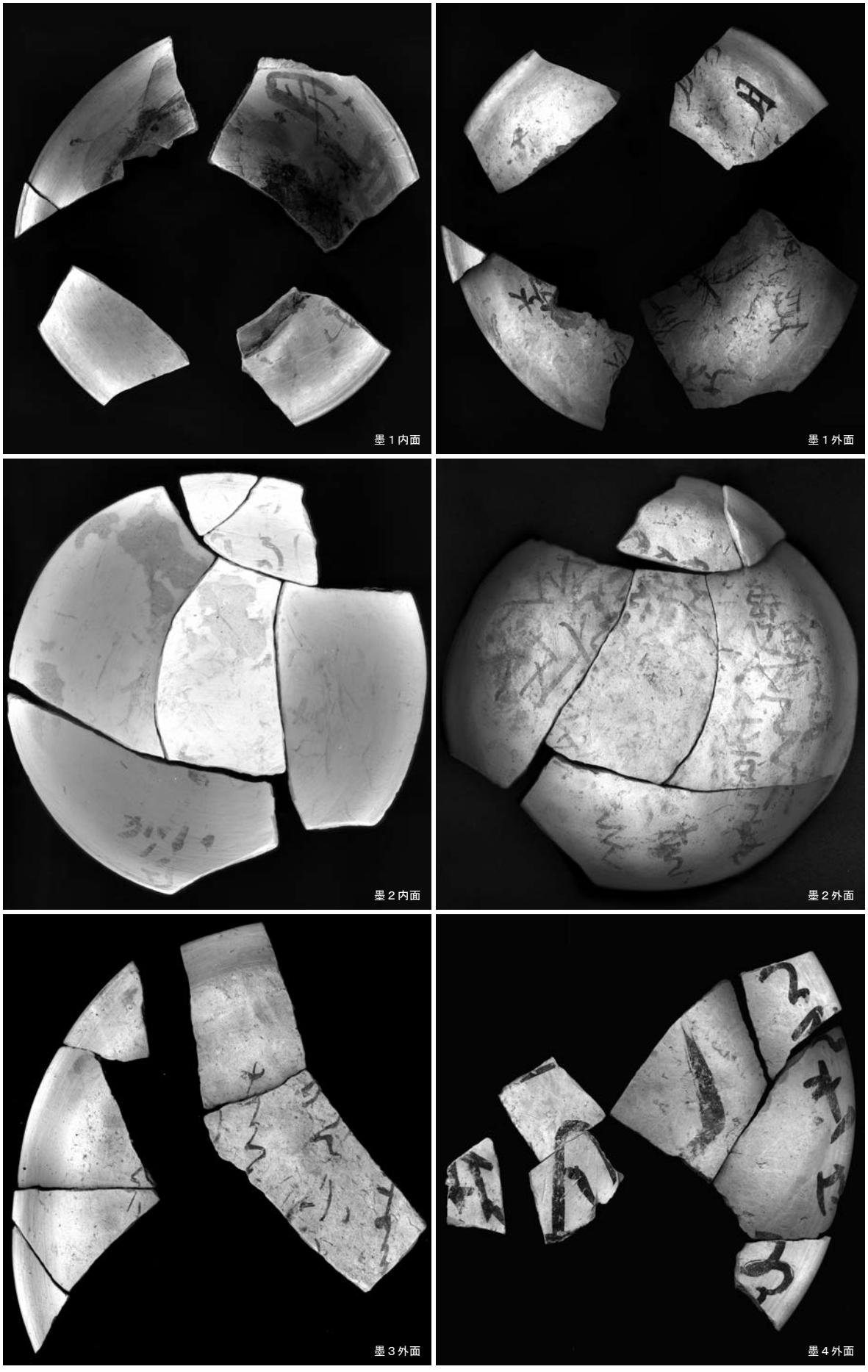
4　溝174断面（南から）

5　柱穴353（柱列549、東から）

6　柱穴286（柱列551西列、西から）

7　柱穴380（柱列551東列、東から）

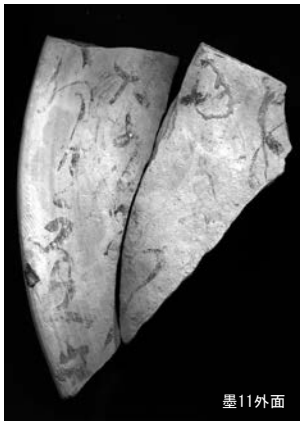
8　柱穴463（柱列553南列、南から）



墨書土器赤外線写真１

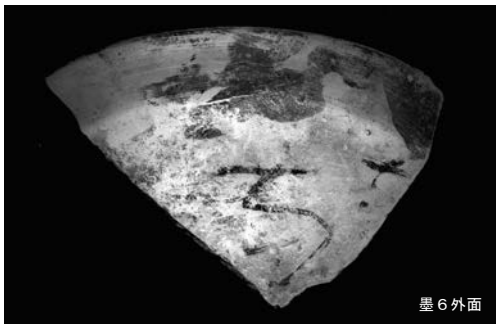
墨５外面

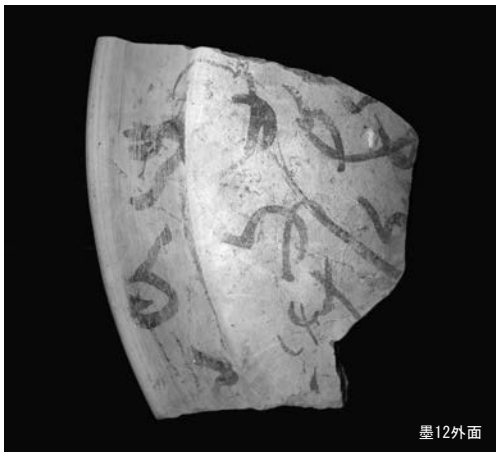
墨11内面

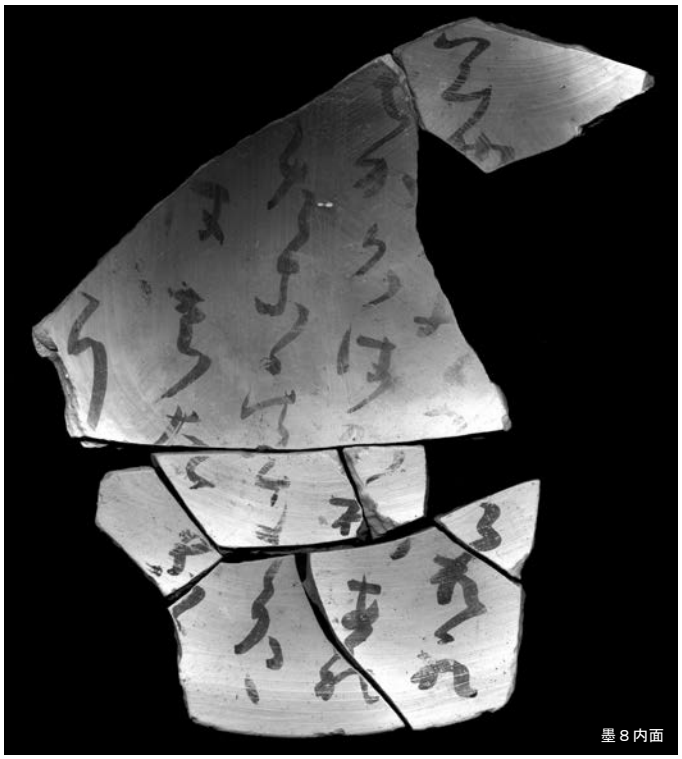

墨11外面

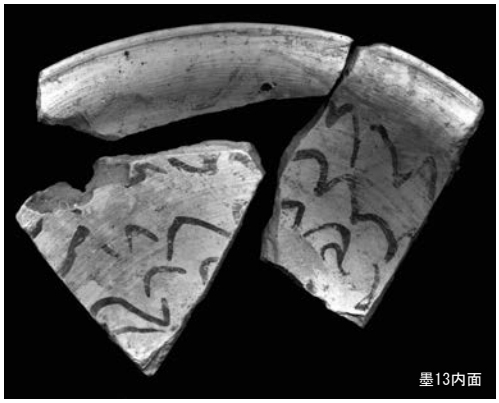
墨17外面

墨７内面


墨６外面

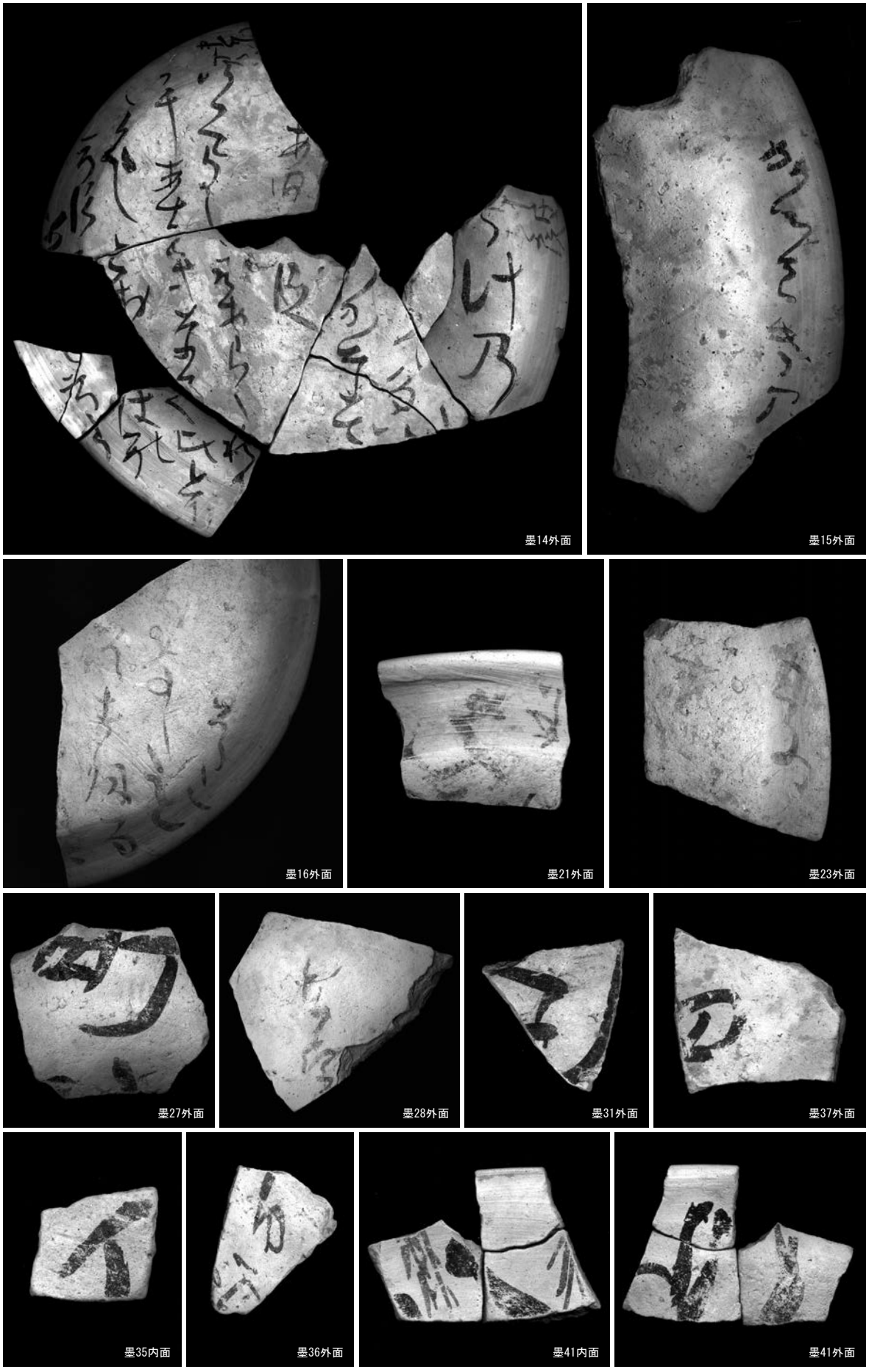

墨12外面


墨８内面


墨13内面

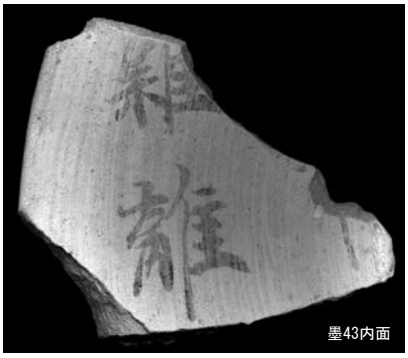
墨24外面

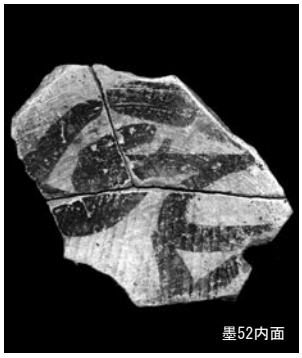
墨書土器赤外線写真２

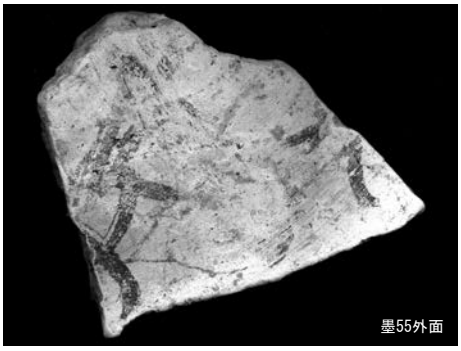

墨14外面
墨15外面
墨16外面
墨21外面
墨23外面
墨27外面
墨28外面
墨31外面
墨37外面
墨35内面
墨36外面
墨41内面
墨41外面

墨書土器赤外線写真３

墨42内面

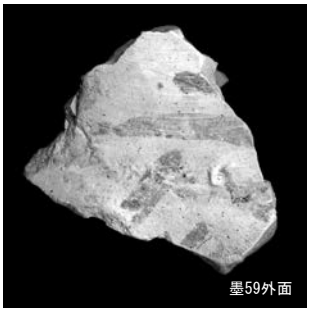

墨43内面

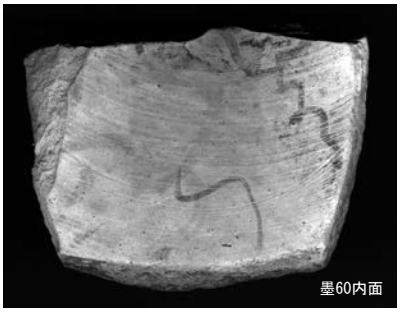

墨52内面

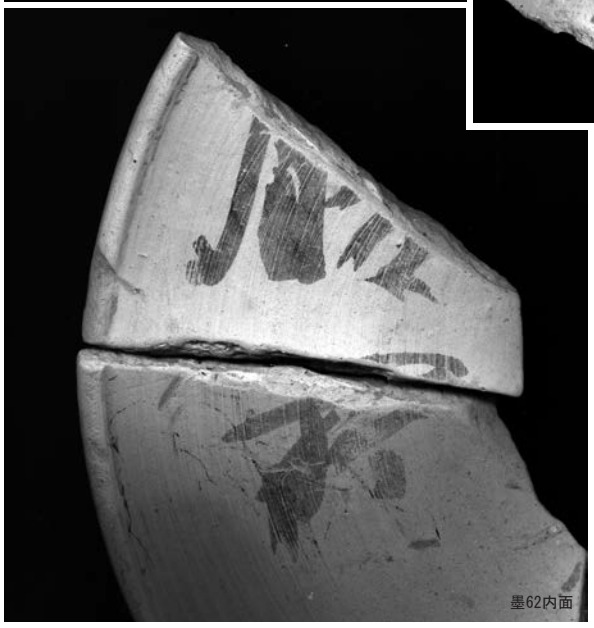

墨55外面

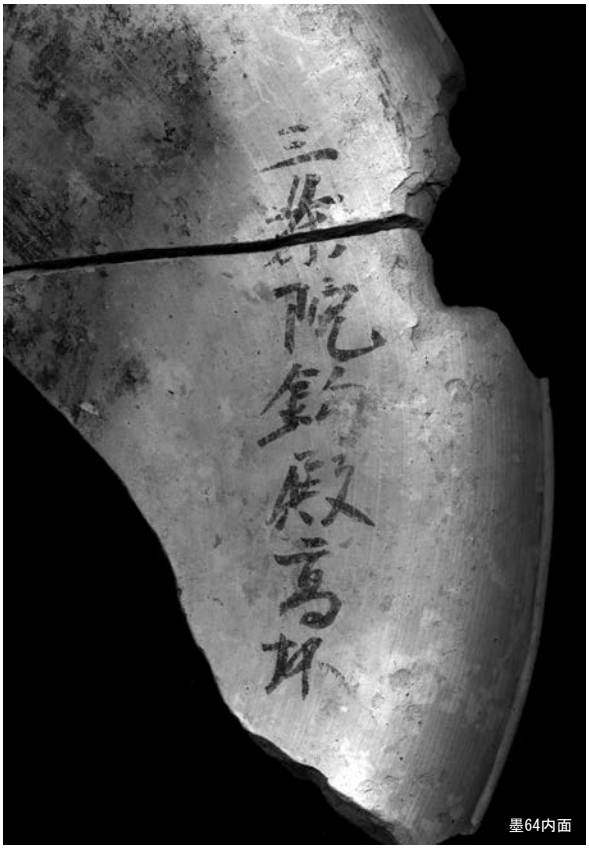
墨58外面

墨42外面


墨59外面


墨60内面

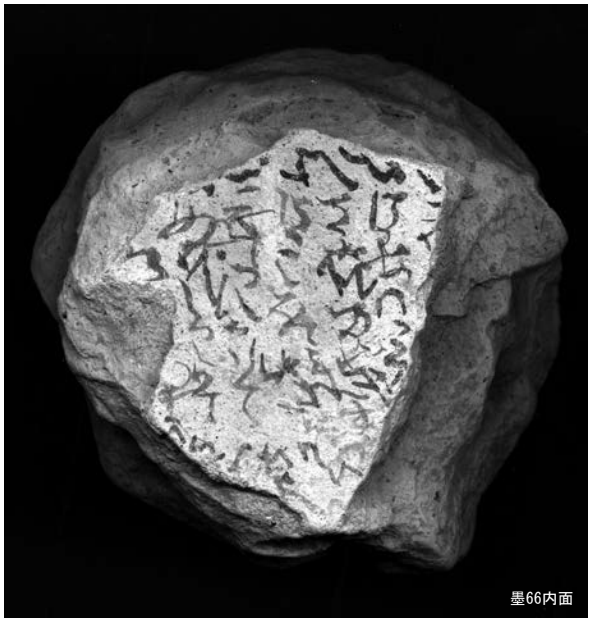

墨62内面


墨64内面

墨61外面

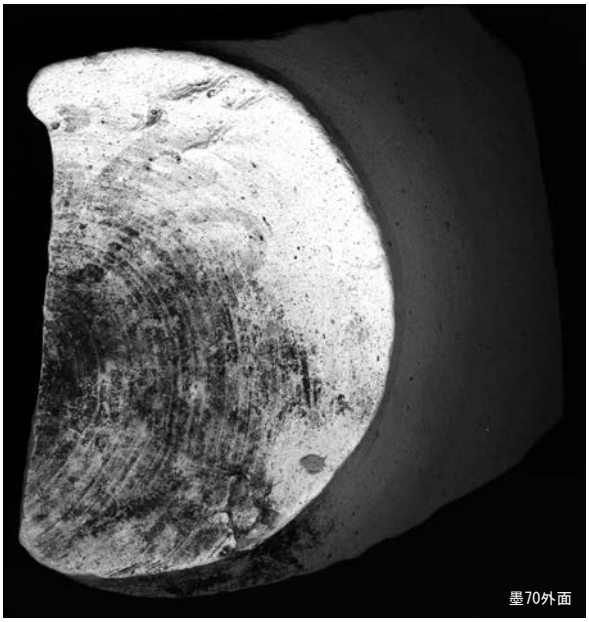
墨書土器赤外線写真４

墨書土器赤外線写真５


墨66内面

墨67内面

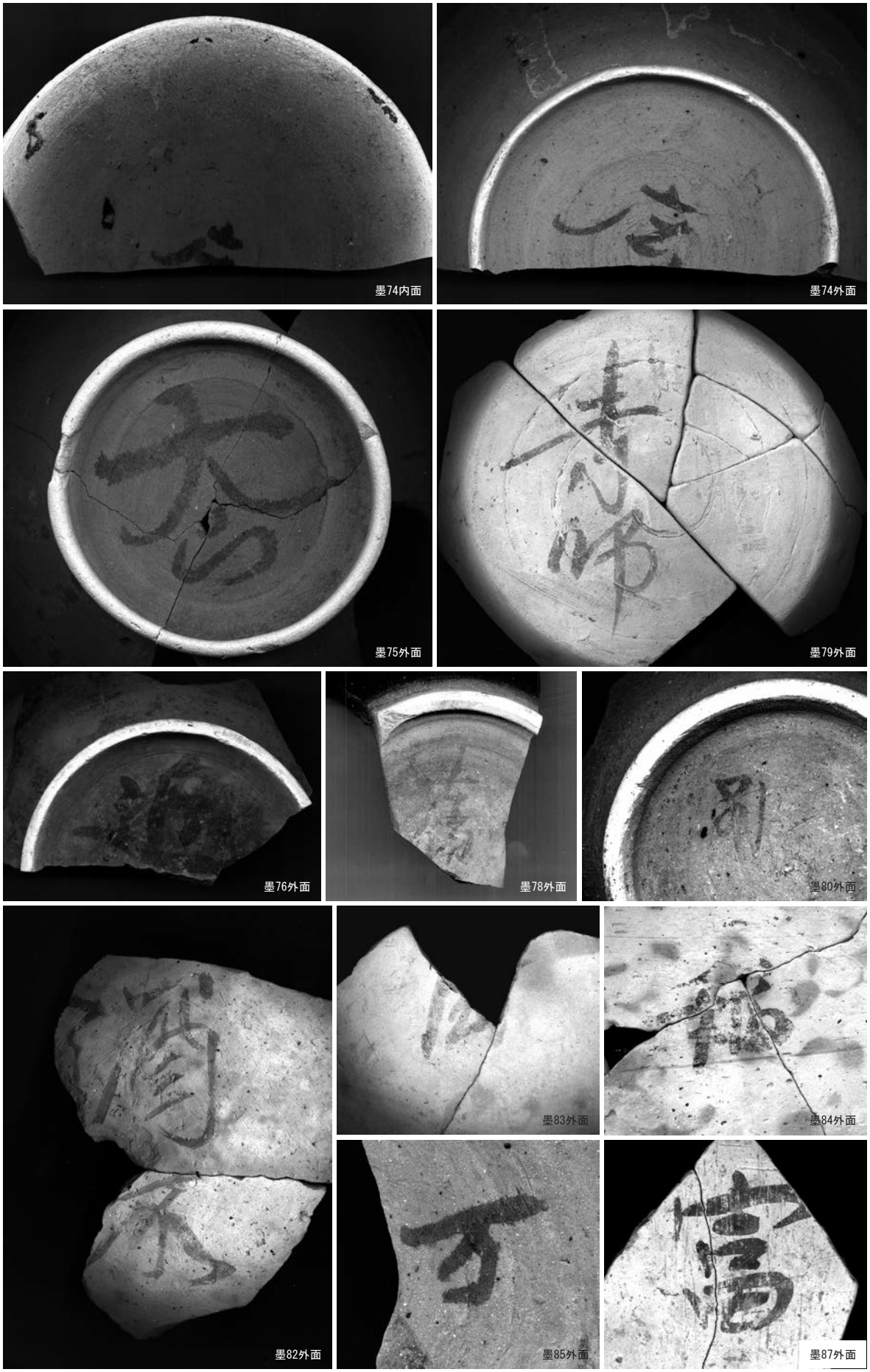
墨68外面


墨70外面

墨72外面

墨73外]面

墨書土器赤外線写真６


墨74内面
墨74外面
墨75外面
墨79外面
墨76外面
墨78外面
墨80外面
墨82外面
墨83外面
墨84外面
墨85外面
墨87外面

墨書土器赤外線写真７

墨2

墨7

墨14

墨62

墨65

墨71

墨68

墨72

墨73

墨74

墨75

墨79

墨84

墨書土器

井戸470出土土器１

21

24

22

25

23

26

28

29

30

41

42

43

井戸470出土土器２

35

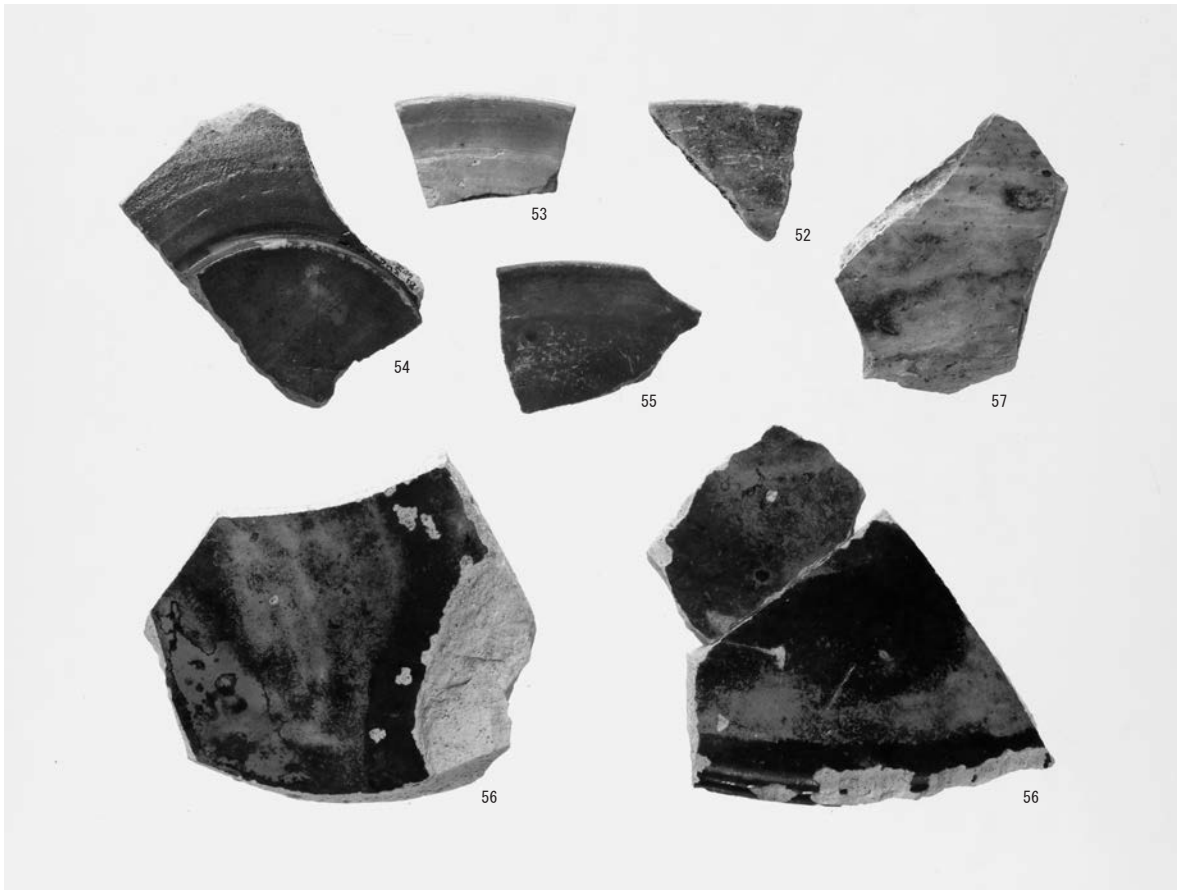
40

34

39

38

58


53
52
54
55
57
56
56

井戸470出土土器３

65

85

141

67

153

159

175

87

土坑440・溝119・池117・池300出土土器

池250出土土器１

237

246

238

249

239

252

240

253

241

254

243

256

244

260

池250出土土器２

267

273

271

274

272

275

319

334

335

320

336

池250出土土器３

277

278

279

291

292

293

298

池250出土土器４

337

340

338

342

344

352

346

353

351

354

池250出土土器５

355

357

359

356

358

360

365

375

366

377

369

372

378

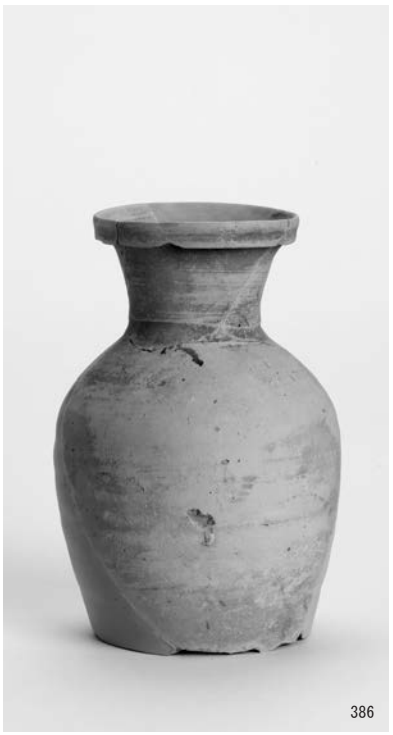
池250出土土器６

382

383

384

385


386

394

391

392

393

池250出土土器７

405

411

406

412

407

413

408

414

409

415

419

池250出土土器８

416

417

420

421

422

423

424

425

426

427

432

433

434

435

池250出土土器９

436

437

438

445

440

447

441

448

442

443

449

444

463

池250出土土器10

464

483

469

484

476

485

477

491

478

493

480

500

501

502

池250出土土器11

497

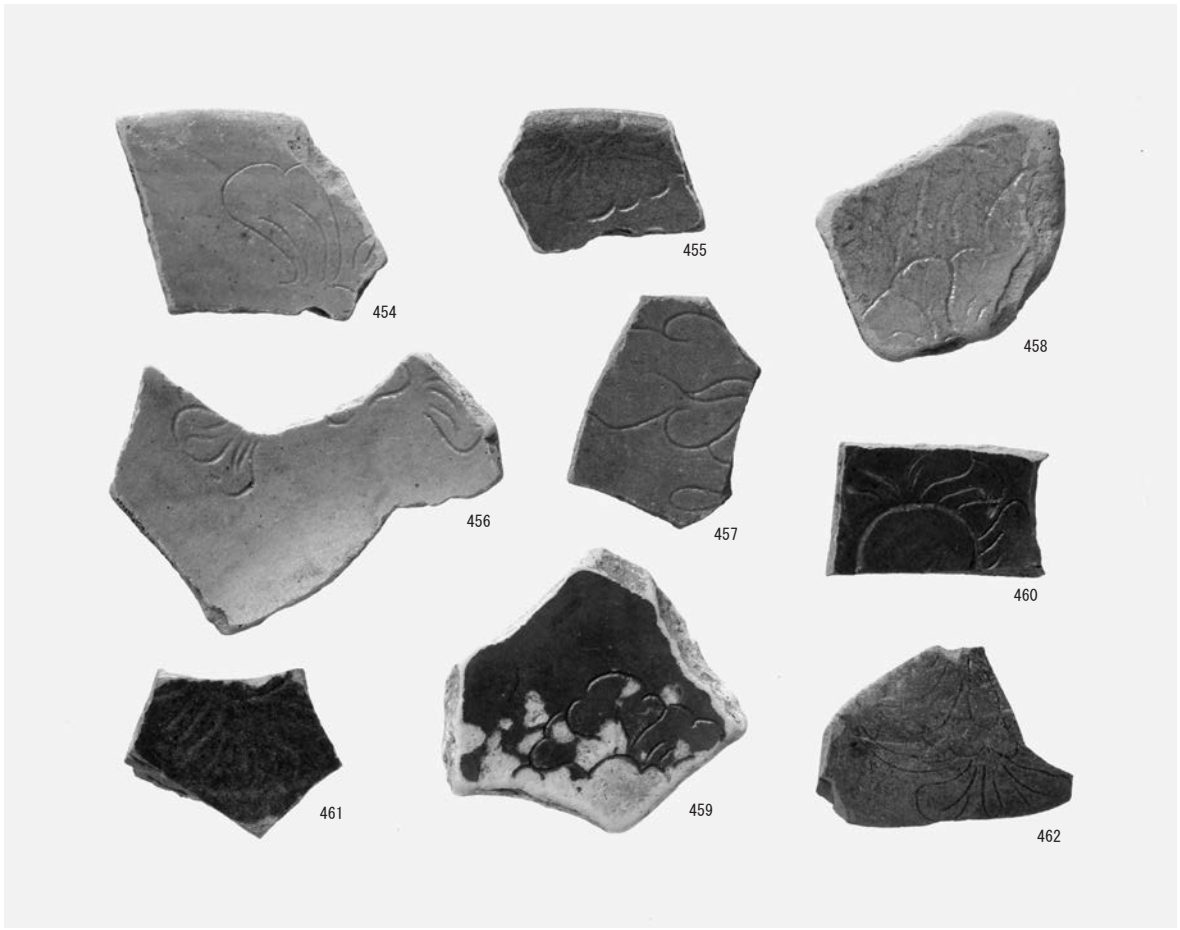
508

504

509

505

510



池250出土土器12

瓦２

瓦８

瓦17

瓦９

瓦40

瓦55

瓦59

瓦56

軒丸瓦

瓦20

瓦21

瓦23

瓦28

瓦25

瓦30

瓦26

瓦32

瓦31

瓦35

軒平瓦１

瓦44

瓦45

瓦51

瓦53

瓦63

瓦64

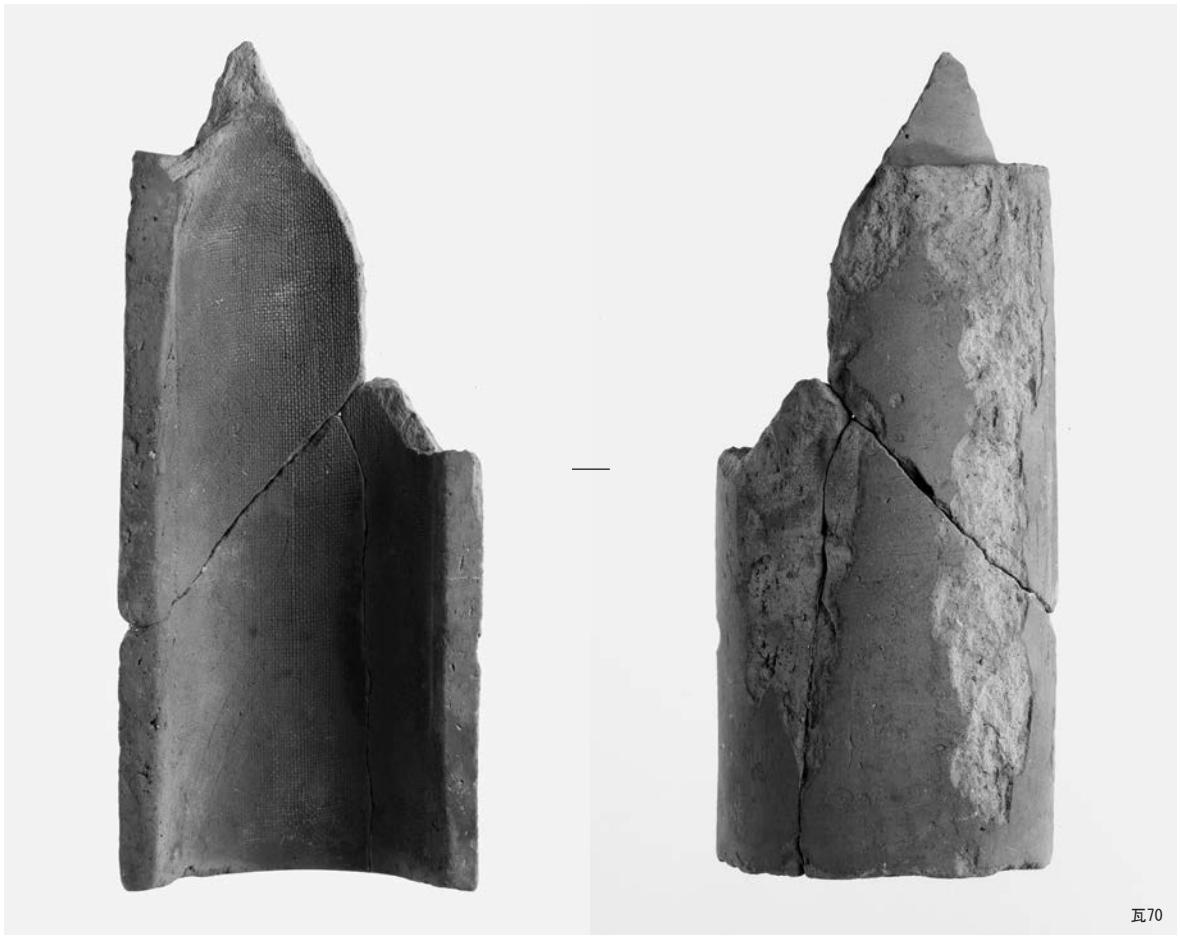
軒平瓦２

瓦33

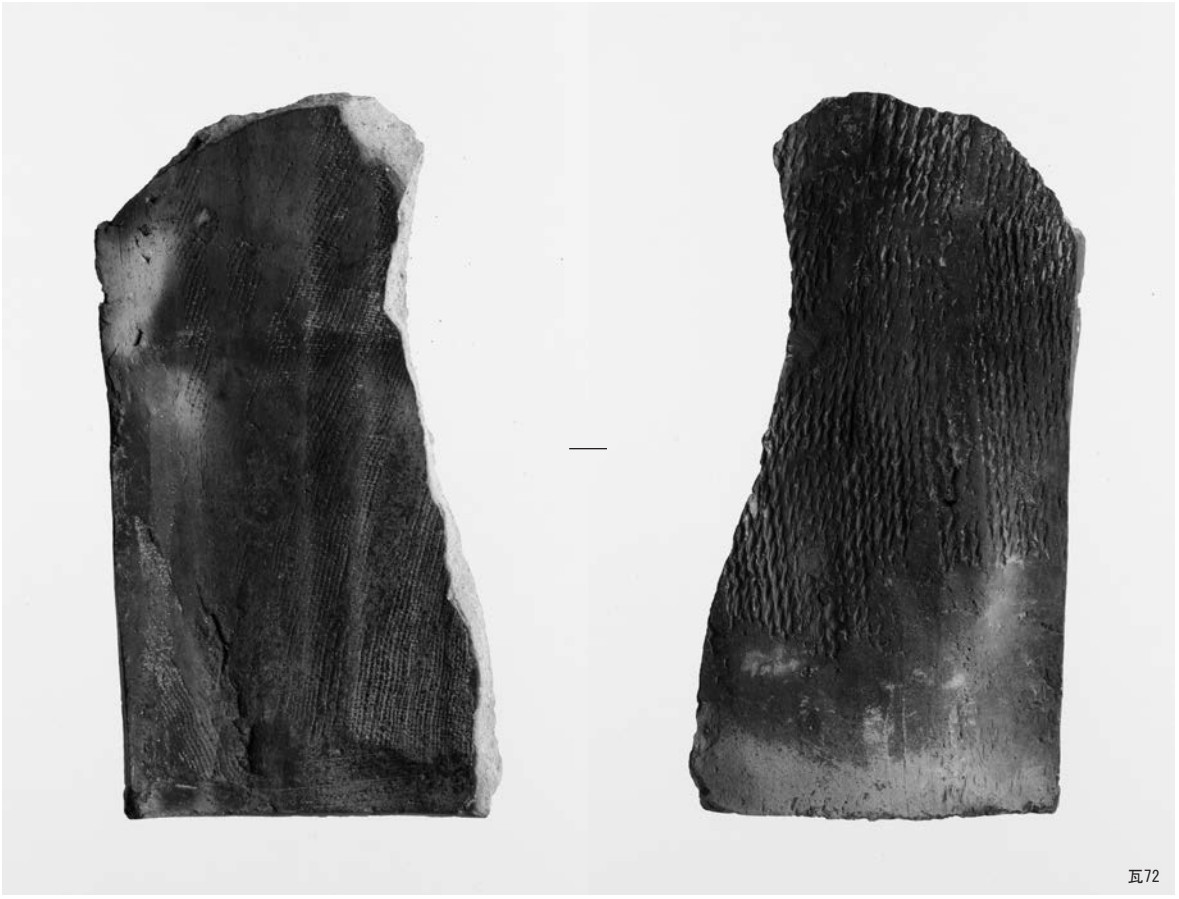
瓦34

瓦68

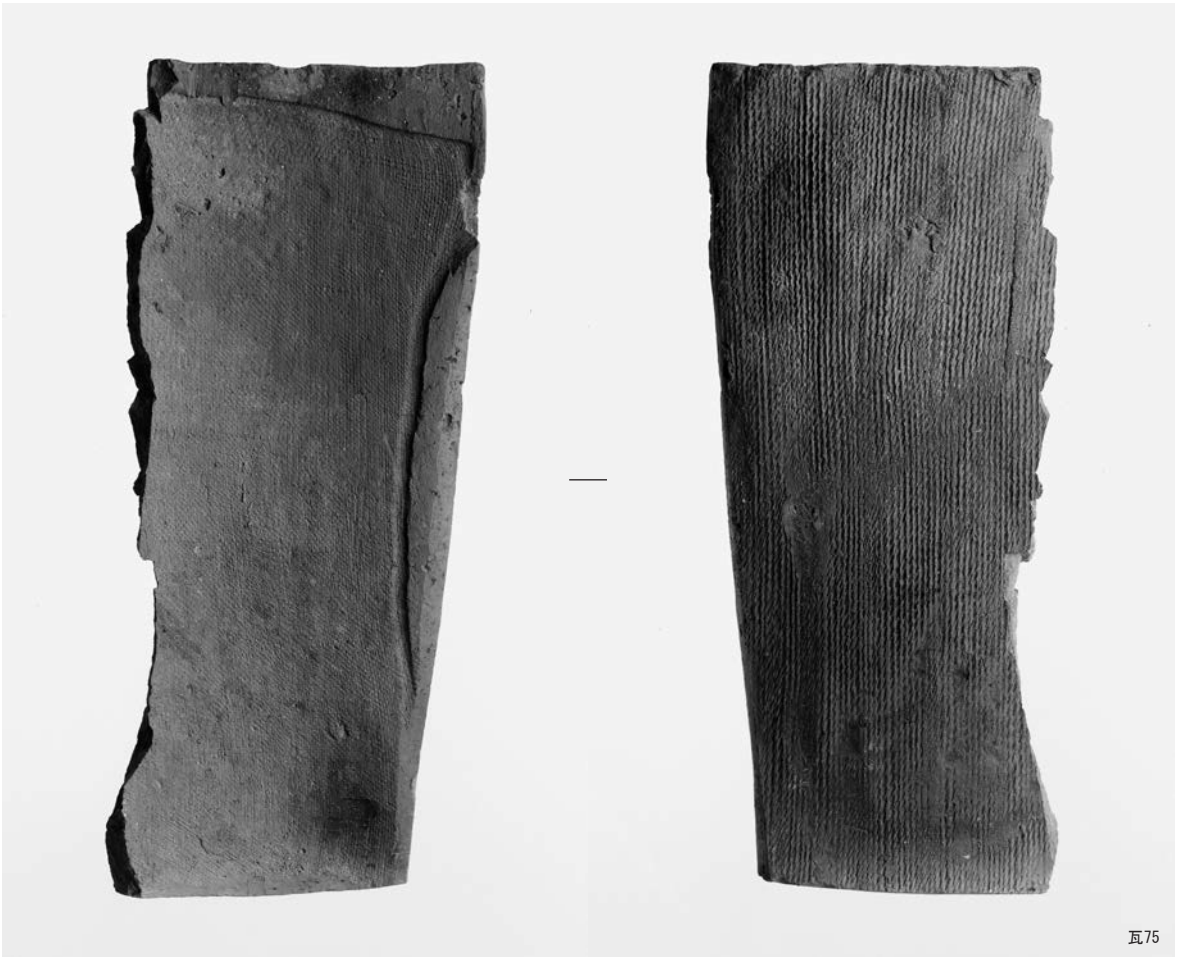
瓦69


瓦70

鬼瓦・文字瓦・丸瓦

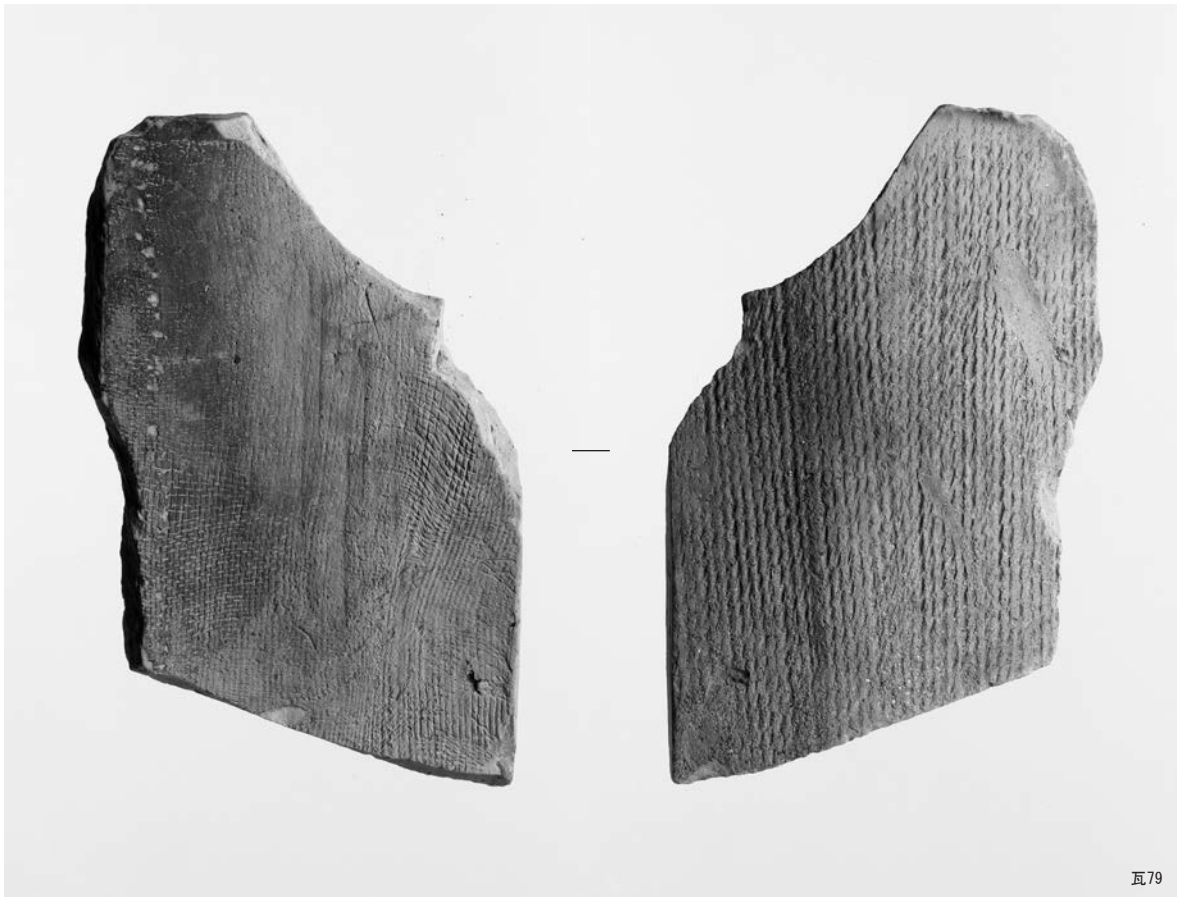


瓦72



瓦75

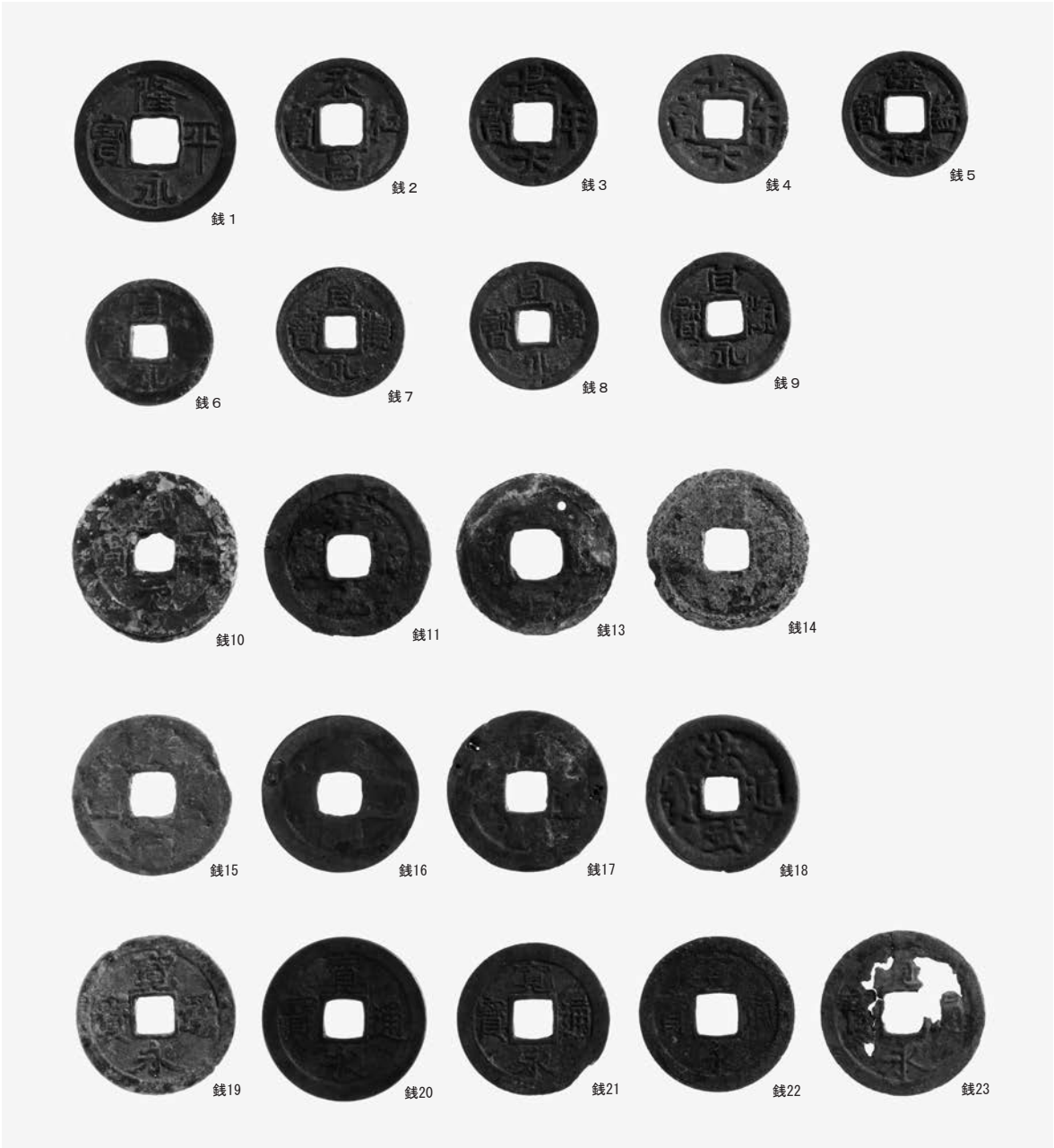
平瓦１

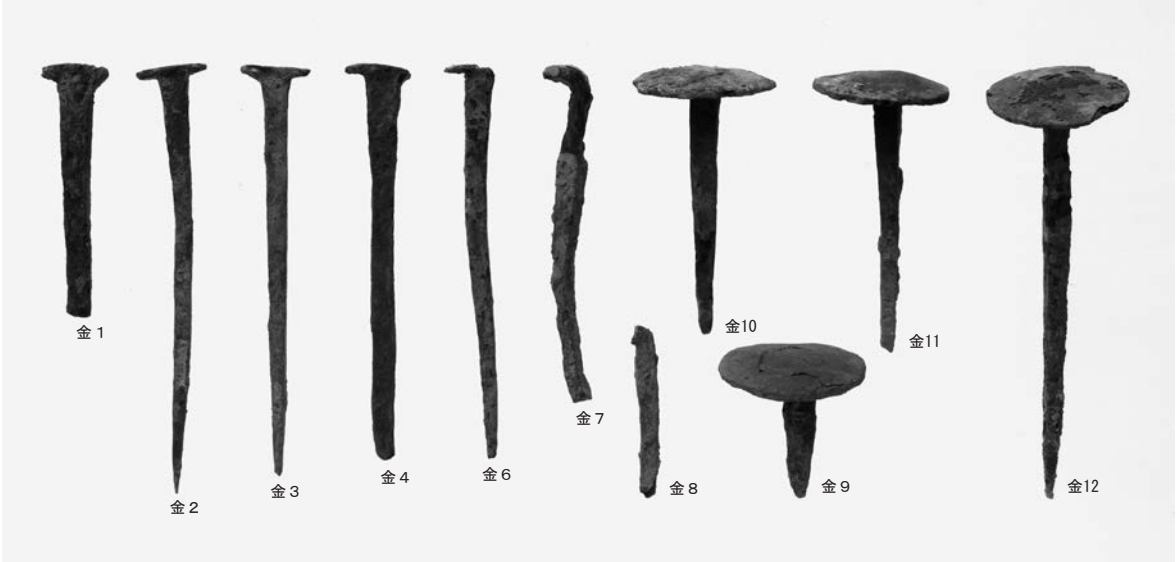


瓦79

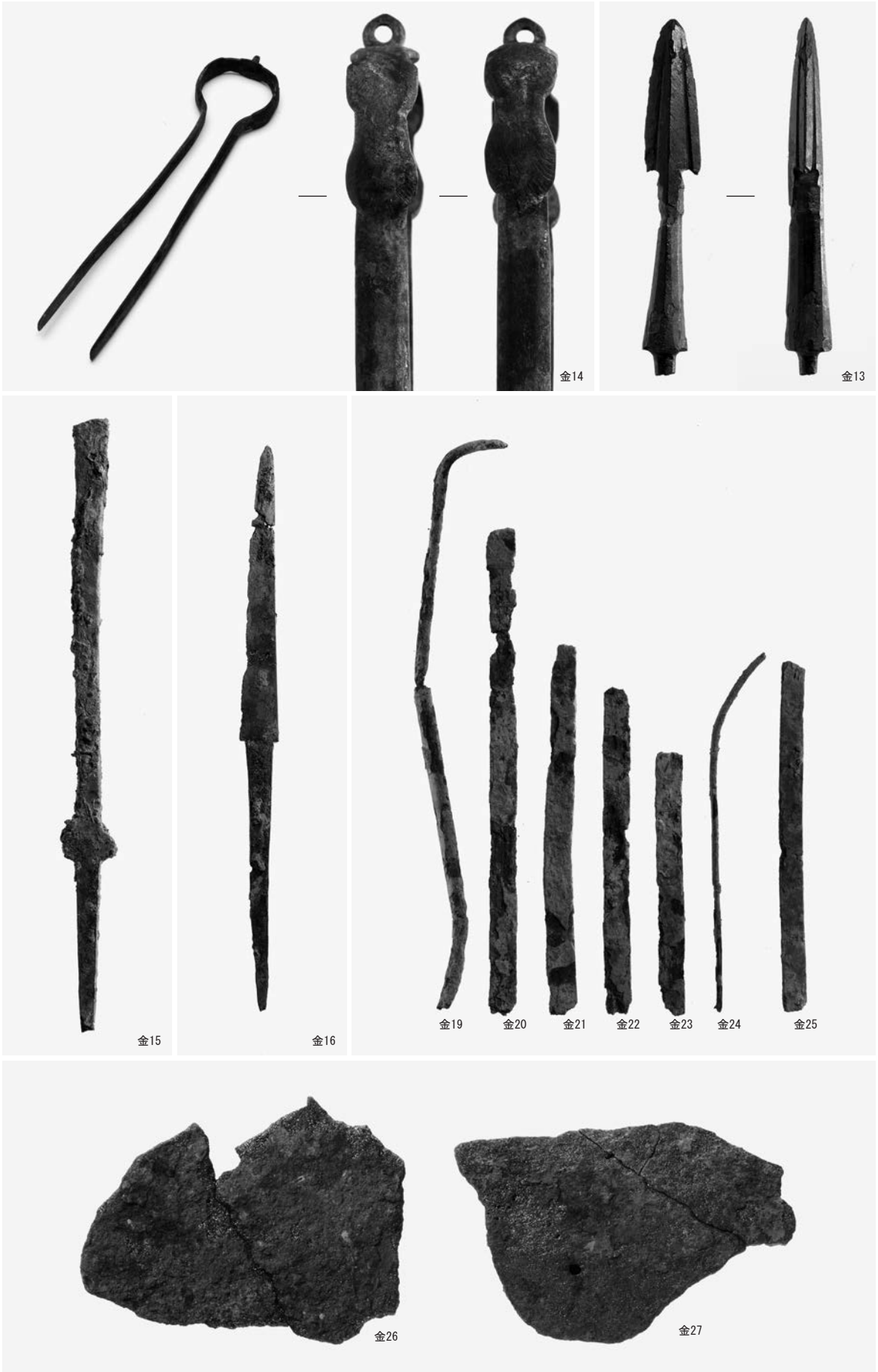
瓦81

平瓦２


銭1
銭2
銭3
銭4
銭5
銭6
銭7
銭8
銭9
銭10
銭11
銭13
銭14
銭15
銭16
銭17
銭18
銭19
銭20
銭21
銭22
銭23


金1
金2
金3
金4
金6
金7
金8
金9
金10
金11
金12

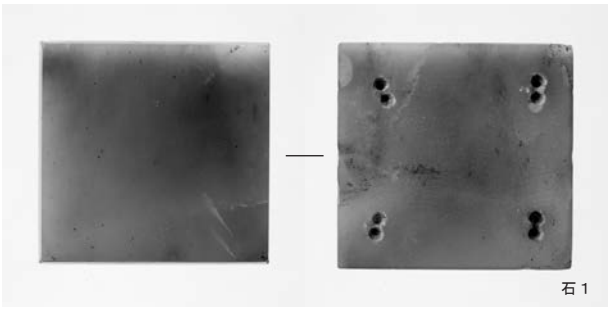
銭貨、金属製品１

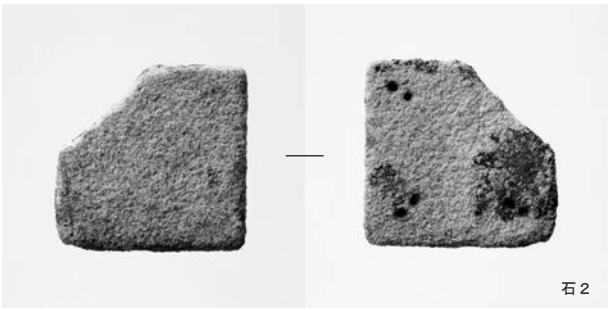


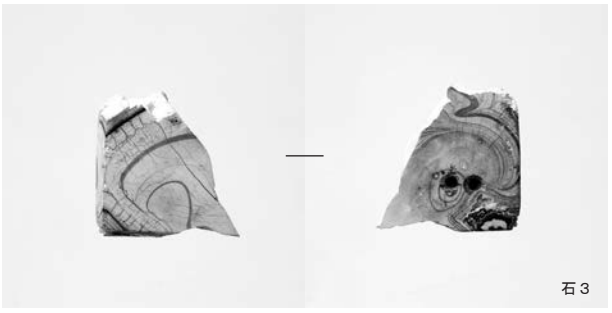
金属製品２

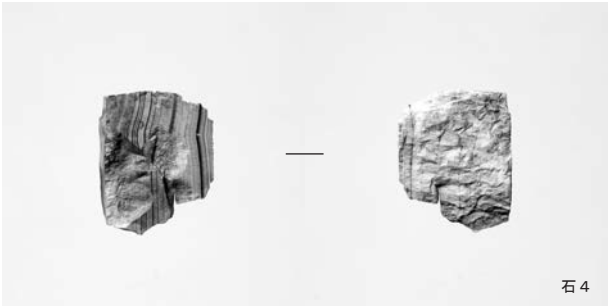
金18

金17


石1

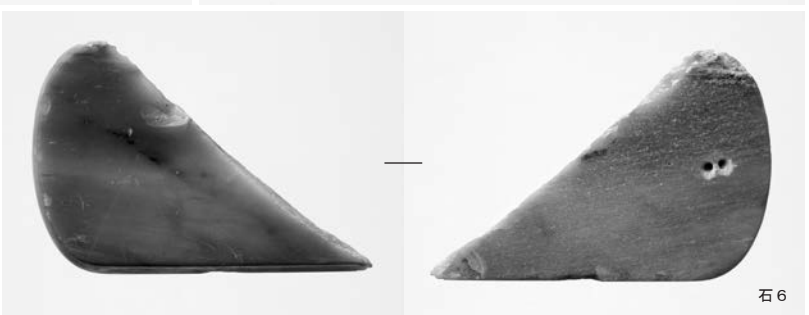

石2


石3

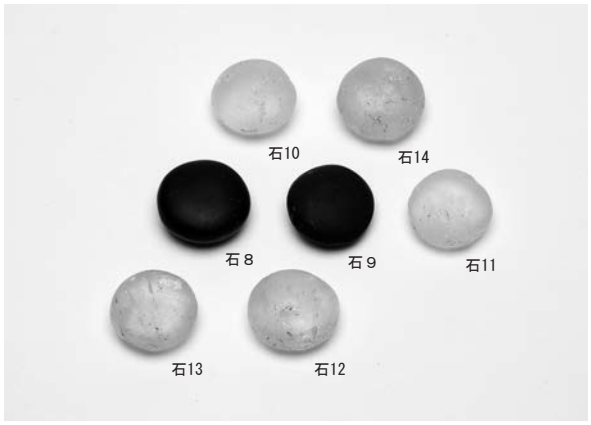

石4

石5

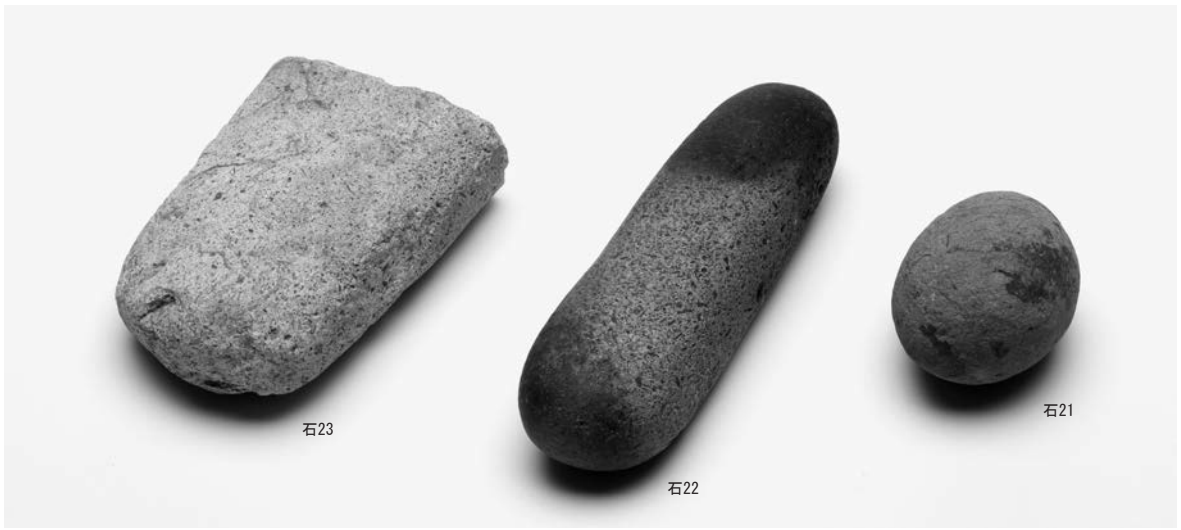
石7

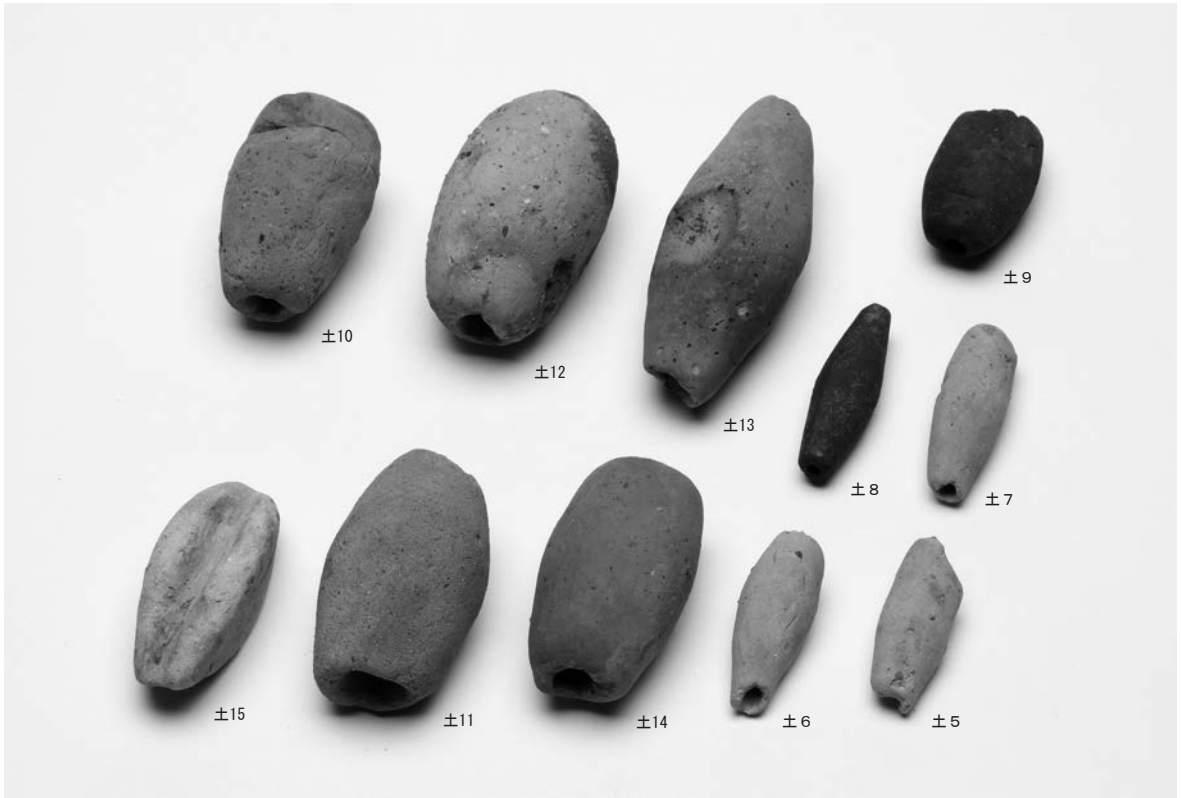

石6

金属製品３、石製品１



石製品２





石製品３、土製品１

土16

土17

土18

硯1

硯8

硯2

硯9

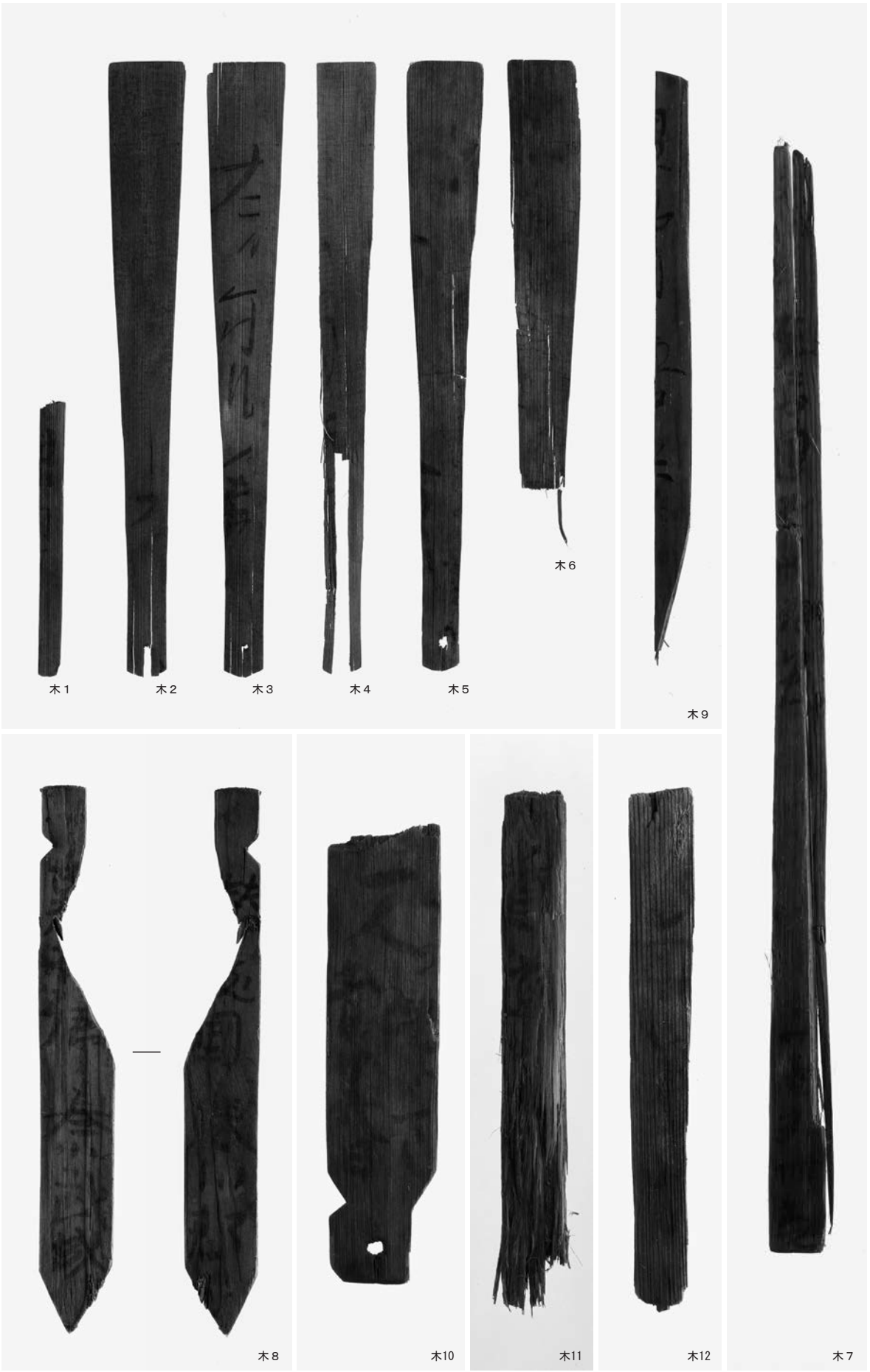
硯3

硯10

硯4

硯5

土製品 2



木簡 1

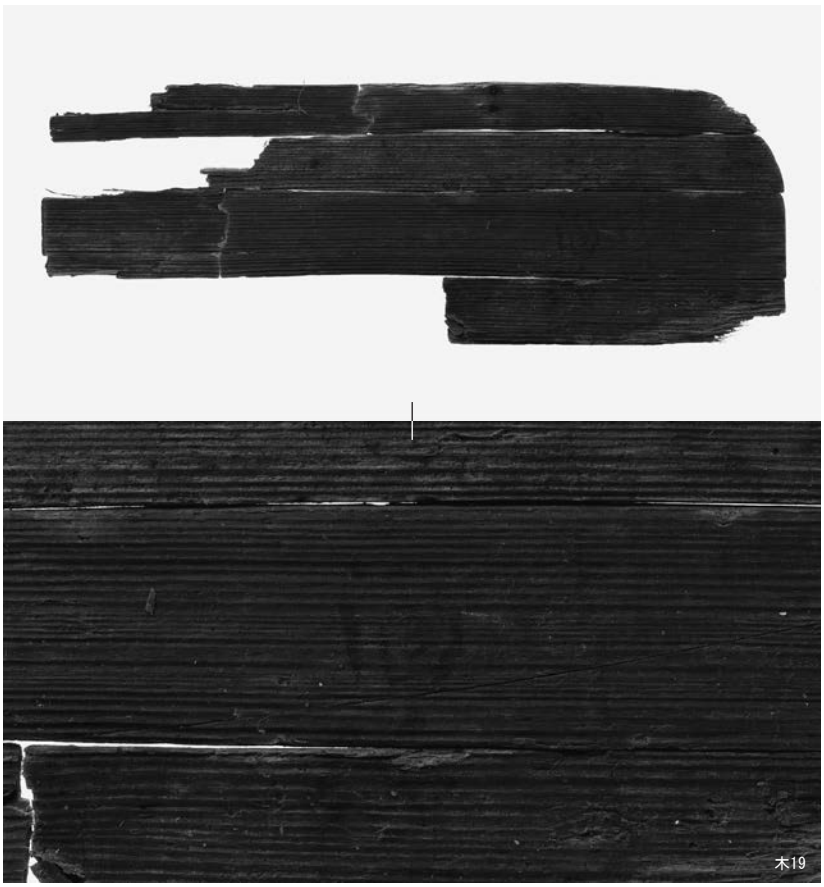
木13

木14

木15

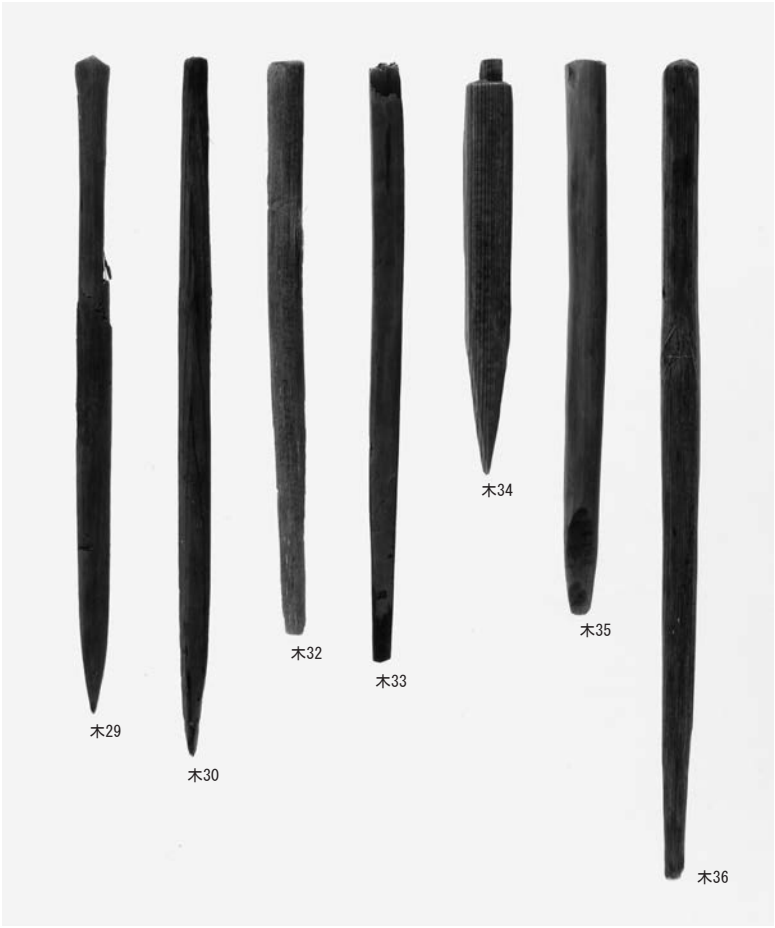
木16

木17


木19

木18

木簡２



井戸470出土木製品 1

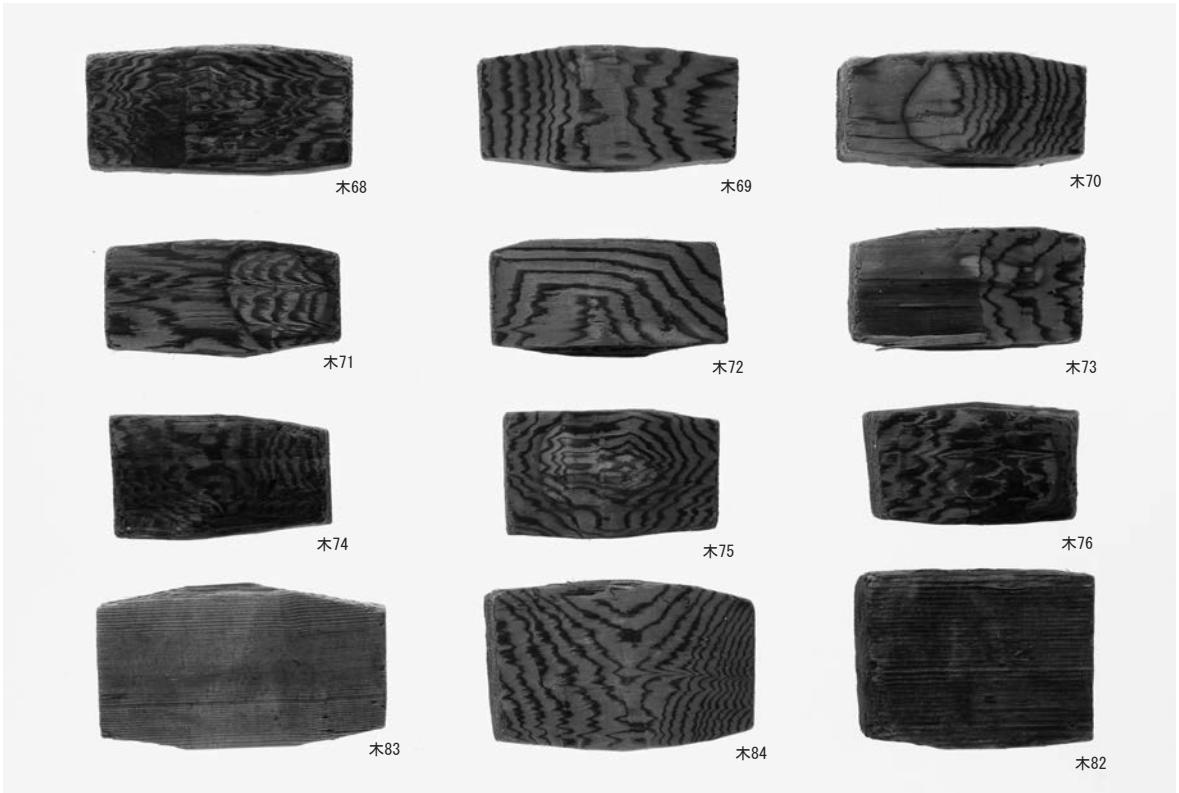
木52

木53

木54

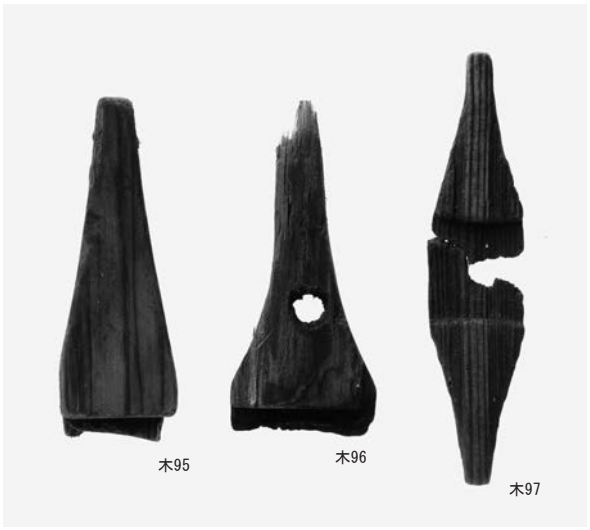
木56

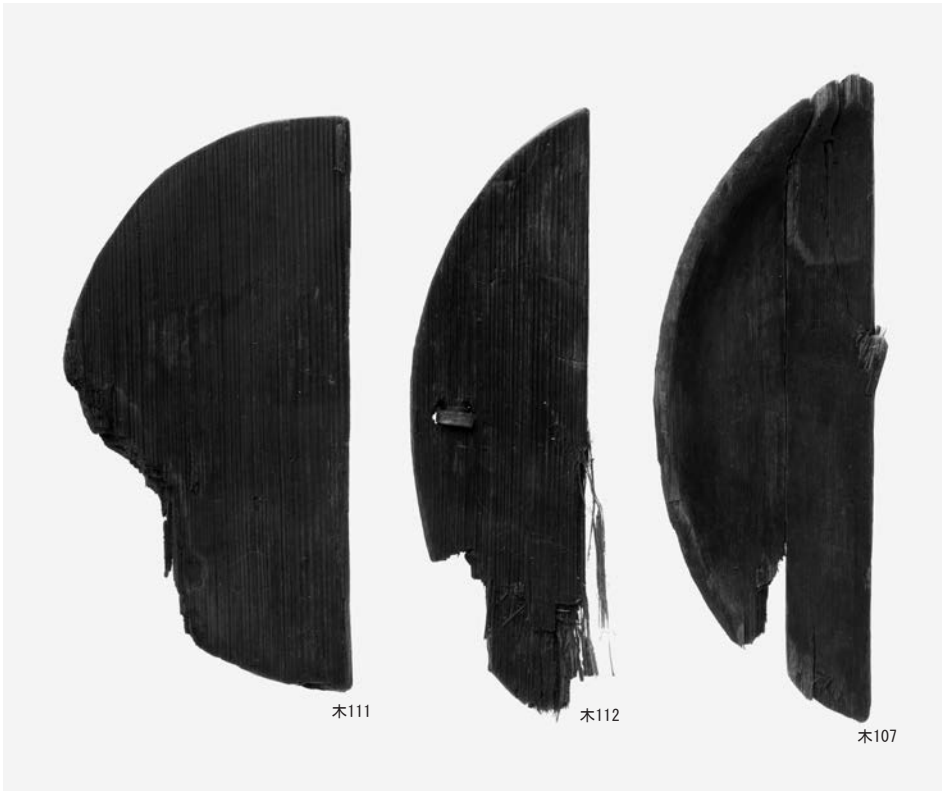
木57

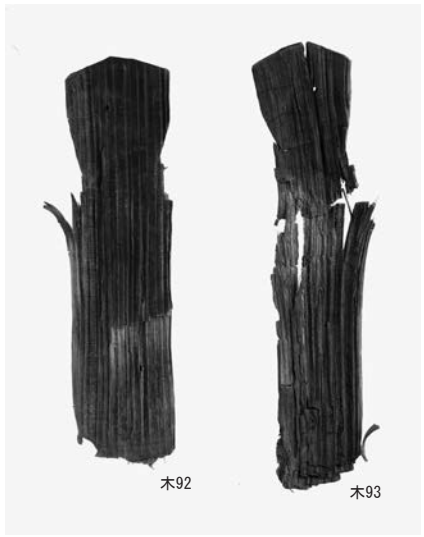


井戸470出土木製品２

井戸470出土木製品３

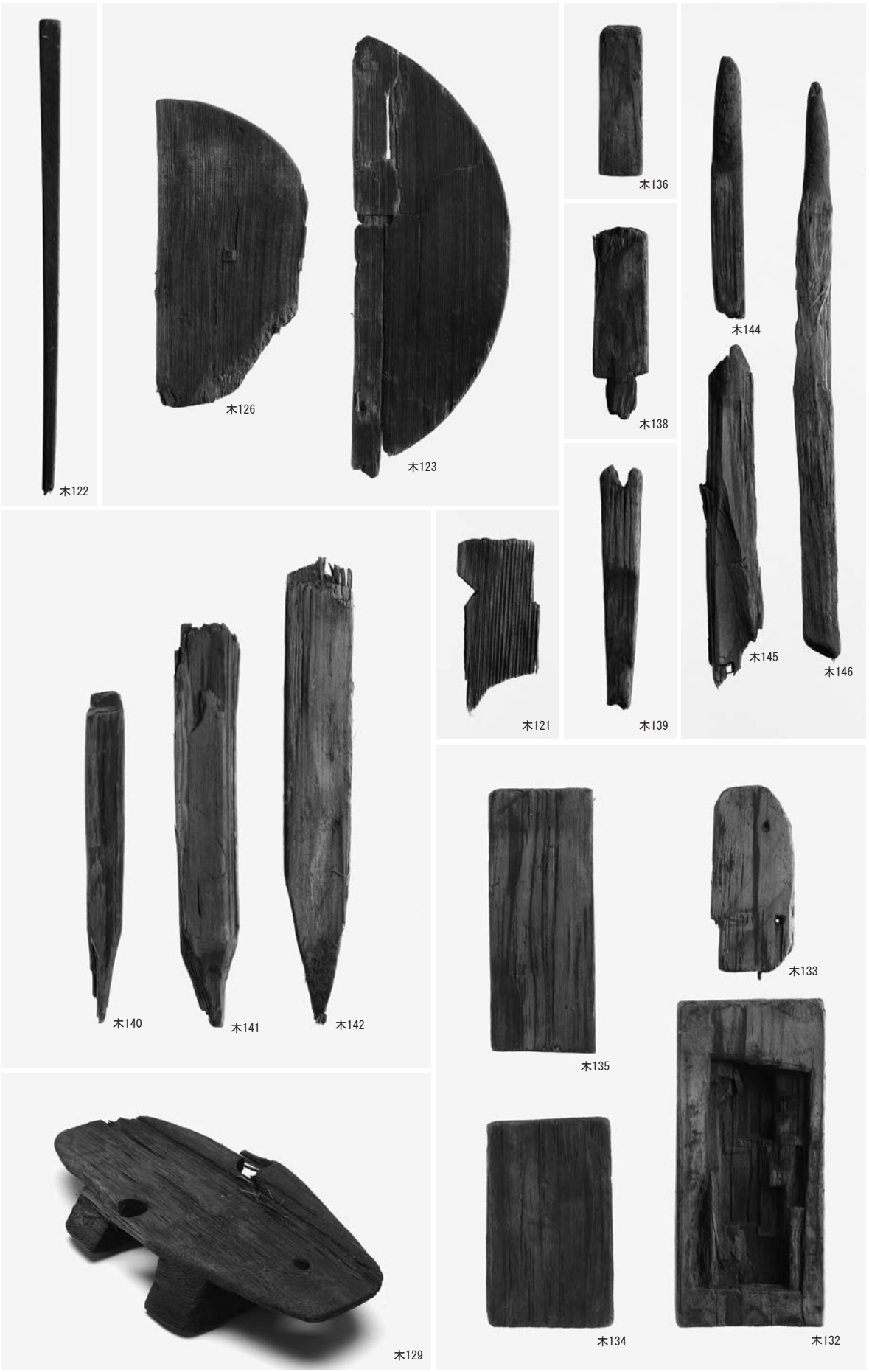






溝119出土木製品

図版134 遺物



池117出土木製品

木154
木153

木156
木157

木159
木160

木161
木162

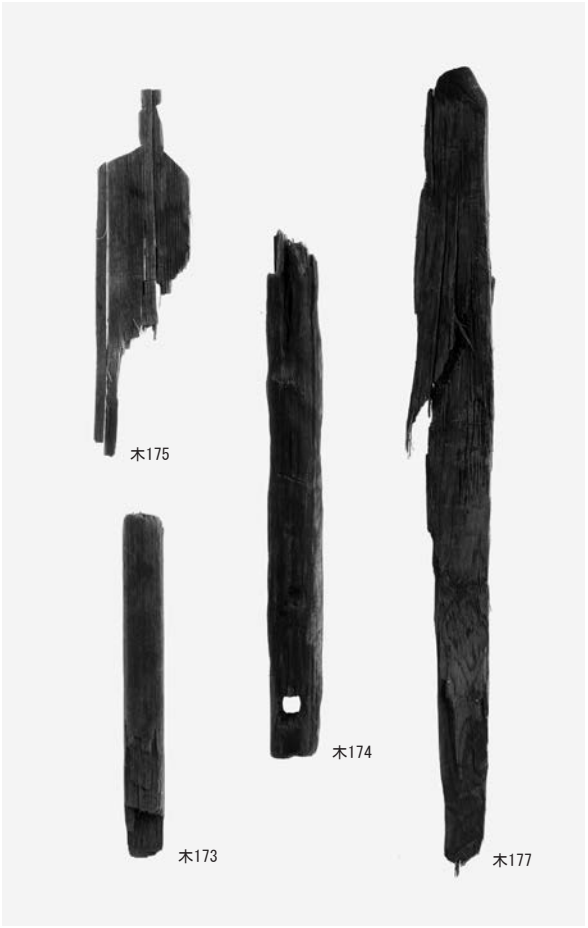
木150
木151
木152

木164
木165
木167
木168

木166

木149

池300出土木製品



木169

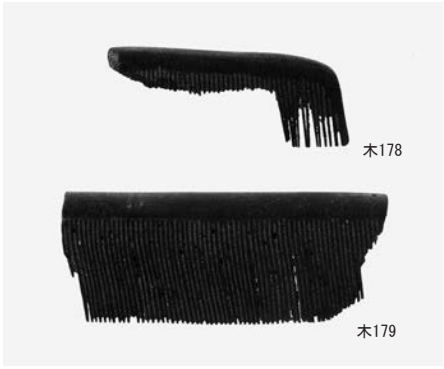
木176

木170

木171

木172

池370出土木製品


木178

木179

木180

木181

木182

木183

木185

木186

木187

木189

木190

木191

池250出土木製品 1

池250出土木製品２

木212
木213
木214
木215
木216

木217
木218
木219

木220
木221
木222

木236

木232
木233
木234

木237
木239

木211

木235

木238

木244

池250出土木製品３

木242

木243

木241

木248

木247

木252

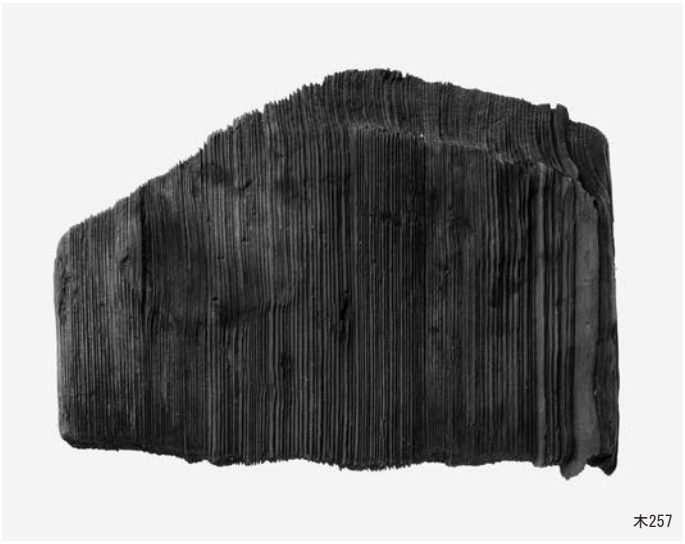
木245
木246

木249

池250出土木製品４

木254

木256

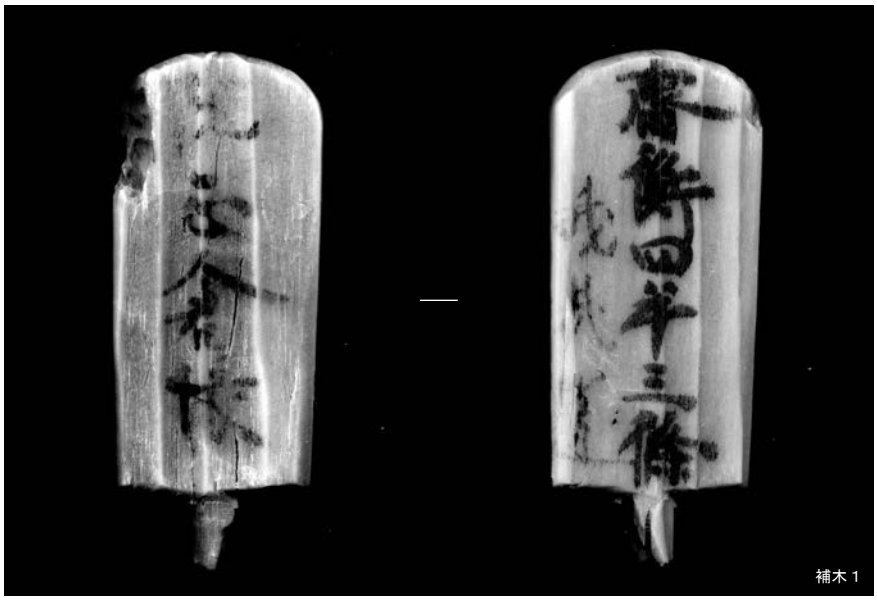

木257

木255

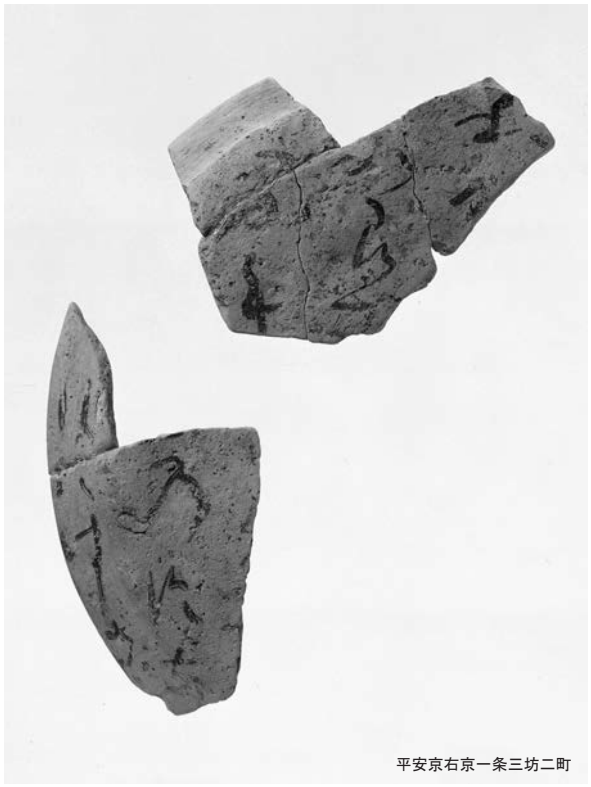
骨1

池250出土木製品５、井戸470出土鹿角製品

1　建物１出土礎板（木槽）



2　2001年度調査池出土の題簽木簡（赤外線写真）


平安京右京一条三坊二町

平安京左京三条三坊九町

平安宮内裏内郭北西部

平安宮左兵衛府・侍従所間

平安宮内裏内郭北西部

平安宮・京出土の仮名墨書土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうろく・しちちょうあと
書名	平安京右京三条一坊六・七町跡
ふりがな	にしさんじょうだい（ひゃっかてい）あと
副書名	西三条第（百花亭）跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１１－９
編著者名	丸川義広・網　伸也・近藤奈央ほか
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2013年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのきょうほしがいけちょう 西ノ京星池町 17-59	26100	1	35度 00分 39秒	135度 44分 25秒	2011年４月 ４日～2011 年12月28日	3,756㎡	学校建設 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城跡	縄文時代		石器、剥片	六町は右大臣藤原良相の西三条第推定地であったが、墨書土器から推定通りと確認できた。西三条第北東部の様相が判明した。池出土遺物は９世紀後半代の貴族生活を示す好資料である。墨書土器には出現期の仮名文字が含まれる。
		弥生時代		弥生土器	
		平安時代前期	建物、柱列、柱穴、井戸、池、溝、土坑、湿地状堆積	墨書土器、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器、二彩陶器、製塩土器、瓦、銭貨、金属製品、石製品、土製品、硯、木簡、木製品、鹿角製品	
		平安時代中期・後期	溝	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、木製品	
		江戸時代	建物、柱列、柱穴、溝、土坑、路面	土師器、焼締陶器、施釉陶器、国産磁器、銭貨、金属製品、石製品、木製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-9

平安京右京三条一坊六・七町跡
－西三条第（百花亭）跡－

発行日　2013年３月31日

編　集
発　行　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の１
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961